福　岡　市

柏原遺跡群 Ⅵ

―古墳・古代遺跡M遺跡の調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第191集

1 9 8 8

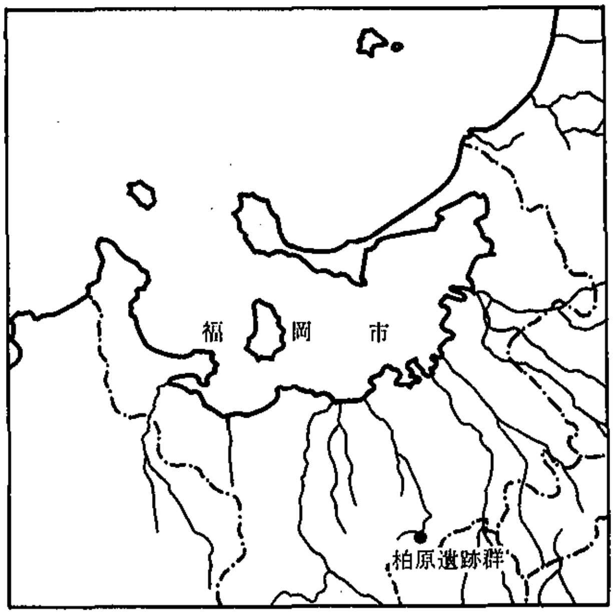
福岡市教育委員会

福　岡　市

柏原遺跡群 Ⅵ

―古墳・古代遺跡M遺跡の調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第191集



遺跡略号　KWM
遺跡調査番号8346

1 9 8 8

福岡市教育委員会

序　　文

住宅・都市整備公団は，福岡市南区柏原地区に68haにおよぶ開発事業を計画し，福岡市教育委員会に予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を依頼する運びとなりました。

委託を受けた福岡市教育委員会では，数度の現地踏査の上，昭和54年5月から発掘調査を開始し，昭和59年3月に現地での発掘調査を完了しました。

本書は昭和58年4月～58年9月に発掘調査を実施したM遺跡の古代の遺構と出土遺物を収録したものです。

調査によって，晩唐三彩曲坏をはじめ古代の貴重な資料が検出されています。

本書が，埋蔵文化財への理解と認識を深める一助になるとともに，研究資料としても活用していただければ幸いです。

発掘調査から出土資料の整理・報告書作成に至るまで，住宅・都市整備公団，調査指導委員の先生方をはじめ，多くの人々に御協力・御助言を賜わり深甚の謝意を表するものです。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　佐　藤　善　郎

例　　言

1．本書は住宅・都市整備公団が計画した福岡市南区柏原地区の団地建設に伴う事前調査として，福岡市教育委員会文化部文化課（現・埋蔵文化財課）が1979～1983年にかけて発掘調査を実施した柏原遺跡群の調査報告書の第６集である。既報告書は以下のとおりである。

『柏原遺跡群Ｉ－縄文時代遺跡Ｆ遺跡の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集　1983年

『柏原遺跡群II－柏原古墳群の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集　1986年

『柏原遺跡群III－柏原Ｋ・Ｌ遺跡，中世居館址と中世水田の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集　1987年

『柏原遺跡群IV－縄文時代遺跡Ａ－１・Ｅ遺跡の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第158集　1987年

『柏原遺跡群Ｖ－先土器縄文時代遺跡Ａ－２・Ｃ・Ｈ・Ｊ・Ｋ・Ｌ・Ｍ・Ｎ遺跡の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第190集　1988年

2．本書の内容は柏原遺跡群の中でM遺跡とした古墳～古代の遺跡の報告書である。

3．本書に使用した図の作成は山崎純男，平川裕介，前川　要，角　浩行，福岡大学歴史研究部考古班があたった。

4．本書に使用した図の製図は山崎，松村道博，前田達男，永田留美によるものである。

5．本書の執筆には山崎があたった。

6．本書に使用した写真は山崎によるものである。

7．本書に使用した方位はすべて磁北である。

8．本書の編集は山崎がこれにあたった。

9．本書に収録した遺物は福岡市埋蔵文化財センターに保管している。

本 文 目 次

挿 図 目 次

図版目次

第1章　序　　説

1．はじめに

1974年，住宅・都市整備公団による柏原地区の広大な面積の開発計画が市に提出された。この時点で，福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係では，計画地内における埋蔵文化財の分布調査を数回にわたって実施した。計画地内は雑木，雑草がおい繁り，また，開発予定地の面積が約68万m²と広大であり踏査には困難をきわめた。数回の現地踏査で同地内に古墳20数基を確認したが，周辺の遺跡分布状況からみて，雑草，雑木の伐採後はさらに古墳等の遺跡が増加する可能性が強く，文化課では同地内の開発計画の中止を住宅・都市整備公団に進言した。しかし，諸般の事情から住宅・都市整備公団では計画が着々と進められ，1979年より開発計画が具体化し，文化課では造成工事に先立って発掘調査を実施することを余儀なくされた。おりからの緊急調査の急増から，文化課では充分な調査体制をととのえる間もなく発掘調査に突入した。

遺跡は分布調査時の予想をはるかに上まわり，本報告の大規模な古代遺跡の他，F，K遺跡のような大規模な縄文時代早期遺跡数カ所，古代集落，中世の居館址，完全なる一群の古墳群など，福岡の歴史を解明するにはかかせない貴重な発見があり，1984年に現地の発掘調査を終了し，一部は報告書を刊行している。発掘調査および整理にあたっては，住宅・都市整備公団をはじめ地元各位のご協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。

2．調査体制

以下に示す調査体制を組織したが，相次ぐ緊急調査で充分なる体制がとれなかった。しかし関係各位の協力と調査補助員諸氏の多大な協力でその進行が進められてきたことを明示しておきたい。

調査地区	福岡市南区柏原林崎
調査面積	M－15000m²
調査期間	1983年4月～1983年9月
調査委託者	住宅・都市整備公団九州支社
調査主体	福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係（現・埋蔵文化財課第1係）

教育長　西津茂美（前）　佐藤善郎（現）　教育次長　佐藤孝安（前）　志鶴幸弘（前）　草場　隆（前）　野田蓑一（前）　尾花　剛（現）　文化部長　志鶴幸弘（前）　中田　宏（前）　河野清一（前）　川崎賢治（現）　文化課長　井上剛紀（前）　甲能貞行（前）　生田征生（前）　埋蔵文化財課長　柳田純孝　埋蔵文化財第1係長　三宅安吉（前）　柳田純孝（前）　折尾　学（現）

調査指導協力　森貞次郎（九州産業大学教授）　坪井清足（大阪埋文センター理事長）　岡崎　敬（前・九州大学教授）　永井昌文（前・九州大学教授）　横山浩一（九州大学教授）　乙益重隆（国学院大学教授）　白木原和美（熊本大学教授）　賀川光夫（別府大学学長）　三島　格（肥後考古学会会長）　佐原　真（奈良国立文化財研究所）　石野博信　中井一夫　菅谷文則（橿原考古学研究所）　渡辺　誠（名古屋大助教授）　西谷　正（九州大学教授）　甲元真之（熊本大学部助教授）　下條信行（愛媛大学教授）　渡辺正気（前，九州歴史資料館参事）　後藤　直（福岡市立埋蔵文化財センター所長）　宮小路賀宏（福岡県文化課課長補佐）

調査担当者　山崎純男（福岡市教育委員会埋蔵文化財課）

事務担当者　岡島洋一（前）　古藤国生（前）　岸田　隆，松延好文

調査補助員　原　俊一（現・宗像市教育委員会）　市橋重喜（現・兵庫県教育委員会）　木下尚子（現・梅光女学院大学講師）　横大路俊明　寺師雄二　石本晶義　矢野佳代子（九州大学）　小畑弘己　米倉秀紀　吉武　学（現・福岡市教育委員会）　谷口武範（現・宮崎県教育委員会）　入江久成　西谷　大　辻　満久　馬原和弘　茂山宏美（熊本大学）　妹尾周三　船井向洋　日置公二　植田　広　宮坂孝宏　蒲原　真　前島秀張　土井伸一（別府大学）　白土義実　其畑真二　難波新吾　来嶋久雄　堀川亮二　宮田昌之　片山重明　千々和謙策　倉田浩一　平川祐介　熊崎農夫博　沖　一郎　小井田佳代　武森安代　田端幸代　丸山　隆　牧口　明　池田一郎　日隈英敏　餅田浩治　時枝良蔵　谷口麻理子　精野亮司　仲田善則　高木裕之　足立博子　井上隆興　荒川　理　松浦潤一郎　高瀬広之　中野治寿　丸山明宏　宮元香子　門出悦子　塚本邦愛　小口幸雄　堤　孝二　片岡葉子　前田　修　鎌田次男　小路永智明　他歴史研究部員（福岡大学）

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

福岡市の平野部は地形的に東の福岡平野と西の早良平野に分断される。この境界をなすのが，背振山系の支脈である油山（標高569.4m）より派生した平尾丘陵（最高は鴻ノ巣山の標高100.5m）や長尾，飯倉の低丘陵である。この低丘陵は，油山，片縄山（標高292.6m）に源を発する樋井川，一本松川，駄ケ原川，片江川に開析され，狭小な沖積地を形成する。この小沖積地とそれを囲む低丘陵は，歴史的に一定のまとまりのある地域として把握され，古代には和名類聚抄に記される早良郡毘伊郷に比定されることは諸氏の認めるところである。

遺跡はこの低丘陵を開析する小河川の一つである樋井川の上流域に分布する。調査地区である樋井川の上流域は油山東斜面と油山の支脈である片縄山の北斜面が接する地域にあたり樋井川の支流が枝状に分岐し，舌状にのびる尾根と丘陵を数多くつくり出し，複雑な微地形を形成している。樋井川の本・支流域は小規模な沖積地が存在し，本流域を中心として，三方が山塊，丘陵に囲まれ，小規模な盆地状をなしている。M遺跡は，この盆地の樋井川本流によって開析された谷部沖積地の奥に近い，左岸の低位段丘上に位置している。

遺跡を含めた調査対象区分の中心は国土地理院発行の五万分の一の地形図「福岡」の南から５cm，東から19.6cmで，福岡市の中心に所在する市役所から南へ約７kmの位置にあたる。

２．M遺跡の立地

M遺跡は開発地域内の北端部，樋井川本流の左岸に位置している。遺跡の前面（南側）は樋井川の水源である第１支流，第２支流，第３支流，第４支流あるいは四十塚の谷にはいり込む支流が，樋井川本流とが合流し，ある程度の広さの沖積地が形成されている。この沖積地は油山山麓に形成された低丘陵に囲まれて小さな盆地状をなしている。早良平野の中で一つのまとまりのある樋井川流域の中でも，さらに小さな一つのまとまりをみせている。

M遺跡はこの沖積地の最奥部に発達した河岸段丘に存在するK遺跡よりやや下流の左岸に位置している。遺跡の北側は開発地域外であるが，油山より派生した低丘陵となり，この低丘陵との比高差は７mで，遺跡の標高は35m～39mである。遺跡の南側（前面）は樋井川の開析によって幅狭い沖積地が形成され，遺跡面とは約１mの段差をもって低くなる。遺跡から樋井川本流までの距離は約100mとあまり広くない。中世には水田として開田されていてさらに低くな

Fig. 1　柏原遺跡群の位置と周辺遺跡

るが，古代には流路が引き込まれている。遺跡の東西は，前述の北側に存在する低丘陵がはり出し，遺跡をとり囲むように限り，遺跡は，三方を低丘陵に囲まれ，前面に沖積地が存在するという，比較的安定した立地条件を示している。遺跡をのせる段丘は丘陵地形にそって弓状になっている。東西長300m，南北幅100mの約30000㎡の広さをなしているが，古代遺跡（M遺跡）は段丘東半部，東西長150m，南北幅70mの範囲に濃厚である。M遺跡の南西部には同一段丘上にＬ遺跡（縄文時代前期）が存在するが，範囲は広くない。

M遺跡をのせる河岸段丘は基盤層が礫層と砂層の互層堆積からなっている。この砂礫層の上には黄褐色土の花崗岩バイラン土が厚く堆積している。さらにその上層には黄色土が堆積している。黄色土層はM遺跡の形成によって削平され，部分的に残存しているにすぎない。この黄色土層中からは先土器時代のナイフ形石器，早期押型文土器，後期土器，石器類が若干出土していて，この段丘の形成時期が先土器時代にさかのぼることを証明している。

この河岸段丘の調査時での現状は，開墾されて斜面に段をつけた，いわゆる棚田状をなしていた。このため段丘はかなりの変容をうけていて，明確ではなかった。表土層および包含層を除去した結果，段丘面は旧状と大きく異なり，ゆるやかな傾斜をもつが，ほぼ平坦であり，沖積地との境は約１mの段差があり明確に識別できる。遺跡はこの段丘面をさらに人工的に造成して形成されている点が大きな特徴であろう。

３．周辺遺跡と歴史的環境

本遺跡の位置する樋井川流域は，和名類聚抄に記される早良郡毘伊郷に比定されることは諸氏の一致するところである。

最近の調査において，この樋井川流域を含めた旧早良郡の地域はめざましい成果をあげていて，旧来の歴史的環境を一変させつつある。樋井川流域の最上流域の本調査区でも多大な成果をあげ，その歴史的環境は変更を余儀なくされている。先土器時代，縄文時代，古墳時代の歴史的環境については先の報告において触れているので，本報告では古代～中世において遺跡について概観してみたいと思う。

樋井川流域の古代～中世遺跡については従来から全く知られておらず，空白部分であったが，最近の調査で若干の遺跡が発見されるにいたった。油山山麓に所在する後期群集墳は，その大部分が６世紀代において造墓活動に終焉を迎えるが，一部７世紀にいたっても造墓活動がみられる。柏原Ｂ－２号墳，Ｃ－２，４号墳，Ｆ－３号墳，Ｊ－１号墳などが７世紀代の造墓活動による古墳である。追葬例もみられ，柏原Ｇ－１号墳は開元通宝（621年初鋳）２枚と棺衡具の棺がプライマリィな状態で出土している。

本報告書に収録した柏原M遺跡では６世紀代から古代にかけての居館址が発見されている。

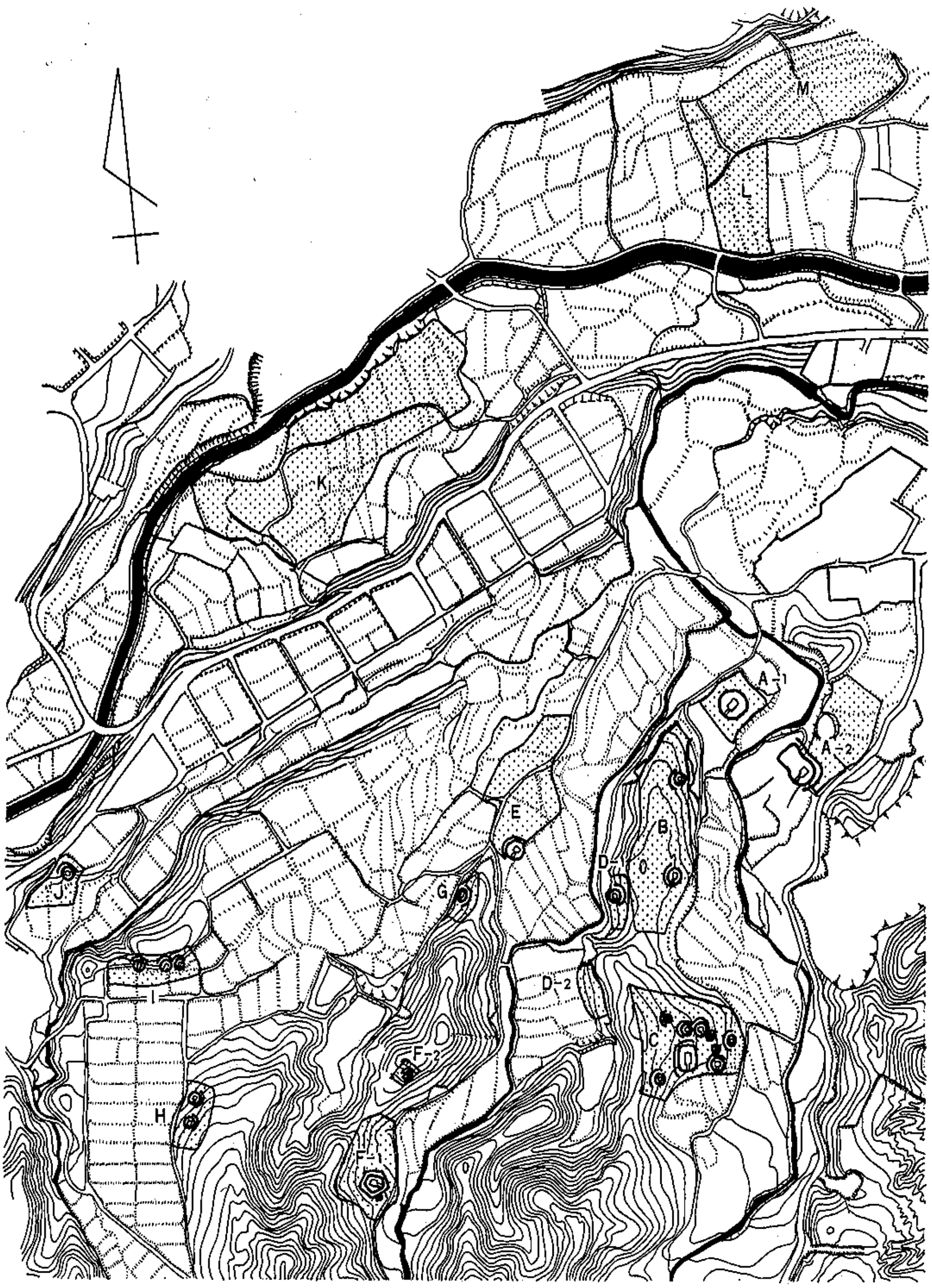


Fig. 2　柏原遺跡群の立地と遺跡の分布

主体となる時期は８世紀後半～９世紀前半にかけてで，掘立柱建物34棟以上が確認されている。この他生産活動を示す製鉄炉，鍛治炉等の製鉄関連遺構と共に多量の鞴羽口，ルツボ，鉄滓，炉壁，焼土が発見されていて，古墳に供献された鉄塊，鉄滓（柏原Ｂ－２号墳，Ｊ－１号墳など）と共に，同地域が製鉄に大きく関係したことが知られる。この他，出土品には注目されるものが多い。晩唐三彩の曲坏をはじめとする多量の越州窯青磁器，長沙窯陶磁器等の輸入陶磁器，石帯，硯，墨書土器がある。墨書土器には「郷長」「寺」「山守家」「五月」「左原補」「東□」等がみられ，この地域に有力な集団が存在したことがわかる。樋井川流域において柏原Ｍ遺跡以外に笹栗遺跡において古代の製鉄遺跡が調査されている。また，樋井川の中下流域に所在する田島京ノ隈経塚において経塚が調査されている程度で，いまだ有力な遺跡の存在は知られていない。

中世においてもその実態は古代と同様で不明な点が多い。先の報告書に収録した柏原Ｋ遺跡および沖積地における中世遺跡は特筆すべきものであろう。報告書でふれたとおり，この遺跡は薩摩国入来院家文書の「蒙古合戦勲功賞配分状」ときわめて良く一致し，古文書と遺跡が一体となって分析できることがあげられよう。沖積地水田は地頭職配分の水田と対応し，Ｋ遺跡の居館は「行武名内一宇，惣検校入道，一宇六郎」の屋敷に対応するものと考えられる。Ｋ遺跡の字名が「ゴソ」であることは御所を意味し，また方形に区画された溝によって囲まれ，それぞれが惣検校屋敷，六郎屋敷に対応するものであろう。また，このＫ遺跡に先行して存在するＭ遺跡も重要な意味をもってこよう。

この他，中世遺跡として古墳群中における中世遺物をあげることができる。Ａ－１号墳では，古墳の石室が埋葬の場所として再利用されている。Ａ－１号墳では攪乱されていたものの，人骨一体とそれに副葬された瓦器椀と白磁器椀が出土している。

樋井川流域における中世遺跡は開発がはやかったこともあって不明部分が多いが，さきの『入来院家文書』によってその存在が知られるものが多い。柏原に隣接して所在する太平寺には『泰平寺』という寺が存在しており，『筑前下長尾田地十町相伝系図』（岡元家文書）』では，この内の一町歩が泰平寺に寄進されている。現在，寺は存在しないが（天正７年（1579）小田部氏の荒平城籠城を加勢したかどによって，龍造寺に焼かれる）現在の太平寺に比定して間違いない。この地，比伊郷上乙王丸名内に『蓮成房屋敷』，下長尾庄に屋敷４ケ所があり，うち１ケ所は『検校次郎屋敷』などが存在し，今後，考古学的調査によって検証されることが期待される。

なお，樋井川流域における中世の問題については後章においてさらにふれることにする。

Fig. 3　柏原M遺跡の地形と調査区

第3章　調査の概要

発掘調査に先行して1980年，第II期工事区の試掘調査を実施し，第II期工事区内に中世の居館地であるK遺跡，中世水田のL遺跡，古代遺跡であるM遺跡を確認した。

M遺跡の調査は1983年4月より開始し，1983年9月までの6ケ月間を要した。その間調査員の不足や度重なる悪天候のため困難をきわめたが多大な成果をおさめ無事終了することができた。

M遺跡は試掘調査で樋井川左岸に発達した低段丘の東側全面に広がっていることが判明していた。よって，遺跡の表土層除去作業は造成範囲の境界である北側より開始し，順次南側に拡大した。遺跡が広大であるために，排土の処理に苦慮したが南側沖積地に運び込み，遺跡全面の発掘調査を実施した。現水田耕作土を除去すると，直下はすぐに遺物包含層となっている。遺物包含層は地形が棚田状に変形されていたにもかかわらず，全体的に保存状態は良好で，厚さ20～40cm程度存在していた。遺物包含層は黒灰色の砂質粘土層で多量の遺物を包含していた。表土層除去後，地形に合せて4mグリットの方眼を設定し，一つおきに発掘し土層観察と出土遺物の関係について調査した。包含層中には古墳時代～古代の遺物が若干混在するが，全体としては古墳時代遺物が下層に，古代遺物は上層に包含されていた。

遺構は包含層中から包含層の下面において検出した。本遺跡で特筆すべきは本遺跡の成立にあたって大規模な造成工事がおこなわれていることである。造成工事は主に地山面の削平によって平坦面を造り出す工程で進められ，盛土による造成は認められない。造成工事は段丘のほぼ全面にわたっている。規模は北側75m，南北幅60m，南側120mの台形状をなしている。段丘斜面とカット面の堺は0.5～1.5mの段差を有している。また，この造成された平坦面の西側沖積地には相似形になるように水路（小河川）が引きこまれている。本遺跡の水の確保をおこなっている。遺構の大部分はこの造成された平坦面につくられているが，一部この範囲外に出ているものもある。遺構の主なものは掘立柱建物，土壙，溝，製鉄炉址，小河川等などがある。

掘立柱建物は34棟以上が存在し，大きく東群と西群の二群に分かれる。東群の建物は西群の建物に比較して規模が大きく，出土遺物も施釉陶器等優品が多く，主体的建物であったことがわかる。これに対し，西群の建物は規模が小さく，倉庫あるいは作業場に伴う建物と思われるものが多く，従的建物であったと推測される。

土壙は建物群と重複して存在し，23基を確認した。性格については，明らかにしがたいが，埋土中より多量の遺物が出土することからみれば廃棄物の処理として利用された可能性が強い。

溝は東半部に集中してみられる。ＳＤ－01，02は平行して走る比較的大きな溝である。一見，道路の側溝のようにもみえるが，溝にはさまれた部分には柱穴，小規模な溝等の遺構が数多く

存在し，道路とみるには不適である。両溝とも水が流れた痕跡が明瞭であり，これら溝の延長部が北側丘陵の谷に位置することを考え合せれば谷からの自然湧水を流す水路であった可能性もある。いずれにしても使用目的については明らかにできない。他の溝は小規模である。数条の溝が平行して掘りこまれている部分が二ケ所あり，両者共に共通した使用が考えられる。これらの溝は端に土壙が連接されている。意味するところは不明であるが製鉄に関連する溝と考えられる。ＳＤ－10は前述した人工的に引き込まれた小河川である。川幅は約10ｍで，やや西に片寄った所に石積みで構築された井堰がある。井堰周辺には多量の遺物が出土している。特記すべきは40点におよぶ墨書土器の存在であろう。

製鉄炉は全面にわたって24基を確認した。炉は長方形の箱形のなす鍛冶炉と底が円形をなし，上部構造がロート状をなすと考えられる製練炉に分類できる。鍛冶炉にはフイゴを設置されたものや覆屋があり注目される。製練炉はいずれも上部構造が破壊され不明であるが，底部には坏状鉄滓が残在しているものがある。また廃棄された炉壁には鞴羽口の他に壁内に導管をもつものがあり，かなりの高度な技術をもっていたことが考えられる。製鉄炉には時期的には６世紀～９世紀の年代が与えられる。柏原古墳群に供献された鉄滓との関連で注目される。

その他の遺構としては地鎮と考えられる土器埋納が東群，西群の建物群に一ケ所づつ存在する。

出土遺物には晩唐三彩曲坏，長沙窯水注，越州窯産青磁器（水注，双耳壷，合子，香炉，椀，皿）白磁器，須恵器，土師器等の容器類をはじめとして，石帯，権衡具，円面硯，風字硯，墨書土器，玉類等のある程度の身分を示す遺物。生産関連遺物として，製鉄関連の鞴羽口，炉壁，ルツボ，鉄滓等があり，その他に漁網錘と考えられるその若干が存在する。

遺跡の性格としてはこの地域の有力者の居館址と考えることができ，墨書土器にみられる「郷長」などは有力な傍証となろう。

第４章　M遺跡の記録

１．調査区の設定

発掘区の設定にあたっては，試掘調査によって，河岸段丘東半部全面に古墳～古代遺跡が存在することが判明していたので，発掘区設定に先立って調査方針を決定し，最も有効なように設定した。調査方針としては，①遺跡の全面調査を目的とし，検出遺構を正確に図化できるようにする。②遺物のとりあげにあたっては各グリット別に行い遺跡における遺物のあり方を検討する。③遺構と遺物の関係を把握し，遺跡における空間的利用の仕方を検討する。④以上を総合して，遺跡の性格を明らかにし，柏原遺跡群の中で各遺跡間の有機的関連性を把握する。の４項目を設定した。この目的を達成するために，地形に合せて，遺跡全面に４mの方眼を組んだ。グリットは遺跡の北西部のコーナーを基準として，そこから東に156mをとり１～39に分割し，南に108mをA～Z，イまで分割した方眼とし，各グリットの呼び方はA－１，A－２のように表示することにした。発掘は先ず包含層の除去からはじめ，全体的な包含層の除去後，遺構検出とその調査を行い，遺跡全体の把握をつとめた。

２．調査区の層序

調査区の層序はこの地区が開田され，棚田状になっていたために各地区によって若干の変化があるが基本的には大きな違いはない。土層堆積は河岸段丘面の居住区と段丘下に分けて説明する。

段丘面の基本的な層位は，以下のようになる。第１層，表土層，灰褐色砂質土層，厚さ20～30cm，現水田耕作土である。第２層，赤褐色粘質土層，厚さ５～10cm，現水田床土，第３層，灰褐色砂質土層，厚さ10～20cm，遺物の細片を含むが，遺物包含層ではなく，二次的堆積の状況を示す。第４層，黒褐色砂質粘質土層，厚さ５～30cm，遺物包含層で多量の遺物が包含される。調査区の北側が薄く，南に順次厚くなる。第５層，本遺跡の地山層となる赤黄色粘質土層となる。地山は場所によって若干の変化をみせ，花崗岩バイラン土である黄褐色砂質土層になる部分もある。

段丘下の沖積地の土層は現水田耕作土，水田床土は段丘上と同様であるが，その下位に第３層，灰色混砂層，厚さ10cm，第４層，赤褐色混砂土層，厚さ10～20cm，第５層，淡褐色土層，厚さ10～20cm，第６層，黒褐色粘質土層，厚さ10～20cm，第５，６層は共に下部に鉄分の沈着

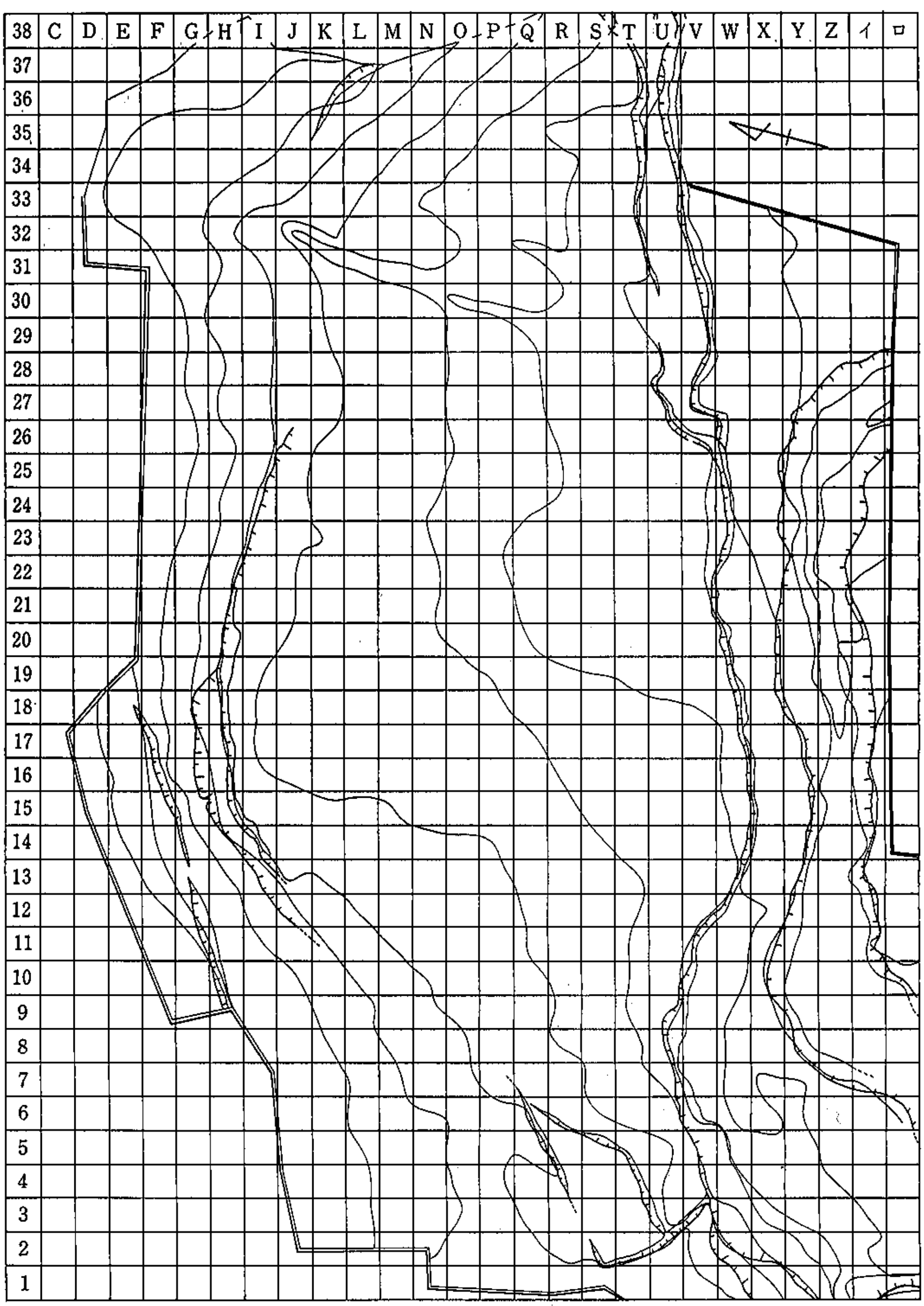

C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z イ ロ
38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

Fig. 4　発掘区の設定

が認められ，中世の水田耕作土である。第7層，淡褐色砂質粘土層，厚さ16～20cm，第8層，淡褐色砂質粘土層，厚さ10～20cm，第7，8層は共に古代の遺物包含層で，その下位に河川の引き込みがみられる。

3．遺構分布の概要

古墳，古代の遺構は段丘の東半部，発掘区の全域に検出した。検出遺構には先ず，本遺跡を全体的に造成した削平部とその段おちをはじめとして，掘立柱建物，溝，人工河川およびそれに付設された井堰，土壙，製鉄関連遺跡としては平行する溝とそれに連続した土壙，鍛冶炉，製錬炉，その他，地鎮とみられる土器埋納遺構等がある。

段丘面における造成は，本遺跡の居館址を限定するものである。造成のやり方は段丘斜面の高い部分（北側）を掘り込み，段丘前面（南面）の高さに合わせて，より平坦面を造り出すもので，低い部分に盛土を施すやり方は行なわれていない。造成の範囲はほぼ発掘区の全面にわたっている。北側はI列グリットにそって，14～32の約75mの範囲を段丘斜面を0.5～1.5mの深さに削り込み，その部分より東および西側に末広がり状に削平したもので，南側はU列グリットの5～36の120mの範囲にわたっており，平坦に削平された南北の長さは約60mにおよぶ，台形状のプランで造成された内側は標高35m～36.5mで段丘斜面の傾斜に比較し，かなりの平坦面が確保されている。このような造成がおこなわれていることは，この遺跡（居館址）の建設にあたっては，かなりの綿密な計画性と労働力を必要としたことが，推測できる。また，この造成における段落ち部は，平坦地における居館を区画する溝と同様の性格を有していたと考えられ，造成範囲が一つの区画された範囲とみることができよう。後述する各遺構の大部分が，この範囲の中におさまることも前記の区画性を示唆している。

掘立柱建物は造成範囲の中にのみ検出した。検出した掘立柱建物は34棟存在する。大きく三群の建物の集中する部分がある。第1群は発掘区の東端部に近い所に存在する。SB－21の一棟より形成される。SB－21は布掘りの建物で，本遺跡の中で古墳時代にさかのぼる確実なものである。2間×9間の身舎の東側に1間の廂をつけた大型建物である。第2群は発掘区の東から中央部にかけて建てられた建物群である。SB－01～06，10，12，14～16，19，20，33の14棟より構成される。SB－01の2間×6間の身舎に両妻廂を就けた建物を最大として，2間×5間の建物が1棟，2間×4間の建物が2棟，2間×3間の建物5棟，2間×2間の建物2棟，1間×3間の建物2棟，2間×2間の総柱の建物1棟より成り，比較的大規模な建物が多い。第3群は発掘区の西半部に建てられた建物群である。SB－07～09，11，13，17，18，22～32の18棟より構成される。SB－09の2間×4間の建物を最大として，2間×3間の建物5棟，2間×2間の建物2棟，2間×2間の総柱建物2棟，1間×2間の建物5棟，1間×1間の建

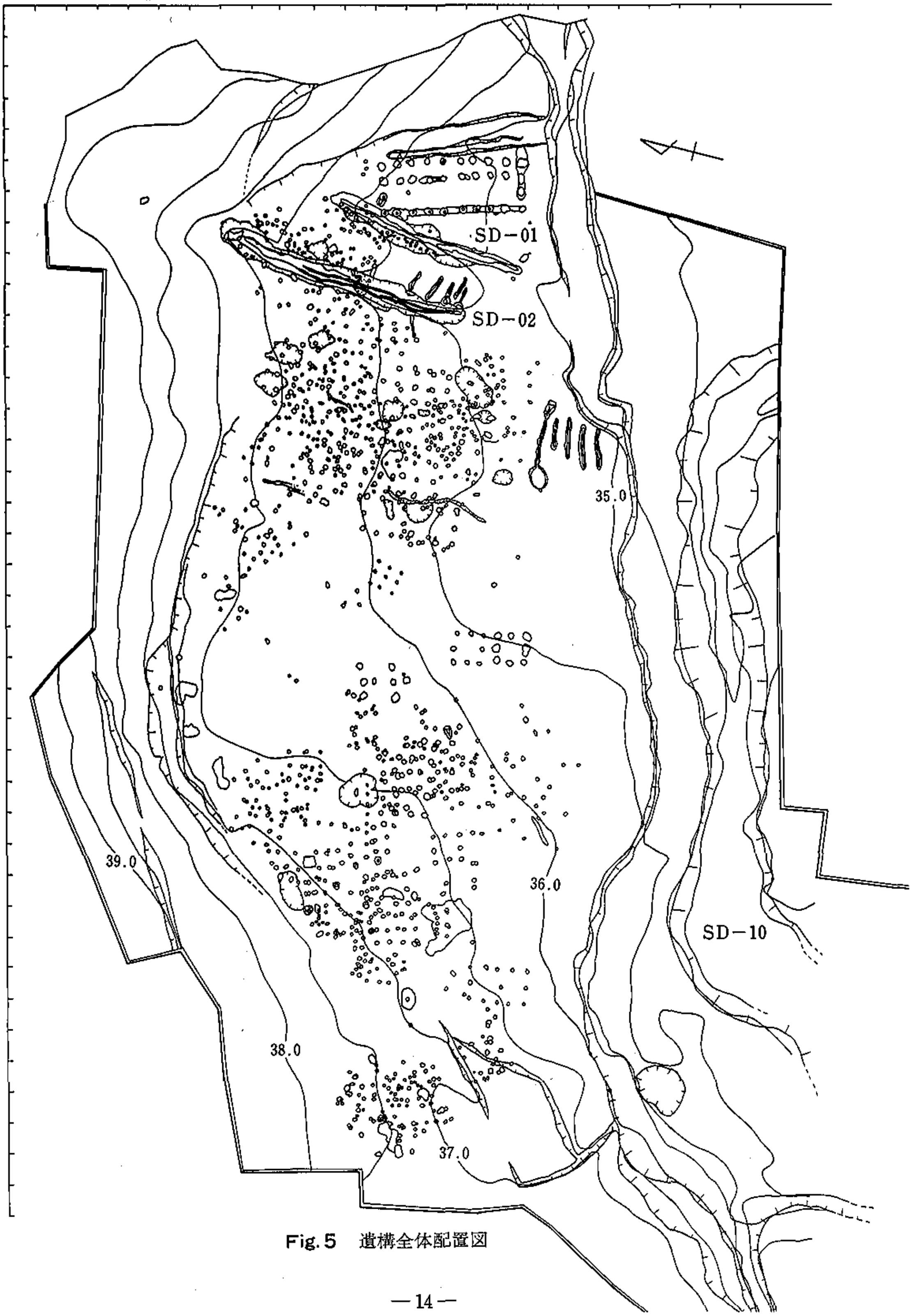


Fig. 5　遺構全体配置図

物2棟がある。第2群建物に比較して小型建物が多い。また，小型建物は建物内部に土壙，製鉄炉をもつものがあり，作業場の覆屋的なものもある。各群の建物はそれぞれ異なった特徴を示していて，各群の建物の使用目的の違いが指摘できる。なお，古墳時代建物が一棟のみと少ないのは，造成工事が古代に実施された可能性を示唆している。

溝は発掘区東半部に存在し，西半部には存在しない。溝は21条を確認した。溝の大きさ，長さはそれぞれ異なり，機能的な差が感知され。大別して，次の4種別に区分できる。①はＳＤ－01，02。幅3～4ｍ,深さ0.5ｍの断面Ｕ字形と比較的大きな溝である。約5ｍ離れて南北方向に平行して掘り込まれている。道路の側溝状を呈しているが，両者に若干の時間差があり，同時に併存せず，一時期は一本の溝が存在する。遺跡の東側を区画する溝である可能性がある。また，溝の延長は丘陵谷部を向いていて谷部の湧水を排水する機能をもあわせもっていたと考えられる。②はＳＤ－03～09とＳＤ－11～15までの小規模な溝で，一定の間隔で数条の溝が平行して存在し，その両端部が土壙と連接している。使用目的は明らかにできないが，製鉄関連の遺構ではないかと考えられる。③はＳＤ－16，19，20，21の建物に伴う雨落ち溝と考えられるものである。④はＳＤ－10で，溝というよりは小河川である。樋井川本流から遺構の前面に引き込まれてきた人工的な河川で，本遺跡における水源として利用されたものと考えられ，川の途中に石積みで井堰が設置されている。この小河川内からは多量の遺物が出土している。特に須恵器，土師器に書かれた墨書は数十点にのぼり，遺跡の性格を規定していることは注目される。

製鉄炉は発掘区全面に分布しているが，第2，3群建物と重複する例が多く，建物のない発掘区中央部には炉址も存在しない。製鉄炉は大別して二種類に分類できる。一つは平面形が長方形で断面が箱形をすなもので，炉壁は焼けているが溶解せず，鍛冶炉とみられるもので，底面には炭層が存在する。他の一つは，円形をした小規模な炉である。上部構造は破壊され明らかにできないが，底部は皿状をなして，上部構造はロート状になることが推定できる。炉壁は溶解して，表面はガラス状に変化している。底部には鉄滓がつまったままのものもすくなくない。詳細は各遺構の説明において再度のべたい。

この他の遺構として地鎮のためと考えられる土器埋納遺構がある。第2，3群建物群に伴うものである。第2群の埋納遺構はＳＢ－01の南側8ｍの地点に土師器の坏に蓋をしたものである第3群の埋納遺構はＳＢ－25内にあり，須恵器の坏に土師器の蓋をしたものである。両者共，中には他の遺物はみられない。その他，地鎮とは関係ないと考えられる土師器甕の埋納が5ヶ所検出されている。性格については明らかでないが，小児用の甕棺である可能性もある。

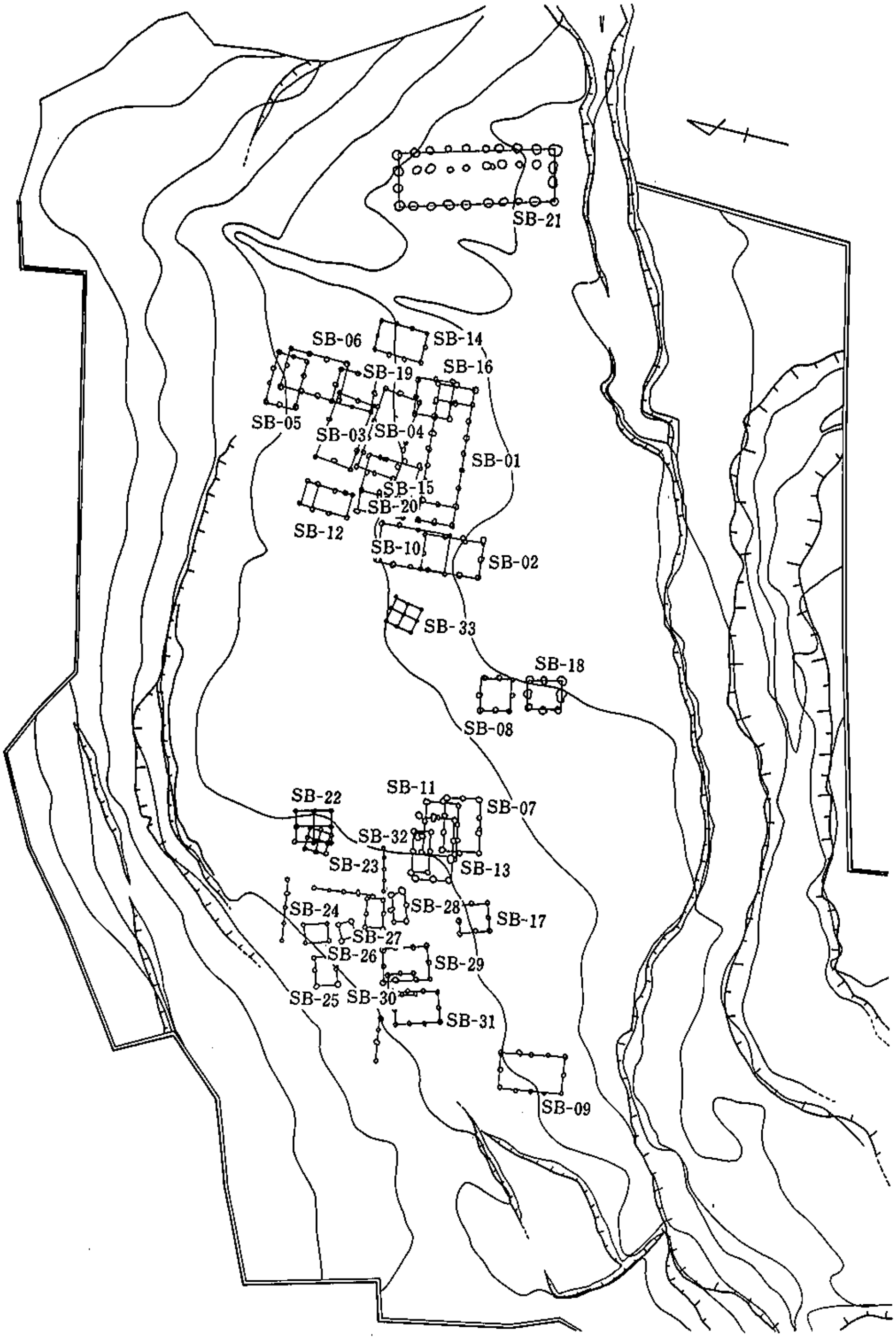


Fig. 6　掘立柱建物全体配置図

4．掘立柱建物と出土遺物

(1) 掘立柱建物分布の概要

掘立柱建物は前述したように地山整形による造成地内の全面に分布するが，大きくは東側と西側の建物群に分かれる。東側はさらに独立して存在する古墳時代の大型建物が存在し，２群に分け，東から１群，２群，３群建物として分離する。建物番号は柱穴で建物の組合わせを確認した時点でつけていったので，遺跡における順序はまちまちである。建物はほぼ東西に向く東西棟と南北に向く南東棟に分けられ，方向性が統一されているが，個々において若干の差異が存在する。住居址の年代を決定するものとして，柱穴の掘り方および柱痕跡内出土の遺物との比較検討が有効であるが，本調査においては時間的関係もあり，柱穴掘り方内と柱痕内の遺物を分離することができなかった。しかし，その出土位置が明確なものについては遺物の説明の中で注記しておく。なお，他の土壙，建物群との切り合い関係も年代決定には有効である。個別的にふれると繁雑になるので，建物の年代決定については後に一括して行い，本遺跡における建物群の変遷を考えてみることにする。

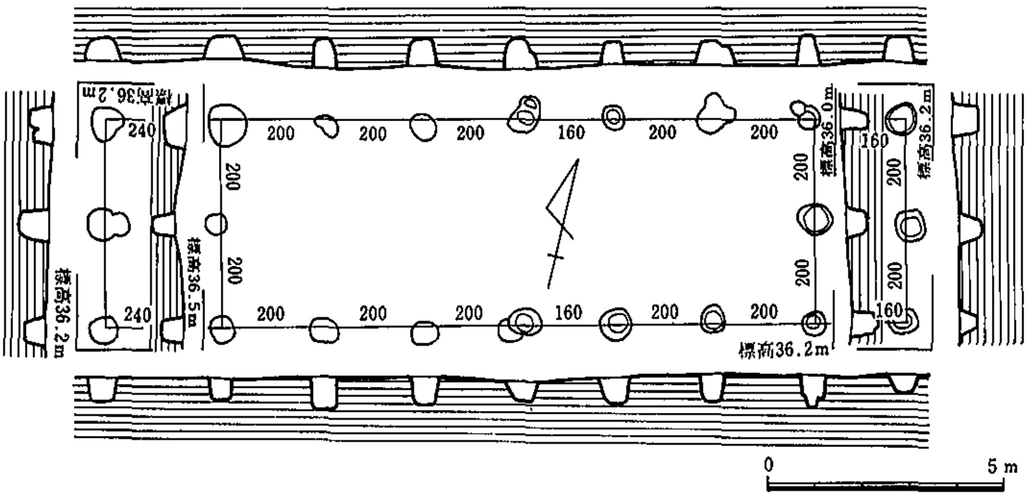
(2) 第１号掘立柱建物と出土遺物

第１号掘立柱建物（SB－01）（Fig. 7）

Ｏ－24，25，Ｐ－24～28，Ｑ－25～28グリットにかけて検出した。第２群に属する建物である。SB－16，SD－20と重複関係にあり，SD－20を切り，SB－16に切られている。二面廂の東西棟建物で主軸をＮ－77°－Ｅにとる。身舎は桁行２間,梁行６間で東西に廂をつける。桁行15.6m，梁行4.0m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径50～70cmの円形で，深50～65cm，柱根は遺存しないが，20個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20cmの円形をなす。柱痕跡が柱穴検出面で確認できたのは15個の柱穴で，他の５個の柱穴は柱痕跡は柱穴のかなり下部に掘りさげねば検出できない。このことは柱が引き抜かれたことを示唆していると考えられるが，明瞭な抜き穴は認められず，数個の柱穴に抜き穴らしき痕跡が認められる。柱穴掘り方は10～20cmの厚さで黒灰色土層，黄灰色土層を入れ版築状にかためている。根固め石を持つ柱穴もある。なお，SD－20付近からは晩唐三彩曲坏の破片が出土し，SB－01を切っている他の柱穴（建物はたたない）から越州窯青磁器椀の大きな破片が出土している。SB－01の柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig. 7）

柱穴掘り方より須恵器，土師器が出土している。形の判明するもの11点を図示した。１は坏



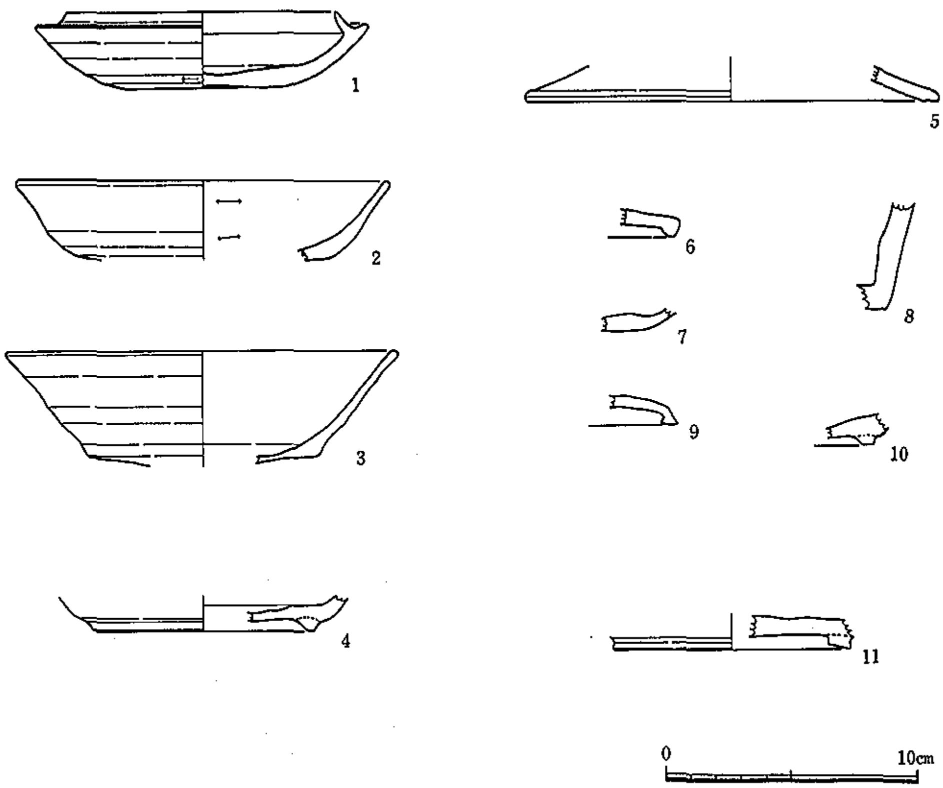


Fig.7　第1号掘立柱建物(SB－01)実測図と出土遺物実測図

身で口径10.6cm，蓋受けのたちあがりは低く内傾する。器高は3.0cmで比較的浅い。内外面は横ナデ調整で底部へラ削りの範囲は½程度である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。外底部に楕円形のヘラ記号がある。焼成は良好である。２．３は土師器の坏である。２は復原口径14.4cm，内外面共にナデ調整。口縁部内側にススが付着している。３は復原口径15.1cm。底部が下方に張り出し，体部は直線的に外傾し，口縁端部は丸くおさめている。内外面共ナデ調整を加え，底部はヘラ切りで，板状圧痕がある。4，10は須恵器坏の底部破片である。いずれもはり付けの高台をもつ。４は焼成がやや不良で軟質である。５．６．９は坏蓋であるが形状を異にしている。５は土師器で口縁端部は丸くおさめ，口唇部に沈線をめぐらしている。器面はヘラ研磨調整と思われるが，保存状態が悪い。6は須恵器，口縁端部が下方に引きだされている。内外面共横ナデ調整。焼成があまく軟質である。９は須恵器で口縁部は下方に屈曲し，端部は平坦に仕上げる。焼成は良好で堅緻である。高坏の坏部の可能性がある。８は須恵器で，円筒状に近い甕ないしは壺の底部破片である。内面には平行タタキが加えられ，内面は粗いヘラ削りである。胎土には多量の砂粒を含んでいる。焼成は良好。11は坏あるい壺の底部である。幅広い低い高台を貼り付けている。内面は横ナデ調整。胎土は良質で焼成は堅緻である。

(3) 第２号掘立柱建物と出土遺物

第２号掘立柱建物（SB－02）（Fig. 8）

O－22.23.P－22.23.Q－22.23グリットにかけて検出した。第２群に属する建物である。SB－10，SK－13と重複関係にある。SB－10とは柱穴に直接の切り合い関係があり，SB－10の柱穴がSB－02の柱穴を切っている。SK－13との関係は明らかにSB－02がSK－13の埋土を切っていて，SB－02が後出である。南北棟建物で主軸をN－8°－Wにとる。身舎は桁行３間，梁行２間である。桁行6.8m，梁行4.3m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径50～60cmの円形あるいは方形をなす。深40～60cm，柱根は遺存しないが，すべての柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径20～30cmの円形をなす。柱穴掘方は黒灰色土層，黄灰色土層，黄褐色土層で版築状に固く埋められている。柱穴は廃棄後柱穴が引き抜かれたものと推測され，３個の柱穴に抜き穴の痕跡が認められる。柱穴の一つからは掘り方埋土の中から白磁器片が出土している。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig. 9－１～８）

柱穴掘り方より須恵器，土師器が出土している。器形の判明する８点を図示した。４．８が須恵器で他は土師器である。４は蓋破片で復原口径16.1cm，天井部がややふくらみ，口縁部の屈曲は低く，断面三角形をなす。内外面は横ナデ調整で天井部外面はヘラ削り。１．２．５～７は坏である。１は外に開いた高い貼り付け高台をもち，体部は大きく外傾しながらたちあがる。

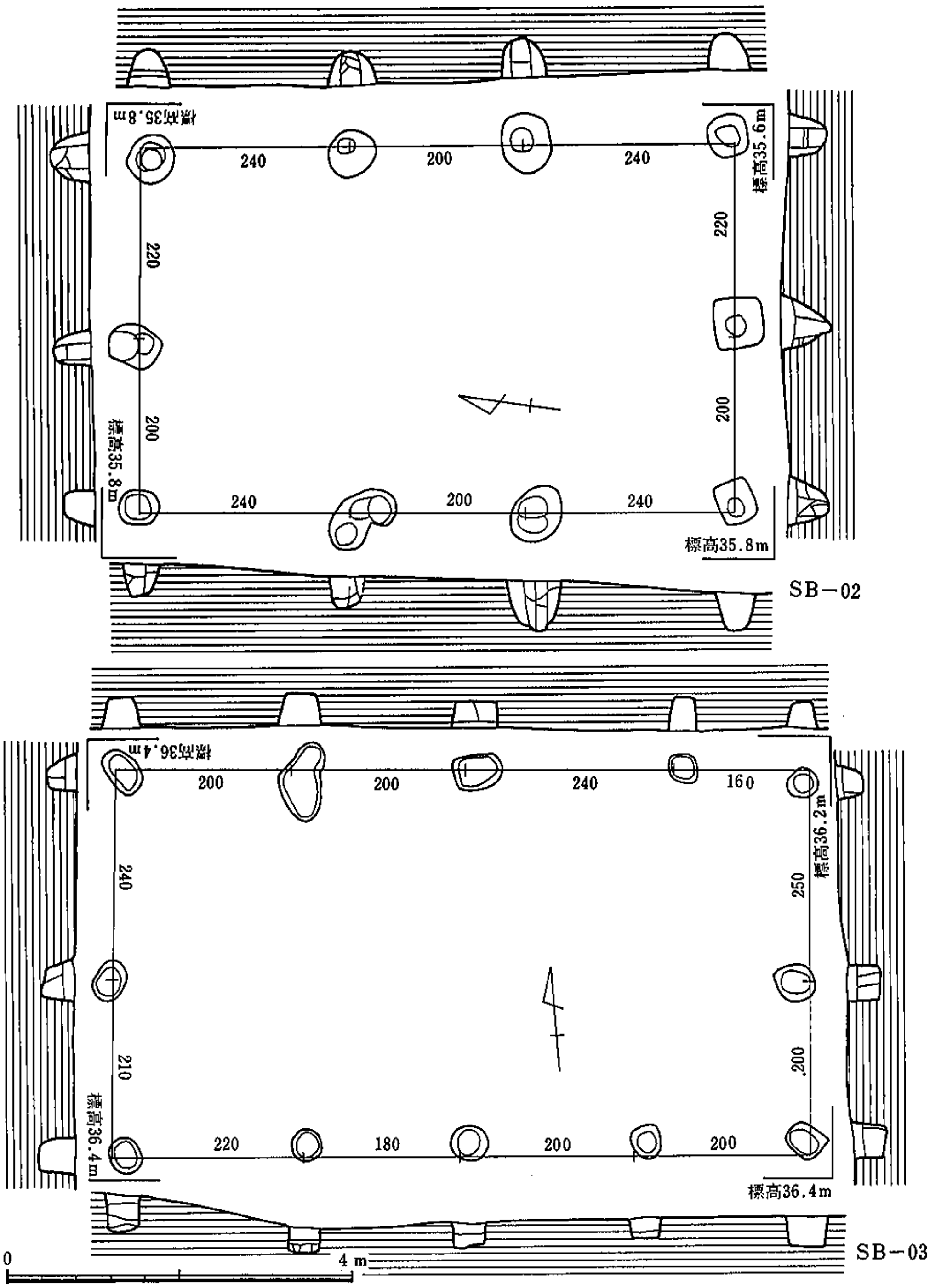


Fig. 8　第２・３号掘立柱建物(SB－02·03)実測図

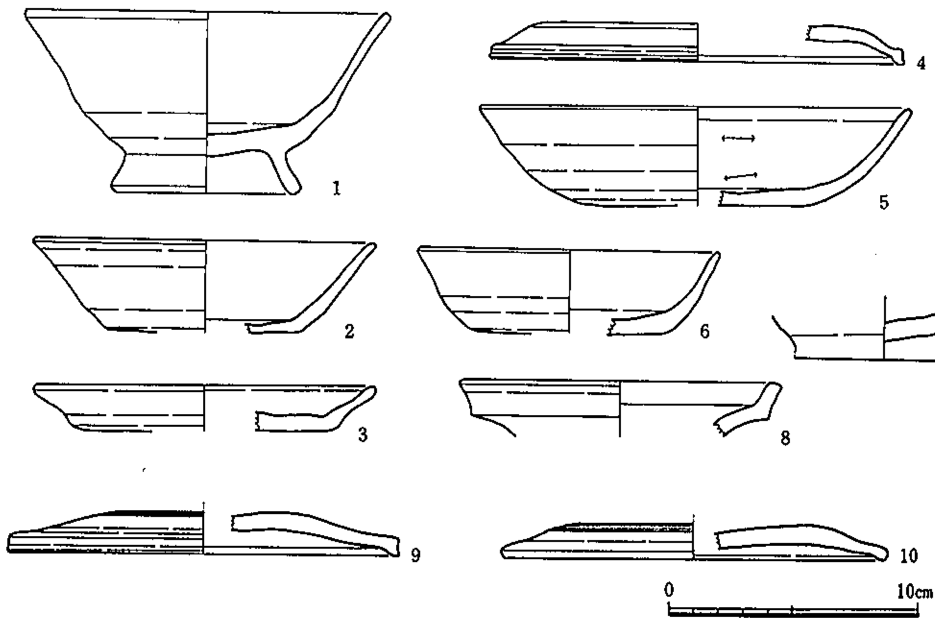


Fig.9　SB－02・03出土遺物実測図

口縁端部は丸くおさめる。内外面は横ナデ調整，復原口径14.2cm，器高7.2cmをはかる。7も1と同様の器形と調整をなすが高台はやや低い。外底部に板状圧痕をもつ。2．5．6は高台をもたない。2は底部ヘラ切りで，体部は直線的にたちあがる。内外面共に横ナデ調整，復原口径11.6cm，5は大型の坏で，復原口径16.8cm，器高3.9cmをはかる。底部はヘラ切りで，体部は内傾しながらたちあがる。体部内外面は成形後，ヘラ研磨を加えている。6は底部ヘラ切りで板状圧痕をもつ，体部は丸味をもってたちあがる。内外面は横ナデ調整，復原口径11.6cm，器高3.4cm。3は皿である。体部は大きく外傾しながらたちあがり，口縁端部は丸くおさめている。底部はヘラ切りである。復原口径13.4cm，内底部にススが付着する。8は壺の口縁部破片である。胎土，焼成はきわめて良好でシャープなつくりである。内外面は横ナデ調整を加えている。復原口径12.2cm。

(4)　第3号掘立柱建物と出土遺物

第3号掘立柱建物（SB－03）（Fig.8）

L－26.M－25～27.N－26.27グリットにかけて検出した。第2群に属する建物である。SB－5.SB－19.SD－16と重複関係にあり，SB－5とは直接の切り合い関係がなく，先後関係は不明，SB－19とは柱穴が直接切り合い，SB－03の柱穴がSB－19の柱穴を切っており，SB－03が

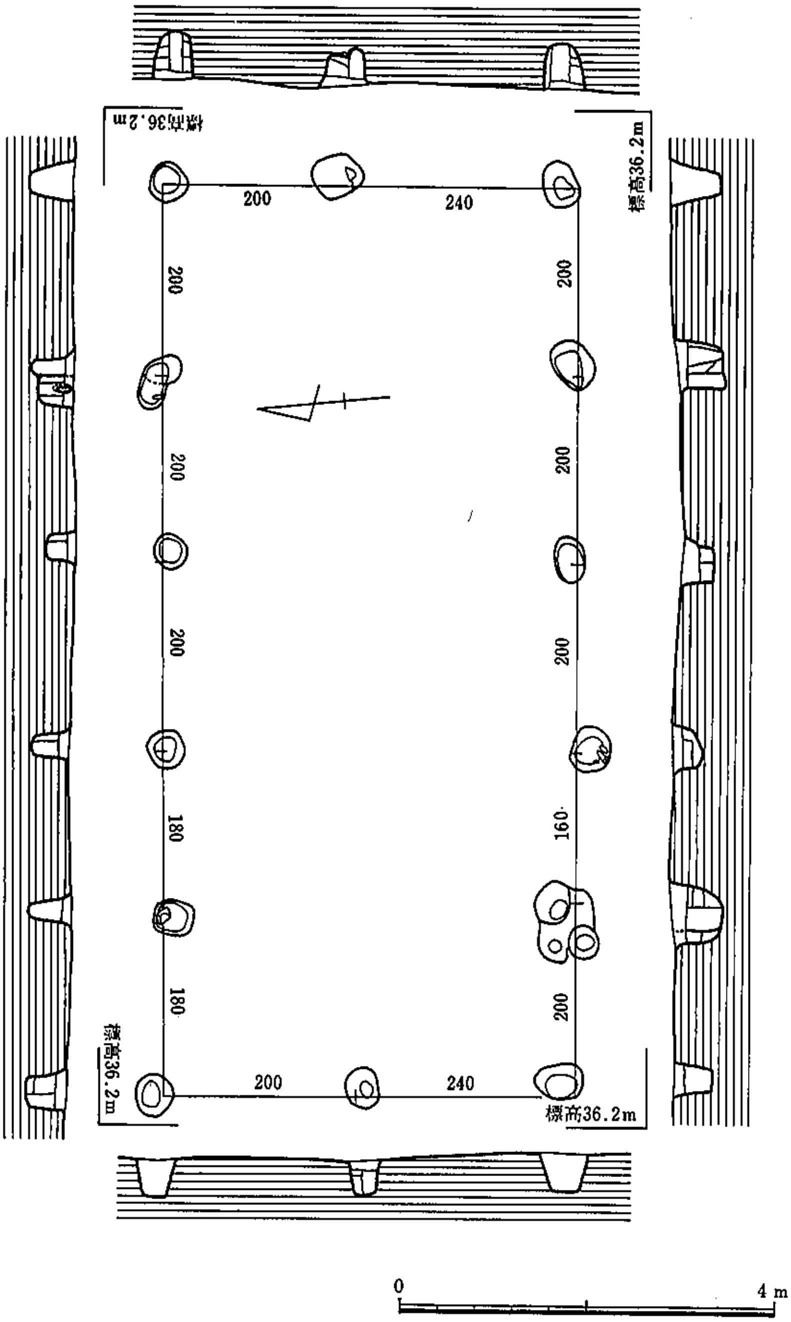


Fig. 10　第 4 号掘立柱建物(SB－04)実測図

後出である。SD－16とも直接の切り合い関係がなく，先後関係は不明。東西棟建物で主軸をN－84°－Wにとる。身舎は桁行４間，梁行２間である。桁行8.0m，梁行4.5m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径35～50cmの円形あるいは方形で，深さ25～50cm，柱根は遺存しないが，６個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～25cmの円形をなす。柱穴掘り方は前二者のようには固められていない。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.９－９.10）

柱穴掘り方より須恵器，土師器が若干出土している。器形のわかる２点を図示した。９，10共に蓋の破片で，９が須恵器，10が土師器である。９は復原口径14.0cm，口縁部の屈曲は短かく端部は丸くおさめている。屈曲部は外面からのナデ調整で凹線状をなしている。天井部はやや丸味をもつ，つまみを有するが形状は不明。内外面共横ナデ調整で仕上げている。10は口縁部の屈曲は短かく，端部は丸くおさめている。天井部は平坦で，ヘラ削り後，ヘラ研磨調整を加えている。つまみをもつが欠失している。復原口径15.1cm。

(5) 第４号掘立柱建物と出土遺物

第４号掘立柱建物（SB－04）（Fig.10）

M－25，N－25～28，O－25～27グリットにかけて検出した。第２群に属する建物である。SB－15，SB－16，SK－01，SK－02と重複関係にある。SB－15，SB－16，SK－02とは直接の切り合い関係がなく，その先後関係は不明。SK－01とは直接の切り合い関係があり，SK－01の埋土中にSB－04の柱穴が掘り込まれていて，明らかにSK－01が先行するものである。東西棟建

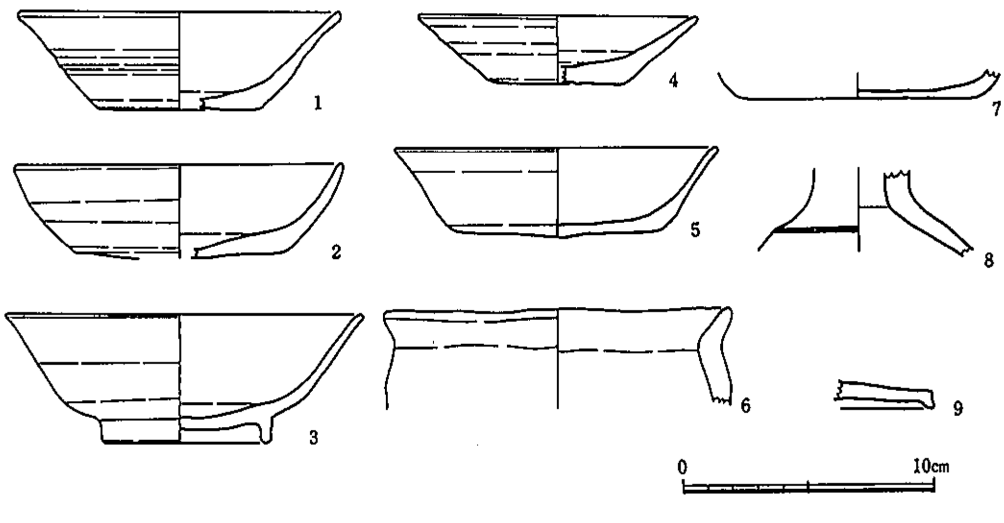


Fig. 11　SB－04出土遺物実測図

物で主軸をN－85°－Wにとる。身舎は桁行5間,梁行2間である。桁行9.6m，梁行4.4m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径30～40cmの円形あるいは楕円形で，深さ30～50cm，柱根は遺存しないが，11個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は15～25cmの円形をなす。柱穴掘り方内は黄灰色土層，黒褐色土層，黄褐色土層が厚さ10cmで版築状に固められている。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.11）

柱穴掘り方より須恵器　土師器が出土している。器形の判明する9点を図示した。8．9が須恵器で，他は土師器である。1～5．7は坏破片で3は貼り付け高台をもつ。1は底部へラ切りで，体部はわずかに外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。復原口径12.5cm，器高3.9cm，2は底部が荒いヘラ切りで，体部は丸味をもってたちちあがる。口縁端部は尖り気味におさめる。内外面は横ナデ調整，口径12.7cm，器高3.7cm。3は幅のせまい貼り付けの高台が直につけられ体部は外傾しながらたちあがる。外底部には板状圧痕がみられる。外面の一部は黒色を呈する。口径14.0cm，器高5.1cm，4はヘラ切りの底部から大きく外傾しながら直線的に体部がのび，口縁端部はやゝ尖り気味におさめる。内外面共横ナデ調整。復原口径10.8cm，器高2.7cm，5は1と同様の器形をなす。口径10.3cm，器高3.5cm，7は底部をヘラ切りし，体部は丸味をもってたちがる。外底部に板状圧痕がみられる。内面の大部分は黒色を呈する。9は蓋破片，口縁部の屈曲は短かく，端部は丸くおさめる。内外面共に横ナデ調整である。天井部は平坦になると考えられる。8は高坏，脚端部はラッパ状に広がり，脚端部近くに一条の沈線をめぐらす。脚筒部はカキ目調整で，他は横ナデ調整である。坏部との接合部は接着を良くするために櫛目を入れている。6は甕破片，小型品で，口縁部はくの字に屈曲している。外面はナデ調整で，体部内面はヘラ削りである。復原口径13.2cmをはかる。

(6)　第5号掘立柱建物と出土遺物

第5号掘立柱建物（SB－05）（Fig.12）

K－18．L－27～29．M－27．28グリットにかけて検出した。第2群に属する建物である。SB－03,SB－06.SB－19.SK－09.SK－17.SK－18と重複関係にある。SB－06.SB－19とは直接の切り合い関係がなく，先後関係は不明，SK－09.SK－17.SK－18は，SB－05の柱穴が土壙の肩および埋土を切っており，明らかに，SK－09.SK－17.SK－18が先行する。南北棟建物で主軸をN－0.5°－Wにとる。身舎は桁行3間,梁行2間である。桁行6.8m，梁行4.4m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径40～50cmの円形で深さ50～100cm,柱根は遺存しないが,7個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20cmの円形をなす。柱痕跡は柱穴検出面で確認できたものがほとんどであるが，中にはある程度掘りさげた段階で検出できるものがあり，柱が引き

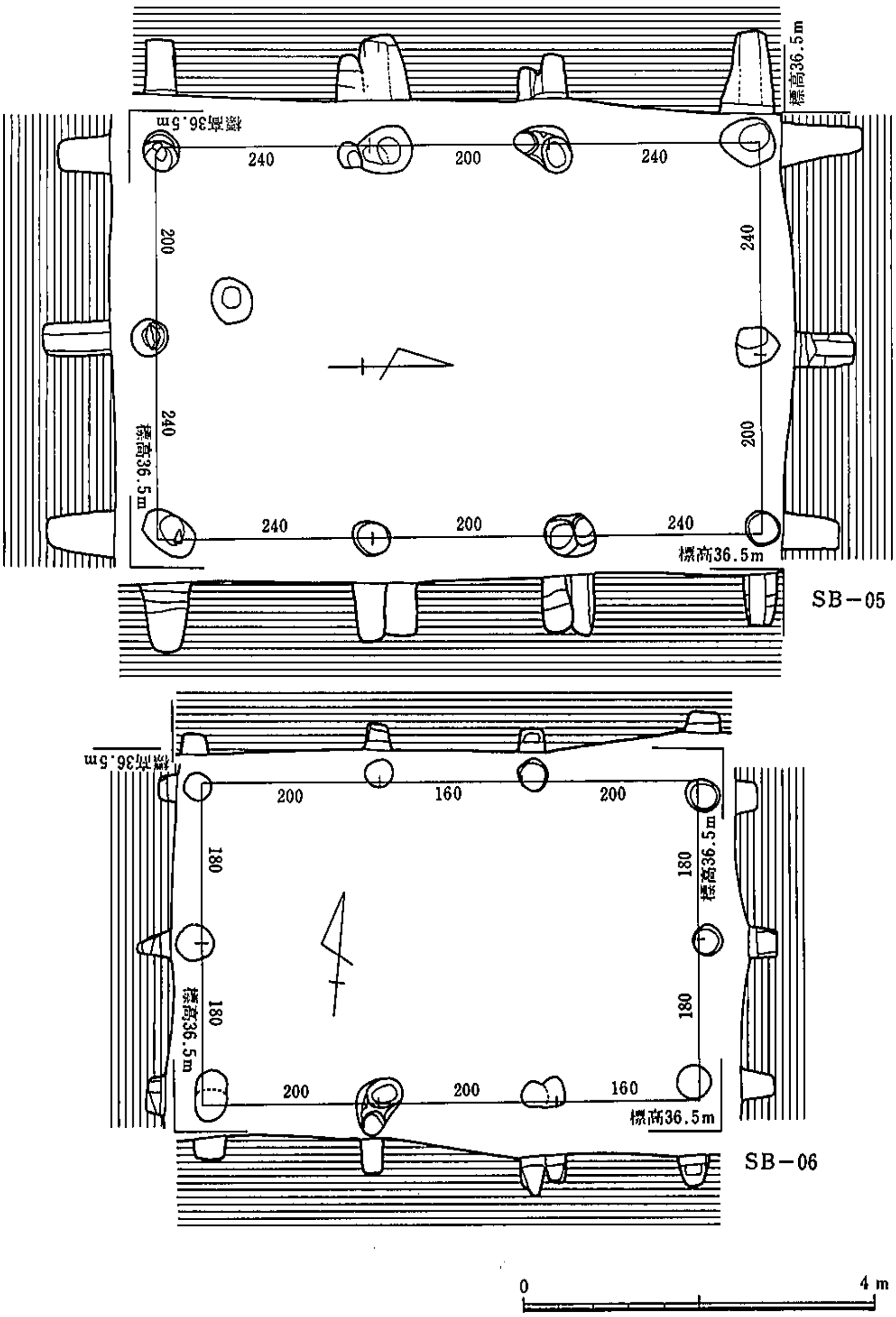


Fig. 12　第5・6号掘立柱建物(SB－05･06)実測図

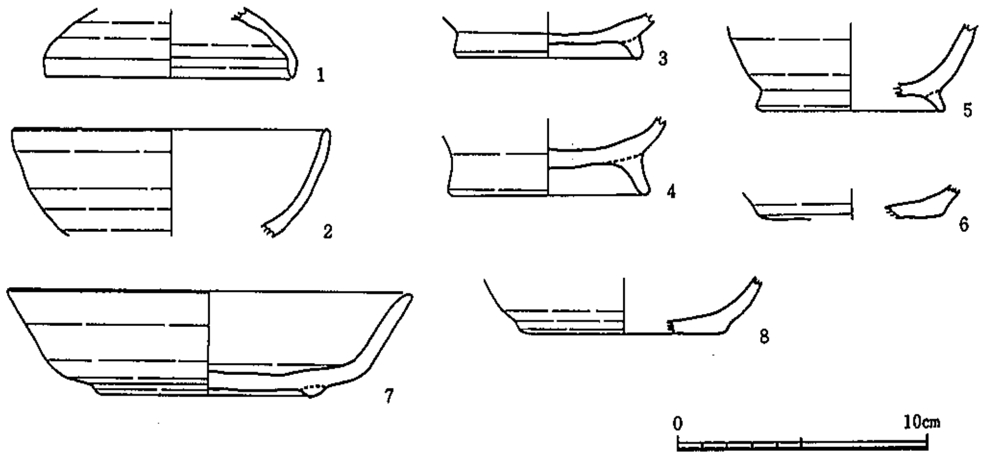


Fig. 13　SB－05･06出土遺物実測図

抜かれていることを示唆するものもある。また，抜き穴の痕跡を示す柱穴も数個存在する。柱穴掘り方は黒灰色土層，黒黄褐色土層，明黄灰色土層で，版築状に固めている。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物(Fig.13－1～6)

柱穴の掘り方から若干の須恵器，土師器，黒色土器が出土している。器形の判明する6点を図示した。1が須恵器，2が黒色土器，他は土師器である。1は蓋である。体部と口縁部の境が不明瞭である。口縁端部は丸くおさめている。内外面共横ナデ調整である。復原口径9.6cmである。2は丸味をもってたちあがる坏で底部を欠失する。内面は黒色でヘラによる研磨調整を加えている。復原口径12.3cm。3～6は外側へ広がる貼り付け高台をもつ坏である。4の高台はやや高い。5は外面に黒色顔料を塗布している。いずれも内外面は横ナデ調整である。6は高台のない坏で，底部はヘラ切りである。外面にススが付着している。

(7)　第6号掘立柱建物と出土遺物

第6号掘立柱建物(SB－06)　(Fig.12)

K－27～29，L－27～29グリットにかけて検出した。第2群に属する建物である。SB－05，SK－17，SK－18と重複関係にある。SB－05とは直接の切り合い関係がなく，先後関係は不明。SK－17，SK－18とはSB－06の柱穴が土壙の埋土中に掘り込まれていて，明らかにSB－06が後出である。東西棟建物で主軸をN－84°－Eにとる。身舎は桁行3間,梁行2間である。桁行5.6m,梁行3.6m,柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径30～40cmの円形で,深さ25～50cm。柱根は遺存しないが，4個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15cmの円形をなす。柱穴内

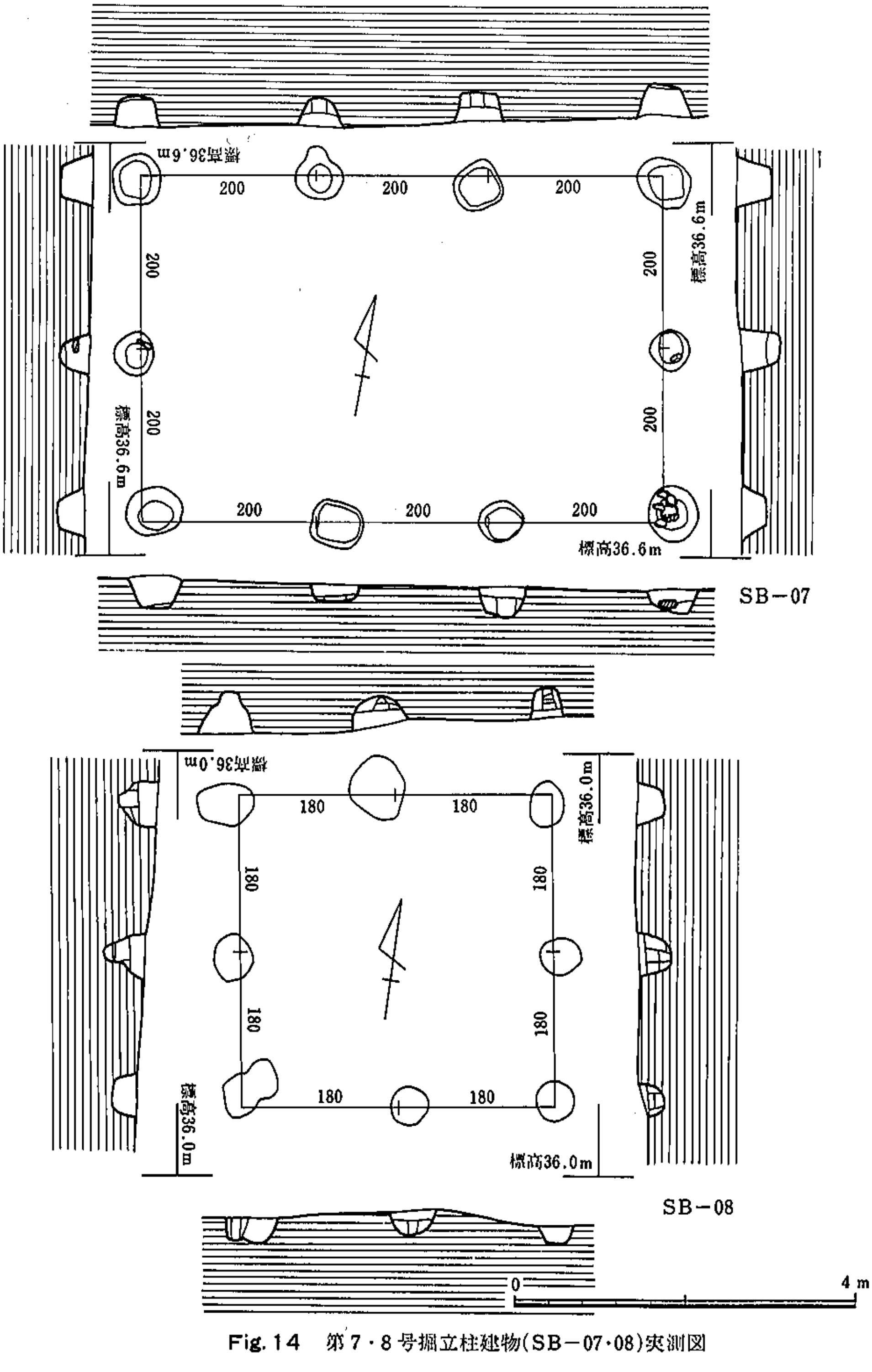


Fig. 14　第7・8号掘立柱建物(SB－07・08)実測図

から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.13－７．８）

柱穴掘り方より若干の須恵器，土師器が出土している。器形の判明する２点を図示した。７は須恵器であるが，焼きがあまく軟質である。幅広の低い高台を貼り付けている。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。調整は保存状態が悪く不明。口径15.7cm，器高4.1cm。８は土師器，ヘラ切りの底部で体部との境に段がある。体部は丸味をもってたちあがる。内外面共横ナデ調整である。

(8)　第７号掘立柱建物と出土遺物

第７号掘立柱建物（SB－07）（Fig.14）

Ｐ－14～16，Ｑ－14～16グリットにかけて検出した。第３群に属する建物である。SB－11，SB－13と重複関係にある。SB－11，SB－13共に直接の切り合い関係がなく，その先後関係は不明。東西棟建物で主軸をＮ－79°－Ｗにとる。身舎は桁行３間，梁行２間である。桁行6.0m，梁行4.0m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径40～60cmの円形あるいは方形で，深さ20～50cm。柱根は遺存しないが，３個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20cmの円形をなす。柱穴掘り方内は石で根固めしているものがある。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.15－１～３）

柱穴掘り方より須恵器，土師器が若干出土している。器形のわかる３点を図示した。１，２

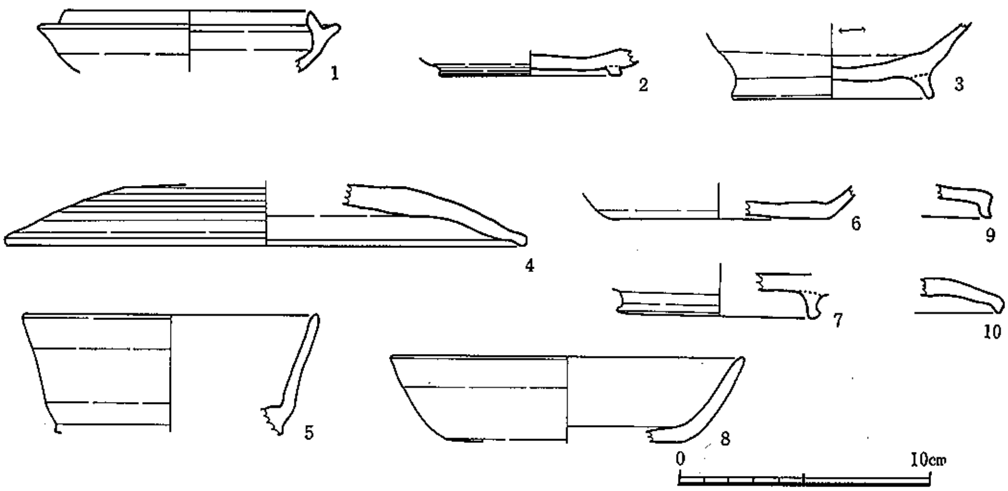


Fig.15　SB－07･08出土遺物実測図

は須恵器で３は土師器である。１は蓋付坏で，蓋受けのたちあがりは低く内傾している。受部は上方へ張り出している。焼成は良好で堅緻である。復原口径9.6cm。２は低い断面方形の貼り付けの高台をもつ坏。外底部には板状圧痕をもつ。内外面は横ナデ調整。３は外方へ張り出した高い貼り付け高台をもつ。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。内外面共に横ナデ調整で，ススが付着している。

(9) 第８号掘立柱建物と出土遺物

第８号掘立柱建物（SB－08）（Fig.14）

Q－18，19，R－18，19グリットにかけて検出した。第３群に属する建物であるが，他の建物とは若干離れている。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。東西棟建物で主軸をN－9°－Wにとる。身舎は桁行２間，梁行２間である。桁行3.6m，梁行3.6m，柱間は図示したとおりである。総柱ではないが，隣接するSB－18と共に倉庫として使用された可能性がある。各柱穴の掘り方は径40～60cmの円形で，深さ30～50cm。柱根は遺存しないが，７個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径10～20cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.15－４～10）

柱穴掘り方より若干の須恵器，土師器が出土している。器形のわかるもの７点を図示した。10は土師器で他はすべて須恵器である。４．９．10が蓋で，５～８は坏である。４は口縁部の屈曲は低く，ほとんど痕跡を残すのみである。天井部外面はヘラ削り調整で口縁部および内面は横ナデ調整である。胎土に多量の砂粒を含む。復原口径20.4cm。９は口縁部の屈曲が明瞭で高い。口縁端部は平坦で面とりされている。内外面共横ナデ調整。10は口縁部の屈曲は低く，端部は丸くおさめている。内外面共にヘラ研磨調整を加えている。５は低い貼り付け高台をもつ。高台端に板状圧痕がみられる。体部はあまり外傾せず真すぐにたちあがる。内外面共横ナデ調整。復原口径11.5cm。6.8はヘラ切りの平底で，体部は丸味をもってたちあがる。６は底部に板状圧痕がある。８は口縁端部を尖り気味におさめる。復原口径は８が13.8cmである。７は貼付高台をもつ坏。高台は高く，端部が大きく外方へ張る。６～８は内外面共横ナデ調整。

(10) 第９号掘立柱建物と出土遺物

第９号掘立柱建物（SB－09）（Fig.16）

Q－７．R－７～９．S－７．８グリットにかけて検出した。第３群に属する建物である。最も西に位置し，単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。南北棟建物で主軸をN－12°－Wにとる。身舎は桁行４間，梁行２間である。桁行7.2m，梁行4.0m，柱間は図示したとおりである。

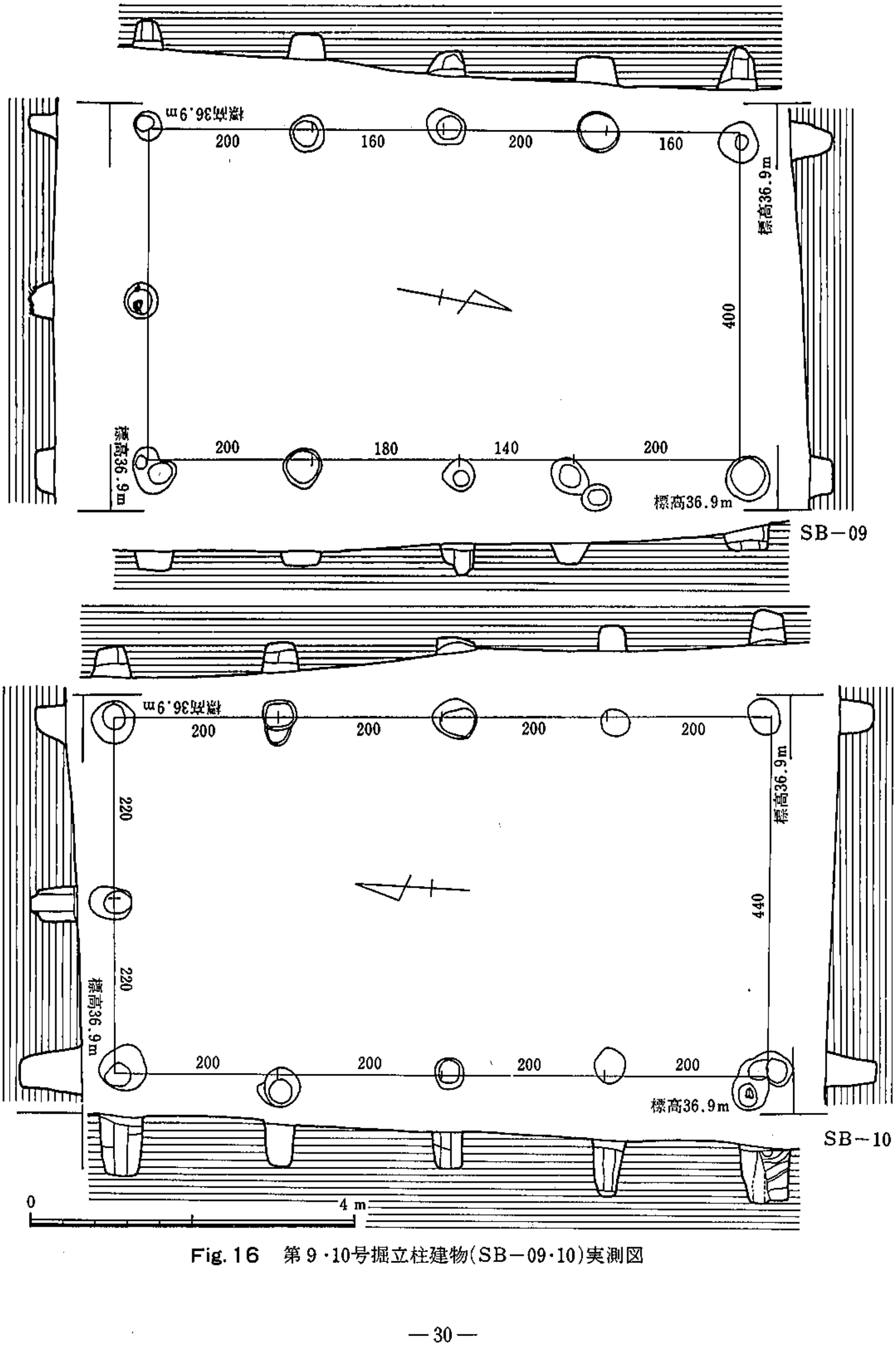


Fig. 16　第9・10号掘立柱建物(SB－09・10)実測図

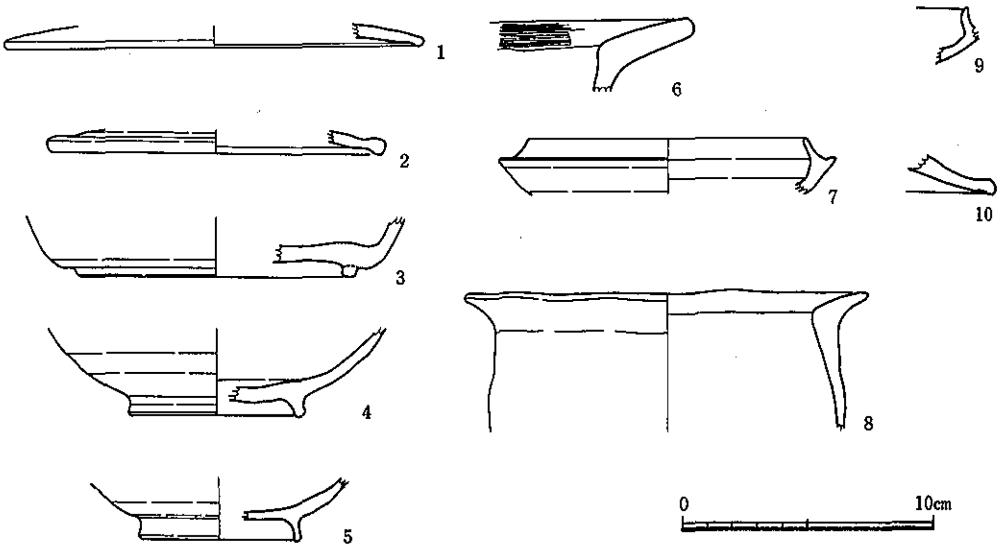


Fig. 17　SB－09･10出土遺物実測図

各柱穴の掘り方は径40～50cmの円形で,深さ20～50cm，柱根は遺存しないが，５個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.17－１．２．７）

柱穴掘り方より少量の須恵器，土師器が出土している。器形の判明する３点を図示した。図示したのはいずれも須恵器である。１．２は蓋の小片である。１は口縁部の屈曲は低くほとんど痕跡をとどめているにすぎない。２は１に比較しやや屈曲は明瞭である。端部は丸くおさめている。１．２共に内外面は横ナデ調整である。復原口径は１が16.2cm，２が13.6cm。７は蓋付坏で，蓋受けのたちあがりは低く内傾し，口縁端部は尖り気味におさめる。内外面共横ナデ調整。復原口径は10.9cm。

⑾　第10号掘立柱建物と出土遺物

第10号掘立柱建物（SB－10）（Fig.16）

N－22～24．O－22～24．P－22.23グリッドにかけて検出した。第２群に属する建物である。SB－02.SK－07.SK－13と重複関係にある。SB－02とは柱穴に直接の切り合い関係があり，SB－10の柱穴がSB－02の柱穴を切っており，SB－10がSB－02より後出である。SK－13とはSB－10の柱穴がSK－13の埋土中に認められ，SB－10が後出である。SK－07とは直接の切り合い関係がなく，その先後関係は不明。南北棟建物で主軸をN－４°－Wにとる。身舎は桁行４間，梁行２

間である。桁行8.0m，梁行2.4m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径40～50cmの円形で,深さ20～70cm。柱根は遺存しないが,５個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20cmの円形をなす。柱痕跡が柱穴検出面で確認できるものは少なく，ある程度掘り下げて確認できるものや，柱痕跡が認められないものがあり，柱が抜きとられていることがわかる。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.17－３～６．８～10）

柱穴掘り方から須恵器，土師器，黒色土器，砥石が出土している。器形の判明する７点を図示した。３．９が須恵器，４．５が黒色土器，他は土師器である。３は貼り付け高台をもつ坏，高台は断面方形で低い。内外面共横ナデ調整。口縁部を失うがかなりの大型品である。９は蓋付坏，蓋受けのたちあがりは低く内傾している。口縁端部は尖り気味におさめている。受部端は欠失している。内外面に横ナデ調整である。５は幅がせまく，高い高台を貼りつけている。内面は黒色を呈し，ヘラ研磨が丁寧に施されている。外面は横ナデ調整。外面にススの付着が著しい。４も同様の器形を有する黒色土器であるが，内面の一部が黒色を呈するにとどまっている。内面はヘラ研磨調整。外面は横ナデ調整である。10は蓋，口縁部の屈曲は低く，痕跡を残す程度である。天井部は丸味をもっている。内外面の調整は器面が荒れているために，はっきりしないが，ヘラ研磨と思われる。６．８は甕破片。共に口縁部がくの字に屈曲し，大きく外反する。６は口縁部外面は横ナデ調整で，内面は横方向の刷毛目調整。胴部は外面が縦方向の刷毛目調整で，内面はヘラ削りである。７は口縁部内側に横方向の刷毛目調整を施し，他はナデ調整である。砥石は図示していないが頁岩質の仕上げ砥である。長さ5.4cm，幅4.0cm，高さ2.6cmの方柱状をなし５面が使用されている。

⑿　第11号掘立柱建物と出土遺物

第11号掘立柱建物（SB－11）（Fig.18）

O－14～16．P－14～16グリットにかけて検出した。第３群に属する建物である。SB－07.SB－13.SB－32と重複関係にある。SB－07，SB－32とは直接の切り合い関係がなく，先後関係は不明。SB－13とは４ケ所で柱穴の切り合い関係がみられ，SB－11の柱穴がSB－17の柱穴を切っている。東西棟建物で主軸をN－81°－Ｅにとる。身舎は桁行３間，梁行２間である。桁行6.0m，梁行4.0m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径40～50cmの円形で，深さ40～65cm。柱根は遺存しないが，７個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径10～15cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.19－１～３）

器形のわかる３点を図示した。いずれも須恵器である。１は壺の底部と考えられる。静止ヘ

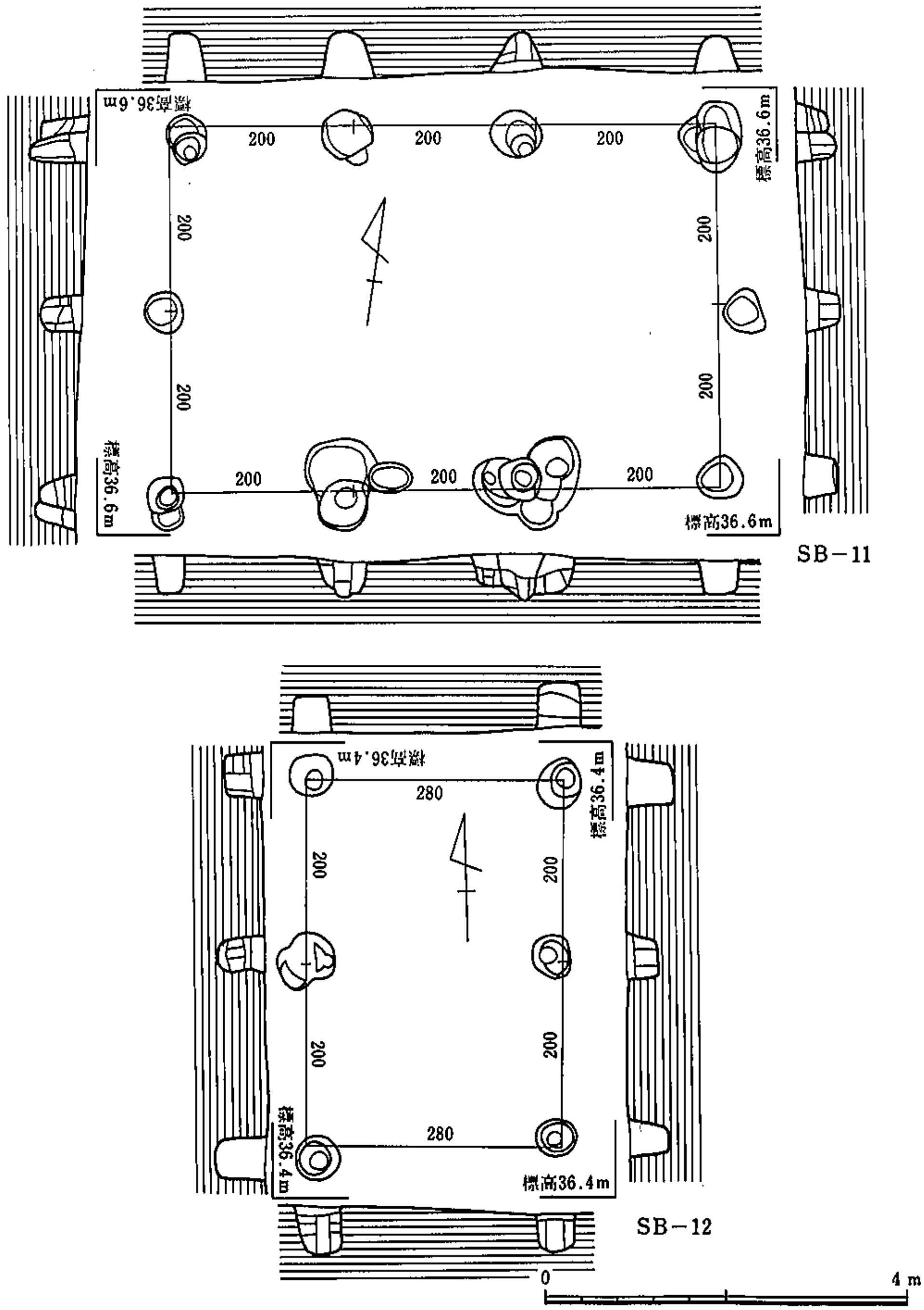


Fig. 18　第11・12号掘立柱建物(SB－11・12)実測図

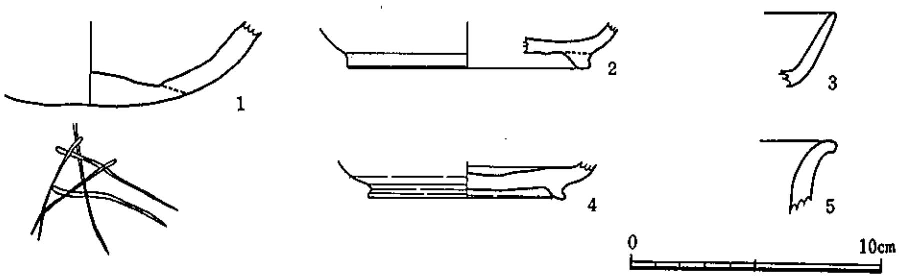


Fig. 19　SB－11出土遺物実測図

ラ削りで不定方向からの削りがみられる。内面は横ナデ調整，底部にヘラ記号がある。２は坏で，底部は断面方形の貼り付け高台をもつ。体部は丸味をもってたちあがるが，口縁部を欠失している。内外面共横ナデ調整を加えている。３は坏で，体部は直線的にたちあがり，口縁端部は丸くおさめている。

⒀　第12号掘立柱建物と出土遺物

第12号掘立柱建物（SB－12）（Fig.18）

Ｌ－24.25.Ｍ－24.25グリットにかけて検出した。第２群に属する建物である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。１面廂の南北棟建物で主軸をＮ－１°－Ｅにとる。身舎は桁行２間，梁行１間である。北側に１間の廂をつける。桁行4.0m，梁行1.8m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径40～50cmの円形で，深さ35～55cm。柱根は遺存しないが，５個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.19－４．５）

器形のわかるもの２点を図示した。４は須恵器の坏で，底部に貼り付け高台をもつ。高台は低いが端部が外方へ張り出している。外底部にヘラ記号がある。内底部は不定方向のナデ調整。５は土師器の甕の口縁部である。口縁は端部近くで大きく外反し，端部はやや肥厚する。内面に横方向の刷毛目調整を加えている。ススの付着が著しい。

⒁　第13号掘立柱建物と出土遺物

第13号掘立柱建物（SB－13）（Fig.20）

Ｏ－13～15．Ｐ－13～15グリットにかけて検出した。第３群に属する建物である。SB－07.SB－

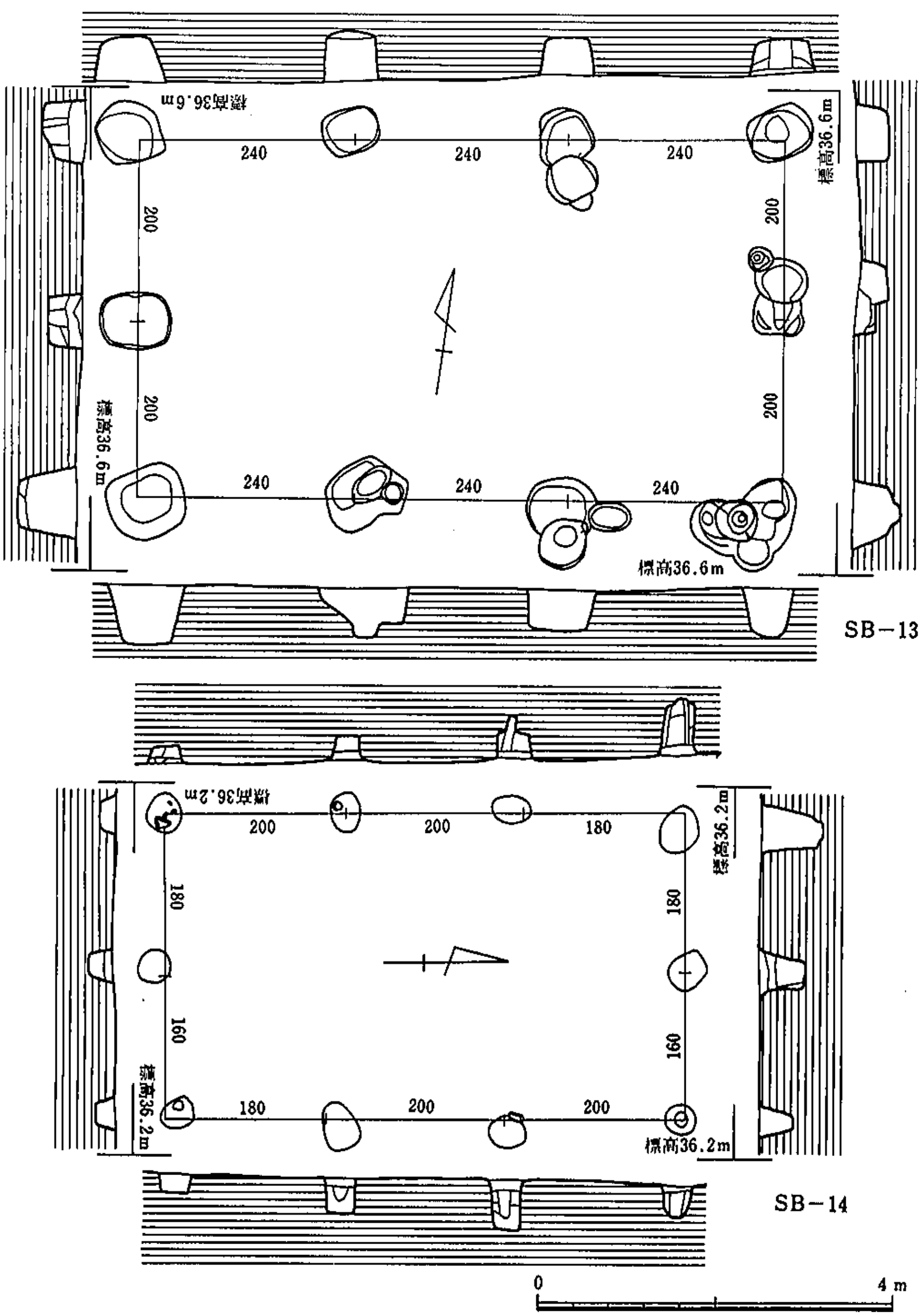


Fig.20　第13・14号掘立柱建物（SB−13・14）実測図

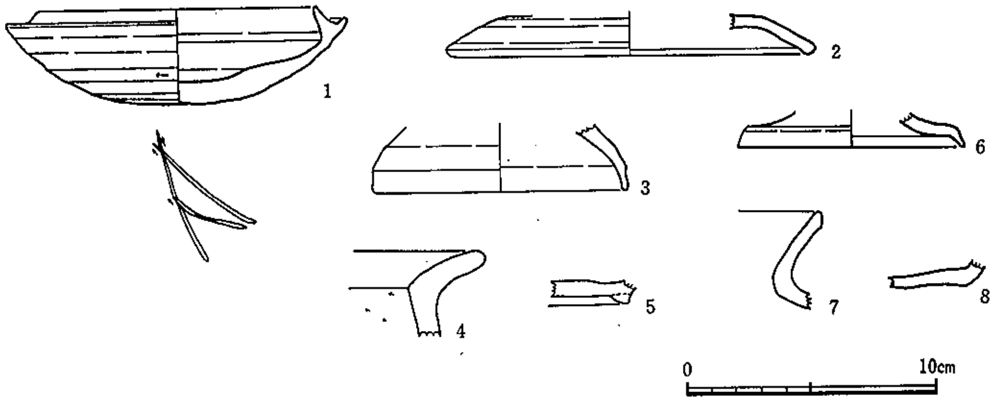


Fig. 21　SB－13･14出土遺物実測図

11.SB－32と重複関係にある。SB－07.SB－32とは直接の切り合い関係がなく，先後関係は不明。SB－11とは４ケ所で柱穴の直接の切り合い関係があり，SB－13の柱穴がSB－11の柱穴に切られており，SD－13が先行する建物である。東西棟建物で主軸をN－82°－Eにとる。身舎は桁行３間，梁行２間である。桁行7.2m，梁行4.0m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径60～80cmの円形あるいは隅丸方形で，深さ25～70cm。柱根は遺存しないが，４個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20cmの円形をなす。柱穴掘り方の埋土から滑石製石鍋が出土している。石鍋の例としては，本例が最も古くなるもので，注目されよう。その他，柱穴内から，須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.21－１～６）

器形のわかる６点を図示した，４は土師器で他は須恵器である。１は蓋付坏である。蓋受けのたちあがりは低く内傾している。底部には荒いヘラ削り調整を½の範囲に施している。他の内外面は横ナデ調整，内底部は多方向のナデ調整。底部にヘラ記号を有する。胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良くなく軟質である。復原口径11.0cm，器高3.8cmをはかる。２．３は蓋の破片である。２は口端端部の屈曲がほとんど退化し，痕跡を残すのみである。内外面は横ナデ調整。天井部はやや丸味をおびている。復原口径13.8cm。３は体部と口縁部の境が不明瞭で，口縁端部は丸くおさめている。内外面共に横ナデ調整を加えている。復原口径9.9cmをはかる。５は低い貼り付け高台をもつ坏底部である。内外面は横ナデ調整。焼成は不良で，軟質である。６は高坏脚部である。脚端部で屈曲し，下方に引きのばされ，端部は尖っている。脚端径9.0cmをはかる。内外面は横ナデ調整。４は甕口縁部で口縁部は大きく外反する。口縁部は内外共横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面はヘラ削り調整である。

⒂ 第14号掘立柱建物と出土遺物

第14号掘立柱建物（SB－14）（Fig.20）

N－29.30.O－28.29.P－29グリットにかけて検出した。第2群に属する建物である。第2群に属する建物である。2群の建物群の中では最も東に位置し，SD－02にそって単独で存在し，他の遺構との重複関係はみられない。南北棟建物で主軸をN－1°－Wにとる。身舎は桁行3間，梁行2間である。桁行6.8m，梁行3.2m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径30～50cmの円形あるいは楕円形で，深さ20～65cm。柱根は遺存しないが，5個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径10～15cmの円形をなす。3個の柱穴では根固め石を利用している。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.21－7．8）

器形のわかるもの2点を図示した。7は須恵器の甕である。口縁部は頸部から外傾しながら直線的にのびる。肩部は張る。口縁部内外面は横ナデ調整。肩部は外面が平行タタキ，内面が同心円タタキで整形している。胎土，焼成が良好で堅緻である。8は土師器の坏底部である。ヘラ切りの底部で体部は直線的にのびるものと考えられる。器面が荒れているため調整痕は不明，大型品である。この他に図示していないが砥石1点がある。砂岩質頁岩製の仕上げ砥である。板状をなし，長さ6.2cm　幅3.2cm　厚さ1.1cmで四面が使用されている。使用による凹みがみられる。

⒃ 第15号掘立柱建物と出土遺物

第15号掘立柱建物（SB－15）（Fig.22）

N－25.26　O－24.25グリットにかけて検出した。第2群に属する建物である。SB－04.SB－20.SK－16と重複関係にある。SB－04とは直接の切り合い関係がなく，先後関係は不明。SB－20とは4ケ所で柱穴の切り合い関係があり，SB－15の柱穴がSB－20の柱穴を切っていて，SB－15が後出する建物である。SK－16とはSB－15の柱穴が土壙埋土中に確認され，SB－15がSK－16より後出であることがわかる。南北棟建物で主軸をN－3°－Wにとる。身舎は桁行3間，梁行2間である。桁行6.0m，梁行4.0m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径40～50cmの円形あるいは楕円形で，深さ30～60cm。柱根は遺存しないが，9個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.23）

器形の判明するもの10点を図示した。1．2．4．7が須恵器で他は土師器である。1は坏蓋で，体部と口縁部の境は明瞭でない。口縁端部は丸くおさめられる。内外面共横ナデ調整であ

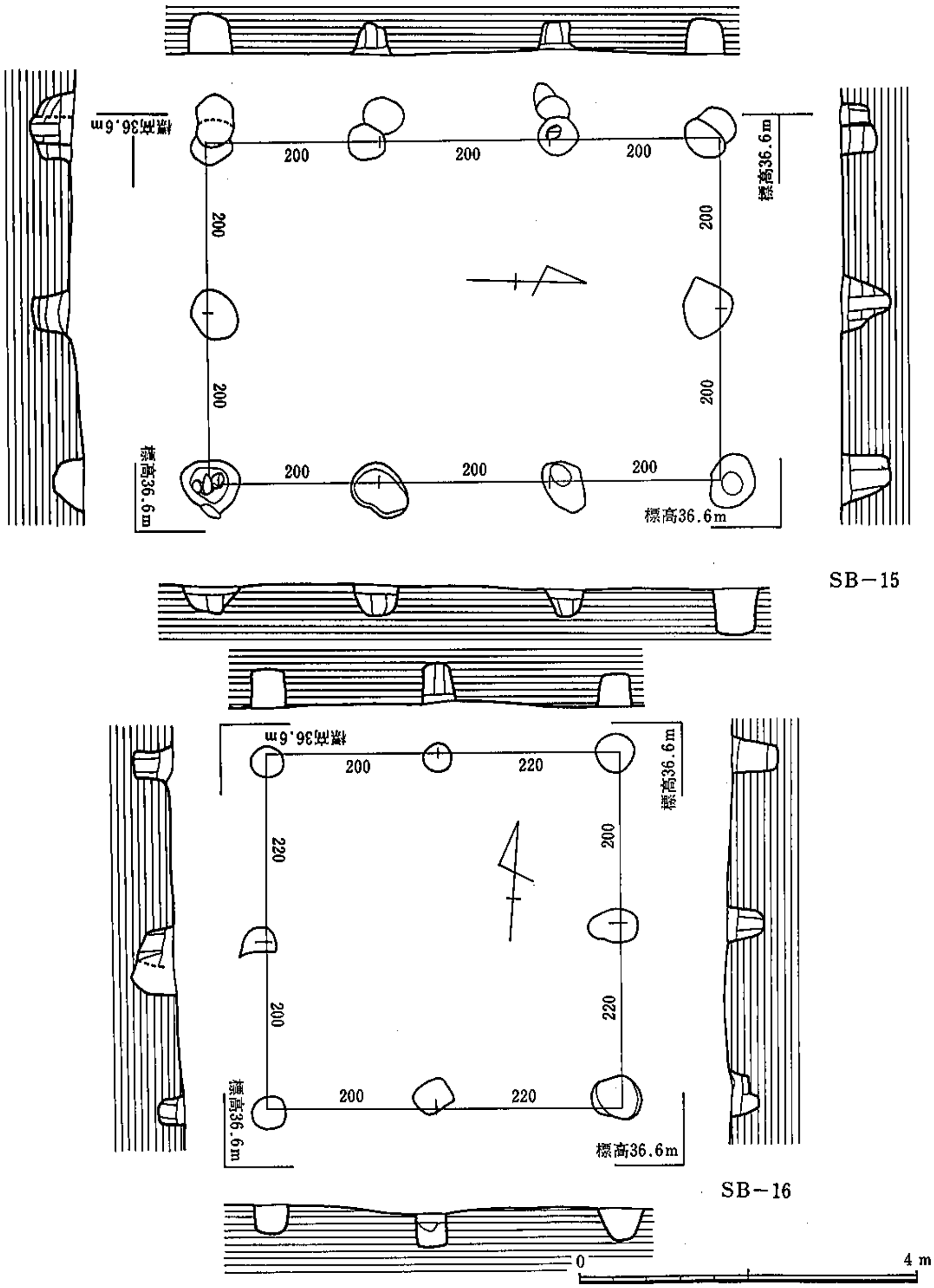


Fig. 22　第15・16号掘立柱建物(SB−15・16)実測図

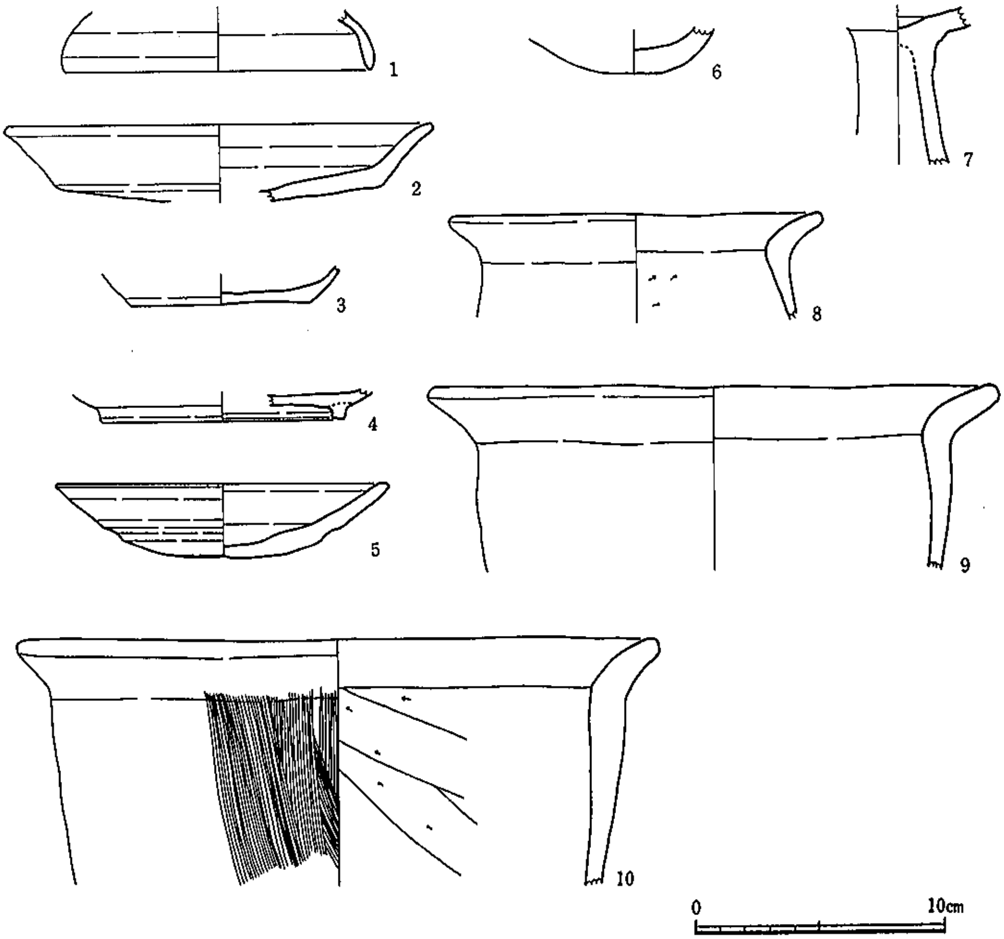


Fig. 23　SB－15･16出土遺物実測図

る。復原口径12.0cm。2は盤である。底部はヘラ切りで体部は外傾しながら直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめている。内外面共に横ナデ調整。復原口径16.6cm。器高3.0cm。3.4は坏の底部である。3はヘラ切りの平底で体部は外傾しながらたちあがるが口縁部を失う。4は断面方形の低い貼り付け高台をもつ。体部内外面は横ナデ調整。5はヘラ切りの底部から大きく外傾しながらたちあがる体部を有し，口縁部は丸くおさめる。底部と体部の境に段を有する。体部内外面は横ナデ調整，口径12.8cm，器高3.0cm。6は小型壺の底部と考えられる。外面に刷毛目調整がみられ，内面はナデ調整である。7は高坏脚部である。脚筒部は比較的長い。しぼりの痕跡が認められる。外面は横ナデ調整。8～10は甕形土器口縁部である。いずれも口縁部が大きく外反し，くの字形をなしている。8は小型品で復原口径14.8cmをはかる。調整は器面

が荒れているために不明な点が多いが，胴部内面はヘラ削りを加えている。9は復原口径21.6cm。胴部にややふくらみがある。口縁部外面は横ナデ調整。胴部外面は縦方向の刷毛目調整。口縁部内面は横方向の刷毛目調整。胴部内面はヘラ削り調整。10は復原口径24.6cm，胴部ははらない。器面調整は9と同様であるが，刷毛目の目の大きさが小さい。外面にススの付着が顕著である。

(17)　第16号掘立柱建物と出土遺物

第16号掘立柱建物（SB－16）（Fig.22）

O－27.28．P－27.28グリットにかけて検出した。第2群に属する建物である。SB－01.SB－04と重複関係にある。SB－01とは柱穴が直接切り合い関係にあり，SB－16の柱穴がSB－01の柱穴を切っている。よって，SB－16がSB－01より後出の建物である。SB－04とは直接の切り合い関係がないので，その先後関係は不明。東西棟建物で主軸をN－3°－Wにとる。身舎は桁行2間，梁行2間である。桁行4.2m，梁行4.0m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径40～60cmの円形で,深さ30～55cm。柱根は遺存しないが，6個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径10～15cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物

須恵器，土師器が出土しているが，図示できるものはない。

(18)　第17号掘立柱建物と出土遺物

第17号掘立柱建物（SB－17）（Fig.24）

P－12.13，Q－12.13グリットにかけて検出した。第3群に属する建物である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。一面廂の南北棟建物で主軸をN－15°－Wにとる。身舎は桁行2間，梁行2間である。南側に1間×2間の廂をつける。桁行3.5m，梁行3．4m，廂は1.4m×3.4m，柱間は図示したとおりである。各柱穴掘り方は径35～40cmの円形で,深さ30～50cm。柱根は遺存しないが，2個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物

須恵器，土師器が出土しているが，図示できるものはない。

(19)　第18号掘立柱建物と出土遺物

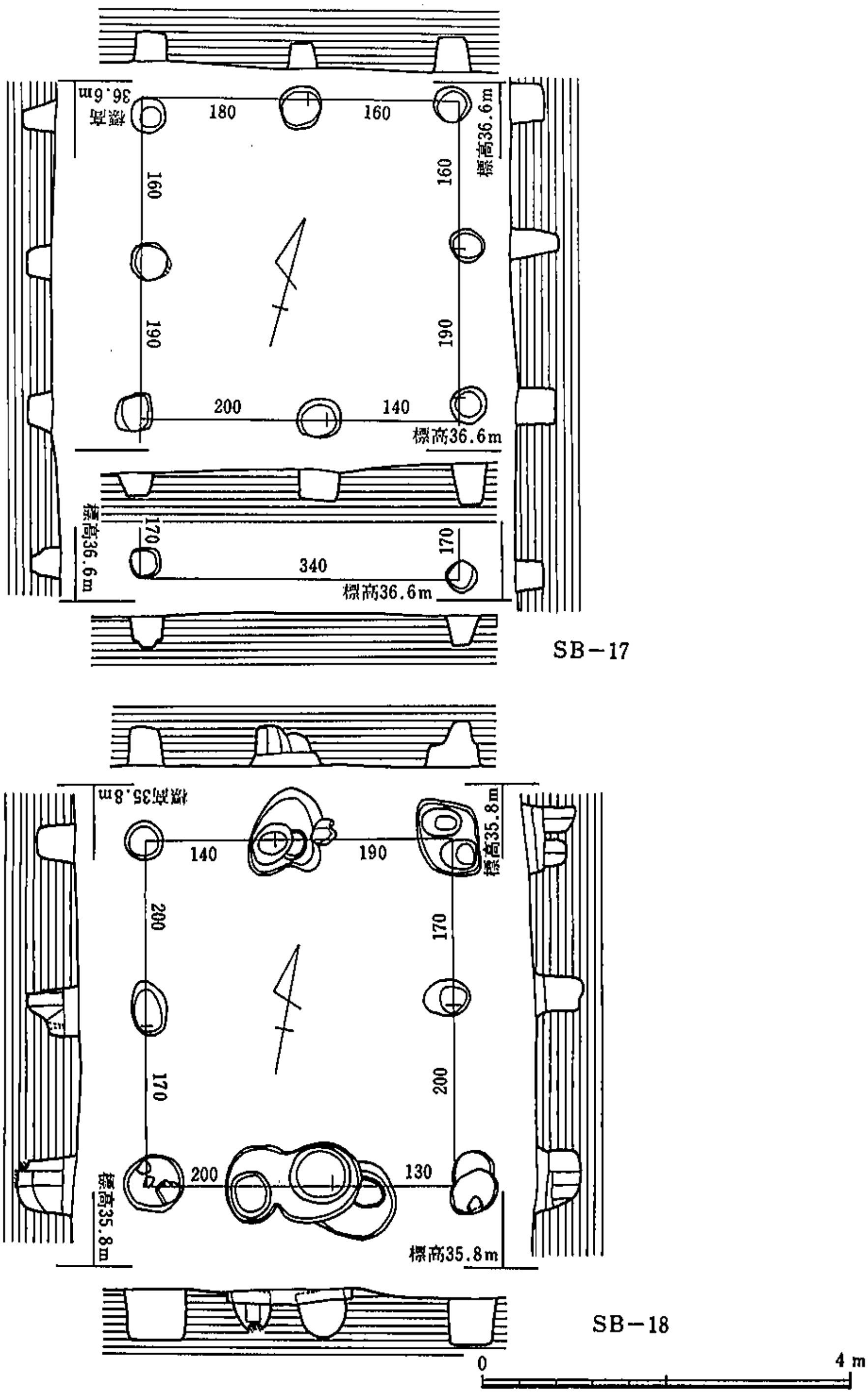


Fig. 24　第17・18号掘立柱建物（SB－17・18）実測図

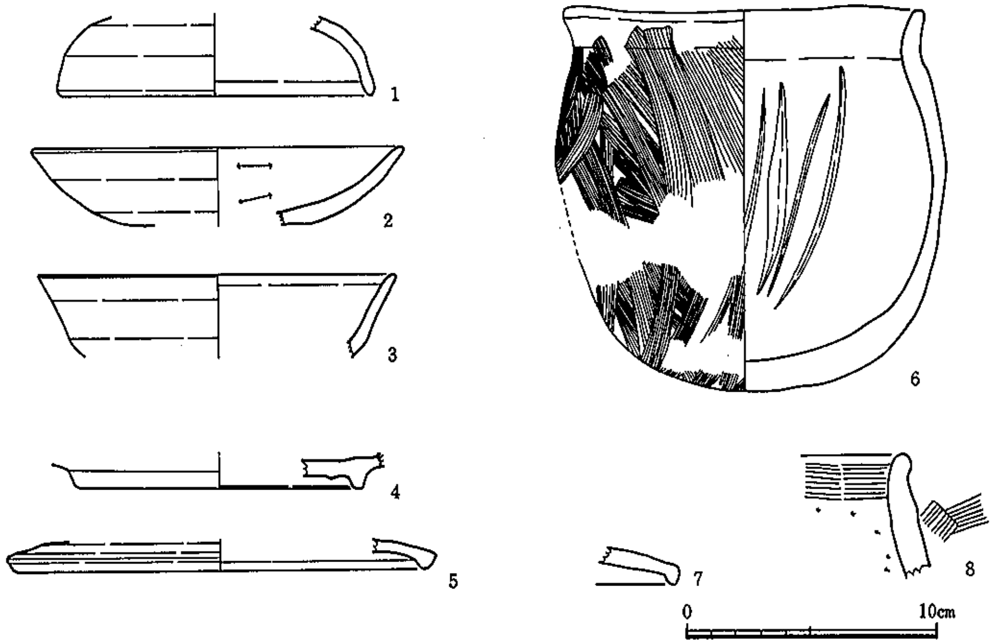


Fig. 25　SB－18出土遺物実測図

第18号掘立柱建物（SB－18）（Fig.24）

R－18.19. S－18.19グリットにかけて検出した。第3群に属する建物である。他の第3群の建物群とはやや離れている建物でSB－08に隣接している。南北棟建物で主軸をN－10°－Wにとる。身舎は桁行2間，梁行2間である。桁行3.7m，梁行3.5m，柱間は図示したとおりである。総柱建物ではないがSB－08と同様に倉庫と考えられる。各柱穴の掘り方は径40～80cmの円形で,深さ30～40cm。柱根は遺存しないが，1個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径20cmの円形をなす。3個の柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.25）

器形の判明する8点を図示した。2．6．8が土師器で他は須恵器である。1は坏蓋で体部と口縁部の境は不明瞭である。口縁端部は丸くおさめる。内外面共に横ナデ調整である。胎土は精良で，焼成は良好で堅緻である。復原口径12.2cm。2は底部がヘラ切りで，体部は大きく外傾するが，丸味をもってたちあがる。内外面は横ナデ調整。内面にススが付着する。復原口径14.5cm。3は坏で，体部は外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部は尖り気味におさめる。内外面共に横ナデ調整を加える。復原口径13.9cm。4は坏の底部，断面方形の高台が内傾気味に貼り付けられている。内底部不定方向のナデ調整，他は横ナデ調整である。5．7は蓋で，口縁部の屈曲は短く，断面三角形となす。内外面共に横ナデ調整である。5は復原口径16.0cm。

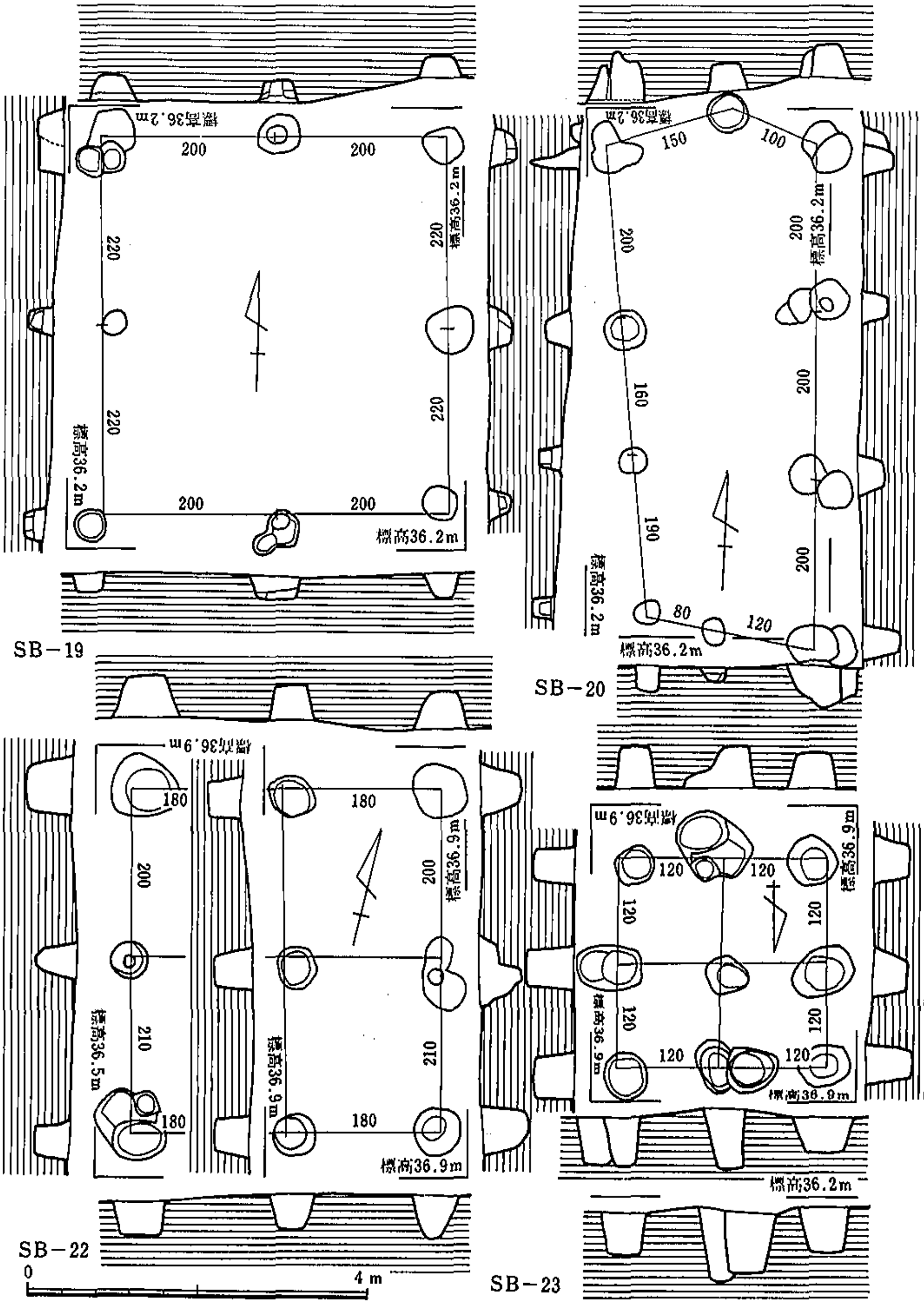


Fig.26　第19・20・22・23号掘立柱建物（SB－19・20・22・23）実測図

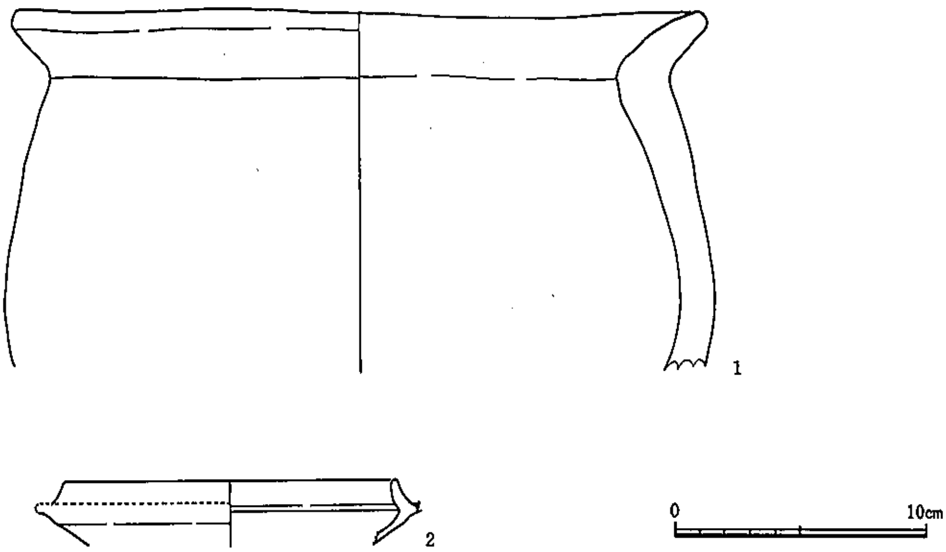


Fig. 27　SB－19出土遺物実測図

6は小型の甕である。口縁部はあまり外反せず直口に近く，口縁端部は丸くおさめている。外面は縦位～斜位の刷毛目調整，口縁部は内外面共に横ナデ調整。胴部内面は棒状工具によって荒いヘラ削りをおこなっている。内底部は指の押圧で凹凸をなす。口径14.2cm，器高15.2cmをはかる。８は甕の口縁部破片。口縁部は直立し，胴部が張る。外側は斜位の刷毛目調整，口縁部内面は横位の刷毛目調整で胴部内面はヘラ削り調整である。

⒇　第19号掘立柱建物と出土遺物

第19号掘立柱建物（SB－19）（Fig.26）

M－17.28.N－27.28グリットにかけて検出した。第２群に属する建物である。SB－03･SB－05と重複関係にある。SB－03.SB－05とは共に直接の切り合い関係がないので先後関係は不明。南北棟建物で主軸をN－3°－Wにとる。身舎は桁行２間，梁行２間である。桁行4.4m，梁行4.0m，柱間は図示したとおりである。総柱建物で倉庫とみられる。各柱穴掘り方は径30～50cmの円形で，深さ25cm。柱根は遺存しないが，６個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20cmの円形をなす。柱穴内に根固め石を入れたものがある。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.27）

器形の判明する２点を図示した。１は土師器の甕である。口縁部は大きく外反し，端部は丸くおさめる。外面はナデ調整。内面は荒いヘラ削り調整。胴部がややふくらむ。器壁が厚く，大型品である。復原口径26.8cm。２は蓋付坏。蓋受けのたちあがりは低く内傾する。受部端を欠失する。内外面共横ナデ調整。復原口径13.0cm。

㉑　第20号掘立柱建物と出土遺物

第20号掘立柱建物（SB－20）（Fig.26）

M－24.N－24.25.O－24グリットにかけて検出した。第２群に属する建物である。SB－15.SD－19と重複関係にある。SB－15とは４ケ所で柱穴の直接の切り合い関係があり，SB－15の柱穴がSB－20の柱穴を切っていて，SB－20が先行する建物であることがわかる。SD－19とは柱穴との直接の切り合い関係があり，SB－20の柱穴がSD－19を切っていてSD－19よりSB－20が後出である。南北棟建物で主軸をN－3°－Wにとる。身舎は桁行３間，梁行２間である。桁行6.0m，梁行2.0～2.4m，柱間は図示したとおりであるが，やや不整形の平面プランをなす。各柱穴の掘り方は径30～50cmの円形で，深さ15～45cm。柱根は遺存しないが，３個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物

須恵器，土師器が出土しているが，図示できるものはない。

㉒　第21号掘立柱建物と出土遺物

第21号掘立柱建物（SB－21）（Fig.28）

N－34．O－33～35．P－33～35．Q－33～35．R－33～35．S－33～35グリットにかけて検出した。第１群に属する建物である。SD－01と第21号製鉄炉と重複関係にある。SD－01.第21号製鉄炉とはSB－21の柱穴１個と直接の切り合い関係があり，SD－01．第21号炉址のいずれもが，柱穴を切っており，SB－21が先行する建物であることがわかる。また，SB－21は検出面も他の遺構と異なり，厚さ10cm前後の古墳時代遺物包含層の下面において検出したもので，本遺跡の遺構では最も古くなる。1面廂の東西棟建物で主軸をN－16°－Wにとる。身舎は桁行９間，梁行２間で，東側に１間×９間の廂がつく。桁行18.5m，梁行5.8m，柱間は図示したとおりである。身舎の西側，南側と東側の一部は布掘りの柱穴で，幅１～1.4m，深さ10cmの溝内に各柱穴が掘り込まれている。各柱穴の掘り方は径100～130cmの円形あるいは楕円形や方形プランで，深さ70～100cm。柱根は遺存しないが，13個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径30～35cmの円形をなす。

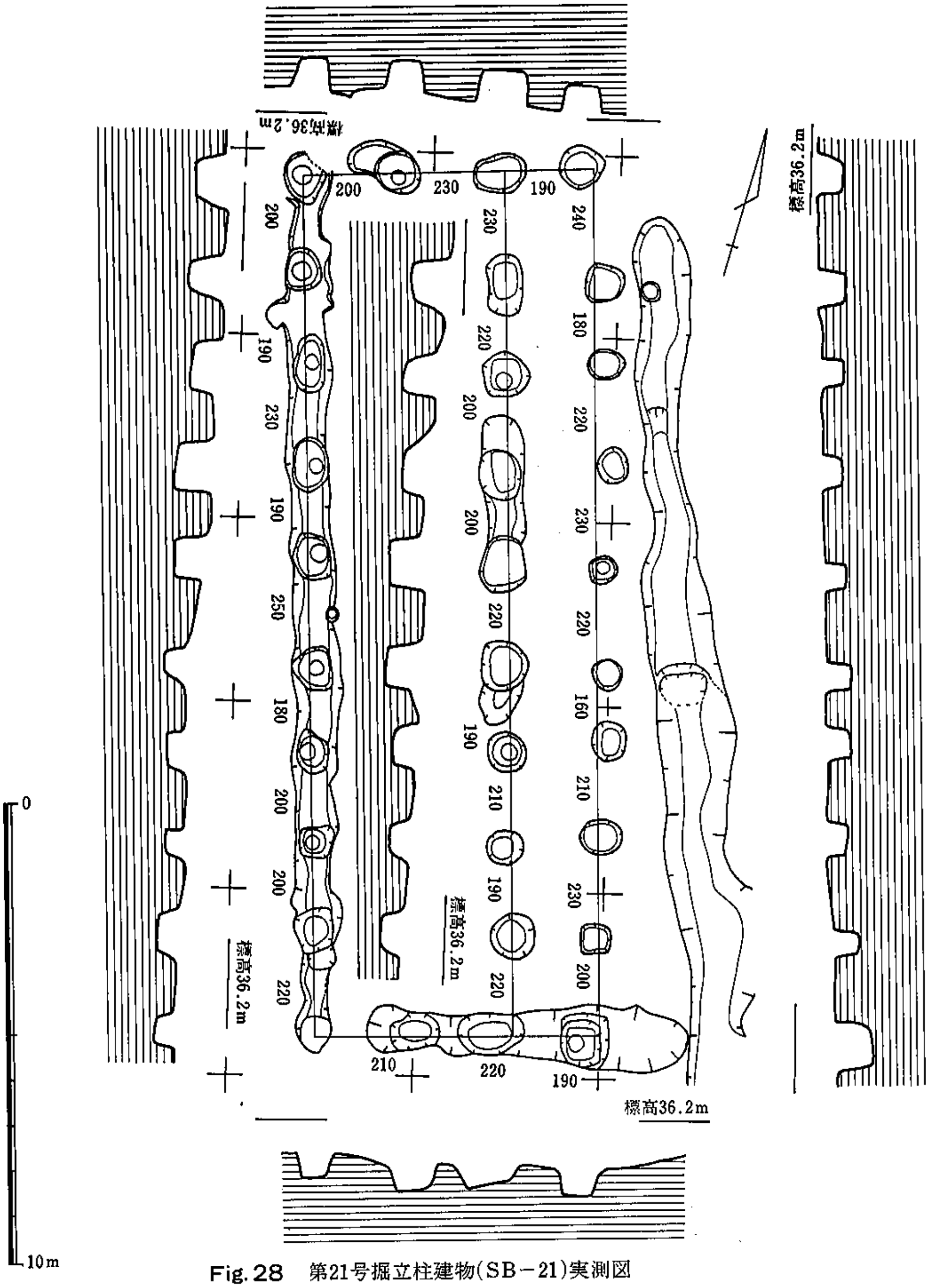


Fig. 28　第21号掘立柱建物(SB－21)実測図

出土遺物（Fig.29，30）

柱穴掘り方および布掘り部分からは遺物の出土はなかったが，本掘立柱建物の上を覆う土層より多量の遺物が出土し，本建物の下限を限定できる。上層の出土遺物には須恵器，土師器がある。32点を図示した。1～13は坏蓋である。口径の大きさの違い等からV類に分類できる。I類は口径17.0cm前後，II類は13.2cm～14.4cm，III類は12.0cm～13.0cm，IV類11.4cm～11.7cm，V類はつまみを有するものである。I類は1の1点のみである。体部と口縁部の境は不明瞭で，口縁端部は丸くおさめる。口縁部の内外面は横ナデ調整，天井部外面はカキ目調整である。II類は2～4，7の4点がある。口縁部と体部の境は不明瞭であるがわずかに段が残っている。天井部外面は約½の範囲にヘラ削り調整がみられる。口縁端部は丸くおさめ，口縁部の内外は横ナデ調整である。III類には5，6，8～10の5点がある。口縁部と体部の境は不明瞭である。8は天井部外面の⅔の範囲に丁寧なヘラ削り調整が施され，ヘラ記号がある。いずれも体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は不定方向のナデ調整である。6は天井部と体部と境に段を有する。天井部は平坦になると考えられる。6のみが焼成が不良で軟質である。IV類は11，13の2点である。口縁部はわずかに屈曲し，下方にひきのばされる。口縁端部は11が丸く，13がやや尖り気味におさめられる。内外面共横ナデ調整である。V類は12の1点である。つまみはボタン状で中凹みになる。天井部はヘラ削り調整で平坦である。体部および天井部内面は横ナデ調整である。焼成は良好で堅緻である。14～23は蓋付坏身である。口径の大きさ，蓋受けのたちあがりのちがいによりIII類に分類できる。I類は口径12.3cm～13.5cm，II類は10.3cm～11.6cm，III類は9.3cm～10.0cmである。I類は14，15の2点がある。14は蓋受けのたちあがりが比較的高いのに対し15は低い。受部の形態も14では端部が上方にあがるのに対し15ではさがり気味であり，さらに細別できる。底部は½の範囲がヘラ削り調整で，体部か口縁部にかけての内外面は横ナデ調整である。15の外底部にヘラ記号がある。II類は16～20の5点がある。蓋受けのたちあがりはI類よりやや内傾し低い。底部の½～⅔の範囲に荒いヘラ削り調整が施される。16は他と異なり底部が平坦で全体的に扁平である。20には内底部にヘラ記号がある。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整で，内底部は多方向のナデ調整を加えている。III類は21～23の3点がある。蓋受けのたちあがりはさらに内傾する。底部外面は⅔の範囲にヘラ削り調整が加えられる。21は底部外面にヘラ記号を有し，内底部にはタタキの痕跡がみられる。他の調整はII類と同様である。24は壷の底部と思われる。外面はカキ目調整を加えている。内面は横ナデ調整であるが凸凹が著しい。25～32は土師器の甕である。小型品と大型品の二種がある。25，30，32は口縁部が直立し，胴部も張りの少ない小型品である。27，28，29，31は口縁部が外反し，胴部にふくらみをもつ。いずれも胴部外面は縦，斜位の刷毛目調整，内面はヘラ削りを加え，口縁部は横ナデ調整である。26は特異な形をしている。口縁部はやや内傾気味に直立し，口縁端部は面とりされ平坦である。口縁下にツバ状の貼り付けがめ

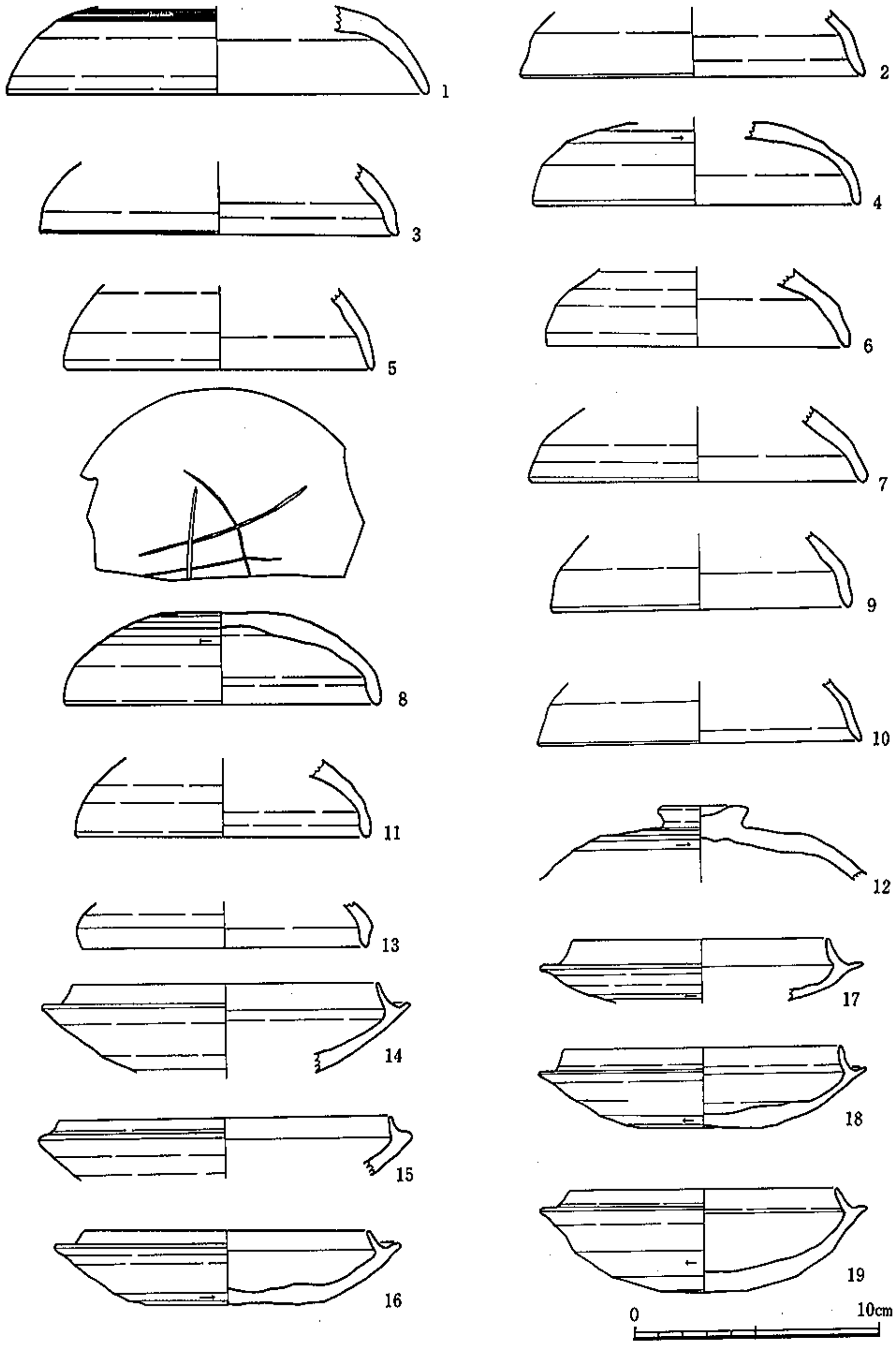


Fig. 29　SB－21上層出土土器実測図 I

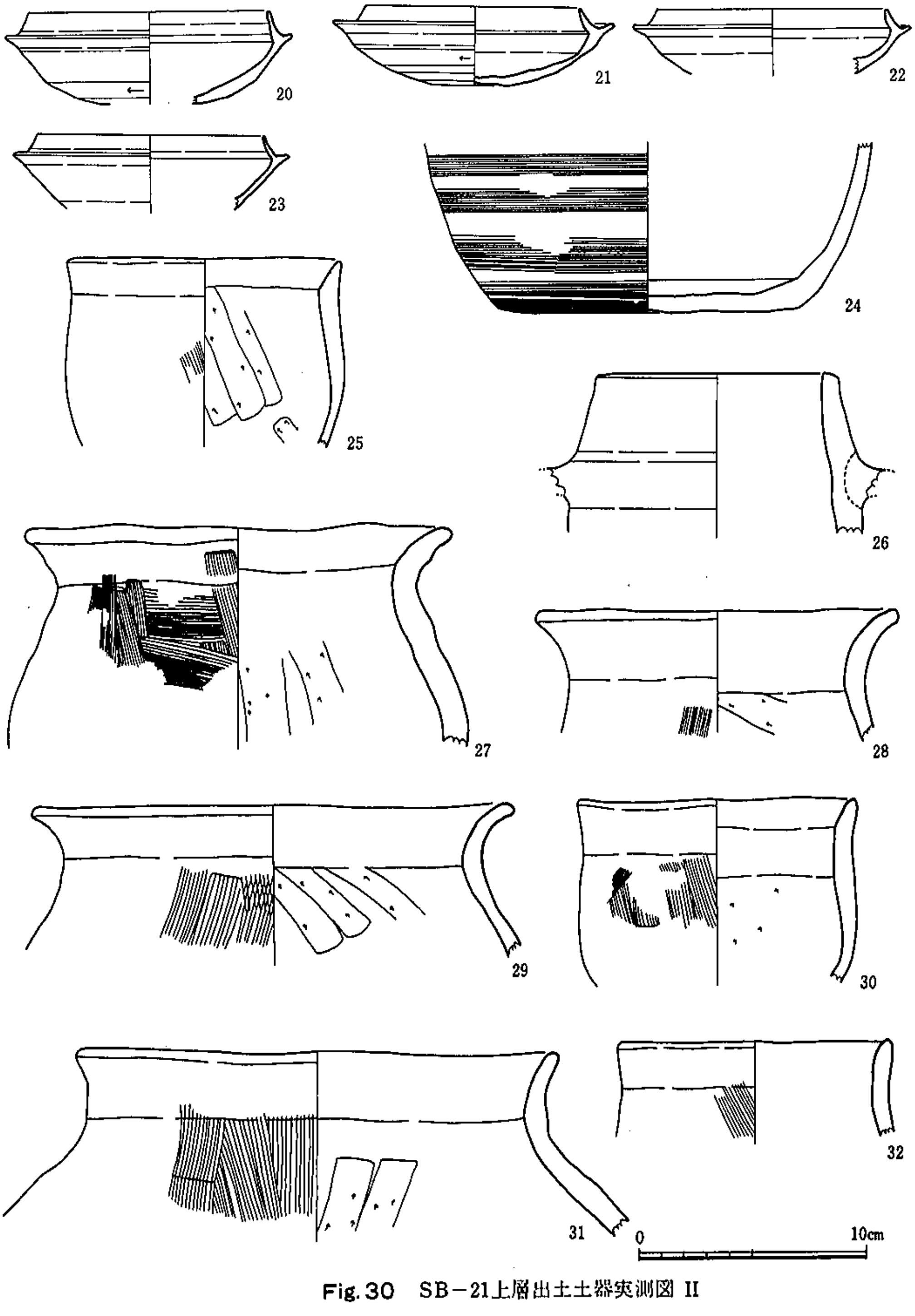


Fig. 30　SB－21上層出土土器実測図 II

ぐり全体の形状としては円筒状をなす。内外面共に横ナデ調整である。使用目的等については不明。今後の類例の増加をまちたい。

㉓　第22号掘立柱建物と出土遺物

第22号掘立建物（SB－22）（Fig.26）

Ｌ－14～16，Ｍ－14，15グリットにかけて検出した。第３群に属する建物である。SB－23と重複関係にある。SB－23とは柱穴が１ヶ所で直接の切り合い関係にあり，SB－23の柱穴をSB－22の柱穴が切っていて,SB－22が後出の建物であることがわかる。南北棟建物で主軸をN－13°－Wにとる。身舎は桁行２間，梁行２間である。桁行40m，梁3.6m，柱間は図示したとおりである。総柱の建物で倉庫と考えられる。各柱穴の掘り方は径40～80㎝の円形あるいは楕円形で，深さ50～60㎝。柱根は遺存しないが，３個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15～20㎝の円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.31－１～９）

器形のわかる９点を図示した。図示した遺物はすべて須恵器である。１は蓋付坏身である。蓋受けのたちあがりは低く内傾している。底部は½の範囲がヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけては横ナデ調整である。復原口径10.4㎝。２～５は坏身である。２～４は底部で，ヘラ切り後，断面方形の低い高台を貼り付けている。体部は遺存しないが，あまり外傾せず直にたちあがると考えられる。内底部は４がヘラ研磨調整，２，３がナデ調整である。２は焼成が不良で軟質である。５は底部からゆるやかに外傾しながらたちあがり口縁部で大きく外反し，端部は丸くおさめている。内外面共に横ナデ調整で仕上げている。復原口径15.8㎝をはかる。６～８は蓋である。６は口縁部で屈曲し，下方にひきのばされるが低い。口唇部は丸くおさめ，内側に沈線一条をめぐらしている。体部と天井部の境にはわずかに段がある。内外面は横ナデ調整。復原口径18.6㎝。７も口縁部の形状は６と同様であるが，天井部と体部の境が不明瞭で平坦である。天井部は丁寧なヘラ削り調整，体部から口縁部の内外面は横ナデ調整である。８は口縁部が屈曲し，下方にのび口唇部は面とりをして平坦である。天井部は平坦で⅔の範囲にヘラ削りを加えている。体部から口縁部の内外面は横ナデ調整。復原口径13.1㎝，高坏坏部になる可能性もある。９は長頸壷の体部下半部とみられる。胴部中央部で鋭く屈曲するタイプのもので，屈曲部より下半の破片である。内外面共に丁寧な横ナデ調整を加えている。

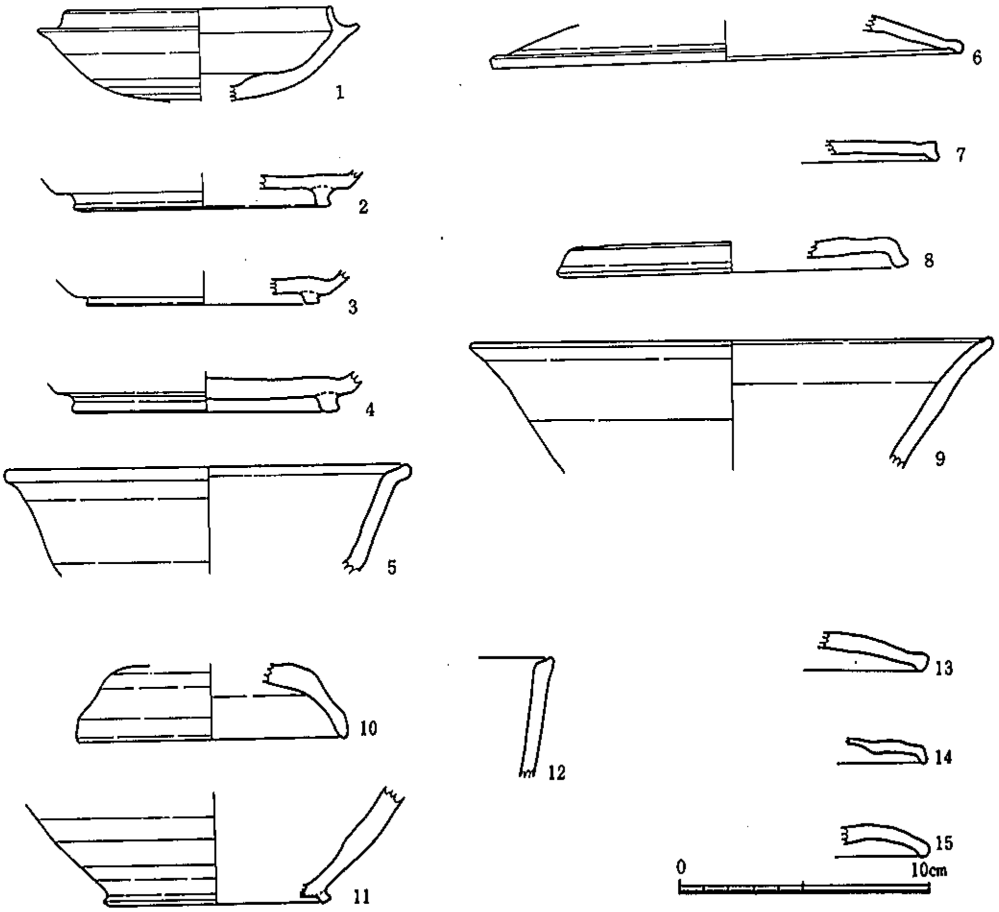


Fig.31　SB－22・23出土土器実測図

⑷ 第23号掘立柱建物と出土遺物

第23号掘立柱建物（SB－23）（Fig.26）

L－14，15，M－14，15グリットにかけて検出した。第3群に属する建物である。SB－22と重複関係にある。SB－22とは柱穴が1ヶ所で直接の切り合い関係にある。SB－23の柱穴をSB－22の柱穴が切っており，SB－23が先行した建物であることがわかる。南北棟建物と考えられ主軸をN－1°－Eにとる。身舎は桁行2間，梁行2間である。桁行2.5m，梁行2.5m，柱間は図示したとおりである。総柱建物で倉庫と考えられる。各柱穴の掘り方は径40～60cmの円形あるいは楕円形で深さ40～50cm。柱根は遺存しないが，1個り柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径20×35cmの楕円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.31－10～15）

器形のわかる6点を図示した。すべてが須恵器である。10は坏蓋である。口縁部と体部，体部と天井部の境に不明瞭な段を有している。口縁部はやや尖り気味におさめている。天井部外面は粗いヘラ切りで，体部から口縁部の内外面は横ナデ調整である。復原口径10.6cm。11は壺の底部である。端部がやや外に張る低い貼り付け高台を有し，体部は貼り付け部から大きく外反しながらたちあがり，上半部は欠失する。体部外面の下半はヘラ削り調整で，上半は横ナデ調整。内面は横ナデ調整で，内底部は多方向からのナデ調整である。12は鉢の口縁部と考えられる。口縁部がやや厚くなり，端部は平坦に仕上げている。13～15は坏蓋である。13，15は口縁部の屈曲は短く断面三角形をなす。内外面は横ナデ調整。14は屈曲部がやや長く天井部は平坦である。天井部外面はヘラ削り調整で，他は横ナデ調整である。

㉕　第24号掘立柱建物と出土遺物

第24号掘立柱建物（SB－24）（Fig.32）

L－12，M－12グリットにかけて検出した。第3群に属する建物である。SK－15と重複関係にあるが，直接の切り合い関係がないので，その先後関係は不明。ただし，SB－24とSK－15は方向が一致しており，本来は同一の遺構である可能性が高い。南北棟建物で主軸をN－71°－Eにとる。身舎は桁行2間，梁行1間である。桁行3.6m，梁行2.4m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径30～60cmの円形あるいは楕円形で，深さ15～60cm。柱根は遺存しないが，1個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径20cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物

須恵器　土師器が若干出土しているが，図示できるものはない。

㉖　第25号掘立柱建物と出土遺物

第25号柱立柱建物（SB－25）（Fig.32）

L－10，11，M－10，11グリットにかけて検出した。第3群に属する建物である。SK－04，第10号製鉄炉址，第2号土器埋納遺構と重複関係にある。第10号製鉄炉址と第2号土器埋納遺構とは直接の切り合い関係がないのでその先後関係は不明である。ただし，両遺構とも配置からみてSB－25と共存し，同一の遺構であった可能性は高い。SK－04とは柱穴と土壙掘り方に直接の切り合い関係がある。SK－04をSB－25の柱穴が切っており，SB－25が後出する建物である。東西棟建物で主軸をN－72°－Eにとる。身舎は桁行2間，梁行1間である。桁行3.6m，梁行

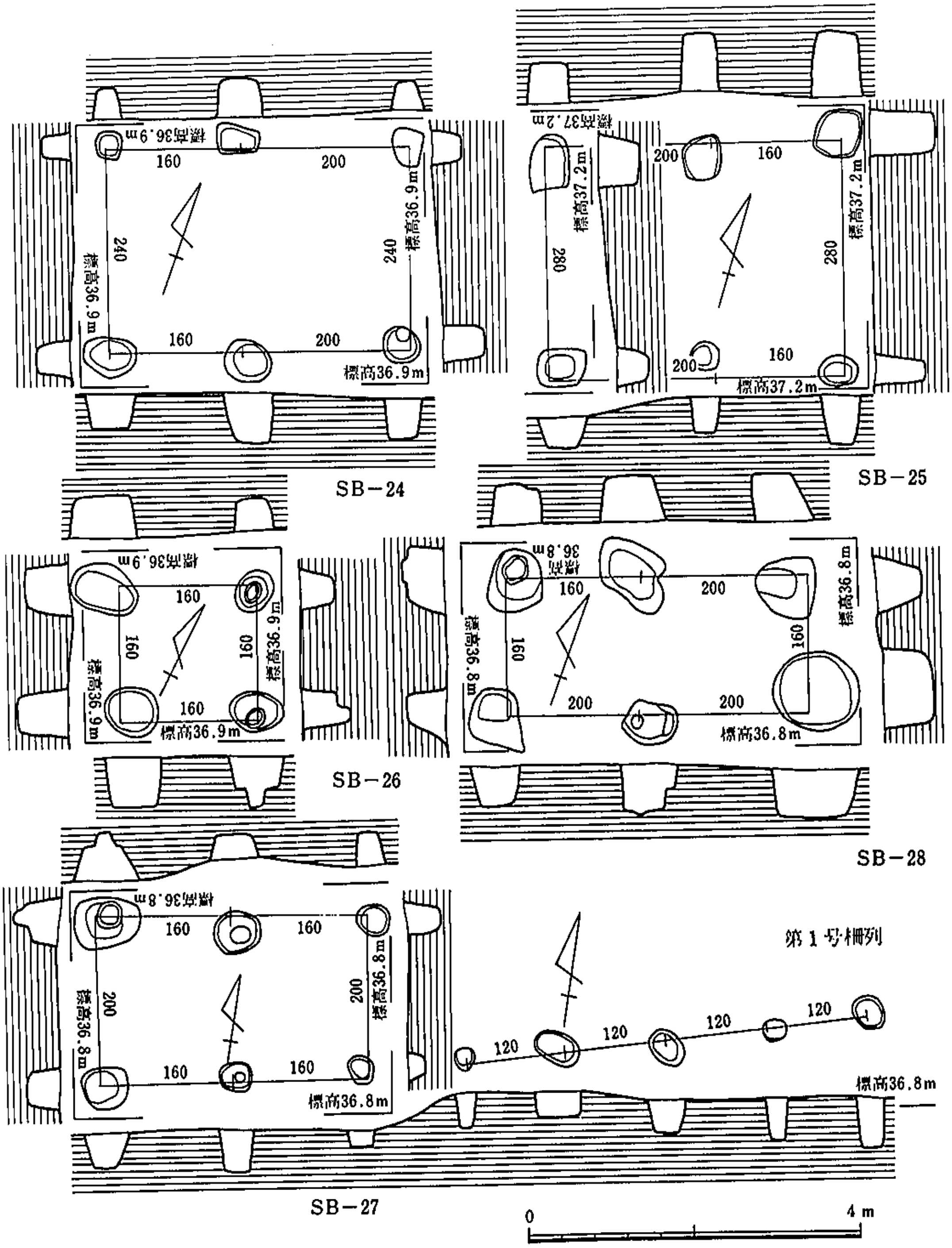


Fig. 32　第24～28号掘立柱建物(SB－24～28)・第1号柵列実測図

2.8m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径30～60cmの円形あるいは方形で，深さ40～60cm。柱根は遺存しないが，１個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径18cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.33－１～３）

器形の判明する３点を図示した。いずれも須恵器である。１，２は坏蓋である。１は体部と口縁部の境が不明瞭で，天井部は丸味をもっている。天井部は½の範囲にヘラ削り調整がみられ，他は横ナデ調整である。復原口径10.9cm。２は体部と口縁部の境が不明瞭であることは１と同様であるが，天井部との境にはわずかに段があり，天井部には荒いヘラ削りが施される。体部から口縁部にかけては横ナデ調整で，天井部内面は多方向からのナデ調整である。復原口径10.4cm，天井部にヘラ記号がある。３は坏身である。底部はヘラ切り後断面方形の低い高台を貼り付けている。体部はあまり外傾せずたちあがる。内外面共に横ナデ調整である。胎土は精良であるが，焼成がやや不良で軟質である。

(27)　第26号掘立柱建物と出土遺物

第26号掘立柱建物（SB－26）（Fig.32）

M－12グリットにおいて検出した。第３群に属する建物である。第17号製鉄炉址と重複関係にあり，SB－26の柱穴が第17号製鉄炉址を切っており，SB－26が第17号製鉄炉址より後出する建物であることがわかる。東西棟建物で主軸をN－28°－Wにとる。身舎は桁行１間，梁行１間である。桁行1.7m，梁行1.6m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径40～80cmの円形あるいは楕円形で，深さ50～60cm。柱根は遺存しない。また，柱穴には柱痕跡もみられない。ただし，東側の柱穴２個は二段の掘り方をもつ。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物

須恵器，土師器が若干出土しているが，図示できるものはない。

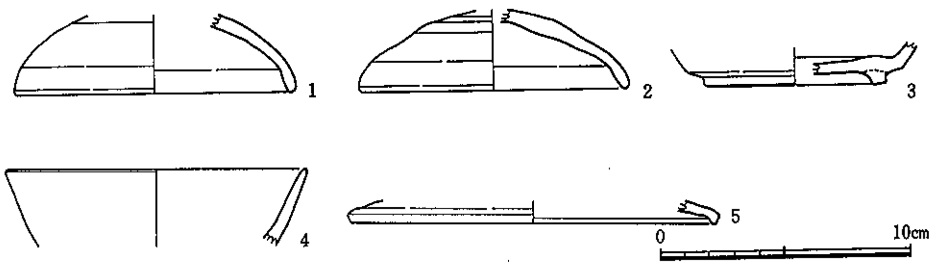


Fig.33　SB－25・28出土遺物実測図

㉘　第27号掘立柱建物と出土遺物

第27号掘立柱建物（SB－27）（Fig.32）

Ｎ－12，13グリットにかけて検出した。第３群に属する建物である。第３群建物群の中央部に位置している。他の遺構と重複関係はみられない。東西棟建物で主軸をＮ－79°－Ｗにとる。身舎は桁行２間，梁行１間である。桁行3.2m，梁行2.0m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径30～80cmの円形あるいは楕円形で，大きさはまちまちである。深さ40～50cm。柱根は遺存しないが，２個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径12～20cmの円形をなす。北西隅の柱穴は二段に掘り込まれている。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。なお，本建物の南東隅の柱穴から第１号柵列がのびている。柵列は本遺構とは平行せず，わずかに角度をもっている。

出土遺物

須恵器，土師器が若干出土しているが，器形がわかり，図示できるものはない。

㉙　第28号掘立柱建物と出土遺物

第28号掘立柱建物（SB－28）（Fig.32）

Ｎ－12，13，Ｏ－12，13グリットにかけて検出した。第３群に属する建物である。SB－27の南側に位置するが単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。東西棟建物で主軸をＮ－70°－Ｅにとる。身舎は桁行２間，梁行１間である。桁行3.6m，梁行1.6m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径60～100cmの円形あるいは不整円形で，深さ50～70cm。北西隅の柱穴は二段に掘り込まれている。柱根は遺存しないが，１個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径20cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.33－４，５）

器形が判明した２点を図示した。共に須恵器である。４は坏身で復原口径13.8cm。体部はあまり外傾せず直線的にたちあがり，口縁端部は尖り気味におさめている。内外面は共に横ナデ調整である。５は坏蓋で，復原口径14.4cm。口縁部の屈曲は短く断面三角形をなす。内外面共に横ナデ調整で仕上げている。

㉚　第29号掘立柱建物と出土遺物

第29号掘立柱建物（SB－29）（Fig.34）

Ｎ－10～12，Ｏ－11，12，Ｐ－11グリットにかけて検出した。第３群に属する建物である。

SB－30と重複関係にある。SB－29とSB－30は直接の切り合い関係がないので，その先後関係は不明である。南北棟建物で主軸をN－15°－Wにとる。身舎は桁行３間，梁行２間である。桁行5.2m，梁行4.0m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径40～60cm，柱根は遺存しないが，１個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径20cmの円形をなす。北東隅の柱穴は二段掘りになっている。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物

須恵器，土師器が若干出土しているが，器形がわかるものがないので図示できない。

⑶1　第30号掘立柱建物と出土遺物

第30号掘立柱建物（SB－30）（Fig.34）

N－10，11，O－10，11グリットにかけて検出した。第３群に属する建物である。SB－29，SB－31，第11号製鉄炉址と重複関係にある。SB－29，SB－31，第11号製鉄炉址のいずれにも直接の切り合い関係がなく，その先後関係は不明である。ただし，第11号製鉄炉址はSB－30の中にきれいにおさまり，その配置からも同時併存し，同一の遺構であった可能性が高い。南北棟建物で主軸をN－20°－Wにとる。身舎は桁行２間，梁行１間である。桁行3.2m，梁行2.4m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径30～40cmの円形あるいは隅丸方形で，深さ25～60cm。柱根は遺存しないが，１個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15cmの円形をなす。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物

須恵器，土師器が若干出土しているが，いずれも小破片で器形がわかるものがなく図示できない。

⑶2　第31号掘立柱建物と出土遺物

第31号掘立柱建物（SB－31）（Fig.34）

N－９，10，O－９，10　P－９，10グリットにかけて検出した。第３群に属する建物である。SB－30と重複関係にあるが，直接の切り合い関係がないので，その先後関係は不明。南北棟建物で主軸をN－16°－Wにとる。身舎は桁行３間，梁行２間である。桁行5.2m，梁行3.6m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径30～50cmの円形で，深さ20～60cm。柱根は遺存しないが，４個の柱痕跡がみられる。柱は径20～25cmの円形をなす。柱穴掘り方内に根固めの石をつめた柱穴３個がある。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物

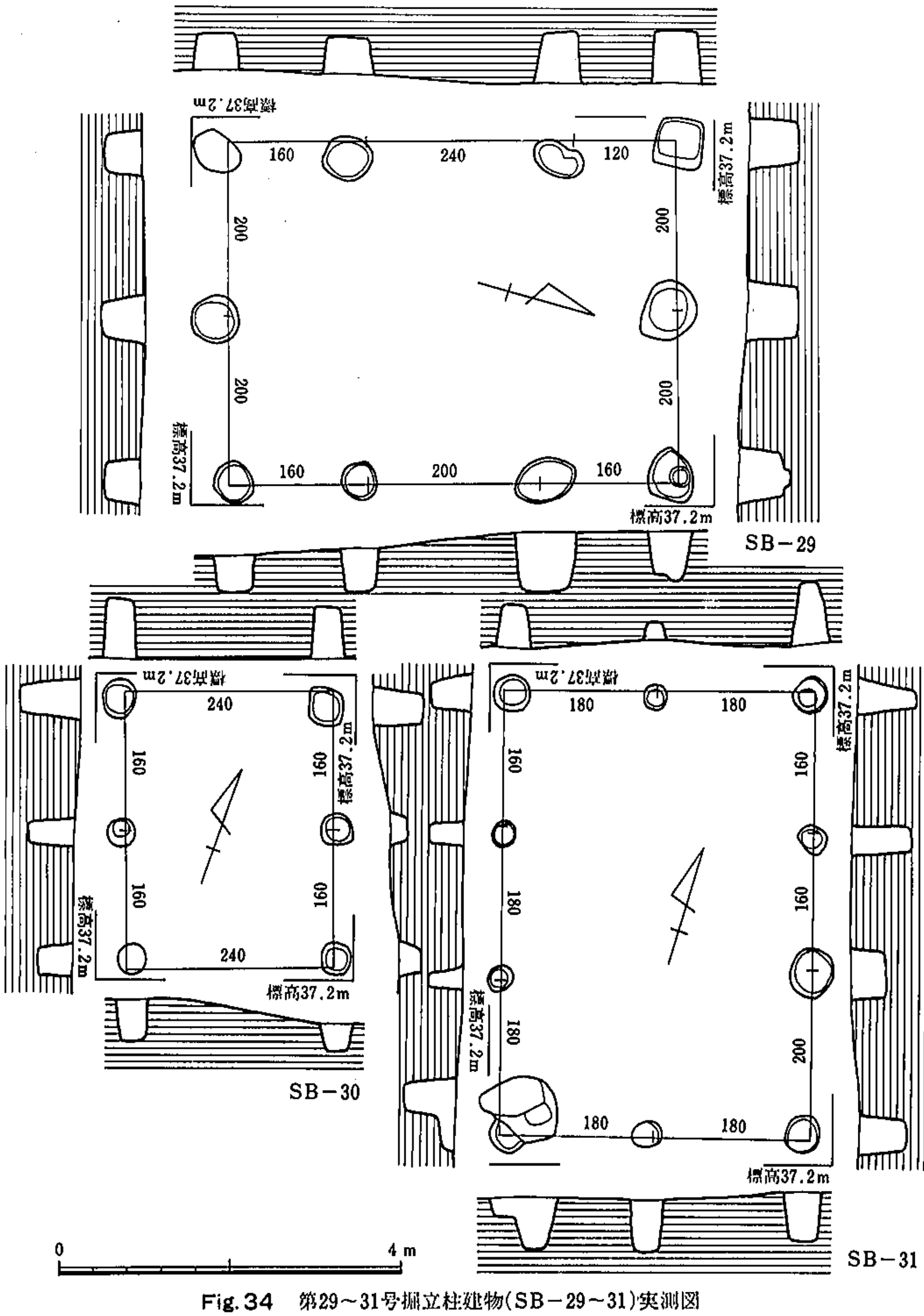


Fig. 34　第29～31号掘立柱建物（SB－29～31）実測図

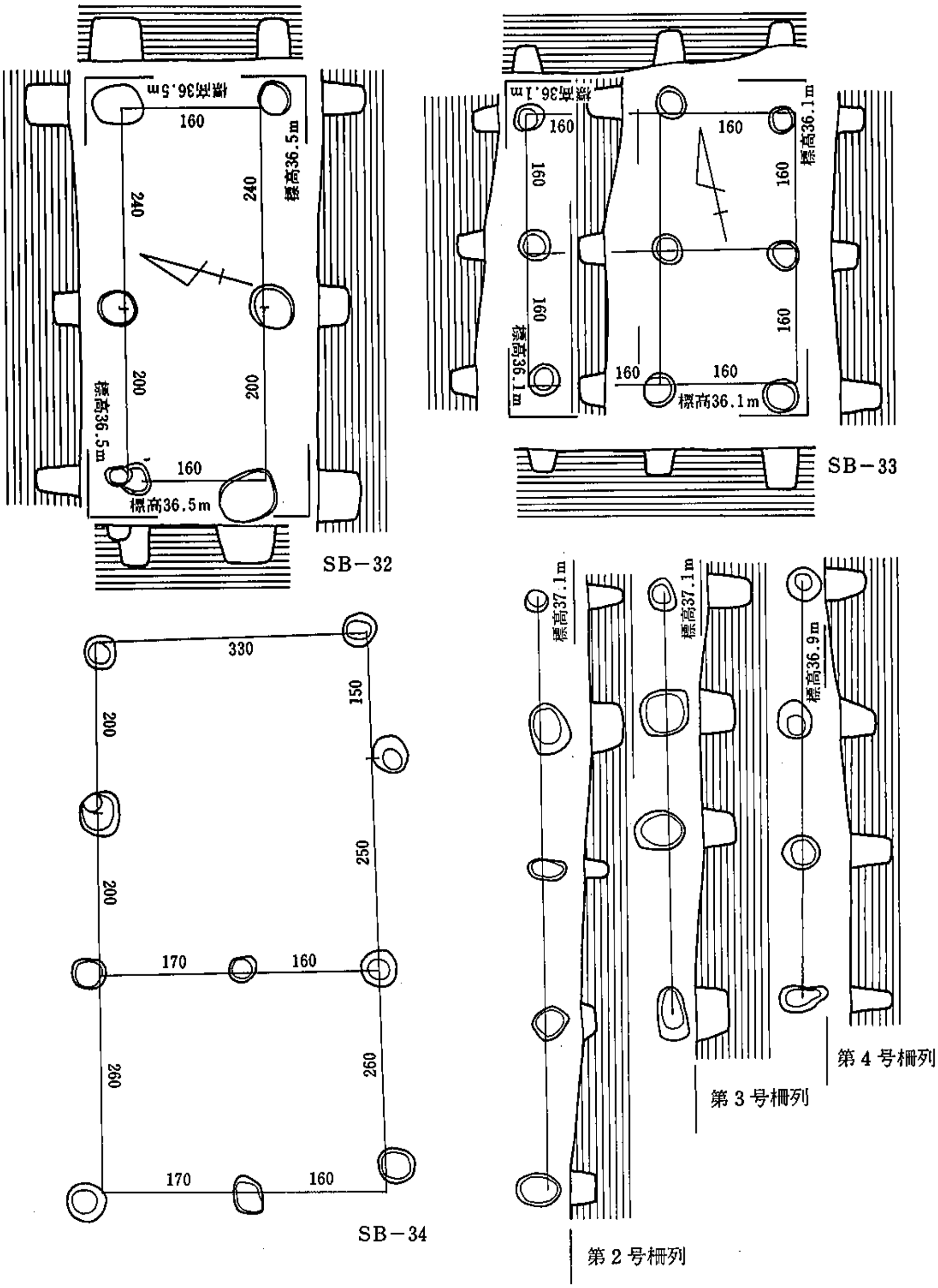


Fig. 35　第32～34号掘立柱建物(SB−32～34)・第２～第４号柵列実測図

須恵器，土師器が若干出土しているが，いずれも細片となっていて器形の判明するものがなく，図示することはできない。

(33) 第32号掘立柱建物と出土遺物

第32号掘立柱建物（SB－32）（Fig.35）

O－14，15，P－14，15グリットにかけて検出した。第3群に属する建物である。SB－11，SB－13と重複関係にある。SB－11，SB－13とは直接の切り合い関係がないので，その先後関係は不明である。東西棟建物で主軸をN－74°－Eにとる。身舎は桁行2間，梁行1間である。桁行4.4m，梁行1.6m，柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は径40～50の円形あるいは楕円形で，深さ30～50cm。柱根は遺存しない。また，柱穴に柱痕跡もみられない。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.36）

器形のわかるもの2点を図示した。1が須恵器で2は土師器である。1は坏蓋で，口縁部の屈曲は鋭く高い。口縁端部は尖り気味におさめている。口縁の外面は凹線がめぐる。体部と天井部の境はわずかに段がつき，天井部は平坦でヘラ削りが加えられている。体部から口縁部にかけては内外面共に横ナデ調整である。復原口径15.2cm。2はコシキあるいは土管の底部と考えられる。底部端は面とりがしてあり平坦で，底抜けの状態である。外面はナデ調整，内面はヘラ削り調整である。

(34) 第33号掘立柱建物と出土遺物

第33号掘立柱建物（SB－33）（Fig.35）

N－21，O－21，22グリットにかけて検出した。第2群に属する建物である。第2群の建物

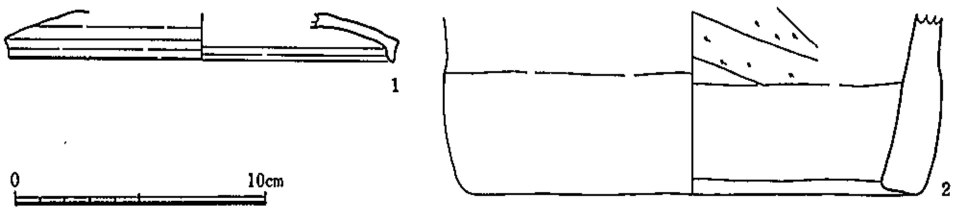


Fig. 36　SB－32出土遺物実測図

群の西端部に単独で存在し,他の遺構との重複関係はみられない。方形の建物で主軸をＮ－76°－Ｅにとる。身舎は桁行２間，梁行２間である。桁行3.2m，梁行3.2m，柱間は図示したとおりである。総柱建物で倉庫と考えられる。各柱穴の掘り方は径30～40cmの円形で，深さ25～55cm。柱根は遺存しない。また柱穴には柱痕跡もみられない。柱穴内から須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物

須恵器，土師器が若干出土しているが，いずれも細片で器形の判明するものがなく，図示することはできない。

(35)　第34号掘立柱建物と出土遺物

第34号掘立柱建物（SB－34）（Fig.36）

西群建物のSB－26と重複して検出した掘立柱建物であるが，他の建物が現場で確認したのに対し，この建物は図面操作において想定しており，その詳細は不明であり，また柱ならびは正確には対応しないので参考として呈示しておく。主軸をＮ－76°－Ｅにとる。身舎は桁行２間，梁行２間で南側に廂をつける。桁行6.5m，梁行3.3m，廂幅は2.6mである。柱間は図示したとおりである。各柱穴の掘り方は30～40cmの円形である。柱穴内からは須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物

須恵器，土師器があるが，いずれも細片で器形の判別できるものはなく，図示することはできない。

５．柵列

柵列と考えられる柱穴のならびが西群の建物群中に存在する。掘立柱建物と関連した設置された思われるものもあるが，無関係に存在するものもある。以下，各柵列について詳述する。

(1)　第１号柵列（FIg.32）

SB－27の南側の柱すじに連接した状態で検出した。SB－27の主軸方向と若干の角度のずれがあり，Ｎ－75°－Ｅの方向をとる。柵列は長さ6.0mで，柱間は1.2mをはかる。柱穴の大きさは径25～50cmとばらつきがある。深さ30～60cmである。

(2) 第2号柵列（FIg.35）

SB－24の北側，K－12～14グリットに検出した。5個の柱穴がN－81°－Eの方向に並んでいる。各柱間は1.6m～2.0mである。全長7.2m。直接的に建物との関係は指摘できないが西群建物群の北端に位置していることからみれば，建物群の北限を示す柵列かも知れない。柱穴の大きさは径20～60cm，深さ15～40cmと一定していない。SB－27と平行していることも注意する必要があろう。

(3) 第3号柵列（FIg.35）

SB－31の北西側，N－8～10グリットに検出した。4個の柱穴からなる。全長5.0mで，各柱穴間は1.5～2.0mである。方向をN－82°－Eにとる。掘立柱建物群とは直接の関連性はないと考えられるが，近接して存在するSB－31との関連で考えられなくもない。SB－31と方向が若干異なるが，この家の北を限る柵列とみることもできる。柱穴の大きさは径35～50cm，深さ40～50cmと一定していない。

(4) 第4号柵列（FIg.35）

SB－27の北側，L，M，N－13グリットに検出した。4個の柱穴よりなる。全長5.0mで各柱穴間は1.8mと一定している。方向をN－5°－Wにとる。掘立柱建物群とは直接の関連性はないと考えられるが，近接するSB－27との関連性が考えられなくもない。

以上，4列の柵列について説明したが，これらの柵列は1号柵列を除いて建物群との関連性は低い。しかし全体としてみた場合は，方向性は建物と一致しないが，建物間を区分するような配置を示していることに注意する必要があろう。

6．土壙と出土遺物

(1) 第1号土壙と出土遺物

第1号土壙（SK－01）（Fig.37）

O－26，27グリットにかけて検出した土壙である。SB－04と重複関係にあり，SB－04に切られている。土壙は検出面で不整長方形プランをなし，底面では円形プランをなす。長径2.60m。

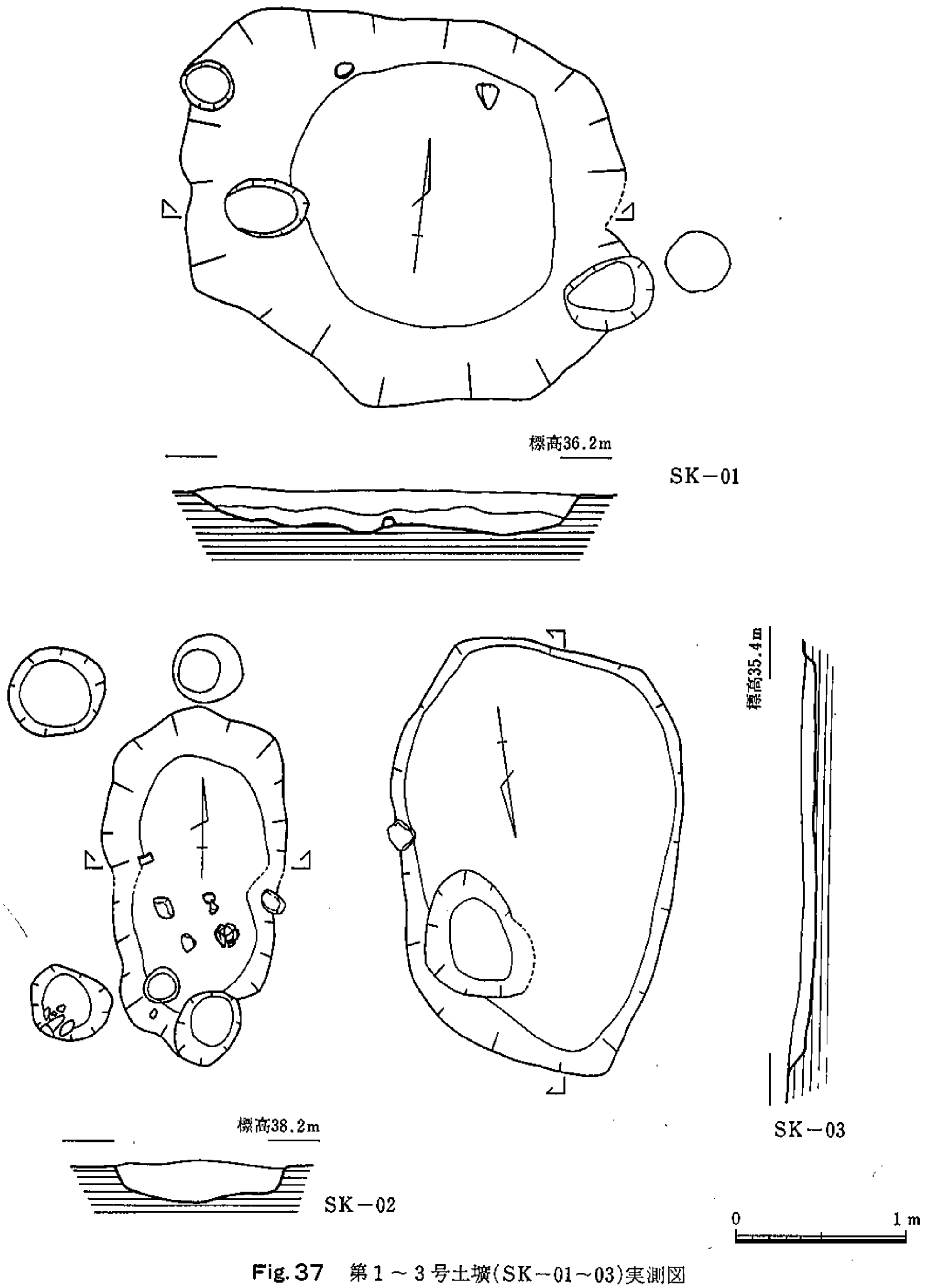


Fig. 37　第１～３号土壙(SK−01～03)実測図

短径2.28m，深さ26cmで断面形は皿状をなす。底は平坦である。土壙内より，須恵器，土師器，黒色土器，越州窯青磁器等が多数出土している。

出土遺物（Fig.38）

18点を図示した。1，6，9，12，15，17は須恵器である。1は坏身でほぼ完形である。蓋受けのたちあがりは低く内傾している。底部の⅔の範囲にヘラ削り調整が施され，体部から口縁部の内外面は横ナデ調整，内底部は多方向からのナデ調整である。底部にヘラ記号がある。胎土に多量の砂粒を含むが，焼成良好で堅緻である。口径11.4cm。6は坏身で，復原口径11.4cm，体部は丸味をもってたちあがり，口縁端部はやや尖り気味におさめる。内外面共に横ナデ調整である。9は坏の底部である。ヘラ切り後，端部がやや外に張り出す低い高台を貼りつけている。内底部は多方向からのナデ調整。胎土は精良であるが焼成が不良で軟質である。12は蓋である。口縁部の屈曲は短く，端部は丸くおさめる。内外面共に横ナデ調整を加えている。復原口径22.6cm。15は壷の口縁部である。頸部から外傾しながらたちあがり，口縁部は肥厚して段を形成する。内外面共に横ナデ調整である。胎土には砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。復原口径19.2cm。17は高坏脚部，脚端部に向ってラッパ状にひろがる。脚筒部にはしぼりの痕跡が顕著である。内外面共横ナデ調整を加えている。2～4，7，13，14，16，18は土師器である。2～4，7は坏である。2は底部は荒いヘラ切りで，体部は大きく外反しながら丸味をもってたちあがる，口縁端部は内側にわずかに肥厚する。体部から口縁部にかけては，内外面共に横ナデ調整で内底部は多方向からのナデ調整である。器面にはスリップをかけている。口径10.6cm，器高3.4cmをはかる。3は底部はヘラ切りの平底で，体部は外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部はやや尖り気味におさめる。体部から口縁部にかけての外面は横ナデ調整で内面はヘラ研磨調整である。復原口径11.5cm。4，7は底部ヘラ切りで，体部は丸味をもってたちあがるが，口縁部を欠く。体部の内外面は横ナデ調整である。13は椀と考えられる。体部は外傾し丸味をもってたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。体部外面は横ナデ調整，内面は横方向のヘラ研磨調整である。復原口径15.2cm。14，16，18は甕である。小型，大型の二種がある。14は復原口径12.3cm。口縁はゆるやかに外反し，胴部はあまりに張らない。口縁部は内外面共にナデ調整で，胴部内面に丁寧なヘラ削りがみられる。16は復原口径19.8cm。口縁部は大きく外反し，口縁端部はわずかに肥厚し丸くおさめる。胴部は頸部から大きく張る。口縁部の内外面は横ナデ調整，胴外面は縦方向の刷毛目調整，内面はヘラ削りである。18は復原口径26.1cm，口縁部はわずかに肥厚し，直線的に外反する。器面調整は16と同様であるが，内面のヘラ削りは丁寧で頸部で稜線をつくり出す。5，8，10，11は黒色土器である。いずれも内面が黒色でヘラ研磨されている。5，8は比較的高い貼り付け高台を有し，高台端は外方へ張り出す。8はヘラ切りの底部に板状圧痕がある。10，11は断面三角形の低い貼り付け高台をもつ。体部は外傾しながらたちあがり，端部はわずかに外反し丸くおさめられる。体部外面は

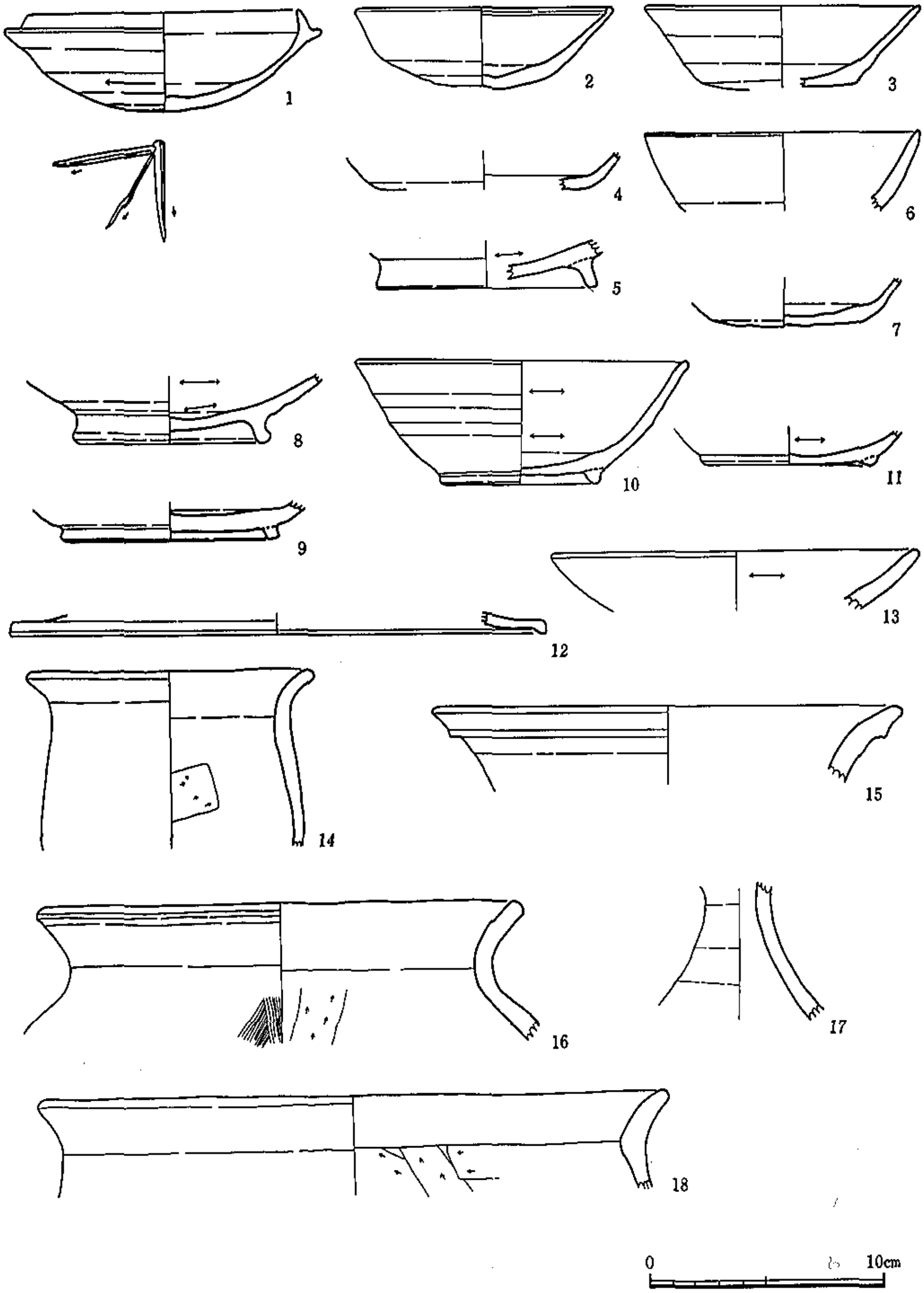


Fig. 38　SK－01出土遺物実測図

横ナデ調整。10は底部に板状圧痕がある。口径13.8cm，器高5.3cmをはかる。

(2) 第2号土壙と出土遺物

第2号土壙（SK－02）（Fig.37）

SK－01の西側に隣接したN・O－26グリットにわたって検出した。SB－04と重複関係にあるが，直接の切り合い関係にないので，その先後関係は不明である。土壙は長楕円形プランをなす。長径2.03m，短径1.06m，深さ25cmで，断面形は舟底状をなす。土壙に接して南北に相対して柱穴が存在するが，本土壙と直接関係するものか明らかにできなかった。土壙内は黒褐色の粘質土層によって埋まり，中より須恵器，土師器，黒色土器，越州窯青磁器，鉄滓等が多量に出土した。

出土遺物（Fig.39）

23点を図示した。1，14，16，17，19，20は須恵器である。1は蓋付の坏身。蓋受けのたちあがりは低く内傾している。底部は全面にわたって丁寧なヘラ削り調整が加えられている。口縁部，体部の内外面は横ナデ調整。底部にヘラ記号がある。復原口径11.0cm。14は坏の底部である。断面方形の高台を直に貼り付けている。内外面共横ナデ調整である。19は盤の底部と考えられる。貼り付け高台の端部は大きく外へ張り出している。内外面共に横ナデ調整で仕上げている。20は高い高台を直に貼り付けた底部で，体部は外傾しながら直線的にたちあがっている。壷等の底部とみられる。内外面共ナデ調整である。16，17は坏蓋である。16は口縁部の屈曲は短かく，ほとんど痕跡を残すのみである。体部と天井部の境には段があり，天井部は平坦でヘラ削り調整。天井部の中央に擬宝珠形のつまみがつけられている。体部，口縁部の内外面は横ナデ調整。天井部内側は多方向からのナデ調整である。復原口径13.9cm，器高2.0cm。17は口縁部の屈曲は比較的高く，屈曲部は凹線状にナデられている。内外面は横ナデ調整で仕上げる。復原口径15.0cm。2～12，15，18，21，23は土師器である。2～10は平底ないしは丸底の坏である。2は体部がやや丸味をもってたちあがり，端部を丸くおさめる。内外面共横ナデ調整を加えている。復原口径13.3cm。3はヘラ切りの底部であるが，体部との境に段を有する。体部は丸味をもってたちあがり口縁部でやや外反する。体部～口縁部は横ナデ調整である。4～7はヘラ切りの底部から体部が外傾しながらたちあがり，口縁部でわずかに外反する。口縁端部はわずかに肥厚し丸くおさめる。4，5，7の底部には板状圧痕が認められる。体部から口縁部の内外面は横ナデ調整で，内底部は多方向からのナデ調整である。4は二次的な加熱によって変色し，一部器面の剝離がみられる。底部にススが付着している。3は口径11.9cm，器高3.8cm。4は口径11.4cm，器高4.1cm。5は口径12.6cm。器高3.3cm。6は復原口径12.9cm。7は口径12.5cm，器高3.9cmをはかる。8は復原口径11.9cm。口縁部で大きく外反する。9は底部

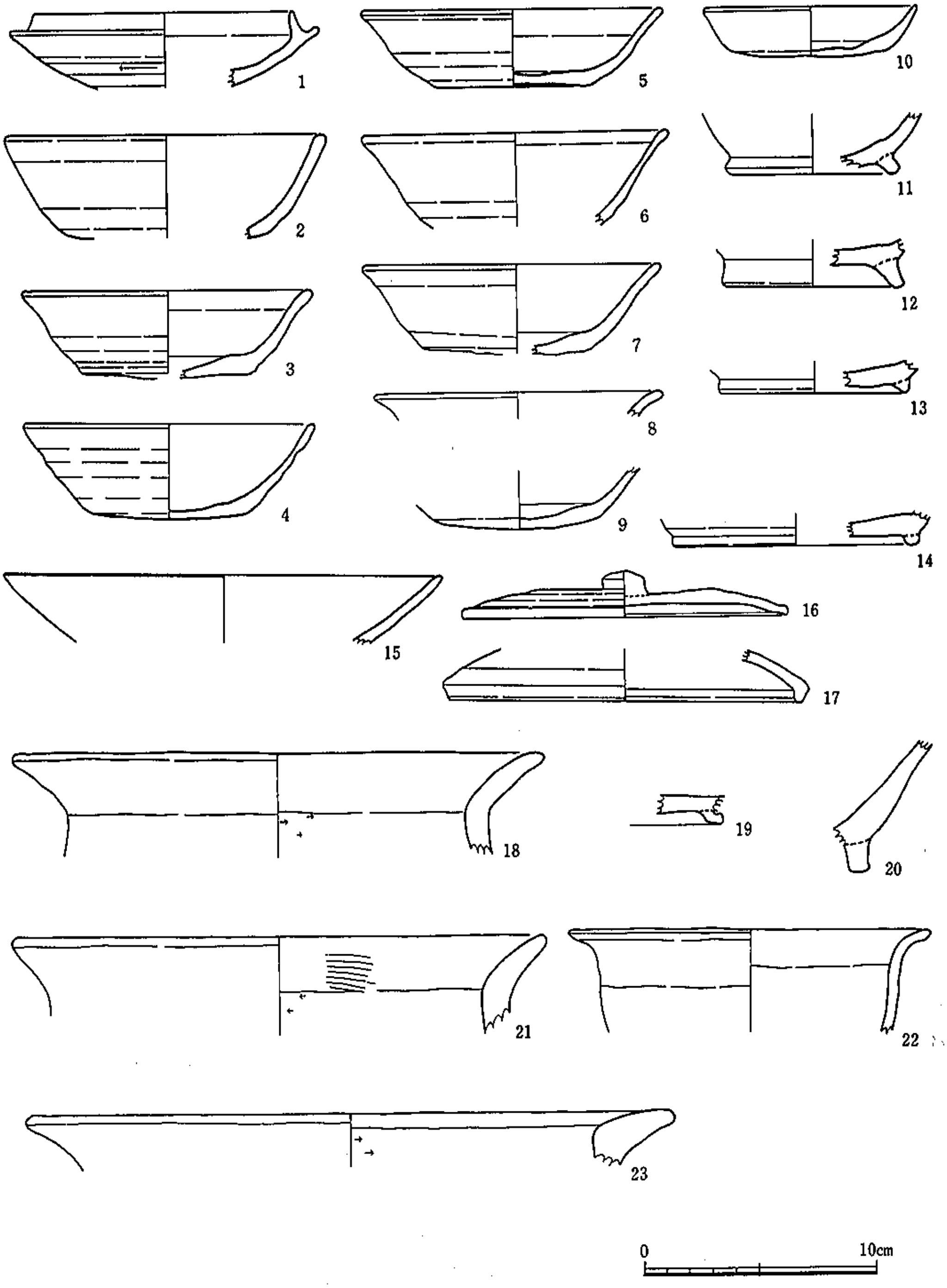


Fig. 39　SK－02･03出土遺物実測図

がヘラ切りで丸くなり，体部は外傾しながら丸味をもってたちあがる。器面が荒れているので調整痕は不明。10は小型の坏である。底部はヘラ切りで，体部は丸味をもってたちあがる。口縁端部は尖り気味におさめる。体部から口縁部の内外面は横ナデ調整。口径9.0cm，器高2.1cm。11，12は貼り付け高台をもつ坏底部である。高台は外側に張り出すもので，12は11に比較して高い。体部内外面は横ナデ調整。15は椀。復原口径18.4cm。器面が荒れていて調整は不明であるが，ヘラ磨きとみられる。18，21，23は甕である。復原口径は18が22.2cm，21が22.6cm，23が26.4cmである。いずれも口縁部が大きく外反するもので胴部はあまり張らない。23は口縁部が略三角形をなす。やや器面が荒れているが刷毛目調整痕が外面に観察できる。胴部内面はヘラ削り調整である。13,22は黒色土器で内面は黒色を呈しヘラ研磨で調整されている。13は坏底部で断面三角形の貼り付け高台をもつ。22は小型の甕で口縁部は大きく外反し，頸部は横ナデによって凹みがめぐる。復原口径15.2cm。その他，図示できないが，土師器の耳皿の破片1点がある。

(3) 第3号土壙と出土遺物

第3号土壙（SK－03）（Fig.37）

SB－01の南側7m，第1号土器埋納遺構の西側約1mに位留し，R，S－24，S－25グリットにわたって検出した土壙である。土壙は楕円形プランをなす。長径2.47m，短径1.72m，深さ10cmで，断面形は皿状をなしている。土壙内に80cm×60cm，深さ20～30cmの柱穴が掘り込まれている以外，他の遺構との重複関係はみられない。埋土は黒褐色の粘質土で須恵器，土師器片若干が出土している。

出土遺物

須恵器，土師器があるが，いずれも細片で器形の判明するものがなく，図示することができない。

(4) 第4号土壙と出土遺物

第4号土壙（SK－04）（Fig.40）

SB－25の北側，SB－24，第2号柵列の西側にあたるK－11，12，L－10～12グリットにわたって検出した。SB－25と重複関係にあり，SB－25の柱穴に直接切られており，本土壙がSB－25に先行することがわかる。土壙は不整な長楕円形プランをなす。長径6.37m，短径2.50m，深さ40cm，断面形は皿状をなす。土壙の壁と直接切り合う状態で柱穴状の穴が存在するが，本土壙とは直接の関係はないものと思われる。土壙の埋土はレンズ状をなしている。土壙の堆積土は図示したように，最下層は壁際に堆積した暗黄褐色土層で①，粗砂を含む粘質の弱

い土層で，地山の土層に近い。②層は少し黄色がかった黒灰褐色土層。③層は木炭を多く含んだ黒灰褐色土層。④層は少し赤味かかった黒灰褐色土層となっていて，北側（丘陵側）から土層堆積が進んだことがわかる。埋土中からは多量の須恵器，土師器，鉄滓，焼石等が出土している。

出土遺物（Fig.41～43）

出土遺物には須恵器，土師器，鉄滓等がある。45点を図示した。器種は坏身，坏蓋，皿，高坏，鉢，甕がある。

１～８は須恵器の坏蓋である。形態，口縁部の変化，口径から６種に分類可能である。

Ⅰ類（１，２）口縁部は短く屈曲し，端部は丸くおさめる。口縁部の内外に沈線一条をめぐらしている。体部と天井部の境は明瞭である。天井部は平坦で，ヘラ削り調整を加えている。他はナデ調整である。口径17.2～17.4cm。天井部に擬宝珠形のつまみをつける。１は焼成不良で，一部土師質をなしている。

Ⅱ類（３）口径14.2cmで小さくなる。口縁部は短く屈曲し端部は丸くおさめる。口縁の内外に沈線一条をめぐらす。体部はやや丸味をもってたちあがり，

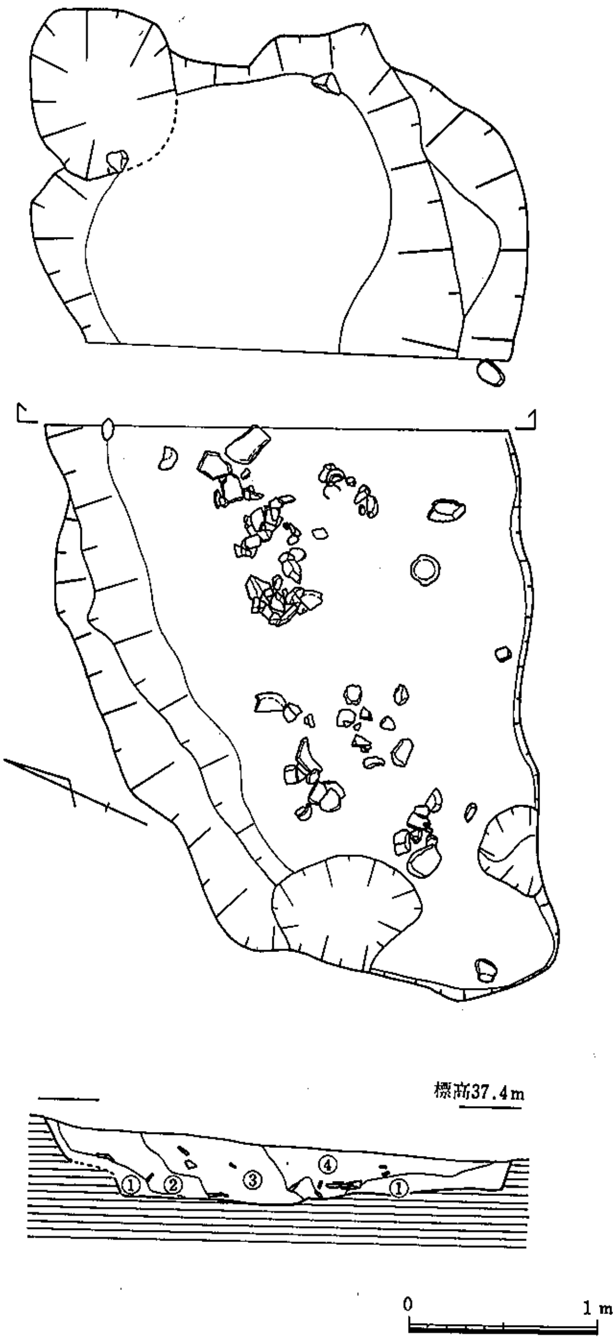


Fig. 40　第４号土壙（SK－04）実測図

天井部は平坦である。擬宝珠形のつまみを貼り付ける。天井部はヘラ削り調整で，部分的に刷毛目状の擦痕がつけられている。体部～口縁部の内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。焼成は良好で堅緻である。

III類（4）は口径12.2cmとさらに小さくなる。口縁部の屈曲は短く，ほとんど痕跡を残すのみである。体部は丸味をもってたちあがり器高が高くなる。天井部も丸味をもっている。天井部はヘラ削り調整，他は横ナデ調整である。焼成は良好で堅緻である。

IV類（5）全体に丸味がなく，平坦になる器形で，口縁部の屈曲は短い。体部と天井部の境は明瞭であるが，天井部にヘラ削り調整を加えている。天井部中央に宝珠形のつまみをつける。体部から口縁部の内外面は横ナデ調整。復原口径14.0cm。

V類（6，7）口縁部の屈曲は短く，痕跡を残すのみである。体部は丸味をもってたちあがり，天井部もゆるやかな丸味をもつ。天井部はヘラ削り調整であるが，丁寧でない。口縁部から体部の内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。天井部に擬宝珠形のつまみをつける。6は完形品である。口径14.4～14.5cmである。

VI類（8）復原口径17.2cm　器高が低く全体に扁平である。口縁部の屈曲は短い。体部と天井部の境は明瞭で，天井部はヘラ削り調整である。天井部に扁平なボタン状のつまみをつける。焼成が不良で軟質である。

9～25，35～38は椀および坏身である。9～15，17，19，21，23～25，37は土師器で，16，18，20，22，35，36，38は須恵器である。器形，高台の有無で5種に大別できる。

I類（9，11～13，21）底部と体部の境が稜線をもって明瞭で，体部は丸味をもってたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。底部および体部下半に丁寧なヘラ削り調整を加える。体部上半から口縁部の外面はヘラ研磨および横ナデ調整で，内面はヘラ研磨調整である。全体に丁寧なつくりである。9は口径17.7cm，器高4.0cm。11は口径15.8cm，器高3.7cm。12は口径15.1cm，器高3.6cm。13は口径13.8cm，器高3.3cm。21は口径16.7cm，器高は3.8cm。

II類（10，15）底部と体部の境が不明瞭。体部はI類同様に丸味をもってたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。底部および体部下半は丁寧なヘラ削り調整，他は横方向のヘラ研磨を加えた土器である。10は口径15.8cm，器高3.9cm。15は口径13.8cm，器高3.5cm。

III類（14，23，25）底部と体部の境が明瞭で稜線をもってわかれる。底部および体部下半は丁寧なヘラ削り調整である。体部はやや外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部はやや尖り気味におさめている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整である。14は復原口径13.8cm，器高4.0cm。23は復原口径12.6cm，器高4.0cm。25は復原口径10.2cm，器高3.6cmをはかる。口径に差がある。

IV類（6～20，22）底部と体部の境は明瞭であるが，底部のヘラ削り調整が丁寧でなく，完全な平底をなさず，底部中央部が底部と体部の境より下方にあるものである。体部はIII類同様

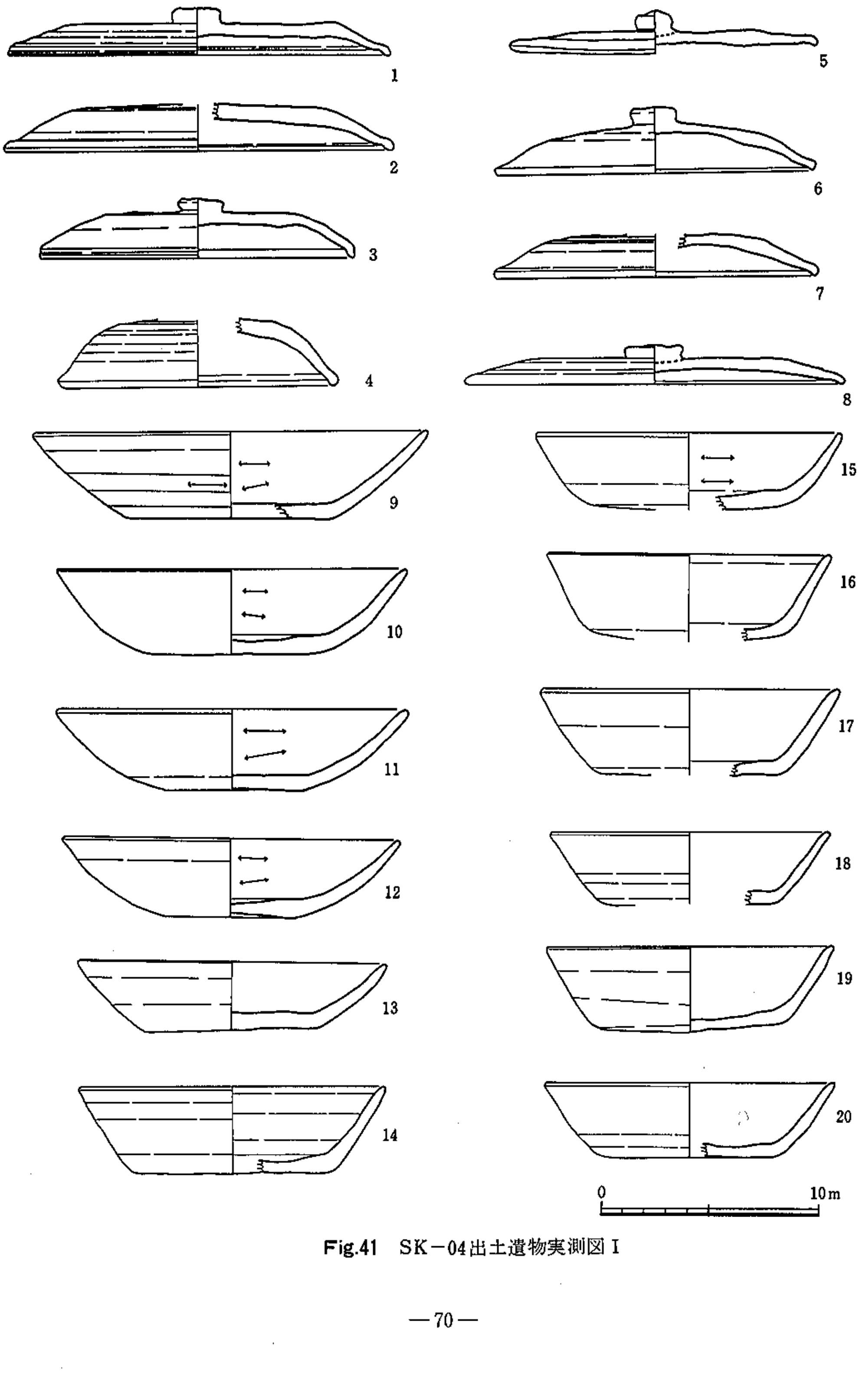


Fig.41　SK－04出土遺物実測図Ⅰ

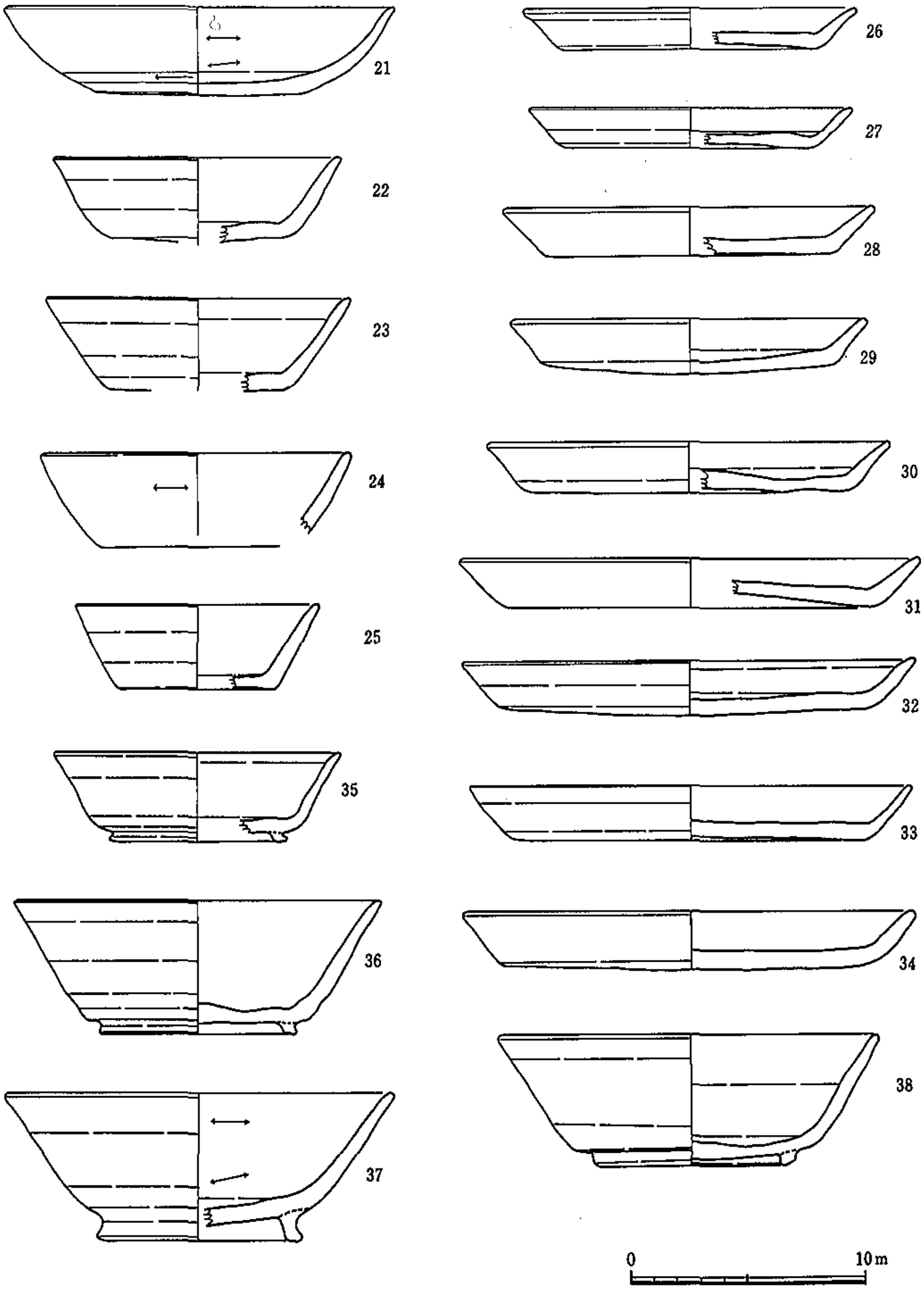


Fig.42　SK－04出土遺物実測図 II

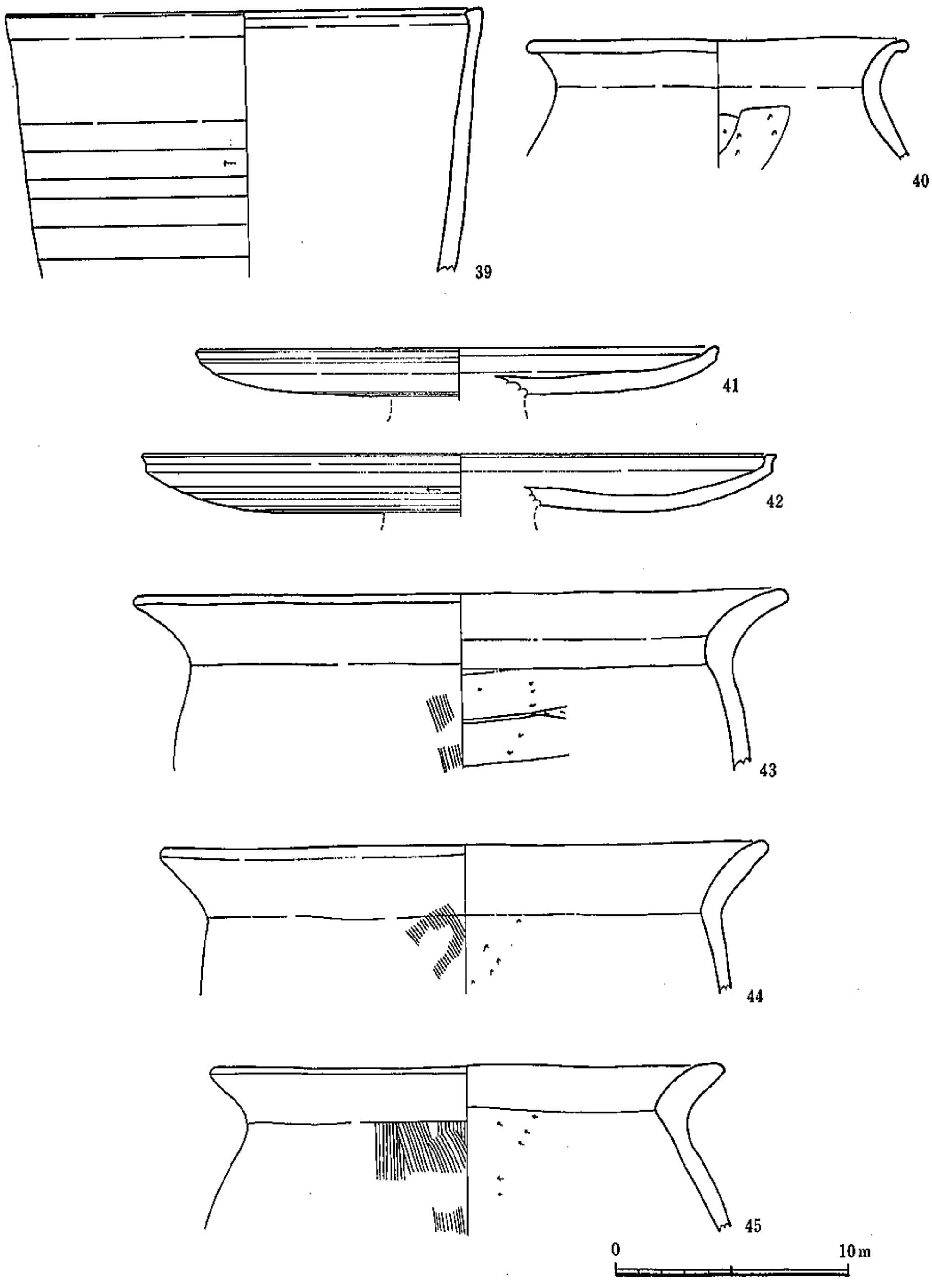


Fig.43　SK－04出土遺物実測図Ⅲ

にやや外傾しながら直線的にのび，口縁端部はやや尖り気味におさめる。16は復原口径12.7cm，器高3.9cm。17は復原口径13.3cm，器高3.8cm。18は復原口径12.5cm，器高3.3cm。19は口径13.0cm，器高4.0cm。20は復原口径13.0cm，器高3.4cm。22は復原口径11.9cm，器高3.6cmをはかる。

V類（35～38）貼り付け高台を一括した。器形，高台の形状は様々である。35は小型品で，復原口径12.1cm，器高3.8cm。高台は低く端部は外へ張り出す。体部は丸味をもってたちあがり，口縁縁部は尖り気味におさめる。内底部は多方向からのナデ調整，他は内外面共横ナデ調整である。36は大型品で復原口径16.0cm，器高5.6cm。高台は小さく，底部内側に貼り付けられる。体部は外傾しながら直線的にのびる。底部には板状圧痕がみられる。体部，口縁部の内外面は横ナデ調整。内底部は多方面からのナデ調整である。焼成があまく軟質である。37はやや高い高台を底部端に貼り付ける。高台の端部は外へ張り出す。体部は直線的にのび，口縁端部はわずかに外反し，丸くおさめる。内面はヘラ磨きで，他は横ナデ調整である。復原口径16.5cm，器高6.3cm。38は復原口径15.4cm，器高5.7cm。高台は底部のやや内側に貼り付けられ，端部は外へ張り出す。体部は外傾しながら直線的にのび，口縁端部は尖り気味におさめる。内底部は多方面からのナデ調整で，他は横ナデ調整である。

26～34は皿および盤である。26，27，30は須恵器で，他は土師器である。器形的にはほとんど差はないが，口径は様々である。26は粗いヘラ切りの底部で，口縁部がわずかに外反する。27は口縁部は直口する。26は復原口径14.0cm，器高1.8cm。27は復原口径13.6cm，器高1.7cm。30は復原口径16.9cm，器高2.2cm。焼成があまく，軟質である。28，29，31～33の土師器は底部が丁寧なヘラ削り調整で，体部，口縁部の外面は横ナデ調整，内面はヘラ磨き調整である。28は復原口径15.4cm，器高2.1cm。29は復原口径14.8cm，器高2.4cm。31は復原口径19.3cm，器高2.1cm。32は口径19.4cm，器高2.5cm。33は復原口径18.9cm，器高2.4cm。34は口径19.3cm，器高2.5cmをはかる。

39は鉢である。須恵器であるが，焼成があまく軟質である。体部は直線的にたちあがり口縁部内面がわずかに肥厚し，口縁端部は平坦で，凹線一条をめぐらしている。体部下半は丁寧なヘラ削り調整で，他は横ナデ調整である。復原口径20.2cmである。

41，42は須恵器の高坏坏部である。両者とも類似した器形をなす。口縁部はわずかにたちあがり，口唇部がわずかに外に張り出す。口縁部外面は凹線状をなす。体部は丸味をもっていて，底部は平坦である。外底部はヘラ削り調整。体部，口縁部の内外面は横ナデ調整。内底部は多方向から板状工具によってナデ調整が加えられている。脚部は坏部との接合部でとれている。41は復原口径20.1cm，42は26.8cmである。

40，43～45は土師器の甕である。いずれも口縁部がくの字に外反するものである。40は小型品で口縁端部外面が肥厚する。頸部から胴部にかけて大きく張り出している。43～45は口縁部がわずかに肥厚する。甕の整形法はいずれも口縁部の内外面が横ナデ調整。胴部外面が縦位の

刷毛目調整，内面は粗いヘラ削り調整である。

(5)　第５号土壙と出土遺物

第５号土壙（SK－05）（Fig.44）

調査区の東半部，東群建物に近いＱ－27，28，Ｒ－27，28グリットにかけて検出した土壙である。建物や他の遺構と重複することなく，単独で存在する。SB－01の南側，SK－14の東側に位置する。土壙は長径6.15m，短径3.75mの不整楕円形プランをなす。深さ38～23cmで，北側に一段深い掘り込みが存在する。断面形は皿状をなす。数多くの柱穴と切り合い関係にあるが，柱穴は遺構としてのまとまりはない。柱穴には本土壙より先行するものと後出のものがある。土壙の埋土は３層に分かれ，上より第１層，粗砂を若干含み粒子の小さい黒灰褐色粘質土層，第２層，第１層より粗砂を多く含む黄灰褐色粘質土層，第３層，木炭を含む暗黄灰褐色粘質土層となっている。土壙内より多量の須恵器，土師器，鉄滓等が出土している。

出土遺物（Fig.45）

出土遺物には須恵器，土師器，鉄滓等がある。９点を図示した。器種として蓋付坏身，蓋，皿，盤，甕等がある。

坏身（１）須恵器。蓋受けのたちあがりは低く内傾している。受部は広がらない。底部は丸味がなく平坦になる。底部の約1/2の範囲にヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整，内底部は多方向からのナデ調整が加えられている。焼成は良好で堅緻である。底部に灰が付着している。

蓋（２，３）共に須恵器である。口縁部の屈曲は短く，わずかに下方にのびる程度で，口縁端部は丸くおさめている。２は体部と天井部の境は明瞭で，天井部にヘラ削り調整を加えている。つまみを有しているが欠損する。３は体部と天井部の境が不明瞭で全体に扁平である。天井部はヘラ削り調整を加えている。両者とも体部，口縁部の内外面は横ナデ調整，天井部内面は多方面からのナデ調整である。２は口径12.1cm。３は復原口径17.0cmである。３は焼成があまく軟質である。

皿，盤（４，６）共に須恵器であるが，６は焼成が不良で軟質である。器形は短い口線部が外傾しながら直線にたちあがり，口縁端部は尖り気味におさめている。４は底部がヘラ切りでやや丸味をもつ。６は丁寧なヘラ削り調整を加えている。体部，口縁部の内外面は横ナデ調整。４は口径13.8cm，器高2.1cm。６は口径19.3cm，器高2.4cmである。

壷（５）須恵器。短い口縁部は頸部からゆるやかに外傾しながらたちあがり，口縁端部で外反する。口縁端部は外側に肥厚させ，一条の沈線をめぐらしている。体部は肩から張り出し，球形をなすと考えられる。口縁部から頸部にかけては横ナデ調整。体部外面はカキ目調整。体

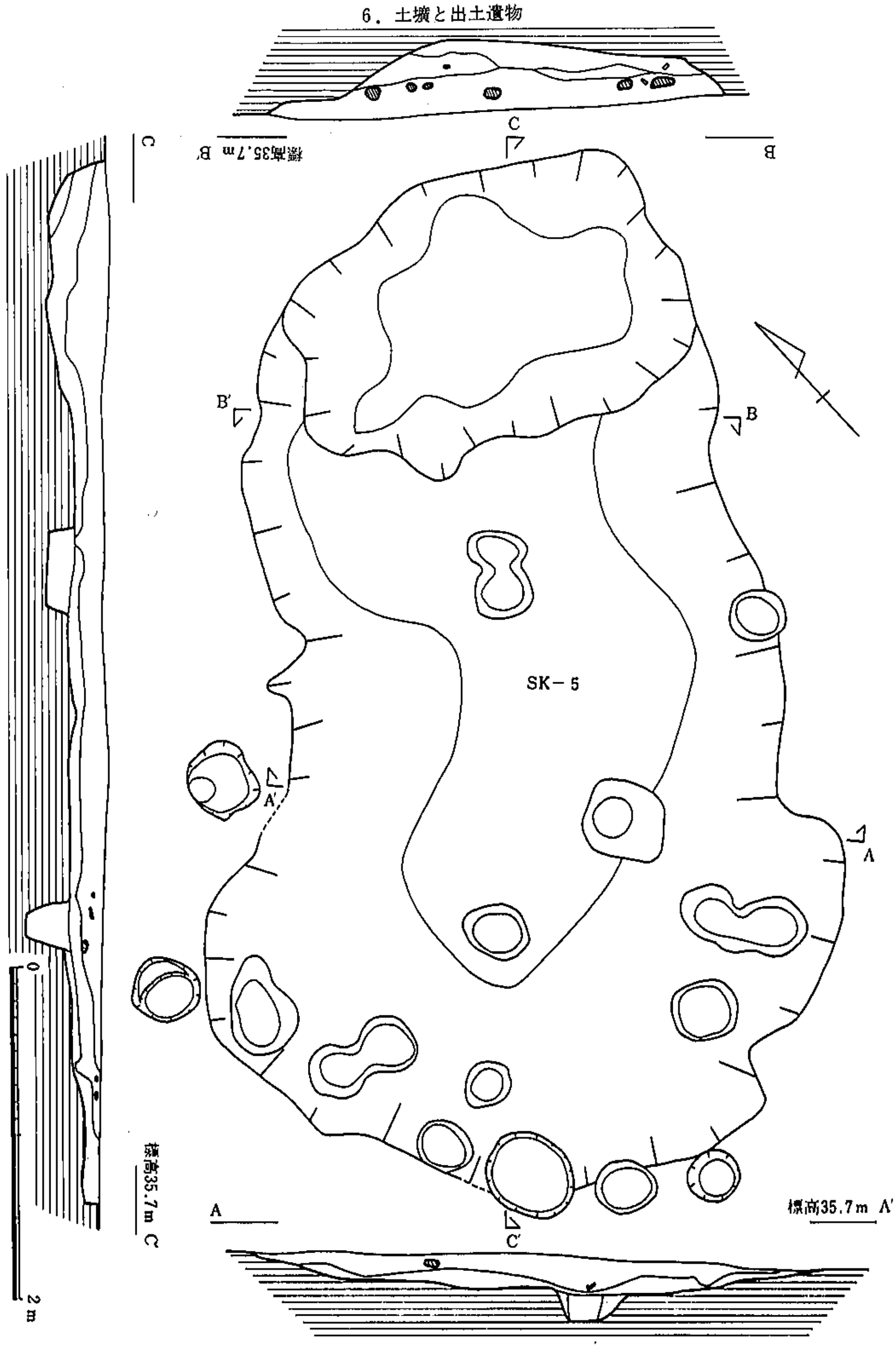


Fig.44　第5号土壙(SK－05)実測図

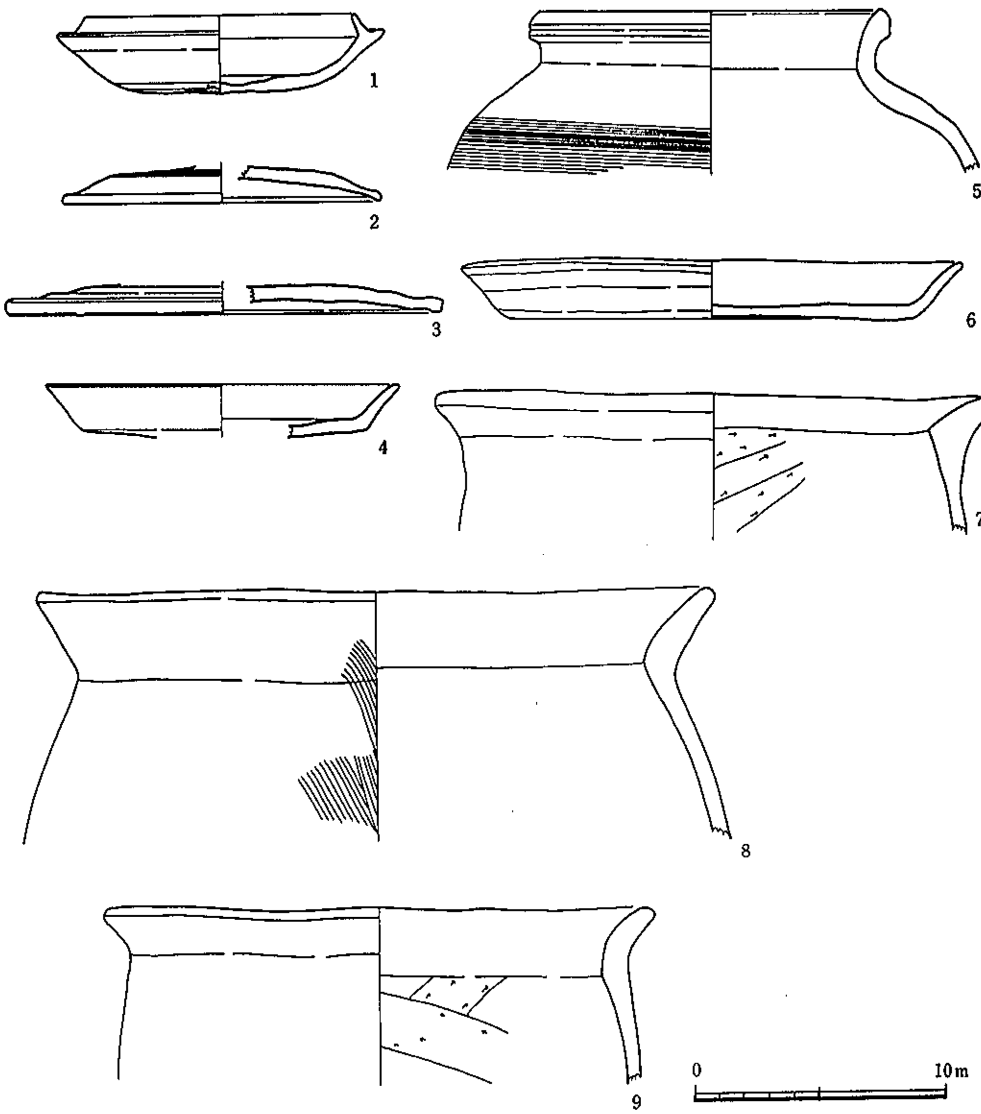


Fig.45　SK－05出土遺物実測図

部内面は同心円のタタキである。焼成は良好で堅緻である。口径13.4cm。

甕（7～9）いずれも土師器である。7は口縁部が短く，くの字に屈曲し，口縁部は肥厚している。口縁部は内外面共横ナデ調整であるが，内面は横方向の刷毛目調整もみられる。体部外面は縦方向の刷毛目調整。内面は粗いヘラ削りで，頸部に稜線をつくり出す。8は口縁部がやや長く，大きく外反する。口縁端部は丸くおさめている。器面の保存状態が悪いが，外面は縦位の刷毛目調整，体部内面はヘラ削りで，頸部に稜線をつくり出す。9は，口縁部がゆるやか

に外反し，口縁端部は丸くおさめる。体部はあまり張らない。口縁部の内外面は横ナデ調整，体部外面は細かい縦の刷毛目調整。内面は丁寧なヘラ削り調整で器壁は薄い。内面にススが付着している。復原口径は7が22.4cm，8が27.0cm，9が21.9cmをはかる。

(6) 第6号土壙と出土遺物

第6号土壙（SK－06）（Fig.46）

調査区西半部，第3群掘立柱建物中に存在する土壙で，M－14，N－14，15，O－14グリットにかけて検出した。第1号柵列と重複関係にあり，第1号柵列に切られている。SB－22，23の南側，SB－7，11，13，32の北側に位置し，いずれかの掘立柱建物と併存していたと考えられる。長径5.1m，短径4.4mの不整楕円形プランをなす。壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。深さ25～30cmをはかる。土壙のほぼ中央部に長径85cm，短径43cm，深さ25cmの長方形プランをなす土壙が掘り込まれている。埋土は黒褐色粘質土で埋まる。中央部の土壙等の存在から何らかの作業場的な使用用途が考えられるが，確証にとぼしい。この土壙を囲むような建物の存在はない。埋土中より須恵器，土師器，スラッグ等の遺物が出土している。

出土遺物（Fig.47）

15点を図示した。14が土師器で他はすべて須恵器である。器種として蓋，坏，皿，高坏，甕等がある。

蓋（1～7）　7個体以上がある。器形からIII類に分類が可能で，さらに口径の大小によって細分が可能である。

I類（1，2）口縁部の屈曲は短く，端部は断面三角形をなす。体部と天井部の境はやや明瞭である。天井部は平坦で，ヘラ切りのまま放置されている。天井部の中央に擬宝珠形のつまみを貼り付けている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。1には一部刷毛状の工具でヘラ記号状の線が描かれているが，ヘラ記号であるか否かは断定できない。1は口径15.3cm，器高2.3cm。2は復原口径17.2cmである。

II類（3～6）I類に比較して扁平になる。口縁部の屈曲は短く，端部は丸くおさめている。体部と天井部の境は不明瞭である。天井部はヘラ切り後，やや丁寧なヘラ削り調整を加えている。天井部中央には扁平なボタン状のつまみをつける。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整，天井部内側は多方向からのナデ調整が加えられている。4の天井部には板状圧痕がついている。口径の大小から，3，4と5，6に細分できる。3は復原口径16.6cm。4は復原口径16.3cm，器高2.3cm。5は復原口径14.4cm，6は復原口径12.6cmをはかる。

III類（7）坏蓋とは考えがたく，壺等の蓋と考えられる。口縁部はわずかに屈曲し下方に下

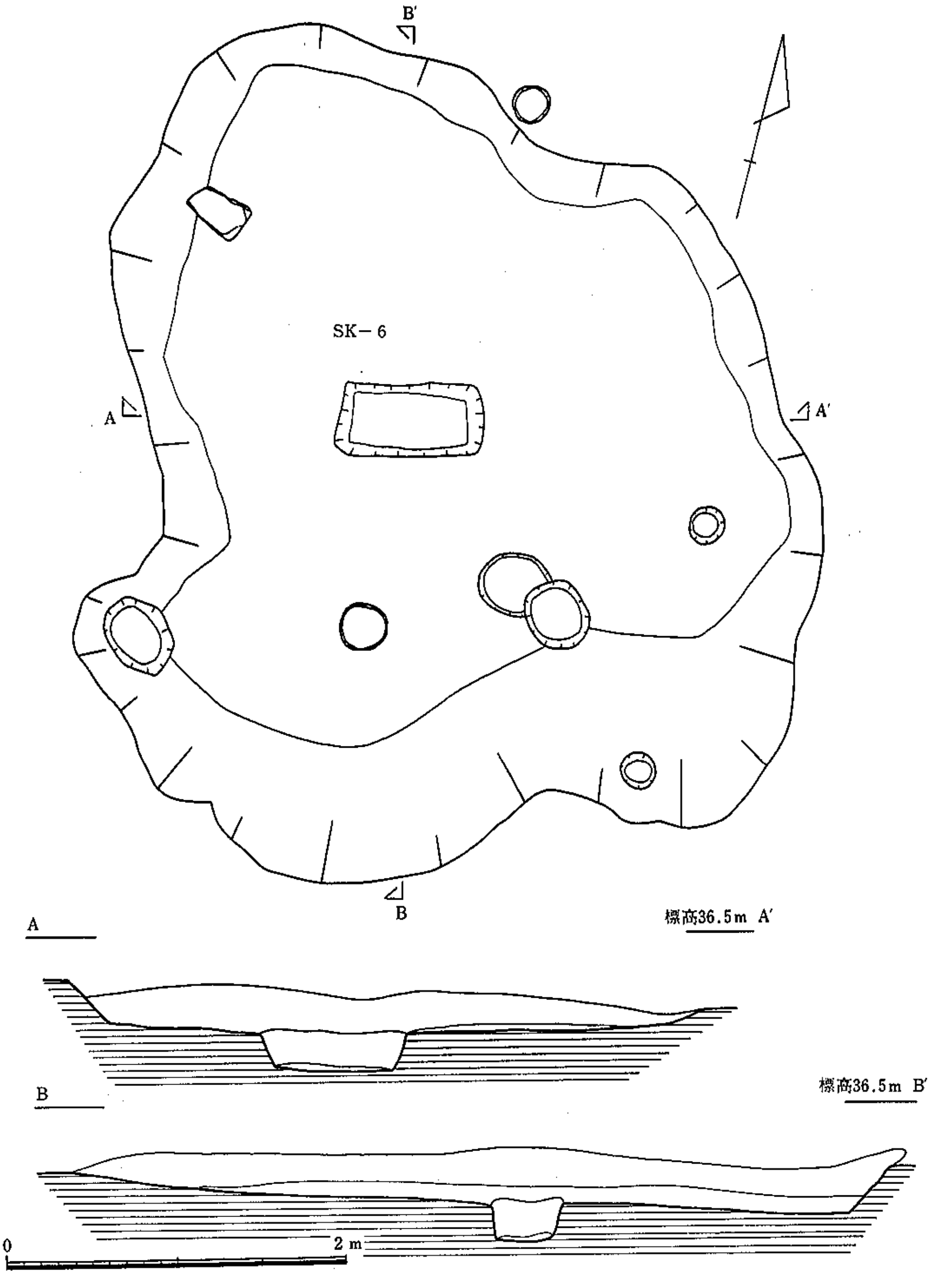


Fig.46　第６号土壙（SK－06）実測図

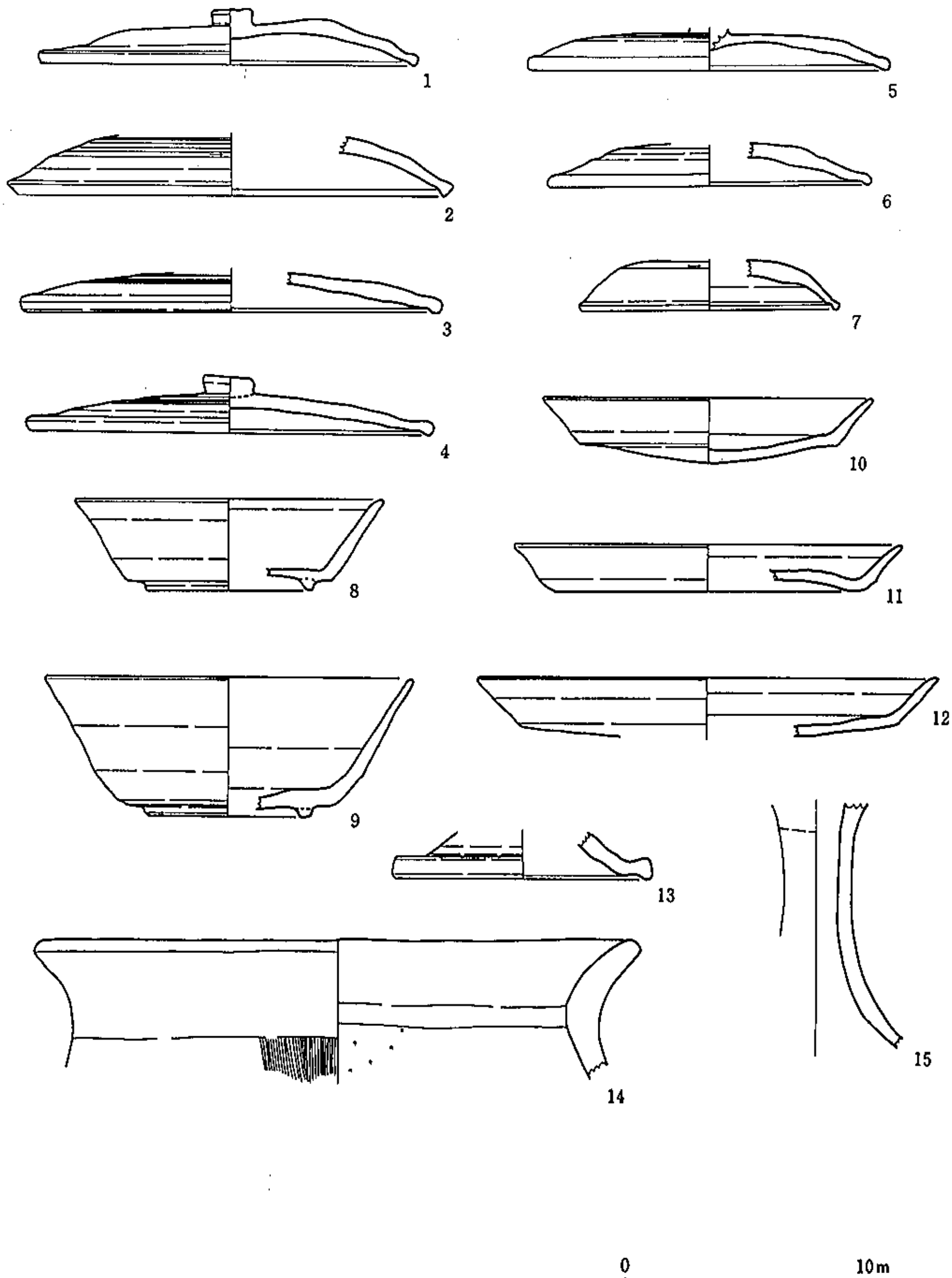


Fig.47　SK－06出土遺物実測図

る。口縁部外側に一条の沈線をめぐらす。体部は丸味をもってたちあがり，天井部は平坦である。天井部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内側は多方向からのナデ調整を施している。焼成は良好で堅緻である。

坏（8，9）2個体以上がある。図示したのは高台付の坏である。8は小型品で，底部の内側に断面逆台形の高台を貼り付け，体部は外傾しながらたちあがり，口縁部がやや外反し，端部は尖り気味におさめる。全面横ナデ調整である。焼成は良好で堅緻である。復原口径14.4cm，器高3.7cmをはかる。3はやや大型である。高台は断面方形で底部の内側に貼り付けられる。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。内外面共横ナデ調整。内面にススが付着する。焼成は不良で軟質である。復原口径14.8cm，器高5.6cmをはかる。

皿（10～12）口径に差がある。底部はヘラ切り後やや丁寧なヘラ削り調整を加える。10，12は底部が丸底状に下方にさがる。11はあげ底状をなす。体部は外傾しながら直線的にのび，10，11は口縁部がやや外反する。口縁端部は尖り気味におさめている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整で，内底部は多方向からのナデ調整である。10は復原口径13.2cm，器高2.6cm。11は復原口径15.6cm，器高1.9cm。12は復原口径18.4cm，器高2.4cmをはかる。

高坏（13，15）いずれも脚部破片である。13は脚端部で，ラッパ状に据広がりになり端部近くで段をもって横に張りだし，さらに屈曲して端部が下方にのびる。端部は丸くおさめる。内外面共に横ナデ調整である。復原脚端径は10.8cm。15は脚筒部で，下方でラッパ状にひらく。しぼりの痕跡がある。外面は器面が荒れていて調整不明，内面は横ナデ調整である。焼成が不良で軟質である。

甕（14）口縁部がくの字に外反し，端部は丸くおさめる。口縁部の内外面は横ナデ調整，胴部外面は縦方向の細かい刷毛目調整。内面は荒いヘラ削り。頸部の稜線は不明瞭である。復原口径24.7cmをはかる。

(7)　第7号土壙と出土遺物

第7号土壙（SK－07）（Fig.48）

調査区の東半部，第2群掘立柱建物群中に存在する。O－23，24グリットにわたって検出した。SB－10と重複関係にあるが，直接の切り合い関係がないので，その先後関係は明らかでない。土壙は長径2.6m，短径0.8m，深さ10～15cm。平面プランは不整楕円形をなす。二つの楕円形プランの土壙が重なりあったようにもみれるが，平面的な観察では確認することはできなかった。埋土は黒褐色粘質土で，埋土中より須恵器，土師器の小片が出土している。

出土遺物

須恵器，土師器が出土しているが，いずれも小片で図示することはできない。

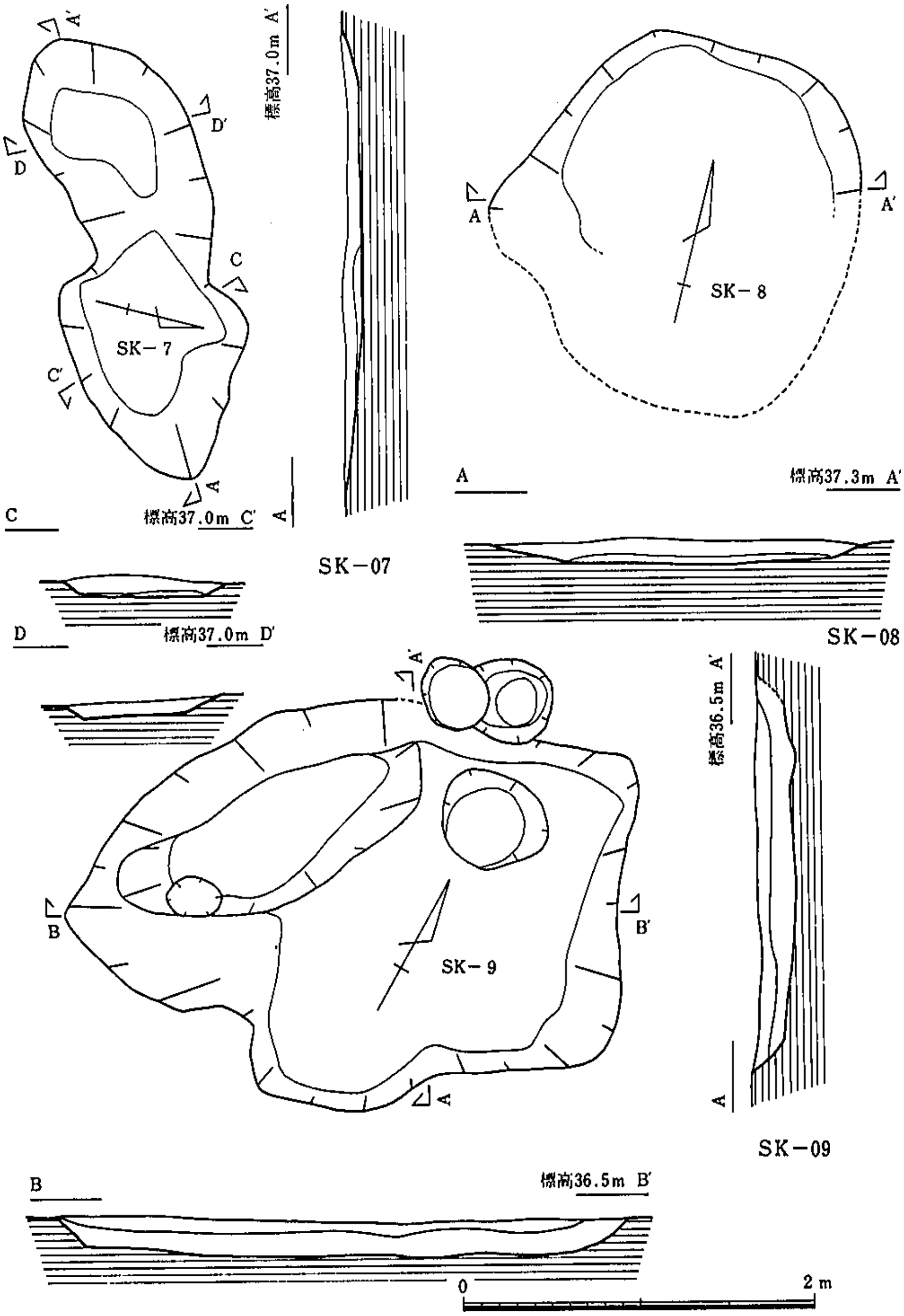


Fig.48　第7～9号土壙(SK－07～09)実測図

(8)　第8号土壙と出土遺物

第8号土壙（SK－08）（Fig.48）

調査区東端部に位置する。SB－14の東側，N－30，31グリットに検出した。第2号溝(SD－02)と重複関係にあり，SD－02の埋土中に掘り込まれている。明らかにSD－02より後出するものである。土壙は一部確認できなかった部分があるが，長径約2.2m，短径2.1mの不整円形プランをなし，深さ約15cmで断面形は皿状をなす。埋土は黒灰褐色粘質土で，埋土中より，須恵器，土師器，黒色土器，越州窯青磁等多量の遺物が出土している。

出土遺物（Fig.49）

9点を図示した。器種として坏，蓋，高坏，壷(？)，甕がある。2が黒色土器，3が土師器で他は須恵器である。

坏（1～4）4個体以上がある。いずれも貼り付け高台を有する坏である。底部破片のみで，全形を知ることはできない。1は断面方形のやや幅広い高台を直に貼り付けている。体部内外面は横ナデ調整。2は幅がせまくやや高い高台を外側に張るように貼り付ける。器面が荒れていて調整は明らかにできない。3は断面三角形の低い高台を直につけている。内外面は横ナデ調整。4は器形に対し小さく低い高台を貼り付けている。高台の端部は尖り気味である。内外面共に横ナデ調整である。

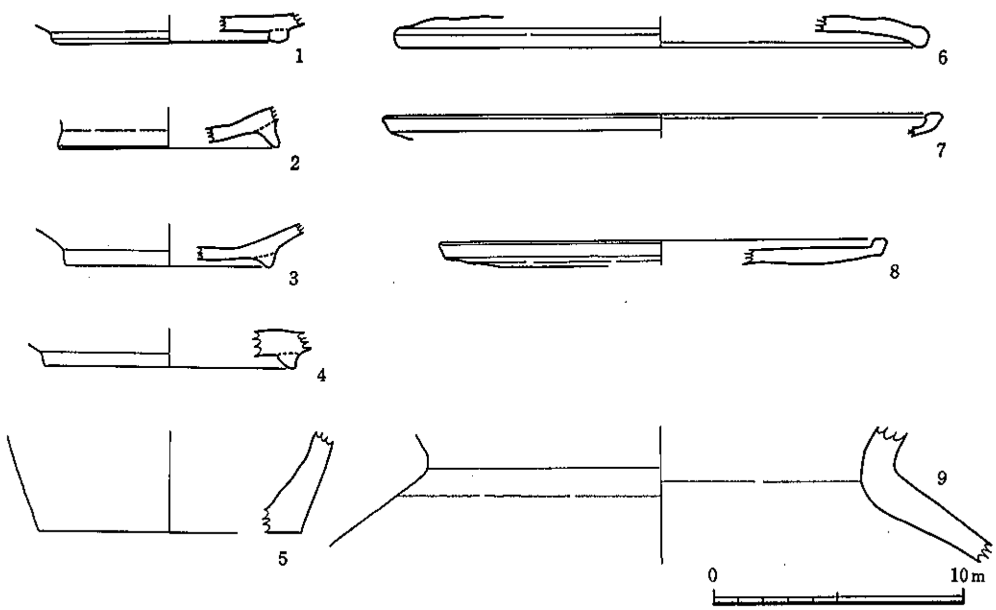


Fig.49　SK－08出土遺物実測図

蓋（6）口縁部の屈曲は短く，痕跡を残すのみである。口縁端部は丸くおさめている。全体に扁平で，体部と天井部の境は不明瞭である。天井部はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加えている。体部から口縁部にかけては横ナデ調整である。復原口径20.6cmである。

高坏（7，8）高坏坏部破片2点がある。口縁部の屈曲は高くない。口縁部外側には凹線一条をめぐらす。口縁端部は丸味をもっているが平坦である。底部はヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整である。復原口径は7が21.4cm，8が17.4cmをはかる。高坏坏部ではなく蓋の可能性も強い。

壺（5）底部破片である。体部は円筒状をなし，底部は平底である。体部外面は平行タタキ目を施し，その上をナデ調整している。底部近くに自然釉がみられる。内面は削り状の横ナデ調整で凹凸が著しい。焼成は良好で堅緻である。

甕（9）頸部付近の破片である。頸部は外傾気味にたちあがり，口縁部は外反するものと思われる。肩部は強く張る。頸部から口縁部にかけては横ナデ調整。体部外面は平行タタキ，内面は同心円文タタキで成形される。内外面に自然釉が付着している。焼成は良好で堅緻である。

(9) 第9号土壙と出土遺物

第9号土壙（SK－09）（Fig.48）

調査区の東半部，第2群掘立柱建物群中に位置する。L－28，29，M－28，29グリットに検出した土壙である。SB－05と重複関係にあり，SB－05の柱穴に切られているので，SB－05より先行する遺構であることは明確である。長径3.1m，短径2.3m，深さ20cmの，不整形プランの土壙で，断面形は皿状をなす。土壙の埋土は上下二層に分離できる。上層は黒色粘質土層で厚さ8cm前後，下層は黒色粘質土層と黄褐色粘質土層の混合層で厚さ14cm前後である。土壙の底面は平坦であるが，土壙の南側はさらに1.85m×0.65m，深さ20cmの土壙が掘り込まれていて一段深くなる。また，本土壙より先行する柱穴も存在するが，建物等の遺構としてのまとまりはない。埋土中より須恵器，土師器，越州窯青磁器，鉄滓等の遺物が出土している。

出土遺物（Fig.50）

3点を図示した。器種には坏，長頸壺，甕等がある。図示したものはすべて須恵器である。

坏（1）高台付の坏の底部破片である。高台は断面が逆台形で，底部のやや内側に貼り付けられている。高台端部は内側が接地部となり外側はやや浮いている。底部はヘラ削り調整で，体部の内外面は横ナデ調整である。

長頸壺（2）胴部屈曲部の破片である。屈曲部は鋭く，鋭角にまがっている。器壁が厚く，1.1cm前後である。器面調整は外面が，屈曲部以下が丁寧なヘラ削り調整で，上半部が横ナデの後，一部にカキ目調整を施している。また，灰かぶりがみられる。内面は横ナデ調整である。

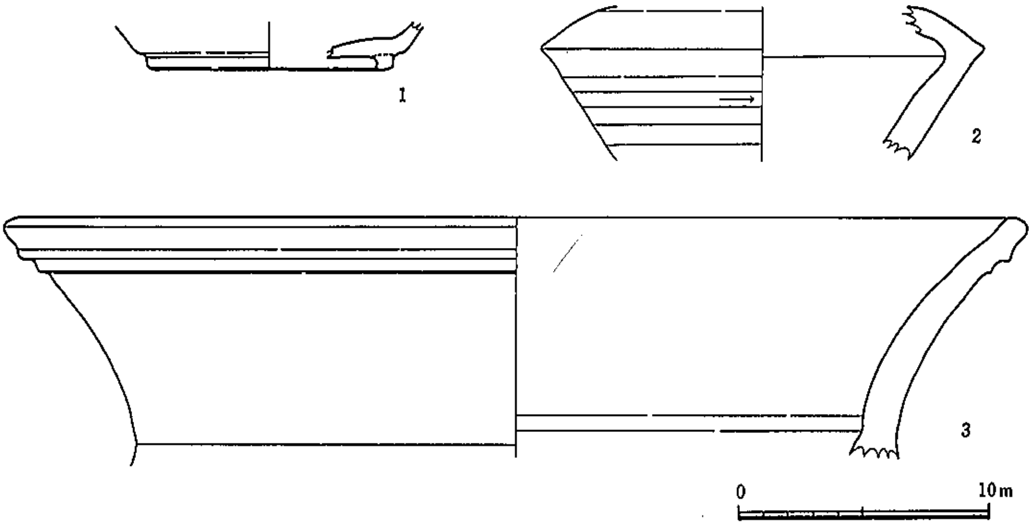


Fig.50　SK－09出土遺物実測図

屈曲部復原径は17.4cmである。

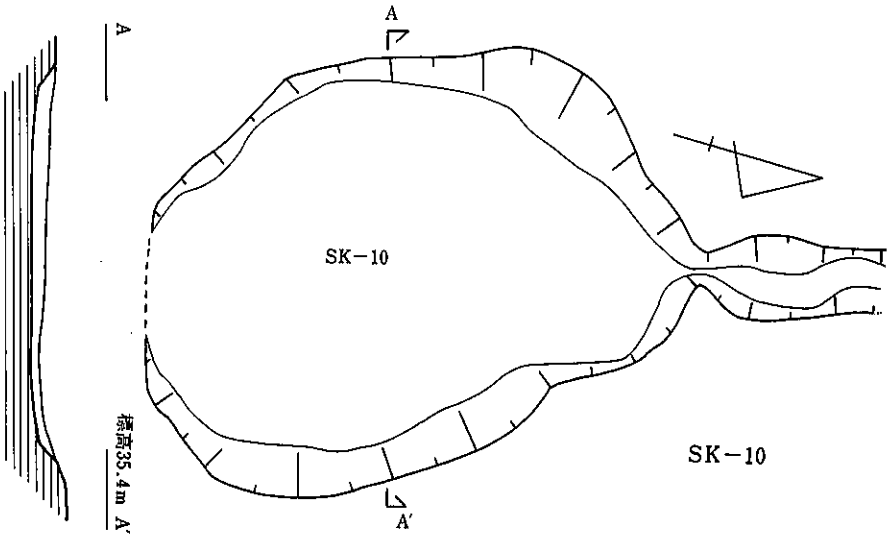
甕（３）大型品の口縁部破片である。頸部から外傾しながらたちあがり，口縁部でやや内傾気味にたちあがる。口縁端部は平坦である。口縁下に断面三角形の突線二条をめぐらしている。内外面共に横ナデ調整を加えている。頸部の粘土接合面は接合面積を増し，接合を強化するために格子状のタタキが加えられている。焼成は良好で堅緻である。

⑽　第10号土壙と出土遺物

第10号土壙（SK－10）（Fig.51）

調査区の東半部，第２群掘立柱建物群の南側に位置し，SK－03の南１ｍの所に位置している。S－24，25，T－24，25グリットにわたって検出した土壙である。他の遺構との重複関係はみられず，単独で存在するが，SD－11とは連接した関係にある。土壙は長径2.95m，短径2.2m，深さ約20cmで平面形は楕円形プランをなし，断面形は皿状をなす。埋土は黒灰色粘質土で，埋土中より須恵器，土師器が出土している。

本土壙は他の土壙と若干異なった使用用途が考えられる。SD－11と本土壙との関係は明らかに切り合い関係がなく，同時に存在した可能性が強く，一連の関連した遺構とみられる。SD－11は，SD－12～15までとほぼ等間隔で平行していて，これらをふくめて一つの遺構とみた方が良さそうである。類似した遺構として，SD－01とSD－02の間に存在するSD－03～SD－07があ



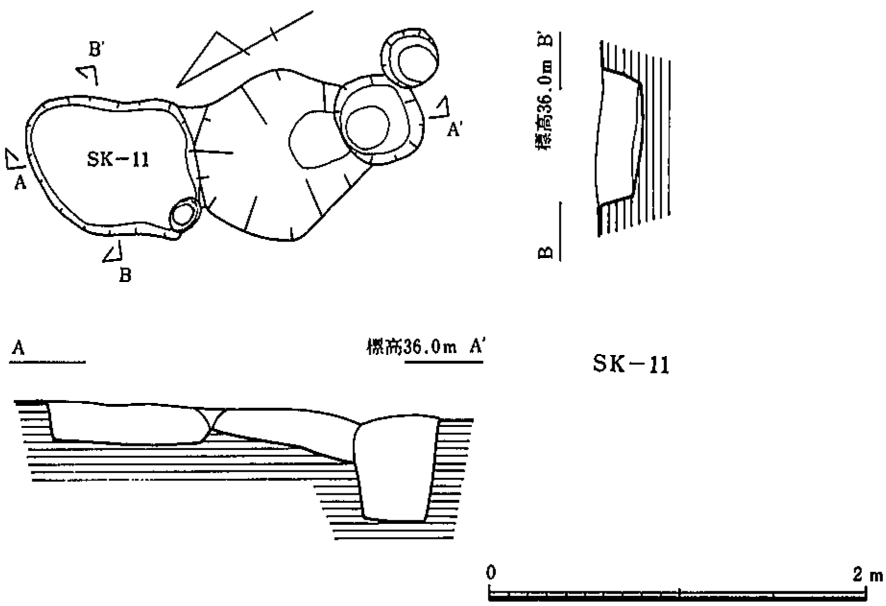


Fig.51 第10、11号土壙（SK−10、11）実測図

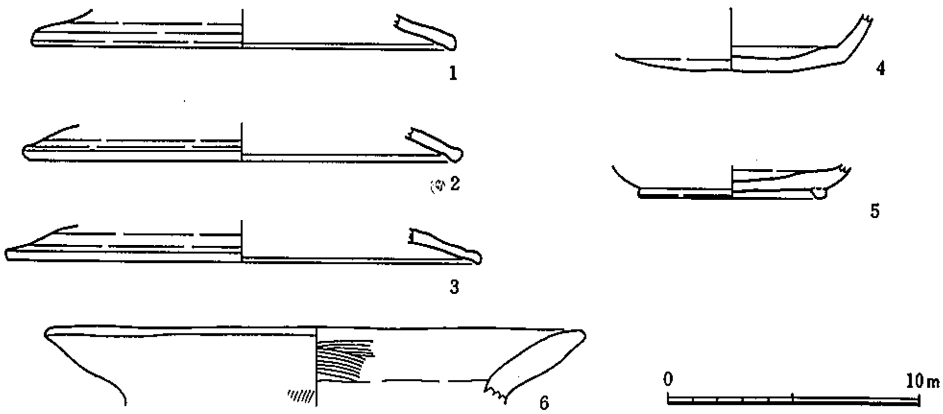


Fig.52　SK－10出土遺物実測図

る。SD－05，07はSD－02に切られて判然としないが土壙が連接されていて，SK－10との関連性が指摘できる。一つの目的をもって作られた遺構であることは間違いないと思われるが何に使用されたかは明らかにできない。調査区には数多くの製鉄炉が存在していることから，製鉄関連の遺構である可能性も高い。今後の類例の増加をまちたい。

出土遺物（Fig.52）

6点を図示した。器種は蓋，坏，甕がある。1～5が須恵器で，6は土師器である。

蓋（1～3）器形はほとんど同じである。口縁部の屈曲はほとんど痕跡をとどめるだけで，わずかに下方にのび，端部を丸くおさめている。口縁部内側に一条の沈線をめぐらしている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整である。焼成は良好で，いずれも堅緻である。1は復原口径16.6cm，2は復原口径16.8cm，3は復原口径28.9cmをはかる。

坏（4，5）高台をつけるものとないものの二種がある。4は底部ヘラ切り後，荒いヘラ削り調整を加えている。板状圧痕がある。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。体部内外面は横ナデ調整。焼成が不良で軟質である。5は細く低い高台を底部端に貼り付けている。調整は器面が荒れているために不明。焼成が不良で軟質である。

甕（6）口縁部破片。口縁部は大きく外反する。口縁部外面にはススが付着する。横ナデ調整で，内面は斜位方向の荒い刷毛目調整。頸部に擬口縁状の粘土接合部がある。全体に手づくね的で，移動式カマドの一部である可能性もある。

⑾　第11号土壙と出土遺物

第11号土壙（SK－11）（Fig.51）

調査区の東半部，第１群掘立柱建物群と重複して存在する。P－26グリットに検出した土壙である。SB－01と重複関係にあるが，直接の切り合い関係がないので，その先後関係は明らかにできない。本土壙は二つの土壙が切り合ったような状態をしているが，切り合い関係はなく，同時に併存していたことがわかる。長径1.85m，短径0.9mのひさご形のプランを有する。深さ約20cmで断面形は箱形をなす。南側で柱穴と重複し，柱穴に切られているが，柱穴は他と組み合って建物にはならない。埋土は黒灰色粘質土層である。埋土中より，須恵器，土師器，黒色土器等が出土している。

出土遺物（Fig.53）

４点を図示した。器種には蓋付坏身，坏，甕がある。図示した４点はいずれも須恵器である。

坏身（１．３．４）各時期の遺物が混在している。１は蓋付の坏身である。蓋受けのたちあがりは低く内傾し，端部は尖り気味におさめている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。胎土には砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好で堅緻である。３は平底で，ヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整を加えている。体部は大きく外傾しながらたちあがる。体部の内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。４はやや幅広の低い高台を底部端近くに貼り付けている。底部および体部下半は丁寧なヘラ削りで，体部上半と内面は横ナデ調整である。

甕（２）口縁部破片である。口縁は大きく外反し，口縁部は外側に肥厚している。内外面共に横ナデ調整を加えている。

⑿　第12号土壙と出土遺物

第12号土壙（SK－12）（Fig.54）

調査区の東端部，SD－01とSD－02の間，特にSD－02のすぐ東側に存在する。L－31，32，M－31，32グリットにわたって検出した土壙である。第２号製鉄炉と重複関係にあるが，その先後関係は明らかにすることができなかった。炉址も含めた一つの遺構である可能性もある。土壙は長径2.7m，短径2.1mの不整楕円形プランをなす。深さ2.5m，底面はほぼ平坦である。

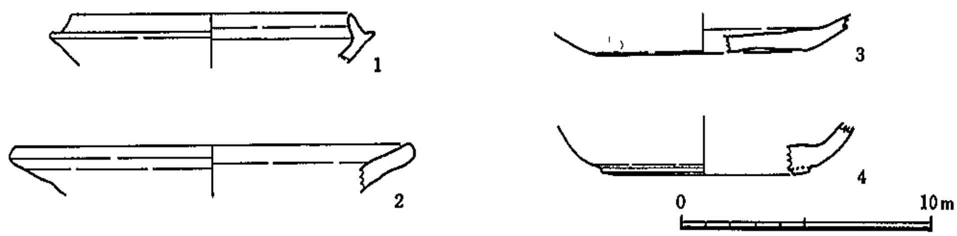


Fig.53　SK－11出土遺物実測図

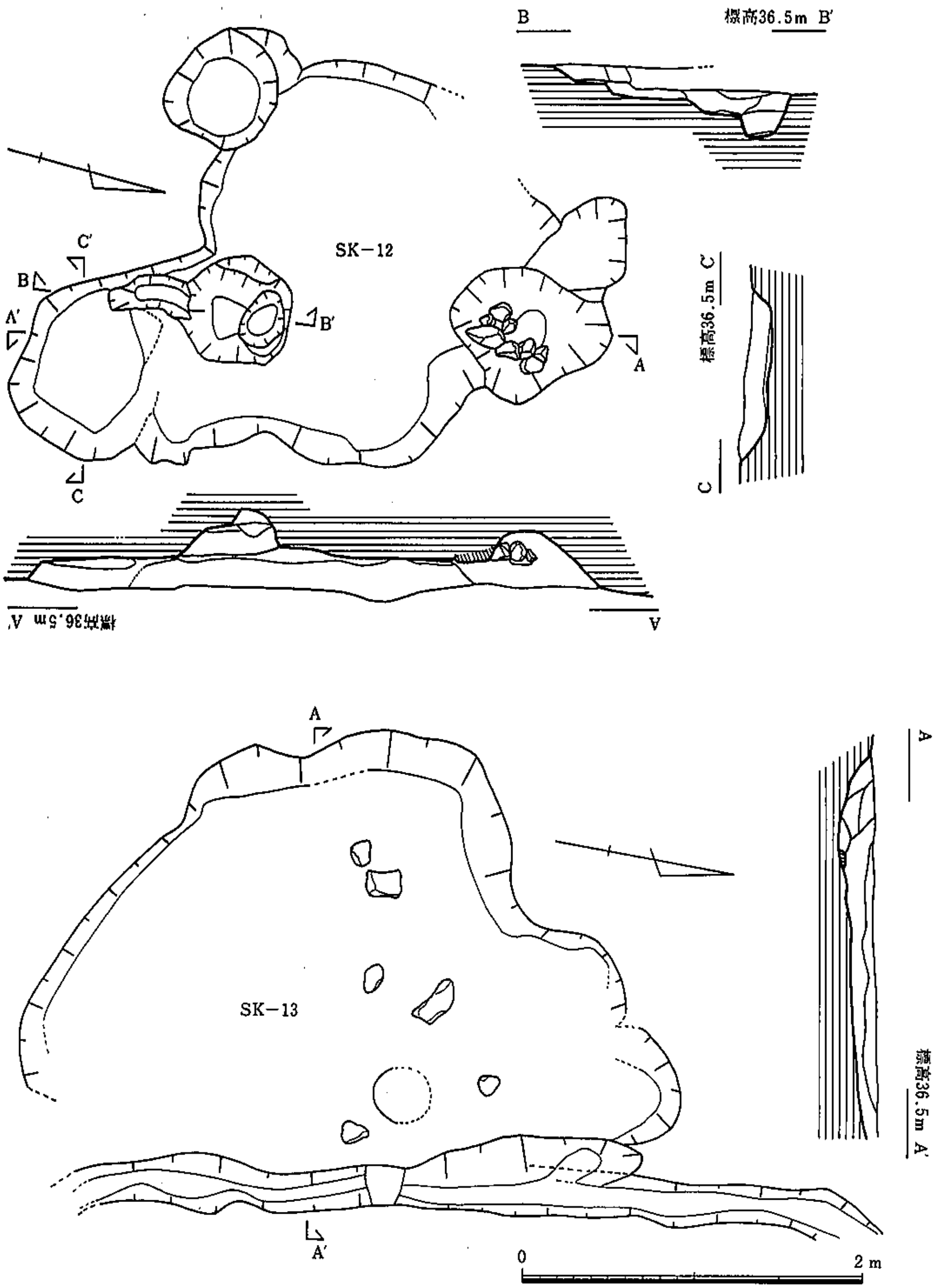


Fig.54　第12・13号土壙(SK−12・13)実測図

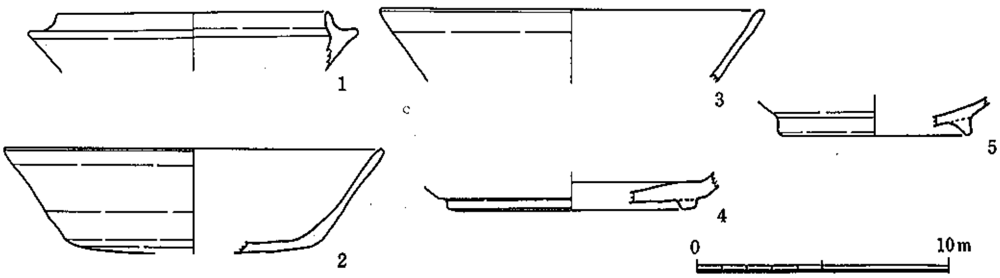


Fig.55　SK－12出土遺物実測図

南北の両側に相対して柱穴状の掘り込みが切り合うような状態で存在する。北側の掘り込みは径75cmの不整円形で，深さ33cm，底面近くに8個の川原石が存在し，根固め石の役割を果たしていたと考えられる。南側の掘り込みは径60cmの円形で，深さ約30cm。また土壙底の南側，第2号製鉄炉址に近く，径65cmの円形の土壙が掘り込まれている。土壙は深さ15～25cmである。この土壙と第2号製鉄炉址は幅20cm，長さ45cm，深さ5cmの小さな溝で連接されている。また，土壙の壁は一部ではあるが，熱を受けて赤変しており，炉址と無関係でないことを示している。以上のことから考えると本土壙は，第2号製鉄炉と一体となった作業場的な性格をもった土壙で，南北に存在する柱穴状の土壙の存在から，小屋がけがしてあったと推測される。土壙内は黒灰色粘質土で埋まっている。中より須恵器，土師器，黒色土器，鉄滓等が出土している。

出土遺物（Fig.55）

5点を図示した。器種は蓋付の坏身，高台付の坏がある。1，4が須恵器，2，3が土師器，5が黒色土器である。

1は蓋受けのたちあがりをもつ坏身で，蓋受けのたちあがりは低く内傾している。受部はやや上方にひらく。内外面は横ナデ調整である。復原口径10.6cm。2は底部ヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整。体部は外傾しながら直線的にのび，口縁部端は尖り気味におさめる。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。復原口径14.8cmである。3も2と同様の器形をなす。口縁部近くに黒班がある。内外面共横ナデ調整。復原口径14.9cmである。4は高台をもつ坏底部である。高台は断面方形で，底部の縁近くに直に貼り付けられている。底部はヘラ削り調整で，内底部は多方向からのナデ調整である。5は坏の底部である。断面三角形の高台を底部端に貼り付ける。体部は高台付近から外傾しながらたちあがる。器面が荒れているので調整は明らかでない。内面は黒色をなす。

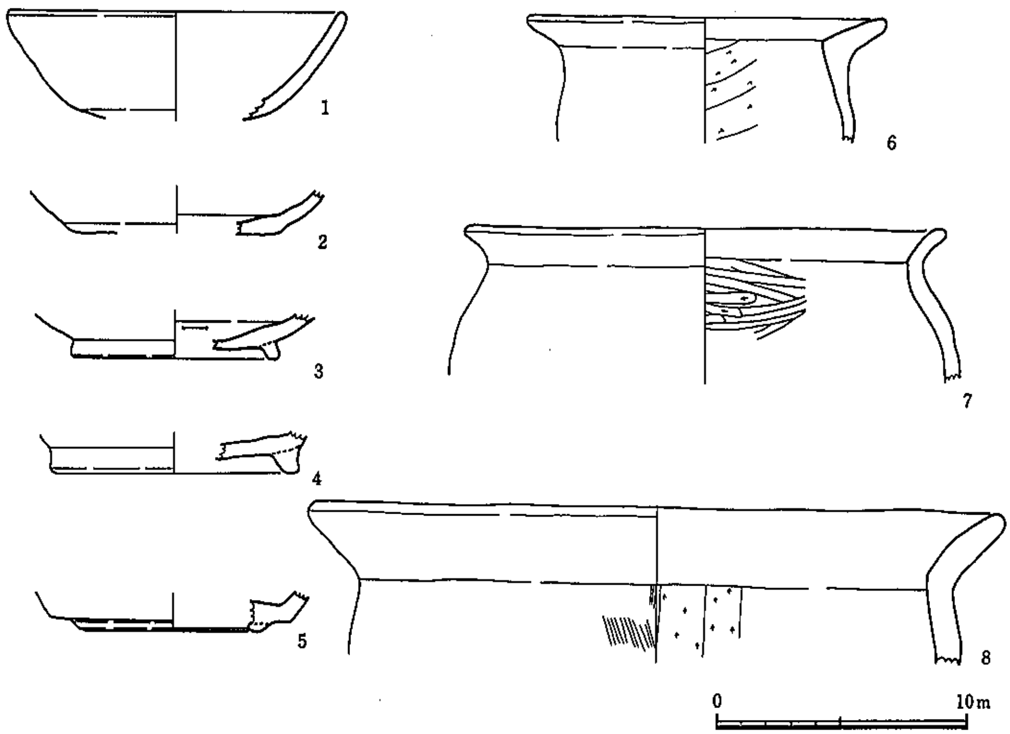


Fig.56　SK－13出土遺物実測図

⒀　第13号土壙と出土遺物

第13号土壙（SK－13）（Fig.54）

調査区の東半部，第２群掘立柱建物群と重複して存在する。O－23，24，P－23グリットにかけて検出した土壙である。SB－02，SB－10，SD－20と重複関係にあり，いずれの遺構もSK－13を切っている。すなわち，SK－13はSB－02，SB－10，SD－20よりも先行して存在した遺構である。土壙は南北に細長く，長径3.9m，短径2.6mの不整楕円形プランをなす。深さ15～20cmで比較的浅く，断面形は皿状をなす。埋土は黒灰色粘質土である。土壙内より須恵器，土師器が出土している。

出土遺物（Fig.56）

８点を図示した。器種には坏，甕がある。１，５が須恵器で他は土師器である。

坏（１～５）　平底（１，２）と高台のつくもの（３～５）に大別できる。１は底部ヘラ切り後，ヘラ削り調整を加える。体部は丸味をもってたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。復原口径13.2cmである。２は底部ヘラ切り後，

ヘラ削り調整を加える。体部は丸味をもってたちあがる。体部の内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。3はやや幅のせまい高台を外側に張り出すように貼り付けている。底部および体部下半は丁寧なヘラ削り調整。内面は横方向のヘラ磨き調整を加えている。外底部に黒班がみられる。4は幅広で高い高台を底部端に貼りつけている。器面が荒れていて調整痕は明らかにできない。5は幅広で低い高台を底部内側に貼り付けている。高台端部はヘラ削りによっていびつになっている。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。体部内外面は横ナデ調整である。

甕（6～8）　小型品と大型品の二種がある。6は短かい肥厚した口縁を大きく外反させ，体部はあまり張らない。体部外面は器面の状態が悪く調整は不明。口縁部内面は横方向の荒い刷毛目調整後，ナデ調整を加えている。体部内面は丁寧なヘラ削りで，頸部に稜線をつくり出す。口縁端にススが付着している。復原口径13.8cm。7は頸部からゆるやかに外反する口縁部で，口縁端部は丸くおさめる。胴部はあまり張らない。胴部外面は横方向の刷毛目調整後，荒いヘラ磨き。口縁部外面は横ナデ調整を加える。内面は口縁部から胴部にかけて横方向のヘラ磨きで調整する。復原口径18.4cm。8は大型品である。口縁部はくの字に外反し，端部は丸くおさめる。胴の張りは弱い。外面は縦方向の刷毛目調整を加え，口縁はその後ナデ調整。口縁部内面は横方向の荒いハケ目調整。胴部は縦方向の荒いヘラ削り調整である。復原口径26.8cmである。

⑽　第14号土壙と出土遺物

第14号土壙（SK－14）（Fig.57）

調査区東半部，第2群掘立柱建物群付近に位置する。R－26グリットに検出した。他の遺構との重複関係はみられず，単独で存在する。SK－05のすぐ西に存在し，約30cm離れている。発掘時には一つの土壙であったが，発掘後，四つの土壙に分離した。本土壙は長径2.8m，短径1.4mの南北に細長い楕円形プランをなす。四つの土壙は中央部に細長い楕円形土壙が並列し，南北に円形の土壙を配していて，土壙の配置からもこれらの土壙が，集合して一つの機能を果たしていたと思われる。各土壙は次のようになっている。中央部東側の土壙は長径155cm，短径75cmの長楕円形プランで深さ15cm，底面は平坦である。この土壙の北側壙底にはさらに長径55cm，短径40cm，深さ約20cmの長方形プランの土壙が掘り込まれている。中央部東側土壙は北側円形土壙と連接している。中央部西側土壙は長径150cm，短径54cmの不整長楕円形プランで，深さ約15cm，底面は平坦である。この土壙は東側土壙と対称となるように南側円形土壙と連接している。北側円形土壙は長径95cm，短径60cmの楕円形プランで，深さ約40cm，壙底は平坦である。南側円形土壙は長径80cm，短径75cmの円形プランで，深さ約30cmで，壙底は平坦である。いず

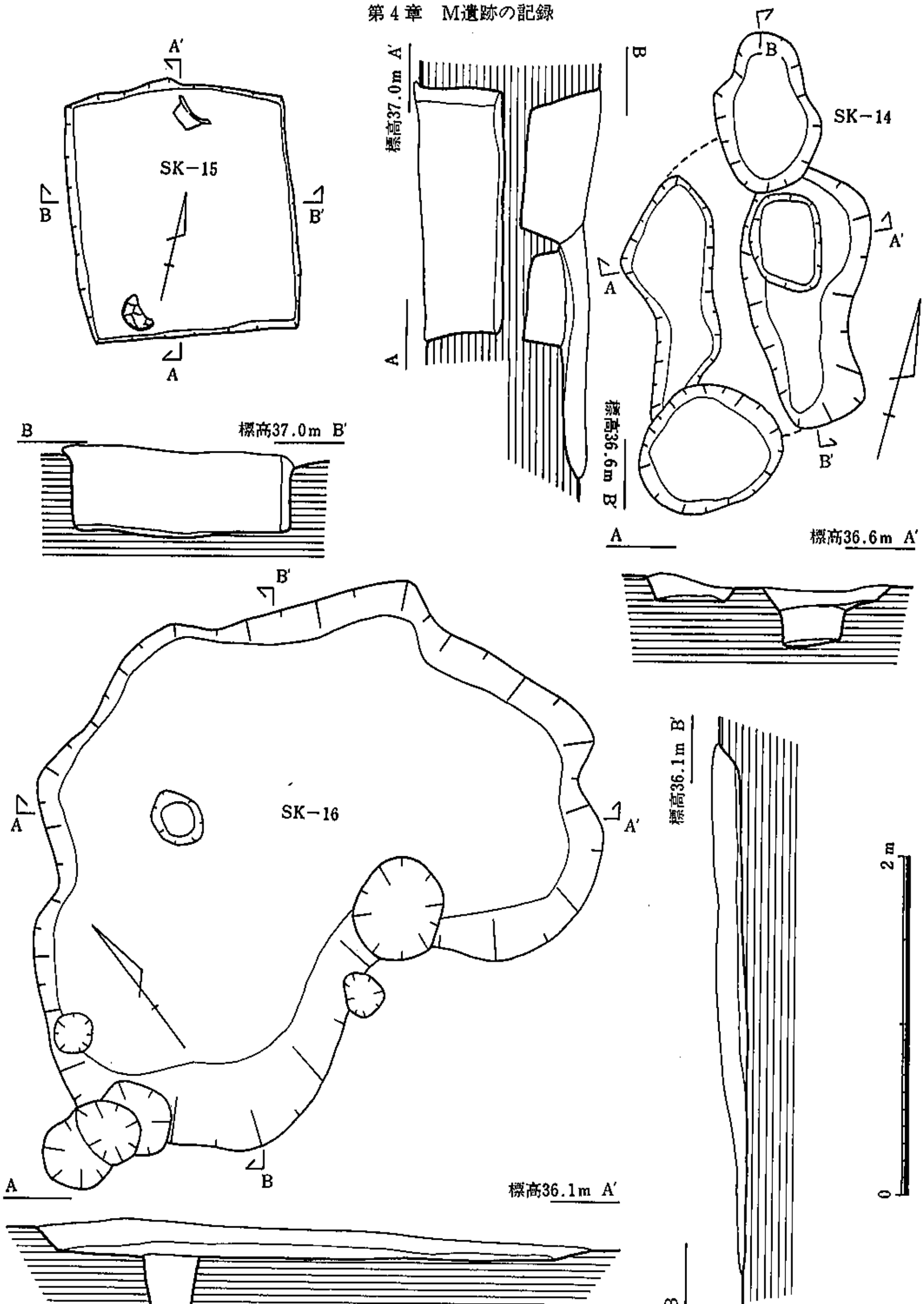


Fig.57　14～16号土壙(SK－14～16)実測図

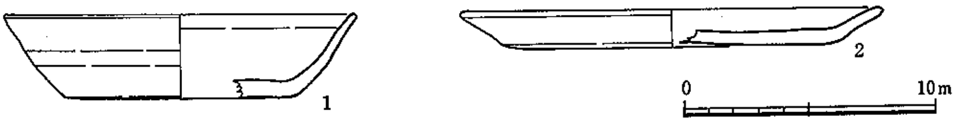


Fig.58　SK－14出土遺物実測図

れも黒灰色粘質土によって埋まっている。中より須恵器，土師器，鉄滓，滑石製紡錘車等の遺物が出土している。

出土遺物（Fig.58）

2点を図示した。器種は坏と皿である。1が須恵器，2が土師器である。滑石製紡錘車については章を改めて述べる。

1は坏である。底部はヘラ切り後，荒いヘラ削り調整を加えている。体部は外傾しながらたちあがり，口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。焼成が不良で軟質である。復原口径13.6cmをはかる。2は皿である。底部はヘラ切りで，体部は外傾しながらたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。器面の調整は荒れていて不明。復原口径16.2cmをはかる。

⒂　第15号土壙と出土遺物

第15号土壙（SK－15）（Fig.57）

調査区の西半部，第3群掘立柱建物群と重複して存在する。L－12，M－12グリットにわたって検出した。SB－24と重複関係があるが，直接の切り合い関係がないため，その先後関係は不明である。ただし，建物の方向性と土壙の配置からすれば，本土壙とSB－24は一体となった遺構と考えた方がより可能性が高い。土壙は長軸145cm，短軸133cmの長方形プランで，深さ約50cmである。壙底は平坦で断面形は箱形をなす。埋土は黒灰色粘質土で，中より須恵器，土師器，手づくね土器等が出土している。

本土壙は他の不整形の土壙と異なり，規格化されたもので，建物が覆う点でも他の土壙と区別される。使用用途については不明であるが，建物との組み合せから，作業場における水溜め等の用途も考えられる。

出土遺物（Fig.59）

10点を図示した。器種は蓋，坏，高坏(？)，脚部，甕，製塩土器がある。1，3，7が須恵器で，他はすべて土師器である。

蓋（1，3）　1は体部と口縁部の境が不明瞭で，口縁端部は丸くおさめる。天井部は欠損

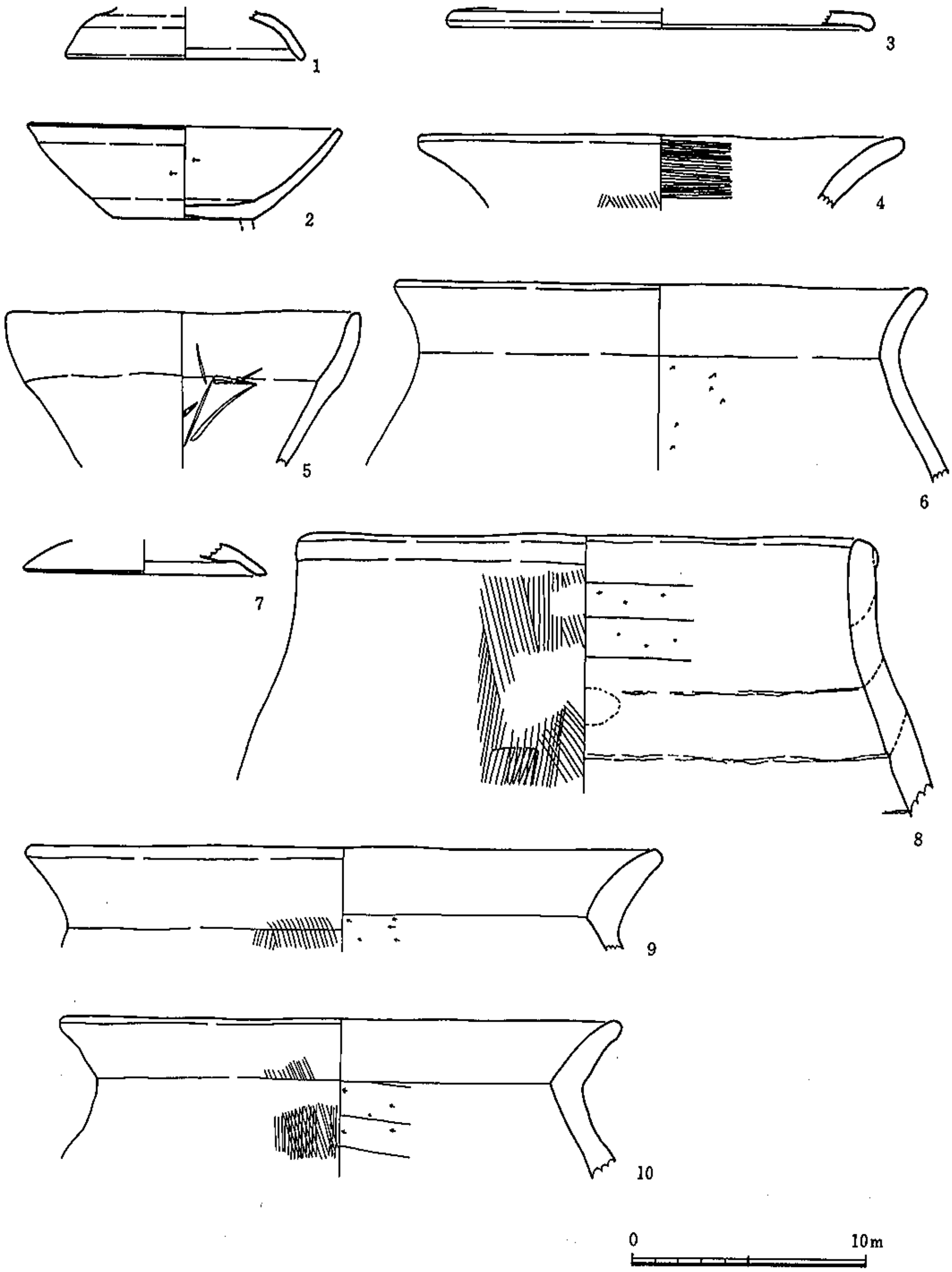


Fig.59　SK－15出土遺物実測図

している。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整である。胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。復原口径9.6cmをはかる。3は口縁部の屈曲は短く下方にわずかにのび，端部は丸くおさめている。体部はたちあがらず，全体に扁平である。口縁部から体部にかけての内外面は横ナデ調整である。復原口径18.0cmをはかる。

坏（2）　高台付の坏であるが，高台部分は剝離している。高台は底部端に貼り付けられたものである。貼り付部は接着を良くするためにやや凹ませ，その部分に条痕状の傷をつけ表面積を増加させている。体部は外傾させながら直線的にたちあがり，口縁部でやや内傾する。底部は丁寧なヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横方向の丁寧なヘラ磨き調整である。復原口径は13.1cmである。

脚（7）　高坏あるいは壷の脚部と考えられる。脚筒部下端で一担段をもち，それから丸味をもって拡がるもので，脚端部は平坦である。内外面共横ナデ調整である。

製塩土器（5）　手づくねの土器である。口縁部からやや丸味をもってしぼまり，頸部付近からゆるやかに底部に移行する逆円錐形を呈する。外面は手づくねのため凹凸が著しい。内面は細かい条痕状の調整があり，部分的にヘラによる条痕がみられる。外面に比較し，内面は平滑である。内面に布痕を有する製塩土器と同様の成形，器形を有し，本例も製塩土器とみてよいものと思われる。復原口径は14.8cmである。底部の形状は不明であるが，丸ないしは尖底になるものであろう。

甕（4，6，8～10）　4は口縁部破片で，口縁は大きく外反する。口縁端部はやや肥厚気味に丸くおさめる。外面は縦方向の荒い刷毛目調整後横ナデ調整。内面は横方の刷毛目調整である。復原口径20.0cm。6は頸部からあまり外反しないで口縁部がたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。胴部は頸部からゆるやかに張りながらさがっており，長胴をなすと考えられる。外面の調整は胴部が，縦位の刷毛目調整後，ヘラナデ調整。口縁部は横ナデ調整である。内面は口縁部が，斜位の刷毛目調整を施した後，横ナデ調整を加える。胴部はやや丁寧なヘラ削り調整で，頸部には稜線は形成されない。復原口径21.6cmである。8はやや特異な器形を有する。口縁部は内傾し，やや口しぼまりになり。口縁端部外面には粘土を貼り付け肥厚させる。胴部は張る。外面の調整は縦方向の刷毛目調整。内面は頸部から口縁部にかけては丁寧なヘラ削り調整で，口縁部はその上から横ナデ調整を加えている。体部は指圧後，部分的に横方向の細かい刷毛目を施す。粘土帯の接合部が明瞭に残る。粘土帯は幅約3cmである。粘土帯の接合は内傾である。復原口径は23.0cmである。9，10は同様の器形をなす。口縁部はくの字に外反し，やや肥厚する。口縁端部は丸くおさめる。外面の調整は縦位の刷毛目調整で，口縁部は横ナデ調整を加える。内面は口縁部が横ナデ調整で，胴部はやや荒いヘラ削り調整である。頸部に稜線を形成する。復原口径は9が26.4cm，10が23.0cmである。

⒃　第16号土壙と出土遺物

第16号土壙（SK－16）（Fig.58）

調査区の東半部，第２群掘立柱建物群と重複した場所に位置している。N－24，N－25グリットにわたって検出した土壙である。SB－15，SB－20と重複関係にある。SB－15とは柱穴に直接の切り合い関係があり，SB－15の柱穴が本土壙を切っているので，SB－15より先行する遺構であることは明確である。SB－20とは，共にSB－15の柱穴に切られていて判然としない。土壙は東西に細長く，長径3.6m，短径2.15mの不整楕円形プランをなしている。深さは10cm前後と浅く，断面形は皿状をなす。壙底は平坦である。埋土は黒灰色粘質土層で，埋土中より須恵

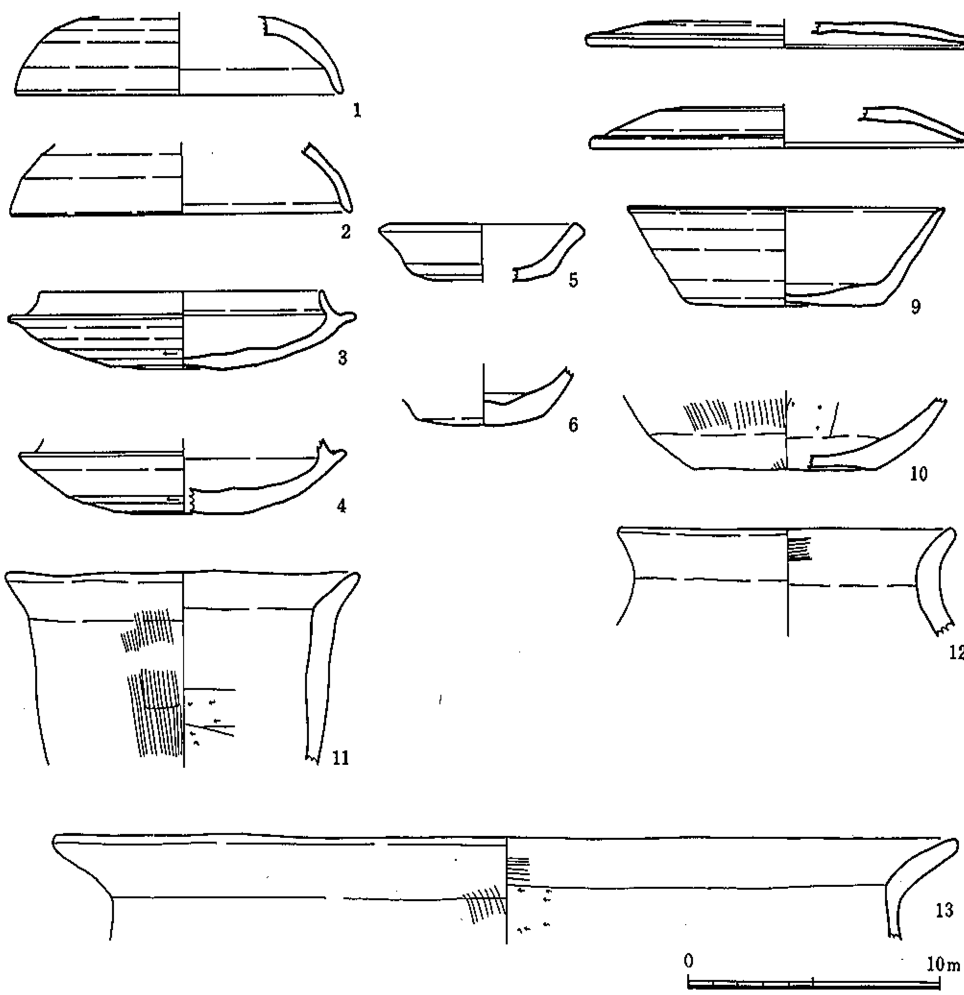


Fig.60　SK－16出土遺物実測図

器，土師器，鉄滓等の遺物が出土している。

出土遺物（Fig.60）

13点を図示した。器種には蓋，坏，鉢，甕がある。図示した中で１～５，７～９は須恵器で，他は土師器である。

蓋（1，2，7，8）　古墳時代の坏蓋（1，2）と古代の坏蓋（7，8）に大別できる。1，2は体部と口縁部の境が不明瞭である。口縁端部は１がやや尖り気味に，２が丸くおさめる。天井部はヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整である。１は天井部にヘラ記号がある。復原口径は１が13.4cm，２が12.8cmである。１は焼成は良好で堅緻である。７は口縁部の屈曲は短く，わずかに下方にのび，端部は丸くおさめている。体部はたちあがらず，天井部でも平坦で全体に扁平である。天井部はヘラ切り後，ヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。８は７と同様に口縁部の屈曲は短かい。端部は丸くおさめ，口縁部の内外に浅い沈線一条をめぐらす。体部は７より丸味をもってたちあがり，器高が高くなる。天井部は平坦であり，丁寧なヘラ削りを施す。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向のナデ調整である。復原口径は７が15.1cm，８が15.2cmである。

坏（3，4，6，9）　蓋同様に古墳時代の坏（3，4）と古代の坏（6，9）に大別できる。3，4は蓋受けのたちあがりが低く内傾し，口縁端部は尖り気味におさめている。４は受部に一条の沈線をめぐらす。底部はやや荒いヘラ削り調整を施し，体部から口縁部にかけての内外面に横ナデ調整を施す。内底部は多方向からのナデ調整。3，4共に底部にヘラ記号をもつ。復原口径は１が11.0cm，1，2は10.4cm前後である。６は底部は粗いヘラ切りで，体部は外傾しながら直線的にたちあがる。器面はやや荒れていて調整は不明。耳皿である可能性が強い。９は平底の底部で，ヘラ切り後，静止ヘラ削りを加える。体部は外傾しながら直線的にのび，口縁部端でわずかに外反する。端部は尖り気味におさめる。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。復原口径12.4cmである。

鉢（10）　底部破片である。器面調整等から鉢の底部と考えられる。底部は平底。刷毛目調整後，ヘラナデを加えている。体部は丸味をもってたちあがり，器面に凹凸がある。外面は縦方向の刷毛目調整。内面は丁寧なヘラ削り調整である。

甕（11～13）　11は口縁部がわずかに外反し，胴部は張らず円筒状をなす。外面は縦方向の刷毛目調整で，口縁部は横ナデ調整。内面は胴下半に荒いヘラ削りがみられる。内面にススが付着する。復原口径13.8cm。12は頸部からゆるやかに口縁部が外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面は磨滅していて詳細は不明。復原口径13.0cm。13は口縁部が大きく外反し，口縁部端は丸くおさめる。外面は縦方向の刷毛目調整。胴部はヘラ削りで頸部に稜線が形成される。復原口径35.0cmである。

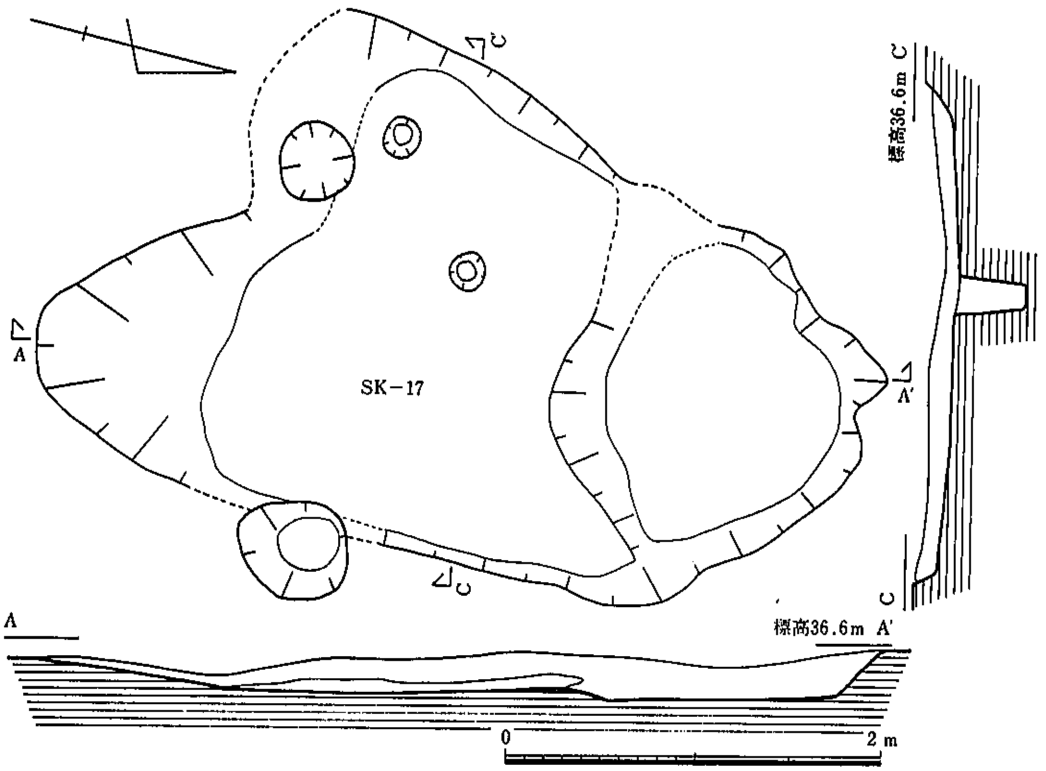


Fig.61　第17号土壙(SK－17)実測図

その他（５）　小型の坏あるいは壷等の蓋と考えられる。口縁端部は平坦である。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。底部にヘラ記号をもつ。復原口径7.4cm。

⒄　第17号土壙と出土遺物

第17号土壙（SK－17）（Fig.61）

調査区の東半部，第２群掘立柱建物群と重複して存在する。Ｋ－27，28，Ｌ－27，28グリットにわたって検出した土壙である。SB－05，SB－06と重複関係にある。SB－05，SB－06共に柱穴と土壙の間で直接の切り合い関係がある。SB－05，SB－06の柱穴は共に本土壙を切っており，本土壙がSB－05，SB－06に先行することは明確である。土壙は南北に長く長径4.5m，短径2.6mの不整楕円形プランをなす。深さ10～25cmで，壙底は比較的平坦であるが，北側が２m×1.5mの範囲で一段深くなる。埋土は黒灰色粘質土層である。土壙からは須恵器，土師器，青磁

器，鉄滓等が多量に出土している。

出土遺物（Fig.62）

8点を図示した。器種には蓋，坏，皿，甕がある。図示した中で，1～3，5，6は須恵器で，4，7，8は土師器である。

蓋（1）　口縁部の屈曲は短く，わずかに下方にのび，口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には凹線一条をめぐらす。内外面は横方向のナデ調整である。復原口径16.6cm。

坏（2～4，6）　蓋受けのたちあがりのあるものと，ないものに大別できる。2は蓋受けが低く内傾している。受部はやや上方にのびる。底部はヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。復原口径9.5cm。3は底部破片。底部はヘラ切り後，静止ヘラ削り調整を加える。体部は外傾しながら直線的にのびる。体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。4は底部ヘラ切り後，静止ヘラ削り調整である。体部外面は横ナデ調整。内面は横方向のヘラ磨きである。6は高台付の坏であるが，高台部分を欠損する。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。体部内外面は横ナデ調整。

皿（5）　底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整を加えている。体部は丸味をもってたちあがり，口縁端部は尖り気味におさめている。体部から口縁部にかけては横ナデ調整で，内底部は多方向からのナデ調整である。焼成が不良で軟質である。復原口径は14.8cmをはかる。

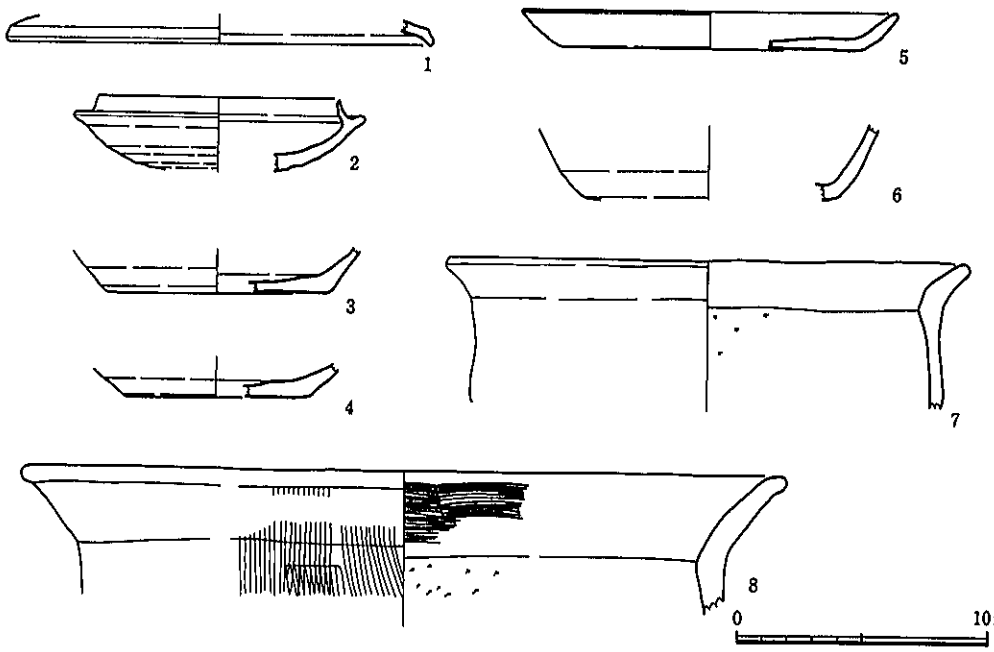


Fig.62　SK－17出土遺物実測図

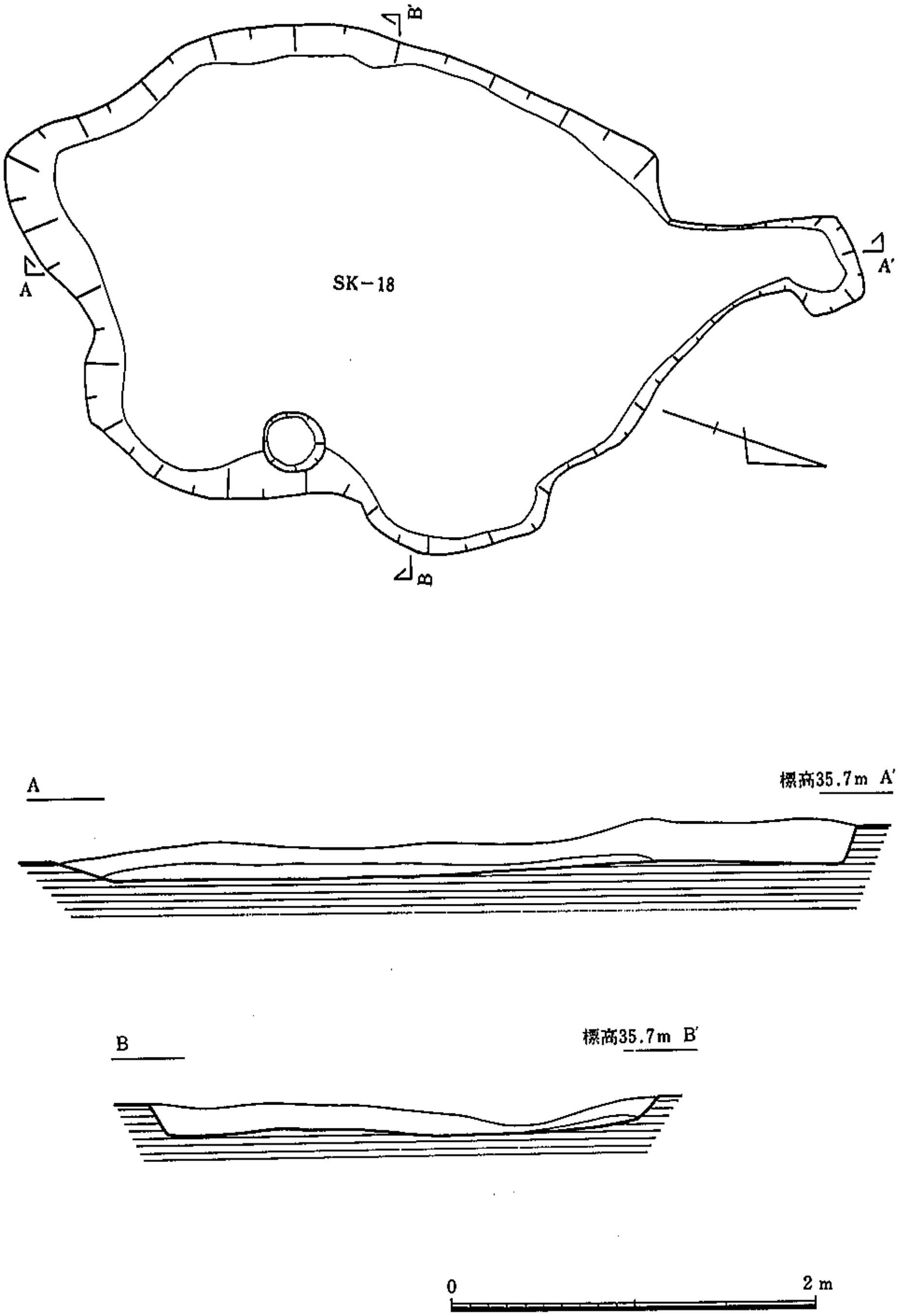


Fig.63　第18号土壙(SK−18)実測図

甕（7，8）　共に口縁部破片である。7は短かい口縁部が大きく外反する。器面が荒れているために，調整は不明である。ただし胴部内面は，ヘラ削り調整である。8は大型品である。口縁部は外傾しながら直線的にのび，口縁端部は外側にわずかに肥厚し，丸くおさめている。体部はあまり張らないと考えられる。外面は縦方向の刷毛目調整で，口縁部内面は横方向の丁寧な刷毛目調整，胴部は丁寧なヘラ削り調整である。頸部には稜線が形成される。復原口径は7が21.0cm，8が29.4cmをはかる。

(18)　第18号土壙と出土遺物

第18号土壙（SK－18）　(Fig.63)

調査区の東半部，第2群掘立柱建物群と重複して存在する。K－27，28，L－27，28，M－28グリットにわたって検出した土壙である。SB－05.SB－06と重複関係にある。SB－05.SB－06の柱穴が本土壙を切ってつくられており，本土壙がSB－05，SB－06より先行してつくられたことは明確である。土壙は南北に長い。長径4.7m，短径2.65mの不整楕円形プランをなす。深さ20cmで，壙底は平坦である。断面形は皿状をなしている。埋土は黒灰色粘質土層で，中より須恵器，土師器，青磁器，鉄滓等が多数出土している。

出土遺物（Fig.64）

7点を図示した。器種は蓋，坏，高坏，甕がある。図示したのはすべて須恵器である。

蓋（1．2）2点がある。1は口縁部の屈曲が短かく，断面三角形をなす。口縁部外側に凹線一条をめぐらしている。天井部はヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整である。復原口径19.8cm。2は口縁部の屈曲は短いがやや下方にのびる。内外面は横

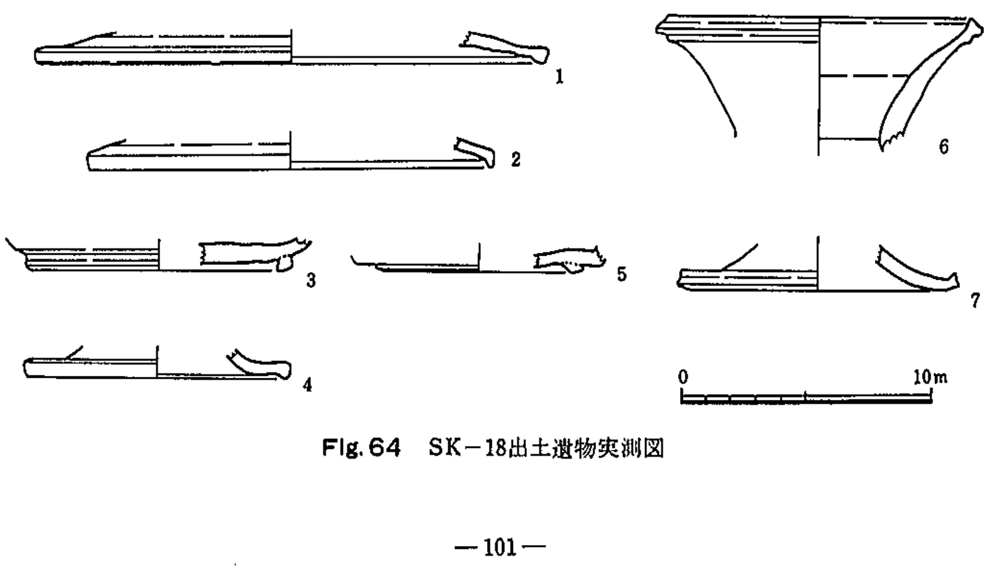


Fig.64　SK－18出土遺物実測図

ナデ調整である。復原口径16.0cm。

坏（3．5）　底部破片2点がある。3は断面方形の高台を底部端近くに貼り付けている。底部は丁寧なヘラ削り調整，内底部は多方向からの横ナデ調整である。5は断面逆台形の低い高台を底部端近くに貼り付けている。体部はやや丸味をもってたちあがる。外底部は丁寧なヘラ削り調整，内底部は多方向からのナデ調整である。焼成がやや不良で軟質である。

高坏（4．7）　いずれも脚部破片である。4は脚筒部から大きく広がり，脚端部で屈曲し，下方にのび，端部は丸くおさめている。内外面共横ナデ調整である。脚端径は10.3cmである。7も4と同様の形状をなすが，脚端部は屈曲せず上方にはねている。端部外面は凹線状をなす。脚部には5本の沈線をめぐらしている。内外面共横ナデ調整である。脚端径11.2cmである。

甕（6）　口縁部破片1点がある。頸部から外傾しながらゆるやかにたちあがり，口縁端部で，内側に張り出す。端部に凹線一条をめぐらしている。口縁下に一条の突線をめぐらしている。内外面共に丁寧な横ナデ調整を加えている。復原口径12.0cmである

⑼　第19.20号土壙と出土遺物

第19，20号土壙（SK－19・20）

調査区の西半部，第2群掘立柱建物群の南側に存在する。P－9～11.Q－9～11，R－10，11グリットにわたって検出した土壙である。他の遺構との重複関係はみられず，単独で存在する。土壙は調査開始時は個別の土壙として確認したが，発掘の進展に伴い，同一土壙となった。遺物取りあげなどの都合により，第19，20号土壙と呼ぶことにする。土壙は長径8.15m，短径4.4mの不整楕円形プランをした大型の土壙で，深さ10～20cmである。埋土は黒灰色粘質土～褐色粘質土である。土壙内から須恵器，土師器，鉄滓等の遺物が多量に出土した。

出土遺物（Fig.65～68）

53点を図示した。器種には蓋，坏，皿，䍃，壺，甕がある。1～11，14～18，20，22～30，43～47，50～53は須恵器で12，13，19，21，31～42，48～49は土師器である。

蓋（1．3～9.43～47．50～5）　17点がある。口縁部の屈曲は短い。個々において若干の違いがあるが，調整はいずれも天井部が，ヘラ切り後，ヘラ削り調整を加え，口縁部から体部にかけての内面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整が加えられている。1はやや丸味があり器高が高い。口縁端は丸くおさめる。復原口径11.1cm，器高2.2cm。3は天井部は平坦である。口縁部はほとんど痕跡を残すのみで，下方にはのびない。復原口径14.0cm，器高1.7cm。4は天井部が平坦で，口縁部はわずかに下方にのび，端部は丸くおさめている。口縁部外面に沈線一条をめぐらす。焼成が不良で軟質である。復原口径16.4cm，器高1.4cm。5は口縁部が下方にわずかにのび，端部は丸くおさめる，復原口径15.2cm。6は口縁部はわずかに下

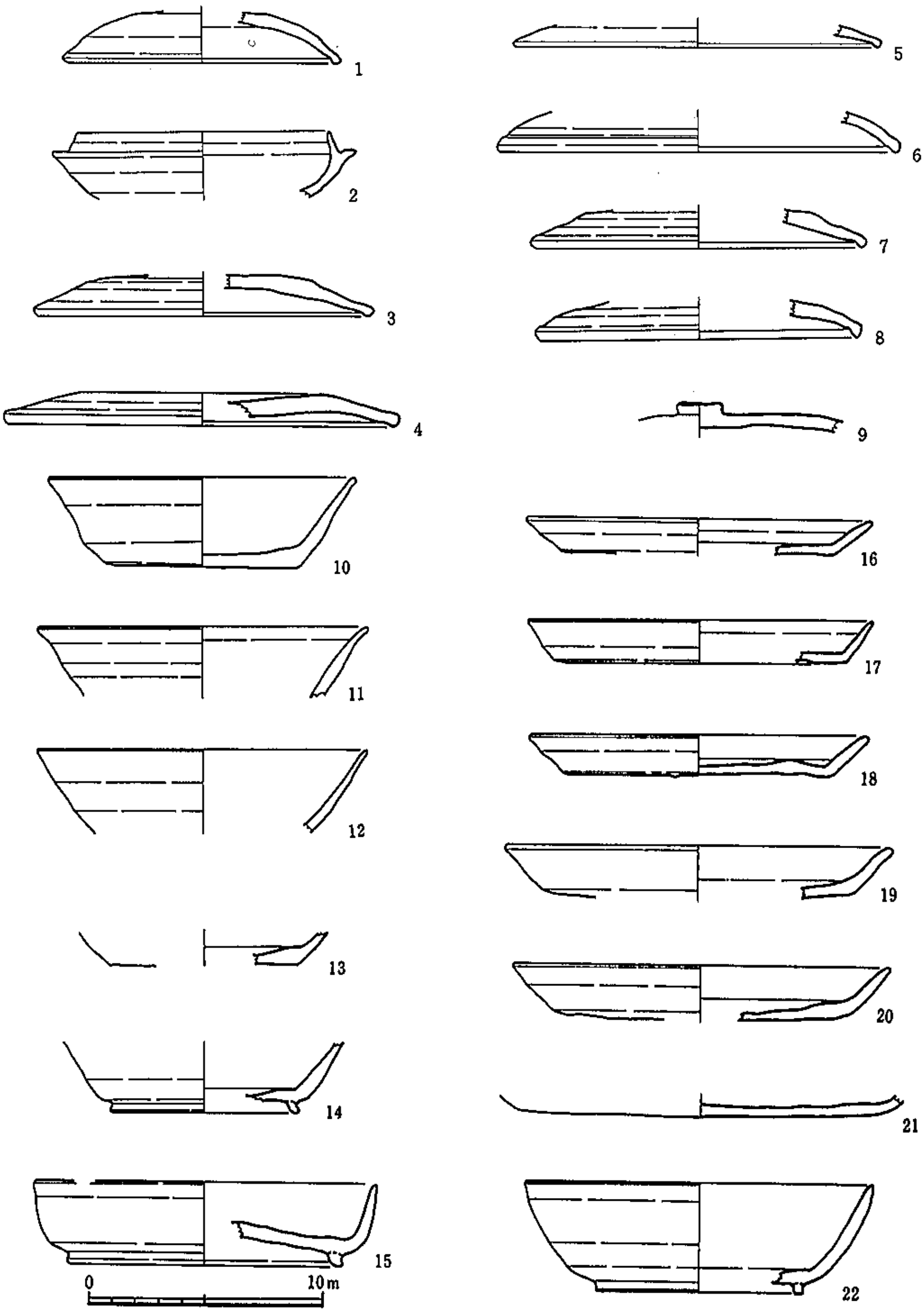


Fig.65　SK－19・20出土遺物実測図Ⅰ

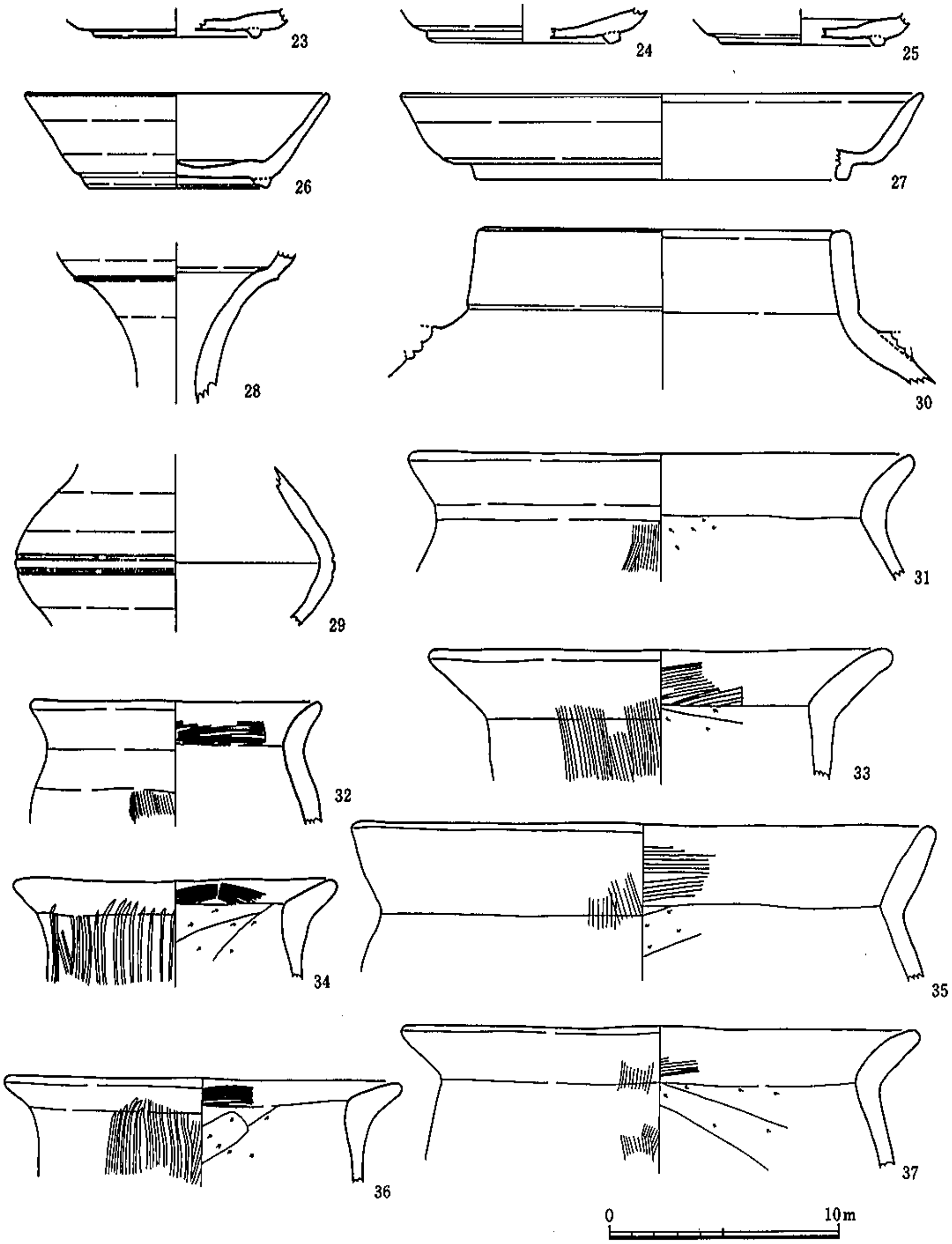


Fig. 66　SK－19･20出土遺物実測図Ⅱ

方にのび，端部は丸くおさめている。口縁部の内外面に一条の沈線をめぐらしている。体部がやや丸味をもち，器高が高くなる。復原口径16.8cm。7は口縁部はやや下方にのび，断面三角形をなす。天井部は平坦である。復原口径13.8cm。器高1.6cm。8は口縁部はわずかに下方にのび断面三角形をなす。内面にススが付着する。復原口径13.4cm。9は口縁部を欠失する。天井中央部に扁平なボタン状のつまみをつける。焼成が不良で軟質である。43は全体に扁平である。口縁部はわずかに下方にのび断面三角形をなす。復原口径17.8cm，器高0.8cm。44は体部がやや丸味をもつ。口縁部はやや下方にのび，内側に沈線一条をめぐらす。復原口径17.5cm。器高1.7cm。45は天井部が平坦で，中央に擬宝珠形のつまみをつける。口縁部はわずかに下方にのび，内側に一条の沈線をめぐらす。口径14.6cm，器高2.0cm。全体に扁平である。46は体部に丸味をもつ。口縁端部はわずかに下方にのび，丸くおさめる。復原口径11.4cm，器高1.8cm。焼成がやや不良で軟質である。47は口縁部を欠失する。天井部は平坦で，中央部にボタン状のつまみをつける。50は口縁部はほとんど下方にのびず，痕跡を残すのみである。内外に沈線一条をめぐらす。天井部は平坦で，体部との境に段をもつ。復原口径13.4cm，器高2.0cm。51は，口縁部はほとんど下方にのびず，痕跡を残す程度である。内側に沈線一条をめぐらす。天井部は平坦で，体部との境に凹線一条をめぐらしている。焼成不良で軟質である。復原口径15.4cm，器高1.3cm。52は口縁部がわずかに下方にのび，端部を丸くおさめる。天井部は平坦で，体部との境に段をもつ。復原口径14.8cm，器高1.8cm。53は口縁部はわずかに下方にのびるが，痕跡を残す程度である。天井部は平坦で，体部との境に段をもつ。復原口径13.4cm，器高1.5cmである。

坏（2，10～15，22～26）　12個体がある。蓋受けのたちあがりをもつもの，平底のもの，高台をもつもののIII類に大別できる。2は蓋受けのたちあがりはわずかに内傾するが，やや高い。口縁端部は尖り気味におさめる。受部に沈線一条をめぐらす。底部は静止ヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は丁寧な横ナデ調整である。焼成は良好で堅緻である。復原口径10.6cmである。10は平底で体部は外傾しながらたちあがる。口縁端部は丸くおさめている。磨滅していて器面調整は不明確である。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加えている。胎土には多量の砂粒を含み，焼成は不良で軟質である。口径13.0cm，器高3.9cm。11は口縁部がやや外反する。口縁端部は尖り気味におさめる。内外面共に横ナデ調整。復原口径13.8cm。焼成不良で軟質である。12は体部は丸味をもってたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。内外面は横ナデ調整。復原口径13.8cm，13は底部がヘラ削り調整で，体部は丸味をもってたちあがる。内外面共横ナデ調整である。二次的に熱を受けている。外面にはススの付着が著しい。14．15．22～26は貼り付け高台をもつ。14は高台の幅はせまく外側端は外方へ張り出す。体部はやや丸味をもってたちあがる。内外面共横ナデ調整。15は，高台は断面方形で底部端に近く貼り付けられる。体部は丸味をもって直にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ削り調整。内底部は多方向からのナデ調整。その他は横ナデ調整である。復原口径14.3cm，器高3.5cm。22

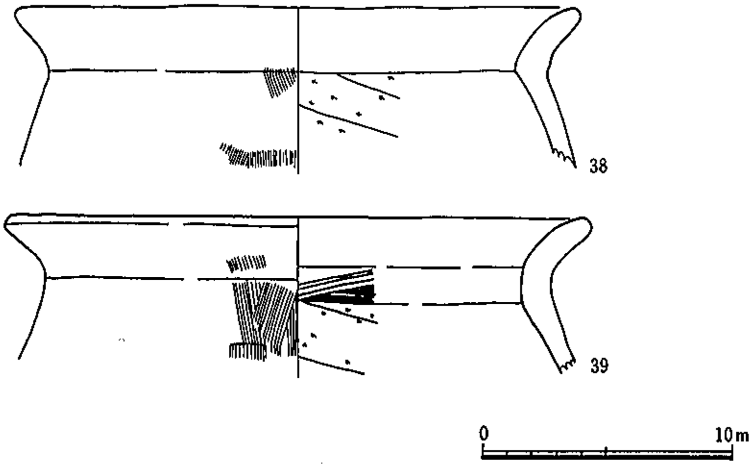


Fig.67　SK－19・20出土遺物実測図III

は高台を底部端に貼り付ける。高台は断面方形で小さい。体部は外傾しながら丸味をもってのび，端部は丸くおさめる。底部はヘラ削りである。内底部は多方向からのナデ調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整である。復原口径14.6cm，器高4.6cm。23は断面逆台形の高台が底部内側に貼り付けられる。外底部はヘラ削り調整，内底部は多方向からのナデ調整である。24は高台が底部端に近く貼り付けられる。高台端部は外に張る。体部は丸味をもってたちあがる。底部はヘラ削り調整。内底部は多方向からのナデ調整である。25は断面方形の高台が底部端近くに貼り付けられる。体部は丸味をもってたちあがる。焼成良好で堅緻である。底部はヘラ削り調整。体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。26は断面方形の高台が底部端に貼り付られる。高台の下端には凹線がめぐる。体部は外傾しながら直線的にのび，口縁部は丸くおさめる。底部はヘラ削り調整で，板状圧痕が残る。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整，内府部は多方向からのナデ調整である。口径12.8cm，器高4.1cm。

皿（16～20）5点がある。底部はヘラ切り後，荒いヘラ削り調整を加えている。体部は外傾しながら直線的にたちあがり，端部は丸くおさめる。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。16は復原口径14.2cm，器高1.5cm。17は復原口径14.4cm，器高1.8cm。18は外底部に平行タタキ目があり，その上にナデ調整がみられる。内底部の中央部には墨痕があり磨減している。底部の中央の高い部分を陸として，周辺の低い部分を海として硯に利用している。いわゆる転用硯である。口径13.9cm，器高1.7cm。19は土師器で器面が荒れているので調整痕は不明確。復原口径16.0cm，器高2.2cm。20は復原口径15.7cm，器高2.8cm。

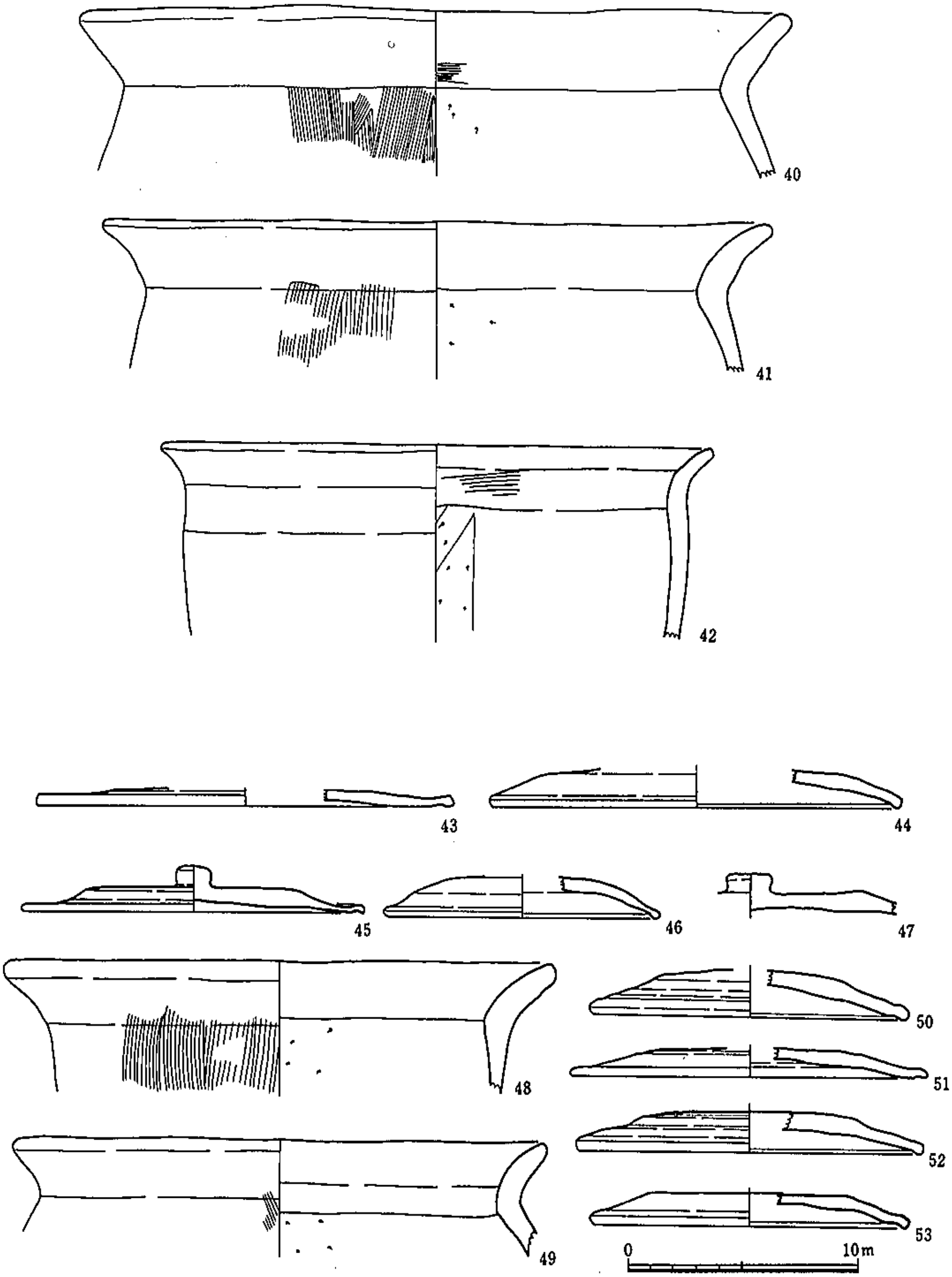


Fig.68　SK－19･20出土遺物実測図Ⅳ

盤（21.27）　２点がある。21は土師器である。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部は直線的にたちあがる。内面は丁寧なヘラ磨きである。27は須恵器。断面方形の大き目の高台を底部端近くに貼り付けている。底部から体部へはやや丸味をもって移行し，体部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。内外面共に横ナデ調整である。復原口径22.3cm。器高3.6cm。

𤭯（28）　頸部から口縁部にかけての破片である。頸部は小さく円筒状をなし，口縁にむかってラッパ状にひらく。口縁部では段をつくって，それより上部は内傾気味にたちあがる。頸部に沈線一条をめぐらす。内外面共に横ナデ調整である。焼成は良好で堅緻である。

壷（29，30）　29は小型の壷の胴部破片である。体部は球形で，最大幅の部分に沈線二条をめぐらしている。体部下半はヘラ削り調整，その他の内外面は横ナデ調整である。30はやや内傾してたちあがる口縁部をもつ大型の壷である。口縁端部は平坦にしている。胴部は大きく張るものと思われる。肩部に把手をつけるが剥落している。外面は擬格子のタタキを加えた後，カキ目調整。内面は口縁部が横ナデ調整。体部は同心円文のタタキである。復原口径16cmである。

甕（31～42，48，49）　14点を図示した。小型，中型，大型の三種類に分類できる。器形は，口縁がくの字に外反するものである。個々において若干の変化がある。調整は外面が縦方向の刷毛目調整で，口縁部はさらに横ナデ調整を加える。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整。胴部がヘラ削り調整である。31は口縁が外反し，胴部が張る。復原口径21.8cm。外面にススが付着する。32は胴部はあまり張らない。内面はヘラ削りでなく，刷毛目調整後横ナデ調整である。復原口径12.6cm。33は口縁が大きく外反し，胴部は張らない。復原口径20.0cm，34，36は口縁は短かいが大きく外反する。口縁部は上から粘土を重ね肥厚させている。外面は粗く太い刷毛目調整である。復原口径は34が14.0cm，36が17.2cmである。35は復原口径25.2cmである。37は復原口径22.4cm。胴部に黒班がある。38は胴部が張る。復原口径22.4cm，39は内外面にススが付

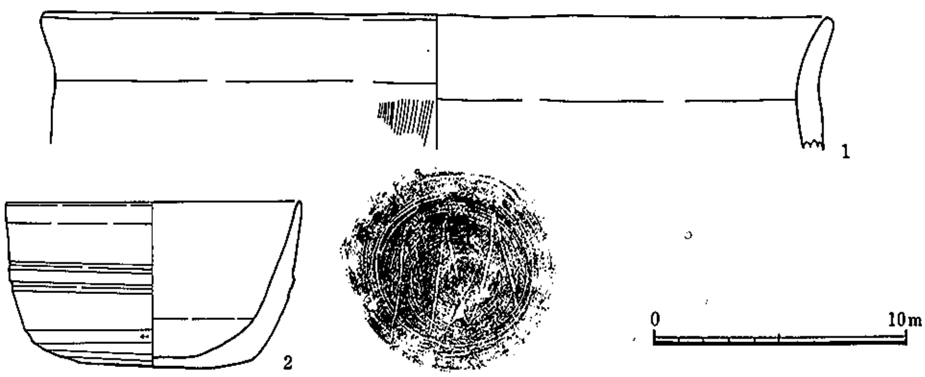


Fig. 69　SK－21出土遺物実測図

着する。復原口径23.2cm。40は口縁部がやや長い。胴部が張る。口縁内側にススが付着する。復原口径30.6cm。41は復原口径28.8cm。42は胴部が張らない。復原口径23.8cm，48は胴部が張らない。外面にススが付着する。復原口径23.7cm，49は胴が張る。二次的に加熱され変色している。復原口径23.0cm。

⒇ 第21号土壙と出土遺物

第21号土壙（SK－21）

調査区の西端，0－2～4グリットに検出した土壙である。SK－22のすぐ西側に位置している。他のまとまりのある遺構との重複関係はなく，単独で存在する。土壙は長径4.8m。短径1.8mの東西に細長い不整楕円形プランをなす。深さ20cm前後で，壙底は平坦で，断面形は皿状をなしている。埋土は黄褐色粘質土である。土壙内より須恵器，土師器，鉄滓等の遺物が出土しているが，量的には多くない。

出土遺物（Fig.69）

2点を図示した。器種には椀と甕がある。

1は土師器である。口縁部はあまり外反せず直口に近い。口縁端部は丸くおさめている。体部もあまり張らない。体部外面は縦方向の刷毛目調整で，口縁部はさらに横ナデ調整を加えている。内面は口縁部が横ナデ調整。体部はやや粗いヘラ削り調整である。頸部には稜線はない。復原口径31.4cmである。2は須恵器である。ほぼ完形品である。底部はヘラ切り後，丁寧な削り調整を加える。底部から丸味をもって体部に移行し，体部から口縁部は直口する。口縁端部はやや尖り気味におさめる。体部に沈線二条をめぐらしている。外面の調整は下半部がヘラ削り調整で，上半部は横ナデ調整。内面は体部から口縁部にかけては横ナデ調整で，内底部は多方向からのナデ調整である。口径11.6cm，器高6.6cmをはかる。胎土には砂粒を含む。焼成良好で堅緻である。

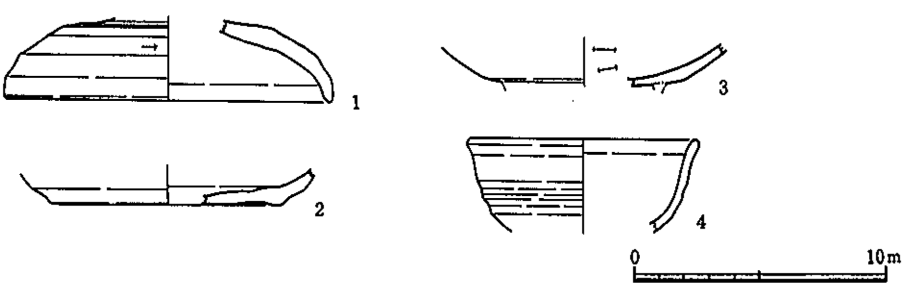


Fig.70　SK－22出土遺物実測図

㉑　第22号土壙と出土遺物

第22号土壙（SK－22）

調査区の西端部，0－4グリットに検出した土壙である。他の遺構との重複関係なく，単独で存在する。SK－21のすぐ東側に位置している。土壙は比較的小さく，長径1.25m，短径0.9の南北に長い楕円形プランをなす。深さは約10cmで，壙底は平坦である。埋土は黄灰褐色粘質土である。土壙内より須恵器，土師器が出土している。

出土遺物(Fig.70)　4点を図示した。器種は蓋，坏，高坏がある。1．4が須恵器，2が土師器，3が黒色土器である。

蓋（1）　体部と口縁部の境が不明瞭で，口縁端部は丸くおさめる。天井部は平坦である。天井部のヘラ削りは全面におよんでいる。ヘラ記号がある。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整を加えている。復原口径12.7cm，器高3.2cmである。

坏（2．3）底部破片2点がある。2は底部ヘラ切り後，荒いヘラ削り調整。板状圧痕がある。体部は丸味をもってたちあがる。体部内外面は横ナデ調整である。3は貼り付け高台をも

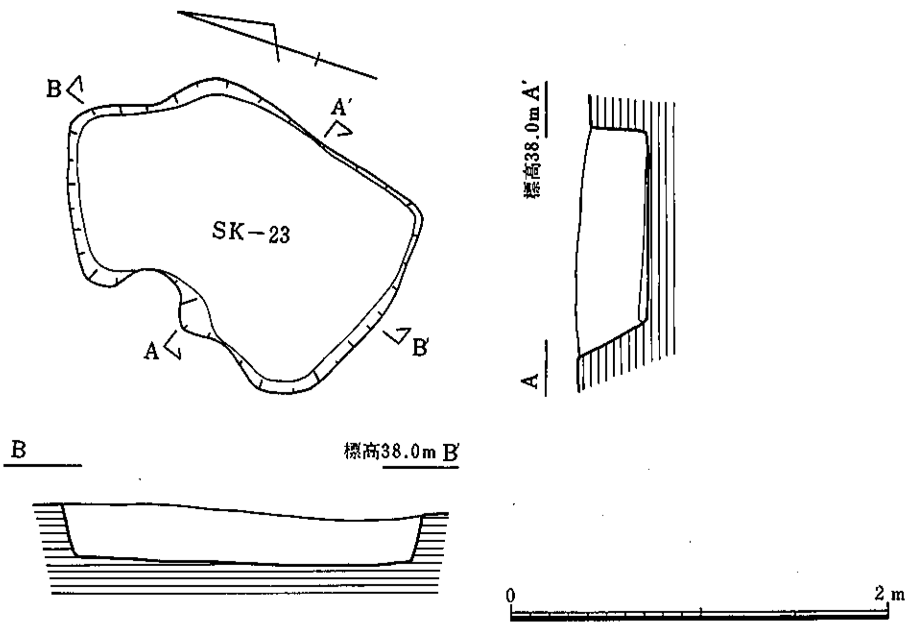


Fig.71　第23号土壙(SK－23)実測図

つが高台部が剝落している。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部は丸味をもってたちあがる。外面は横ナデ調整。内面は丁寧なヘラ磨きで，黒色で光沢をもっている。

高坏（4） 坏部破片である。体部に凹線二条をめぐらしている。口縁部はわずかに外反し，端部は丸くおさめている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。焼成良好で堅緻である。復原口径8.8cmをはかる。

(22) 第23号土壙と出土遺物

第23号土壙（SK－23）（Fig.71）

調査区の西端部，P－4，5グリットに検出した土壙である。他のまとまりのある遺構との重複関係はなく，単独で存在する。土壙は南北に長い。長径1.94m，短径1.33mの不整長方形プランをなす。深さ約30cm。壙底は平坦で，断面形は箱形をなす。埋土は黒灰褐色土層で粘質でない。土壙内から須恵器，土師器等の遺物が出土している。

出土遺物（Fig 72）

12点を図示した。器種は蓋 坏，甕がある。1～7が須恵器，8～12が土師器である。

蓋（1．3～6） 5個体がある。古墳時代のもの（1）と古代のもの（3～6）に大別できる。1は体部と口縁部の境が不明瞭で口縁部は丸くおさめる。天井部にはやや粗いヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。口縁部内側に凹線一条がめぐる。天井部内面は多方向からのナデ調整である。復原口径11.5cm 器高3.2cm。3は口縁部の屈曲は短く，下方にわずかにのびる程度で，端部は丸くおさめている。天井部は平坦で，ヘラ削り調整が加えられる。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。焼成不良で軟質である。復原口径15.2cm，器高1.6cm。4は口縁部の屈曲は短く，やや下方にのび，断面三角形をなす。体部はやや丸味をもつ。天井部はヘラ削り調整，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内側にヘラ記号がある。復原口径15.7cm，器高2.2cm。5は口縁部の屈曲は短いがやや下方にのび，断面三角形をなす。内面に一条の沈線がめぐる。天井部はやや丸味をもつ。ヘラ切り後，やや粗いヘラ削り調整を加える。中央部に扁平なボタン状のつまみをつける。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整，天井部内面の調整は磨滅し不明。全面に墨痕があり，転用硯とみられる。復原口径11.8cm，器高2.3cm。6の器形は5と同様である。天井部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。復原口径15.6cm，器高1.9cm。

坏（2，7） 2点がある。2は蓋受けのたちあがりは低いがあまり内傾しない。全体に器壁が薄い。内外面共横ナデ調整である。復原口径11.4cm。7は低い高台をもち，高台下端は外

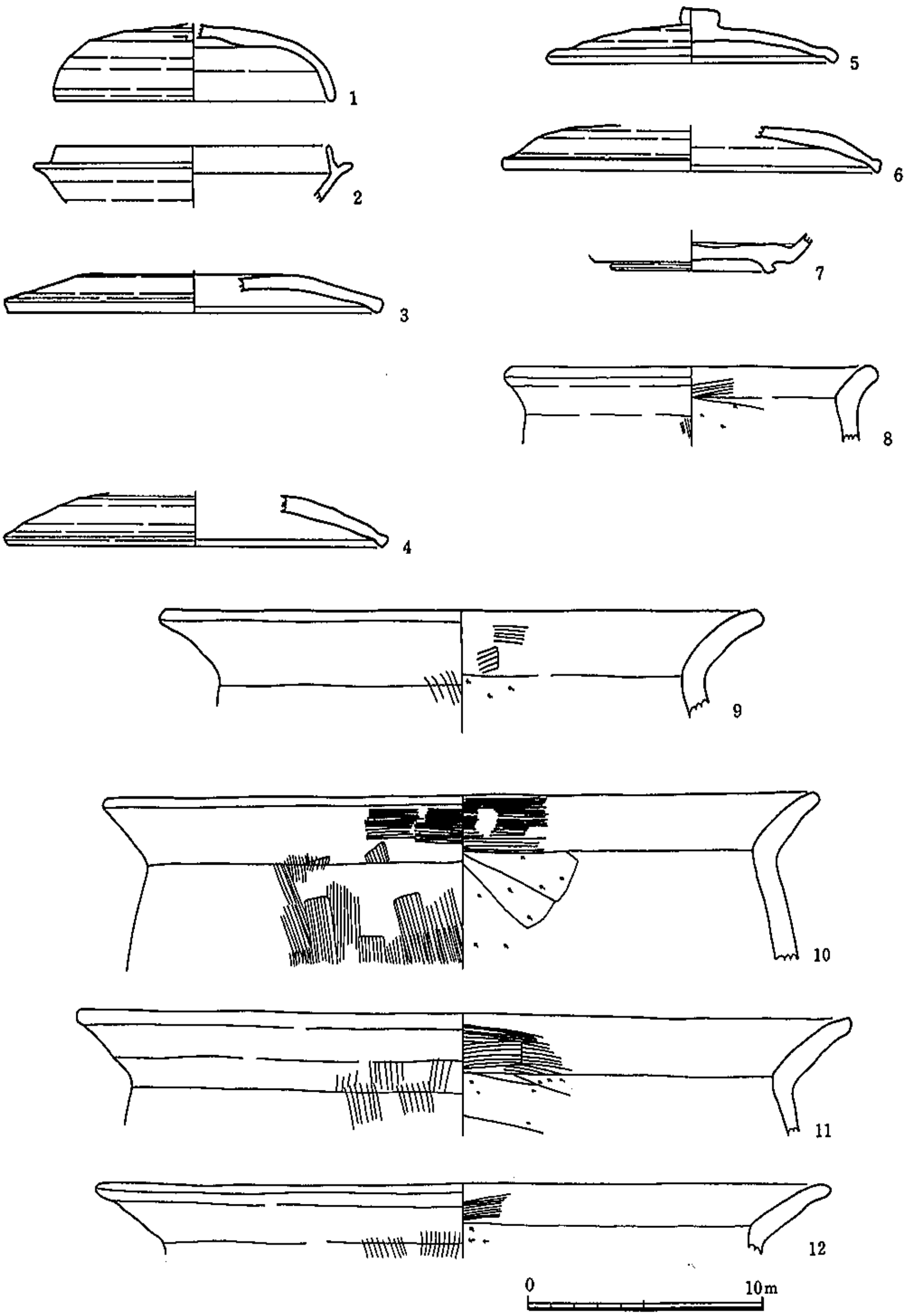


Fig. 72　SK－23出土遺物実測図

へ張る。高台は底部内側に貼り付けられている。体部は丸味をもってたちあがる。底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整。体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。

甕（8～12）　5個体を図示した。いずれも口縁部がくの字に屈曲し外反する。外面は縦方向の刷毛目調整で，口縁部はさらに横ナデ調整を加えている。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整か，あるいは横ナデ調整。体部がヘラ削り調整で，頸部に稜線がつくり出される。8は小型品で，内面にススが付着している。復原口径15.8cm。9は中型品で復原口径25.4cm。10は大型品で復原口径32.6cm。12は復原口径31.6cmである。

7．溝と出土遺物

(1) 第1号溝と出土遺物

第1号溝（SD－01）（Fig 73）

調査区の東端部，M－33，34，N－32，33，O－32，33，P－31，32，Q－31，32，R－31，32，S－31グリットにわたって検出した溝である。SB－21，第21号製鉄炉と重複関係にあり，本溝がSB－21，第21号製鉄炉を切っていて，後出である。なお，SB－21と第21号製鉄炉址の間にも切り合い関係があり，第21号製鉄炉址がSB－21の柱穴を切っている。よって切り合い関係からみた先後関係はSB－21→第21号製鉄炉→SD－01となる。溝は長さ25.8m，溝幅1.6～4.0m，深さ20～40cmで，比較的浅い。断面形は皿状をなす。埋土は暗褐色粘質土層で，溝底に若干の粗砂が介在する。溝の肩部には多くの柱穴が存在し，柵列等の存在を考え精査したが，組み合せがうまくいかなかった。溝と関連した何らかの施設があった可能性はある。本溝の西側には約5m離れてSD－02が平行している。両者が一体となって存在したのか否かは層位的には確認できなかったが，埋土等からみると時期を異にして存在したと思われる。この溝の性格は，この上流部が谷の湧水点にあたっている等を考えれば排水路の役割を果していたとも考えられる。また，溝の方向が南北を向いており，掘立柱建物群の柱すじと平行し，かつ，掘立柱建物群の東端に位置することを考えれば，居館を区画する性格の溝として考えることもできる。溝内からは須恵器，土師器，黒色土器等が出土しているが，SD－02と比較すればその量は少ない。

出土遺物（Fig.75）

8点を図示した。器種は蓋，坏，甕，円面硯等がある。1～6，8が須恵器で，7は土師器である。

蓋（1，2）1，2共に体部と口縁部の境は不明瞭で，口縁端部は丸くおさめる。内外面は

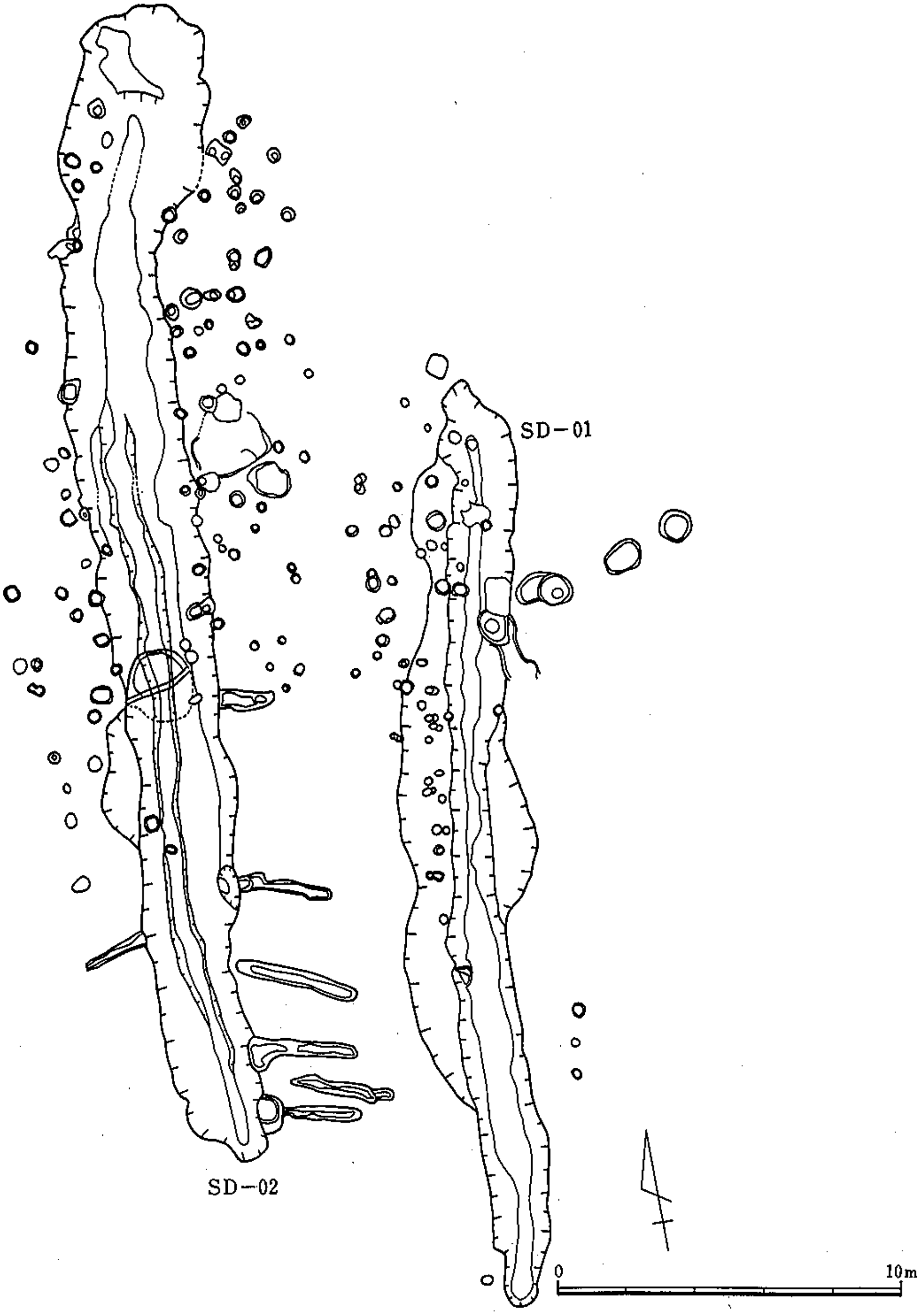


Fig. 73　第1・2号溝(SD－01・02)実測図

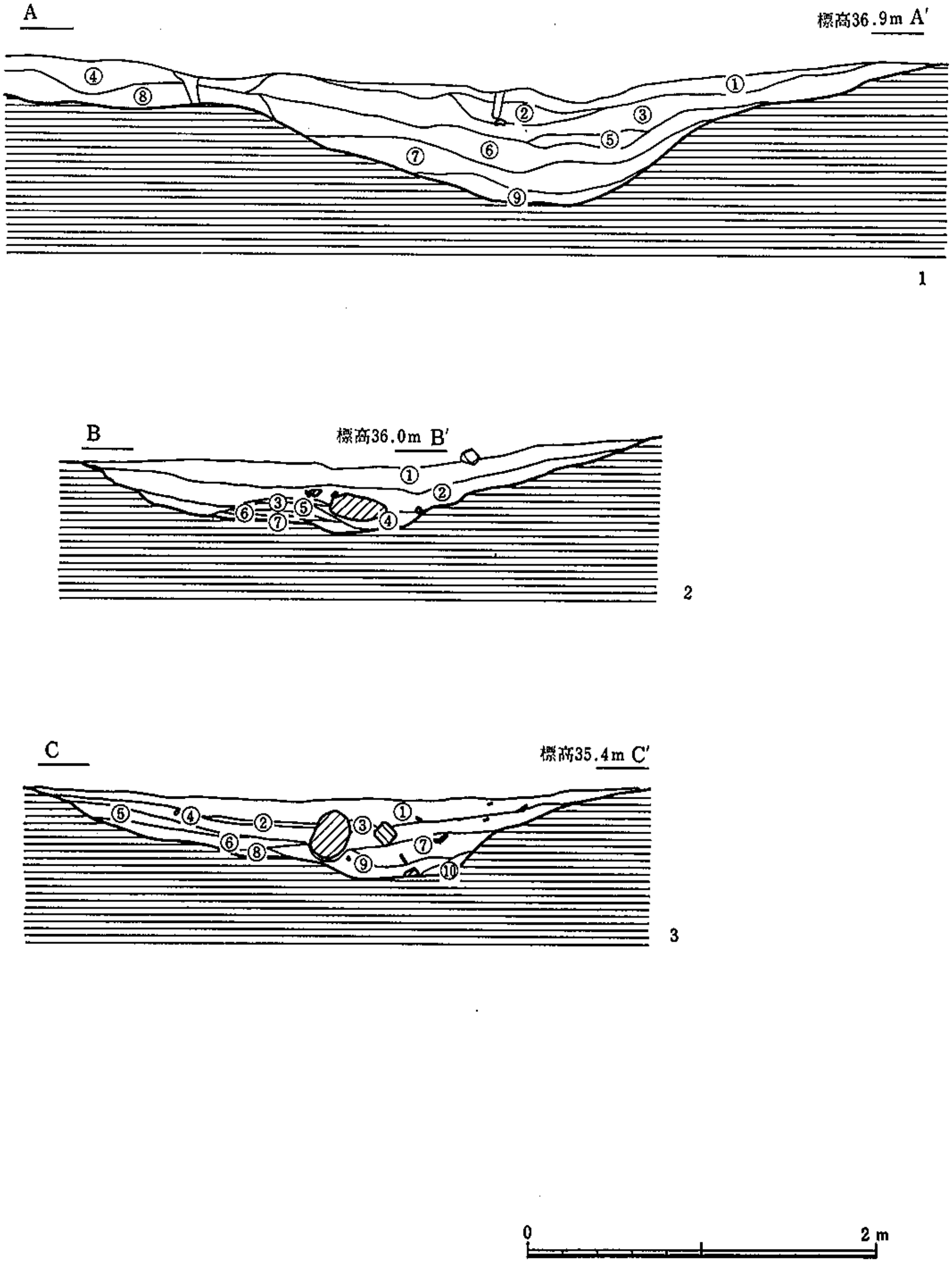


Fig.74　第2号溝(SD－02)断面実測図

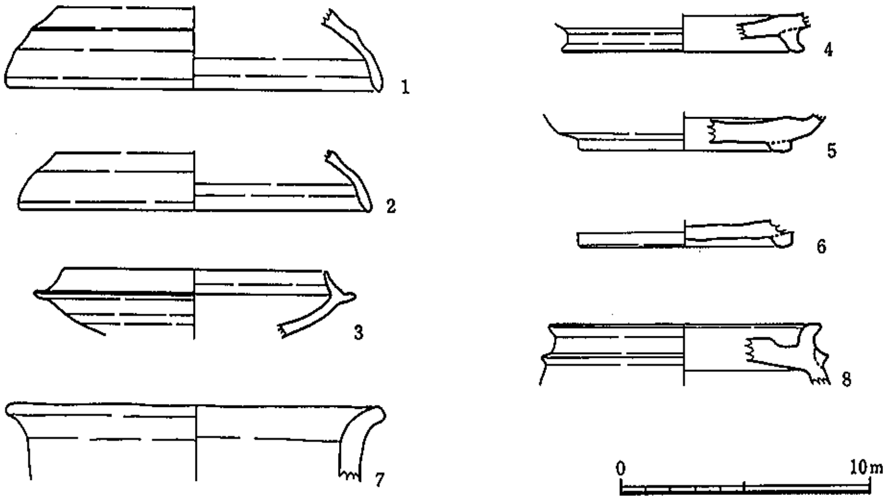


Fig. 75　SD－01出土遺物実測図

横ナデ調整である。焼成良好で堅緻である。１は復原口径14.6cm，２は復原口径13.8cmをはかる。

坏（３～６）　蓋受けのたちあがりのあるもの（３）と高台をもつもの（４～６）に大別できる。３は蓋受けのたちあがりが低く内傾し，口縁端部は尖り気味におさめる。受部に沈線一条をめぐらす。内外面共に横ナデ調整である。復原口径10.3cmである。４はやや高い高台を底部端に貼り付ける。高台端部は外側に張る。底部は丁寧なヘラ削り調整。５は断面方形の低い高台を底部内側に貼り付ける。底部は丁寧なヘラ削り調整。内底部は多方向からのナデ調整である。焼成不良で軟質である。６は断面方形の高台を底部端に直に貼り付ける。底部はヘラ削り調整。内底部は多方向からのナデ調整である。

甕（７）　小型品で，口縁部は外反し，口縁端部は丸くおさめる。内外面共にナデ調整である。焼成がやや不良でもろい。

円面硯（８）　硯部の破片である。硯部下位に外堤を貼付し海をつくっている。陸部は使用のため磨滅する。外堤部端は外へ張りだし，その下位に断面三角形の突線一条をめぐらしている。圏台は欠損する。外堤径10.4cmで小型品である。

(2)　第２号構と出土遺物

第２号溝（SD－02）（Fig73，74）

調査区東端部，Ｊ－31～33，Ｋ－31，32，Ｌ－31，32　Ｍ－30，31　Ｎ－30，31　Ｏ－30，31，Ｐ－29，30，Ｑ－29，30グリットにわたって検出した溝である。SD－03，04，05，07，08，SK－08と重複関係にあり，SK－08は本溝を切り，SD－03～05，07，08は本溝に切られている。SD－03～05，07，08は本溝に先行し，SK－08は本溝より後出する遺構である。溝は長さ33.3m，溝幅2.3～4.1m，深さ45～75cmで，断面形は幅広いＵ字形をなす。溝の断面形および土壙断面は第74図に示した。

１はＫ－31，32グリットにおける溝断面である。上より第１層，暗褐色粘質土層　厚さ５～10cm。第２層，淡褐色砂質粘土層　レンズ状に堆積し，厚さ約10cm。第３層，淡褐色粘土質土層　厚さ５～15cm。第４層，淡褐色粘質土層で第３層とあまりかわらない。厚さ５～20cm。第５層，灰色粗砂層　レンズ状に堆積し，厚さ約５cm。第６層，淡褐色粘土層　厚さ10～20cm。第７層，灰褐色粘土層　厚さ５～20cm。第８層，橙灰色粘質土層　厚さ15cm前後。第９層，灰褐色砂質粘土層　厚さ５～10cm。

２は０－30グリット北側断面図である。上より第１層，暗褐色粘質土層　厚さ５～15cm。第２層，淡褐色粘土層　厚さ５～15cm。第３層，明橙色混砂層　厚さ３cm。第４層，褐色粘土層　厚さ５cm。第５層，暗褐色砂層　厚さ４cm。第６層，明褐色砂層　厚さ２cm。第７層，淡褐色砂層　厚さ２～５cmとなっている。

３はＭ－30，31グリットにおける溝断面図である。上層より第１層，暗褐色粘質土層　厚さ５～15cm。第２層，黒褐色砂層　厚さ２cm。第３層，褐色砂質土層　厚さ５cm。第４層，淡褐色粘土層　厚さ５～10cm。第５層，酸化鉄沈着砂層　厚さ７cm前後。第６層，褐色砂質粘土層　厚さ５cm。第７層，灰褐色粘土層　厚さ15cm前後。第８層，灰褐色砂質粘土層　レンズ状に堆積し，厚さ４cm。第９層，灰褐色砂層　厚さ５～10cm。第10層，橙褐色砂質土層　レンズ状の堆積で厚さ５cmとなっている。

溝の両側および肩部には多数の柱穴があり柵列等の存在が予想されたが確認するにいたらなかった。何らかの施設があった可能性は強い。溝の性格等は前述したとうりである。溝内より須恵器，土師器等が多量に出土している。

出土遺物（Fig.76～8）

35点を図示した。器種には蓋，坏，皿，盤，高坏，長頸壺，椀，甕がある。１～18，21～32，35は須恵器で，19，20，33，34は土師器である。

蓋（１～６）　６点を図示した。いずれも口縁部を屈曲させ，天井部に扁平なボタン状のつまみをつける。口縁部から体部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部は丁寧なヘラ削り調整。天井部内面は多方面からのナデ調整である。口縁部の形態は個体によって異なる。１は口縁は下方にのび端部は丸くおさめる。口縁内側に沈線一条をめぐらす。外面は凹線状になる。重ね焼きの痕跡が顕著に残る。復原口径15.0cm，器高3.8cm。２は天井部が平坦で，口縁部は断面三

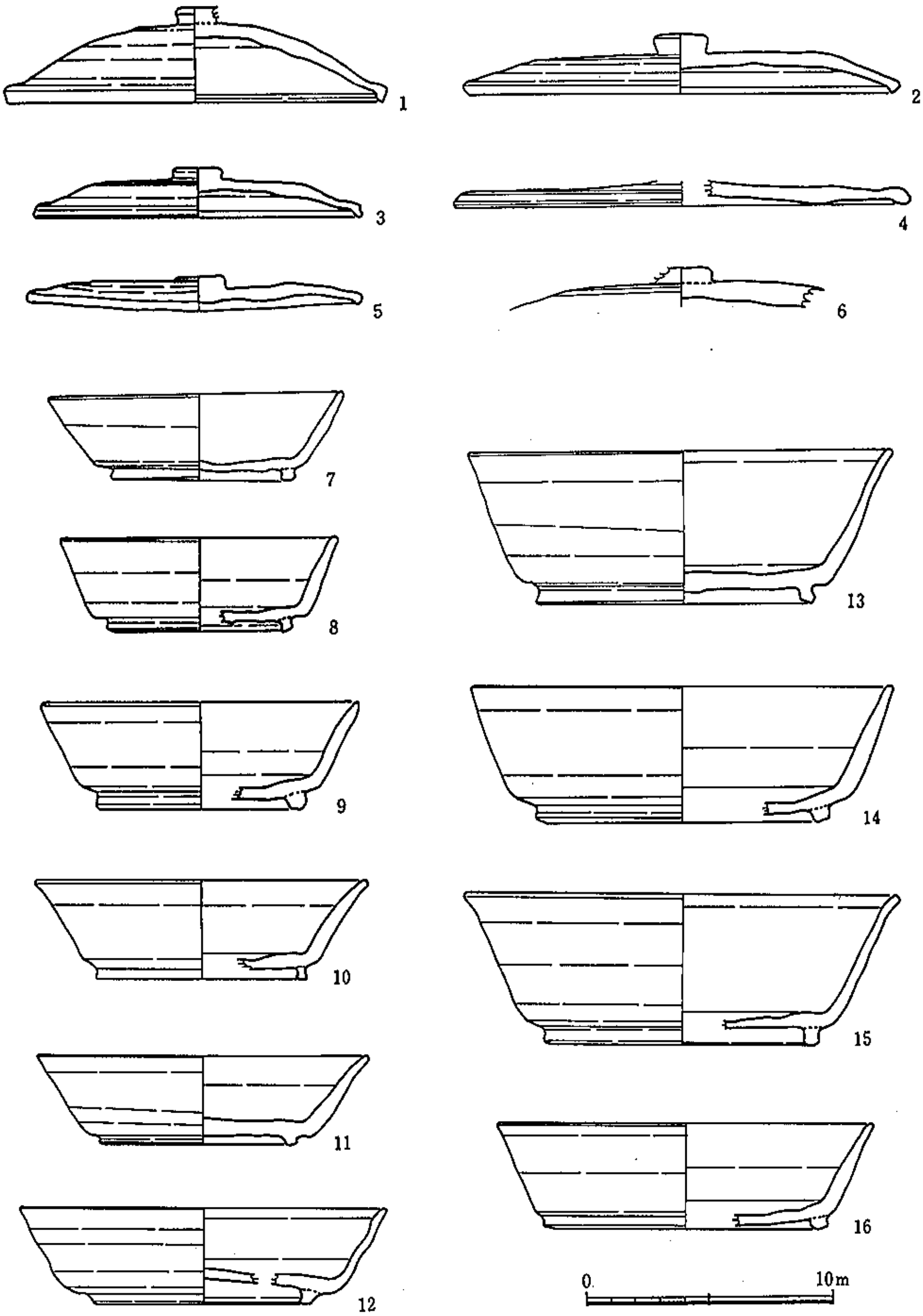


Fig. 76　SD－02出土遺物実測図Ⅰ

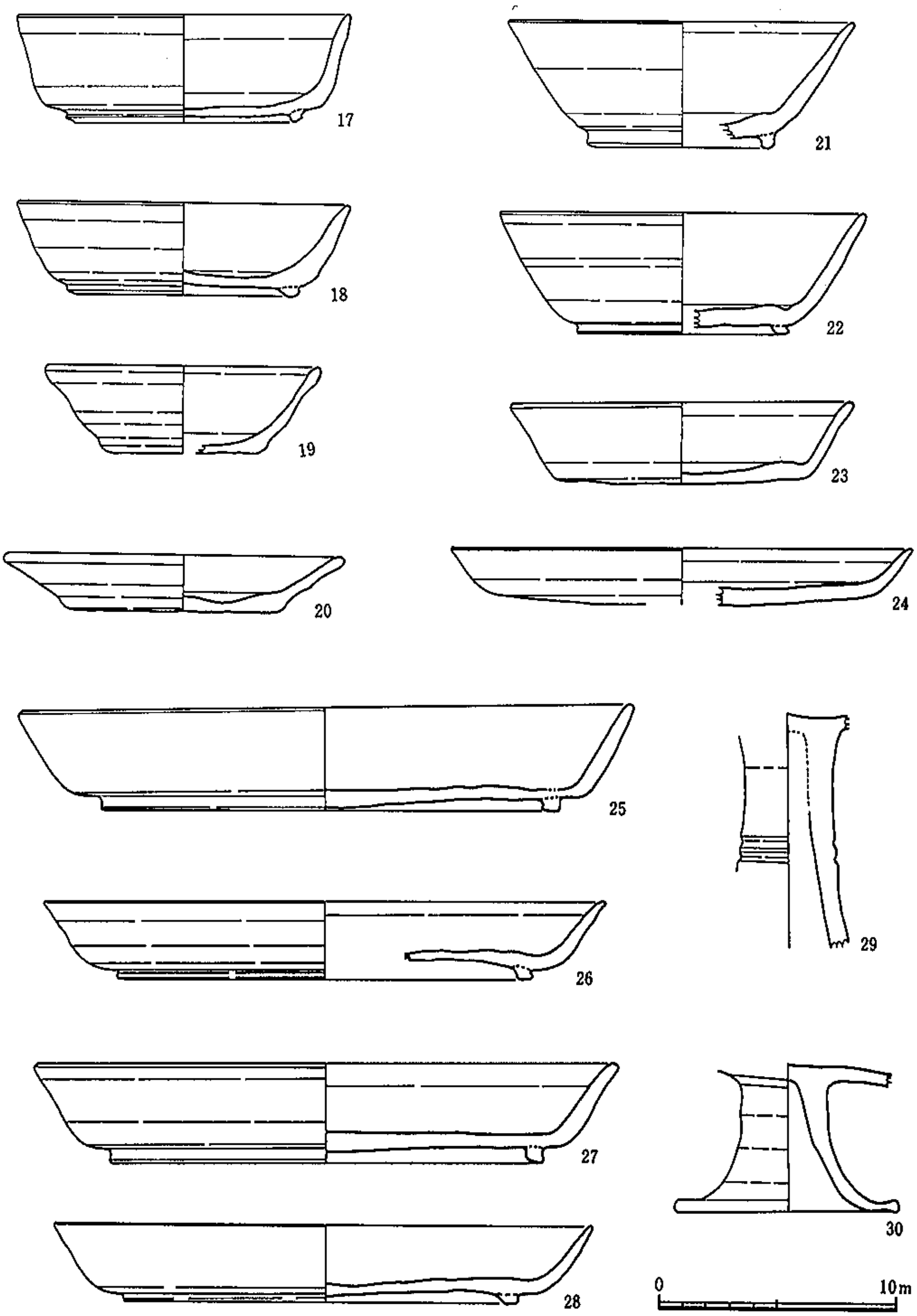


Fig. 77　SD－02出土遺物実測図II

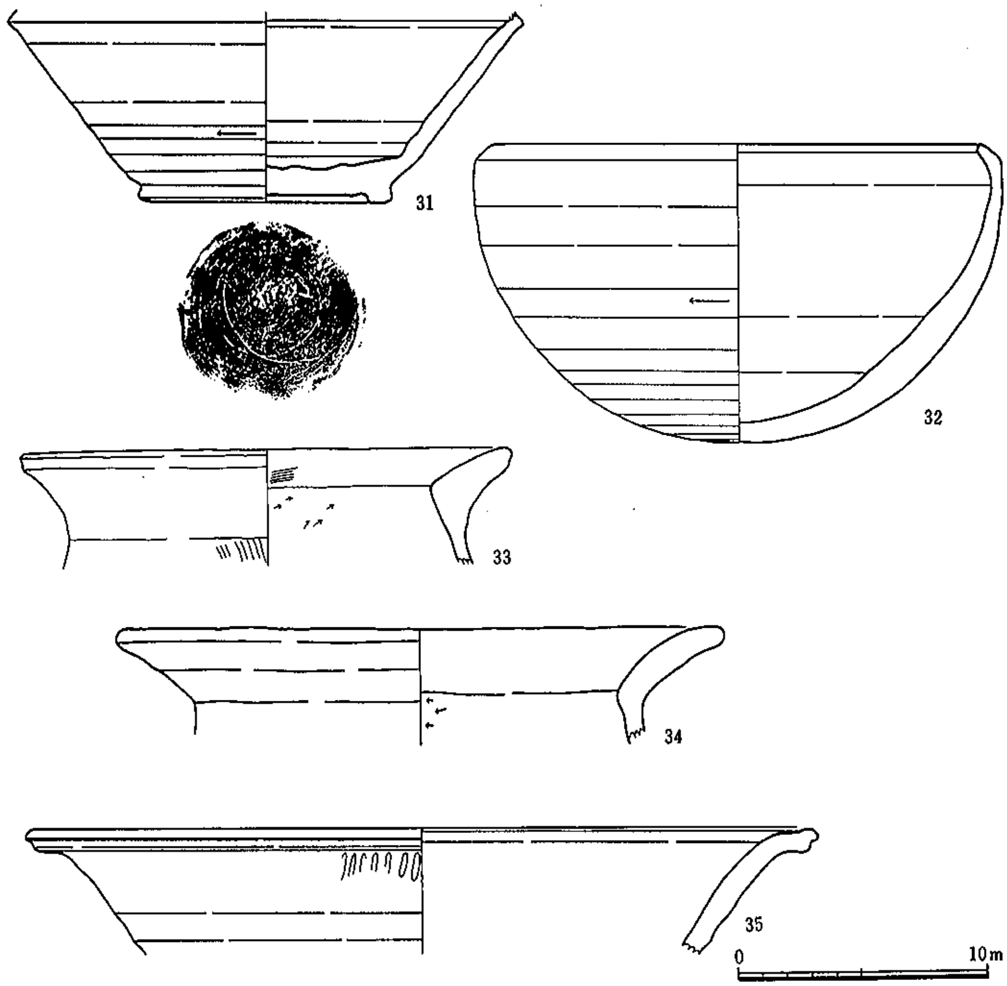


Fig. 78　SD－02出土遺物実測図Ⅲ

角形をなす。焼成はやや不良で軟質である。復原口径17.0cm，器高2.5cm。3は口縁部が下方にのび端部は丸くおさめる。外面に凹線一条をめぐらす。天井部は平坦である。復原口径13.0cm，器高2.0cm。4は口縁部がやや下方にのび，端部は丸くおさめる。外面に凹線一条をめぐらす。全体に扁平である。つまみの有無は不明。復原口径18.1cm，器高1.0cm。5は口縁部はほとんど痕跡を残すのみで，内側に沈線一条をめぐらす。天井部は平坦である。口径13.1cm，器高1.4cm。全体に扁平である。6は口縁部を欠く。焼成不良で軟質である。

坏（7～23）　17個体がある。高台をもつもの（7～18，21，22）と平底のもの（19，20，

23）に大別できる。高台をもつ坏は高台を底部端よりやや内側に貼り付ける。体部は外傾しながらたちあがり，口縁端部は尖り気味におさめる。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整である。内底部は多方向からのナデ調整を加えている。7は高台が断面方形で外側に若干張る。口径11.8cm，器高3.6cm。8の高台は7と同様で，口縁部が若干外反する。復原口径11.0cm，器高3.8cm。9，高台は断面逆台形で直に貼り付ける。体部は直線的にのびる。復原口径12.5cm　器高4.3cm。10は体部が直線的にのび，口縁部が外反する。復原口径13.1cm　器高4.0cm。11は底部に板状圧痕が残る。口径13.1cm，器高3.6cm。12は高台端部が内側に張り出す。底部に板状圧痕をもつ。体部に凹凸がある。復原口径14.7cm。器高3.9cm。13は高台端部が外方へ張る。体部は外傾しながらたちあがり，口縁部が外反する。口径17.1cm，器高6.2cm。焼成不良で軟質である。14，底部にナデが加えられる。体部に凹凸がある。復原口径16.6cm，器高5.5cm。胎土に多量の砂粒を含む。15は高台の断面は方形で直に貼り付けられる。体部は直線的にのび，口縁部が外反する。復原口径17.3cm，器高6.1cm。16は高台断面方形で，体部は直線的にのびる。復原口径14.8cm，器高4.3cm。焼成不良で軟質である。17は高台端が凹線状をなす。底部に板状圧痕が残る。口径13.8cm，器高4.6cm。18は復原口径13.7 cm，器高3.9cm。21は高台の断面方形。体部は直線的にのびる。復原口径14.3cm，器高5.3cm。22は高台端部が外側に張る。復原口径15.2cm，器高5.1cm。平底の坏は2点(19，20)が土師器で，1点23が須恵器である。19は底部ヘラ切り後，ヘラ削り調整。体部は外傾しながらたちあがるが凹凸がある。口縁部は肥厚し，丸くおさめる。外面に化粧土がかけられている。復原口径11.2cm，器高3.7cm。20はヘラ切り後，わずかにヘラ削り調整を加える。体部は著しく外傾しながらたちあがる。体部に凹凸がある。口縁端部は丸くおさめる。体部から口縁部にかけては横ナデ調整。復原口径13.8cm，器高2.4cm。23は底部ヘラ切りで，わずかにヘラ削り調整を加える。体部は外傾しながら直線的にのび口縁部は外反する。体部から口縁部にかけては横ナデ調整。内底部は多方向のナデ調整である。復原口径14.3cm，器高3.5cmである。

皿（24）　底部ヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整を加える。体部は外傾しながら直線的にのび，口縁端部は尖り気味におさめる。器面が荒れているため他の調整痕は不明，復原口径19.1cm，器高2.4cm。

盤（25～28）　4点を図示した。いずれも須恵器である。いずれも断面逆台形の高台を底部端よりやや内側に貼り付けている。体部は外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整を施す。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。25は底部に板状圧痕がある。高台貼り付け面は特別の細工はない。口径25.6cm，器高4.4cm。26は口縁部がわずかに外反する。復原口径23.4cm，器高3.3cm。27は復原口径24.2cm，器高4.2cm。28は口径22.8cm。器高3.3cmである。

高坏（29，30）　2点を図示した。いずれも脚部破片である。29は長脚の脚筒部である。中位に凹線二条をめぐらしている。内面にはしぼりの痕跡が明瞭に残る。内外面共に横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。30は脚は短い。脚端近くで大きく開き脚端部は嘴状に退化し，内側に沈線一条をめぐらす。脚部は内外面共に横ナデ調整。坏部は底部がヘラ削り調整で，内底部が多方向からのナデ調整である。

長頸壺（31）　胴下半部が現存する。幅広くて低い高台を底部端に貼り付けている。体部は外傾しながら直線的にのび，胴中位で鋭い稜線をもって内傾する。底部はヘラ切り後丁寧なヘラ削り調整。体部も下半部はヘラ削り調整で上半は横ナデ調整である。内面は横ナデ調整。底部中央にタタキの当て具の痕跡が明瞭に残っている。外底部にヘラ記号がある。

鉢（32）　底部は丸底で，外傾してたちあがる体部は半球状をなし，口縁部は大きく内反する。底部から胴部下半は丁寧なヘラ削り調整。上半部は横ナデ調整である。内面は底部が多方向からのナデ調整で，他はすべて横ナデ調整である。復原口径19.2cm，器高11.8cmである。

甕（33～35）　3個体を図示した。33，34は土師器で35は須恵器である。33，34は口縁部がくの字に外反し，端部は丸くおさめる。胴はあまり張らない。胴部外面は縦方向の刷毛目調整。口縁部は横ナデ調整。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整後，横ナデ調整を加える。胴部はヘラ削りで頸部に稜線をつくり出す。復原口径は33が19.5cm，34が24.0cmである。35は外傾しながらたちあがる頸部が，口縁部でさらに外反し，口縁端に凹線一条をめぐらす。内側はやや突出する。外面は擬格子のタタキの後，横ナデ調整を加える。内面は横ナデ調整である。復原口径30.6cmをはかる。

(3)　第3号溝と出土遺物

第3号溝（SD－03）（Fig.79）

調査区の東端部，N－31グリットに検出した溝である。SD－02と重複関係にあり，SD－02によって切られていて，SD－03がSD－02に先行することは明らかである。溝は東西方向を向き等高線に平行している。長さ2.76m，溝幅20～40cm，深さ10cm前後で断面U字形をなしている。溝は西端で，長径1.3m，短径0.6m，深さ25cm（現状の大きさで。SD－02に切られているので，復原すればさらに大きくなる。）の土壙に連結している。また，SD－02を介して対岸に位置するSD－08と連なる可能性も高い。SD－03をはじめ，SD－04～09はある一定の間隔をもって平行している。別地点に存在するSD－11～15も同様の配置を示しているので，数本の溝が集って一つの機能を果していたことが想像できる。土壙と連接する例が多く，また，周辺に存在する製鉄関連遺構からみて製鉄に関連した溝とみられる。

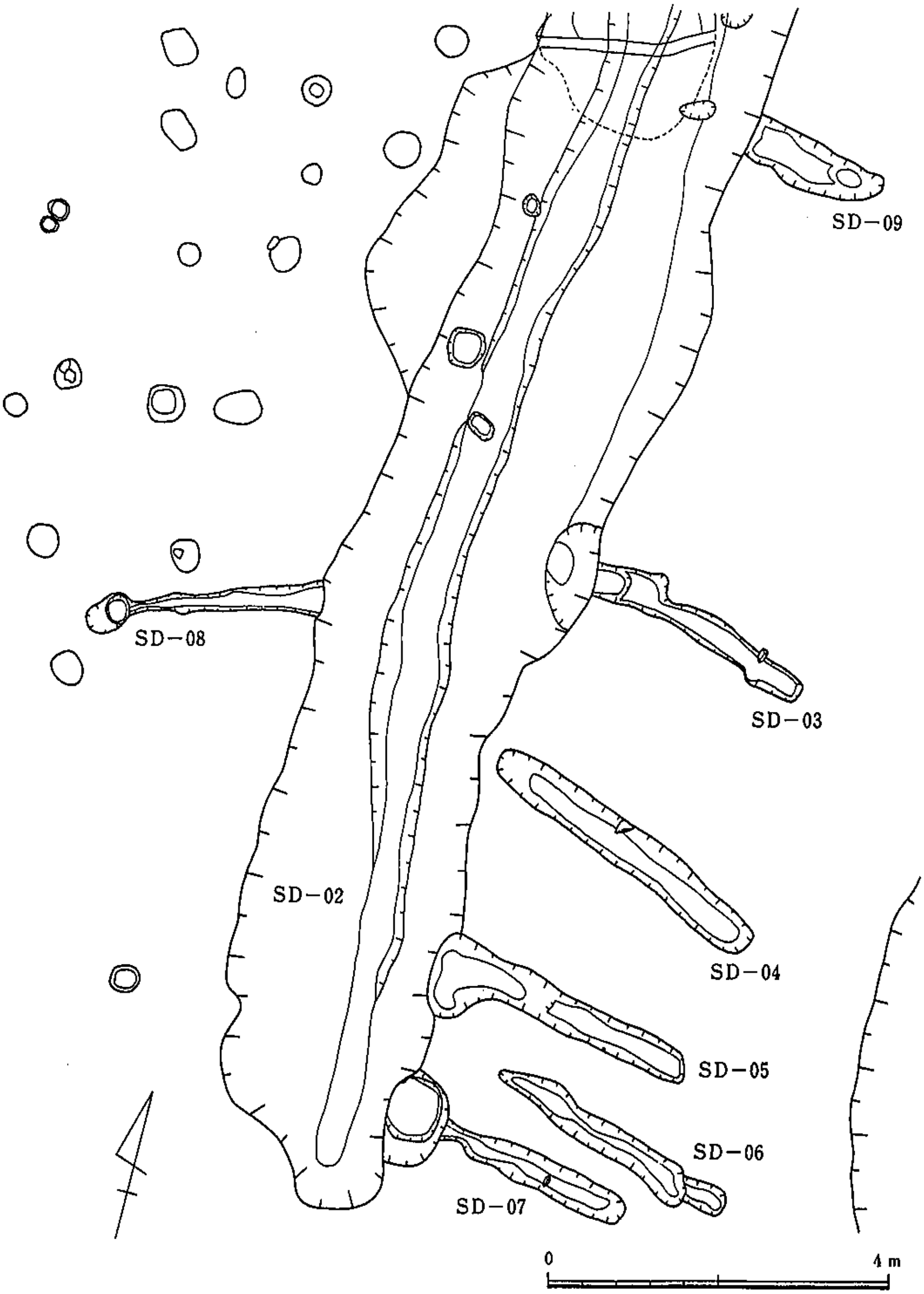


Fig. 79　第３～９号溝(SD－03～09)実測図

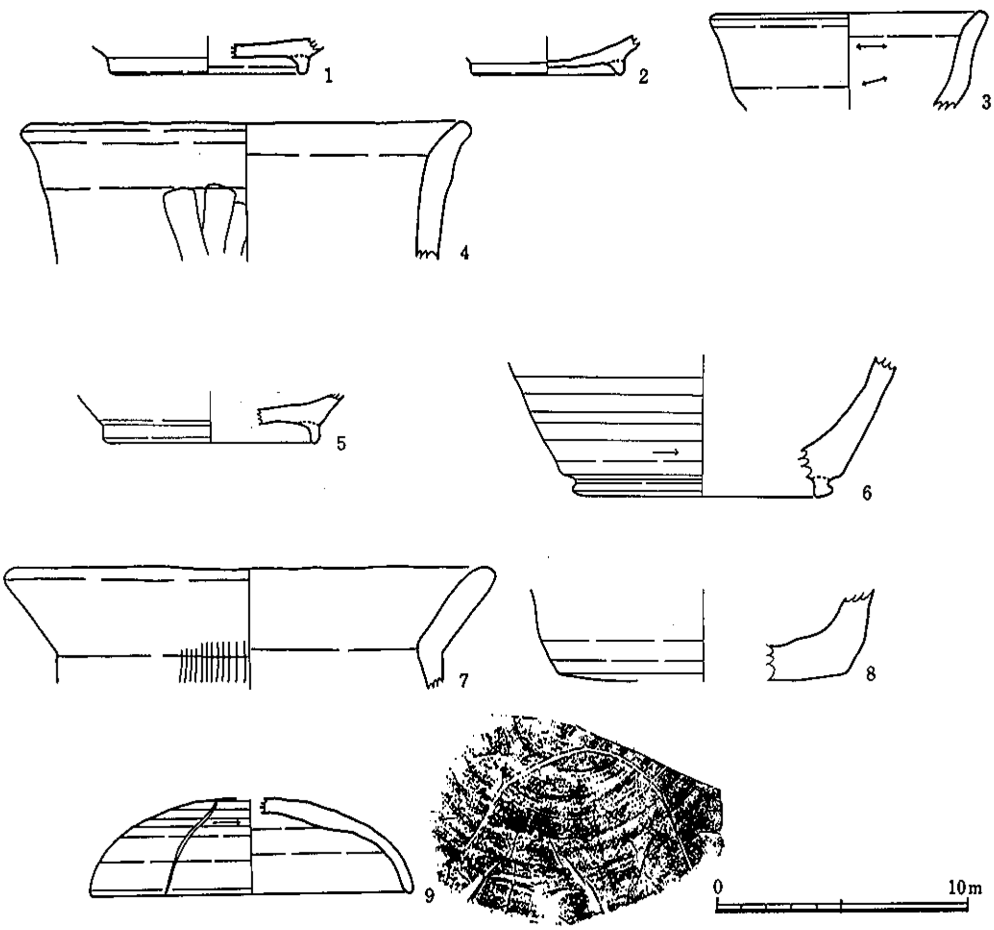


Fig.80　SD－03～09出土遺物実測図

出土遺物（Fig.80）

4点を図示した。器種に坏，椀，甕がある。1，2は黒色土器，3，4は土師器である。

1，2は共に坏底部破片である。1は断面逆台形のやや高い高台が，2は断面三角形の低い高台が，底部端に貼り付けられる。体部は外傾しながらたちあがる。底部は丁寧なヘラ削り調整である。内面はヘラ磨き調整。3は口縁部がわずかに外反し，端部は丸くおさめる。内外面共横方向の刷毛目調整。復原口径10.3cm。4は口縁部がわずかに外反し，体部は張らない。外面は口縁部が横方向の刷毛目調整。胴部が縦方向の粗い刷毛目調整，内面は口縁部が横ナデ調整，胴部はヘラ削りである。復原口径17.8cmである。

(4) 第4号溝と出土遺物

第4号溝（SD－04）（Fig.79）

調整区の東端部，P－30，31，Q－31グリットにわたって検出した溝である。他の遺構との重複関係はみられず，単独で存在する。SD－03は本溝の約2.1m離れた北側に，SD－05は約1.5m離れた南側にそれぞれ平行した状態で位置している。溝は長さ3.64m，溝幅45～50cm。深さ6～10cmと浅い。断面はU字形をなす。中より須恵器，土師器が若干出土した。

出土遺物（Fig.80）

2点を図示した。器種は坏と壺である。5は土師器。細く高い高台を底部端に貼り付け，体部は外傾しながらたちあがる。底部は丁寧なヘラ削り，体部は横ナデ調整である。6は壺の底部破片である。断面方形の高台を底部端よりやや内側に貼り付ける。底部および体部下半は丁寧なヘラ削り調整。体部上半は横ナデ調整。内面は横ナデ調整である。

(5) 第5号溝と出土遺物

第5号溝（SD－05）（Fig.79）

調査区の東端部，Q－30，31グリットにわたって検出した溝である。SD－02と重複関係にあり，SD－02によって切られている。SD－02に先行して存在した溝であることは明確である。SD－04は本溝の約1.5m離れた北側に，SD－06は約0.7m離れた南側にそれぞれ平行して位置する。溝は長さ4m，溝幅約50cm，深さ約25cmで，断面U字形をなす。SD－02に切られる部分で，溝幅が約1.0mに広がるのは他例と同様に土壙に連接していることを示している。溝より須恵器，土師器若干が出土している。

出土遺物（Fig.80）

2点を図示した。7は土師器の甕である。口縁部はくの字に外反し，口縁端部は丸くおさめる。外面は縦方向の刷毛目調整。内面は胴部はヘラ削り調整で，頸部に稜線を形成する。復原口径19.4cm。8は須恵器で盤底部と考えられる。底部は平底で，ヘラ削り調整を加えている。体部は丸味をもってたちあがる。内外面共横ナデ調整である。外面には自然釉がみられる。

(6) 第6号溝と出土遺物

第6号溝（SD－06）（Fig.79）

調査区の東端部，Q－30，31グリットにわたって検出した溝である。他の遺構との重複関係はみられず単独で存在する。SD－01とSD－02にはさまれ，SD－05は約0.7m離れた北側に，SD－

07は約0.3m離れた南側に，それぞれ平行関係で位置している。溝は長さ3.06m，溝幅30～40cm，深さ約10cmで断面U字形をなす。

出土遺物

溝より須恵器，土師器が若干出土しているが，いずれも小片で図示することはできない。

(7)　第7号溝と出土遺物

第7号溝（SD－07）（Fig.79）

調査区の東端部，Q－30グリットに検出した溝である。SD－02と重複関係にあり，SD－02に切られている。SD－02より先行する溝である。SD－01とSD－02にはさまれ，SD－06が約0.3m離れた北側に平行して位置する。溝は長さ2.3m，溝幅15～40cm，深さ10cm前後で断面U字形をなす。西側で径1.15m，深さ約30cmの円形土壙と連接している。

出土遺物

溝内より須恵器，土師器が若干出土しているが，いずれも細片で図示することはできない。

(8)　第8号溝と出土遺物

第8号溝（SD－08）（Fig.79）

調査区の東端部，P－29，30グリットにかけて検出した溝である。SD－02と重複関係にあり，SD－02に切られている。SD－02より先行す溝である。SD－02の西側にのびる。SD－03と連接する可能性もある。溝は長さ2.3m，溝幅10～40cm，深さ3～10cmと浅い。西端で径55～35cm，深さ40cmのピットと連接する。

出土遺物

溝内より須恵器，土師器が若干出土しているが，いずれも細片で図示することができない。

(9)　第9号溝と出土遺物

第9号溝（SD－09）（Fig.79）

調査区の東端部，N－31グリットに検出した溝である。SD－02と重複関係にあり，SD－02に切られている。SD－02に先行する溝である。SD－01とSD－02にはさまれ，SD－03が約4.7m離れた南側に平行関係で位置している。溝は長さ1.65m，溝幅40～60cm，深さ10～15cmである。断面は浅い皿状をなす。溝内より須恵器，土師器が若干出土している。

出土遺物（Fig.80）

１点を図示した。９は須恵器の蓋である。体部と口縁部の境は不明瞭で，口縁端部は丸くおさめる。天井部は丸味をもち，½の範囲にヘラ削り調整を加える。口縁部から体部にかけての内外面は横ナデ調整で，天井部内面は多方向からのナデ調整である。天井部外面にヘラ記号をもつ。復原口径13.5cm，器高3.8cmである。

⑽　第10号溝と出土遺物

第10号溝（SD－10）（Fig.５）

調査区の南端部，建物群の立地する段丘面下において検出した溝である。溝として説明するが，実際は樋井川本流から人工的に引き込まれた小河川である。樋井川の本流はＬ調査区で一部検出したが，今と異なりやや北側を流れていて，引き込みは簡単であったと思われる。Ｌ調査区の調査では本流の岸の一部を確認したにすぎないが，かなりの川幅と深さもっていたことは疑いない。SD－10の深さを考えれば，当然のこととして，樋井川本流にも堰が設置されていたことは疑いなかろう。しかし，時間的問題と労力を考え，樋井川本流の堰については確認調査をおこなわなかった。余談であるが，もし，ここに大規模な堰が存在したとすれば，それが毘伊郷の名のおこりであった可能性もある。

本流から引き込まれた小河川，SD－10は南側から北に向って直進，居館前で大きく屈曲し，流れを東に変え，約80ｍ東流し，再び大きく屈曲し，流れを南にかえている。このSD－10の流路は段丘部にある居館に伴う造成工事の範囲と相似形をなしており，当初から計画的に引き込まれた小河川であることがわかる。川幅は８～15ｍで場所によって大きく異なる。深さ60cm前後で，比較的浅い。

この小河川からは，須恵器，土師器をはじめとして，青磁器，白磁器，瓦，硯，鉄滓，炉壁，フイゴ等の遺物が多量に出土している，特に遺物が集中するのは，後述する井堰の周辺である。

土層堆積（Fig.81､82）

小河川の土層堆積は西側井堰付近と東側屈曲部付近の二ケ所を図示した。

Fig.81は井堰付近の土層断面図である。水田耕作土および水田床土を除いた後の状態である。上層から説明すると，第１層，灰色混砂土層，部分的に存在する。第２層，黄褐色混砂土層，第３層，淡褐色土層，第４層，暗褐色粘質土層，第３，４層共に水田土壊の可能性が強い。第５層、粗砂層、第６層、少し土を混じえた細砂層、第７層、細砂層、第８層，淡褐色砂質粘土層，第９層，暗褐色砂質粘土層，第10層，淡褐色粗砂層，第11層，茶褐色細砂層，第12層，暗褐色細砂層，第13層，粗砂層，第14層，暗褐色砂層，第15層，黒灰色粘質砂層　第16層　上より砂の粒子の荒い黒灰色粘質砂層，第17層　第15層と同様の層，第18層，粗砂層，第19層，灰色砂層，第20層　暗褐色砂質粘土層，第21層　粗砂層，第22層，暗灰色砂層，第23層，暗褐色

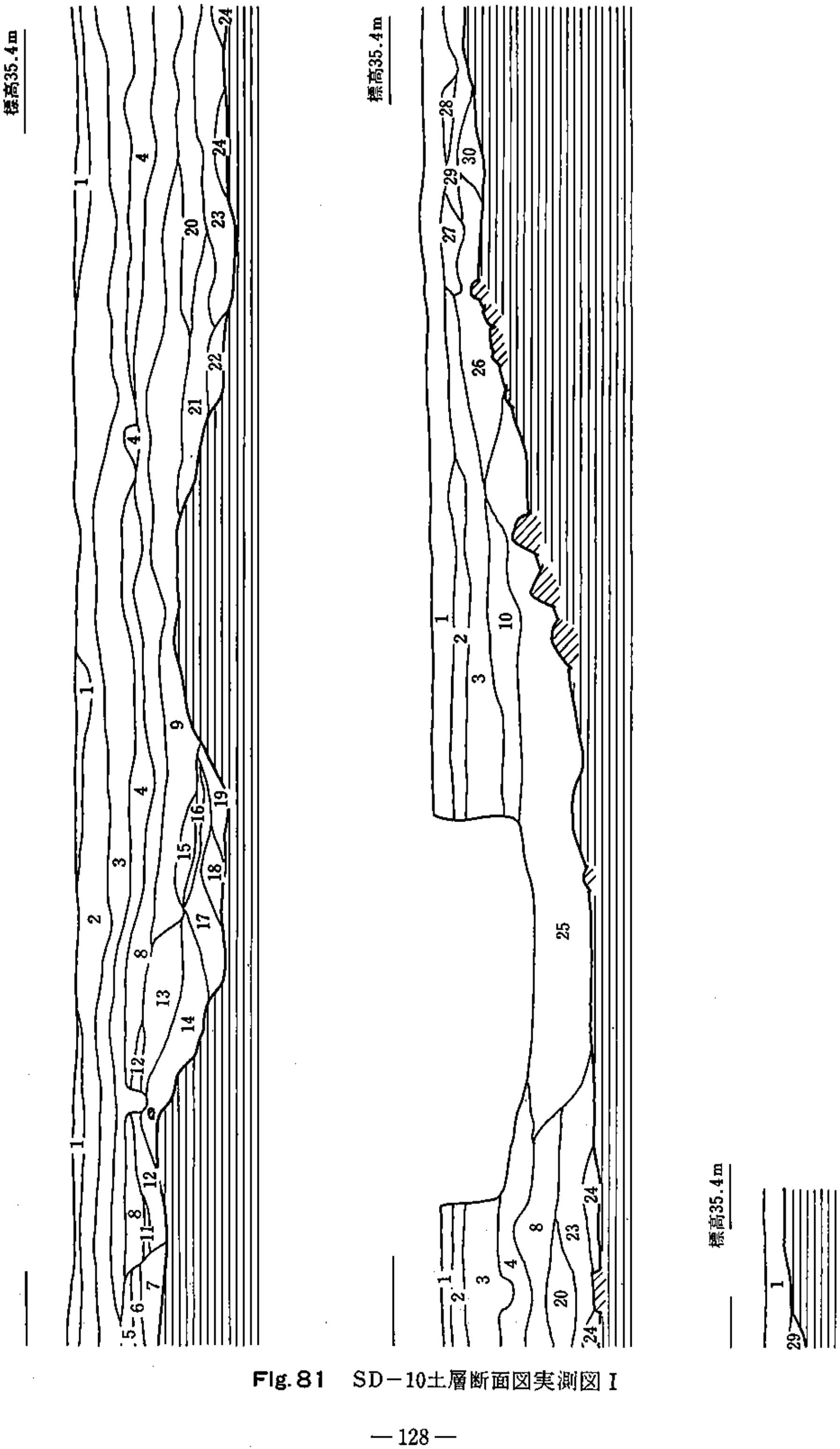


Fig. 81　SD－10土層断面図実測図 I

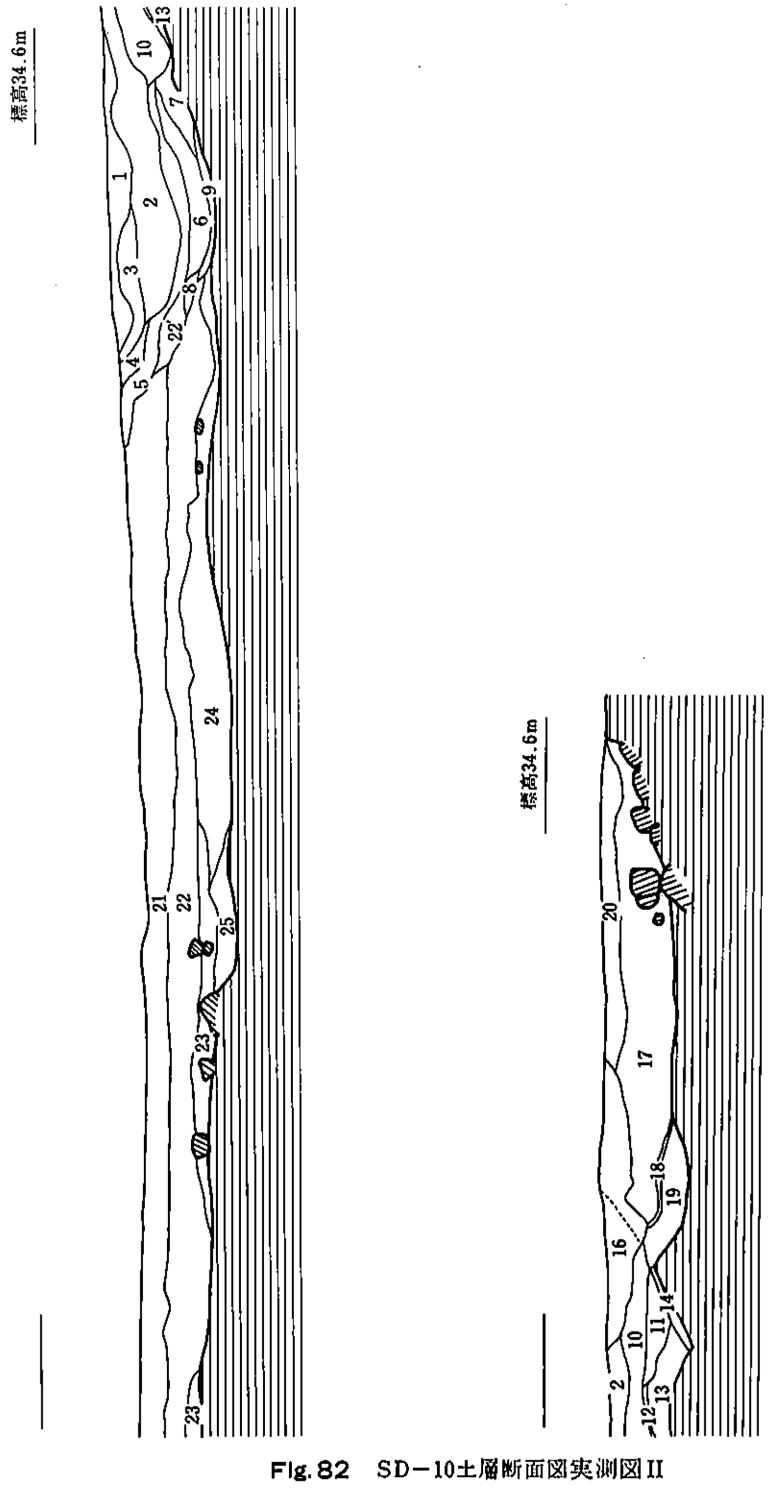


Fig.82　SD−10土層断面図実測図II

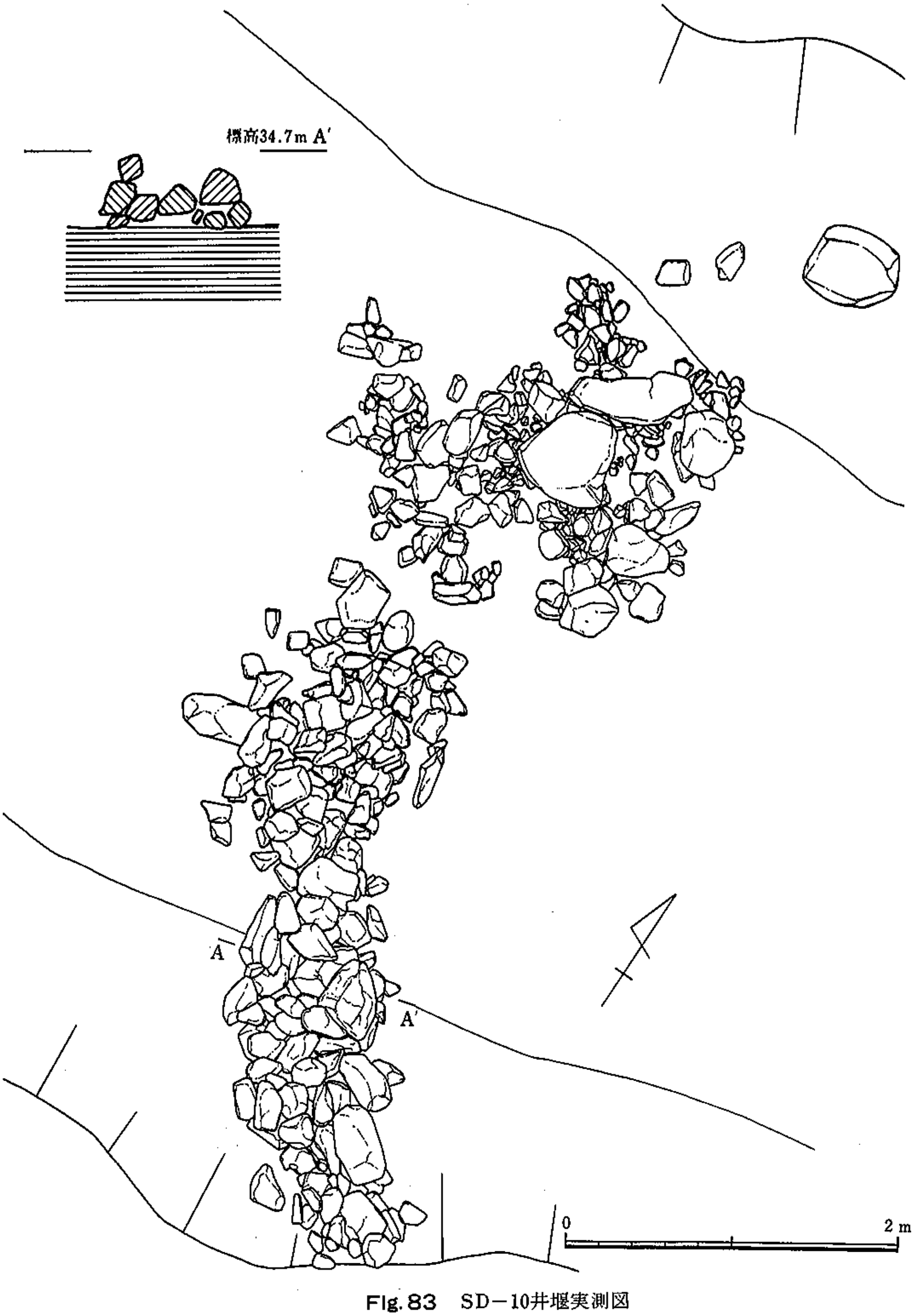


Fig. 83　SD－10井堰実測図

粘質細砂層，第24層，細砂層，第25層，黒色粘質土層，第26層，暗褐色粘質細砂層，第27層，粗砂層，第28層，粗砂層，第29層，淡褐色細砂層，第30層，第31層，粗砂と礫層からなる段丘堆積物で地山となる。

Fig.82は上層から，第1層，灰褐色粘質土層，第2層，黄灰色粗砂層，第3層，黄灰色細砂層，第4層，灰褐色砂質土層，第5層，暗灰褐色砂質土層，第6層，黄灰色粗砂層，第7層，灰褐色砂質土層，第8層，黄灰色粗砂層で，第6層とは薄い粘土層で区別される。第9層，暗灰色粘質土層，第10層，褐色粗砂層，第11層，黄灰色細砂層　第12層，灰色細砂粘質土層　第13層，黄灰色砂層，第14層　暗灰色粘質砂質土層，第15層　暗茶褐色砂質土層，第16層，細砂と粘質土の互層，第17層，暗灰色粘質土層，第18層，細砂と粘質土の互層，第19層，褐色粗砂層，第20層，暗褐色粘質土層，第21層，淡灰褐色砂質粘土層，第22層，暗灰色砂質粘土層，第23層，暗灰色砂質粘土層,第22層に比較しやや明るい色調である。第24層，暗灰色粘土層，第25層は粗砂と礫層からなる段丘堆積物である。

井堰（Fig.83）

SD－04が南から引き込まれて大きく東に方向を変える所から，約30mの地点，Z－14，15，イ－14，15グリットにかけて検出した井堰である。井堰はアーチ状に石積みされたものである。石材は小さいもので(10cm)^3，大きいもので(60cm)^3，大部分を占めるのは(30cm)^{3}のもので，数百個を使用している。

堰は幅1mで，これらの石材を数段積みあげたものであるが，残存状態が悪く，良好に残っている所で3～4段である。長さはほぼ川幅一ぱいに設け，約7mであるが，アーチ状をしているためやや長くなる。堰の中央部には水を流すための水門状の開口部がある。開口部は幅約30cmで，石積みがない。必要に応じてこの部分を開閉したものと思われる。

この井堰は何の目的をもって構築されたものであろうか。水田水利のための堰と考えるのが最も妥当であるが，貯水した水を引き込む水路の存在がなく，また，周辺部に古代の水田が確認されていないことから，水田水利のためとは考え難い。ここで考えられるのが，居館址に生活用水を求めるための井戸が一基も検出されていないことである。このことは，本遺跡に後続するK遺跡の中世居館址でも共通した現象であり疑問に感じていたことである。柏原地区の開発以前は付近に人家が少なく，樋井川本流およびその支流は清流であり，生活用水としても充分使用にたえるものであった。開発の進んでいない古代においてはよりすぐれた清流であったと思われる。SD－10が居館建設に伴う造成当初から計画的に引き込まれた水路であった可能性も考え，この井堰は生活用水の確保を目的としたものと推測することができよう。

出土遺物（Fig.84～107）

SD－10から出土した遺物は莫大な量にのぼる。須恵器，土師器，青磁器，白磁器，黒色土器，瓦類，墨書土器　硯，鉄滓，炉壁，フイゴ等の製鉄関連遺物など多岐にわたっているが，

本項では須恵器，土師器，黒色土器を中心として説明し，その他の遺物については，他の関連資料と共に章を改めて詳述することとする。須恵器，土師器，黒色土器は器種として，蓋，坏，皿，盤，高坏，椀，鉢，長頸壺，壺，平瓶，甕等がある。以下器種ごとにみていく。

蓋（Fig.84～85，86－37～46，50～56，87，88－78～93）

90個体を図示した。いずれも完形品に近いものである。器形，口径，製作技術等から，I類，蓋受けのたちあがりをもつ坏の蓋。II類，蓋と身が逆転し，蓋にかえりをもつ。III類，II類の退化したもので口縁部が屈曲するものに大別できる。各類は諸要素によってさらに細分できる。

I類（Fig.84，85，86－37，39，88－85，86）41固体が存在する。体部と口縁部の境が明瞭なa類と不明瞭なb類に大別し，他は個々について説明する。

I－a類（Fig.84－1）1点が存在する。体部と口縁部の境は明瞭で，段および沈線一条をめぐらしている。口縁端部は丸くおさめる。内外面は横ナデ調整，焼成良好で堅緻である。復原口径12.4cm。

I－b類，　40個体を図示した。口径，成形技法から細分可能であるが省略する。全体的には，口縁部と体部の境が不明瞭で，口縁端部は丸くおさめる。天井部は丸味のあるものと平坦なものがある。天井部はヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整，天井部内側は他方向からのナデ調整である。天井部につまみを有するものもある。

2は天井部に扁平な中凹みのつまみをつける。口縁部を失う。3はつまみを欠失している。天井部はカキ目調整。復原口径15.4cm，器高4.9cm。体部と口縁部の境に沈線一条をめぐらす。4は復原口径14.3cm，器高3.3cm。5は口径12.8cm，器高3.8cm。天井部にヘラ記号をもつ。6は復原口径13.2cm，器高3.7cm。7は天井部にさらに刷毛目が加わる。口径12.9cm，器高4.2cm。焼成不良で軟質である。8は天井部にヘラ記号をもつ。焼成不良で軟質である。復原口径12.8cm，器高3.7cm。9は天井部から体部にかけてヘラ記号をもつ。復原口径14.2cm，器高3.5cm。10は復原口径14.4cm。11はひずみが著しい。復原口径13.8cm，器高3.9cm。12は天井部にヘラ記号をもつ。復原口径12.9cm，器高3.8cm。13は天井部がカキ目調整。つまみが欠失する。内面にウルシ膜が付着する。復元口径12.9cm。14は復原口径12.4cm，天井部は静止ヘラ削り，ヘラ記号をもつ。15は口径11.8cm，器高4.0cm。16は復元口径13.0cm，器高3.7cm。17は天井部にヘラ記号をもつ。口径13.0cm，器高3.6cm，18は天井部にヘラ記号をもつ。復原口径12.8cm，器高3.5cm。19は口径12.6cm，器高3.9cm。20は天井部にヘラ記号をもつ。復原口径12.4cm，器高3.6cm。21は復原口径12.3cm，器高3.6cm。22は天井部平坦でヘラ記号をもつ。口径12.7cm，器高3.4cm。23は擬宝珠形の扁平なつまみをもつ。口径13.1cm，器高4.9cm。24は天井部にヘラ記号をもつ。復原口径11.6cm，器高2.9cm。25は天井部平坦で，復原口径12.4cm，器高2.7cm。26は復原口径12.3cm，器高3.2cm。27は復原口径12.6cm。28は復原口径12.3cm，器高3.4cm。29は復原口径12.3cm，器高3.7cm。30は復原口径11.6cm，器高4.4cm。31は天井部から体部にかけてヘラ

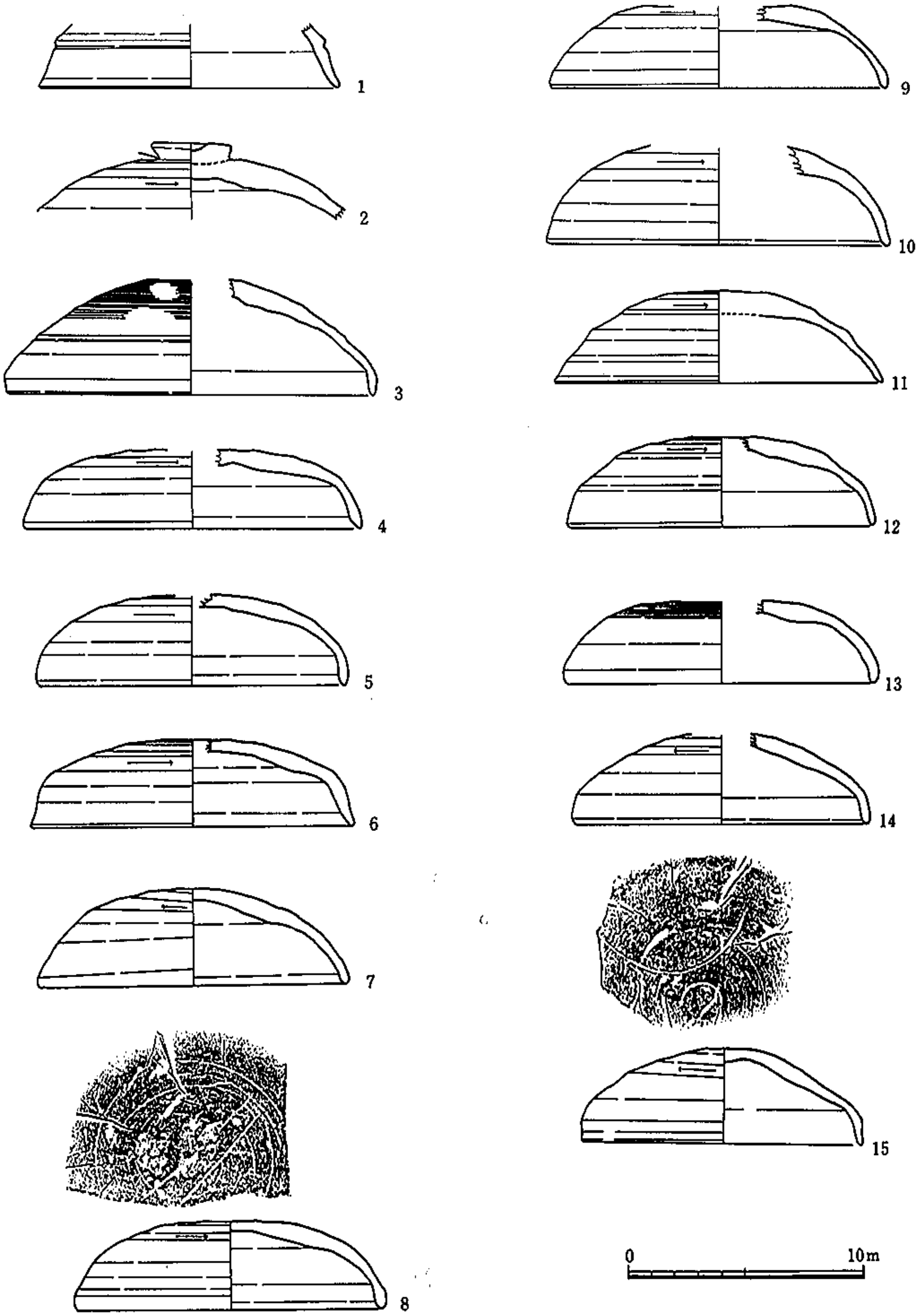


Fig.84　SD－10出土遺物実測図Ⅰ

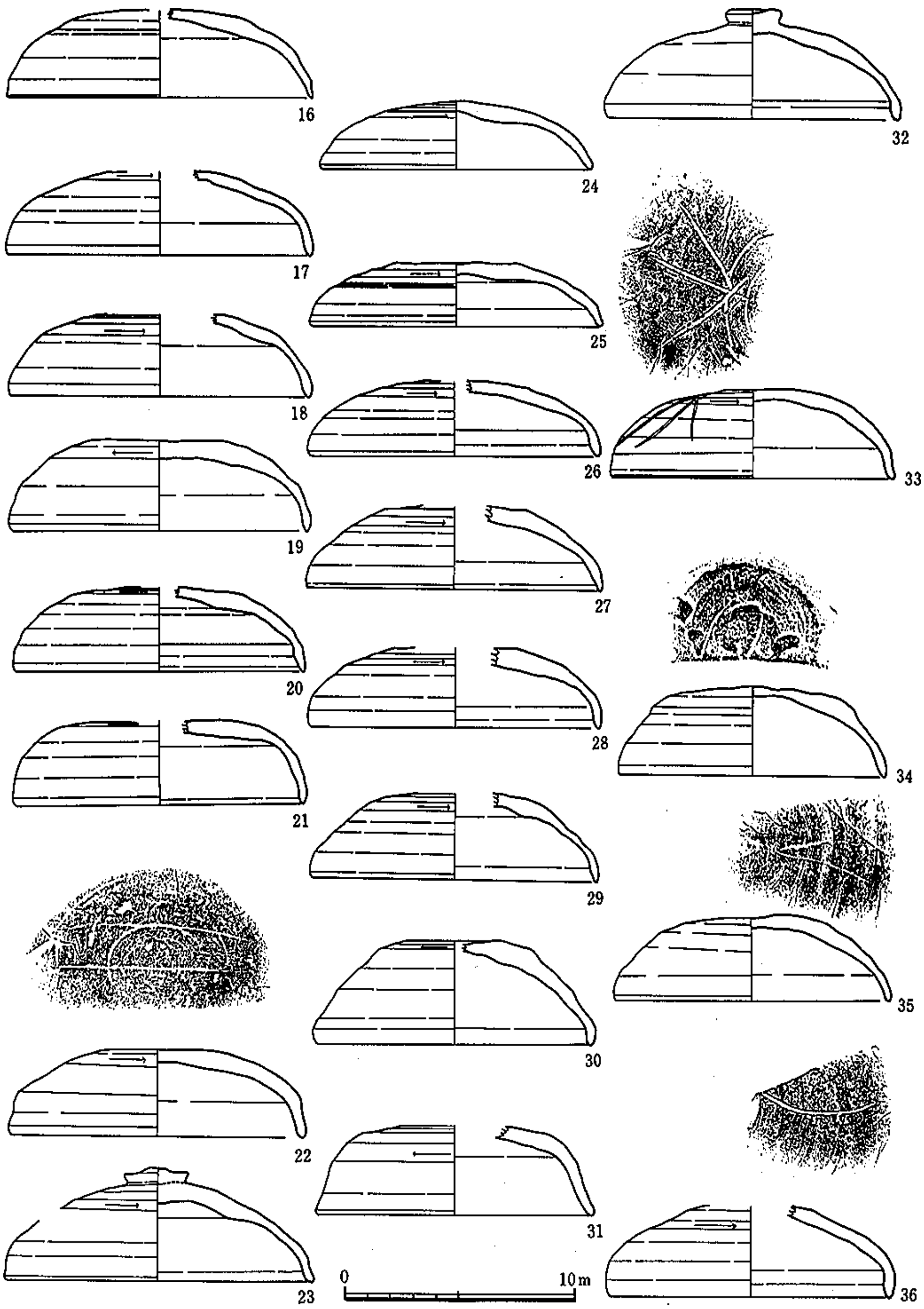


Fig.85　SD－10出土遺物実測図II

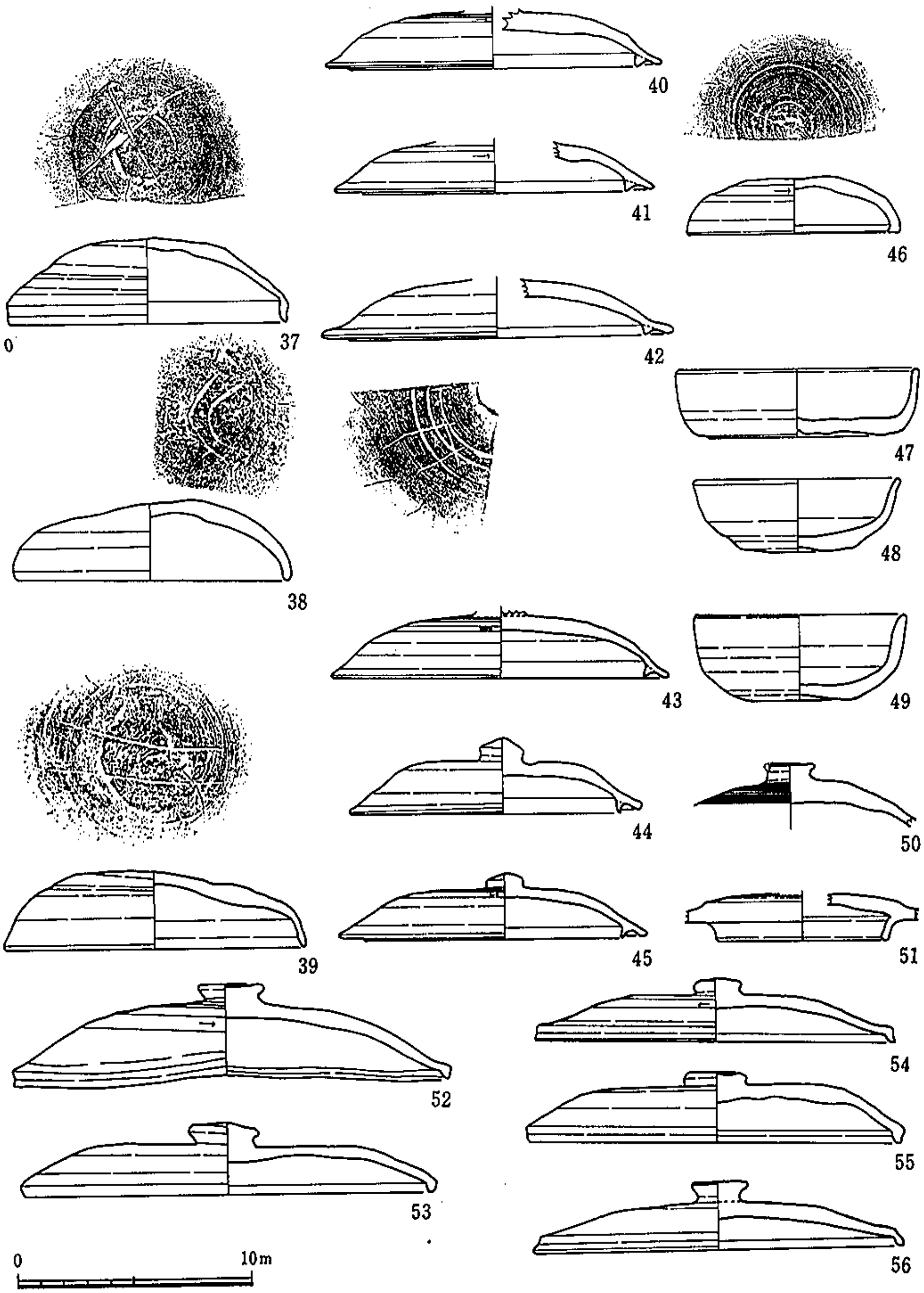


Fig. 86　SD—10出土遺物実測図III

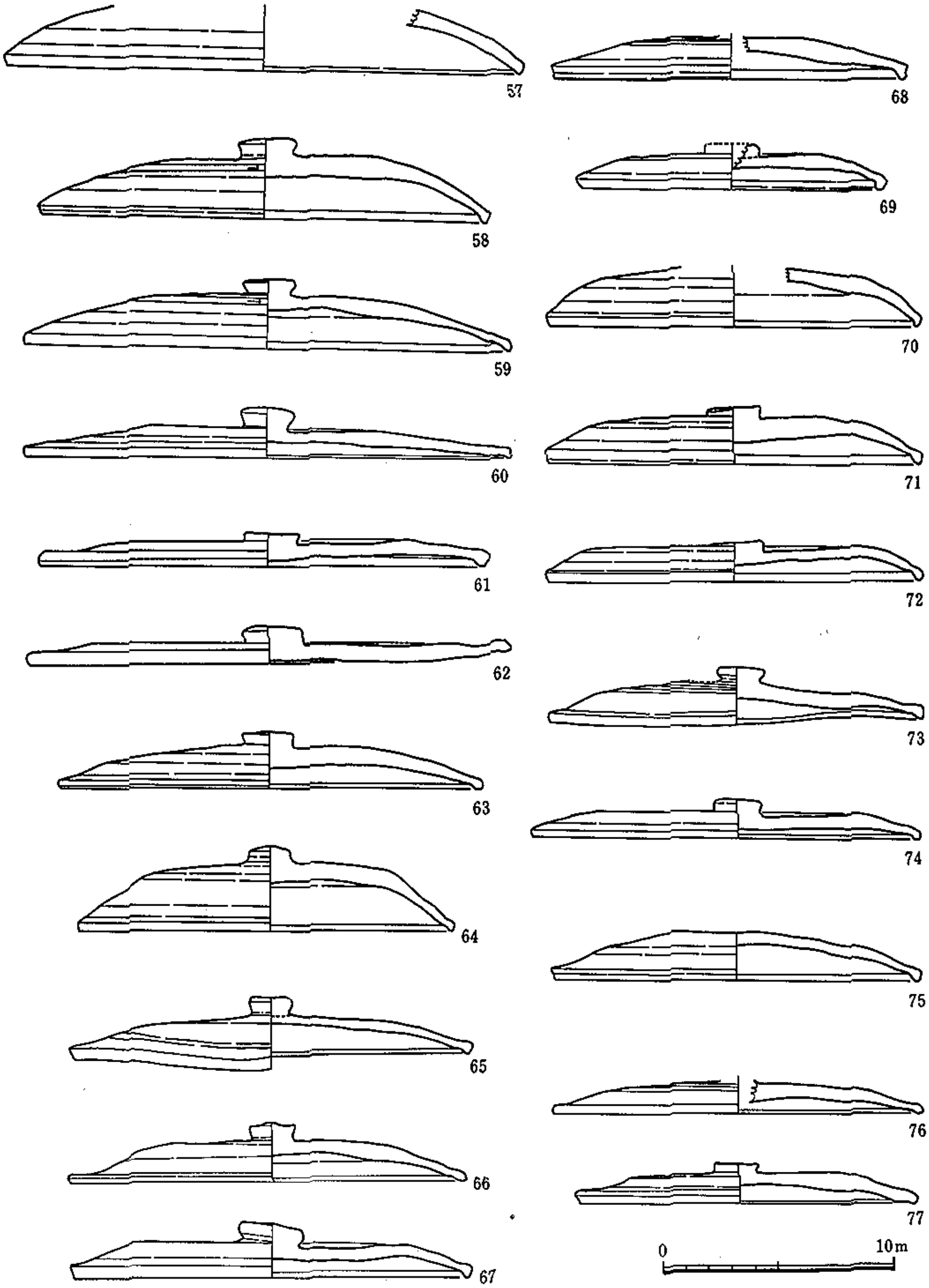


Fig. 87　SD－10出土遺物実測図Ⅳ

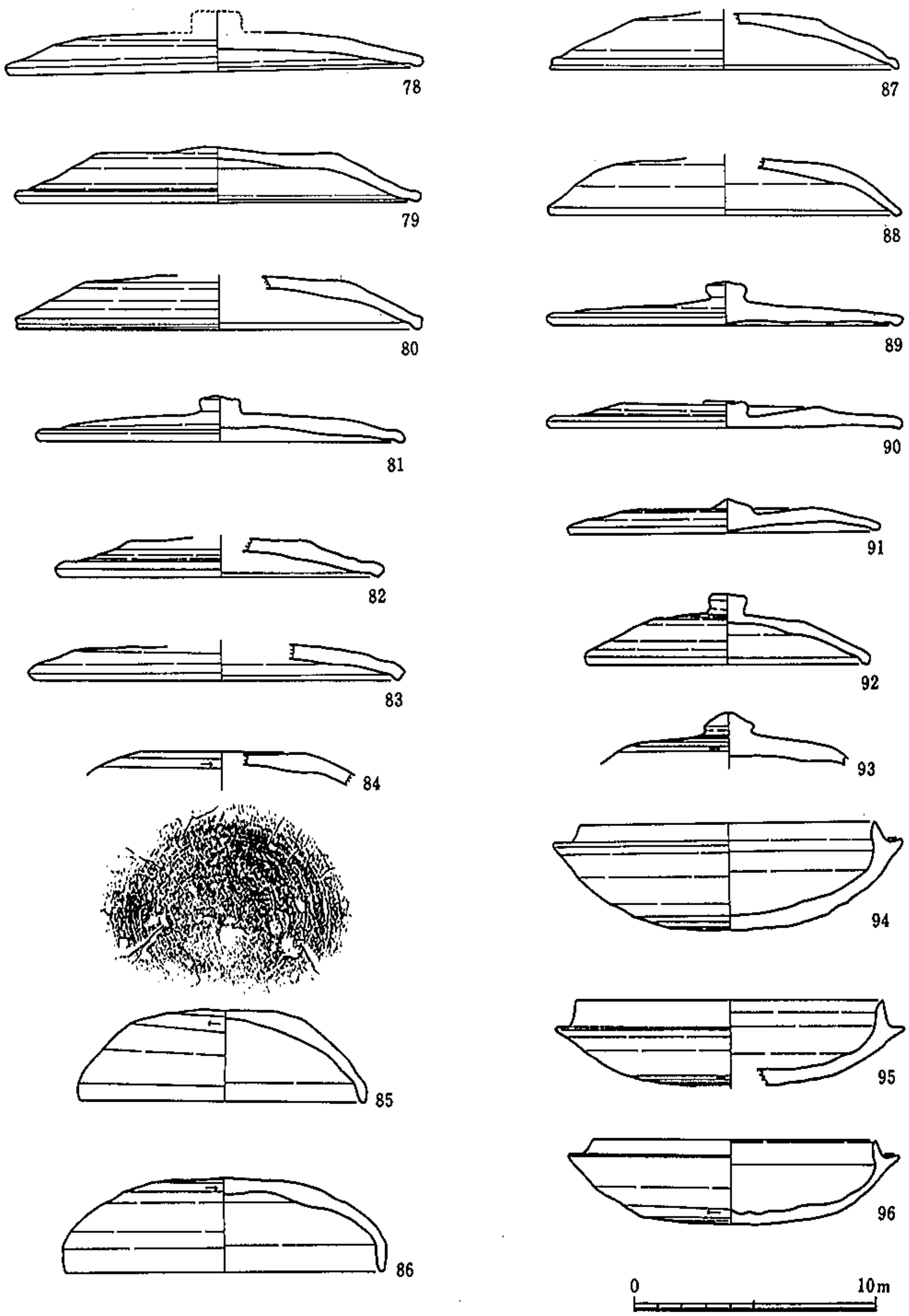


Fig. 88　SD－10出土遺物実測図Ｖ

記号をもつ。復原口径11.8cm，高坏坏部の可能性が強い。32はボタン状のつまみをもつ。口径12.4cm，器高4.7cm。33は天井部から体部にかけてヘラ記号をもつ。口径12.0cm，器高3.8cm。34は天井部平坦でヘラ記号をもつ。復原口径11.4cm，器高3.8cm。35は天井部から体部にかけてヘラ記号がある。口径11.6cm，器高3.7cm。36は天井部から体部にかけてヘラ記号がある。復原口径12.0cm。37は天井部にヘラ記号がある。復原口径11.9cm，器高3.6cm。38は天井部外面は静止ヘラ削りで，ヘラ記号をもつ。口径11.6cm，器高3.5cm。39は天井部にヘラ記号をもつ。口径12.7cm，器高3.4cm。85は天井部にヘラ記号をもつ。口径11.7cm，器高3.8cm。86は復原口径13.0cm，器高3.9cmである。

II類　内側のかえりは低く内傾し，口縁部下端よりわずかに下方にでるものとでないものがあるが型式的にはかわらない。かえりの端部は尖る。天井部には宝珠形のつまみをつける。天井部はやや丸味をもっていて，ヘラ削り調整される。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整で，天井部内面は多方向からのナデである。40は復原口径12.2cm。41は復原口径13.8cm。42は復原口径12.6cm。43は天井部にヘラ記号をもつ。復原口径14.3cm。44は口径12.6cm，器高3.3cm。45は口径13.2cm，器高2.8cmをはかる。

III類(Fig.86～88－52～84，87～92)39点を図示した。器形，口縁部の形態，口径のちがいから，さらに細分できる。雑然となるので省略した。共通するところを記せば，口縁部が屈曲し，下方にのびる。天井部に擬宝珠形～ボタン状のつまみをつける。天井部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部の内面は多方向からのナデ調整である。52～56は口縁部が下方にのび端部は丸くおさめる。52～55は体部が丸味をもつ。52は口径18.5cm，器高4.3cm。53は復原口径17.3cm，器高3.1cm。54は口縁外面が凹線状になる。復原口径15.2cm，器高2.7cm。55は口径15.8cm，器高3.0cm。56は口径15.6cm，器高2.9cm。57～59は口縁部の屈曲は短く痕跡を残すのみである。57は復原口径22.1cm。58は焼成不良で軟質である。口径19.0cm，器高3.5cm。59は復原口径20.8cm，器高3.0cm。60～62は扁平である。口縁部形態は異なる。60は内側に沈線一条をめぐらす。口径20.7cm，器高2.2cm。61は口縁がやや下方にのびる。口径19.2cm，器高1.5cm。62は口径20.8cm，器高1.6cm。63～88は体部にやや丸味をもつ。口縁部はわずかに下方にのびるが，痕跡をとどめるのみである。63は焼成不良で軟質である。口径17.9cm，器高2.5cm。64は口径15.7cm，器高3.7cm。65は復原口径17.0cm，器高3.2cm。66は口径17.0cm，器高2.6cm。67は天井部がやや凹む。復原口径16.9cm。器高2.4cm。68は扁平で口縁は嘴状をなす。復原口径15.0cm。69は復原口径12.8cm，器高1.9cm。70は復原口径15.8cm。71は復原口径16.0cm，器高2.5cm。72は復原口径15.9cm，器高1.8cm。73はひずみがある。口径16.5cm，器高2.4cm。74は焼成不良で軟質である。復原口径16.4cm，器高1.7cm。75はつまみをもたない。口径15.7cm，器高2.2cm。76は扁平である。復原口径15.8cm。77は完形品。口径14.5cm，器高1.8cm。78は口径17.0cm。79は天井部は平坦で，つまみはない。

復原口径16.4cm，器高2.3cm。80は復原口径16.5cm。81は口径15.0cm，器高1.9cm。82は復原口径13.1cm。83は復原口径14.9cm。87は口縁部内外面に凹線一条をめぐらす。口径14.4cm，器高2.4cm。88は復原口径14.2cm。89～91は全体に扁平である。89は復原口径14.3cm，器高1.8cm。90は口径14.3cm，器高1.1cm。91は復原口径12.7cm，器高1.4cm。92はやや丸味をもつ。復原口径11.6cm，器高2.9cm。93は宝珠形のつまみをもつ。

坏（Fig.90－94～Fig.94－144）

46個体を図示した。いずれも完形品に近いものである。器形，口径，成形技術から，Ⅰ類，蓋受けのたちあがりをもつもの。Ⅱ類，平底で体部が外傾しながらたちあがるもの。Ⅲ類，底部に貼り付けの高台をもつものⅢ類に大別できる。各類はまた諸要素によってさらに細分できる。

Ⅰ類（Fig.88～92－94～144）51個体を図示した。蓋受けのたちあがりの高さおよび内傾度，底部ヘラ削りの状態，口径等から細分が可能であるが，ここでは一括して説明し，個々について特徴が異なる時，注記し，個体の口径，器高を示す。

94は底部にヘラ記号をもつ。胎土に多量の砂粒を含む。復原口径12.1cm，器高4.4cm。95は復原口径12.6cm，器高3.5cm。96は完形品。口径11.7cm，器高3.5cm。97は底部にヘラ記号をもつ。胎土に多量の砂粒を含む。復原口径11.9cm，器高4.3cm。98はややひずむ。底部から体部にかけてヘラ記号をもつ。口径12.7cm，器高3.9cm。99は底部は静止ヘラ削りで，底部から体部にかけてヘラ記号をもつ。復原口径12.2cm，器高3.4cm。100は底部があげ底状になり，ヘラ記号をもつ。口径11.4cm，器高2.5cm。101は底部にヘラ記号をもつ。復原口径11.0cm。器高3.7cm。102は復原口径12.1cm，器高3.7cm。103は復原口径11.2cm，器高3.8cm。104は口径10.7cm，器高3.9cm。受部に沈線をめぐらす。105は口径11.6cm，器高4.1cm。106は口径12.6cm，器高4.1cm。107は底部にヘラ記号をもつ。焼成不良で軟質である。復原口径12.0cm，器高4.0cm。108は復原口径12.0cm。109は焼成不良で軟質である。復原口径11.6cm，器高4.2cm。110は底部にヘラ記号をもつ。口径11.1cm，器高3.8cm。111は底部にヘラ記号をもつ。復原口径11.4cm，器高3.4cm。112は底部にヘラ記号をもつ。口径11.2cm，器高3.9cm。113は底部にヘラ記号をもつ。口径10.5cm，器高3.8cm。114は底部にヘラ記号をもつ。口径11.4cm。器高3.7cm。115は底部にヘラ記号をもつ。復原口径11.0cm，器高3.4cm。116は復原口径11.0cm，器高3.8cm。117は復原口径11.2cm，器高3.9cm。118は底部にヘラ記号をもつ。復原口径11.4cm。器高3.8cm，119は焼成不良で軟質である。口径10.4cm，器高4.5cm。120は復原口径10.6cm。121は底部にヘラ記号をもつ。口径10.7cm，器高4.1cm。122は底部にヘラ記号をもつ。口径11.1cm，器高3.5cm。123は底部にヘラ記号をもつ。復原口径11.0cm，器高3.6cm。124は底部にヘラ記号をもつ。胎土に多量の砂粒を含む。復原口径11.0cm，器3.7cm。125は口径11.4cm，器高3.8cm。126は焼成不良で軟質である。復原口径11.0cm，器高4.0cm。127は底部にヘラ記号をもつ。口径10.6cm，器高3.8cm。128は底部から体部にかけてヘラ記号がある。口径10.5cm，器高3.6cm。129は底部にヘラ記号をもつ。口径

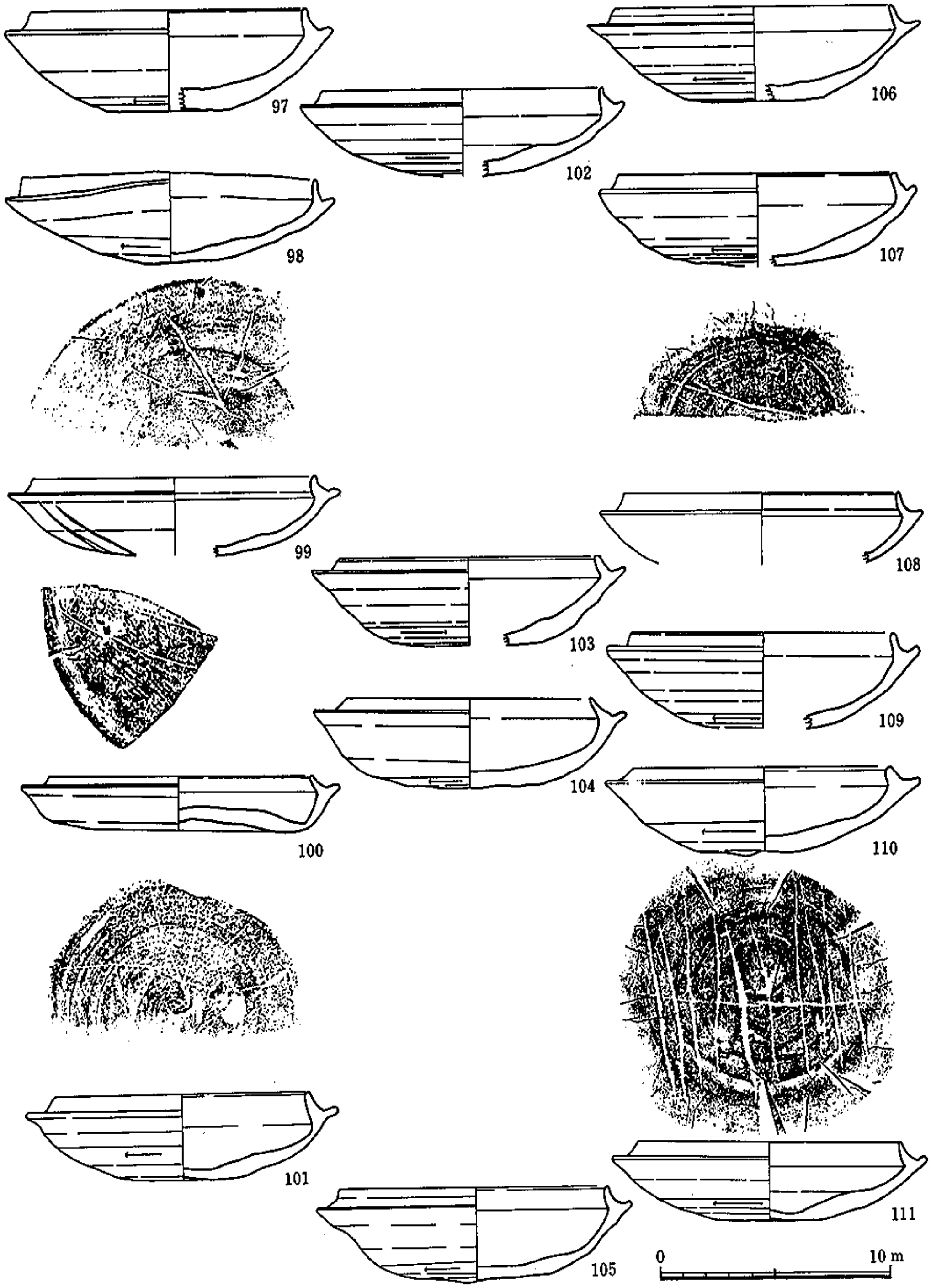


Fig.89　SD－10出土遺物実測図Ⅵ

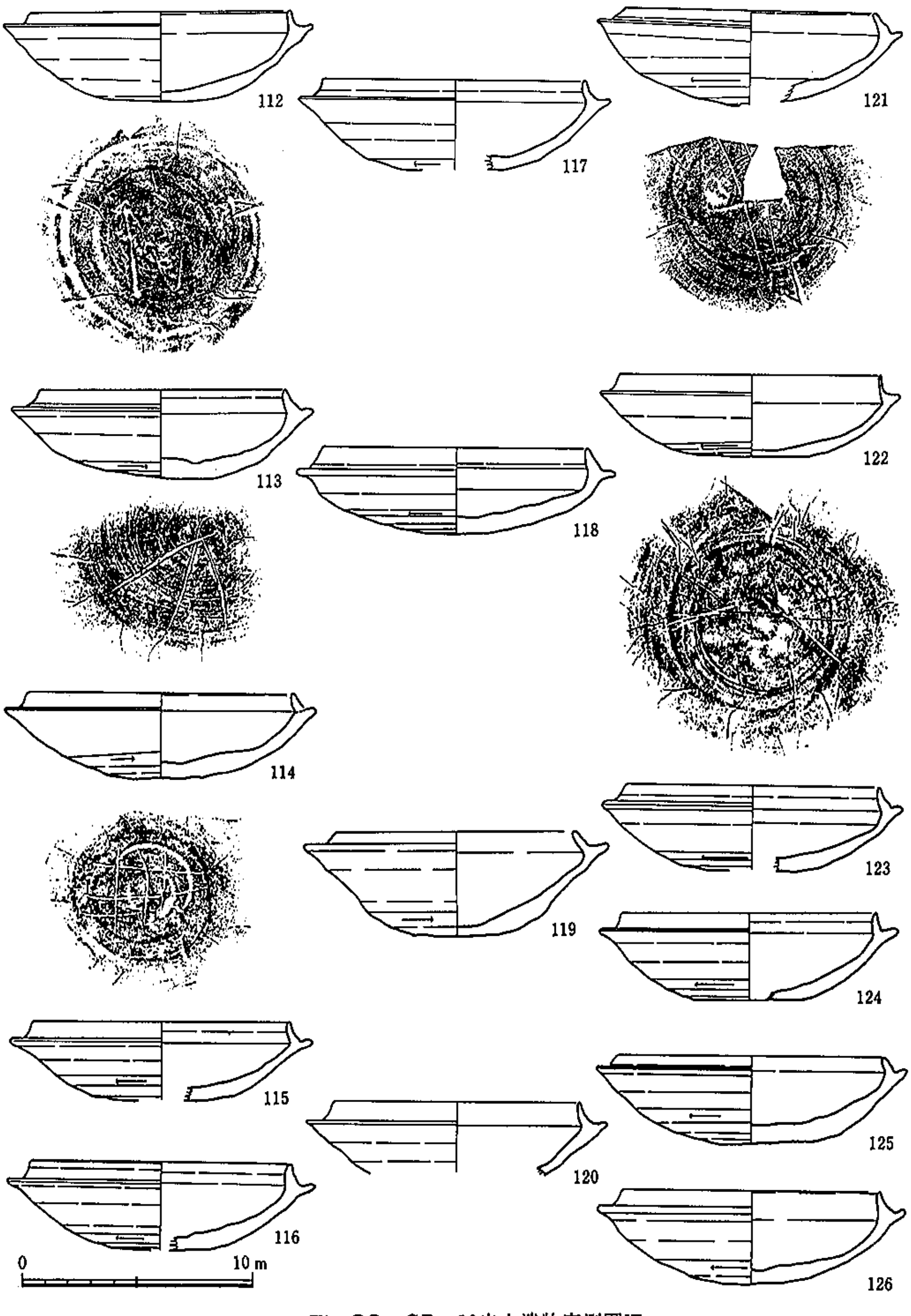


Fig. 90　SD－10出土遺物実測図Ⅶ

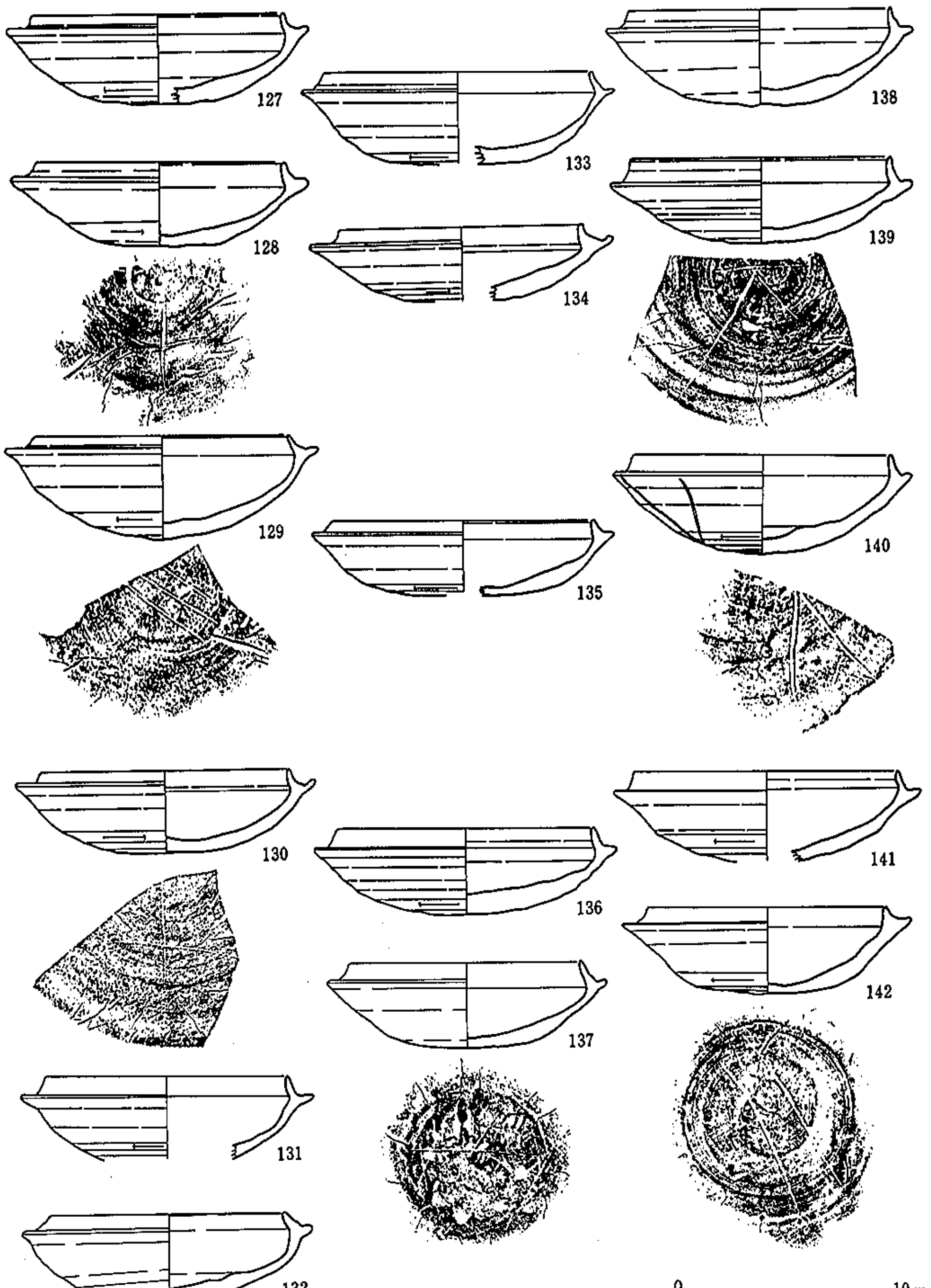


Fig. 91　ＳＤ－10出土遺物実測図Ⅷ

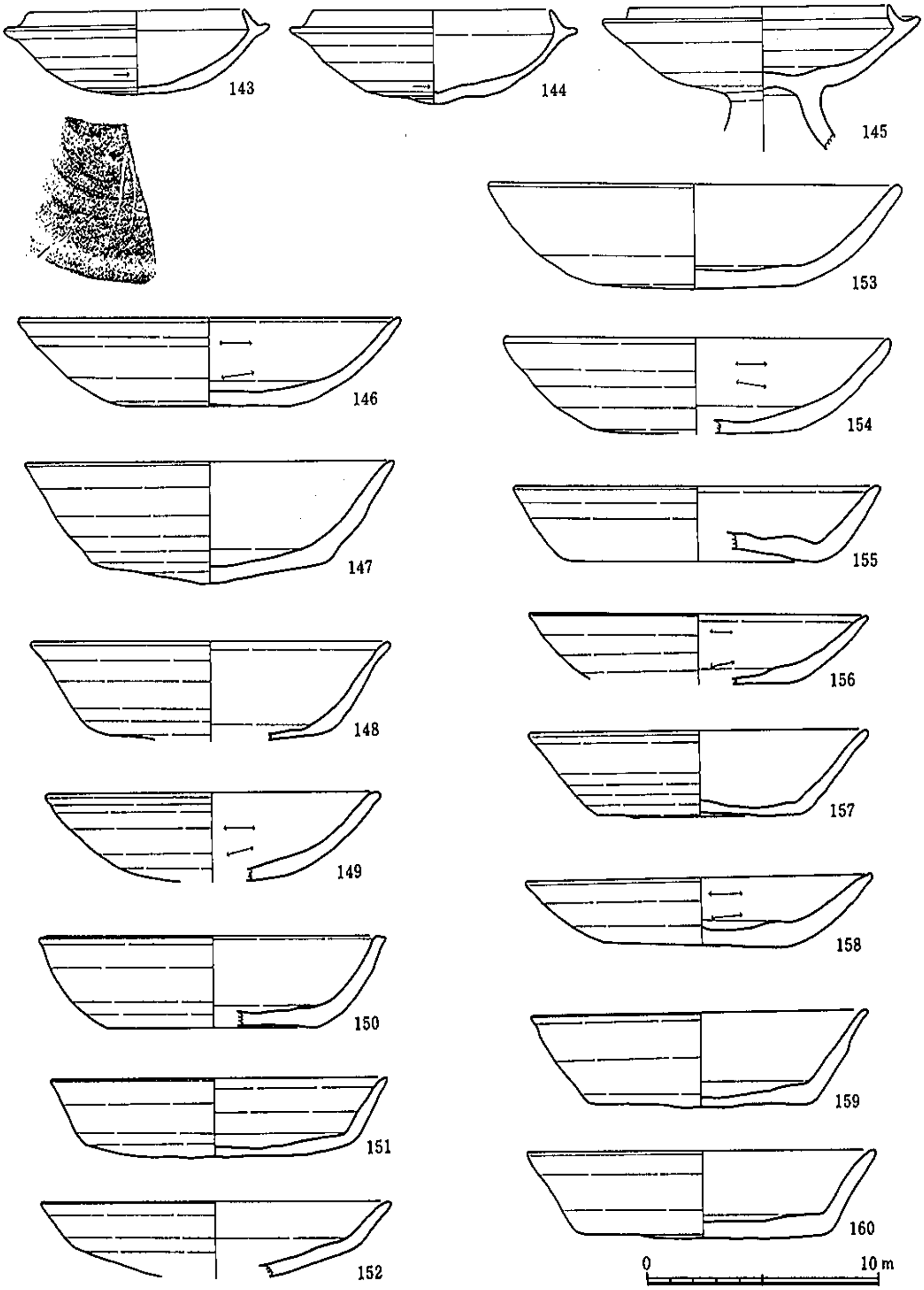


Fig. 92　SD－10出土遺物実測図IX

10.8cm，器高4.4cm。130は底部にヘラ記号をもつ。焼成は堅緻。復原口径10.4cm，器高3.5cm。131は底部にヘラ記号をもつ。受部に沈線をめぐらす。復原口径10.2cm。132は口径10.0cm，器高3.7cm。133は口径11.2cm。器高3.9cm。134は復原口径10.2cm。135は復原口径11.0cm，器高3.1cm。136は底部にヘラ記号をもつ。口径10.8cm。器高3.7cm。137は底部にヘラ記号をもつ。復原口径10.8cm，器高3.6cm。138は体部にヘラ記号をもつ。口径11.1cm，器高4.1cm。139は底部から体部にかけてヘラ記号をもつ。復原口径11.0cm，器高3.6cm。140は底部から体部にかけてヘラ記号をもつ。復原口径10.8cm，器高4.2cm。141は底部にヘラ記号をもつ。口径11.2cm。142は底部にヘラ記号をもつ。口径10.7cm，器高3.7cm。142は復原口径9.3cm，器高3.6cm。底部にヘラ記号をもつ。143は底部にヘラ記号をもつ。復原口径10.2cm，器高4.0cmである。

II類（Fig.92－145～Fig.96－231）

91個体を図示した。須恵器，土師器がある。須恵器と土師器の違い，器形に若干の差があり，さらに細分可能であるが，検討を要するので，各個体について説明する。一般的な器形は底部が平底で，体部は外傾しながら直線的にのび，口縁部に丸くおさめる。中には口縁がわずかに外反するものもある。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加えている。体部から口縁部にかけては，横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整を加える。土師器の場合は，底部を除いてヘラ磨きされる例が多い。

145は土師器，底部は丁寧なヘラ削り。復原口径16.2cm，器高3.8cm，146は土師器。体部は内外面共通横ナデ調整，復原口径15.6cm，器高5.2cm。147は口縁部が外反する。内外面共ナデ調整。復原口径15.2cm，器高4.2cm。土師器。148は土師器，底部は丁寧なヘラ削り調整。口縁部下に凹線一条がめぐる。復原口径14.4cm，器高3.8cm。149は須恵器。口縁端部は平坦である。復原口径14.2cm，器高4.0cm。150は須恵器。口縁部がわずかに外反する。口径14.2cm，器高3.4cm。151は須恵器。復原口径14.6cm。152は底部，体部下半が丁寧なヘラ削り調整。外面にススが著しく付着している。口径17.2cm，器高4.6cm。153は底部，体部下半は丁寧なヘラ削り調整。復原口径16.4cm，器高4.1cm。154は底部に板状圧痕をもつ。復原口径15.5cm，器高3.2cm。155は底部，体部下半が丁寧なヘラ削り調整。内面は暗文風のヘラ磨きがある。口径14.4cm，器高3.0cm。156は底部に板状圧痕をもつ。復原口径14.4cm，器高3.7cm。157は底部・体部下半は丁寧なヘラ削り調整。口径14.7cm，器高3.1cm。158は口径13.3cm，器高4.2cm。159は口径14.8cm，器高4.8cm。153～159は土師器である。Fig.93では161，166，167，172，174，178，179，182が須恵器で，他は土師器である。160は復原口径13.3cm，器高3.2cm。161は復原口径13.8cm，器高3.2cm。162は底部および体部下半はヘラ削り調整。口径13.3cm，器高3.4cm。163は底部・体部下半は丁寧なヘラ削り調整後ヘラ磨き。復原口径14.6cm，器高3.0cm。164は口径13.1cm，器高3.2cm。165は口縁部が外反する。内側にススが付着する。復原口径13.1cm，器高3.4cm。166は口縁部が外反する。復原口径13.6cm，器高3.6cm。

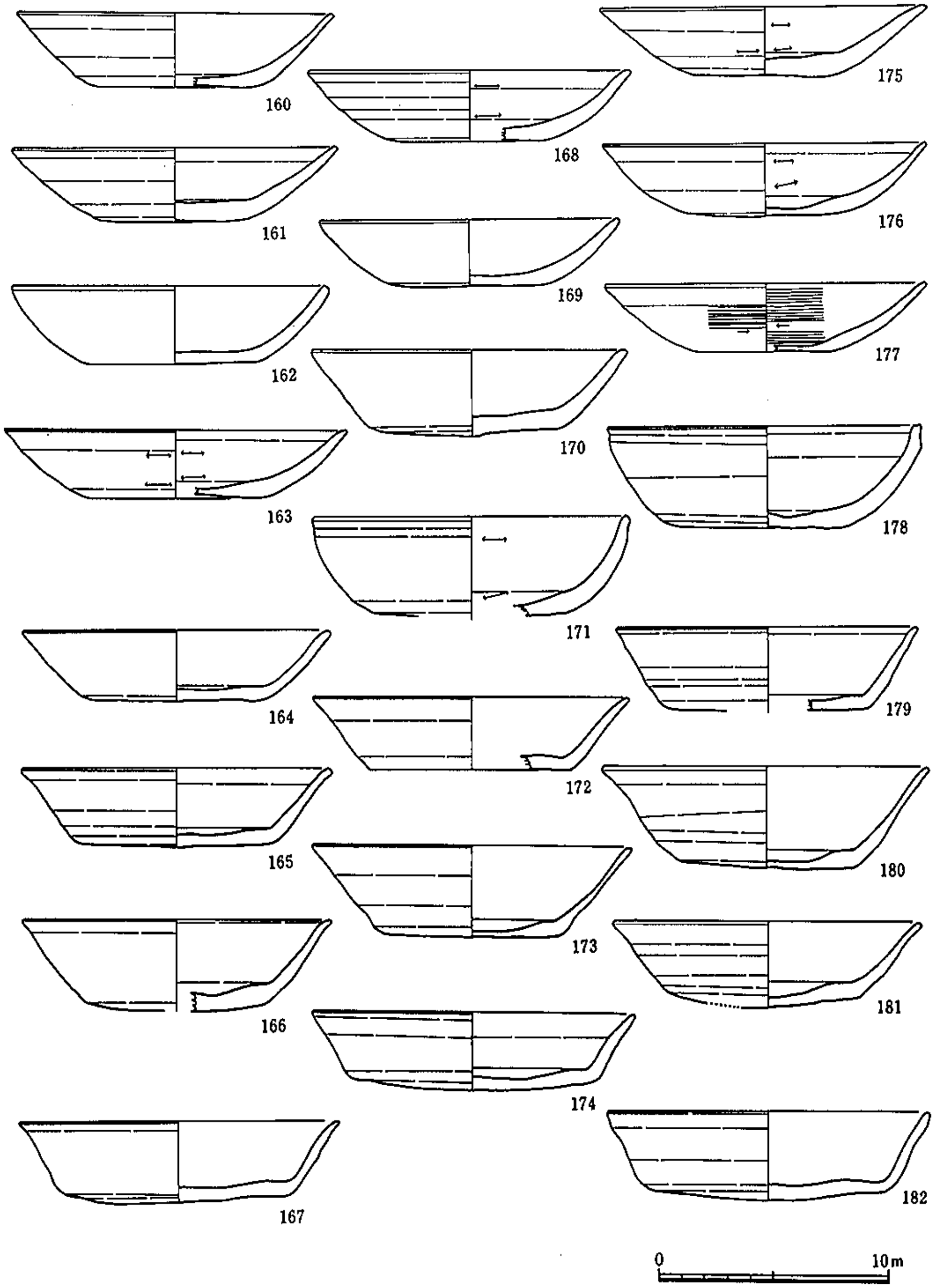


Fig. 93　SD－10出土遺物実測図Ｘ

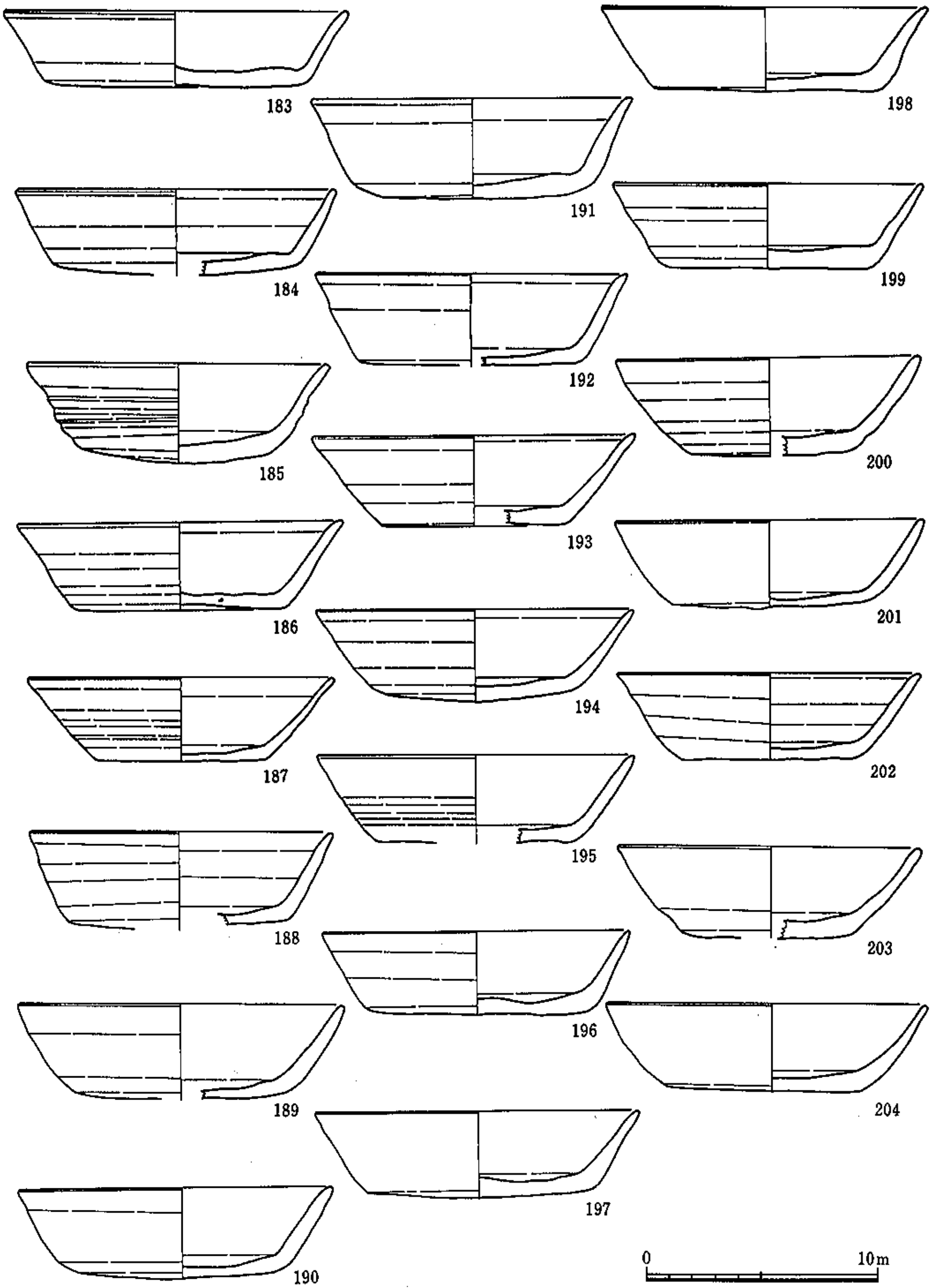


Fig. 94　SD－10出土遺物実測図Ⅺ

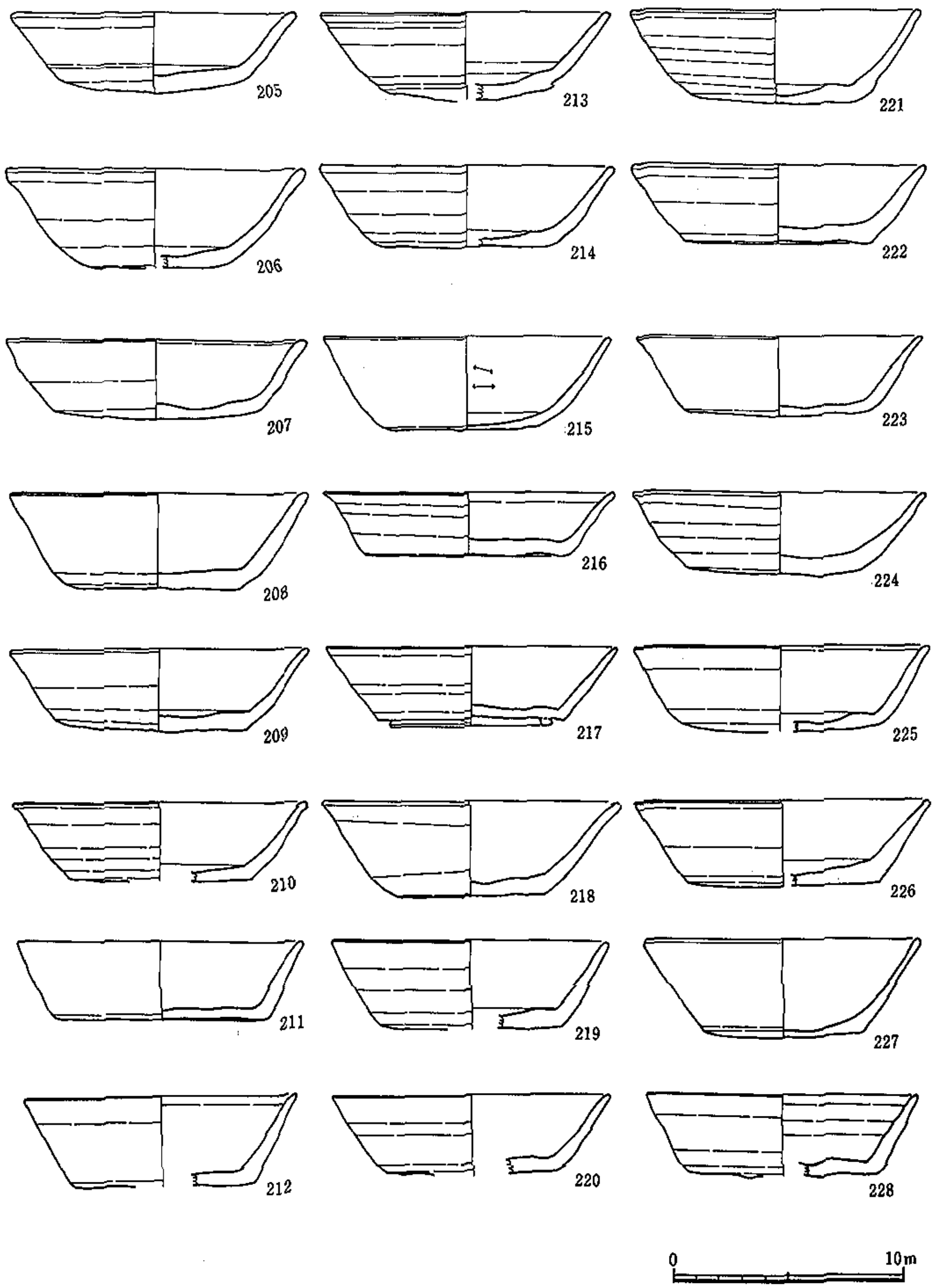


Fig. 95　SD−10出土遺物実測図XII

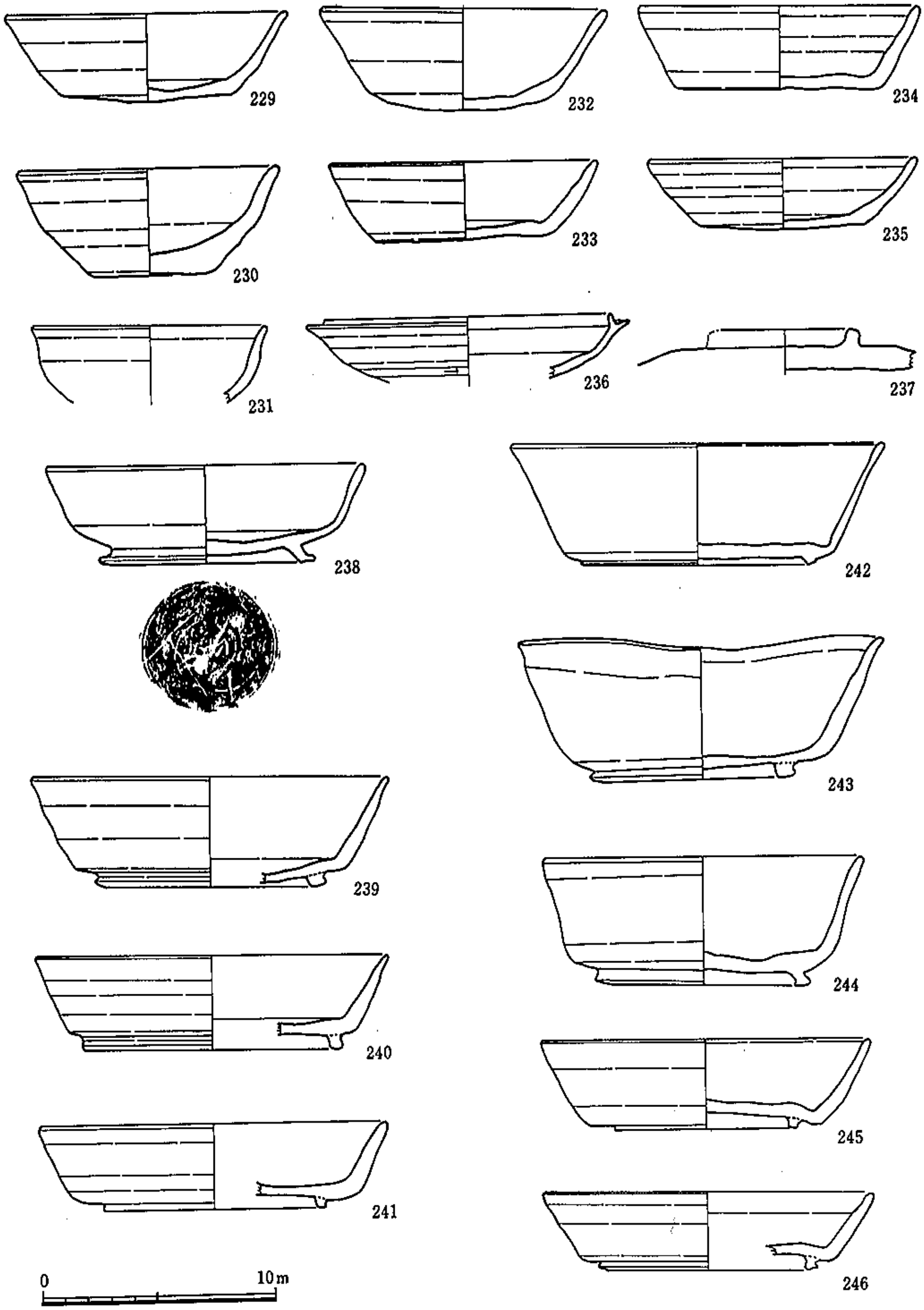


Fig. 96　SD－10出土遺物実測図XIII

167は須恵器，口径13.6cm，器高3.6cm。168は復原口径13.4cm，器高3.8cm。169は底部および体部下半は丁寧なヘラ削り調整，口径13.4cm，器高3.8cm。170は底部に板状圧痕が残る。口径13.2cm，器高3.8cm。171は底部，体部下半は丁寧なヘラ削り調整で，さらにその上にヘラ磨き調整を施す。口縁部に凹線一条をめぐらす。復原口径13.4cm，器高4.3cm。172は口縁部が外反する。復原口径13.3cm，器高3.1cm。173は底部に板状圧痕がある。口径13.5cm，器高3.9cm。174は焼成不良で軟質である。口径13.7cm，器高3.4cm。175は底部，体部下半は丁寧なヘラ削り調整。復原口径13.9cm，器高3.1cm。176は底部，体部下半は丁寧なヘラ削り調整で，さらに上からヘラ磨きが加えられる。内外面にススが付着する。口径12.8cm，器高3.1cm。177は底部は丁寧なヘラ削り調整，内外面は横方向の丁寧なヘラ磨き調整。復原口径13.7cm，器高2.9cm。178は口縁部下に凹線一条をめぐらす。口縁端は平坦で凹線をめぐらしている。口径12.6cm，器高4.5cm。179は復原口径12.8cm，器高3.6cm。180は底部に板状圧痕がある。口径13.9cm，器高4.4cm。181は口縁部が外反する。口径13.0cm，器高3.7cm。182は口径13.8cm，器高3.8cm。胎土に多量の砂粒を含む。Fig.94では184，186，190，192～194，197，198，201，202が須恵器で，他は土師器である。183は体部は横ナデ調整。復原口径14.6cm，器高3.3cm。184は復原口径13.5cm，器高3.7cm。185は体部下半に凹線5条がめぐる。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。復原口径12.6cm，器高4.3cm。186は焼成不良で軟質である。外面にススが付着する。復原口径13.8cm，器高3.8cm。187は底部に板状圧痕がある。内外面は横ナデ調整。復原口径12.9cm，器高3.6cm。188は内外面にススが付着する。復原口径12.9cm，器高4.2cm。189は復原口径13.8cm，器高4.1cm。190は焼成不良で軟質である。底部に板状圧痕がある。口径13.3cm，器高3.9cm。191は復原口径13.8cm，器高4.3cm。192は焼成不良で軟質である。復原口径13.2cm，器高3.9cm。193は焼成不良で軟質である。復原口径13.7cm，器高3.9cm。194は内面にススが付着する。復原口径13.4cm，器高3.9cm。195は内面にススが付着する。復原口径13.5cm，器高3.8cm。196は口径13.1cm，器高3.6cm。197は焼成不良で軟質である。口径13.7cm，器高3.8cm。198は口縁部が外反する。口径13.9cm，器高3.7cm。199は底部に板状圧痕がある。復原口径13.2cm，器高3.7cm。200は復原口径12.9cm，器高4.2cm。201は焼成不良で軟質である。口縁部内側にススが付着する。口径13.2cm，器高3.8cm。202は口径12.9cm，器高3.7cm。203は復原口径13.1cm，器高3.9cm。204は底部，体部下半は丁寧なヘラ削り調整。復原口径12.8cm，器高2.9cm。Fig.97では207～213，216，219，220，222，223，225，226，228が須恵器で他は土師器である。205は復原口径12.0cm，器高3.5cm。206は復原口径12.6cm，器高4.3cm。207は口径12.7cm，器高3.5cm。208は焼成不良で軟質である。口径12.7cm，器高4.2cm。209は口縁部がわずかに外反する。復原口径12.8cm，器高3.6cm。210は口縁部がわずかに外反する。復原口径12.4cm，器高3.4cm。211は復原口径12.4cm，器高3.4cm。212は焼成不良で軟質である。復原口径11.7cm，器高3.9cm。213は口縁部がわずかに外反する。復原口径12.4cm，器高3.8cm。214は底部がヘラ切りのままで

ある。口縁部がわずかに外反する。復原口径12.4cm，器高3.6cm。215は口径12.2cm，器高4.1cm。216は口縁部が外反する。口径12.5cm，器高3.8cm。218は底部はヘラ切りのままで，口縁部が外反する。口径12.7cm，器高4.1cm。219は焼成不良で軟質である。復原口径11.8cm，器高3.8cm。220は復原口径11.9cm，器高3.4cm，221は底部に板状圧痕がある。口径12.2cm，器高4.1cm。222は復原口径12.6cm，器高3.5cm。223は焼成不良で軟質である。口縁部がわずかに外反する。口径12.2cm，器高3.5cm。224は口径部に凹線一条をめぐらす。口径12.5cm，器高3.6cm。225は復原口径12.6cm，器高3.7cm。226は焼成不良で軟質である。復原口径12.6cm，器高3.7cm。227は復原口径11.6cm，器高4.2cm。228は復原口径11.6cm，器高3.6cm。Fig.96では229，231，233，234が須恵器で，230，232，235が土師器である。229は口縁部がわずかに外反する。復原口径11.8cm，器高3.8cm。230は器壁が厚い。復原口径10.8cm，器高4.6cm。231は口縁部がわずかに外反する。復原口径9.7cm。232は復原口径12.0cm，器高4.3cm。233は口径11.2cm，器高3.4cm。234は復原口径11.8cm，器高3.6cm。235は復原口径11.2cm，器高3.0cmである。

Ⅲ類（Fig.95－217，Fig.96－238～Fig.100－308）

72固体を図示した。須恵器，土師器，黒色土器がある。高台のちがい，口径，製作技術等から，さらに細分が可能である。

器形は，底部に貼り付けの高台をもち，体部は外傾しながらたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加えている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。

Fig.98の238～246はすべて須恵器である。238は高台が底部内側に貼り付けられ，高台の端部が大きく外方へ張り出す。高台内側にヘラ記号をもつ。口径13.4cm，器高4.2cm。239は断面方形の高台が底部内側に貼り付けられる。復原口径16.9cm，器高4.7cm。240は高台は底部内側に貼り付けられ，端部が外に張り出す。復原口径14.9cm，器高4.0cm。241は低い高台が底部内側に貼り付けられる。高台端部がやや外に張り出す。復原口径14.6cm，器高3.7cm。242は低い小さい高台が底部内側に貼り付けられる。口径15.8cm，器高5.2cm。243は断面方形の高台が底部内側に貼り付けられる。高台端はわずかに外に張る。口縁はわずかに外反する。口径15.3cm，器高6.0cm。244は高台は端部が内外に張り，底部の内側に貼り付けられている。口径13.4cm，器高3.4cm。245は断面方形の高台を底部内側に貼り付ける。復原口径13.8cm，器高3.8cm。246は高台は底部内側に貼り付けられる。復原口径14.1cm，器高3.3cm。Fig.99はすべて須恵器である。高台は断面方形で底部内側に貼り付けられる。復原口径18.2cm，器高5.9cm。焼成不良で軟質である。248は断面方形の高台を底部内側に貼りつける。高台端部は外側に張り出す。口径13.0cm，器高4.3cm。249は断面方形の低い高台を底部内側に貼り付ける。復原口径14.6cm，器高4.0cm。250は低い高台を底部内側に貼り付ける。口径13.9cm，器高3.9cm。251は断面方形の高台を底部内側に貼り付ける。内面にススが付着する。復原口径14.4cm，器高4.0cm。252は細くて

高い高台を底部内側に貼り付ける。復原口径13.6cm，器高3.6cm。253は低い高台を底部内側に貼り付ける。復原口径12.8cm，器高4.2cm。焼成不良で軟質である。254は低い高台を底部内側に貼り付ける。底部には板状圧痕が残る。復原口径13.0cm，器高3.1cm。255は焼成不良で軟質である。断面方形の高台を底部内側に貼り付ける。復原口径12.8cm，器高5.5cm。256は焼成不良で軟質である。断面方形の高台を底部端近くに貼り付ける。復原口径13.6cm，器高5.2cm。257は断面逆台形の高台を底部内側に貼り付ける。口縁部がわずかに外反する。復原口径13.8cm，器高4.0cm。258は断面逆台形の高台を底部内側に貼り付ける。口縁がわずかに外反する。口径12.9cm，器高4.5cm。259は断面逆台形の高台を底部内側に貼り付ける。高台端は外に張る。復原口径13.0cm，器高4.2cm。260は断面方形の高台を底部内側に貼り付ける。口縁部がわずかに外反する。口径13.0cm，器高4.3cm。261は断面逆台形の高台を底部内側に貼り付ける。復原口径12.5cm，器高3.5cm。262は低い高台を底部内側に貼り付ける。復原口径12.8cm，器高3.9cm。Fig.98はすべて須恵器である。263は断面逆台形の高台を底部内側に貼り付ける。口径13.7cm，器高4.1cm。264はやや高い高台を底部内側に貼りつける。貼り付ける部分には接着を良くするために刷毛目状の工具で条線を入れている。口縁部は大きく外反する。復原口径14.2cm，器高3.6cm。265は断面逆台形の高台を底部内側に貼り付けている。口縁部がわずかに外反する。復原口径13.5cm，器高4.6cm。266は焼成不良で軟質である。断面方形の高台を底部内側に貼り付けている。口縁部はわずかに外反する。復原口径14.4cm，器高4.8cm。267は細くて高い高台を底部内側に貼り付けている。口縁部は外反する。復原口径13.2cm，器高3.8cm。268は断面逆台形の高台を底部内側に貼り付ける。口縁部はわずかに外反する。口径13.8cm，器高4.2cm。269は断面方形の高台を底部端近くに貼り付ける。口縁部がわずかに外反する。口径13.5cm，器高4.3cm。270は低い高台を底部端近くに貼り付ける。271は断面方形の高台を底部端近くに貼りつける。高台端は外側に張る。復原口径12.0cm，器高3.6cm。272は断面方形の高台を底部端に貼り付ける。口縁部はわずかに外反する。口径13.2cm，器高4.6cm。273は断面逆台形の高台を底部端に貼り付ける。復原口径14.6cm，器高4.2cm。274は低い高台を底部端に貼り付ける。高台端は外に張る。口縁部がわずかに外反する。復原口径14.0cm，器高5.3cm。275は焼成不良で軟質である。高台はやや高く，底部端に貼り付けられる。口縁部はわずかに外反する。復原口径16.2cm，器高4.9cm。276は断面方形の高台を底部端に近く貼り付ける。高台端は外側に張る。復原口径15.4cm，器高5.4cm。277は高台はやや高く外側に張り出す。底部端に貼り付けられる。高台端は外側に張る。復原口径15.4cm，器高5.4cm。277は高台はや丶高く外側に張り出す。底部端に貼り付けられる。口縁はわずかに外反する。復原口径16.2cm，器高5.4cm。Fig.99もすべて須恵器である。278は焼成不良で軟質である。断面方形の高台を底部内側に貼り付ける。復原口径12.6cm，器高3.4cm。279は高台端部が大きく外に張る。底部端に近く貼り付けられる。口縁部はわずかに外反する。口径12.8cm，器高3.9cm。280は断面逆台形の高台を底部内側に貼り

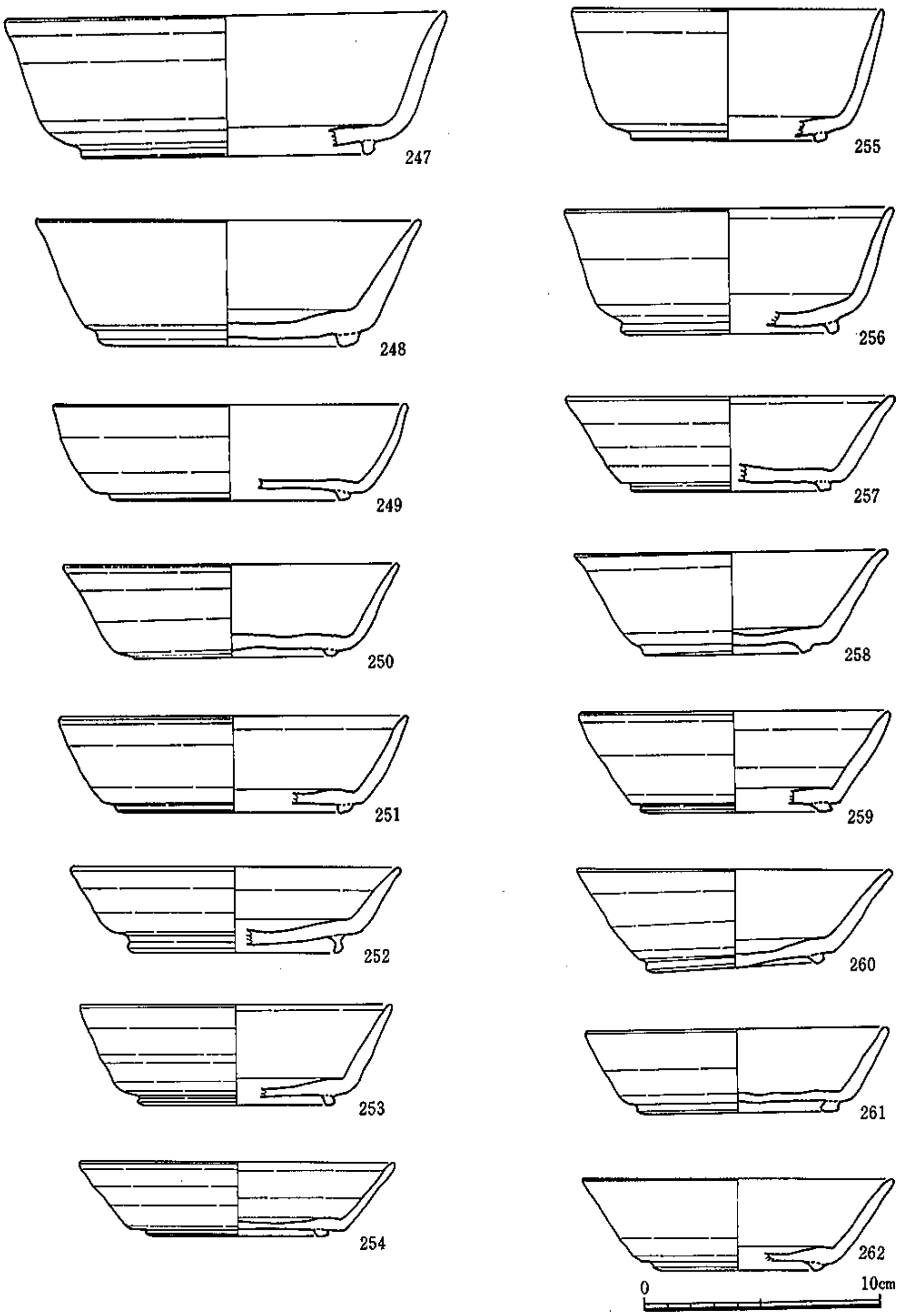


Fig. 97　SD−10出土遺物実測図XIV

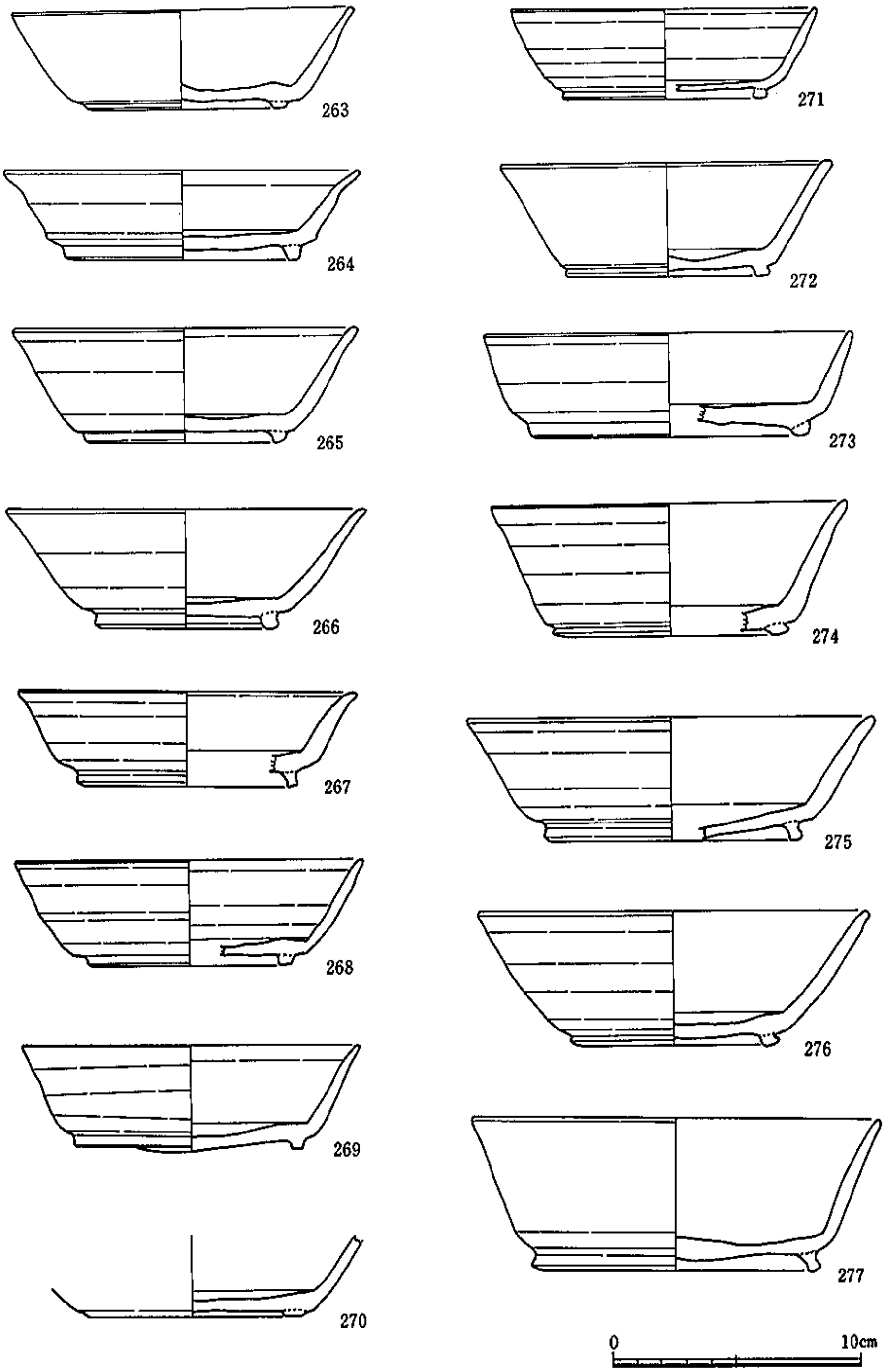


Fig. 98　SD－10出土遺物実測図XV

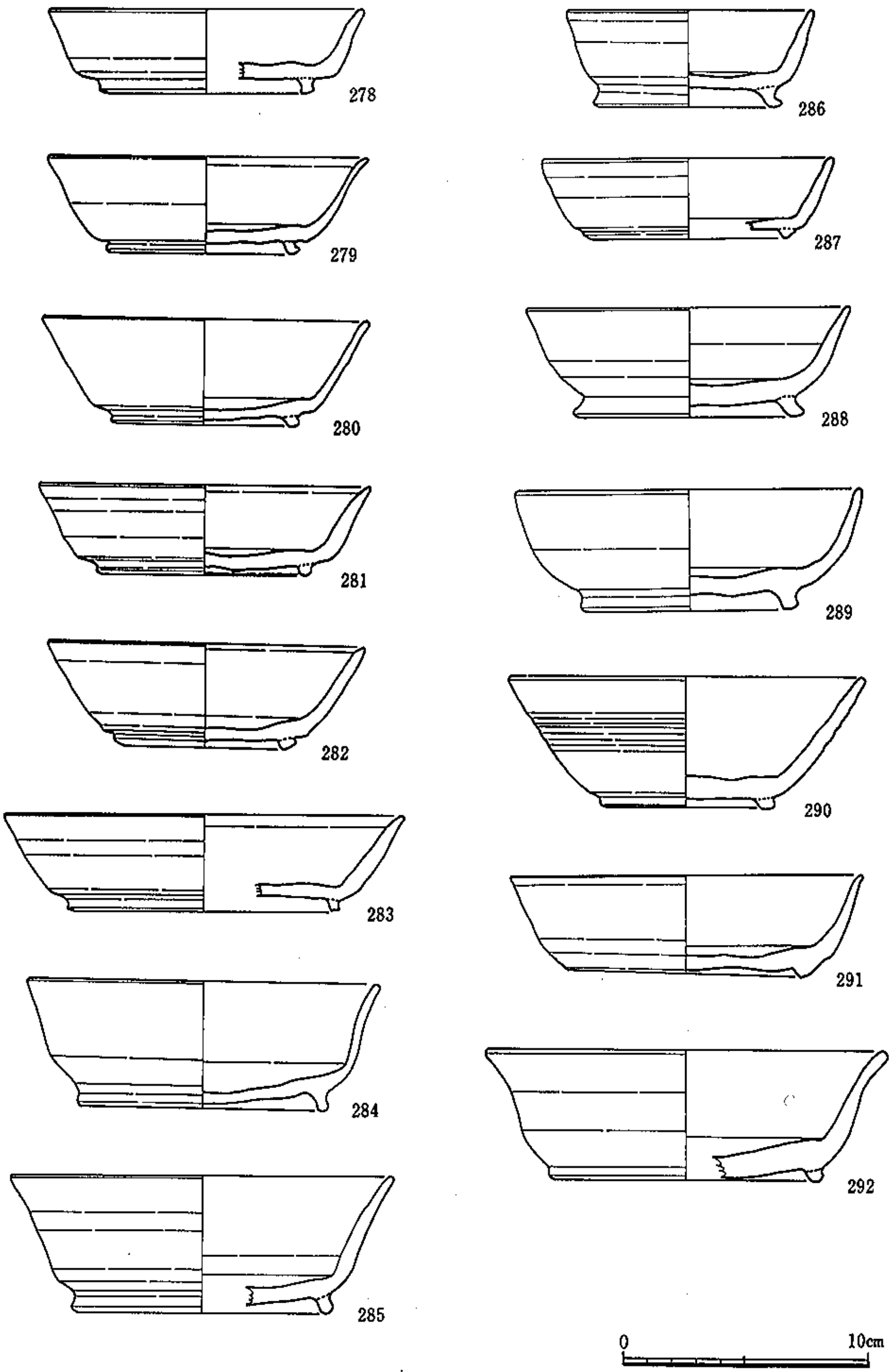


Fig. 99　SD−10出土遺物実測図XVI

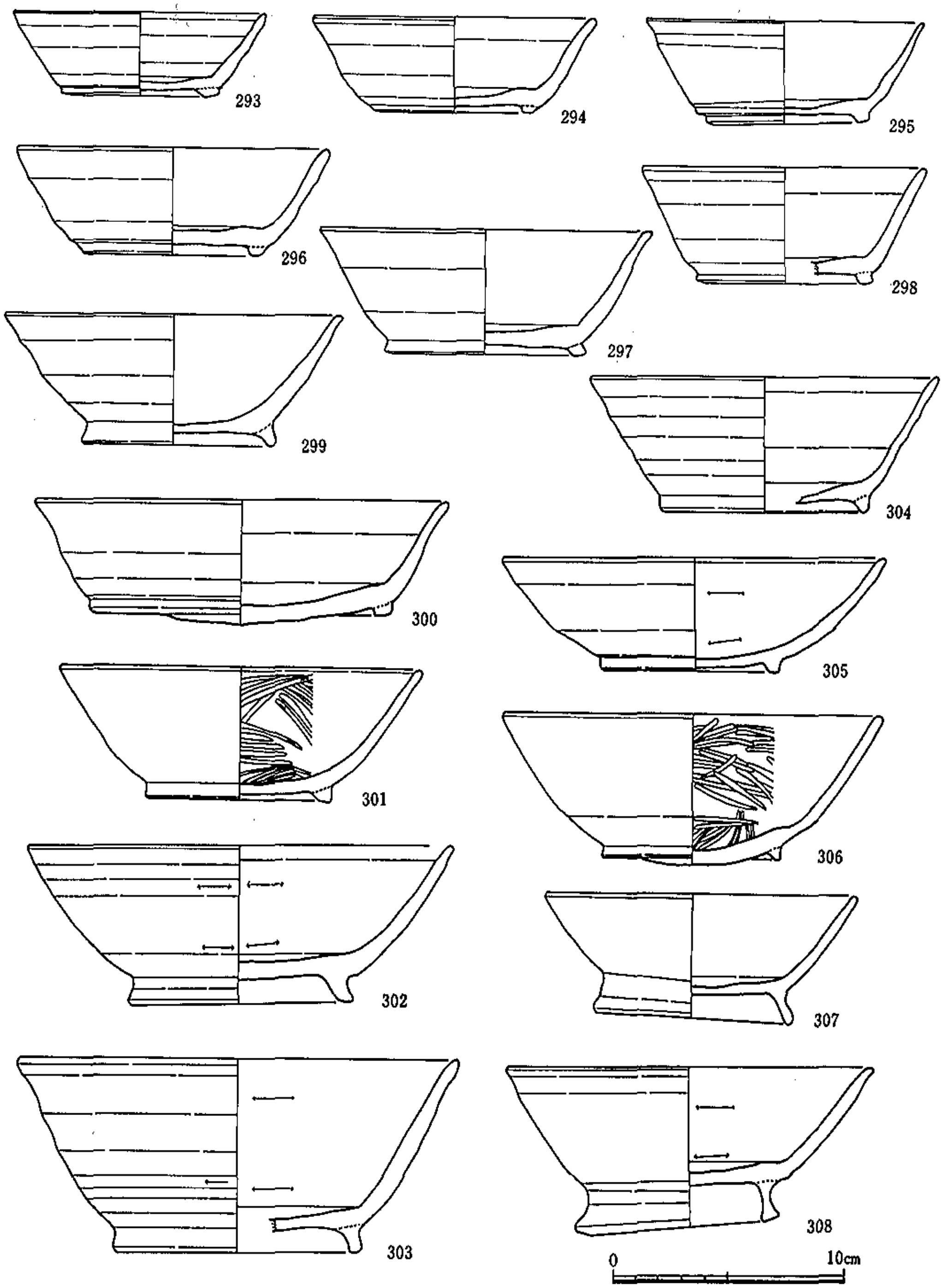


Fig. 100　SD－10出土遺物実測図XVII

付ける。口縁部がわずかに外反する。復反口径13.2cm，器高4.3cm。281は断面方形の高台を底部内側に貼り付ける。復原口径13.2cm，器高3.6cm。282は断面方形の高台を底部内側に貼り付ける。復原口径12.6cm，器高4.2cm。283は細い高台を底部端に貼り付ける。口縁部はわずかに外反する。復原口径15.9cm，器高3.9cm。284はやや高い高台を底部端に貼り付ける。高台端は外側に張る。口縁部はわずかに外反する。口径14.2cm，器高5.1cm。285は断面長方形の高台を底部端に貼り付ける。口縁部はわずかに外反する。復原口径15.2cm，器高5.5cm。286は高台が大きく外方に張り出す。底部端に貼り付けられている。復原口径9.8cm，器高3.9cm。287は低い高台で，端部は外方に斜めに削りとられる。底部内側に貼り付けられる。復原口径11.5cm，器高3.2cm。288は外側に張り出した高台を底部端に貼り付ける。復原口径12.8cm，器高4.4cm。289は断面長方形の太い高台を底部端に貼り付ける。底部にヘラ記号がある。口径13.8cm，器高4.9cm。胎土に多量の砂粒を含む。290は低い高台を底部端に貼り付ける。口径14.0cm，器高5.3cm。291は断面逆台形の高台を底部端に貼りつける。口径13.9cm，器高4.1cm。292は断面方形の高台を底部端に貼りつける。口縁部はわずかに外反する。復原口径15.9cm，器高5.3cm。Fig.100は293～298，300が須恵器。299，302～305，307，308が土師器。301，306が黒色土器である。293は断面逆台形の高台を底部端近くに貼りつける。復原口径10.7cm，器高3.6cm。294は断面逆台形の高台を底部端に貼り付ける。焼成不良で軟質である。復原口径12.3cm，器高4.2cm。295は断面逆台形の高台を底部端に貼り付ける。口縁部がわずかに外反する。口径12.8cm，器高4.5cm。296は294とほぼ同様の器形をなす。焼成不良で軟質である。復原口径13.2cm，器高4.6cm。297は断面方形の高台を底部端に貼り付ける。口縁部がわずかに外反する。復原口径14.2cm，器高5.4cm。焼成不良で軟質である。298は断面方形の高台を底部端に貼り付ける。復原口径12.3cm，器高4.8cm。299はやや高く，外方に張り出す高台を底部端に貼り付ける。口縁部がわずかに外反する。口径14.2cm，器高5.6cm。300は断面方形の高台を底部端に貼り付ける。口縁部が外反する。復原口径17.4cm，器高5.4cm。301は断面逆台形の高台を底部端に貼り付ける。底部，体部下半は丁寧なヘラ削り調整で体部上半部は横ナデ調整。内面は丁寧なヘラ研磨で黒色をなす。口径15.4cm，器高5.7cm。302はやや高く外方に張る高台を底部端に貼りつける。口径18.0cm，器高6.9cm。303は高い高台を底部端に貼り付ける。口縁部はわずかに外反し肥厚する。底部，体部下半は丁寧なヘラ削り調整。上半は横ナデ調整。内面は横方向のヘラ研磨調整。復原口径18.5cm，器高8.3cm。304は断面逆台形の高台を底部端に貼りつける。内外面共横ナデ調整。復原口径14.7cm，器高5.8cm。305は断面逆台形の高台を底部端に貼りつける。底部にヘラ記号がある。内外面共ヘラ磨きである。復原口径16.2cm，器高4.9cm。306は断面三角形の高台を底部端に貼りつける。底部，体部下半はヘラ削り調整。上半部は横ナデ調整。内面はヘラ磨きで黒色を呈する。復原口径15.8cm，器高6.5cm。307は高い外方に張る高台を底部端に貼りつける。復原口径14.2cm，器高5.5cm。308は高く，端部が外方に肥厚する高台を底部端に貼りつける。

底部，体部下半は丁寧なヘラ削り調整で，その上からヘラ磨きがみられる。体部上半部および内面は横ナデ調整後，ヘラ磨き調整。復原口径15.4cm，器高7.2cm。

皿（Fig.101，102，103－359）

51個体を図示した。須恵器，土師器がある。底部は平底で，体部は外傾しながらたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切りで，ヘラ削り調整が加えられる。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整で，内底部は多方向からのナデ調整である。器形的には若干の差異があり，口径等も加味して細分が可能である。

Fig.101では315～317，323が土師器で，他は須恵器である。309は焼成不良で軟質である。復原口径20.0cm，器高3.1cm。310も焼成不良で軟質である。口縁部がわずかに外反する。復原口径18.8cm，器高1.8cm。311は口縁部が外反する。復原口径19.9cm，器高3.9cm。312は底部は丁寧なヘラ削り調整。口縁部は尖り気味におさめる。復原口径20.4cm，器高2.3cm。313は復原口径20.6cm，器高1.8cm。314は口縁部がわずかに外反する。復原口径18.9cm，器高1.6cm。315は底部は丁寧なヘラ削り調整。胎土に多量の砂粒を含む。内面にススが付着する。復原口径18.8cm，器高2.0cm。316は底部は丁寧なヘラ削り調整。復原口径18.8cm，器高1.7cm。317は底部は丁寧なヘラ削り調整。内外面共ヘラ磨き調整。318は口縁部がわずかに外反する。内底部にススが付着する。復原口径17.3cm，器高2.3cm。319は底部が丸味を持つ。口縁部がわずかに外反する。復原口径17.5cm，器高2.9cm。320は復原口径13.0cm，器高1.8cm。321は口縁部がわずかに外反する。底部に板状圧痕がある。復原口径13.0cm，器高2.1cm。322は底部にヘラ記号を持つ。口径13.0cm，器高2.0cm。323は口縁部がわずかに外反する。底部に板状圧痕がある。復原口径13.4cm，器高2.2cm。324は口縁部がわずかに外反する。復原口径13.5cm，器高1.6cm。325は口縁部がわずかに外反する。復原口径12.9cm，器高1.9cm。326は底部に板状圧痕がある。復原口径13.2cm，器高2.1cm。327は復原口径14.5cm，器高2.2cm。328は復原口径14.4cm，器高2.3cm。329は焼成不良で軟質である。口径14.6cm，器高2.1cm。330は全体に磨滅している。内面にススが付着する。口径14.4cm，器高2.3cmである。

Fig.102は332，345，346，352が土師器で，他は須恵器である。331はほぼ完形である。口径18.6cm，器高2.6cm。332は内外面共横ナデ調整後，ヘラ磨きを加えている。復原口径17.4cm，器高2.0cm。333は復原口径17.4cm，器高2.5cm。334は底部がやや丸味をもつ。復原口径16.6cm，器高2.3cm。335は底部に丸味があり，体部も内湾気味にたちあがる。復原口径18.0cm，器高2.3cm。336は口縁部がわずかに外反する。内面にススが付着している。復原口径17.5cm，器高2.7cm。337は口縁部に凹線一条をめぐらし，口縁部はわずかに外反する。復原口径18.2cm，器高2.9cm。338は底部は丁寧なヘラ削り調整。口縁部は外反する。復原口径19.0cm，器高2.4cm。339は焼成不良で軟質である。口縁部がわずかに外反する。復原口径17.8cm，器高1.8cm。340は焼成不良で軟質である。復原口径17.2cm，器高2.2cm。341は底部から体部にかけて丸味をもって

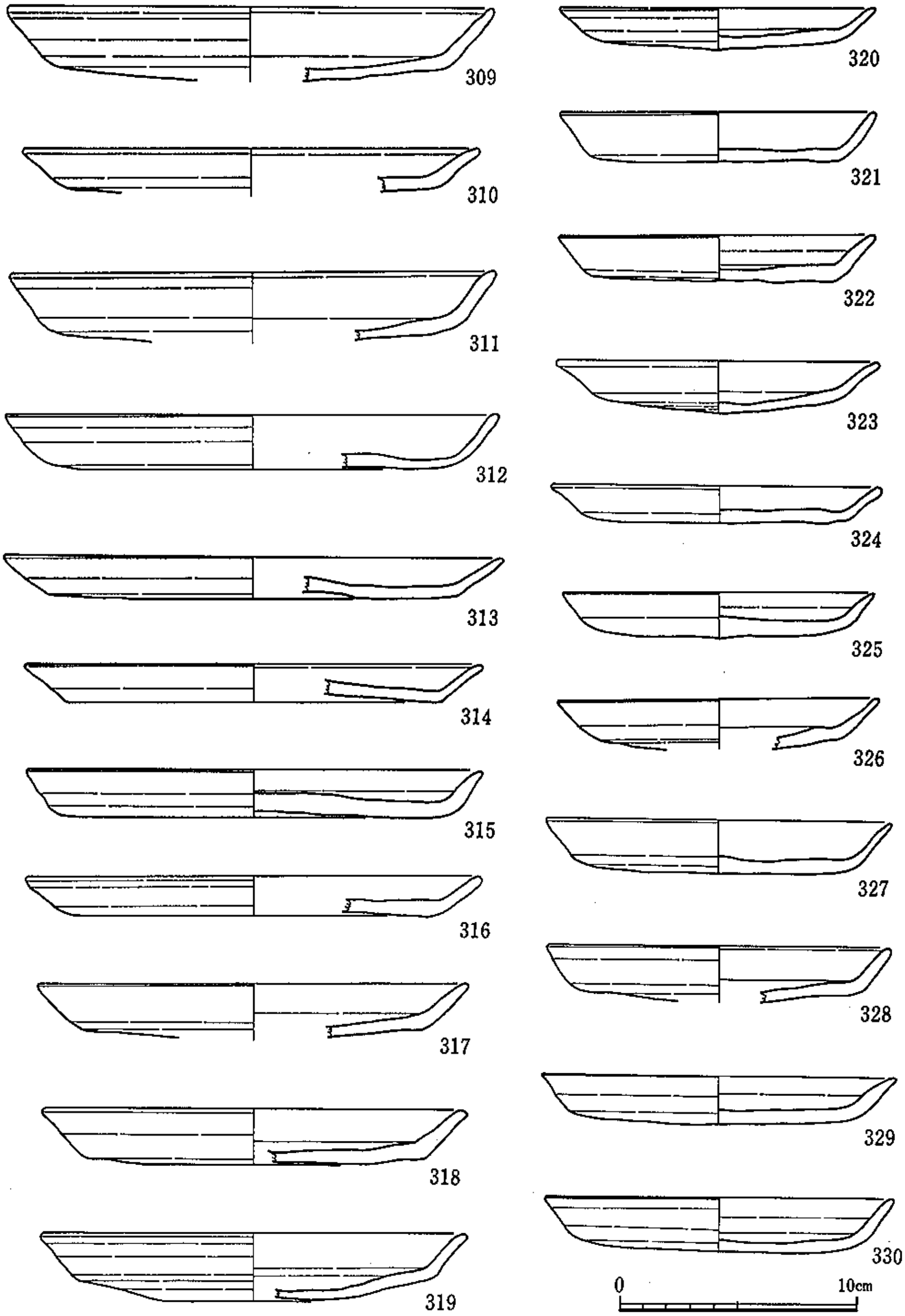


Fig. 101　SD—10出土遺物実測図XⅧ

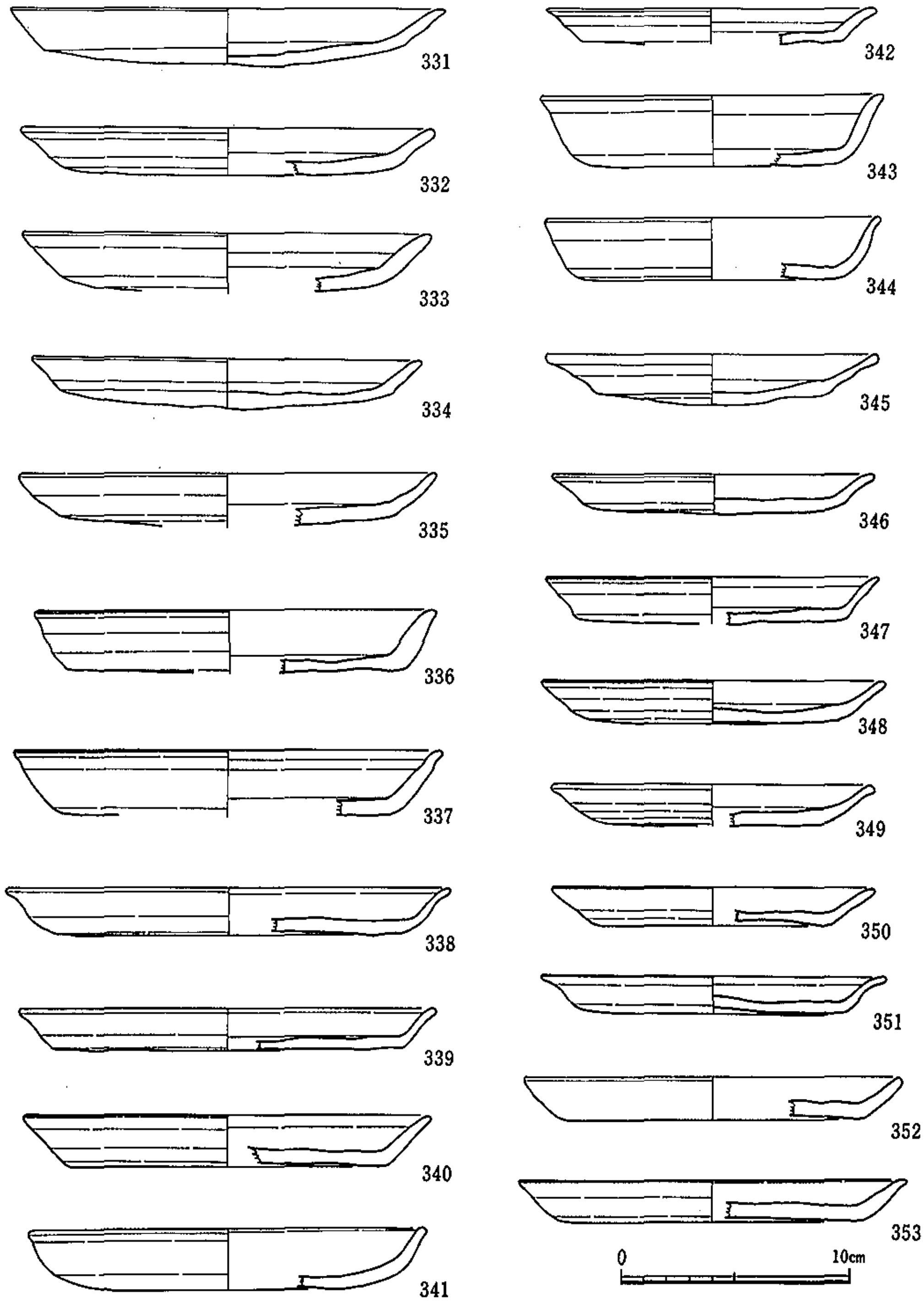


Fig. 102　SD—10出土遺物実測図ＸⅨ

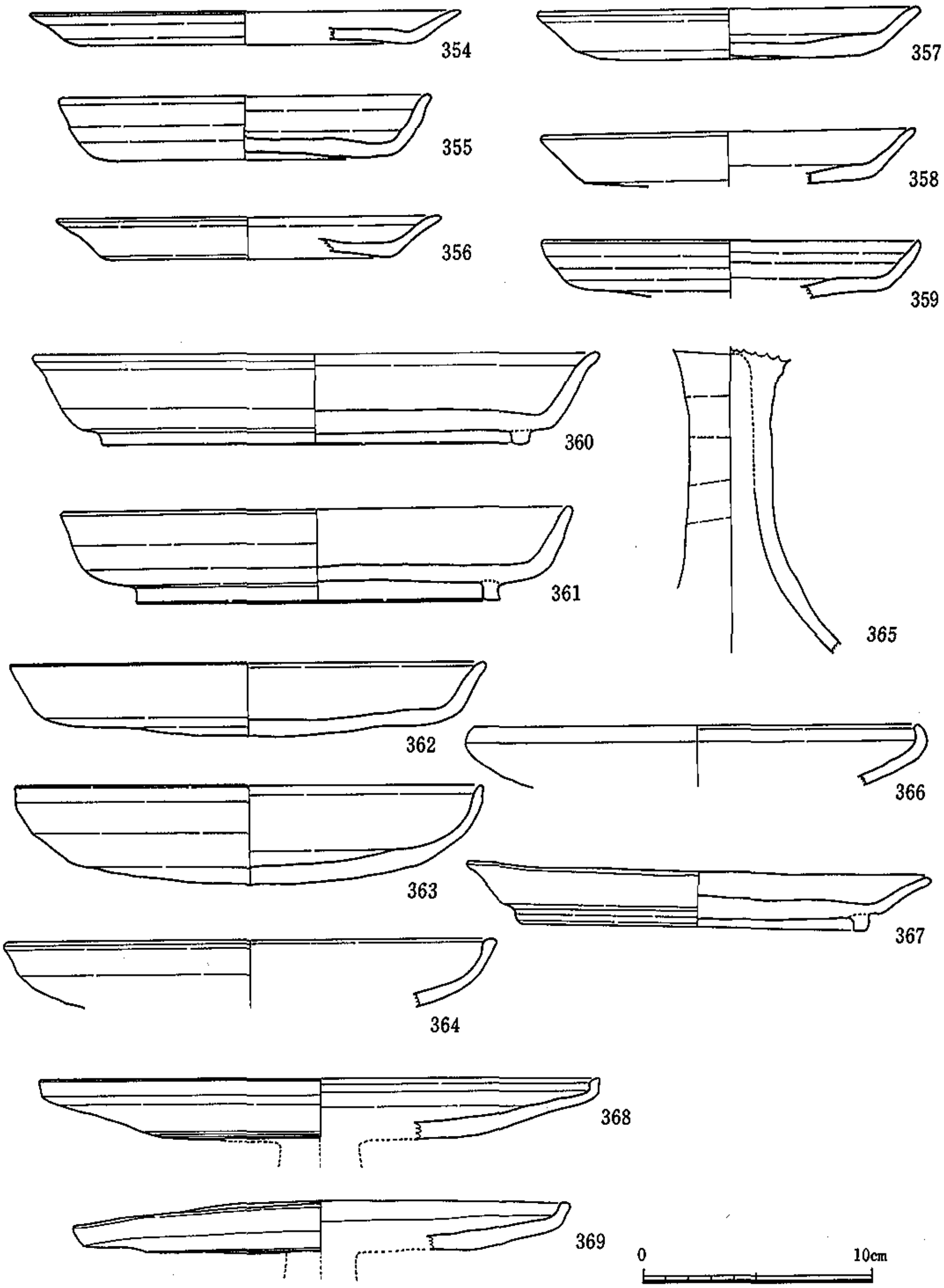


Fig. 103　SD—10出土遺物実測図XX

移行する。復原口径16.6cm，器高2.6cm。342は口縁部が外反する。底部にヘラ記号をもつ。復原口径13.9cm，器高1.5cm。343は口縁部がわずかに外反する。復原口径14.8cm，器高3.1cm。344は復原口径14.3cm，器高2.7cm。345は底部は丸味をもつ。ヘラ切りのままである。口縁部は大きく外反する。口径14.2cm，器高2.2cm。346は口縁部が外反する。口径15.8cm，器高1.7cm。347は底部ヘラ切り後ヘラ磨き。体部から口縁部の内外面は横ナデ調整。口縁部は外反する。復原口径14.3cm，器高2.0cm。348はヘラ切り後，ナデを加える。復原口径14.6cm，器高1.9cm。349は口縁部が外反する。復原口径13.6cm，器高1.8cm。350は復原口径13.6cm，器高1.7cm。351は口縁部が大きく外反する。復原口径14.6cm，器高1.6cm。352は底部は丁寧なヘラ削り調整。復原口径16.0cm，器高1.9cm。353は口縁部がわずかに外反する。復原口径16.5cm，器高1.8cmである。

Fig.103の皿で357。358が土師器で，他は須恵器である。354は口縁部がわずかに外反する。復原口径18.2cm，器高1.4cm。355は焼成不良で軟質である。底部は丁寧なヘラ削り調整。復原口径15.7cm，器高2.7cm。356は口縁部が外反する。復原口径16.2cm，器高1.8cm。357は底部はヘラ切りのままである。復原口径16.2cm，器高2.1cm。358は復原口径15.9cm，器高2.3cm。359は復原口径16.2cm，器高2.4cmである。

盤（Fig.103－360～363，366，367）

6点を図示した。366が土師器で他はすべて須恵器である。360は断面方形の高台を底部端に貼りつける。底部は丁寧なヘラ削り調整である。口縁部がわずかに外反する。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。口径24.4cm，器高3.9cm。361は断面方形の高台を底部内側に貼りつける。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部は丸味をもってたちあがり，口縁部はわずかに外反する。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。口径21.6cm，器高4.0cm。362は底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整。口縁部はわずかに外反する。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。焼成不良で軟質である。復原口径20.4cm，器高3.1cm。363は底部が丸味をもつ。ヘラ切り後，粗いヘラ削り調整。体部は内湾気味にたちあがる。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。復原口径20.0cm，器高4.3cm。366は口縁部が大きく内湾し，口縁端部は丸くおさめる。器面が荒れているが，内外面共ヘラ磨き。復原口径19.1cm。367は断面方形の高台を底部端近くに貼り付ける。底部は丁寧なヘラ削り調整。口縁部は大きく外反する。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は磨滅している。口径20.0cm，器高2.6cm。

高坏（Fig.103－364，365，368，369）

4個体を図示した。364，368，369は坏部，365は脚部である。共に須恵器である。364は体部から丸味をもってたちあがり，口縁端部は平坦である。体部から口縁部の内外面は横ナデ調整。

復原口径20.6cm。365は脚筒部が長い。脚端部はラッパ状にひらく。脚筒部にはしぼりの痕跡がみられる。内外面共に横ナデ調整。368，369は同形状をなす。口縁部は屈曲し直にたち，口縁端部は平坦である。底部は丁寧なヘラ削り調整。体から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。復原口径は368は23.2cm，369は20.4cmである。

鉢（Fig.104－340～352）

3点を図示した。340は須恵器，341，342は土師器である。体部上半で屈曲し，口縁部は内傾し，口縁端部は削り出しによって玉縁状にして，端部は丸くおさめる。体部下半は丁寧なヘラ削り調整。体部上半部および内面は横ナデ調整である。復原口径17.8cm。341は球形をした鉢で，口縁部は内傾し，口縁端部は丸くおさめる。底部から体部下半部はヘラ削り調整後，ヘラ磨き調整を加えている。体部上半部および内面は横ナデ調整後，丁寧なヘラ磨き調整を加える。口径16.2cm，器高10.7cm。342は体部上半でくの字に屈曲し，口縁部は内傾し，端部は丸くおさめる。内外面共に横ナデ調整。復原口径17.9cmである。

椀（Fig.104－345～349）

5点を図示した。底部丸底でやや深さのあるものと高台をもち肩部で屈曲し，短かい口縁部がつくものの二種類がある。

345は焼成不良で軟質である。底部は丸底で粗いヘラ削り。体部に3条の沈線をめぐらす。器面が磨滅しているが，体部内外面は横ナデ調整。349は小型品である。底部は丸底で，丁寧な静止ヘラ削りを行う。体部は直にたちあがり，口縁部がわずかに外反する。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。復原口径7.4cm，器高4.3cm。346は断面方形の高台を底部端に貼り付ける。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部は外傾しながらたちあがり，口縁部近くで内側に屈曲し，短かい直立する口縁をつける。体部下半は丁寧なヘラ削り調整，体部上半部および内面は横ナデ調整。内底部は指圧調整後，多方向からのナデ調整を加える。口径12.2cm，器高4.3cm。347は高台端部が両側にひろがる高台を底部端に貼りつける。器形は346と同様である。底部から体部下半は丁寧なヘラ削り調整。体部上半部および内面は横ナデ調整。胎土に多量の砂粒を含む。口径11.4cm，器高4.6cm。348は断面逆台形の高台を底部内側に貼りつける。体部は外傾しながらたちあがり，口縁部近くで鋭い稜線をもって内傾する。口縁部はやや外反する。底部および体部下半は丁寧なヘラ削り調整。体部上半から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。口径9.6cm，器高4.6cm。

甕（Fig.104－343，345）

343は広口の甕で，頸部から短い口縁が外反し，口縁端部は上からナデを加え平坦におさめている。体部最大径は肩部にある。体部下半部は丁寧なヘラ削り調整。体部上半部から口縁部にかけてと内面は横ナデ調整である。復原口径18.8cm。334は343と同様の器形をなす。焼成不良で軟質である。外面は黒色をなす。内外面共横ナデ調整。復原口径22.6cmである。

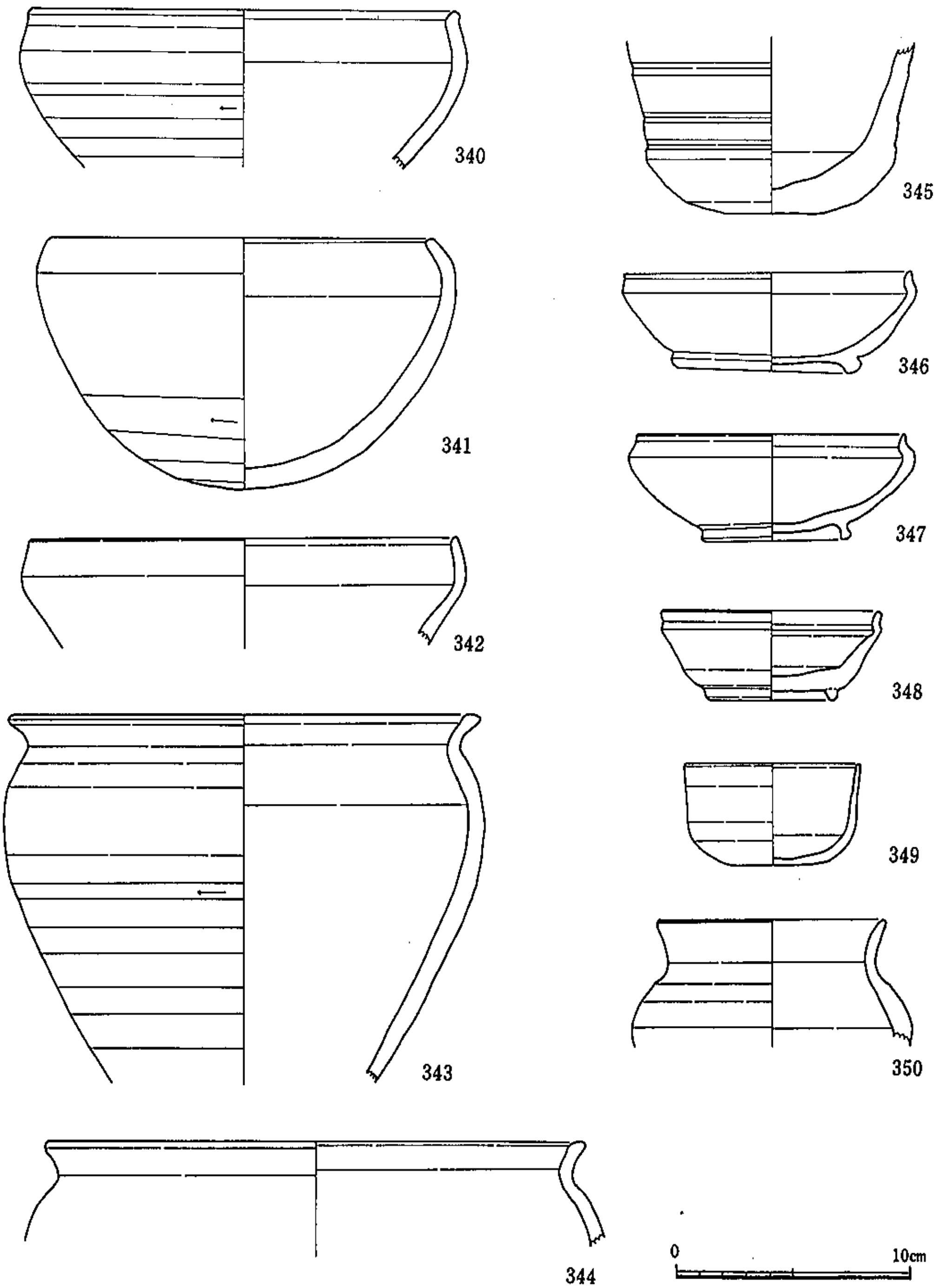
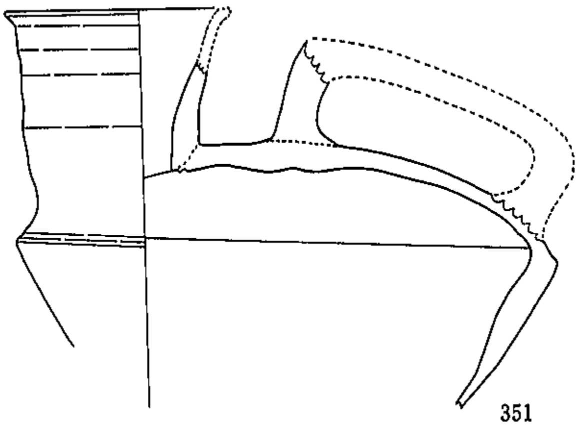
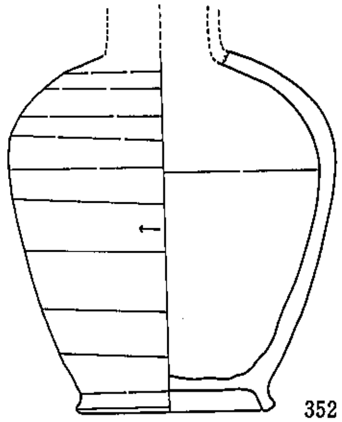


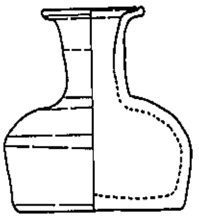
Fig. 104　SD—10出土遺物実測図ＸⅪ



351

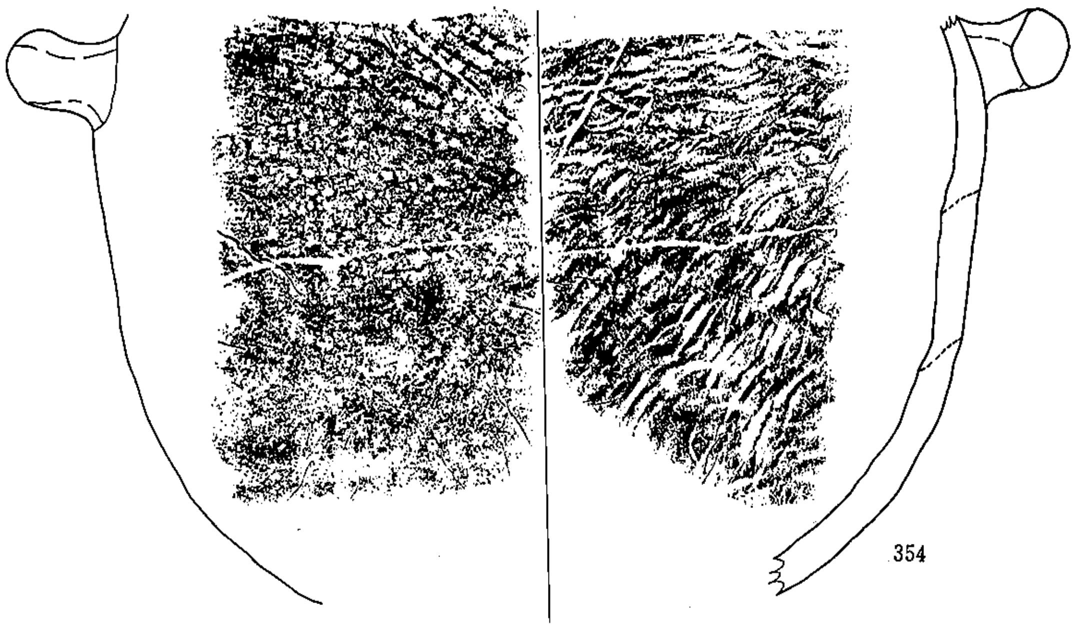


352



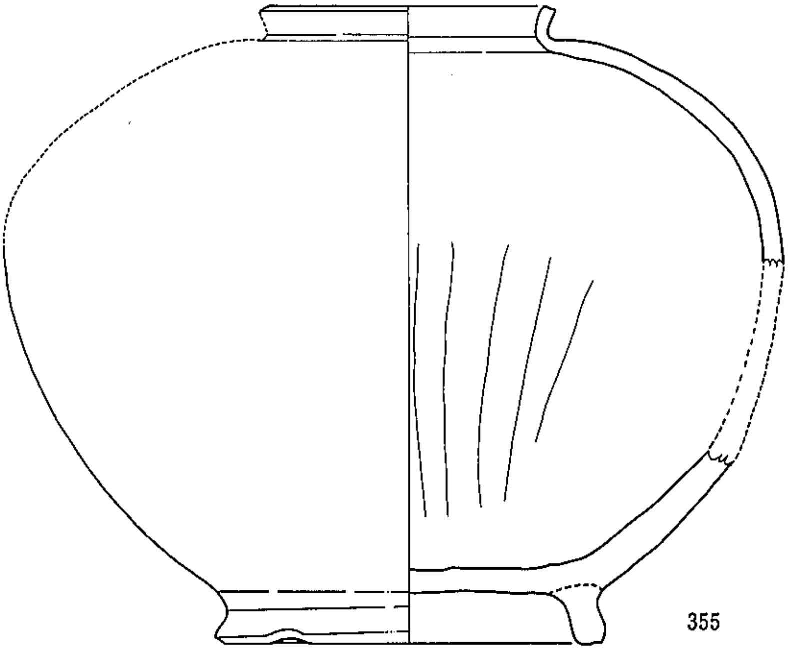
353

0　　　　10cm

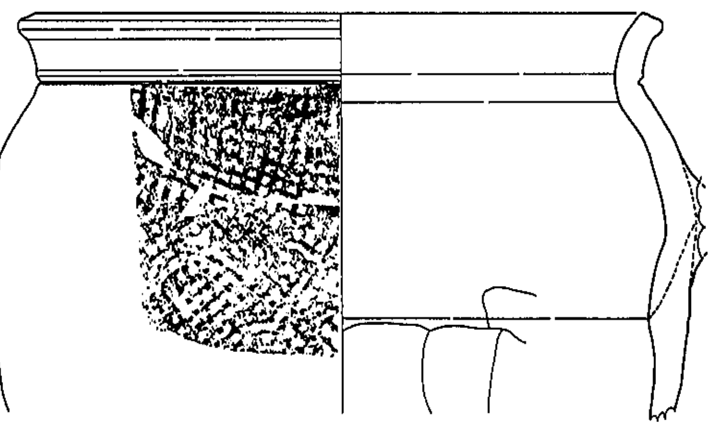


354

Fig. 105　SD—10出土遺物実測図 XⅧ



355



356

0 10cm

Fig. 106 SD−01出土遺物ＸＸⅧ

壺（Fig.104－350，Fig.105－352，353，Fig.106－355）

350は土師器の小型壺である。口縁部は頸部からわずかに外傾しながらたちあがり，端部は尖り気味におさめる。体部は球形をなすと考えられる。内外面共横ナデ調整である。復原口径9.5cm，352は長頸壺であるが頸部を失う。断面長方形のやや高い高台を外側に張り出す状態で貼りつけている。体部は長胴で最大径は肩部にある。底部，体部下半は丁寧なヘラ削り調整，体部の上半部は横ナデ調整後ヘラ磨き調整を加えている。内面は横ナデ調整である。353は小型の長頸壺である。ほぼ完形品である。底部は安定した平底で，体部はほぼ垂直にたちあがり，上半部で屈曲内湾し肩部をつくる。頸部は細長く，口縁部は大きく外反する。外底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。口径4.0cm，器高8.0cm。335は短頸壺である。端部が外側に張り出した安定した高台を底部端に貼り付けている。体部は球形をなし，胴部最大径は体部中位にある。口縁部は短く，わずかに外傾する。口縁端部は平坦になり凹線がめぐる。底部から体部下半にかけては丁寧なヘラ削り調整。体部上半部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。体部下半部の内面は縦方向のヘラナデ調整。内底部は多方向からヘラナデ調整である。

平瓶（Fig.105－351）

片寄ってつけられる口頸部はやや外傾しながらたちあがり，口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。肩部は丸味をもち，口頸部に対して直線上に断面長方形の環状把手が貼り付けられているが，大部分を失う。体部上半で，鋭い稜線をもって下半部に移行する。底部を失うが安定した平底になると思われる。体部下半は丁寧なヘラ削り調整で，肩部，口頸部は横ナデ調整。把手はヘラ削りによって面取りがおこなわれている。内面は横ナデ調整である。

横瓶（Fig.107）

2個以上の横瓶があり，いずれも俵形をした大形品である。外面は擬格子目のタタキで，内面はタタキ後，ヘラナデ調整を加えているが凹凸が著しい。

大型甕（Fig.105－354，Fig.106－356，Fig.108，109）

量的に多い。8個体を図示した。いずれも須恵器である。354は焼成不良で軟質である。外面は格子目文のタタキで，内面は同心円文のタタキである。胴部に横位につけられた環状の把手がある。356は体部は球形をなし，頸部に断面三角形の沈線一条をめぐらす。口縁端部は削り出しによって肥厚し，上面は平坦に仕上げられる。肩部に把手をもつが，剥落しているため形状は不明。外面は格子目文のタタキ，内面は同心円文のタタキである。口縁部付近は内外面共に横ナデ調整である。復原口径31.6cm。358は肩部が張り，球形の体部をもつ。頸部はしまり，短かい口縁部がやや外傾気味にたちあがる。口縁下に断面三角形の突線一条をめぐらす。口縁端部は平坦に仕上げる。外面は格子目文のタタキ，内面は同心円文のタタキで，口頸部内外面は横ナデ調整である。復原口径16.8cm，359は体部は肩部が張り，長胴になると考えられる。口縁部

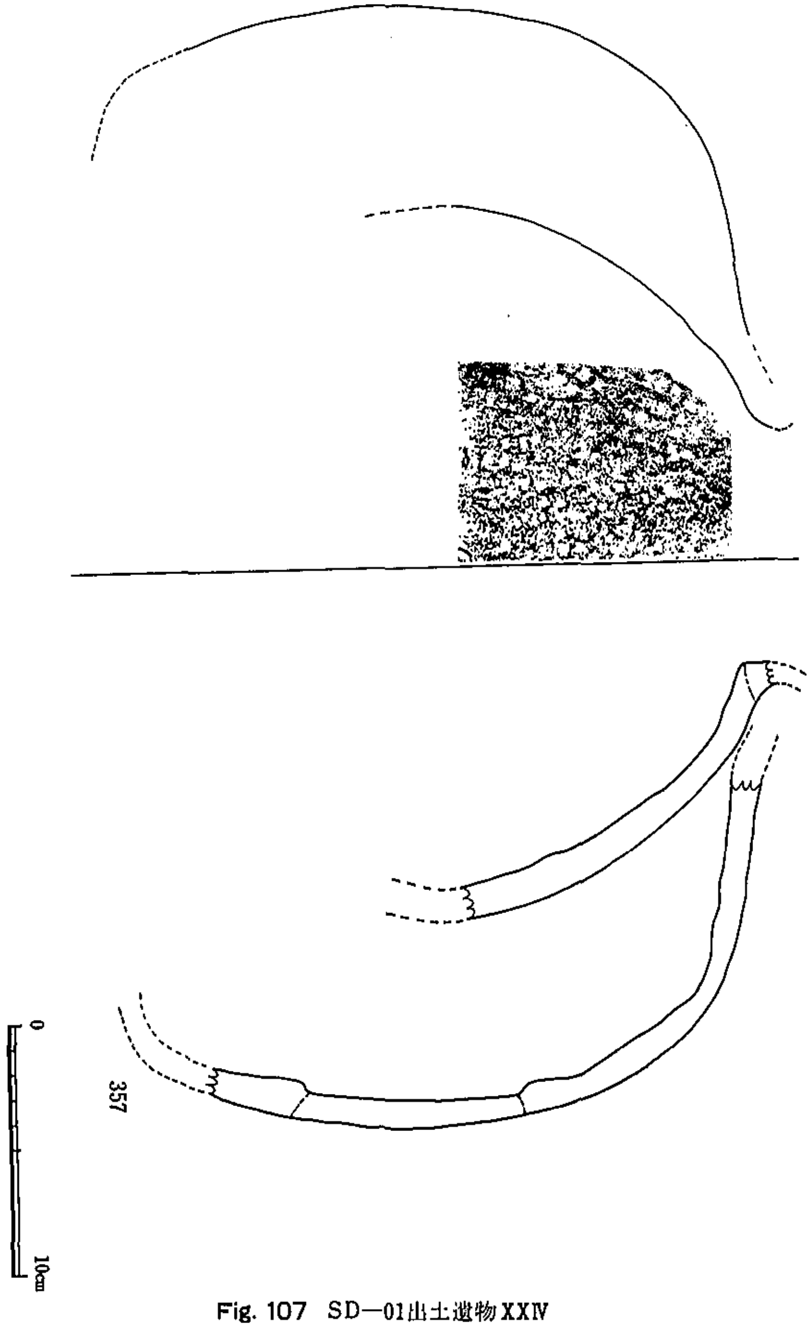


Fig. 107　SD—01出土遺物XXIV

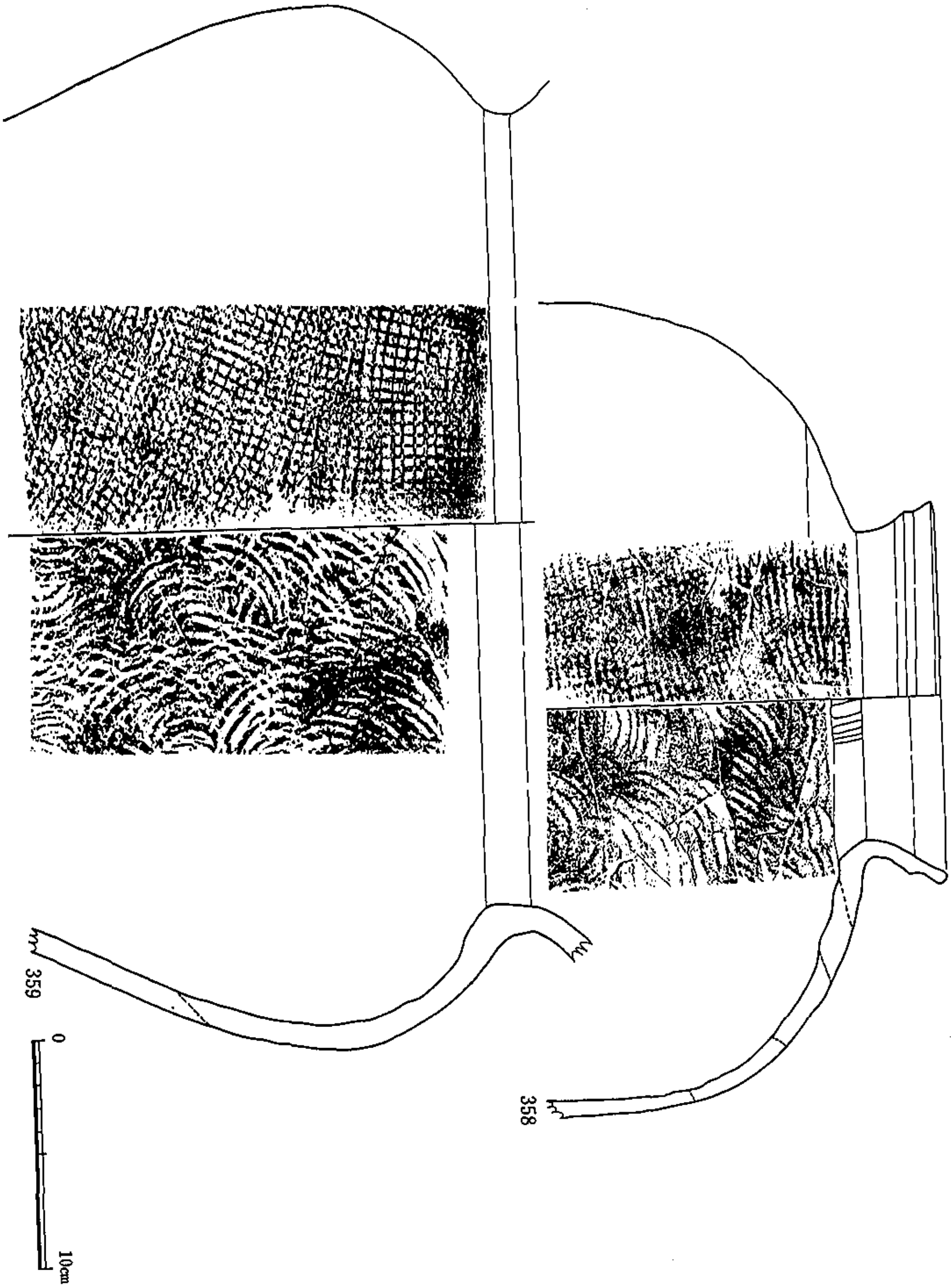


Fig. 108　SD—01出土遺物XXV

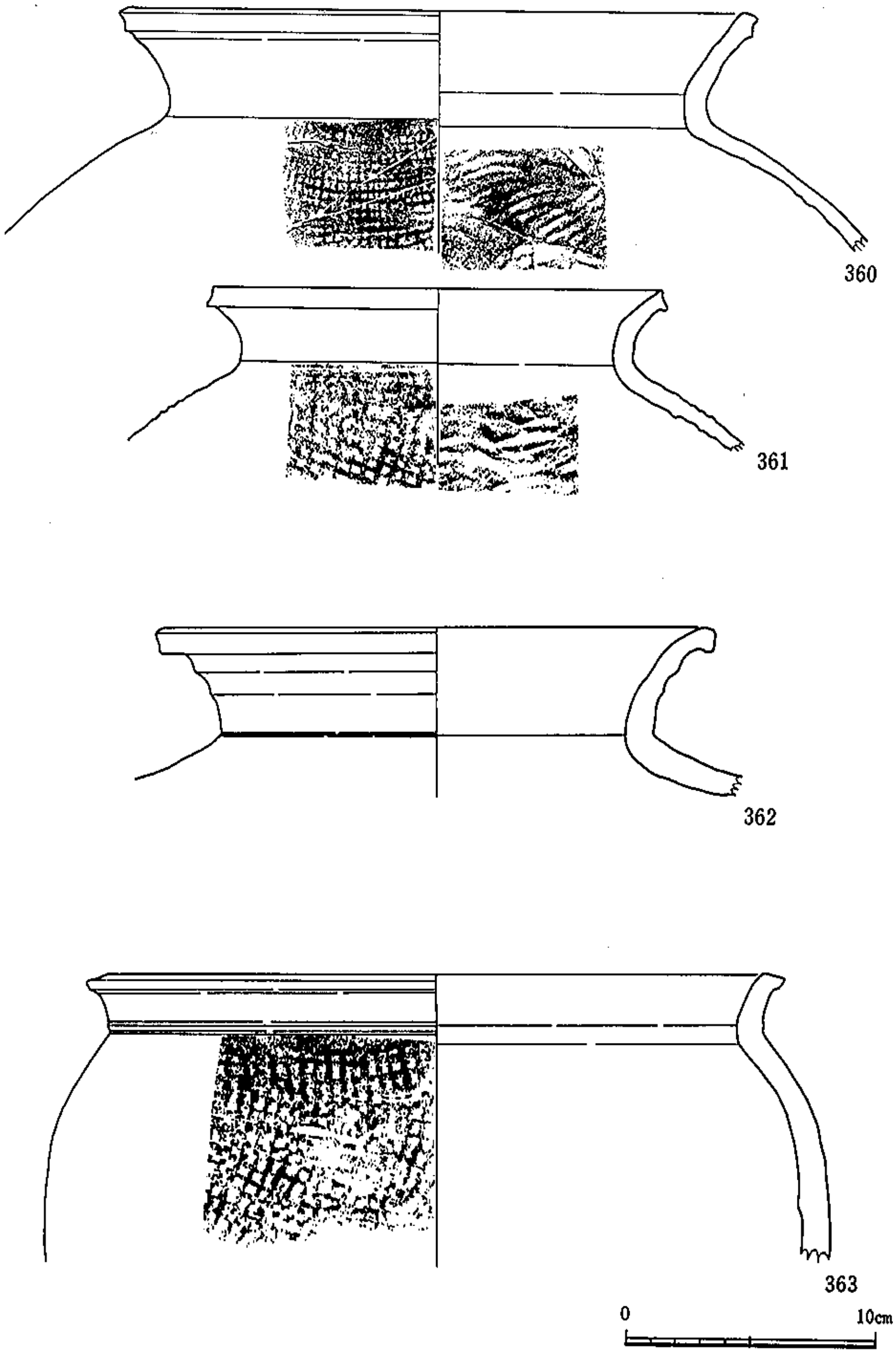


Fig. 109 SD—01出土遺物XXVI

は頸部から大きく外反するが，口縁を欠く。体部外面は格子目文のタタキ，内面は同心円文のタタキである。口頸部は内外共に横ナデ調整である。胴部最大径は45.6cm。360は肩が張り，球形の体部をなすと考えられる。口頸部は外傾しながら立ち上がり，口縁部は削り出しによって肥厚する。体部外面は格子目文のタタキ，内面は同心円文のタタキである。口頸部の内外面は横ナデ調整である。復原口径25.5cm。361は同様に肩が張り，体部は球形をなすと考えられる。口頸部は外傾しながらたちあがり，口縁部は外反する。口縁端部は平坦で凹線状になる。体部外面は格子目文のタタキで，内面は同心円文のタタキである。復原口径18.0cm。362は肩部が張る。頸部は外傾しながらたちあがり，口縁部は大きく外反する。口縁端部は平坦で凹線状をなす。全体に自然釉がかかる。体部外面は擬格子のタタキ，内面は同心円文のタタキである。口頸部の内外面は横ナデ調整。復原口径22.3cm。363は356と全く同形状をなし，整形技法も同一である。同一窯の産であろう。復原口径27.9cm。

⑾　第11号溝と出土遺物

第11号溝（SD－11）（Fig.110）

調査区の東半部，第2群掘立柱建物群の南側に位置する。T－25，26グリットにわたって検出した溝である。溝は西端部でSK－10と連接し，また東端部でも小さな土壙と連接している。なお，本溝と平行してSD－12～15が存在する。このことは本来各溝が独自で機能したものでなく，各溝，土壙が一つのセットとして一つの機構を果していたと考えられる。機能について，現在その解答をもちあわせていないが，等高線と平行する点など注意する必要があろう。

溝は長さ8.6m，幅30～40cm，深さ約10cm。東側は溝が幅広くなり長さ2.8m，幅1.3mの土壙状をなしている。本溝の南に存在するSD－12は約1m離れている。

出土遺物

本溝の埋土中からは，須恵器，土師器の小片が出土しているが，いずれも図示できない。

⑿　第12号溝と出土遺物

第12号溝（SD－12）（Fig.110）

T－25，26グリットにわたって検出した溝である。本溝の北側約1m離れてSD－11が南側に約1.2m離れてSD－13が存在する。溝は長さ4.5m，幅30～60cm，深さ約10cmである。

出土遺物

埋土中より須恵器，土師器の小片が出土しているが，いずれも図示することはできない。

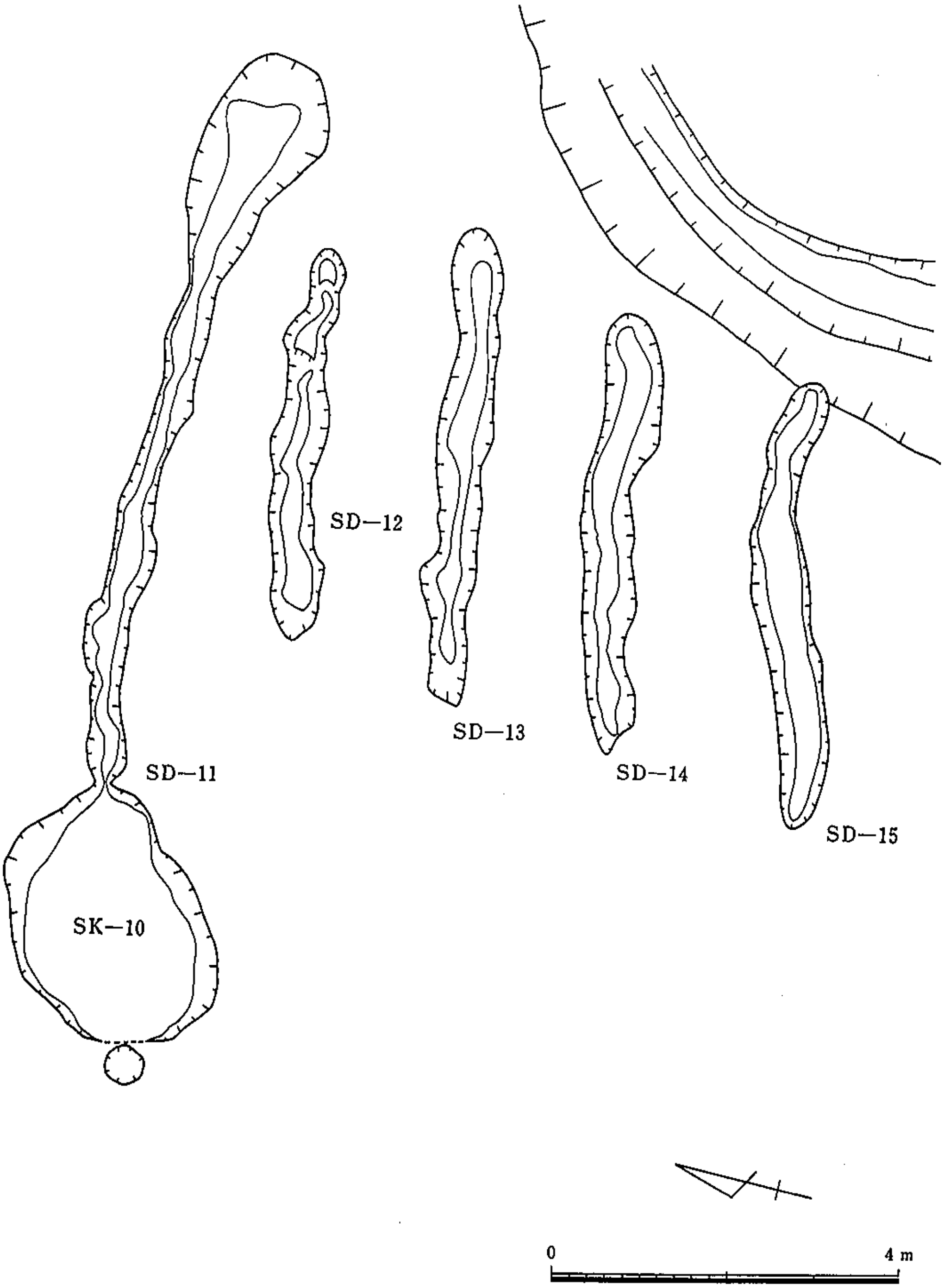


Fig. 110　第11〜15号溝(SD−11〜15)実測図

⒀　第13号溝と出土遺物

第13号溝（SD－13）（Fig.110）

Ｕ－25，26グリットにわたって検出した溝である。他の遺構との重複関係はみられない。本溝の北側に約1.2m離れてＳＤ－12が，南側に約1.1m離れてＳＤ－14が存在する。溝は長さ5.5m，幅40～65cm，深さ約10cmである。

出土遺物

埋土中より須恵器，土師器の小片が出土しているが，いずれも図示することはできない。

⒁　第14号溝と出土遺物

第14号溝（SD－14）（Fig.110）

Ｕ－25，26グリットにわたって検出した溝である。他の遺構との重複関係は見られない。本溝の北側に約1.1m離れてＳＤ－13が，南側に約1.3m離れてＳＤ－15が平行して走っている。溝は長さ約5.0m　幅50～70cm，深さ10～15cmである。

出土遺物

埋土中より須恵器，土師器の小片が出土しているが，いずれも図示することはできない。

⒂　第15号溝出土遺物

第15号溝（SD－15）（Fig.110）

Ｖ－25，26グリットにわたって検出した溝である。他の遺構との重複関係はみられないが，段丘の段落ちによって溝の東側が切断されている。本溝の北側には1.3m離れてＳＤ－14が平行して走っている。溝は長さ5.1＋αm，幅40m～60cm，深さ10～15cmである。

出土遺物

埋土中より須恵器，土師器の小片が出土しているが，いずれも図示することができない。

⒃　第16号溝と出土遺物

第16号溝（SD－20）（Fig.111）

M－27,N－26,27グリットにわたって検出した溝である。ほぼ南北に走行する溝で，ＳＢ－03と重複関係にあるが，直接の切り合い関係にないので，その先後関係については明らかにしがたい。また，３ケ所で柱穴に切られている。溝は長さ4.0m，幅20～30cm，深さ約10cmで断面Ｕ字形を

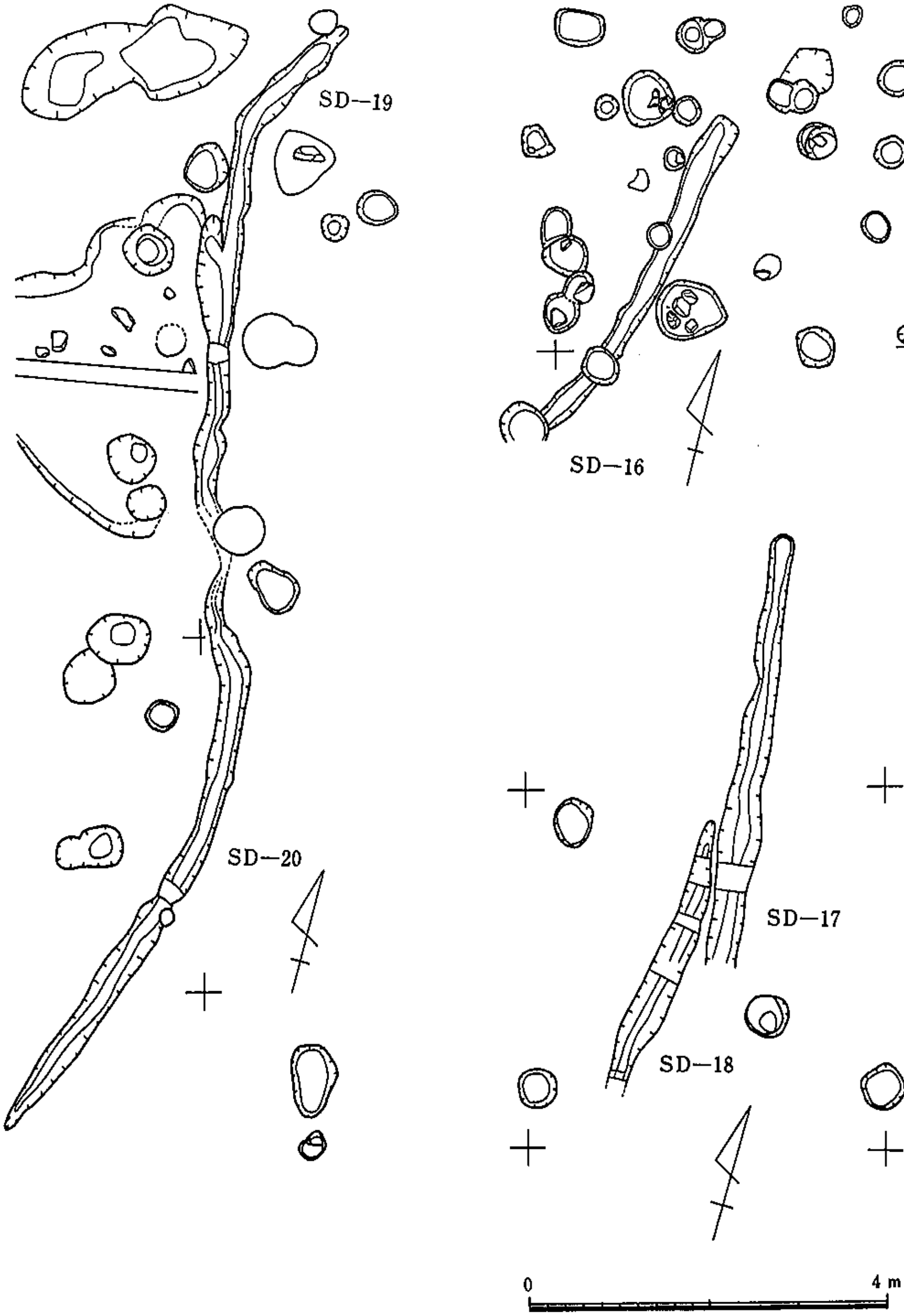


Fig. 111　第16～20号溝（SD—16～20）実測図

なしている。埋土は黒灰色粘質土層である。

出土遺物

埋土中より須恵器，土師器が若干出土している。いずれも小破片で図示できない。

⒄　第17号溝と出土遺物

第17号溝（SD－17）（Fig.111）

Ｋ－23，Ｌ－23グリットにかけて検出した溝である。ほぼ南北に走行する。他の遺構との重複関係はみられないが，溝南側でＳＤ－18と近接して存在する。溝は長さ約4.8m，溝幅20～50cm，深さ10～20cmで，断面Ｕ字形をなす。埋土は黒灰色粘質土である。

出土遺物

埋土中から須恵器，土師器等が若干出土しているが，いずれも小破片のため図示することができない。

⒅　第18号溝と出土遺物

第18号溝（SD－18）（Fig.111）

Ｌ－23グリットに検出した溝である。ＳＤ－17同様に南北に走り，北側ではＳＤ－17と近接しているが，他の遺構との重複関係はみられない。溝は長さ約3.0m，幅20～40cm，深さ約10cmで断面Ｕ字形となす。埋土は黒灰色粘質土層である。

出土遺物

埋土中より須恵器，土師器が若干出土しているが，いずれも小破片のため図示することはできない。

⒆　第19号溝と出土遺物

第19号溝（SD－19）（Fig.111）

Ｏ－24グリットに検出した溝である。溝は若干弧状をなしているが，ほぼ南北に走っている。ＳＢ－20・ＳＤ－20と重複関係にある。共に直接の切り合い関係がある。ＳＢ－20との関係では，ＳＢ－20の南西側コーナーの柱穴が，ＳＤ－19を切っており，ＳＤ－19がＳＢ－20に先行することが判明した。またＳＤ－20とは直接の切り合いがあるにもかかわらず，平面的な観察においては確認できなかった。ただし，遺構配置の状態からすれば，ＳＤ－20がＳＤ－19を切っているとみられる。溝は長さ約3.0m，幅20～30cm，深さ10～15cmで断面Ｕ字形となしてい

埋土は黒灰色粘質土層である。

出土遺物

埋土中より須恵器，土師器が若干出土しているが，いずれも小破片のため図示することはできない。

⑳ 第20号溝と出土遺物

第20号溝（ＳＤ－20）（Fig.111）

Ｎ－24，Ｏ－23，24，Ｐ－23，24，Ｑ－23グリットにかけて検出した溝である。ＳＢ－01，ＳＫ－13，ＳＤ－19と重複関係にあり，いずれの遺構とも直接の切り合い関係がある。ＳＤ－19とは前述のとおりである。ＳＫ－13は本溝に切られており，本溝より先行する遺構である。ＳＢ－01ははっきりとはしないが，南西コーナーの柱穴が本溝を切っていて，本溝より後出する建物である。溝は若干蛇行しているがほぼ南北に走っている。長さ約10.4m，溝幅20～30cm，深さ10～20cmで断面Ｕ字形をしている。埋土は黒灰色粘質土である。溝の上部包含層より晩唐三彩が出土している。

出土遺物

埋土中より須恵器，土師器の破片若干が出土しているが，いずれも小片であるために図示することができない。

なお，ＳＤ－16～20の性格としては，走行がいずれも南北で等高線に直交していること，規模も小さく，蛇行している点，またＳＤ－20が，ＳＢ－02の雨落ち点にあたることなど考え，雨水等によって自然に出来た水路ではなかったかと考えられる。

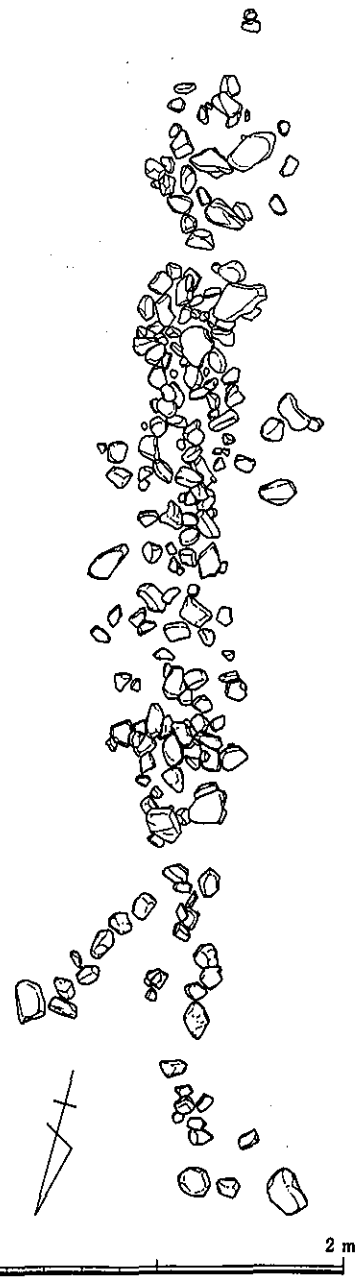


Fig. 112 第１号列石状集石実測図

8．列石状集石

(1) 第１号列石状集石遺構（Fig.112）

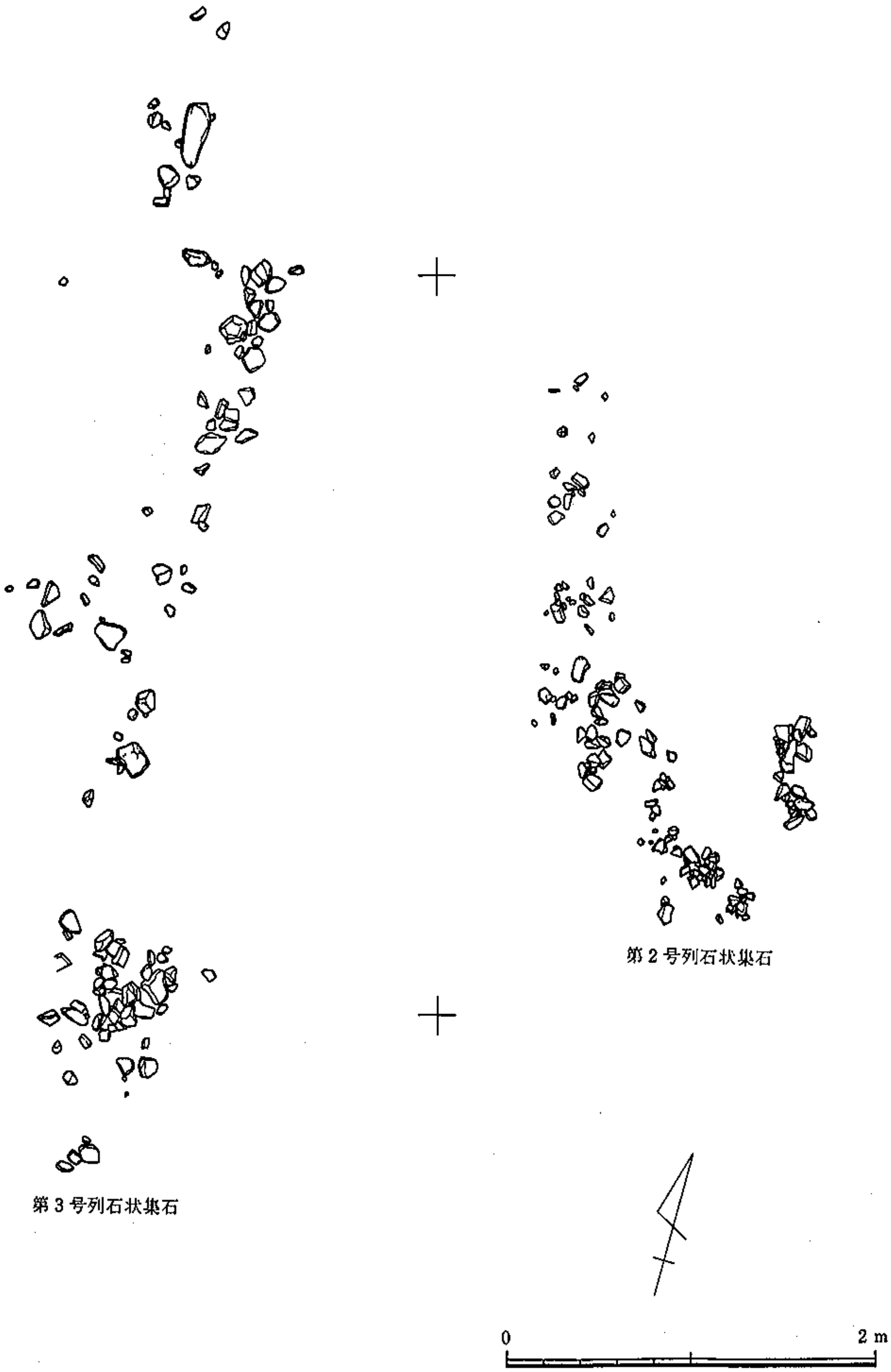


Fig. 113　第2・3号列石状集石実測図

調査区の東半部，第２群掘立柱建物群の南側に位置する。Ｑ－26，Ｒ26グリットにわたって検出した集石遺構である。集石は幅50～100cmで，長さ6.3mにわたっている。石は径10cm～20cmの比較的小さな川原石で約170個が集石されている。石材の中には二次的加熱によって赤変しているものも多い。集石の状態は敷きつめられたものではなく，雑然と積みあげたものである。ただし，集石の方向はほぼ南北を向いていて，ＳＢ－01に直交する形をとっている点に注意する必要があろう。列石状集石の東側にはＳＫ－05，14が存在し，この列石状の集石によって限られている様にもみえる。また，この列石の南端部から，西に約4.0m離れて第１号土器埋納遺構（地鎮）が存在する。このようなことを考えれば，この雑然とした列石状の集石も一つの遺構としての機能を果していたと考えられる。例えば柵列，土塁等が存在し，それにそって周辺の石材が集石された可能性もある。

(2) 第２号列石状集石遺構 (Fig.113)

調査区中央部，第２群掘立柱建物と第３群掘立柱建物にはさまれた空間地帯に存在する。二列の集石遺構があり，東側を第２号，西側を第３号とした。第２号，第３号はほぼ平行して南北の方向をとっている。両者をあわせて一つの機能を有していたものと思われる。第２号列石状集石遺構はＬ－19，Ｍ－19グリットにわたって検出した。幅1.0m，長さ約6.2mにわたって集石されたものである。集石の状態は第１号列石状集石遺構よりも良くない。集石の石材は径10～20cmの川原石が主で一部瓦片，鉄滓等が混じる。第３号列石状集石遺構とは約3.5m離れて存在する。

(3) 第３号列石状集石遺構

第３号列石状集石遺構はＫ－18，Ｌ－18，Ｍ－18，Ｎ－18グリットにわたって検出した。集石の範囲は幅1.0～1.5m，長さ約13mにわたっている。集石の状態は部分的には集中しているが，その間はきわめて希薄である。ほぼ南北の方向に主軸をとり，第２号列石状集石遺構と平行している。石材は第１号，第２号列石状集石と同様，径10～20cmの川原石であるが，瓦片，鉄滓等も含まれ，凹石，砥石等の使用済みの生活用道具も含まれている。また石材の中には二次的な加熱によって赤変している石材も多く含まれているのは第１号，第２号列石状集石遺構と同様である。これら加熱された石材は，遺跡内に分布する製鉄炉に使用されていた可能性が強い。第２号，第３号列石状遺構の用途も第１号列石状集石遺構同様に柵列や土塁にそって集められたものとすれば大きな意味をもってくる。すなわち，この列石状遺構の存在する所は第２群掘立柱建物群と第３群掘立柱建物群との中間点であり，他に遺構が存在しない点を考慮す

ればそれぞれが掘立柱建物群を限り，その間の空間部は道路としての使用が考えられ，通路部分の南側の延長部に２間×２間の倉庫と思われる建物が存在する。

9．土器埋納遺構

調査区内に土器を意識的に埋めたと思われる遺構が８ケ所で検出された。２基は掘立柱建物群との関係が考えられ，椀に蓋をした土器埋納であり，他は遺跡の東端部と西北端部に数基づつ存在した。これらはいずれも甕形土器を一個のみ埋納するものであった。小児用の甕棺とも考えたが確証を得ることはできなかった。以下，各遺構について説明する。

(1)　第１号土器埋納遺構と出土土器

第１号土器埋納遺構（Fig.114）

調査区東半部第２群掘立柱建物群の中央部南側，Ｓ－25グリッドに検出した。長径35cm，短径32cm，深さ13cmの楕円形プランの土壙に，土師器の椀に蓋をした状態で土器が埋納されていた。検出時は蓋は割れて一部は椀の中に落ち込んでいた。土器の内部からは他に遺物は検出されていない。地鎮のための埋納か。なお，この遺構は図面終了後，心ない人によって破壊され，椀底部が盗まれた。

出土土器（Fig.114）

土器は椀と蓋があり，いずれも土師器である。椀は底部を失うが，出土状況の実測図からすると断面逆台形の高台を底部内側に貼り付けている。体部は外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。体部下半は丁寧なヘラ削り調整後，ヘラ磨き調整を加えている。体部上半部は横ナデ調整後，ヘラ磨き調整を加えている。内面は丁寧な横方向のヘラ磨きである。口径20.7cm，現存高7.2cm。胎土は精良で，焼成良好。色調は黄赤色をなす。蓋はつまみを欠失するがほぼ完形である。口縁部はほとんど屈曲せず内側に沈線一条をめぐらし，端部は丸くおさめる。体部はやや丸味をもってたちあがるが，全体に扁平である。内外面共に横方向の丁寧なヘラ磨き調整。口径23.4cm，器高2.7cm。胎土は精良で，焼成良好，色調は黄赤色をなす。

(2)　第２号土器埋納遺構と出土土器

第２号土器埋納遺構（Fig.114）

調査区西半部，第３群掘立柱建物の西側に位置する。Ｌ－11グリッドに検出した。ＳＢ－25と重複関係にあり，埋納場所はＳＢ－25の北側柱すじにあたる。直接の切り合い関係がないの

9．土器埋納遺構

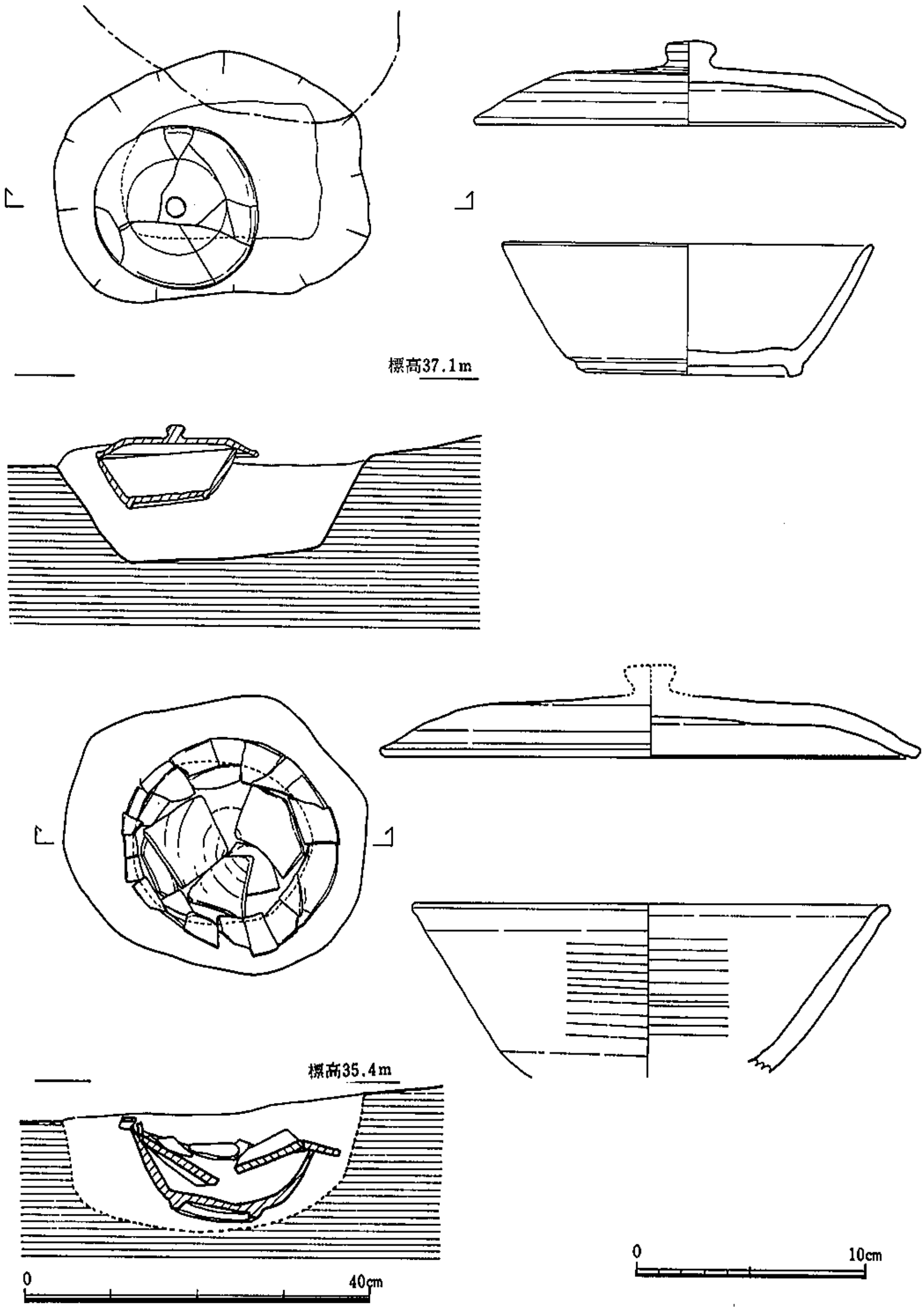


Fig. 114　第1・2号土器埋納遺構と出土土器実測図

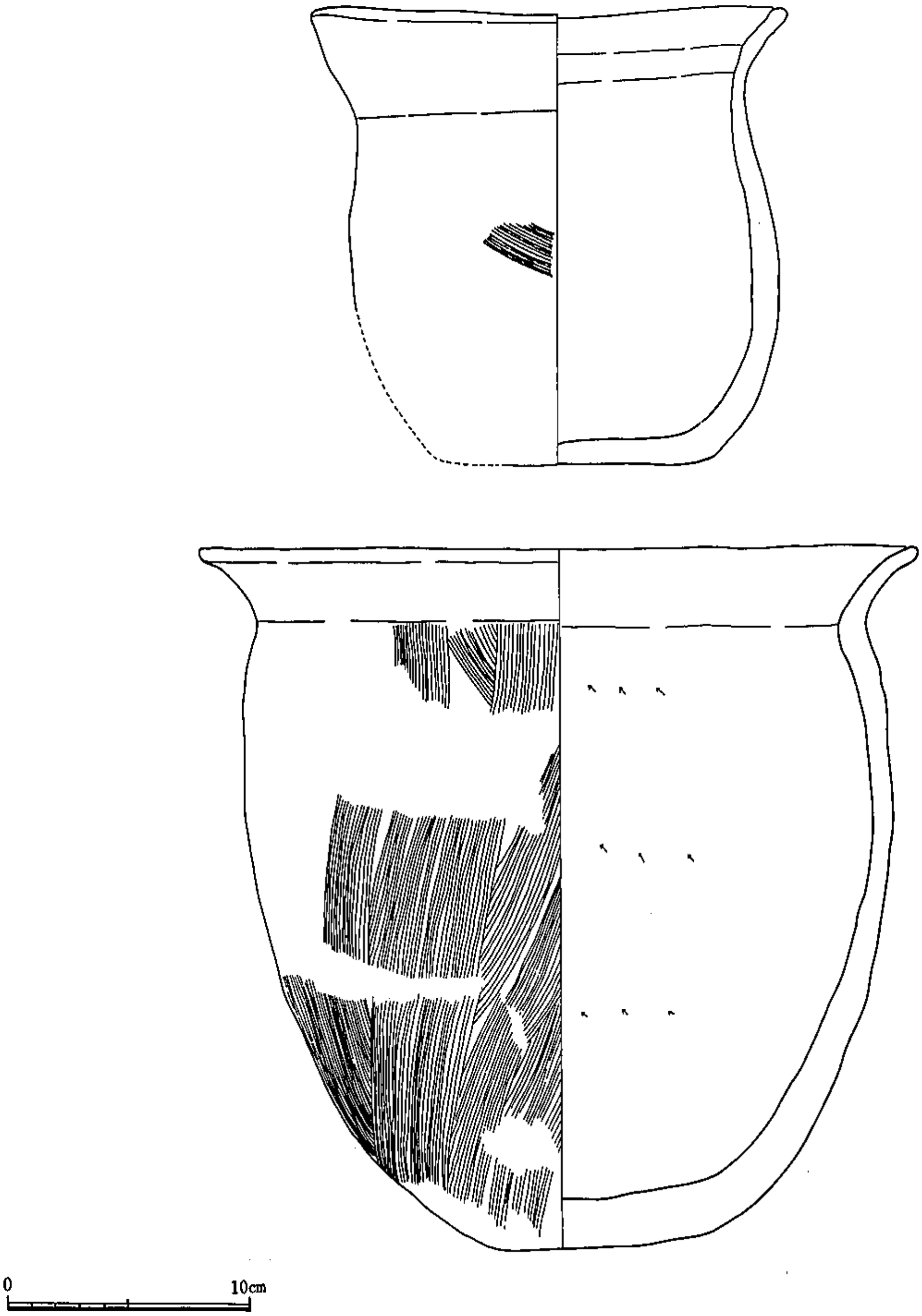


Fig. 115　第 3・4 号土器埋納遺構出土土器実測図

で先後関係は明らかでないが，検出場所からみたら同時期の可能性もある。遺構は一部他の柱穴に切られている。土壙は長径36cm，短径28cm，深さ35cmの楕円形プンをなす。土器はこの土壙の底より約15cm浮いて西側にかたよって埋納されている。土器は椀に蓋をしたものである。検出時は土器内は土はつまっていなかったが，何も遺存していなかった。第1号同様，地鎮のための埋納と思われる。

出土土器（Fig.114）

土器は椀と蓋がある。椀は須恵器，蓋は土師器である。椀は完形品である。断面方形の高台を底部端近くに貼り付ける。体部は外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部は丸くおさめている。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。胎土はわずかに砂粒を含むが精良で，焼成良好。色調は灰色をなす。蓋は数片に割れているが完形である。口縁部はわずかに屈曲するが短かく，端部は丸くおさめている。口縁部内側に沈線をめぐらす。体部はやや丸味をもってたちあがるが，天井部は平坦である。天井中央に擬宝珠形のつまみをつける。外面は天井部から体部にかけて丁寧なヘラ削り調整。口縁部は横方向の丁寧なヘラ磨き調整。内面も横方向の丁寧なヘラ磨き調整である。口径18.6cm，器高3.6cm。胎土には砂粒をわずかに含むが精良。焼成は良好で色調は黄赤色をなす。

(3) 第3号土器埋納遺構と出土土器

第3号土器埋納遺構

調査区東端部ＳＢ－21の東側，Ｒ－35，36グリットにかけて検出した。土壙は土質の関係で確認できなかったが，出土状況からは土壙に埋納されていたことがうかがえる。第4号土器埋納遺構は東に約20cm離れて存在する。

出土土器（Fig.115）

鉢形の土師器1個体がある。ほぼ完形である。底部は丸底に近い平底で，体部は円筒状をなし，口縁部は外反する。外面は粗いヘラ削り後，ヘラナデを施し，部分的に刷毛目調整も加えている。内面は体部が斜方向の粗いヘラ削り調整。口縁部に部分的にナデ調整が加えられているが，全体的に凹凸があり粗雑な土器である。外面にススが付着する。口径19.8cm，器高18.6cmである。胎土には砂粒を含むが精良，焼成は良好で，色調は赤褐色をなす。口縁部から体部にかけて黒斑がある。

(4) 第4号土器埋納遺構と出土土器

第４号土器埋納遺構

調査区東端部ＳＢ－21の東側，Ｒ－36グリットに検出した。土器は土圧によって押しつぶされた状態で出土した。土壙の掘り込み線は土層の関係で確認できなかったが，出土状況からは土壙内に埋納されていたことがうかがえる。第３号土器埋納遺構は西に約20cm離れて存在し，また，第５号土器埋納遺構は北に約６ｍ離れて存在する。

出土土器（Fig.115）

大型の甕形土器１個体がある。土師器でほぼ完形である。底部は平底に近い丸底で，胴部はあまり張りがなく円筒形に近い。口頸部は頸部から外傾しながらたちあがり口縁部で大きく外反する。口縁端部は丸くおさめている。底部には刷毛目調整が施されるが，磨滅のため平滑になる。胴部外面は縦方向の刷毛目調整である。口縁部は刷毛目調整の上に横ナデ調整を加えている。内面は底部がヘラ削り後，ヘラナデによって調整され，体部は斜方のやや粗いヘラ削り調整が施される。口縁部は横ナデ調整である。外面の一側の一面とその対称する部分の一部に黒班がある。外面体部下半にはススの付着が著しい。胎土には砂粒を多量に含む。焼成は良好で色調は黄褐色をなす。口径29.7cm，器高28.8cmをはかる。

(5)　第５号土器埋納遺構と出土土器

第５号土器埋納遺構（Fig.116）

調査区の東端部，ＳＢ－21の東側のＰ－36グリットに検出した。土器は出土状況をみてもわかるように土圧によって上部が押しつぶされた状態を示し，当初は中に空間部があったことを示している。土壙の掘り込み部を確認するようにつとめたが，土層の関係からか検出できなかった。しかし，出土状況等からみれば当然土壙が存在したと思われる。第４号土器埋納遺構は南に約６ｍ離れて存在する。

第３～５号土器埋納遺構は比較的近接して存在し，また掘立柱建物群からはずれているが近接している点注意が必要であろう。

出土土器（Fig.116）

大型の甕形土器１個体がある。土師器でほぼ完形である。底部は平底に近い丸底である。体部はあまり張らなくて長胴である。頸部はややしぼまり口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。胴の最大径は胴中位にある。底部は磨滅のため平滑になっている。体部は縦方向の丁寧な刷毛目調整である。口縁部は刷毛目調整を横ナデ調整で消している。内面は底部が指圧調整で，体部は縦方向の丁寧なヘラ削り調整。口縁部は横方向の刷毛目調整後，横ナデ調整を加える。外面にはススが付着するが，時に体部下半に著しく，底部および底部付近は二次加熱のため赤変している。内底部には部分的にコゲつきがみられる。胎土には砂粒を含むが良質，焼

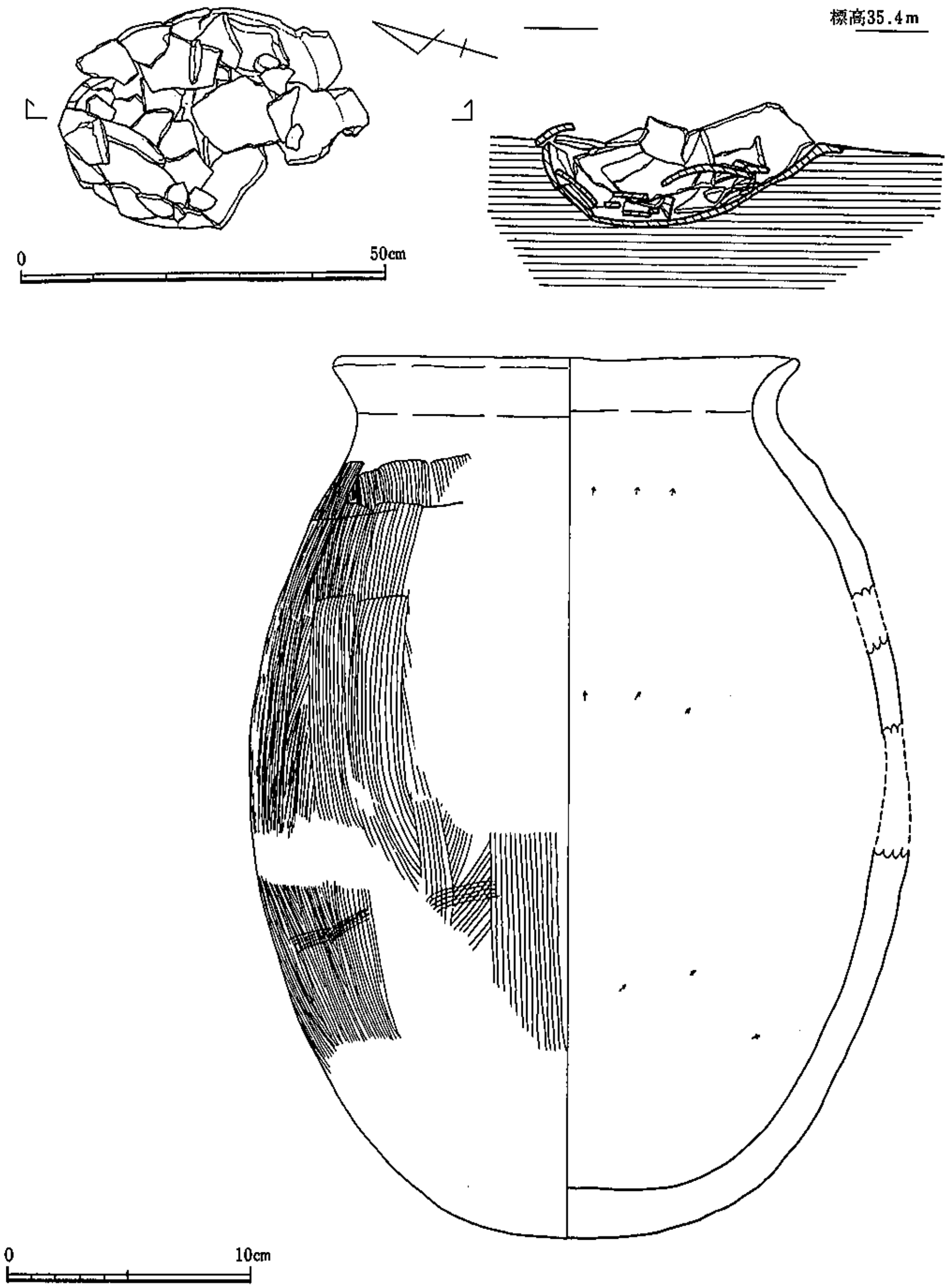


Fig. 116　第5号土器埋納遺構と出土土器実測図

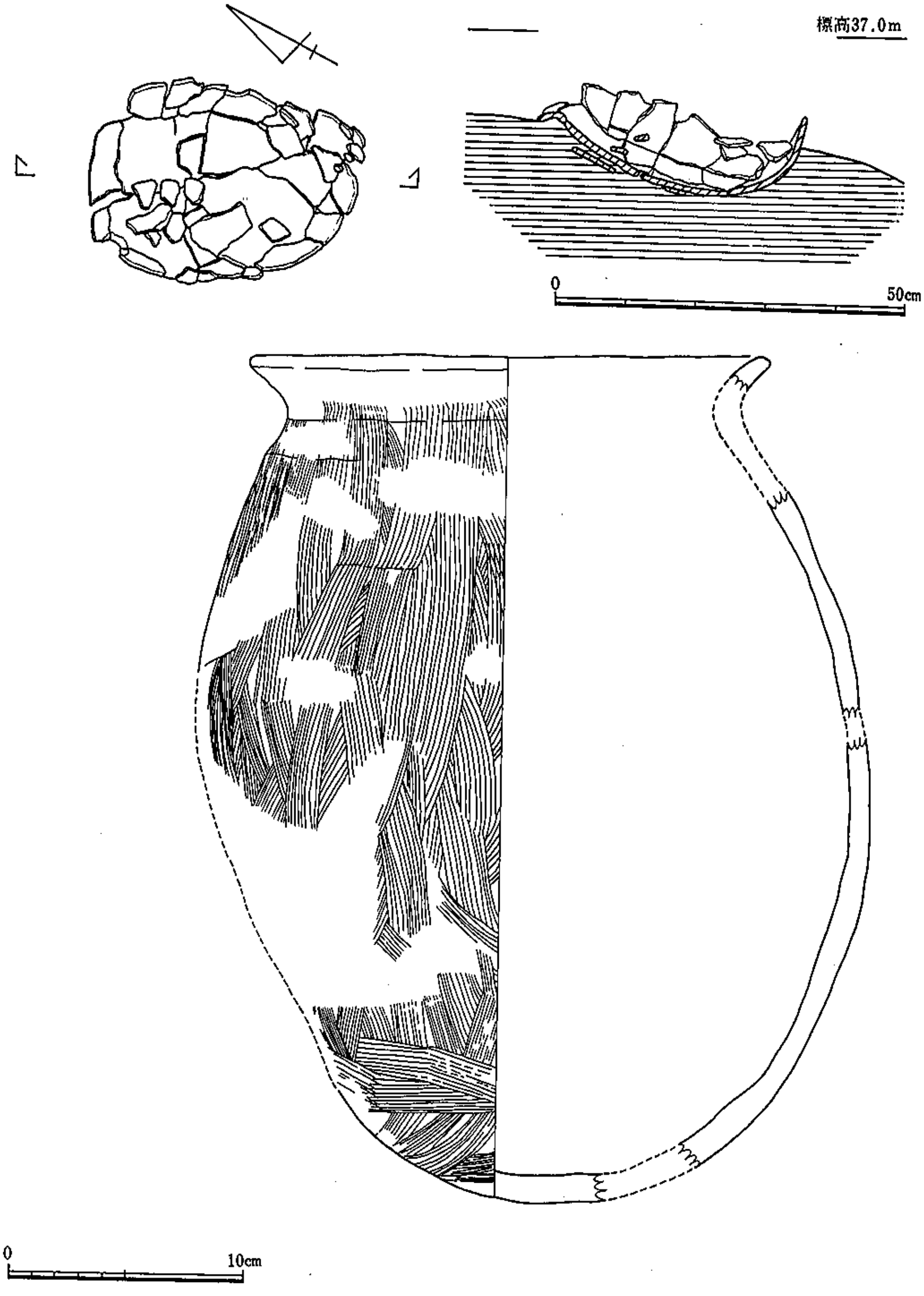


Fig. 117　第６号土器埋納遺構と出土土器実測図

成良好で赤褐色をなす。口径19.0cm，器高35.6cm，胴部最大径26.0cmをはかる。

(6) 第6号土器埋納遺構と出土土器

第6号土器埋納遺構（Fig.117）

調査区の西半部，ＳＢ－22，23の北側，Ｉ－15，Ｊ－15グリットに検出した。土器は上半部が失われているが，一部は内側に落ち込み，土圧によって押しつぶされていることがわかる。土壙の検出につとめたが，土層等の関係からか確認するにはいたらなかった。土壙の規模等は不明であるが，土器に密接してぎりぎりに掘り込まれている可能性が強い。約90cm離れた南西側に第７号土器埋納遺構が存在する。土器は横位の状態で出土した。

出土土器（Fig.117）

大型の甕形土器１個体がある。土師器で，ほぼ完形品である。底部は平底に近い丸底である。体部はやや張るが，全体に長胴であるために目立たない。頸部はしぼまり口縁部は強く外反する。口縁端部は丸くおさめる。胴の最大径は胴中位にある。底部は刷毛目調整で，磨滅によってわずかに磨れている。体部は縦方向あるいは斜位方向の刷毛目調整である。口縁部は刷毛目調整の上から横ナデ調整を加え，刷毛目痕を消している。内面は底部から体部にかけてヘラ削り調整。上半部はナデ消される。頸部には稜線は形成されていない。頸部下に横方向の刷毛目が残る。口縁部は横方向の刷毛目調整後，横ナデ調整を加え，刷毛目を消している。胴中位には左右対称に黒班がある。外面底部近くにススがわずかに付着する。胎土には砂粒を含むが精良である。焼成良好で，色調は赤黄褐色をなす。口径22.2cm，器高36.0cm，胴部最大径28.8cmをはかる。

(7) 第7号土器埋納遺構と出土遺物

第7号土器埋納遺構（Fig.118）

調査区の西半部，ＳＢ－22，23の北側，Ｊ－15グリットに検出した遺構である。近接して存在する第６号土器埋納遺構は約90cm北東に位置する。埋納土器はほぼまっすぐに立っていて，上半部が割れて中におちこんだ状態を示している。掘り込みは土層の関係で確認できなかった。

出土土器（Fig.118）

大型の甕形土器１個体がある。土師器でほぼ完形である。底部は平底に近い丸底で比較的安定感がある。体部は外傾しながらたちあがるが，胴部最大径が下位にあり，円筒状の長胴を呈する。肩部は序々に内傾し，頸部でしぼまり，口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部は指圧によって円盤状に成形し，多方向からの刷毛目調整を加えているが，使用により若

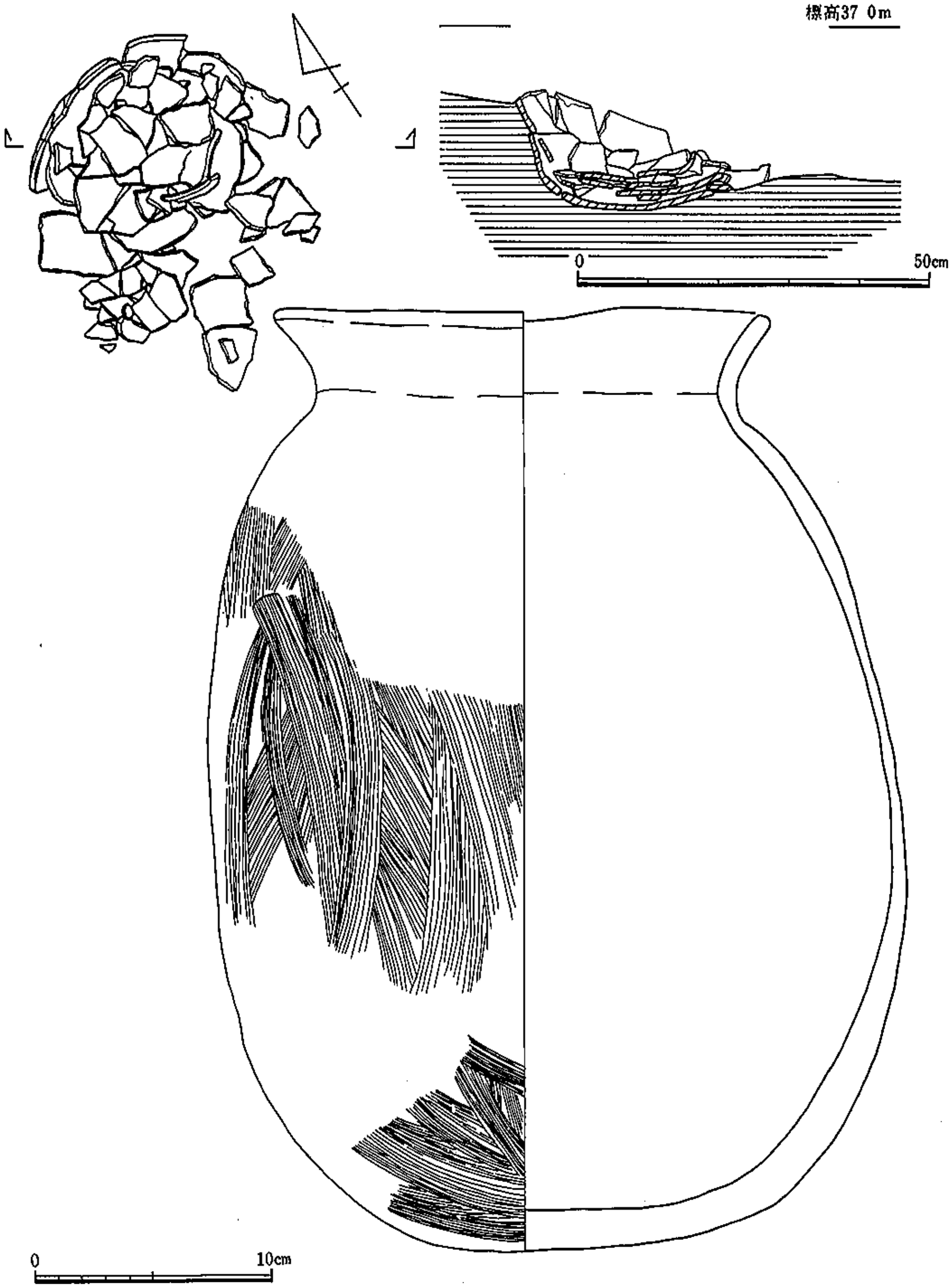


Fig. 118　第7号土器埋納遺構と出土土器実測図

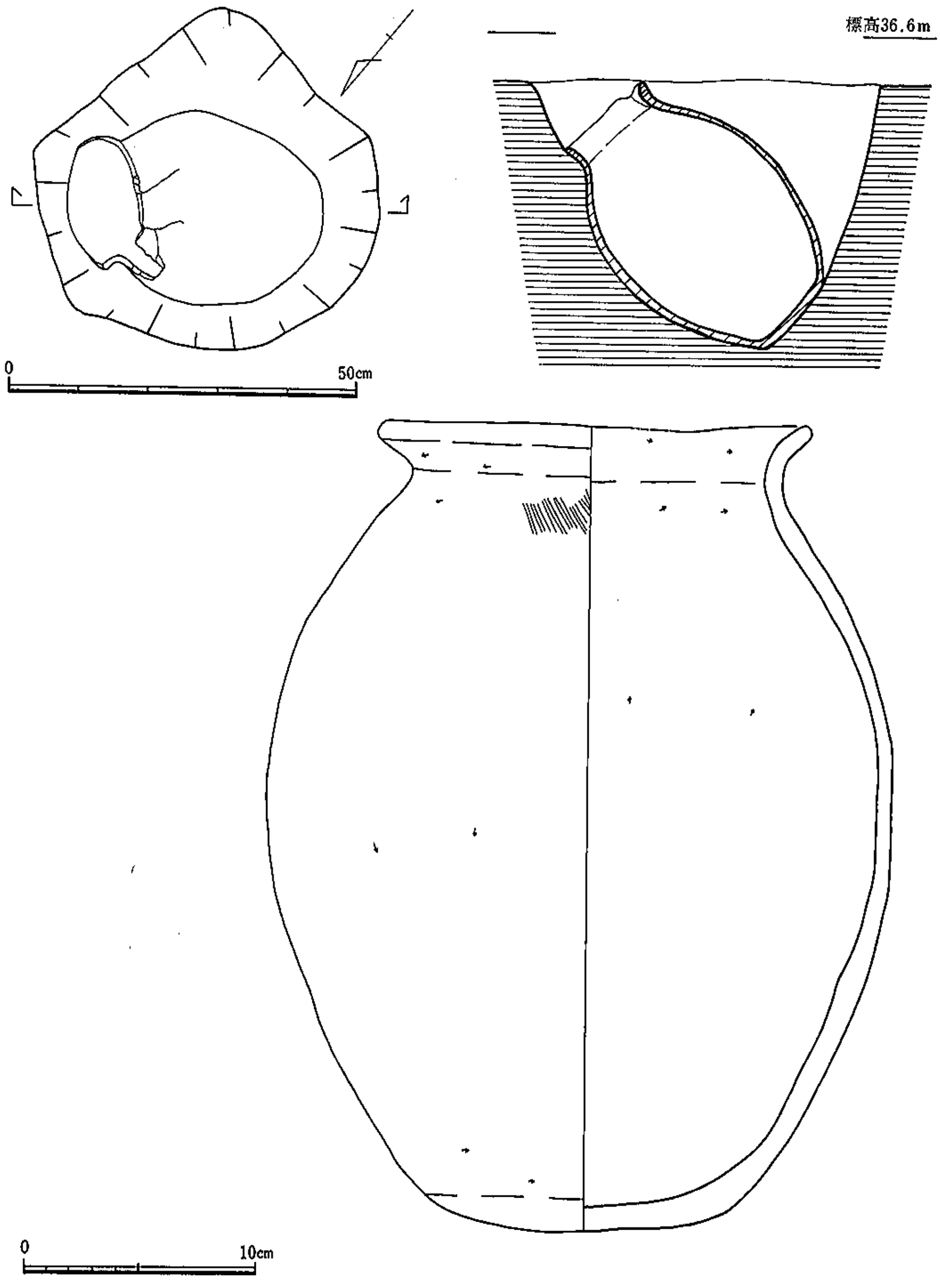


Fig. 119　第8号土器埋納遺構と出土土器実測図

干磨滅し，平滑になっている。体部は下半部が横，斜位の刷毛目調整で上半部は縦方向の刷毛目調整である。口縁部は刷毛目調整の上から横ナデ調整を加え，刷毛目痕を消している。内面は底部が指圧調整のままで体部はヘラ削り調整である。頸部には稜線は形成されず，丸味をもっている。口縁部は横ナデ調整である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。焼成は良好で黄褐色をなす。体部には相対して黒斑がある。口径21.0cm，器高39.5cm，胴部最大径29.4cmをはかる。

(8)　第８号土器埋納遺構と出土土器

第８号土器埋納遺構（Fig.119）

調査区の西半部　第Ⅲ群掘立柱建物群の北側にあるＳＫ－04のすぐ北側に位置する。Ｋ－11グリットに検出した土器埋納遺構である。土壙は径50cm×49cm，深さ39cmの不整円形プランをなし，土器は斜めに埋置されていた。土器はほぼ完形で，内部は空洞のままで遺存するものはない。第６，７号土器埋納遺構とは約15m離れているが，３基で一つのまとまりをみせる。調査区東端部の第３～５号土器埋納遺構と共通した点が多い。第３～８号土器埋納遺構は，第８号にみられる土壙の存在や他の遺構にも土壙の存在が考えられること，また，埋ってからある時間までは土器内部が空間を保っていたことなど考え合せれば，これらの土器埋納遺構は小児用の甕棺として使用されていた可能性が強い。今後，類例をもって検討したいと思う。

出土土器（Fig.119）

大型の甕形土器１個がある。土師器でほぼ完形である。底部は平底に近い丸底であるが比較的安定している。体部は外傾しながらたちあがるが，胴の張りは少ない。長胴である。頸部は肩部からゆるやかにしぼまる。口縁部は丸くおさめる。底部は使用による磨滅で平滑になる。体部は縦方向の丁寧なヘラナデ調整である。口縁部は内外面共横ナデ調整である。内面は底部が指圧調整で体部が縦方向の丁寧なヘラ削り調整である。頸部には稜線は形成されず丸味をもっている。体部外面の二ケ所に黒斑がある。胎土には砂粒を含むが良質，焼成は良好で色調は赤褐色をなす。口径18.8cm，器高34.5cm，胴部最大径26.8cmをはかる。

10．製鉄炉と製鉄関連遺物

(1)　遺構の分布

本遺跡を特徴づける一つに製鉄関連遺構の存在がある。先に報告した古墳群の調査において，墓道，羨道に供献された鉄塊，鉄滓から，本古墳群の被葬者が，製鉄に強くかかわっているこ

とを指摘しておいたが，はからずもM遺跡において製鉄関連の遺構を多数検出して，古墳群との関連性をより補強することができた。

今回の調査で検出した遺構，遺物は，製鉄炉をはじめ，焼土面，溝（？），炉壁，鉄滓，ルツボ，砂鉄集積などがある。製鉄炉は二種類がみられる。一つは長方形をした炉で，炉壁の焼け方は著しくなく，溶解してガラス質を呈さないもので鍛冶炉と考えられるものである。他の一つは，小さな円形をなす底のみが残存する炉で，炉壁は焼け方が著しく，溶解してガラス質に変容している。中には底に坏状鉄滓が残存しているものもあり，製錬炉と考えられる。焼土面は，粘土を敷いており，面的に焼土が広がり製鉄作業にかかわる作業面と考えられる部分である。溝は先にも指摘したように数本の溝を一単位として，溝の両端に土壙をもつものと復原されるものである。直接製鉄と関連するか否かは今後の検討を必要とする。以上が，製鉄関連の遺構である。

次にこれら製鉄関連の遺構分布について概観してみよう。まず製鉄炉址は調査区の全面にわたって検出しているが，大きくは調査区の東半部と西半部の二ケ所に分布がわかれ，調査区中央部に空白地帯が存在する。この分布の状況は掘立柱建物群と一致している。東半部の炉址（第1群炉址）は第1，2群建物群と，西半部の炉址（第2群炉址）は第3群建物群と完全に重複していて，炉址と建物群の間に有機的関連性があることがうかがえる。二群に分かれる炉址の数はぼ同数であるが，炉址の種類，分布には若干の差異がある。東半部の炉址では，鍛冶炉と考えられる炉址はＳＤ－02の東側と第2群掘立柱建物群北西部に集中し，製錬炉と考えられるものは完全に第2群建物と重複している。東半部の炉址でも同様の傾向が指摘できる。鍛冶炉は第3群掘立柱建物の西側に集中し，製錬炉と考えられるのは東側に集中している。明らかに両群において鍛冶炉と製錬炉の分布が異なっている。遺跡全体でこの分布をみると製錬炉は遺跡の中央部に存在し，それを囲むように周辺に鍛冶炉が分布している。この分布の違いが何に起因しているかは今後の問題点であろう。焼土面は炉址の分布しない中央部の北側に集中してみられ，一部第2群建物群西側でもみられ，この部分では一部に砂鉄が集積された部分があった。この砂鉄の集積が自然にできたものか人工的なものであったかは確認できなかった。

以上のように製鉄関連遺構はその機能に応じて分布の違いが把握でき，掘立柱建物，土壙の分析と合せて考えればより具体的な状況が解明できそうである。

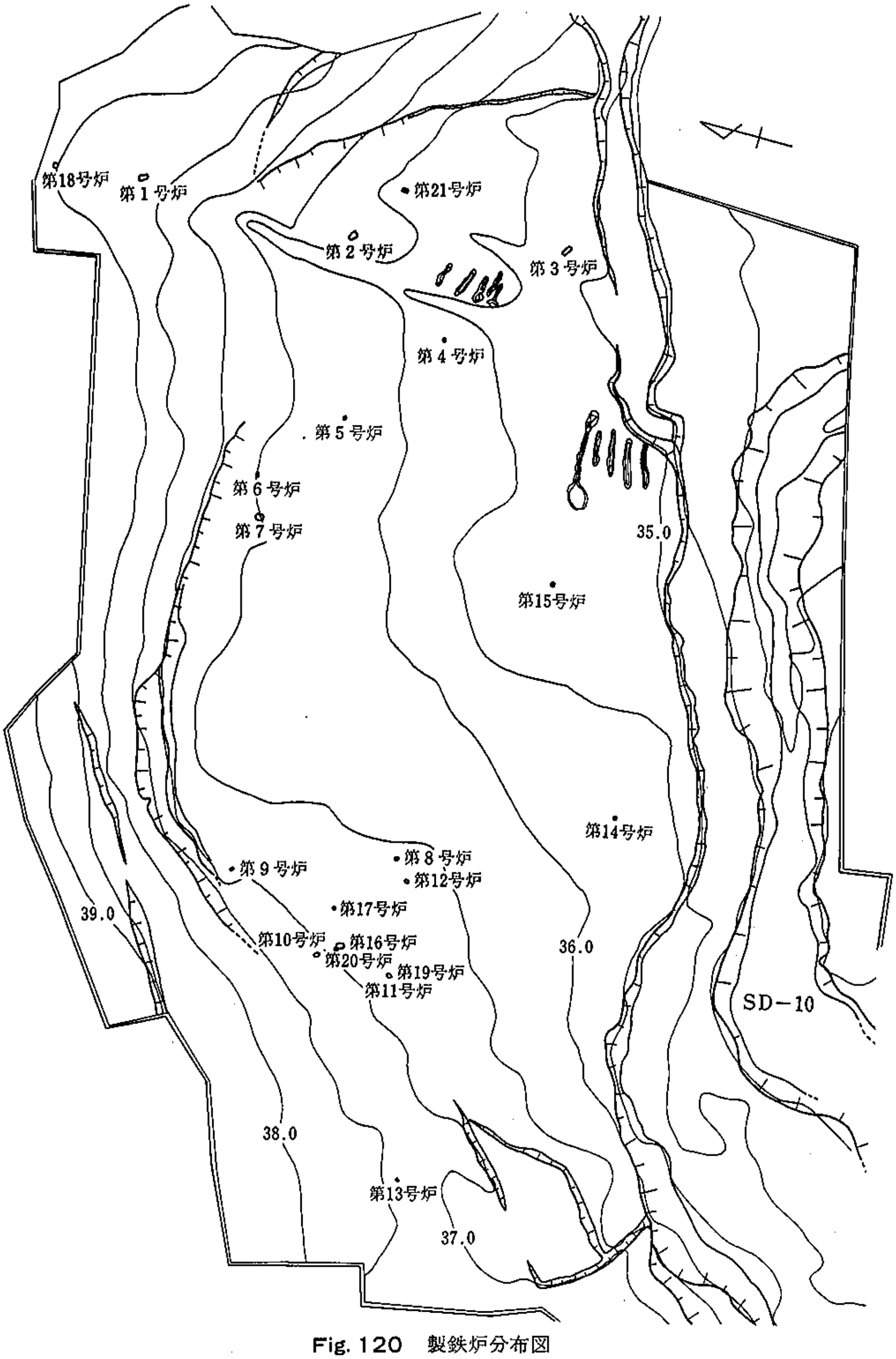


Fig. 120　製鉄炉分布図

(2) 第1号炉址（Fig.121）

G－33，34グリットにかけて検出した炉址である。第1群炉址に属し，形状等から鍛冶炉と考えられる。遺存状態はきわめて良好で外部施設も知ることができる。炉の本体は長軸80cm，短軸52cmの長方形プランをなす。深さ20cmで底面は平坦で断面形は箱形をなす。炉壁は粘土を貼り付けたもので厚さ2～5cm，炉壁は加熱のため変色し，内側から乳白色（一部溶解している)。橙白色，黒褐色，赤褐色の順に変色している。床面には灰が堆積し，あまり焼けていない。西壁のやや南に片寄って径5cmの円孔があいている。この孔は約30cm西側に離れて存在する径約25cmの隅円方形の穴と連接している。孔の中は焼けていないが，フイゴを着装した痕跡かと思われる。東壁上部にも南側コーナーに近く一孔あるが，孔の大きさは不明。炉のすぐ横からスラッグ1点が出土している。外部構造として炉をとりまく溝がある。溝は幅20～50cmで場所によって異なるが，炉の本体と付属施設を囲む東西約1.5m，南北約1.2mの略方形の台状部をつくり出し，北側は溝底がそのまま広がり，西側溝が排水の役割を果たしている。溝は深さ5～10cmである。炉に湿気がおよぶのを防ぐためのものであり，北側は作業場的要素が考えられる。溝のまわりにはまとまりはないが柱穴が認められ，簡単な小屋がけがおこなわれていた可能性もある。

(3) 第2号炉址（Fig.122）

調査区の東端部，ＳＤ－01とＳＤ－02の間，ＳＤ－02のすぐ東側に位置する。Ｍ－32グリットに検出したが，重複するＳＫ－12とは先後関係は明らかにすることはできなかったが，炉址も含めた一つの遺構である可能性は先に土壙の項で説明した。

製鉄炉は第1群炉址に属し，形態等から鍛冶炉と考えられる。長軸110cm，短軸84cmの隅丸長方形プランをなす。深さは18cm前後で床面は平坦である。床面には粘土が敷かれ，上部に灰が存在する。断面形は箱形をなすが，壁面が剥離して壁がやや斜めになっている。炉壁は粘土を貼り付けたものであるが，大部分は剥離しているが，壁は部分的に焼けて変色している。炉壁の存在する部分は厚さ約2cm前後である。炉址の北側に存在する土壙も一部火を受けて焼けているのでこの炉に関連した遺構と考えられ，幅約20cmの短かい溝で連接している。

(4) 第3号炉址（Fig.123）

Ｓ－31グリットに検出した炉址である。第1群炉址に属し，形態等から鍛冶炉と考えられる。遺存状況はあまり良好でない。ＳＤ－01の南端部のすぐ東側に位置している。

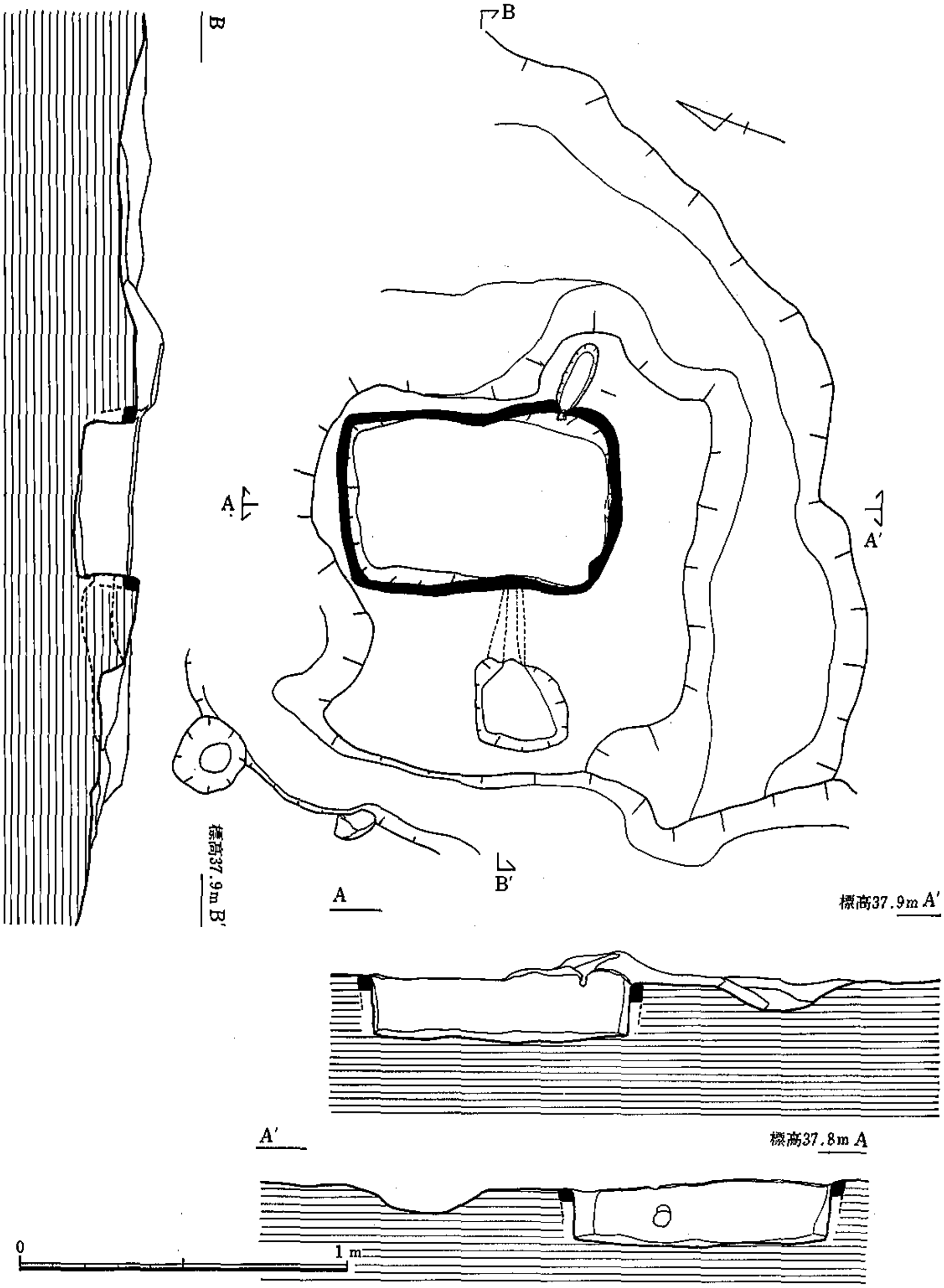


Fig. 121　第 1 号製鉄炉址実測図

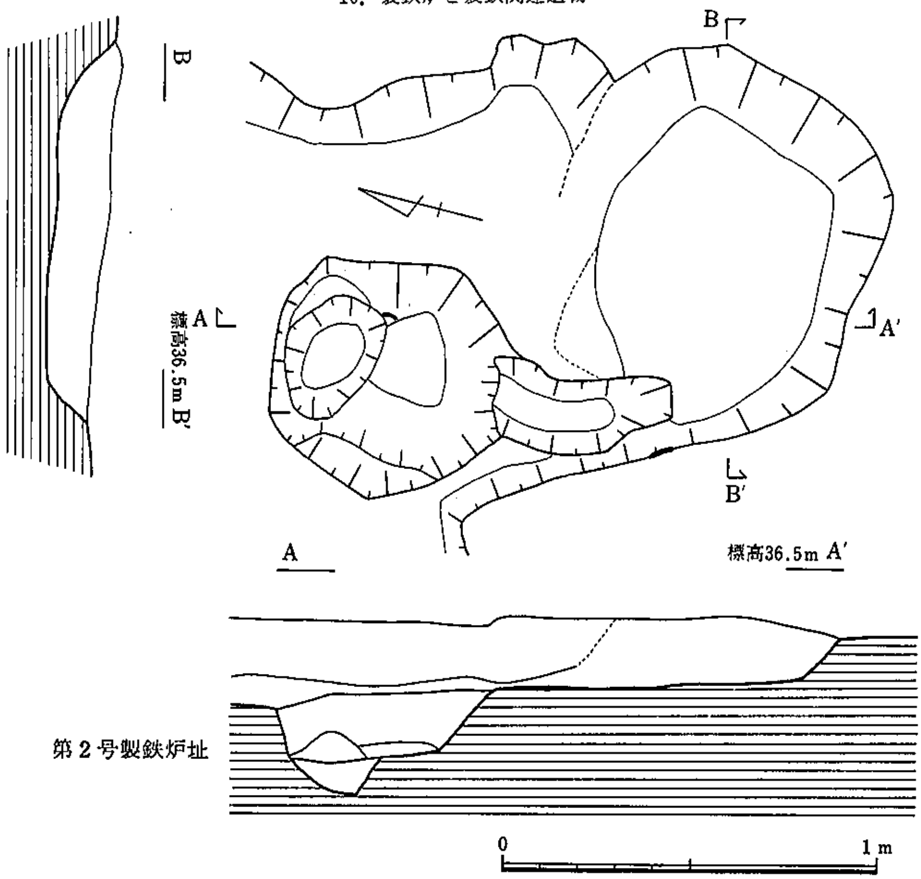


Fig. 122　第2号製鉄炉址実測図

炉の本体は炉壁が剝離している部分が多いが，炉を構築する時の土壙掘り方からその形状を知ることができる。炉は長軸90cm，短軸62cmの隅丸長方形プランをなす。深さは10～15cmで，床面は中心部に向かって深くなり皿状を呈している。炉の断面形は舟底状をなす。炉壁は粘土を貼り付けたもので厚さ5cm前後，炉の内側は加熱のための明橙色になり，その外側は暗褐色に変色している。炉址の埋土は下層より，床面に接して木炭層，その上に粘性のある黄褐色土層，さらに上層が暗黄褐色土層となっている。炉址より1個の角礫が出土している。

(5) 第4号炉址（Fig.123）

Ｐ－29グリットに検出した炉址である。第1群炉址に属し，形態等から製錬炉と考えられる。遺存状態は良好でない。ＳＢ－14，ＳＤ－08のすぐ南に位置している。

炉は底部のみを残して上部構造は失っている。炉は遺存部で長径約31cm，短径18cmの楕円形をなし，深さ7cmで断面形は坏状をなしている。炉壁はスサ入りの粘土を使用しており，厚さ

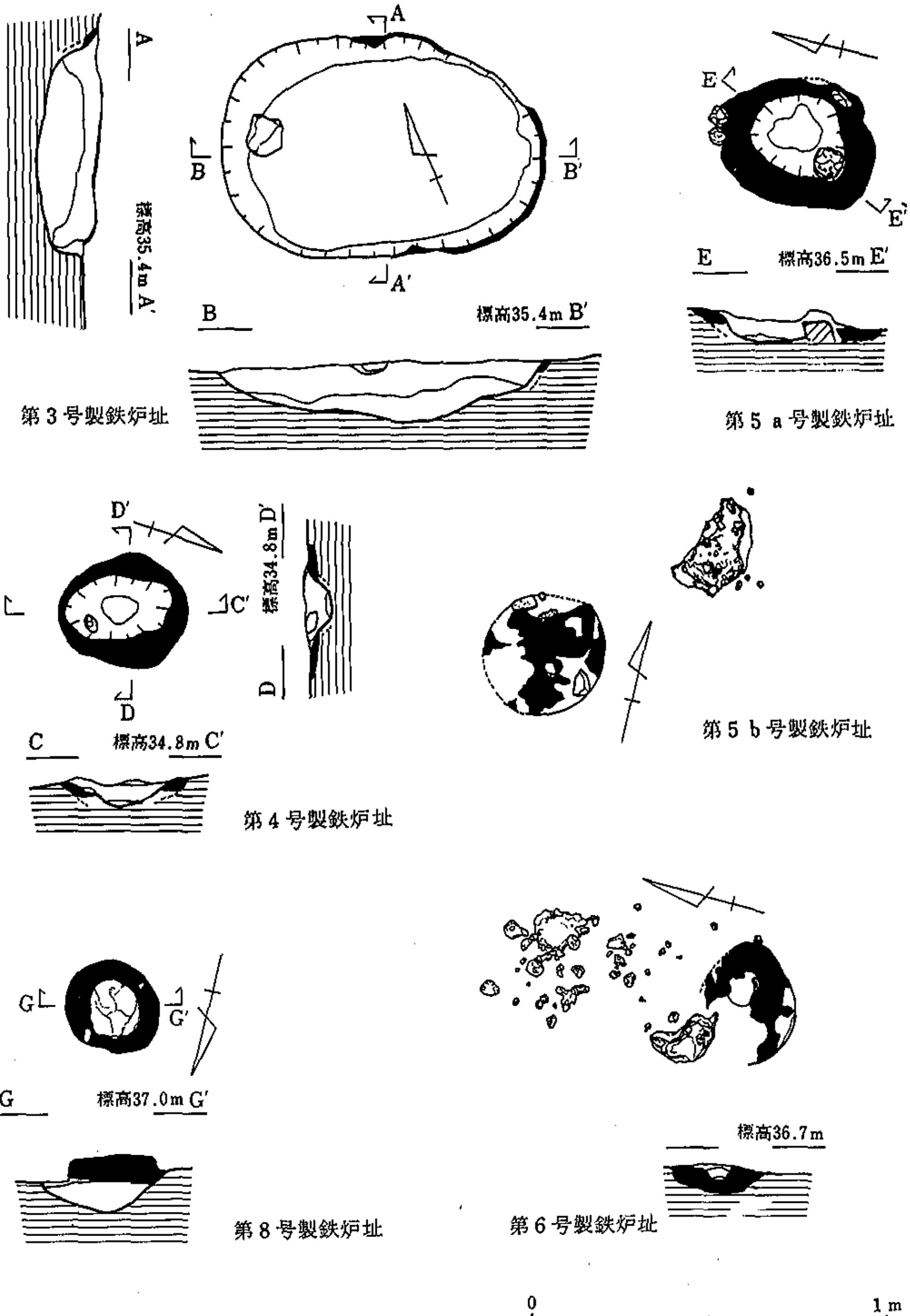


Fig. 123　第３～６・８号製鉄炉址実測図

4～10cmで，内側は溶解してガラス状になり黒色を呈し，外側は赤褐色に変色している。内部に鉄分の付着がみられる。

(6) 第5号炉址（Fig.123）

近接して2基ある。M－26，M－27グリットに検出した炉址を5a号炉址，M－27グリットに検出した炉址を5b号炉址とする。共に第1群炉址に属し，形態等から製錬炉と考えられる。SB－03と重複しているが，直接の切り合い関係がないので先後関係は不明。

5a号炉址

5b号炉址と約60cm離れて位置している。炉は遺存部で長径29cm，短径23cmの楕円形プランをなす。深さは約9.0cmで断面形は皿状をなす。内部に接して皿状鉄滓の一部と炉壁部に4個の鉄滓が存在する。炉壁は厚さ4～10cmで，炉の内部は溶解してガラス質になり，赤化する部分と黒色を呈する部分があり，外側は赤褐色に変色している。

5b号炉址

ほとんど破壊されていて，炉壁の極一部と炉壁外側の赤褐色の粘土部分が残っているにすぎない。径34cmの円形プランの範囲が想定できる。石材1点と鉄滓2点が存在する。また約20cm離れた北東部に皿状鉄滓1点が存在する。

(7) 第6号炉址（Fig.123）

J－25グリットに検出した炉址である。第1群炉址地に属し，形態等から製錬炉と考えられ。遺存状態は良好でない。SB－12の北側に位置し，第7号炉址が約4.5m離れた西側に位置している。

炉は底部の一部を残すのみである。炉は遺存部で径10cm，深さ4cmである。炉壁の粘土は厚さ8～15cmで部分的に残っている。炉壁内側は溶解してガラス状になり，黒色を呈する。外側は赤褐色をなす。炉内に鉄滓1点が存在した。また，炉のすぐ北側に，70cm×35cmの範囲で鉄滓の集積がみられる。本炉址に関連した鉄滓であろう。

(8) 第7号炉址（Fig.124）

J－23，24，K－23，24グリットに検出した炉址である。第1群炉址に属し，形態等から鍛冶炉と考えられる。遺存状態は比較的良好である。

炉は径62cmの不整円形プランをなす。深さ26cmで底面はほぼ平坦である。壁はゆるやかな傾

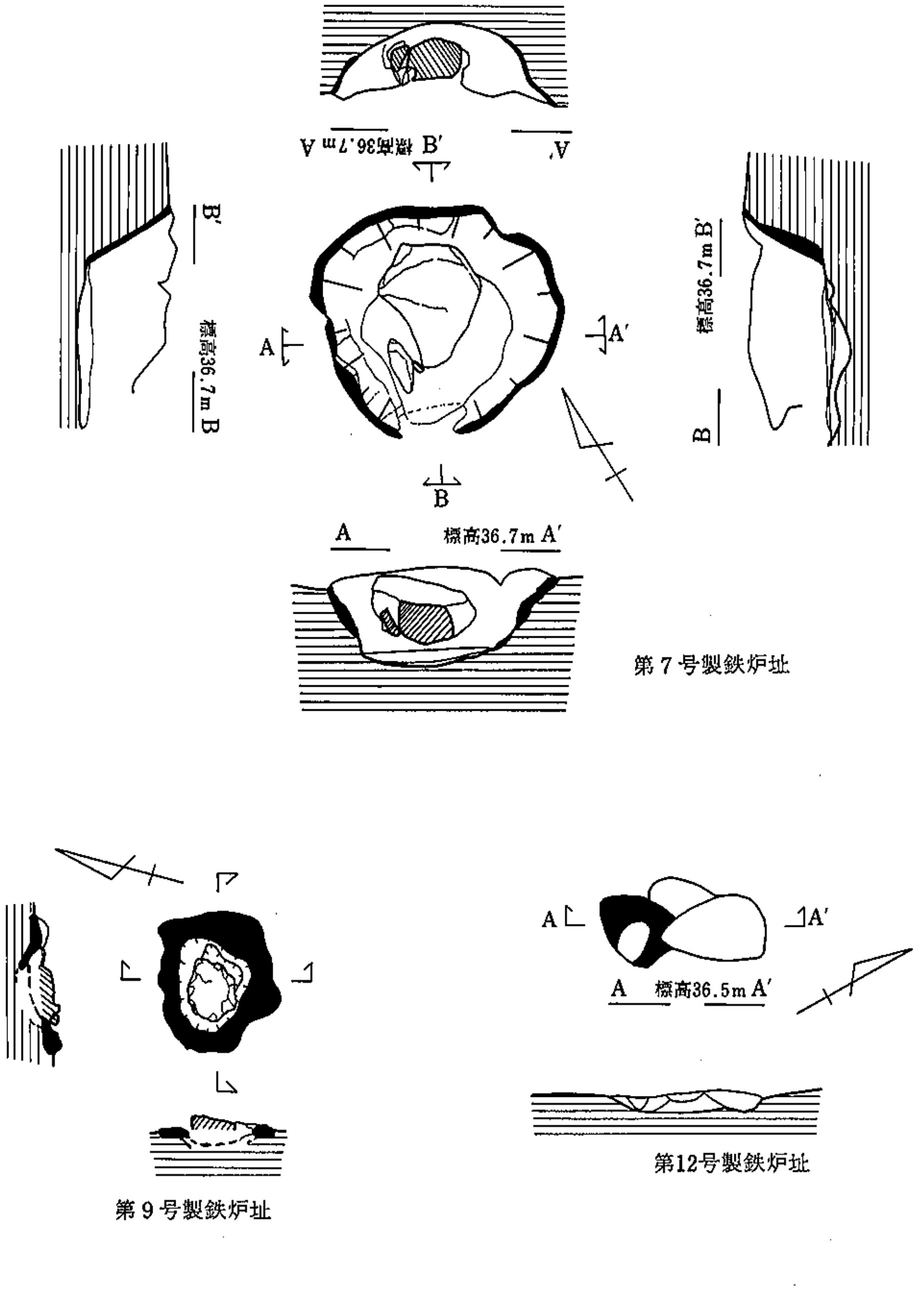


Fig. 124　第7・9・12号製鉄炉址実測図

斜をもってたちあがる。炉壁は粘土を貼り付けたもので厚さ2～3cm，炉壁は加熱のため変色し，内側は黒灰色をなし，外側は赤褐色をなす。床面には炭が堆積し下面は焼けていない。炉は南西部の一角に壁がなく灰がはみ出している。この部分にフイゴを着装したものであろうか。炉内には鉄滓1点と花崗岩石材2点が投げ込まれていた。炉の埋土は上より暗褐色土層，粘質の淡黄褐色土層（炭まじり），黒色粘質土層（炭多い）となっている。

(9) 第8号炉址（Fig.123）

O－14グリットに検出した炉址である。第2群炉址に属し，形態等から製錬炉と考えられる。遺存状態は悪い。SK－06のすぐ南側に位置している。

炉址は底面を残すのみで，長径17cm，短径15cmのほぼ円形プランをなす。炉壁はスサ入り粘土で厚さ約5cmである。炉内面は高熱のため溶解しガラス質になる。黒色を呈する。外側は赤褐色に変色している。

(10) 第9号炉址（Fig.124）

J－13グリットに検出した炉址である。第2群炉址に属し，形態等から製錬炉と思われる。第3号柵列の北側に位置している。

炉址は底部のみを残すものである。長径25cm，短径20cmの楕円形プランをなす。深さ5cm前後で皿状になると考えられるが，中に鉄滓がつまっている。炉壁は4～11cmで，スサ入りの粘土を使用している。炉壁は高熱を受けているので変色している。炉の内側は溶解してガラス状になり青味をおびた黒色を呈する。外側は赤褐色～褐色をなす。

(11) 第10号炉址（Fig.125）

L－11，M－11グリットに検出した炉址である。第2群炉址に属し，形態等から鍛冶炉と考えられる。SB－25と重複関係にあるが，直接の切り合い関係がないので先後関係は不明である。建物に対する炉の位置等を考慮すれば，むしろ同時に併存し，この炉に対する覆屋的性格が強く，SB－25は鍛冶小屋的な作業場と考えられる。

炉は長軸77cm，短軸66cmの略五角形プランをなす。深さ17cm前後で床面は平坦である。床面は炭，灰がつまっている。断面形は箱形をなす。炉壁は粘土を貼り付けたもので厚さ1～3cmである。加熱のため変色し，炉内側は暗灰色，外側は赤褐色をなす。炉壁は部分的に剝離している。

⑿　第11号炉址（Fig.125）

O－10グリットに検出された炉址である。第2群炉址に属し、形態等から鍛冶炉と考えられる。SB－30と重複関係にあるが、直接の切り合い関係がないので、先後関係については明らかにできない。炉址の配置等から若干無理があるが、炉址と建物が一体となり機能していたことも考えられる。SB－25同様に鍛冶場的性格をもっていたかも知れない。

炉址は長軸60cm、短軸40cmの長方形プランをなす。深さ20cmで断面形は箱形をなす。床面は平坦で、底面には炭、灰が堆積している。床面はあまり焼けていない。炉の北東コーナーには10cm×6cmの楕円形の孔があいていてフイゴの着装部かと思われるが明確でない。ただし、この部分から65cm×30cmで掘り込みがあり約45cm離れて存在する径12cmの穴まで導管状に続いていたと考えられる。穴のまわりには焼石三個が存在する。この炉址は切り取り保存したために、導管部分については調査を行っていない。炉壁は粘土を貼り付けたもので厚さ約2cm。加熱のため変色し、炉内側は赤色、外側は赤褐色になっている。

⒀　第12号炉址（Fig.125）

O－13グリットに検出した炉址である。第2群炉址に属し、形態等から製錬炉と考えられる。SB－28のすぐ南に位置している。保存状態は非常に悪い。

炉は底面がわずかに残存するのみである。焼土、炉体のあり方から少なくとも二基が重複しているようである。1基は10cm×7cmの楕円形に炉底面が存在する。他の一基は炉壁面もすでに削平されている。

⒁　第13号炉址（Fig.126）

O－4、5グリットに検出した炉址である。第2群炉址に属し、製錬炉と考えられる。調査区の西端部に位置し、他の炉址とはやや離れて存在する。

炉址は25cm×23cmのほぼ円形プランをなす。深さ27cmと深く柱穴状をなくしているが、これは炉址の底部が抜きとられているためであろう。元来の形態は他の炉址と変わらないものと考えられる。炉壁は加熱によって変色している。炉内側は黒色～赤色で、外側は赤褐色になる。炉からスラッグ1点が出土している。

⒂　第14号炉址（Fig.126）

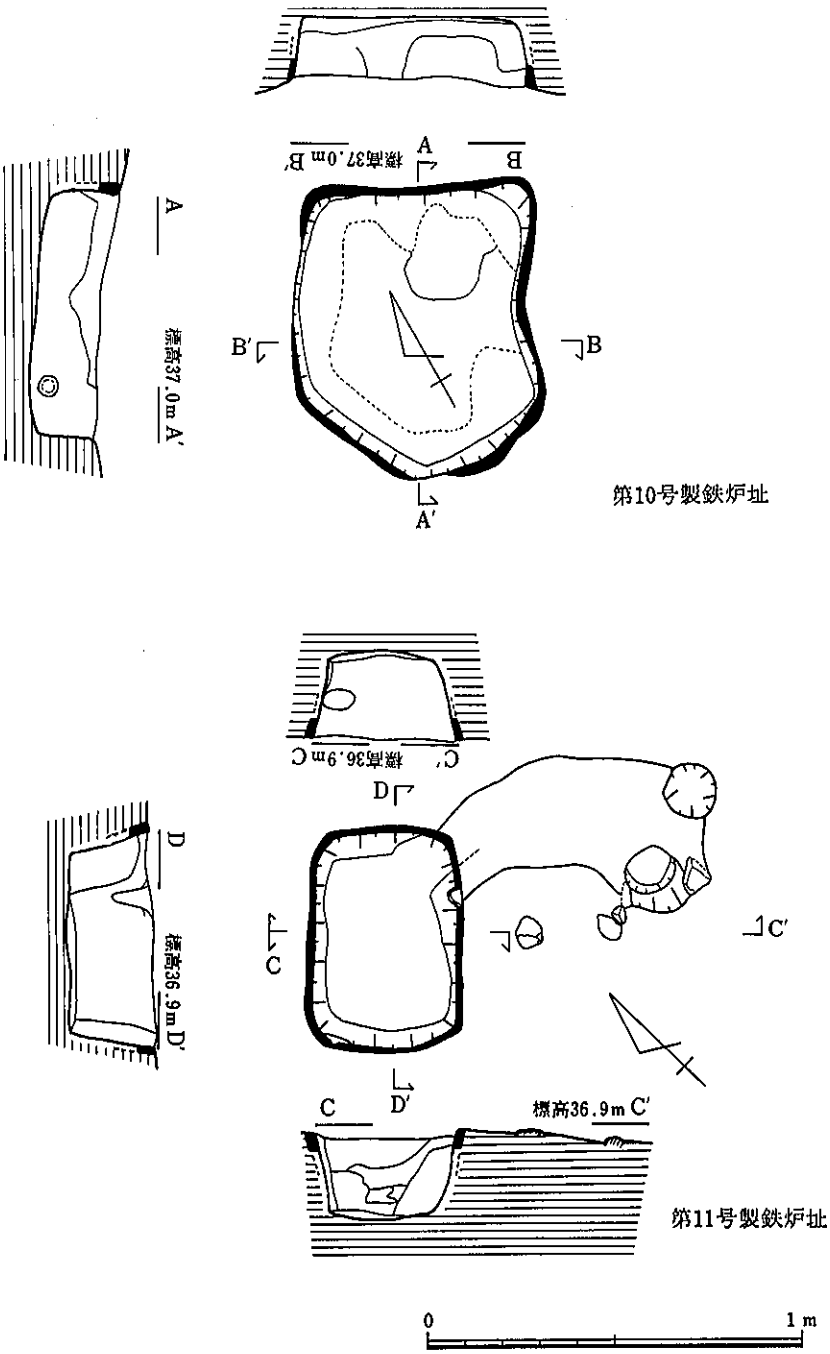


Fig. 125　第10・11号製鉄炉址実測図

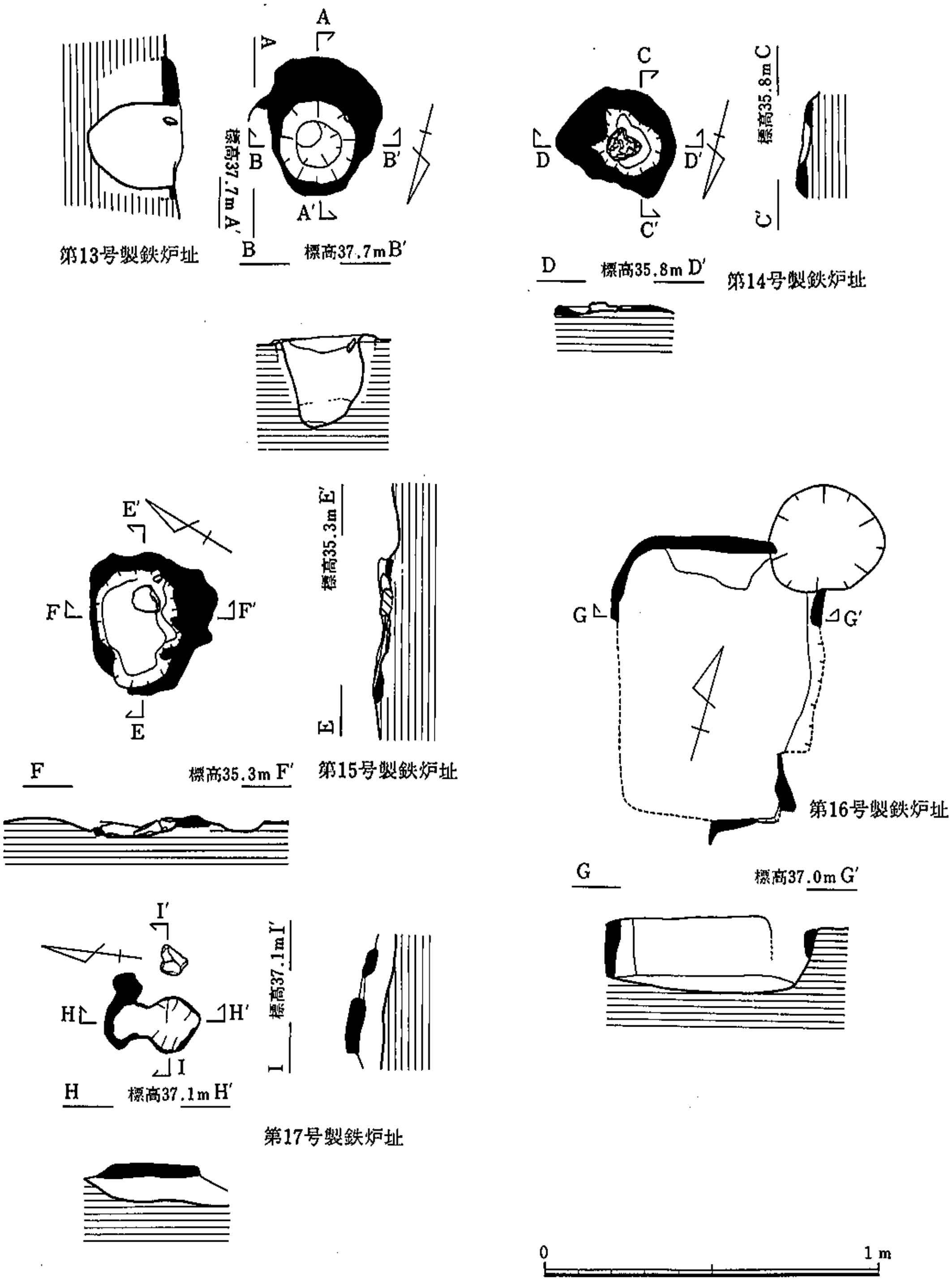


Fig. 126　第13～17号製鉄炉址実測図

U－15グリットに検出した炉址である。第2群炉址に属する。形態等から製錬炉と考えられる。他の炉址とやや離れていて，調査区の南側，段落ち部に近い位置に存在する。

炉址は底部のみが残存していたものである。長径18cm，短径12cmの不整楕円形プランをなす。深さ1～2cmで，断面形は浅い皿状をなしている。炉の内部には鉄滓が付着したままである。炉壁にはスサ入りの粘土が使用され，厚さ2～10cmである。炉壁は高熱のため変色している。炉の内側は溶解してガラス状になり黒色と呈し，外側は赤色をなす。

(16) 第15号炉址（Fig.126）

S－22グリットに検出した炉址である。第1群炉址に属し，形態からみて製錬炉と考えられる。SB－02の南側に位置している。

炉址は残存状態が悪く，底部付近のみを残しているにすぎない。炉は長径35cm，短径25cmの不整楕円形プランをなす。深さは約5cmで断面形は皿状をなす。炉内には鉄滓が付着し，土師器小片1点も出土している。炉壁はスサ入りの粘土を使用している。厚さ4～10cmである。高熱のため変色し，炉内側は溶解しガラス状になり青味をおびた黒色を呈し，外側は赤色をなす。

(17) 第16号炉址（Fig.126）

M－11グリットに検出した炉址である。第2群炉址に属する。形態等から鍛冶炉と考えられる。SB－25のすぐ南側に位置している。

炉址は長軸80cm，短軸57cmの長方形プランをなす。深さ22cmで断面は箱形をなしている。底面は平坦である。全体的にみて残存状態は不良である。北側は比較的円状をとどめているが，西側はほとんど破壊され，底面でかろうじて確認できる程度である。炉壁は粘土を貼り付けたもので，厚さ2～4cmである。炉壁は加熱され変色している。炉の内側は良く焼けて赤色をなすが外側に向って赤褐色，暗褐色をなす。

(18) 第17号炉址（Fig.126）

M－12グリットに検出した炉址である。第2群炉址に属する。形態等から製錬炉と考えられる。SB－26と重複関係にあるが直接の切り合い関係がないので先後関係は不明である。第16号炉址の東側約4mに位置している。

炉址は遺存状態が悪く，炉底部の一部が残っているにすぎない。炉壁はスサ入りの粘土を使用し，厚さ約3cmである。

⒆　第18号炉址（Fig.127)

Ｄ－33グリットに検出した炉址である。第１群炉址に属する。形態等から鍛冶炉と考えられる。第１号炉址の北側約９ｍの所に位置する。

炉址は南側を失う。長軸55cm＋α，短軸58cmの隅丸長方形プランをなす。深さ約８cmで底面は平坦で木炭がつまっている。断面形は箱形をなす。炉壁は焼土を貼り付けている。厚さ２cm前後で，加熱によって変色している。炉内側は黒色で外側は赤褐色である。炉壁は部分的に剥落している。

⒇　第19号炉址（Fig.127)

Ｎ－11グリットに検出した炉址である。第２群炉址に属し，形態等から製錬炉と考えられる。ＳＢ－29のすぐ北側に位置している。

炉址は遺存状態が不良で，炉底部が残るのみである。現存部は20cm×13cmで底面がわずかに残り凹む。炉壁はスサ入りの粘土を使用し，厚さ４cm。高熱のため変色し，炉内側は溶解しガラス質になり青味がかった黒色を呈する。外側は赤褐色になる。

(21)　第20号炉址（Fig.127)

Ｍ－11グリットに検出した炉址である。第２群炉址に属する。残存状態がきわめて悪いが，大きさや形状からして製錬炉と考えられる。第16号炉址と重複関係にあり，第20号炉址が上に乗っていて，後出するものである。

炉址はほとんどが削平されていて，痕跡をとどめているにすぎない。すでに炉壁面も失われている。炉壁の範囲は23cm×17cmの楕円形プランをなしている。焼壁部分は炉の外側に近く，赤褐色をなしている。

(22)　第21号炉址（Fig.127)

Ｎ－33，Ｏ－33グリットに検出した炉址である。第１群炉址に属し，形態等から鍛冶炉と考えられる。ＳＢ－21，ＳＤ－01と重複関係にある。いずれとも直接の切り合い関係があり，その先後関係は明らかである。すなわち，本炉址はＳＢ－21の柱穴を切り，ＳＤ－01に切られている。ＳＢ－21→第21号炉址→ＳＤ－01の先後関係になる。

炉址は長軸105cm，短軸70cmの長方形プランをなす。深さ10cmと浅いが，これはＳＤ－01に切

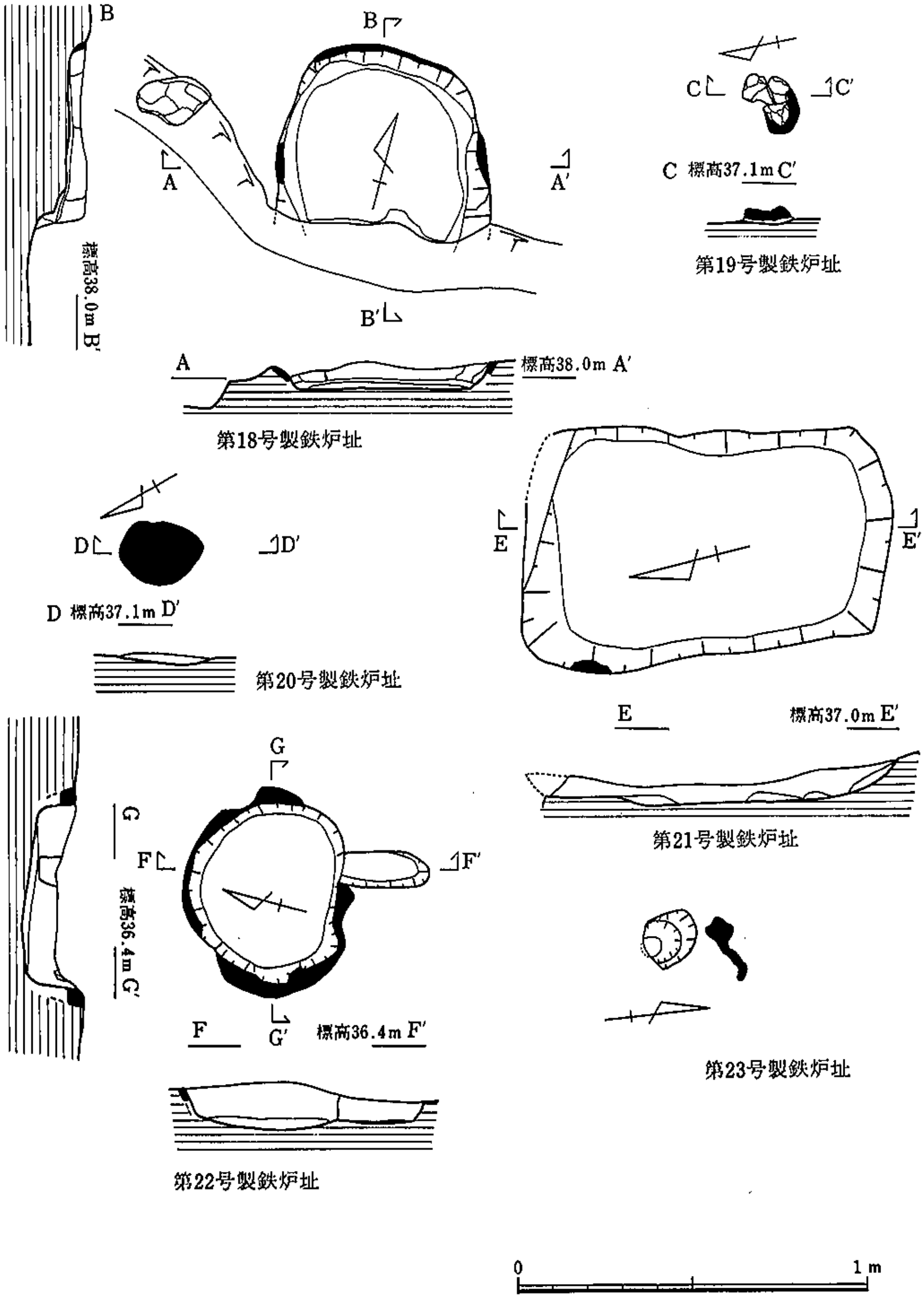


Fig. 127　第18～23号製鉄炉址実測図

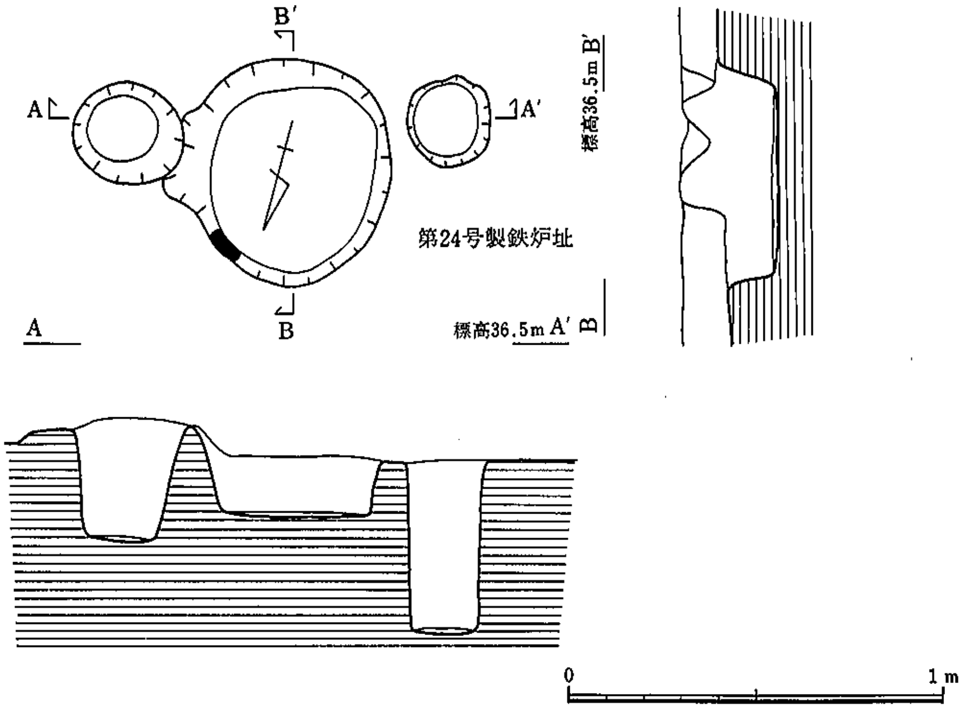


Fig. 128　第24号製鉄炉址実測図

られて上部が削平されているためである。床面は平坦で，断面形は箱形をなす。床面には木炭が層をなして堆積している。炉壁は粘土を貼り付けたものであるが，そのほとんどが剝落している。一部残存する部分からみると厚さ２cm前後，加熱によって炉内部が黄褐色を呈し，外側が赤褐色に焼けている。

㉓　第22号炉址（Fig.127）

Ｌ－25グリットに検出した炉址である。第１群炉址に属する。形態等から鍛冶炉と考えられる。ＳＢ－12のすぐ北側に位置する。

炉址は長径52cm，短径43cmの楕円形プランをなす。深さ14cmで，底面は平坦である。底面には炭が若干堆積している。断面形は箱形をなす。炉の南側壁には長さ25cm，幅10cm，深さ６cmの溝状の掘り込みが連接している。フイゴの着装用のものかと考えられる。炉壁は粘土を貼り付けたものである。厚さ４cm前後で，炉内側は赤褐色に良く焼けているが，大部分は剝落している。

⑷ 第23号炉址（Fig.127）

M－16グリットに検出した炉址である。第2群炉址に属する。残存状態がきわめて悪く，その痕跡を残すのみであるが，形態等を考慮すれば製錬炉と考えられる。

炉址は粘土を用いて作られているが，削平が著しく，そのほとんどが消失している。長さ20cm，幅6cmの範囲に炉体の一部が残存しているにすぎない。

⒇ 第24号炉址（Fig.128）

M－27グリットに検出した炉址である。第2群炉址に属する。形態等から鍛冶炉と考えられる。SB－03と重複関係にあるが，直接の切り合い関係がないので，その先後関係は明らかにできない。近接して第5号炉址が存在する。

炉址は長径60cm，短径56cmの円形プランをなす。深さ16cmで底面は平坦である。断面形は箱形をなす。炉壁は粘土を貼り付けたもので，熱によって赤褐色に焼けているが，大部分が剥落している。炉内部からは木炭と共にフイゴ羽口，土師器が出土し，近くに鉄滓が多い。また，炉の両側に柱穴が存在するが，これが炉に関係するものが否かは明確にできなかった。

以上，検出した24基の炉址について説明した。炉址は前述したように製錬炉と鍛冶炉に大別される。検出面はそれぞれにおいて異なり地山面，包含層下面，包含層上面などがあり，時期的にも長期にわたって製鉄生産活動が行なわれていたことがわかる。

⒃ 製鉄関連遺物

製鉄関連遺物としてフイゴ，ルツボ，鉄滓，炉壁がある。鉄滓，炉壁については遺跡全体にわたって出土する。このことは炉が同様に遺跡全体に分布することと符号している。しかし，鉄滓，炉壁はいうなれば産業廃棄物であって，生産活動の終了時には整理，廃棄されるものであり，遺跡の中にあっても当然分布の違いがあるはずである。その解明はこの居館址における生活空間の利用の仕方を知る手がかりとなる。しかし，今回は時間の関係で数量的な分析をしていないので今後検討した上で提示することとする。ただ，発掘中の所見では鉄滓は炉址の周辺と遺跡南側の段落ち部に多くを検出した。炉壁は炉の破壊時に一括して投棄されたものと思われ，鉄滓同様遺跡の南側段落ち部分からSD－10にかけて一括出土している。炉壁の中には接合するものがあり，炉の復原ができる可能性がある。復原結果はいずれ図示することができると思う。ここで一つのべておきたいのは炉壁にフイゴロとは別に炉壁中に導管をめぐらし，

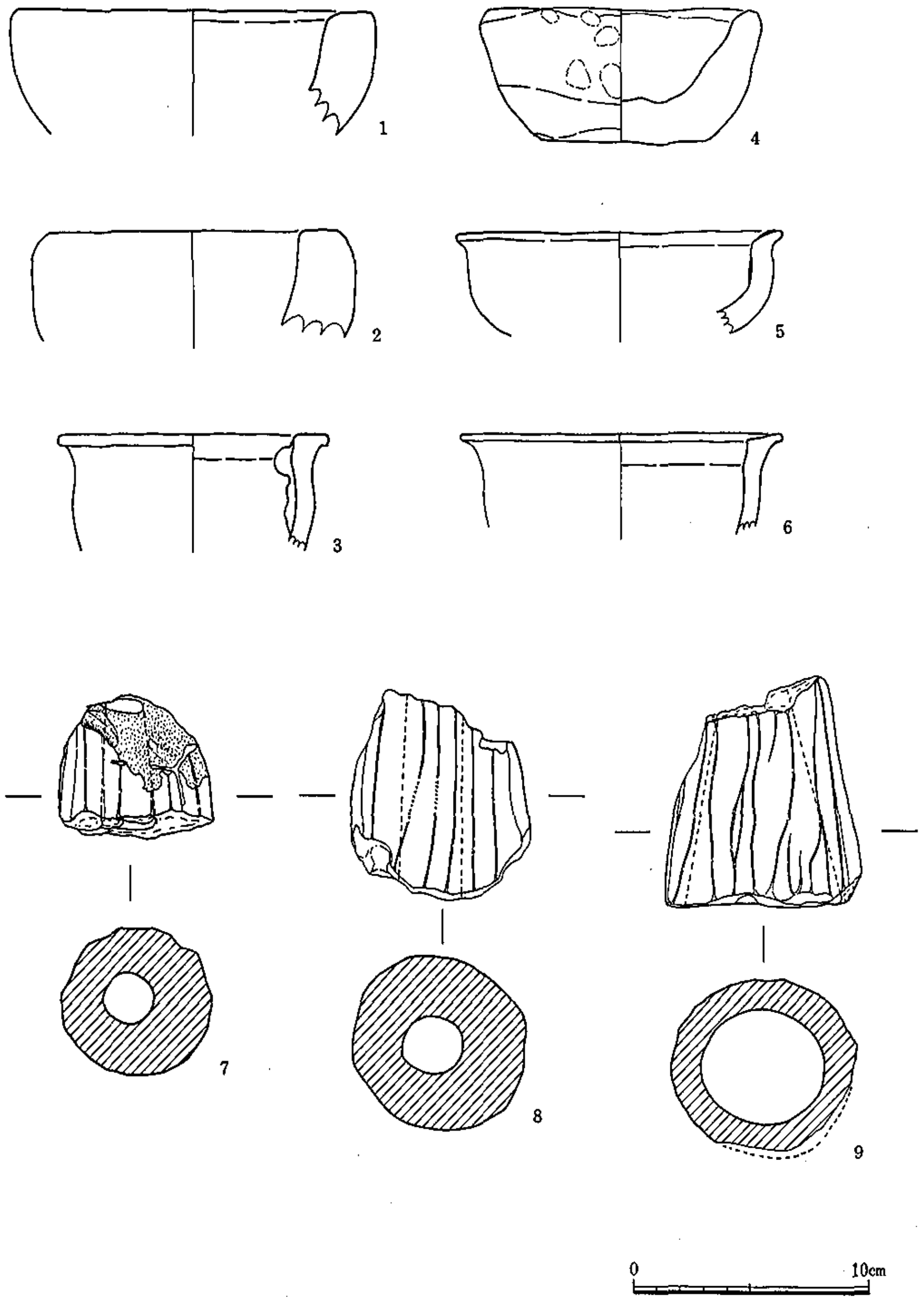


Fig. 129　フイゴ羽口・ルツボ実測図

炉内の各所に穴をあけている破片が多くあることである。炉内の温度をあげるための工夫と考えられるが注意すべきことであろう。

鉄滓，炉壁の外にフイゴ，ルツボがある。ルツボは量的に多くないが，フイゴの羽口は量が多く数十点にのぼる。以下代表的なものについて説明する。

ルツボ (Fig.129－1～6)

ルツボには当初からルツボとして製作されたものと，土師器を転用したものがある。前者は1，2，4，後者は3，5，6である。

1は復原口径14.8cm。椀状をし，口縁部は平坦にする。器壁が厚く2.3cmをはかる。器壁は二次的加熱のため白灰色～黒灰色に変色し，硬くなっている。内側から口縁部にかけての一部は器面が溶解しガラス質になり他の不純物が付着している。2もほぼ同様で，復原口径11.9cm，器壁の厚さ2.4cmをはかる。4はほぼ半分が遺存していて全形を知ることができる。底部は平底で体部は椀状をなしている。器壁は厚く1.5～2.1cmである。胎土にはスサ（籾殻）を多く含んでいる。手づくねで製作され器面に凹凸がみられる。器面は二次的加熱のため白灰色～黒灰色に変色し，部分的には器面が溶解し不純物が付着している。口径10.5cm，器高5.6cmである。同種の他のルツボには片口がつくりつけられたものも存在する。3，5，6は土師器を転用したものである。口縁部が外反し，体部は張らない鉢形をなす。いずれも小型品で復原口径は3が10.1cm，5が11.8cm，6が13.2cmである。三者共加熱のため硬く焼け，内外面とも表面は溶解してガラス質になり，内面には鉄滓，銅等の不純物が付着している。

フイゴ羽口 (Fig.129－7～9)

3点を図示した。7は先端部（炉側），8は中位部，9は吹口（外側）の破片である。8は先端部が高熱のため溶解しガラス状になり黒色～黒灰色をなす。孔径2.1cm，9は孔径2.4cm。9は端部がやや広がる。孔径6.4cm。いずれも外面は面取りをしてある。

11. 包含層出土遺物

本遺跡は包含層も良好な状態で残存していて多量の遺物が出土している。遺物の種類は多岐にわたっていて，時間的にも長期間にわたっている。以下代表的なものについて説明する。なお，青磁器，白磁器，墨書土器などは包含層および各遺構出土品も一括している。その場合は出土遺構を明記している。

(1) 晩唐三彩

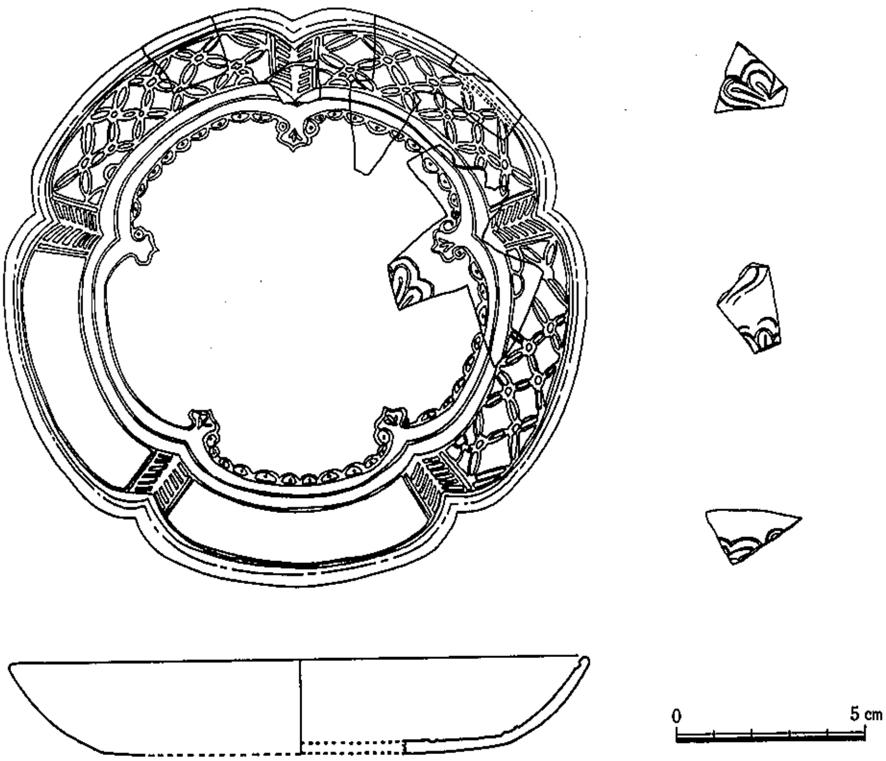


Fig. 130　晩唐三彩実測図

ＳＢ－01の南側に集中して出土したもので，いずれも遺構に伴うものではなく，包含層の下部において検出した。破片13点があり，同一個体の破片と考えられる。破片は薄手で小さく割れている。破片の内訳は口縁部３点，見込みおよび体部破片10点である。口縁部２点と見込み１点が接合し，見込みおよび体部破片５点が接合した。破片から器形は輪花を施した皿であることが判明する。小破片のため，全形を割り出すことがやや困難であるが，本例と極めて類似した例であるベルリン国立博物間所蔵の三彩印花蝶文五輪皿やイラクのサマラ遺跡出土の三彩皿を参考として作図復原したものがFig.130である。復原口径15.5cm，器高2.5cmの皿で，型作りによって成形と施文とを同時に行っている。見込みには浮彫り風に印花浮文の花文を施し主文様とすることが見込み破片４点の花弁文様から明らかであるが，その文様構成は不明である。主文様は三重の木瓜形の窓で縁取りし，内側の縁取りの隅はパルメット文様を配し，その間は

円文様を連ねて捺している。木瓜形枠の隅からは器の5曲（？）に折れた輪花に沿って矢羽根文が5方向に放射状にのびていたことは矢羽根の小破片や縁取りの隅のパルメット文様部分の存在から明らかである。矢羽根文帯によって区画された文様帯は印花浮文の七宝繋ぎでうめられる。器壁は0.3cm前後と非常に薄く、柔らかい白色の素地が用いられ、白化粧の必要がないためか、化粧土の使用は認められない。施釉は見込みの主文様である花文を褐彩する以外、印花文様に拘束されることなく白釉を地にして鹿の子斑状に緑釉を染めわけている。風化がすすみ釉薬が剝離した部分があるが、その美しさにはすばらしいものがある。

(2) 施釉陶器

唐三彩と同時期と考えられる遺物に多量の施釉陶器がある。越州窯系青磁器を中心としてもので、一部、長沙瓦渣坪窯の磁器、あるいは小さな玉縁をもつ白磁器、国産の緑釉陶器が含まれている。器種も豊富で水注、双耳壷、香炉、合子、托、碗、皿等がみられる。数量としては破片数で600点（70個体）以上である。以下、代表的な遺物について紹介しておこう。

〔水注〕

長沙窯系水注········43点以上の破片があり、少なくとも4個体以上があると思われる。図示したのはそのうちの2個体である。1は25点の同一個体とみられる破片をもとに、作図復原してほぼ全形を知り得る。口縁部破片がないため口縁の形状は明確ではないが、類似の完形資料から如意形に外反するものと想定される。頸部はほぼ垂直にたちあがる。頸部の復原径は9.8cm、肩部は急に広がり、胴は張りのない円筒形の体部を有し、底部は段をもって広がり、安定したややあげ底の平底である。胴部の最大径18cm、底部径17cm、推定器高25cm。注口部は欠失するが断面八角形の短い注口であったと考えられる。把手は粘土紐3本を組合せ、注口部を逆の肩部にとりつけている。注口、把手部の間の肩部には通例では耳がつくが、本資料中にはみいだせない。胴部には貼花文がある。貼花文は同一形状のものの破片2点がある。注口、耳の下方の3ヶ所に貼付したものと考えられる。貼花文の厚さは0.2～0.3cmで接合の痕跡は明瞭である。貼花文の文様は下方に同心円を2重にめぐらし、内の円圏文には4弁花を配して、外側の円圏に珠文を連ねた、いわゆる瓦当文を配し、その上方に武人が乗っている図柄構成をなす。武人像は上半部を欠失している。左右対象に近い構成であるが左右の衣服に若干の差異を有する。施釉は白化粧した後、口縁部から体部末端および口縁部内側に光沢のある淡い青釉が掛けられ、胴部には貼花文を中心として長円形の斑文状の褐釉が4ヶ所に施される。褐釉は一部黒色をなす部分もある。釉には細い貫入が全面に認められ、胎土と釉の定着が悪く、一部釉が剝離する。体部端の一部と底部は露胎で赤褐色に変色している。底部端はヘラによる荒い削り状の調整がみられ、中央部は未調整。体部内面は釉がけはなく轆轤痕が顕著に認められる。胎土

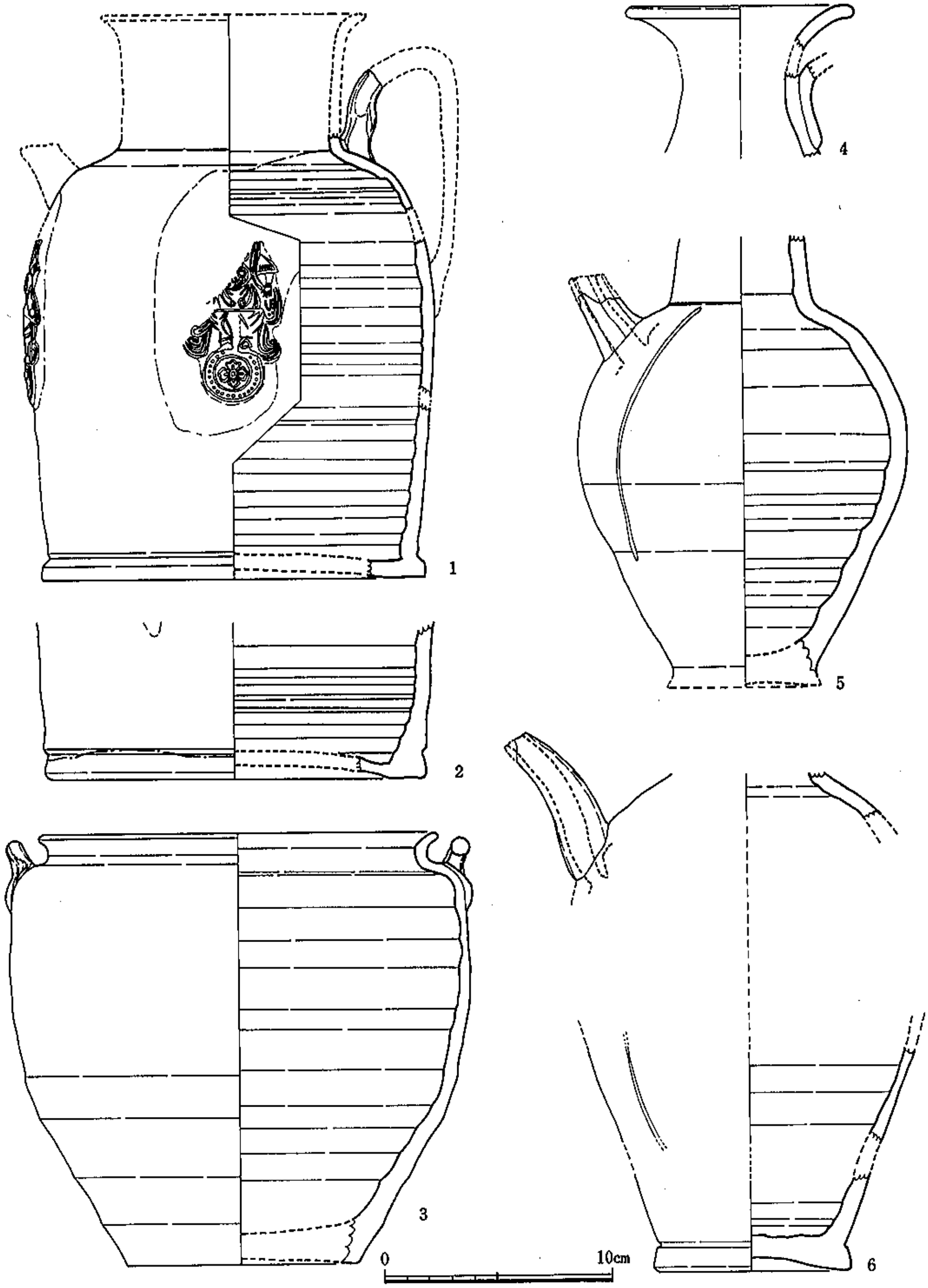


Fig. 131　施釉陶磁器実測図 I

は赤灰色で精製されているが，一部に石英粒を含んでいる。器壁は厚さ0.5～0.7cm前後である。

2も1と同様の水注の底部付近の破片である。同一個体の破片6点である。復原径16.8cm，外面は白化粧した後，黄釉を施しているが，底部直上にある三段以下は露胎のままである。胴の一部に褐彩の部分が認められる。胎土と釉の定着が悪く一部釉の剥離が認められる。底部の調整は1と同様であり体部内側は轆轤痕が顕著である。胎土は灰色～白黄色で精製されたものであるが，一部に砂粒を含んでいる。器壁の厚さ0.6cm前後。

褐釉水注……口縁、頸部破片2点がある。同一個体とみられる。復原口径10cm、頸部は肩部より内傾しながらたちあがり口縁で大きくラッパ状に外反する。頸部に把手がつく。把手は粘土帯を利用するもので、外面に縦2条の沈線を入れ紐状につくりだしている。内外面に光沢ある褐色釉が施され、釉だまりは黒褐色をなす。胎土は白灰色で精製されている。器壁の厚さ0.6cm前後。

越州窯系水注……53点以上の破片が出土し、少なくとも8個体以上の水注の存在がある。図示したのは、そのうちの特徴のある2個体である。4は同一個体の破片8点がありほとんどが接合でき、約⅓が現存する。ほぼ全形を知ることができるが、口縁、底部、把手を失いその細部は不明である。体部は底部から直線的に外反気味にたちあがり、上半部は下半部と稜線をもってふくらみを増し球形をなす。上半部は劃線によって4区分される瓜割形をなす。頸部はやや内傾しながらたちあがる。頸部と体部の境に沈線一条をめぐらしている。注口部は断面八角形の短いもので、5の注口とは形態上の差異がある。底部はわずかに外方に張り出す部分がみられ、外方に張り出した安定した平底を呈し、中央部がややあげ底状になるものと考えられる。胴部内面は轆轤痕が顕著に残っている。復原底径6.8cm、胴部最大径14.6cm、頸部径6.4cm、推定器高23cm前後である。施釉は内外面全面に光沢のあるオリーブ色の釉をムラなく掛けた精製品である。胎土は灰色で精製され、器壁の厚さは0.8～1cm前後。5は同一個体破片18点より作図復原したものである。口縁～頸部、把手の破片はなく、形状は不明。底部はやや外に張り出し、体部との境に沈線状の段を有する。安定した平底で、中央部がややあげ底となっている。胴部は小破片が多いためはっきりとは復原できないが長胴をなすと考えられ、劃線で区分され瓜割形をなす。注口部は4と異なり、断面形は円形で、上方にたちあがり先端部をわずかに屈曲させる長さ6cm前後の長手のものである。施釉は外面全面に、光沢のあるオリーブ色の釉をかけてあるが、上半部はやや黄色が強い。釉には部分的に貫入がみられる。胴内面は無釉で、轆轤痕が残る。外底部の縁部はヘラによるケズリで調整する。底部径8.8cm、胴部最大径は上部にあると考えられる。胎土は釉に近い部分が灰色で内面は赤褐色をなす。胎土は精製されているが、小さな砂粒を含んでいる。器壁の厚さは0.4～0.7cm前後。

〔双耳壷〕

18点の同一個体の破片がある。接合でほぼ全形の½が現存する。口縁は外反し、頸部は短い。

あまり張らない肩部から円筒状の胴部へ続き，胴下半部で稜線をもってしぼみ平底の底部へ移行する。広口の短頸壷である。耳は粘土紐でとりつけられたもので，断面円形の横耳で，相対して２個つけられる。口径17.6cm，頸部16.6cm，胴部最大径10.4cmをはかる。内外の全面にオリーブ色の釉をかける。外面はムラなく施されているが内底部近くは黄色が強く，その上部に黄色釉が斑点状に掛っている。胎土は灰色で精製されている。器壁の厚さは上半部は0.5cm前後と薄いが，下半部にいくにしたがい厚味を増す。

〔香炉〕

110点以上の破片がある。このうち15点が蓋（１個体以上）で残りは身（２個体以上）の破片である。３個体共にほぼ全形を知ることができるが，図示したのは蓋，身の各１点である。１は蓋の実測図であるが，天井部の透しの部分で破片間の接合関係がなく，透しの形が不明でその復原はできないが，多くの破片があるので今後の検討で欠を補いたい。器形は合子の蓋と類似する。口縁端部を肥厚させ一条の沈線をめぐらす。口唇部は身との接合を良くするため平坦に成形され，その面に目跡の痕跡が認められる。天井部と体部の境は２条の沈線をめぐらし凸線となっている。天井部はゆるやかな丸味をもつが，断面M字形をなす輪高台状の鈕との間に２～３段の透しを入れている。透しの形は完全なものがなく明らかでないが破片からは山形，三日月，円等のものがあるが組み合せで他の形に変化するので，今後の検討にゆだねたい。天井部中心には，輪状の鈕の他つまみが付いていたことは，つまみの剝離面や天井内面のふくらみから明らかである。全面にオリーブ色の釉がムラなく掛けられ，沈線部は青味が強い。全面に貫入が認められる。口径14.4cm，器高4.8cm，輪状の鈕の径は６cm，高さ0.3cmを測る。胎土は灰色で精製されている。２は身で，ほぼ完形に復原できる。身の形状も合子の身と類似している。香炉の身は合子の身に末広がりのやや高い脚台を付した形である。身と脚台部分の接合痕は明瞭に残っている。蓋受けのたちあがりは0.7cmで，口縁直下に細い沈線一条をめぐらす。受部は幅0.4cmで水平に削られ，目跡が残っている。この受部とたちあがりは露胎のままで，赤褐色に変色している。受部の直下に沈線一条をめぐらし，脚部の接合部にもやや幅広の沈線３条をめぐらし，削出し状の低い凸線２条をつくり出している。釉薬は蓋と同じで，受部とたちあがりの外面を除いて全面にかけられる。釉には細かい貫入がある。胎土は白灰色で精製されたものである。たちあがり径11cm，受部径８cm，脚端部径15.4cm，器高8.9cm。図示しなかった１点もほぼ同形状である。蓋，身共に精製品である。ただし，１，２は径に若干の差があり，セットとしては考えがたい。

〔合子〕

蓋の破片７点，２個体，身の破片４点，２個体がある。中，小型の２種があるが，それぞれ径に差がありセットではない。中型品は蓋，身各一個体がある。３は蓋で破片４点があり⅔が現存する。口縁端部がわずかに外に張り出し，口唇部は平坦に仕上げ目跡の痕跡が残っている。

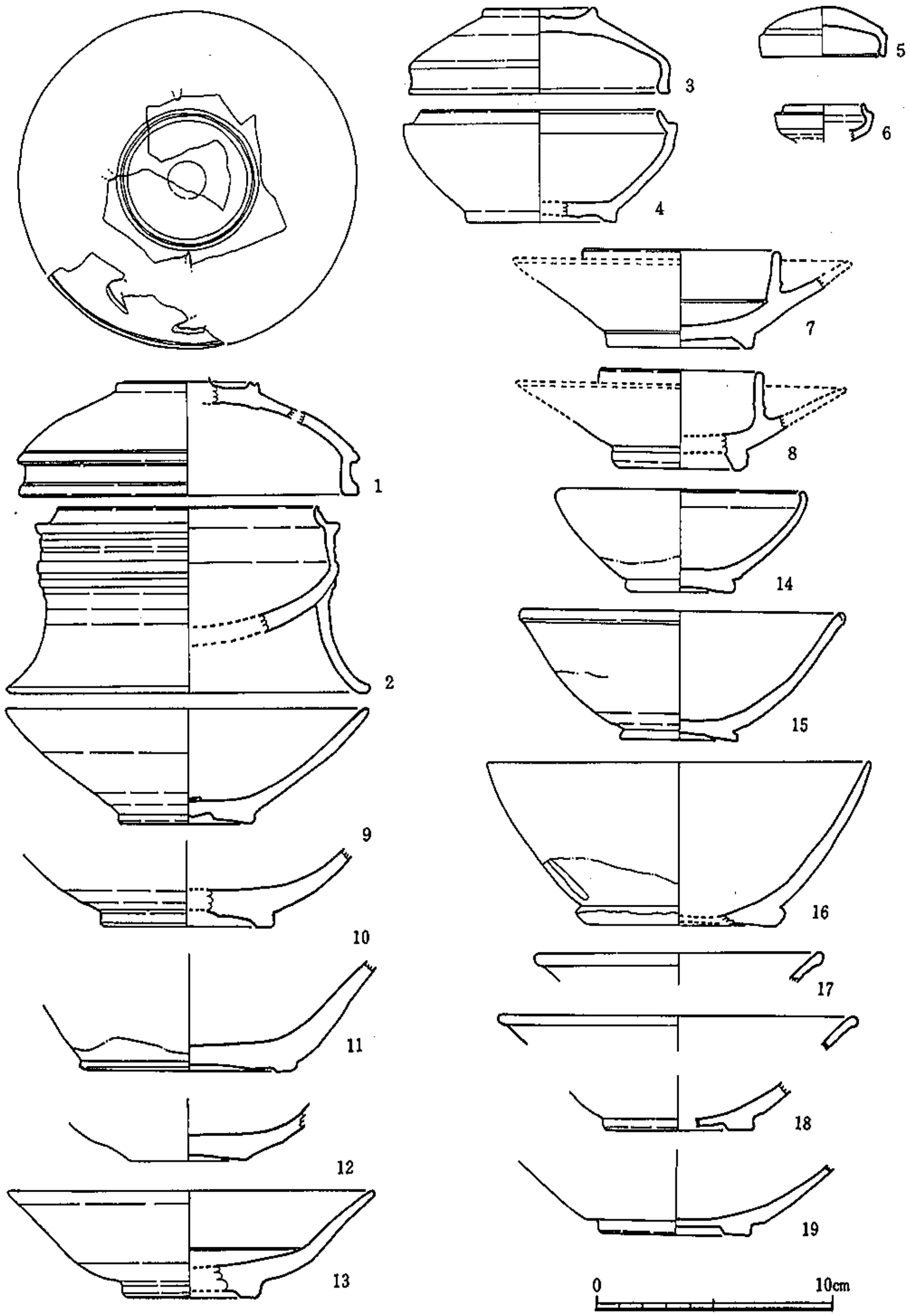


Fig. 132　施釉陶磁器実測図II

先の香炉の蓋と同様のつくりである。体部と天井部の境には浅い沈線1条をめぐらし区別している。輪高台状の鈕をつけた特異な例で，類例として京都市仁和寺円堂跡出土の合子蓋がある。天井部内面には轆轤痕が残る。全面にオリーブ色の釉がムラなくかけられる。釉の一部に貫入がある。胎土は白灰色で精製されたものである。口径11cm，器高3.6cm，鈕径5.8cm。4は身で，同一個体の破片3点がある。身の形状，つくりは香炉の身ときわめて類似している。蓋受のたちあがりは直線的で高さ0.6cm，受部は幅0.4cmで平坦に削られ，目跡の痕跡が認められる。底部は輪高台である。たちあがり外面と受部，畳付きは露胎のままで褐色に変色するが他は全面に黄色の強い青釉がムラなく施釉される。一部貫入が認められる。胎土は白灰色で精製されている。たちあがり径10.2cm，受部径11.6cm，底部径6.4cm，器高4.8cm。小型品も蓋，身の各1固体がある。5は蓋で，破片2点があり，約⅓が現存する。口唇部は平坦に削られる。体部と天井部の境に沈線を1条めぐらす。天井部はゆるやかなカーブをもつ。口唇部が露胎のままで目跡痕が認められるが，他は全面にオリーブ色の釉がかけられる。胎土は白灰色で精製されたものである。口径5.2cm，器高2.1cm，器壁は天井部でやや厚く0.8cmで体部は0.3cmである。6は身の破片1点がある。蓋受けのたちあがりは直線的で高さ0.3cm，受部は平坦に削られ，幅0.3cm，一部目跡らしい痕跡がある。体部は中ほどで稜線をもって屈曲し底部へ移行するが，底部を失う。ただし，一部，下部へのびる部分があるため中型品同様に輪高台の底部となる可能性が強い。受部を除いて全面にオリーブ色の釉がかけられる。体部外面は削りによって生じた稜線が白く浮きあがり文様効果を生じている。たちあがり径3.4cm，受部径4.2cm，胎土は白灰色の精製されたものである。

〔托〕

破片14点，2個体がある。7，8ほぼ同形同大できわめて良く似ている。7は輪高台から一直線に開き，受部は口縁を欠いて原形は明らかにできないが，復原図の如くのびるものと思われる。さらに図示はしていないが上方にのびる沈線が一部観察できるので，輪花の手法がとられていたものと思われる。内側の中央に盞を受けるたちあがりが直線的にのびる。高さ1.7cm。畳付きは露胎のままで赤褐色に変色し，目跡の痕跡がある。畳付き以外の全面にはオリーブ色の釉がムラなくかけられる。胎土は白灰色の精製されたものである。受皿の径は不明であるが14.6cm前後になろうか。盞受けたちあがり径8.4cm，底部径6.2cm，器高4.1cmを測る。8も同様であるが，釉は7より青味が強い。胎土は灰色。盞受けのたちあがり径7cm，高さ2cm，底部径5.7cm，器高4.2cmである。

〔椀〕

輸入磁器の大部分を占めるのが椀である。椀，杯，皿については，亀井氏や，横田・森田両氏の，太宰府出土器の詳細な分類がある。以下，亀井氏の分類に従い説明を加える。

A－1類……破片40点以上，15個体がある。図示したものは9の1点のみである。蛇目高

台の底部から体部が直線的にのび，口縁部は丸くおさめる。9は口径15.4cm，底部5.6cm，器高4.9cmで，他もほぼ同大の小型品である。釉は青緑色～緑黄色の色調で施される。施釉の手法で三種に分類できる。aは畳付きを除いて全面に施釉されるもの。この種は釉の発色も良好で青緑色をなすものが多い。bは外底および畳付きを除いた全面に釉がかけられるもの，この種の釉は黄色が強く，釉の状態が悪く剝離しているものが多い。cは外面体部下半以下に施釉されないもの。釉はbに類似し，白化粧後，釉がけを行う。この種の椀はすべてに畳付き縁部に目跡を残している。cには内底部にも目跡が認められる。胎土は白灰色で精製されたものである。

A－III類……I類に比較し大型品で，底部は低い輪高台に削り出されるが，その削りは2～3回転で行なわれ，その痕跡が明瞭に残っている。破片16点以上，9個体がある。施釉，器形の若干の差異により3種に分類できる。a（10）は底部からゆるやかにカーブを描いてたちあがる器形を有する。畳付きを除いた全面に青緑色の釉をムラなくかけている。畳付きには目跡の痕跡が認められる。体部には削りによる稜線が認められる。口縁部を欠き器高は不明，底部径7.4cm。bは畳付きを除いて全面に施釉されるのはaと同様であるが，体部が底部から直線的にたちあがる。釉は青緑色でムラなくかけられるが，一部黄色の強い部分が斑状にみられる。畳付きおよび内底部に目跡が認められる。c（11）は体部下部から外底部が露胎のままのものである。畳付きと内底部に目跡が残る。釉はやや黄色がかった青緑色である。底径8.8cm，器高4.7cm以上。胎土はいずれも灰色で精製されたものである。

B－II類……破片30点以上，7個体がある。底部は円盤状をなし，中央部がややあげ底風になる。高台の体側は轆轤成形のままか，わずかに削られる程度である。体部は直線的にのび，口縁部は丸くおさめる。一部，口縁部が内傾するものや肥厚するものもある。大きさから大，中，小に分けられる。釉は白化粧を施した後にかけられるが，発色が悪く黄色の強いものが多く釉のムラが目立つ。細い貫入がみられる。体部外面の下半部以下は露胎のままで放置され，赤褐色に変色しているものが多い。内底に目跡が残る。胎土は精製品と比較して，ややおとり，灰色をなし黒色の砂粒を含んでいて，精製品との区別は明らかである。14は小型品で，底径4.7cm，口径10.4cm，器高4.3cm，外底部には糸切り痕が明瞭に残る。口縁は内傾している。外面胴下半以下は露胎のままで黄緑色の釉がかけられるが剝離する部分が多い。胎土は灰褐色，黒色砂粒を含んでいる。15は中型品，円盤状の底部は轆轤成形のままで，口縁部は玉縁状に肥厚する例である。外面下半部を除いて14と同様の釉が施される。釉の剝離が目立つ。露胎部分は灰褐色に変色する。底径5cm，口径11.6cm，器高5.4cm。16は大型品で底径9cm，口径16.4cm，器高7cm，内底部に目跡が残る。

B－III類……高台を削り出さずに底部から体部が直線的にのび口縁部に至る形態である。図示はしていないが，破片20点以上，10個体がある。釉は青緑色～黄緑色で精良なものが多く，体部下半までかけられてる。底部は体部側からあげ底の底部にかけてヘラ削りによる調整が行

なわれている。露胎部は赤褐色に変色している。目跡は内底部と体部最下部に斜めに認められる。大型品が多い。

〔皿〕

A－I類……低い高台に体部中位で稜をつけて屈曲する体部がつく形態である。破片9点以上，4個体がある。図示したのはそのうちの1点で，13は底径5.8cm，口径15.8cm，器高4.6cm。高台は短く削り出した輪状で，高台内は丁寧に削られている。体部中位で屈曲し，内面に細沈線をめぐらす。口縁は丸くおさめる。釉は畳付きを除いた全面に施され，オリーブ色を呈する。畳付きに目跡がある。胎土は灰白色で精製されたものである。

〔坏〕

若干あげ底風の平底で体部は中位でゆるやかな屈曲をみせる。破片3点，3個体がある。ほぼ同形同大のもので，1点を図示した。12は口縁部を欠き形状は不明，底部径5cmでややあげ底になる。底部縁部の釉をかき取っていて，目跡が認められる。内面屈曲部に細沈線をめぐらす。全面にオリーブ色の釉の施す。

〔白磁器〕

以上の青磁器と共に若干の白磁器を検出した。破片30点以上で4個体以上の個体と考えられる。器種には椀，皿がある。椀はいずれも玉縁状の口縁を有するものである。口縁，底部各2点を図示した。胎土は純白で精製され，釉は乳白色をなす。17は口径12.4cm，18は15.2cm。19は底部で，幅広の低い高台のものである。体部下位と底部には施釉されていない。18，19共に底径は6.5cmである。皿は底部1点がある。輪状高台を有し，体部は中位で屈曲する。先の青磁器と形態的に類似するものと思われる。畳付きと外底部の一部に釉がけがない。

緑釉陶器

国産施釉陶器175点がある。いずれも小破片で図示することはできない。いずれも胎土は精良で，焼成は良好，色調は灰色で須恵質である。口縁一点があり，口縁下に一条の沈線をめぐらす。器形は皿である。

(3)　墨書土器（Fig.133～138）

本遺跡からは　点の墨書土器が出土した。他に文字資料がないので，これらの資料はこの遺跡の性格を解明するには，欠かせない貴重な資料である。以下，各墨書土器について説明を加える。Noは墨書土器のとうしNoである。

1は土師器の椀である。底部にやや高く端部が外側に張る高台を貼り付けている。体部はやや外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部大半はヘラ削り後，ヘラ磨き，他は内外面共丁寧な横方向のヘラ磨きである。内底部に焼

成前の刻書がある。刻書は「難」で「儺」の略字か。また外底部には「郷長」の墨書がある。口径18.0cm，器高6.9cm。SD－10の第II層出土である。2は土師器の椀。断面逆台形の高台を底部端近くに貼り付ける。体部は外傾しながらたちあがるが，口縁部を失う。底部は丁寧なヘラ削り調整，体部内外面および内底部は横方向の丁寧なヘラ磨き。底部に「□長」の墨書がある。上の字が半分で不明であるが，「郷」あるいは「辰」の字である可能性がある。3は須恵器の椀である。断面方形の高台を底部内側に貼り付ける。体部は丸味をもってたちあがるが，口縁部を失う。底部ヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部外面に「田口」の墨書がある。田部で，早良郡には田部郷が存在する。4は須恵器の皿である。底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。体部は外傾しながら短くたちあがり，口縁部はわずかに外反する。体部から口縁部の内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部中央に「山守家」の墨書がある。口径15.4cm，器高2.1cmをはかる。5は土師器の皿である。底部は平底で，丁寧なヘラ削り調整を施す。体部は丸味をもって短かくたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。体部下半はヘラ削り後，ヘラ磨き調整。体部上半および，内面は横ナデ調整後，丁寧な横方向のヘラ磨きを加える。口径18.3cm，器高2.0cmをはかる。外底部の中央よりやや片寄って「浄亽」の墨書がある。亽は人の異体文字と考えられ「浄人」であろう。6は須恵器の皿である。焼成があまくやや軟質である。底部は平底で体部は外傾しながら直線的に短くたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。外部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整，内底部は多方向からのナデ調整。外底部一面に墨書がある。半分が残存しており墨書は「□□□守坏之器□」と判読できる。7は須恵器の皿である。焼成があまくやや軟質である。底部は平底で，体部は外傾しながら短かくたちあがり口縁部はわずかに外反する。底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。復原口径17.0cm，器高2.0cm。外底部の端部近くに「東」の墨書がある。8は黒色土器の椀である。断面逆台形で端部が外側に張る高台を底部端に貼りつけている。体部は丸味をもってたちあがるが上半部を欠く。底部はヘラ切り後ヘラ削り調整。体部内外面は横方向のヘラ磨き，内底部は多方向からのヘラ磨きである。内面は黒色である。輪高台内に大きく「東」の墨書がある。9は断面逆台形の高台を底部内側に貼り付けている。底部と体部の境は鋭い稜線を形成する。体部はやや丸味をもってたちあがるが口縁部を欠く。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加える。体部内外面は横ナデ調整で，内底部は多方向からのナデ調整である。須恵器の坏である。輪高台内の中央部に「東$\boxed{前}$□」の墨書がある。10は須恵器の皿である。底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。内底部は多方向からのナデ調整である。外底部中央に「□$\boxed{前}$□麻」の墨書がある。9と同じ墨書と考えられ，両者を合せると「東$\boxed{前}$□麻」となり，人名かと思われる。11は須恵器の坏である。焼成不良で軟質である。底部は平底で，体部は丸

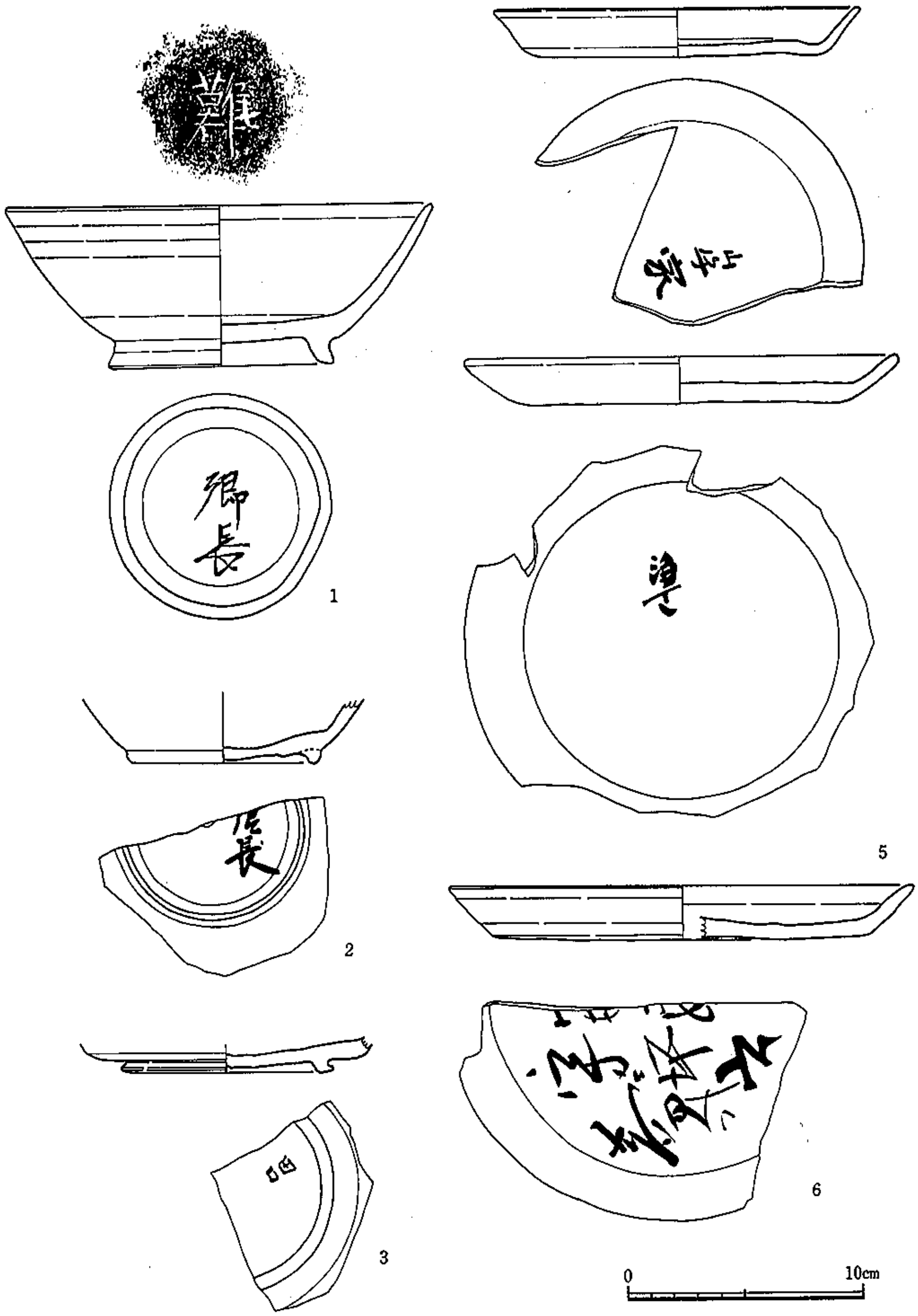


Fig. 133　墨書土器実測図 I

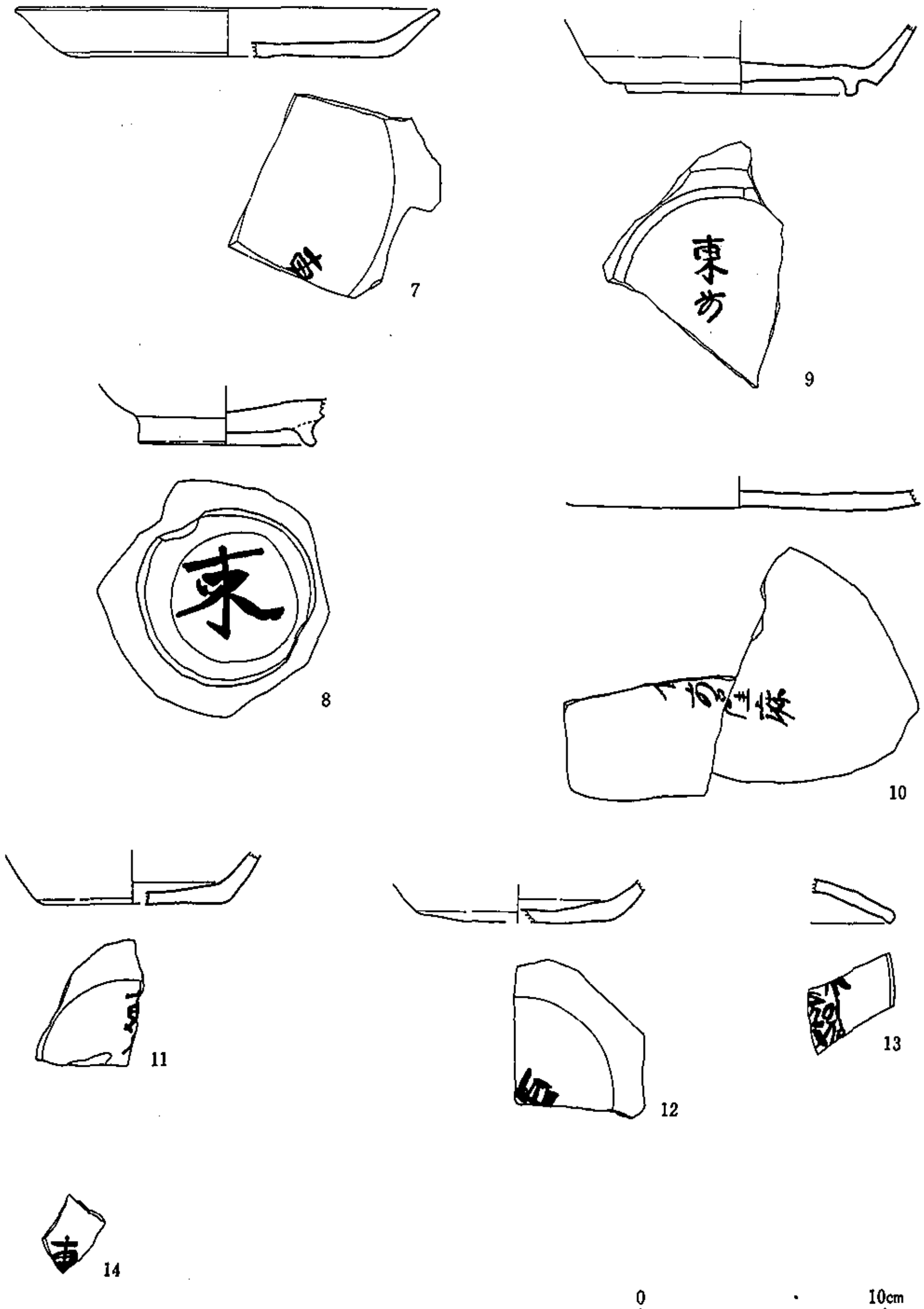


Fig. 134　墨書土器実測図 II

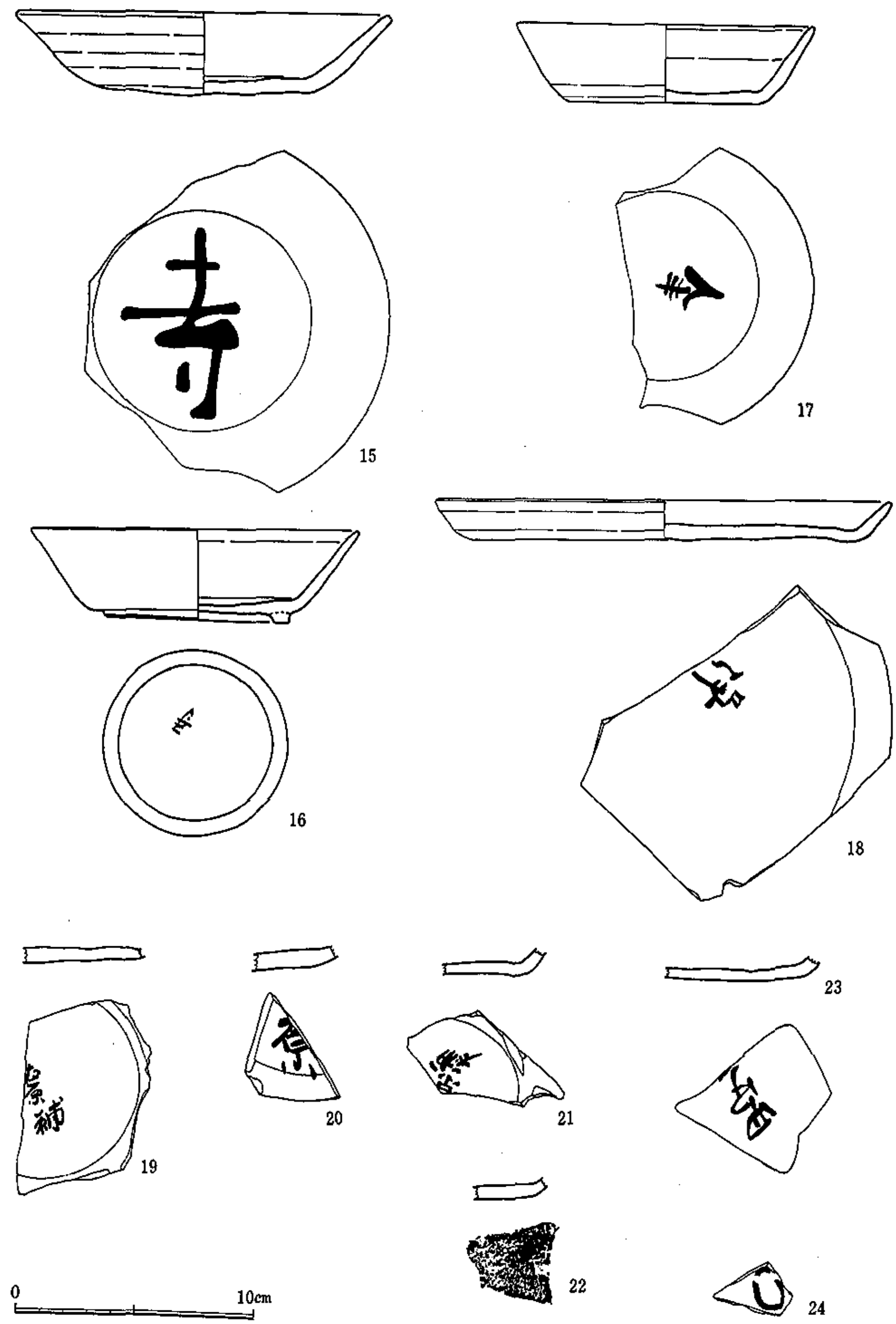


Fig. 135　墨書土器実測図Ⅲ

味をもってたちあがる。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整。体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部中央部に墨書があるが半欠している。おそらくは「東□」で，8，9と同様の墨書の可能性がある。12は須恵器の坏である。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整。体部は丸味をもってたちあがる。体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。焼成不良で軟質である。底部中央にやや大きい墨書文字があるが一部のみで判読しがたい。おそらくは「東」と思われる。13は須恵器の蓋である。口縁部はわずかに屈曲し，端部は断面三角形をなす。内外面共横ナデ調整。体部内面に墨痕，外面に文字があるが判読不能である。14は坏の底部小破片。底部は平底で，ヘラ切り後，ヘラ削り調整を加えている。墨書は底部外面にあり，一部分のみであるが，他例から「東」と思われる。15は土師器の坏である。底部は平底で，体部は丸味をもってたちあがり，口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。板状圧痕が残る。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整で，内底部は多方向からのナデ調整である。外底部に大きく「寺」の墨書がある。口径16.5cm，器高3.5cmをはかる。16は須恵器の坏で完形品である。断面方形の高台を底部内側に貼りつけている。体部は外傾しながら直線的にたちあがり，口縁部はわずかに外反する。口縁端部は尖り気味におさめる。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。高台内側の中央部よりやや片寄って「寺」の墨書がある。口径13.6cm，器高3.9cmをはかる。17は須恵器の坏である。底部は平底で，体部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁端部は尖り気味におさめる。体部に凹線一条がめぐる。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。口縁部の内外面にススが付着し灯火に使用されたことがわかる。口径12.3cm，器高3.3cmをはかる。外底部の中央に墨書があり，「人丰」あるいは一文字で「伞」と書かれる。18は須恵器の皿である。底部は平底で，体部は丸味をもって短くたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。焼成は良好で堅緻である。復原口径18.9cm，器高1.7cmをはかる。外底部の中央よりやや片寄って「浄」の墨書がある。17は須恵器の坏底部破片である。外底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整。板状圧痕が残る。内底部は多方向からのナデ調整である。外底部中央に「左原補」の墨書がある。20は須恵器の坏底部破片である。底部外面はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整。内底部は多方向のナデ調整。焼成は良好で堅緻である。外底部に墨書がある。一部欠失するが「原」と判読できる。21も須恵器の坏である。底部は平底で，底部と体部の境は鋭い稜線がつく。体部は丸味をもってたちあがる。底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整。体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向のナデ調整である。底部中央部に墨書がある。部分的に欠失しているが「□補」と判読でき，上の字は他例から「原」であること

はまちがいなく，もともとは「佐原補」の墨書と思われる。22は土師器の坏底部破片である。底部外面は丁寧なヘラ削り調整である。体部外面から底部にかけて，焼成前の刻字がある。部分的であるが「田吉」と判読できる。23は土師器の坏底部破片である。底部外面はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加えている。内底部は多方向からのナデ調整。外底部中央に「四□」の墨書がある。24は土師器の坏の底部小片である。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整が加えられている。外底部に墨書があるが，文字ではなく記号で，楕円が描かれている。25は須恵器の蓋である。口縁部の屈曲は短く，口縁部は断面三角形をなす。全体に扁平である。天井部中央には擬宝珠形のつまみがつけられる。天井部はヘラ切り後，ヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内側は，墨痕が著しく，磨滅していて，硯に転用されていたことがわかる。天井部に墨書があり「辰人」としてある。これは先に指摘したごとく「人」の異体字と考えられ「辰人」と判読できる。口径14.1cm，器高1.8cmをはかる。焼成は良好で堅緻である。26は須恵器の蓋である。口縁部の屈曲は短く，口縁部は丸くおさめる。天井部と体部の境は明瞭で段がつく。天井部は平坦で，中央部に扁平なボタン状のつまみがつく。天井部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけて内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。天井部内面に墨書がある。明瞭に残っているが上の字は不明。「□辰」と判読できる。復原口径15.6cm，器高1.7cmをはかる。焼成良好で堅緻である。27は土師器の坏である。ほぼ完形である。底部は平底で，体部は外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部は尖り気味におさめる。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部も丁寧な横ナデ調整である。底部端に近く墨書があり「辰人」と判読できる。口径13.3cm，器高4.1cmをはかる。28は須恵器の蓋である。口縁部の屈曲は明瞭で，口縁端部は丸くおさめる。体部と天井部の境は明瞭で段を有する。天井部は平坦である。天井部の中央にはボタン状のつまみをつける。天井部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加えている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。口縁部には刷毛目状のカキ傷がはいる。復原口径13.0cm，器高2.6cmをはかる。焼成は良好で堅緻である。天井部に墨書がある。部分的であるが，他例から「辰」と判読できる。29は土師器の坏である。底部は平底で，体部は外傾しながら直線的にたちあがる。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整。体部内外面および内底部は横ナデ調整である。底部端近くに墨書があり「辰人」と判読できる。30は須恵器の坏である。断面方形の高台を底部端近くに貼り付ける。体部は丸味をもってたちあがる。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整。板状圧痕が残る。体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部中央よりやや片寄って墨書がある。墨書は部分的であるが「大」と判読できる。31は須恵器の坏である。断面方形の小さい高台を底部端近くに貼り付ける。底部はヘラ削り調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部中央部に墨書があるが，部分的で判読できない。32は須恵器の皿であ

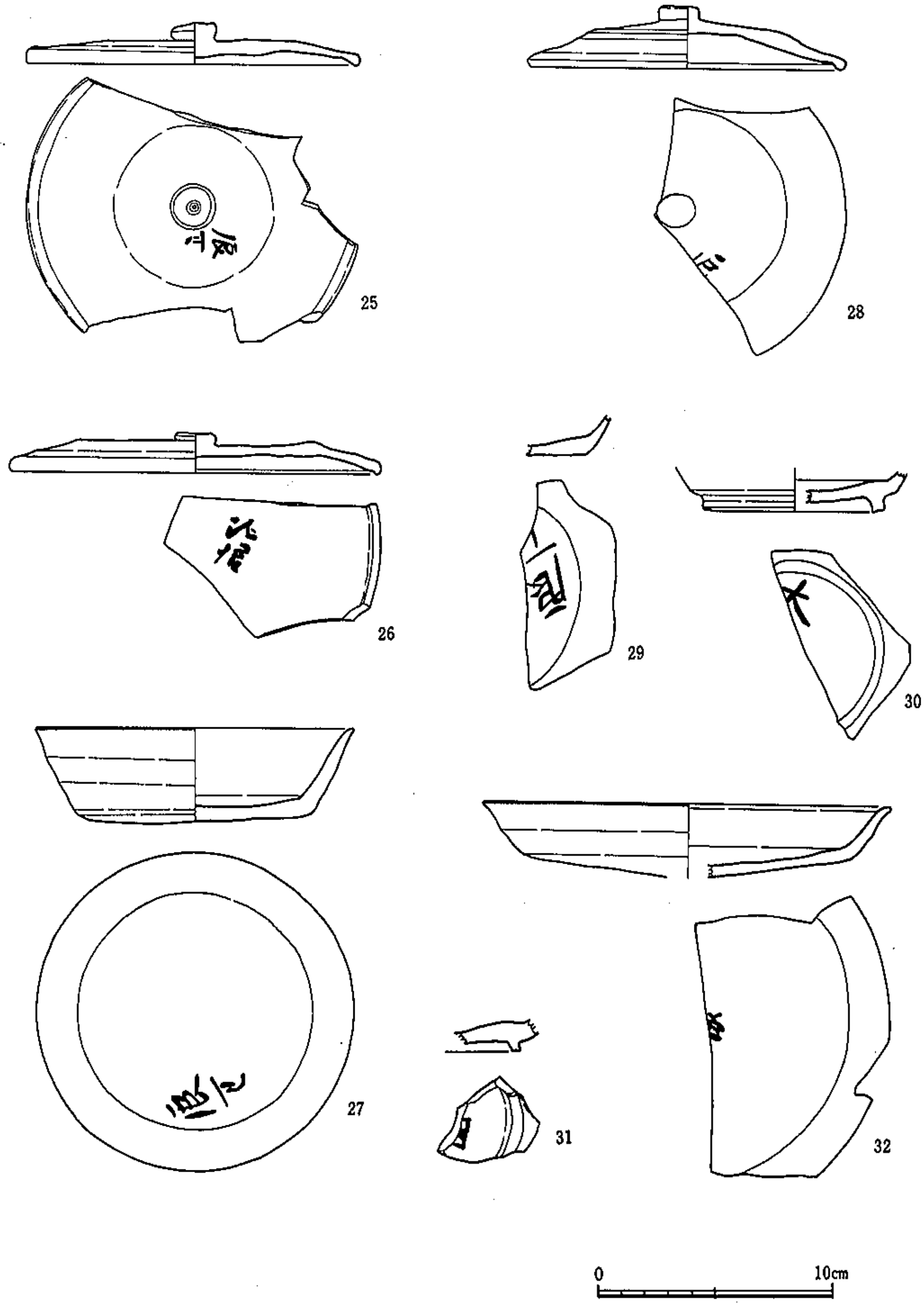


Fig. 136　墨書土器実測図Ⅳ

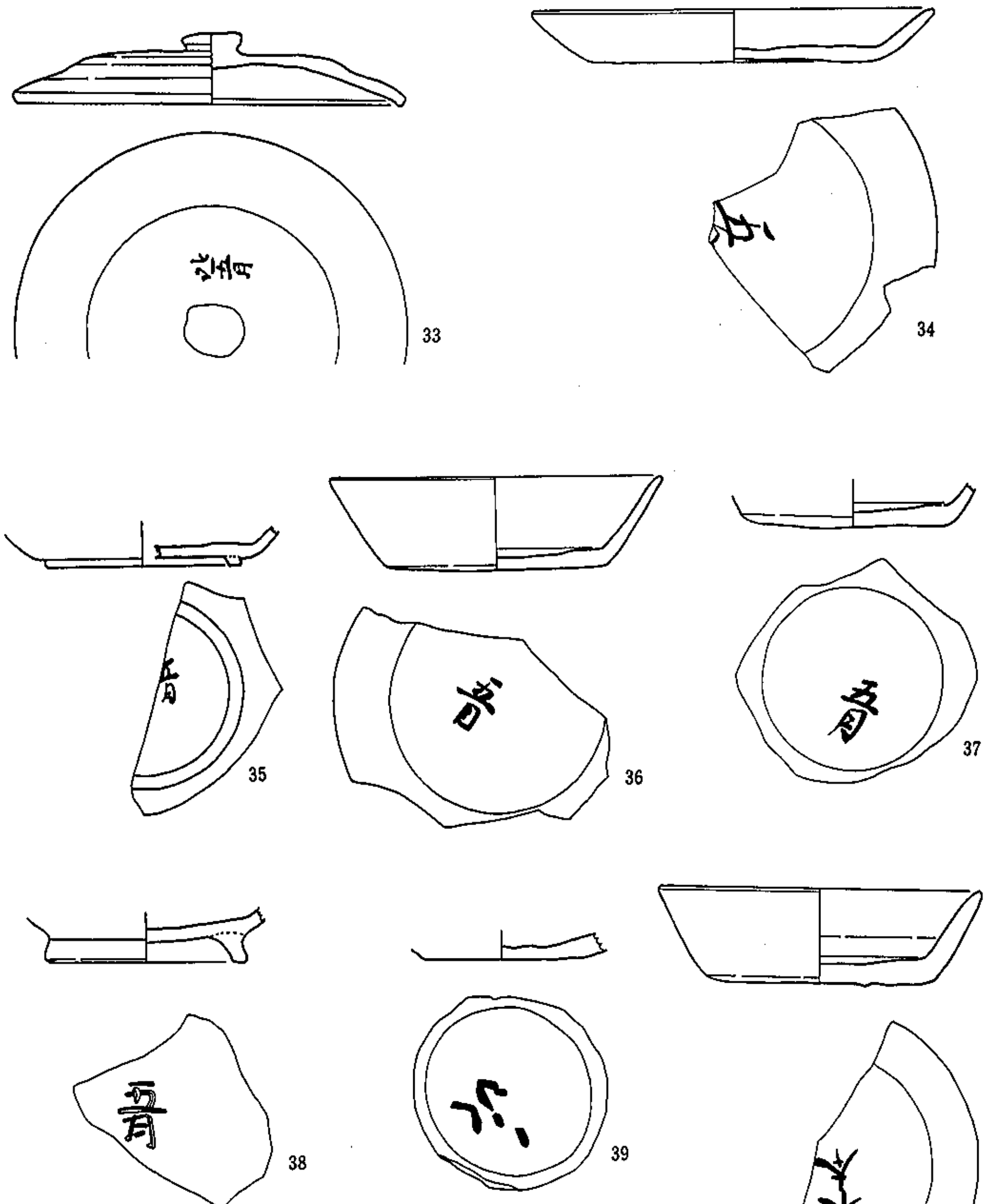


Fig. 137　墨書土器実測図Ⅴ

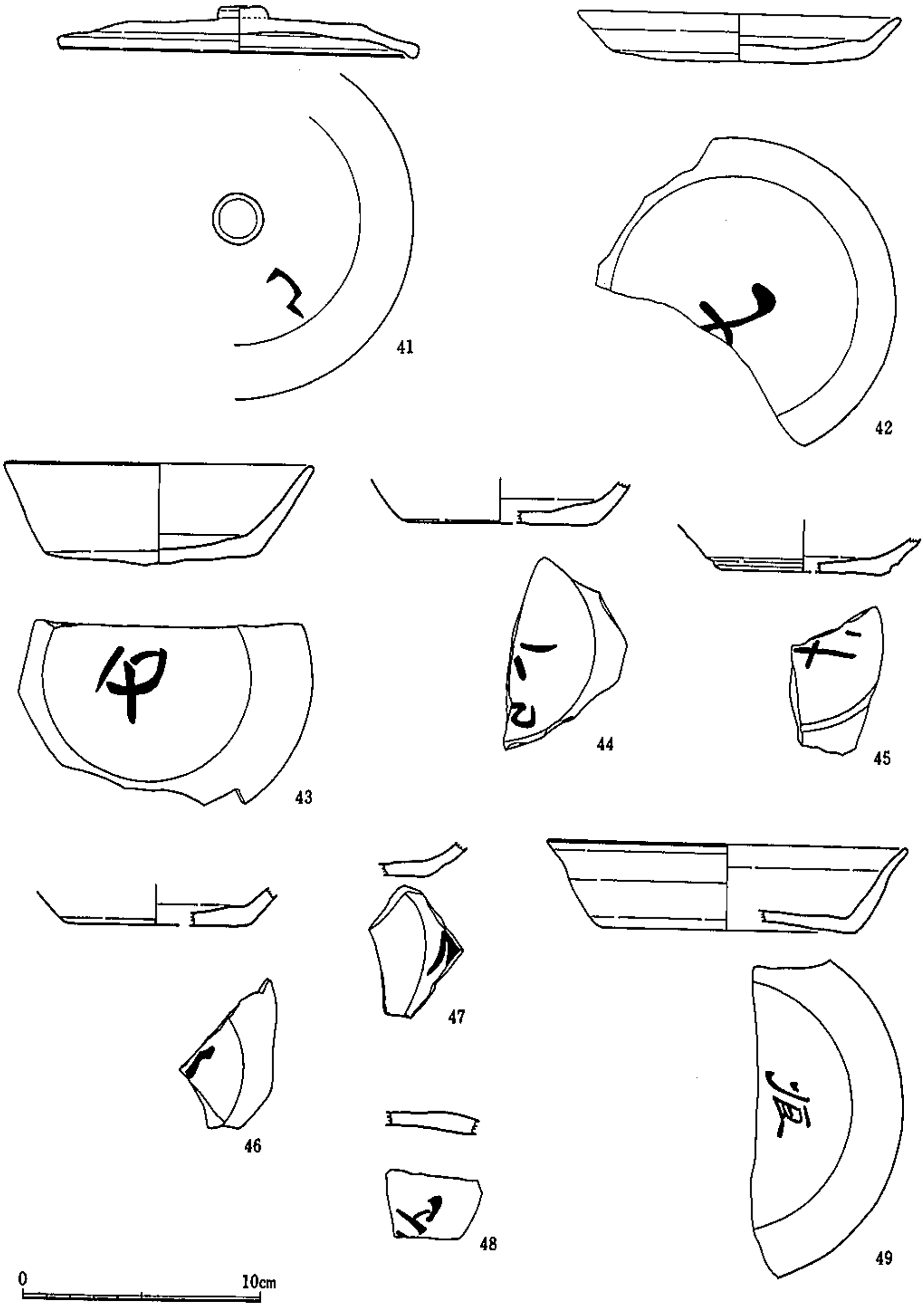


Fig. 138　墨書土器実測図Ⅵ

る。焼成不良で軟質である。底部は平底で，体部は外傾しながら短かくたちあがり，口縁部はわずかに外反し，端部は尖り気味におさめる。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。底部中央に墨書があるが，部分的で判読できない。復原口径17.1cm，器高3.1cmをはかる。33は須恵器の蓋で完形品である。口縁部の屈曲は短かく，端部は丸くおさめる。体部は丸味をもってたちあがる。体部と天井部の境は明瞭で段をもっている。天井部は平坦である。天井部の中央に扁平なボタン状のつまみをつける。つまみの上には板状圧痕がつく。天井部はヘラ切り後，ヘラ削り調整をあまり加えていない。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整で，天井部内面は多方向からのナデ調整である。天井部に墨書があり「□五月」と判読できる。口径15.5cm，器高2.9cmをはかる。34は須恵器の皿である。底部は平底で，体部は丸味をもってたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。焼成不良で軟質である。復原口径16.0cm，器高2.2cm。底部中央に墨書があり，「五□」と判読できるが，他例からみて「五月」であろう。35は須恵器の坏である。断面方形の高台を底部内側に貼り付ける。体部は丸味をもってたちあがる。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整。体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部中央よりやや片寄って墨書があり「五月」と判読できる。36は須恵器の坏である。底部は平底で，体部は外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部は尖り気味におさめる。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。復原口径13.2cm，器高3.7cmをはかる。底部中央に墨書があり「五月」と判読できる。37は須恵器の坏である。底部は平底で体部は外傾しながらたちあがる。底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。体部の内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からの丁寧なヘラ削り調整である。底部の中央よりやや片寄って墨書があり「五月」と判読できる。38は土師器の椀である。高く，端部が外側に張る高台を底部端な貼り付けている。体部は外傾しながらたちあがる。底部は丁寧なヘラ削り。体部および内底部の調整ははっきりとしない。内底部に焼成以前の刻字があり「五月」と判読できる。39は土師器の坏底部である。底部は平底でヘラ切りのままで調整は加えられていない。内底部は横方向のナデ調整である。底部端に近く墨書があるが判読できない。40は須恵器の坏である。底部は平底で体部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整，内底部は多方向からのナデ調整である。底部中央よりやや片寄って墨書があり「不本」あるいは「木本」と判読できる。口径12.8cm，器高3.8cmをはかる。41は須恵器の蓋である。口縁部の屈曲は短かく痕跡を残すのみである。内側に沈線一条をめぐらす。体部と天井部の境は明瞭で段がつく。天井部は平坦で，中央部に扁平な中凹みのつまみがつく。全体に扁平な器形をなす。

天井部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。天井部端に近く墨書がある。「几」を示し字か記号かは明らかでない。口径15.0cm，器高2.0cmをはかる。42は須恵器の皿である。底部は平底であるが，やや丸味もつ。体部は外傾しながら直線的に短かくたちあがる。口縁部はわずかに外反し，端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整を加えている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。復原口径13.2cm，器高2.0cmをはかる。底部の中央に墨書があるが，部分的であるために判読できない。43は須恵器の坏である。底部は平底で体部は外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。口径12.8cm，器高4.2cmをはかる。底部の中央に墨書がある。「中」とも判読できるが，正確には不明。44は須恵器の坏である。焼成不良で軟質である。底部は平底で体部は外傾しながら直線的にたちあがる。底部はヘラ削り調整，体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部中央に二文字からなる墨書があるが，部分的であり判読できない。45は土師器の坏である。底部は平底で，体部は外傾しながらたちあがる。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加える。体部内外面は横ナデ調整である。底部中央部に墨書があるが，部分的に判読できない。46は須恵器の坏である。底部は平底で，体部は外傾しながら直線的にたちあがる。底部はヘラ削り調整。他の部分の調整は不明。底部中央に墨書があるが，部分的で判読できない。47は須恵器の坏である。底部は平底で，体部は丸味をもってたちあがる。底部はヘラ削り調整，体部内外面共横ナデ調整。体部内面に墨書があるが，部分的で判読できない。48は須恵器の蓋の破片と考えられる。天井部は丁寧なヘラ削り調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。天井部に墨書があり「□人」と判読できる。他の例からすると「浄人」あるいは「辰人」となろうか。49は須恵器の坏である。底部は平底で体部は丸味をもってたちあがり，口縁部は外反する。口縁端部は尖り気味におさめる。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加えている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部に墨書があり「辰□」と判読できる。他例からすると「辰人」であろう。復原口径15.2cm，器高3.6cmをはかる。

2がＳＫ－15，8がＳＢ－11，9がＱ－23グリット，21がＮ－23グリット出土で他はすべてＳＤ－10出土である。

(4) 硯（Fig.139）

硯は先に紹介した資料を含め，円面硯が3点，風字硯が1点，転用硯が3点の計7点がある。ここでは円面硯2点と風字硯1点について説明する。

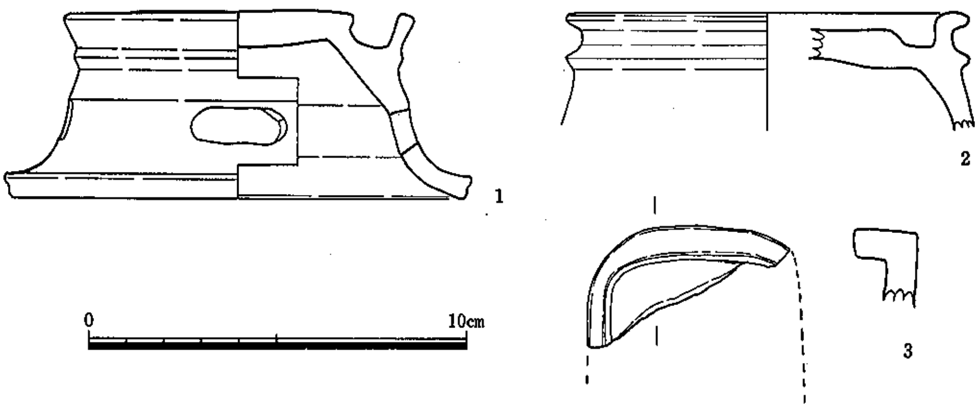


Fig. 139　硯実測図

1は円面硯である。小型品で約⅔が現存し，ほぼ全形を知ることができる。硯部と圏台を連続して 成形し，圏台は下端部で大きく開き，端部は嘴状におさめている。硯部下位に外堤を貼り付けることによって海部が形成されている。陸の内側にはタタキ目が残っていて，成形にあたって最初に円板状のものを作り，その上に粘土を重ね圏台を作り出す方法であることがわかる。圏台の中位には楕円形と円形の透しを交互に4個入れている。陸部上面には自然釉が認められ，使用された痕跡は認められない。圏台部および外堤の内外面は横ナデ調整である。圏台端部には重ね焼きの痕跡が残っている。外堤部径9.2cm，圏台端部径12.4cm，器高4.9cmをはかる。

2も円面硯である。小型品で硯部と圏台の一部を残す破片である。硯部下位において外堤をめぐらすことによって海部が形成されている。外堤の端部は大きく外反する。圏台部は下方に向って開き気味である。圏台部には上下に長い長方形の透しがめぐる。外堤の下方には断面三角形の突線一条がめぐる。外堤部，圏台部の内外面は横ナデ調整で，硯部内面は多方向からのナデ調整である。陸部は使用による磨滅が著しい。外堤部復原径は10.8cmである。1，2共に胎土には砂粒を多く含むが，精良である。焼成は良好で，色調は共に黒灰色である。

3は風字硯である。小型の単面風字硯で硯頭部の一部を残しているにすぎない。頭部，側部の縁部をはじめ全体をヘラ削りによって成形，調整している。復原頭部幅5.6cm，器高1.7cmである。胎土は精良，焼成はやや不良。色調は白灰色をなす。

(5)　石帯（Fig.140）

石帯は3点出土している。いずれも丸鞆である。1は幅4.1cm，高さ2.7cm，厚さ0.7cm。下位

に長方形のすかしがある。３ヶ所にかがり穴があり，かがり穴は貫通している。石材は淡い緑色をしたもので，しま状に白い鉱物がはいる。２は一部を破損する。幅4.1cm，高さ2.6cm，厚さ0.6cm。裏面の３ヶ所にかがり穴が存在する。石材は安山岩で黒色をなす。３は幅2.9cm，高さ2.0cm，厚さ0.7cm，裏面の３ヶ所にかがり穴がある。石材は安山岩で，黒色を呈する。１はＰ－27グリット，２はＲ－27グリット，３はＲ－24グリット出土である。

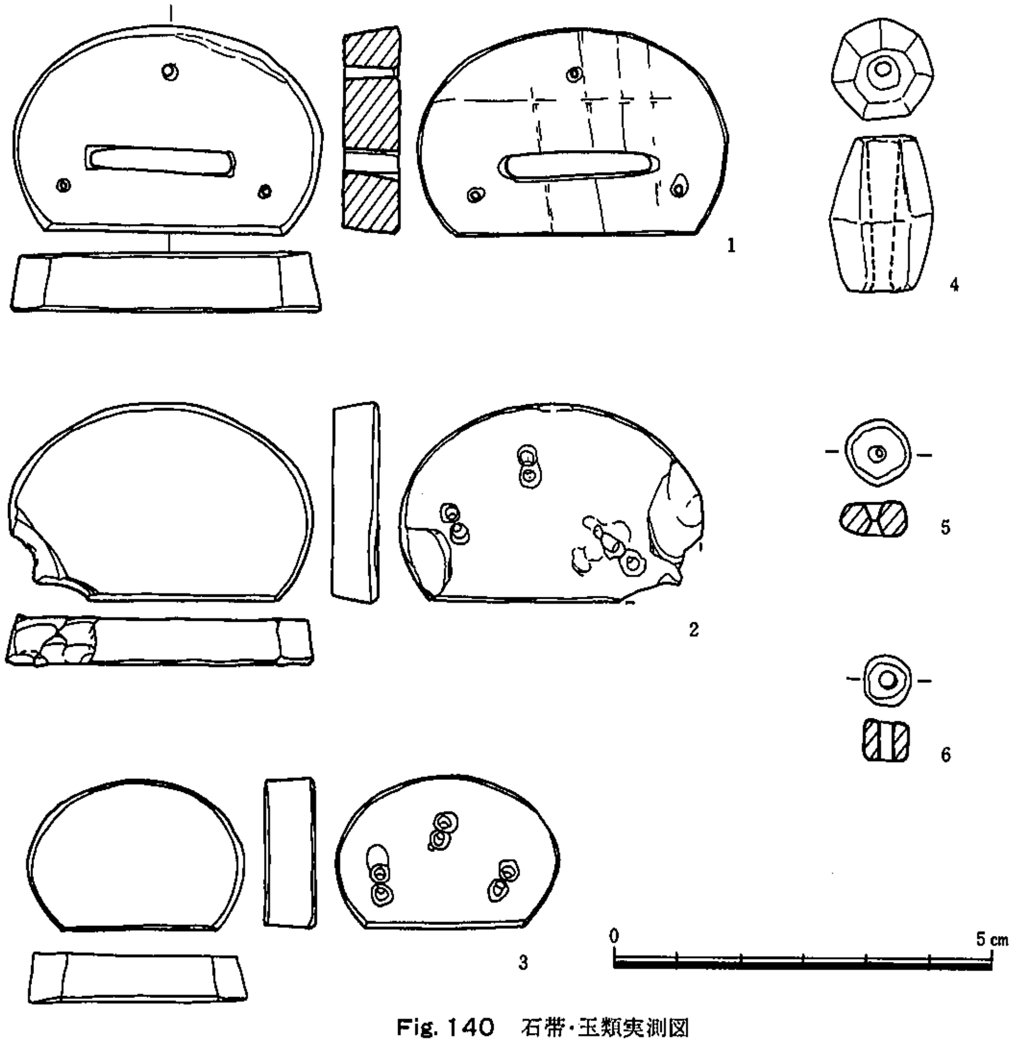


Fig. 140　石帯・玉類実測図

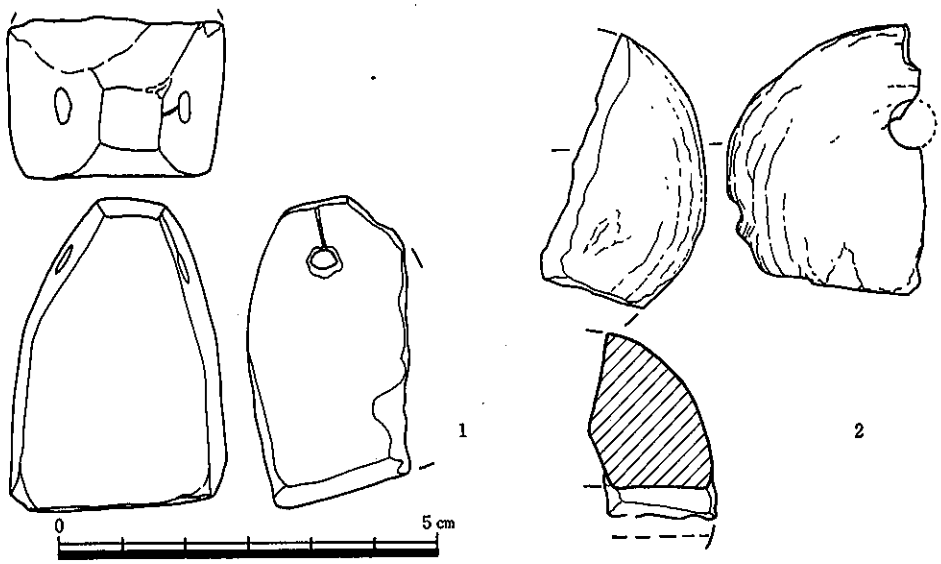


Fig. 141　権　実測図

(6) 権（Fig.141）

権衡具の権で，それと思われるもの２点が出土した。

１は砂岩製で一部欠損する。底辺は2.8cmの方形で上部に向って方錘形をなし，上端部は0.8cmの方形を呈する。上部に径0.4cmの孔を穿つ。孔から上端に向けて細い溝がある。重さ35.5gである。M－11グリット出土。

２は玉質の石材を用いたもので，本来は球形をなすものであろう。径0.7cmの孔があけられている。権とするよりも，玉の可能性もある。重さ22.3gである。J－16グリット出土。

(7) 祭祀具（Fig.140, 142, 143）

祭祀関連の遺物として，土製円盤，手づくね土器，土製丸玉，方形土製品がある。その他，祭祀具とは限定できないが，玉類，紡錘車についても本項で説明する。

手づくね土器（Fig.142－１～４）

いずれも手づくねのミニチュアー土器である。椀形をなす。１は比較的丁寧なつくりである。口径6.3cm，器高3.0cm。K－25グリット出土。２はつくりが粗雑でいびつである。口径3.5cm，器高3.2cm。K－25グリット出土。３は口縁部に指圧痕が並列している。口径4.5cm，器高2.8cm。M－13グリットに出土。４は口径4.8cm，器高2.5cm。Q－20グリット出土である。

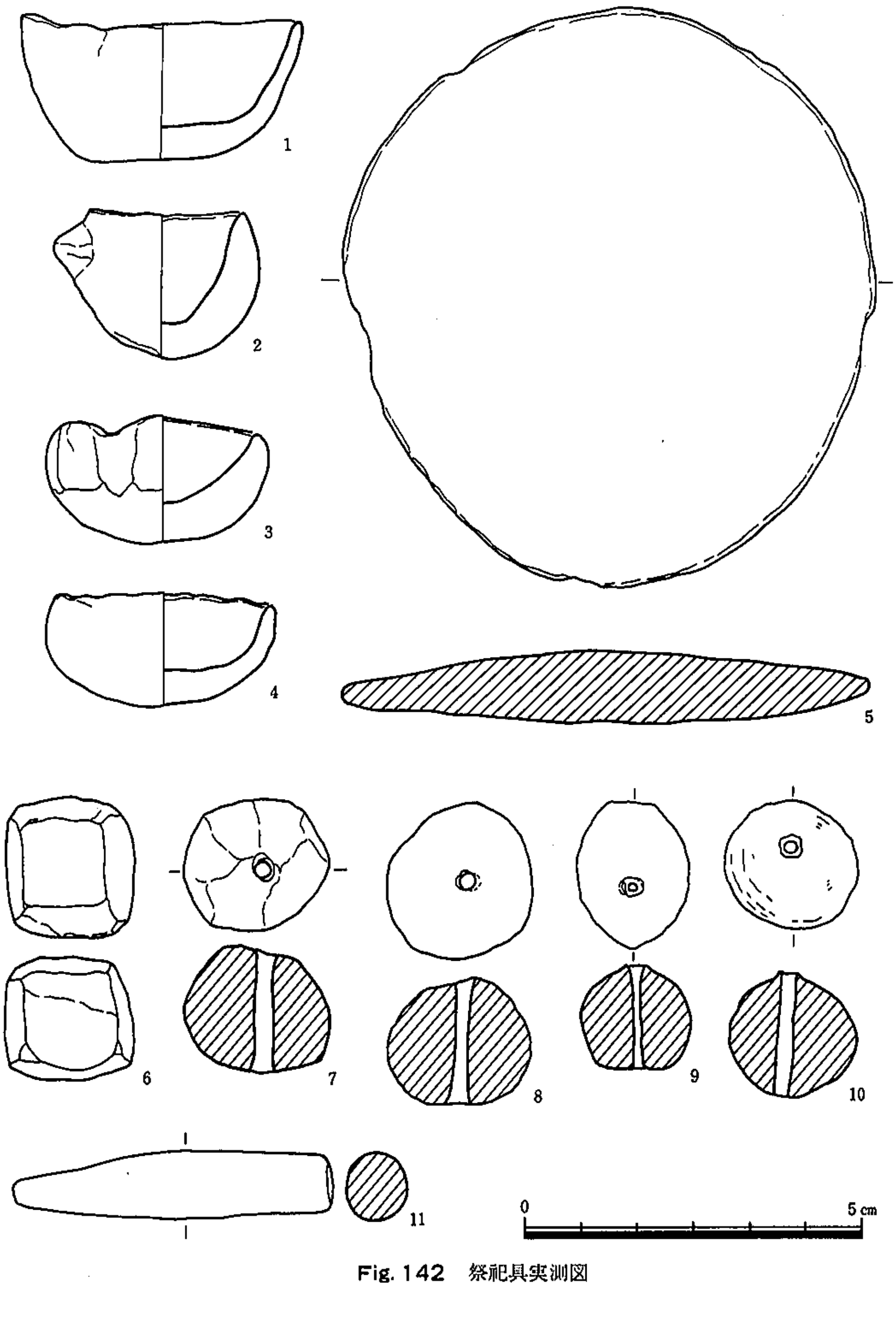


Fig. 142　祭祀具実測図

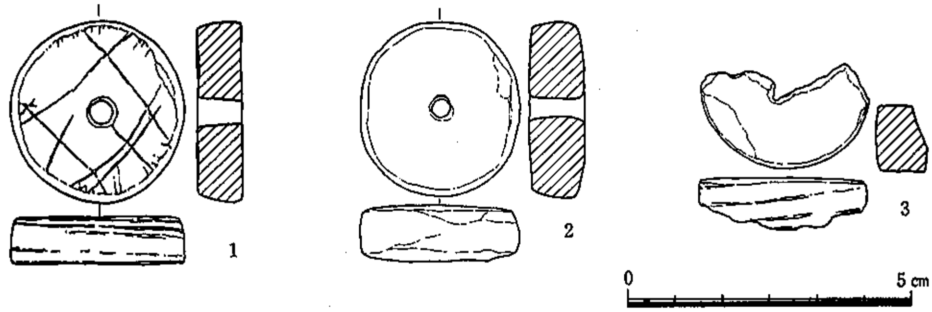


Fig. 143　紡錘車実測図

土製円盤（Fig.142－５）

長径12.8cm，短径11.8cmの楕円形をなす。厚さは端部で0.6cm，中央部で1.6cmで，断面は紡錘形をなす。器面は比較的丁寧に仕上げている。円盤中央部に小さな刺突が２個並列して存在する。意識的な否かは明確にしたがいが，意識的とすれば鏡の鈕を模したとみることができる。K－25グリット出土。

方形土製品（Fig.142－６）

1.8cm×1.5cm×1.7cmの立方体をなす土製品である。稜線は磨滅している。いずれにしても模造品であろうが，何であるかは不明，P－28グリット出土。

土製丸玉（Fig.142－７～10）

いずれも手づくねの土玉に孔を穿ったもので粗雑なつくりである。７は径2.0cm，I－14グリット出土。８は径2.3cm，T－23グリット出土。９はやや細長い。長径2.2cm，短径1.6cm。10は径1.9cm。R－22グリット出土である。

棒状土製品（Fig.142－11）

径0.8cmの断面円形をした棒状の土製品である。全体に磨滅していて，完形品であるかどうかは明らかにしたがい。片側は細くなり尖り気味である。長さ4.8cm。N－９グリット出土である。用途不明。

玉類（Fig.140－４～６）

切子玉，小玉がある。４は水晶製の切子玉である。穿孔は一方から行なわれる。長さ2.0cm，最大径1.4cm，R－27グリット出土である。５はひすい製の小玉である。径0.9cm，厚さ0.4cm，穿孔は両側からおこなわれる。M－16グリット出土である。６はガラス小玉で，色はコバルトブルーである。径0.6cm，厚さ0.5cmである。M－27グリット出土である。

紡錘車（Fig.143）

いずれも滑石製である。１は径4.6cm，厚さ1.2cm。孔径0.6～0.8cm。上面に細線で文様が刻

まれる。重さ51.8g。K−24グリット出土である。2は一部欠損する。径4.2×4.6cm。厚さ1.5cm。重さ58.7g。L−17グリット出土である。3は約半分を欠失する。径4.6cm，厚さ1.4cm。重さ20.2g＋α。O−16グリット出土である。

(8) 容器

包含層出土の容器類は先に述べた晩唐三彩，青磁器，白磁器，緑釉陶器は別にして，須恵器，土師器，黒色土器等の土器類と石鍋などの石製容器がある。包含層出土の土器類は莫な量にのぼり，未だ未整理分が多いが，以下，代表的なものについて紹介する。

土器（Fig.144～155）

須恵器，土師器，黒色土器があり，器種として蓋，坏，椀，皿，高坏，脚付椀，鉢，甜・廸壺，甕等多種多様である。時間的にもなかなりの長期わたっている。

蓋（Fig.144～146－29～33）

蓋は量的に多い。古墳時代の有蓋付坏の蓋を基本とするもの，口縁部にかえりをもつもの，口縁部が屈曲するもののⅢ類に大別でき，それぞれにおいて，製作技術，器形，口径の大小等によりさらに細分できるが，今回は基礎的に各個別の土器について説明を加えることとする。

1は体部と口縁部の境に幅広い凹線がめぐりそれとわかる。体部は丸味をもってたちあがり，天井部も丸味をもっている。天井中央部にはつまみの剥離痕がある。口縁部は外に開き気味であるが，口縁端部は丸くおさめる。天井部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面および天井部内面は横ナデ調整である。口径15.6cm。2は体部と口縁部の境が不明瞭で，口縁部はやや内傾する。口縁端部は肥厚気味に丸くおさめる。天井部と体部の境も不明瞭である。天井部は平坦である。天井部ヘラ削りの範囲は½で，体部から口縁部にかけての内外面と天井部は横ナデ調整。天井部にヘラ記号をもつ。胎土には多量の砂粒を含み良くない。口径12.8cm，器高4.2cm。3は焼成不良で軟質である。体部と口縁の境は不明瞭。口縁部はわずかに内湾し，口縁端部は丸くおさめる。天井部ヘラ削りの範囲は約½，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。天井部にヘラ記号をもつ。口径12.5cm，器高3.9cm。4は体部と口縁の境は不明瞭。口縁部は内湾気味に下り，口縁端部は丸くおさめる。天井部と体部の境には段を有する。天井部は丁寧なヘラ削り，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整，天井部内面は多方向からのナデ調整である。天井部にヘラ記号をもつ。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。口径12.4cm，器高3.4cmをはかる。5は体部と口縁部の境に稜線をもつ。口縁部は端部を丸くおさめる。体部と天井部の境には段をもつ。天井部はヘラ切り後，静止ヘラ削り調整を施す。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。胎土は精良で焼成良好。口径12.

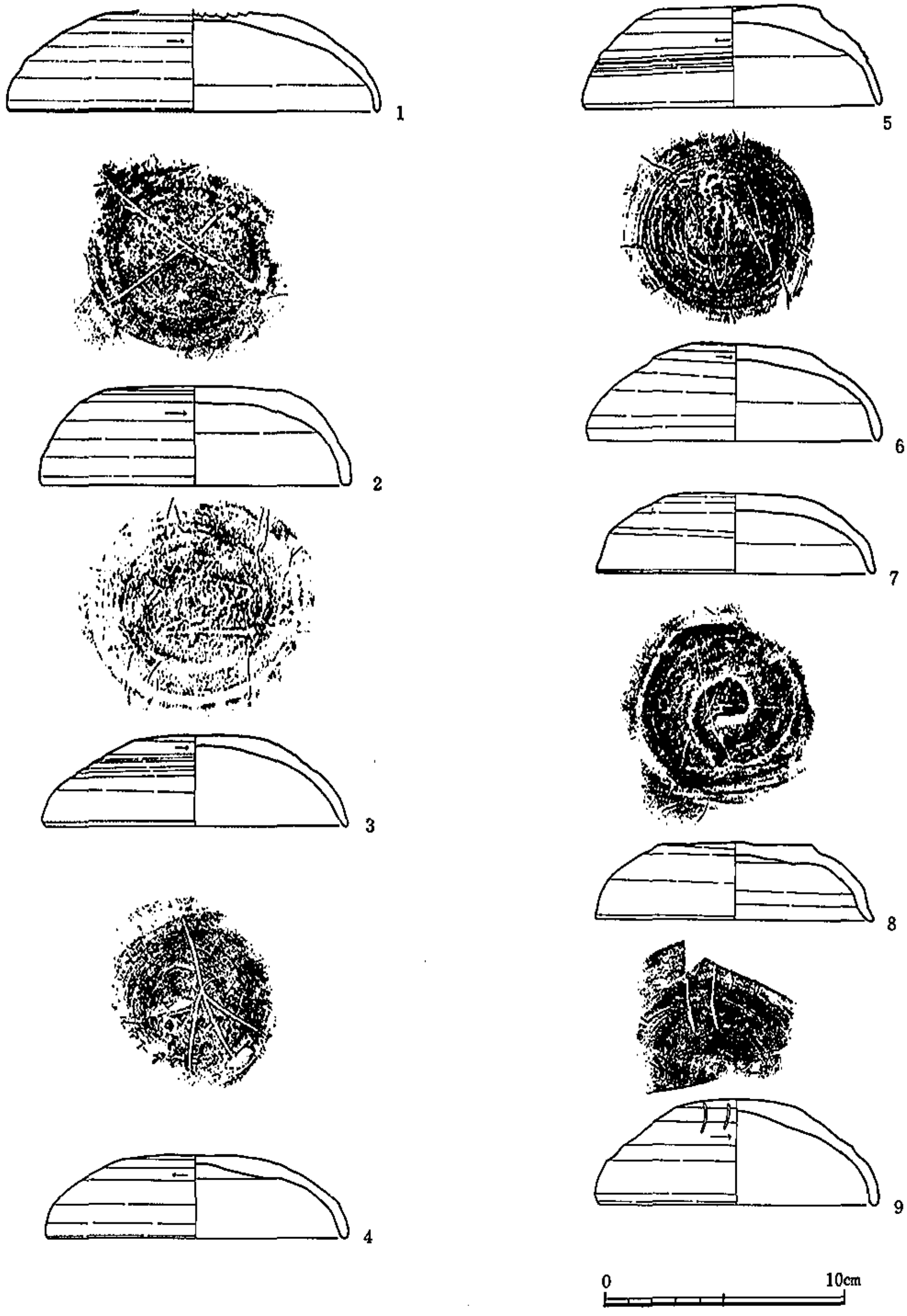


Fig. 144　包含層出土土器実測図Ⅰ

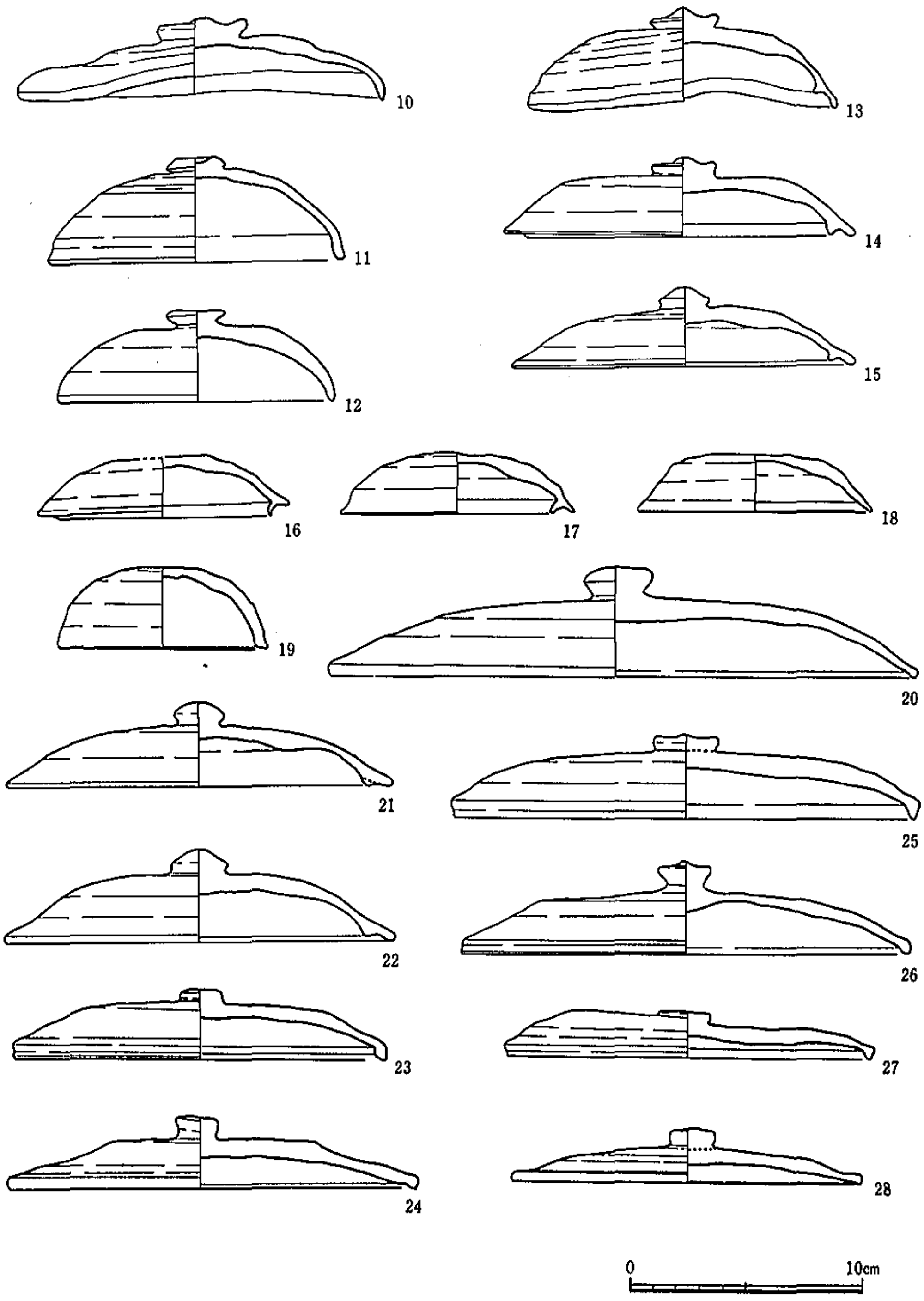


Fig. 145　包含層出土土器実測図II

2cm，器高4.3cmをはかる。６は体部と口縁部の境，天井部と体部の境共に不明瞭で全体に丸味をもつ。口縁部は内傾し，端部は丸くおさめている。天井部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整。胎土には砂粒を含むが精良，焼成良好で堅緻である。口径12.0cm，器高4.1cmをはかる。天井部にヘラ記号がある。７は６同様に各部の境は不明瞭で全体に丸味をもつ。天井部のヘラ削り調整は体部までおよび丁寧である。口縁部外面と内面は横ナデ調整である。口縁端部は丸くおさめる。天井部にヘラ記号をもつ。胎土には砂粒を含むが精良，焼成良好で堅緻である。８は体部と口縁部の境は稜線があり明らかである。口縁部は外反し，端部は丸くおさめる。体部と天井部の境には段がある。天井部はヘラ切り後，部分的にケズリ調整を加える。天井部は平坦である。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。口径11.6cm，器高3.3cmをはかる。天井部にヘラ記号がある。９は体部と口縁部の境は稜線があり明らかである。口縁部は内湾気味に下り，口縁端部は丸くおさめる。天井部と体部の境は丁寧なヘラ削り調整で不明瞭。全体に丸味をもつ器形である。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整。天井部から体部にかけてヘラ記号がある。復原口径11.6cm，器高4.5cmをはかる。11，12は天井部につまみを有する。11は体部の口縁部の境が不明瞭。口縁部はわずかに外反する。天井部のヘラ削りは丁寧で全体に丸味をおびている。つまみは中凹みで扁平である。胎土に砂粒を含んでいる。口径12.4cm，器高4.6cm。12はつまみは扁平である。体部，口縁部，天井部の境は不明瞭である。天井部のヘラ削りは体部までおよび丁寧である。全体に丸味をもつ。胎土には砂粒を含む良質で焼成は良好である。口径11.8cm，器高4.6cmである。

13～18　21，22は口縁部内側にかえりをもつタイプである。口径15～16cmで天井部につまみをもつものと，口径10.5cm前後でつまみをもたないタイプに細分できる。

13は焼けひずみが著しい。内側のかえりは低く内傾し，口縁端部の内側でおさまる。天井部中央部には扁平な擬宝珠形のつまみがつく。天井部はヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。天井部内面にはうるしの被膜が付着している。胎土に多量の砂粒を含む。焼成良好。口径13.1cm　器高4.3cmをはかる。14は焼成不良で軟質である。内面のかえりは口縁端部と同じ高さで，共に端部は丸くおさめている。天井部は平坦でヘラ削り調整。中央部に扁平な擬宝珠形のつまみをつける。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内側は多方向からのナデ調整である。胎土に多量の砂粒を含む。口径13.1cm，器高3.4cmをはかる。15は焼成不良で軟質である。内面のかえりは短く内傾し，断面三角形をなす。天井部はやや丸味をもつ。丁寧なヘラ削り調整で，中央部に擬宝珠形のつまみをつける。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。口径13.2cm，器高3.4cmをはかる。21，22はほぼ同様の器形を

なす。共に焼成不良で軟質である。内面のかえりは短く内傾し，断面三角形をなす。口縁端部は丸くおさめ，体部から天井部にかけては丸味をもつ。天井部には宝珠形のつまみをつける。器面調整は器面が荒れているために明らかでないが，他と同様と思われる。21は口径16.4cm，器高3.6cm。22は口径16.5cm，器高4.0cmをはかる。

16は内面のかえりは低く内傾するが，口縁端部よりやや出る。天井部は平坦である。天井部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整。体部から口縁にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。胎土に砂粒を多く含む。焼成良好，口径9.0cm，器高2.7cmをはかる。17は内面のかえりは低く内傾し，端部がわずかに外にかえり，わずかに口縁部より出る。天井部は平坦で粗いヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。18は内面のかえりは口縁端部より出ない。天井部は平坦で粗いヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整。17は口径8.2cm，器高2.6cm，18は口径10.0cm，器高2.5cmをはかる。

10，20，23～29，32，33は口縁部が屈曲し下方にのびるタイプである。口縁の形態，口径等から細分が可能である。

10は焼けひずみがある。口縁部の屈曲はゆるやかであるが，下方にのび，端部は尖り気味におさめる。天井部に扁平で大きいつまみをつける。天井部は丁寧なヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。口径15.4cm，器高3.5cm，20は盤の蓋である。口縁部の屈曲は痕跡を残す程度である。天井部にボタン状のつまみをつける。全体に扁平である。天井部から体部の一部はヘラ削り調整後，横方向のヘラ研磨，体部から口縁および内面は横ナデ後，横方向のヘラ研磨調整。土師器である。口径25.1cm，器高4.7cm。23は口縁部が下方にのび端部は丸くおさめる。口縁部外面に沈線一条をめぐらす。天井部は平坦で，中央部に扁平なつまみをつける。天井部はヘラ削りで，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整。口径14.8cm，器高3.0cm。24は口縁部はわずかに下方にのび丸くおさめる。天井部は平坦で体部との境に段がつく。ボタン状のつまみをつける。天井部はヘラ切り後，ヘラ削り調整。板状圧痕がある。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は横ナデ調整。口径17.6cm，器高3.2cm。25は焼成不良で軟質である。口縁部は下方にのび端部は丸くおさめる。天井部に扁平なつまみをつける。天井部は丁寧なヘラ削り調整である。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。口径19.6cm，器高3.6cm。26は口縁部は下方にのびる。外面には凹線一条がめぐる。天井部はやや丸味をもち，擬宝珠形のつまみをつける。天井部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。天井部にヘラ記号をもつ。口径18.9cm，器高4.0cm。27は口縁部はわずかに下方にのび断面三角形をなす。外面凹線一条をめぐらす。天井部に扁平なつまみをつける。全体に扁平である。口径15.4cm，器高2

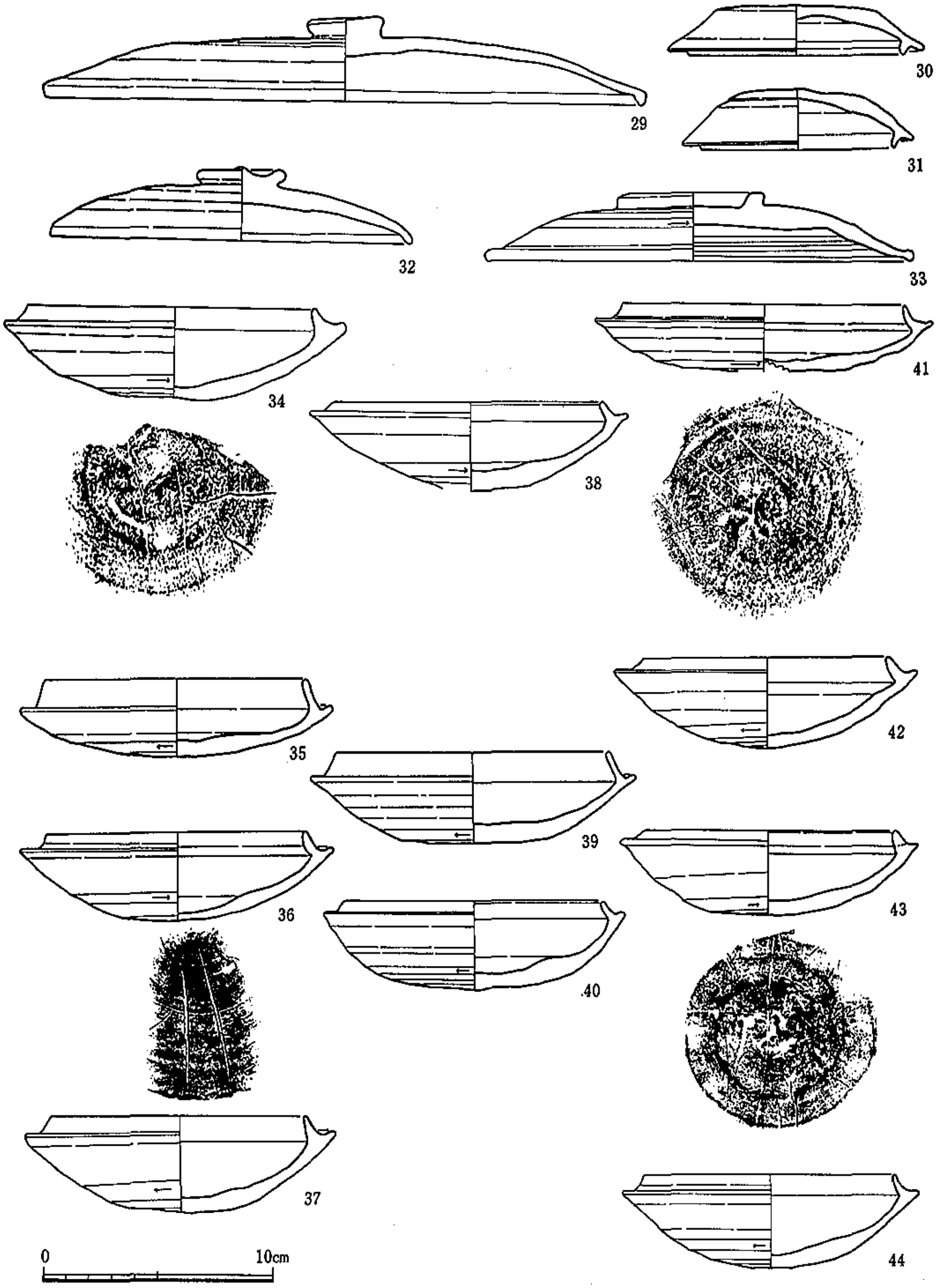


Fig. 146　包含層出土土器実測図Ⅲ

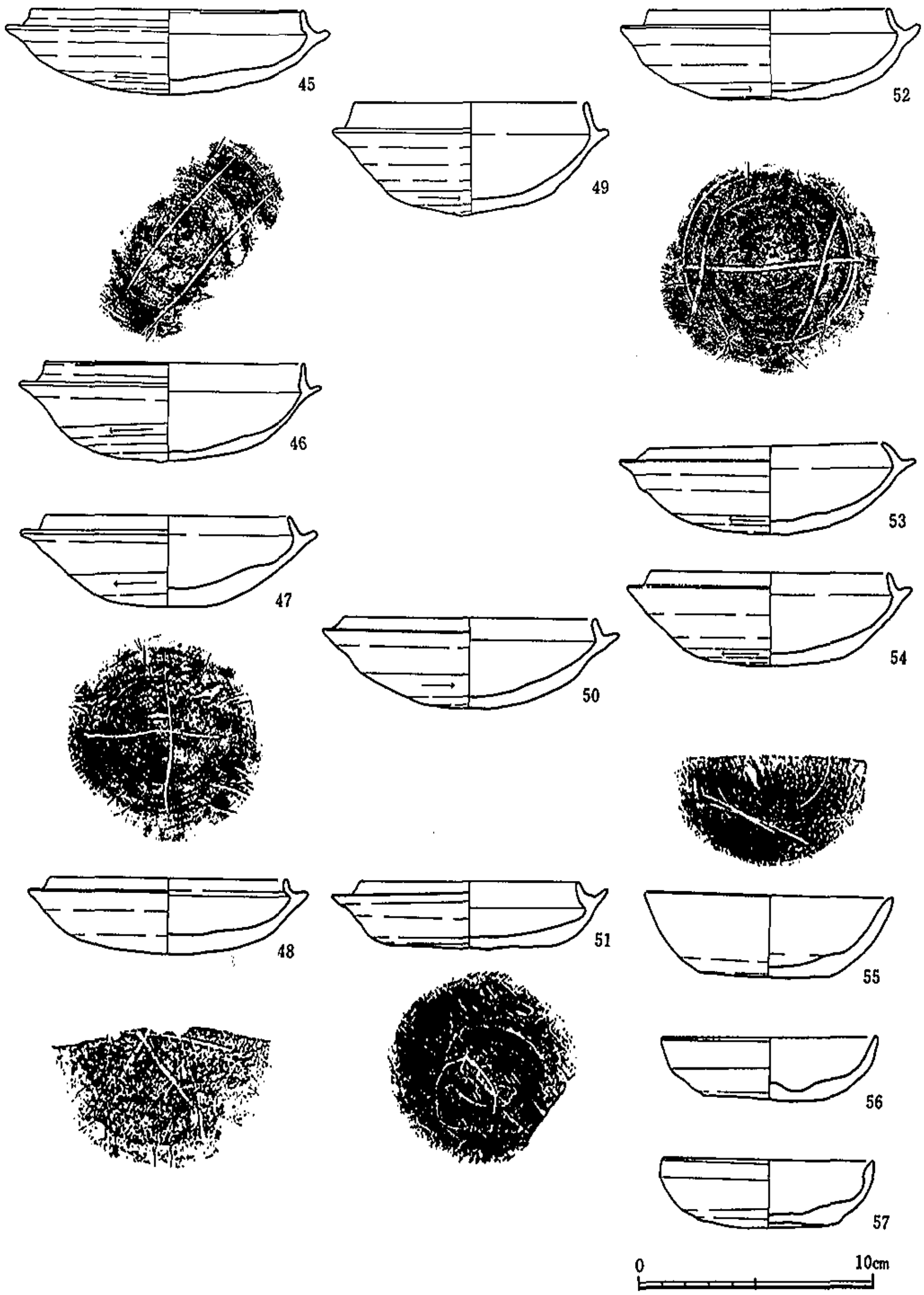


Fig. 147　包含層出土土器実測図Ⅳ

1cm。28は口縁部は下方にのびず内面に凹線をめぐらす。天井部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整。体部から口縁部にかけては横ナデ調整。内底部には墨痕がみられ，磨滅している。転用硯である。29は口縁部が下方にのび，端部は丸くおさめる。全体に扁平である。天井部に扁平なボタン状のつまみをつける。天井部は丁寧なヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整である。天井部内面は多方向からのナデ調整である。口径25.6cm，器高3.7cm，32は口縁部はゆるやかに下方にのび，端部は丸くおさめる。天井部に扁平な擬宝珠形のつまみをつける。口径15.6cm，器高3.3cm。33は口縁部はわずかに下方にのびる。天井部は丁寧なヘラ削り調整である。環状つまみをつける。体部から口縁部にかけては横ナデ調整。天井部内面は多方向からのナデ調整である。口径13.3cm，器高3.0cm。30，31は内面にかえりをもつ。かえりは低く内傾するが，口縁端よりわずかに出る。天井部は平坦で粗いヘラ削り。30は口径9.3cm。器高2.2cm。31は口径8.3cm，器高2.6cmをはかる。

坏（Fig.146－34～44，Fig.147，148，149－72～81）

坏は蓋受けのたちあがりをもつもの，底部平底のもの，高台をもつものに大別でき，それぞれはさらに器形，口径，製作技術の違いによって細分される。

34～54は蓋受けのたちあがりをもつ。34は蓋受けのたちあがりは低く内傾する。底部はヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。底部にヘラ記号がある。口径12.5cm，器高4.0cm。35は蓋受けのたちあがりは高く，わずかに内傾する。端部は丸くおさめる。体部は浅い。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。復原口径11.3cm，器高3.4cm。36は蓋受けのたちあがりはやや高いが内傾する。端部は丸くおさめる。底部は丁寧なヘラ削りで，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。体部から底部にかけてヘラ記号がある。口径11.2cm，器高3.8cm。37は赤焼きの須恵器である。蓋受けのたちあがりはやや高いが内傾する。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。口径11.0cm，器高4.2cm。底部から体部にかけてヘラ記号がある。38は蓋受けのたちあがりは低く，内傾する。底部は丁寧なヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。口径11.6cm，器高3.8cm。39は蓋受けのたちあがりは高いが内傾する。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけては横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。内側にヘラ記号がある。胎土に多量の砂粒を含む。口径11.7cm，器高3.9cm。40は蓋受けのたちあがりは低く内傾する。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。口径11.1cm，器高3.8cm。41は蓋受けのたちあがりは低く内傾する。端部は尖り気味におさめる。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面と内底部は横ナデ調整。底部にヘラ記号がある。口径12.2cm，器高2.9cm。42は蓋受けのたちあがり

は低く内傾する。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。口径10.7cm，器高39.cm。43は蓋受けのたちあがりは低く内傾する。端部は丸くおさめる。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけては横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部から体部にかけてヘラ記号がある。口径10.8cm，器高3.7cm。44は蓋受けのたちあがりは低く内傾する。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。口径10.9cm，器高4.1cm。45は蓋受けのたちあがりはやや高いが，内傾する。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部にヘラ記号がある。口径11.5cm，器高3.6cm。46は蓋受けのたちあがりは直立し高い。端部は丸くおさめる。。底部は丁寧なヘラ削り調整である。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。内底部にヘラ記号がある。口径10.9cm，器高4.2cm。47は蓋受けのたちあがりはやや高いが，内傾する。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。内底部にヘラ記号がある。口径10.4cm，器高は3.8cm。48は蓋受けのたちあがりは低く内傾する。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。胎土に多量の砂粒を含む。焼成良好。内底部にヘラ記号がある。口径9.7cm，器高3.2cm。49は蓋受けのたちあがりは直立し高い。端部は丸くおさめる。坏部は深い。底部は粗いヘラ削り。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。胎土に多量の砂粒を含む。口径9.8cm，器高4.8cm。50は焼成不良で軟質である。蓋受けのたちあがりは低く内傾する。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。底部から体部にかけてヘラ記号がある。口径10.7cm，器高3.8cm。51は蓋受けのたちあがりは低く内傾する。底部は平坦で，ヘラ切り後，粗いヘラ削りを加え，さらにナデが加えられている。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。口径9.2cm，器高2.9cmである。内底部にヘラ記号がある。52は蓋受けのたちあがりはやや高いが内傾する。底部は丁寧なヘラ削り。体部から口縁部にかけては横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。内底部にヘラ記号がある。口径10.2cm，器高3.8cm。53は蓋受けのたちあがりは低く内傾する。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。内底部にヘラ記号がある。口径9.9cm，器高3.8cm。54は蓋受けのたちあがりは低く内傾する。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。底部にヘラ記号をもつ。口径9.9cm，器高3.9cm。

55～57は蓋が身に転換したものである。底部はヘラ削り調整で，平坦になる。体部は外傾しながらたちあがり口縁端部は丸くおさめる。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整。55は口径10.5cm，器高3.5cm。56は口径9.1cm，器高2.7cm。57

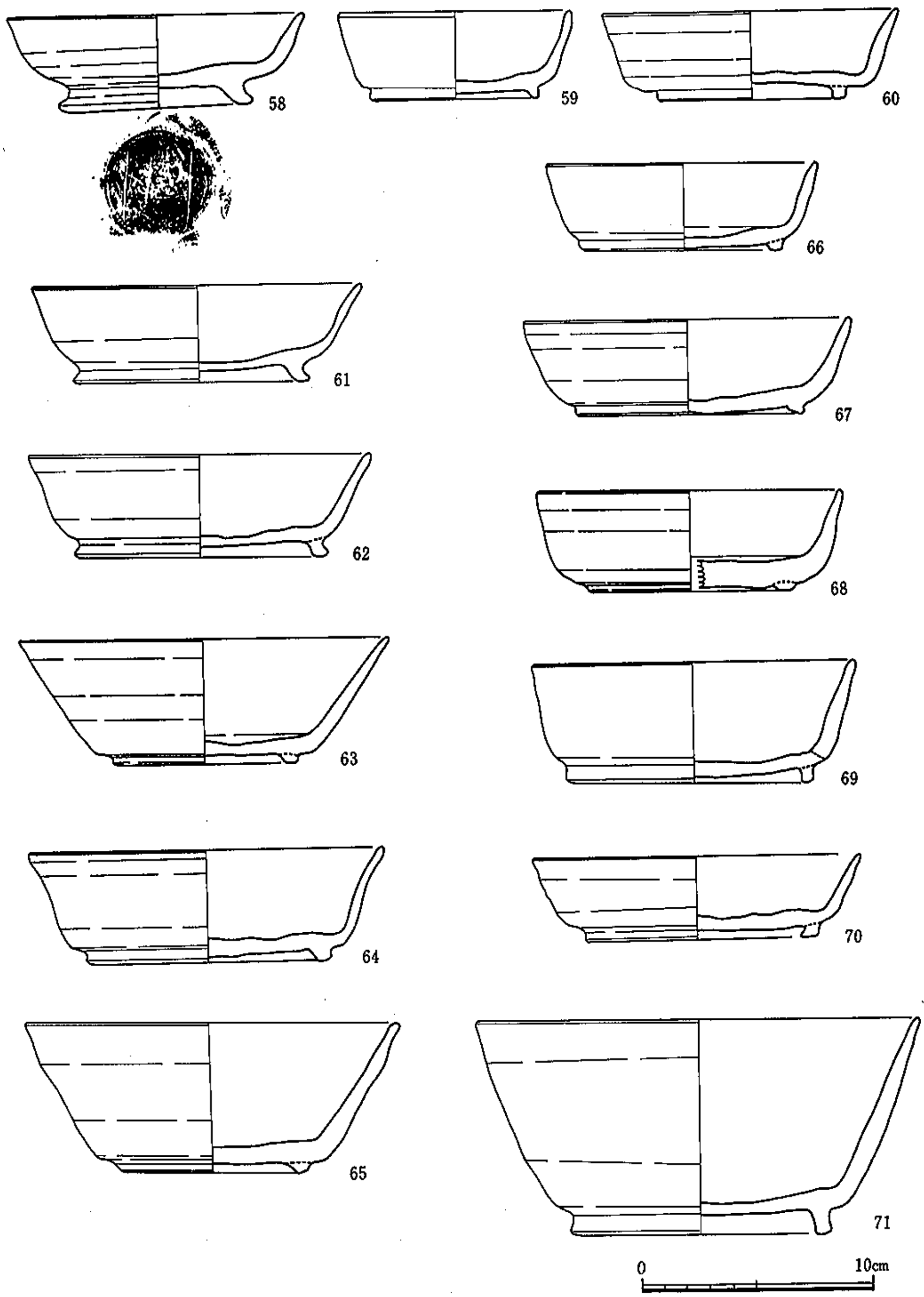


Fig. 148　包含層出土土器実測図Ⅴ

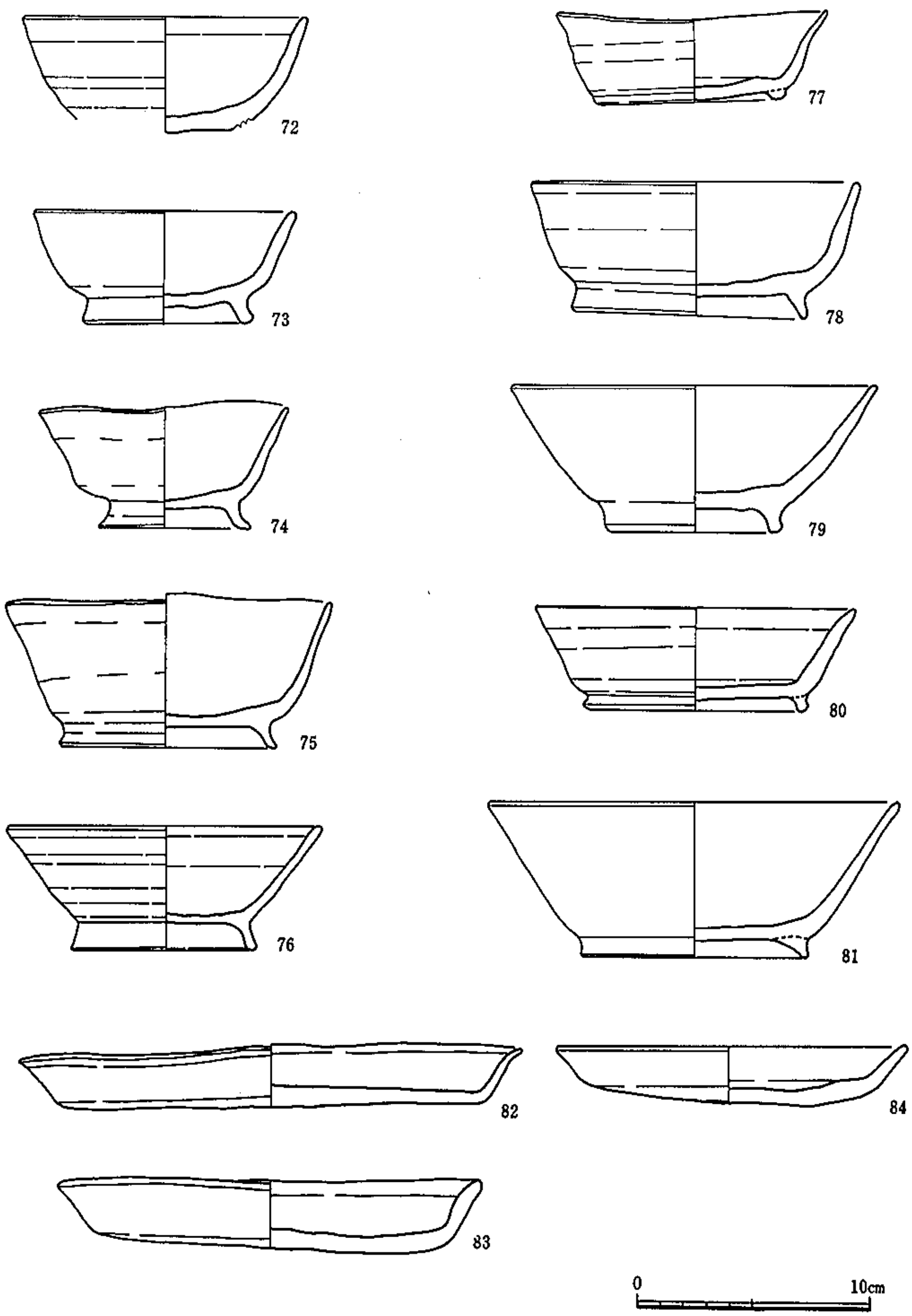


Fig. 149　包含層出土土器実測図Ⅵ

は口径8.9cm，器高2.9cm。

椀（Fig.148，149）

58～81の24点を図示した。63，71，76が土師器で他は須恵器である。器形，口径，製作技術等から細分が可能であるが一括して説明する。

器形，製作技術はいずれも高台を貼り付け，体部は外傾しながらたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。

58は高台端が外側に張る。内底部にヘラ記号をもつ。口径13.5cm，器高4.1cm。59は断面逆台形の高台を底部端近くに貼りつける。口縁部外面にヘラ記号をもつ。口径9.9cm，器高3.8cm。60は断面方形の高台をもつ底部内側に貼り付ける。口径12.4cm，器高3.8cm。61の高台は底部端近くに貼り付けられ，端部が外に張る。口径14.0cm，器高4.3cm。焼成不良で軟質である。62は61とほぼ同様の特徴をもつ。口径15.6cm，器高5.4cm。63は断面逆台形の低い高台を底部内側に張り付ける。器面調整は不明。復原口径15.6cm，器高5.4cm。64は断面逆台形の高台を底部内側に貼り付ける。口縁部がわずかに外反する。口径14.8cm，器高4.8cm。65は断面逆台形の低い高台を底部端に近く貼り付ける。口縁部がわずかに外反する。底部にススが付着する。口径15.8cm，器高6.4cm。焼成不良で軟質である。66は断面逆台形の高台を底部端に貼り付ける。焼成不良で軟質である。口径11.4cm，器高3.8cm。67は断面方形の高台を底部端に貼り付ける。口径13.8cm，器高4.1cm。68は断面逆台形の高台を底部端に貼り付ける。底部にヘラ記号をもつ。口径12.8cm，器高4.3cm。69は断面長方形のやや高い高台を底部端近くに貼り付ける。口径13.6cm，器高5.2cm。70は断面方形の高台を底部端近くに貼り付ける。口径13.8cm，器高3.6cm。71は断面長方形の高い高台を底部端近くに貼り付ける。化粧土をかけ全体に丁寧な横方向のナデ調整である。口径18.7cm，器高9.2cm。72は高台が剥離する。剥離部には粘土の接着を良くするためカキ目が入れられている。内底部に有機質の物が付着する。復原口径12.1cm。73は高くて外側に張る高台を底部端に貼り付ける。口径10.7cm，器高5.2cm。74は高く端部が外に張る高台を底部端に貼りつける。口径13.6cm，器高6.5cm。75は高く外方に張る高台を底部端に貼り付ける。内面はヘラ磨きである。77は断面逆台形の高台を底部端に貼り付ける。口縁部が外反する。口径11.5cm，器高4.0cm。78は高い外に張る高台を底部端に貼りつける。口径13.7cm，器高5.8cm。79は高い高台を底部端に貼り付ける。口径15.3cm，器高6.3cm。80は断面方形の高台を底部端に貼り付ける。口径13.3cm，器高4.4cm。81は断面三角形の高台を底部端に貼りつける。口径17.2cm，器高6.6cm。

皿（Fig.149－82～84）

82は底部ヘラ切り後，ヘラ削り調整。体部は外傾しながらたちあがり，口縁部はわずかに外反する。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整であ

る。口径21.2cm，器高3.0cm。83は短くたちあがる体部は口縁部でわずかに外反する。調整等は82と同じである。口径17.6cm。器高3.3cm。84は底部はやや丸味をもつ。短かくたちあがる体部は口縁部でわずかに外反し，端部は丸くおさめる。調整等は他と同じである。口径15.0cm，器高2.5cm。99は底部平底で，ヘラ切り後，静止ヘラ削り調整を加える。体部は外傾しながら直線的に短かくたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。内底部は多方向からのナデ調整。口径25.2cm，器高4.8cm。

高坏（Fig.150－85～88，90，91）

6点を図示した。器形，製作技術から，坏部が蓋受けのたちあがりをもつもの(85，86)，蓋受けのたちあがりをもたないもの（90，91)，口縁部が屈曲し，脚の短かいもの（87，88）に大別できる。

85は口縁部のたちあがりはやや高いが，内傾する。口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。脚部を失う。口径13.5cm。86は蓋受けのたちあがりは低く内傾する。受部に蓋の口縁部が癒着している。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけては横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。脚部はやや長く，脚端部が大きく開き，嘴状をなす。脚筒部は上下二段に長方形のすかしを二ケ所に入れている。脚筒部にはしぼりの痕跡があり，内外面共横ナデ調整である。脚部にヘラ記号をもつ。全体に自然釉がかかる。胎土には多量の砂粒を含む。口径13.4cm，器高15.1cm。90は坏部は底部がやや丸味をもち，体部は外傾しながら直線的にたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。体部に沈線二条をめぐらす。底部はカキ目調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。脚部は脚端部向かってラッパ状に開き，嘴状を呈する。脚中位に沈線二条をめぐらし，上部はカキ目調整。下半の内外面は横ナデ調整である。しぼりの痕跡が残る。口径12.5cm，器高13.2cmである。91は90とほぼ同形である。坏部は体部に一条の沈線をめぐらす。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からナデ調整である。脚部は中位に沈線二条をめぐらす。しぼりの痕跡が明瞭に残る。内外面共横ナデ調整である。脚内側にヘラ記号がある。口径11.6cm，器高12.9cm。87，88はほぼ同形をしている。両者共焼けひずみがある。坏部は口縁部が短かく屈曲し，端部は平坦に仕上げる。坏部は全体に扁平である。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。脚部は太く短かい。脚端部でひろがり，嘴状をなす。内外面共横ナデ調整である。87は口径20.0cm，器高7.6cm。88は口径20.6cm，器高7.0cm。

脚付椀（Fig.150－89，92）

ワイングラスを大きくしたような形状をなし，2個がある。89の椀部の底部は丸味をもつ。体部は直線的にのび，口縁端部は丸くおさめる。底部はカキ目調整。体部から口縁部にかけての

内外面は横ナデ調整で，外面の口縁と体部下半部にその上からカキ目調整を加える。内底部は多方向からのナデ調整。脚部は短かい。脚筒部は中位で段を形成し，平坦面をつりだし，さらに下方にひろがる。脚端部は丸くおさめる。内外面共横ナデ調整である。口径9.6cm，器高13.2cm。92は89とほぼ同様の器形を有するがやや大型である。椀部は底部は丸くなり，体部は直線的にのび口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部下と体部下半の２ケ所に各々三条の沈線をめぐらす。底部は丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。脚部は短かく脚筒部から大きくふくらみながら下方に下り，端部は尖り気味におさめる。脚端部は近くに突線一条をめぐらしている。脚部は内外面共に横ナデ調整である。口径13.3cm，器高16.0cm。

𤭯（Fig.151－93～95）

３個体を図示した。いずれも球形の体部に長く，大きくラッパ状にひらく口頸部をつけるものである。93は全形を知ることができる。底部から体部下半は丁寧なヘラ削り調整。体部中位に凹線二条をめぐらし，その間に櫛歯刺突文様を入れる。孔は径1.4cm。頸部はしぼまる。頸部中位に凹線二条をめぐらす。頸部と口縁部の境には段を形成し，すぐ上に凹線一条をめぐらしている。口縁部はふくらみながらたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。口頸部は横ナデ調整で，頸部にしぼりの痕跡がある。体部の中には孔の器壁がそのまま残っている。底部から体部にかけてヘラ記号がある。94は93とほぼ同様であるが，頸部上半部から欠失する。底部から体部下半にかけてはヘラ削り調整。体部中位に凹線二条をめぐらし，その間は櫛歯の刺突文を配する。底部にヘラ記号をもつ。ＳＫ－02出土である。95は口縁部を欠失する。体部中位に凹線二条をめぐらし，その下はヘラ削り調整。上部は横ナデ調整。底部にヘラ記号をもつ。

鉢（Fig.151－98，Fig.153－116～118）

98は土師器である。底部は平底で，体部は外傾ながら直線的にのび，口縁端部は外側にやや肥厚させ丸くおさめる。底部はヘラ切り後，粗いヘラ削り調整を加える。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。体部下半に刷毛状の工具で「東」の文字が書かれている。口径23.7cm，器高12.4cm。116は須恵器。体部は外傾しながらたちあがり，口縁部近くでゆるやかに屈曲し，口縁部は内傾し，端部は平坦におさめる。体部はヘラ削り調整後，横ナデ調整。口縁部および内面は横ナデ調整である。口径16.9cm。117は体部は底部から外傾しながらまるみをもってたちあがる。口縁部で大きく内湾し，口縁端部は平坦におさめる。外面に自然釉がかかる。内外面共に横ナデ調整である。口径13.1cm。118は須恵器であるが，焼成不良で軟質である。底部は平底で，体部は外傾しながら直線的にたちあがり口縁端部でやや外に張る。口縁端部は平坦にする。底部はヘラ切り後，丁寧なヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。口径25.2cm，器高13.5cm。

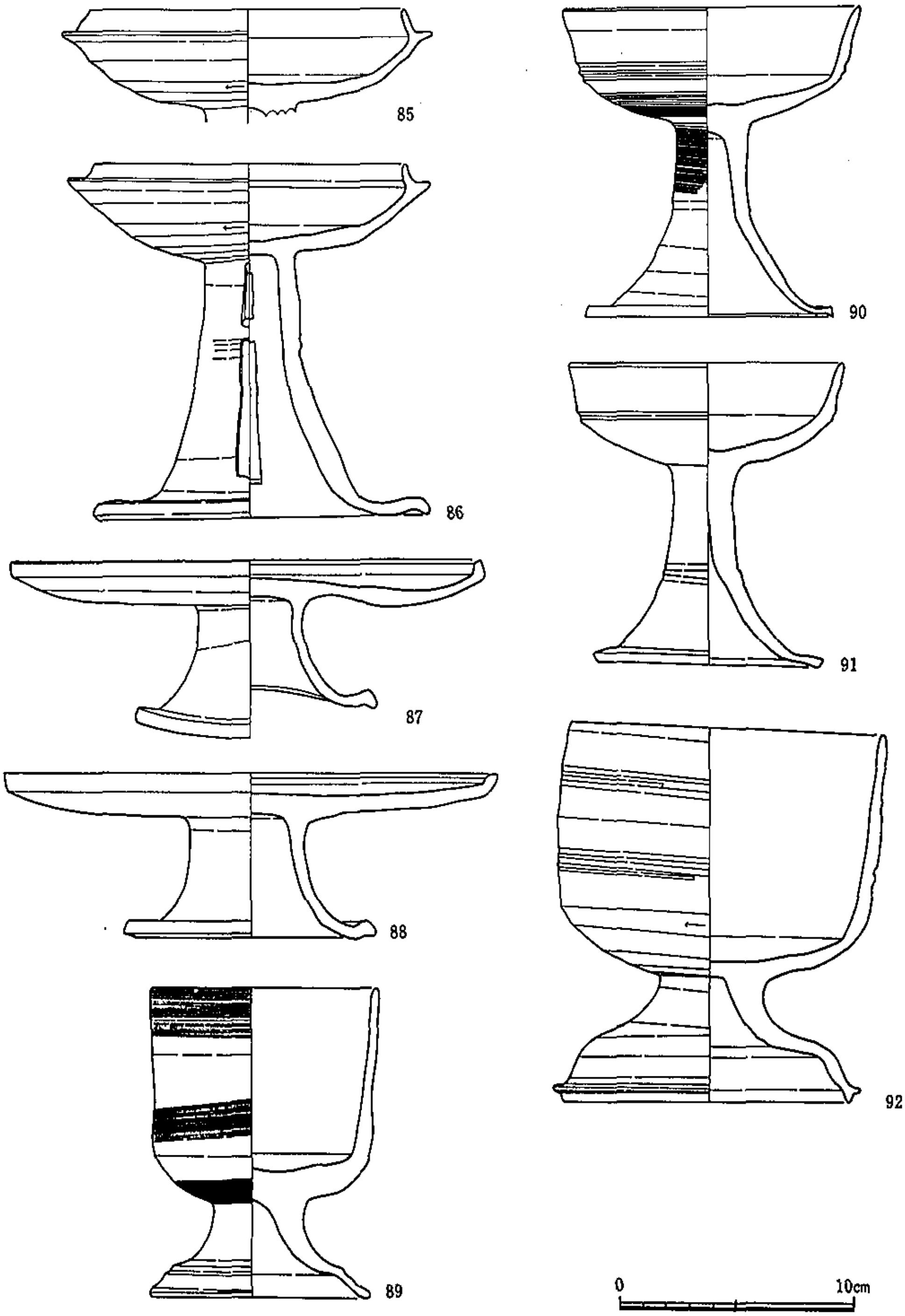


Fig. 150　包含層出土土器実測図VII

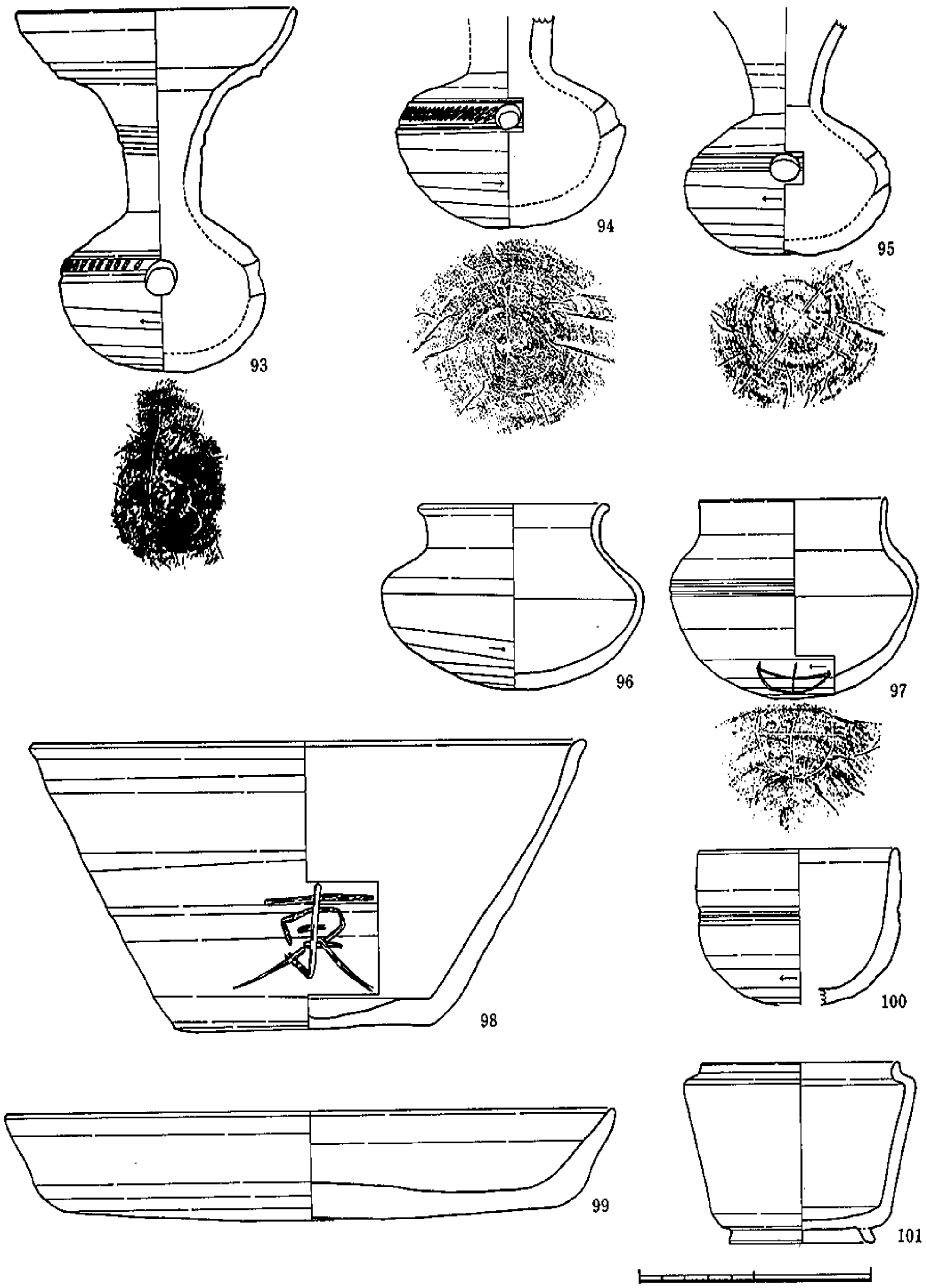


Fig. 151　包含層出土土器実測図Ⅷ

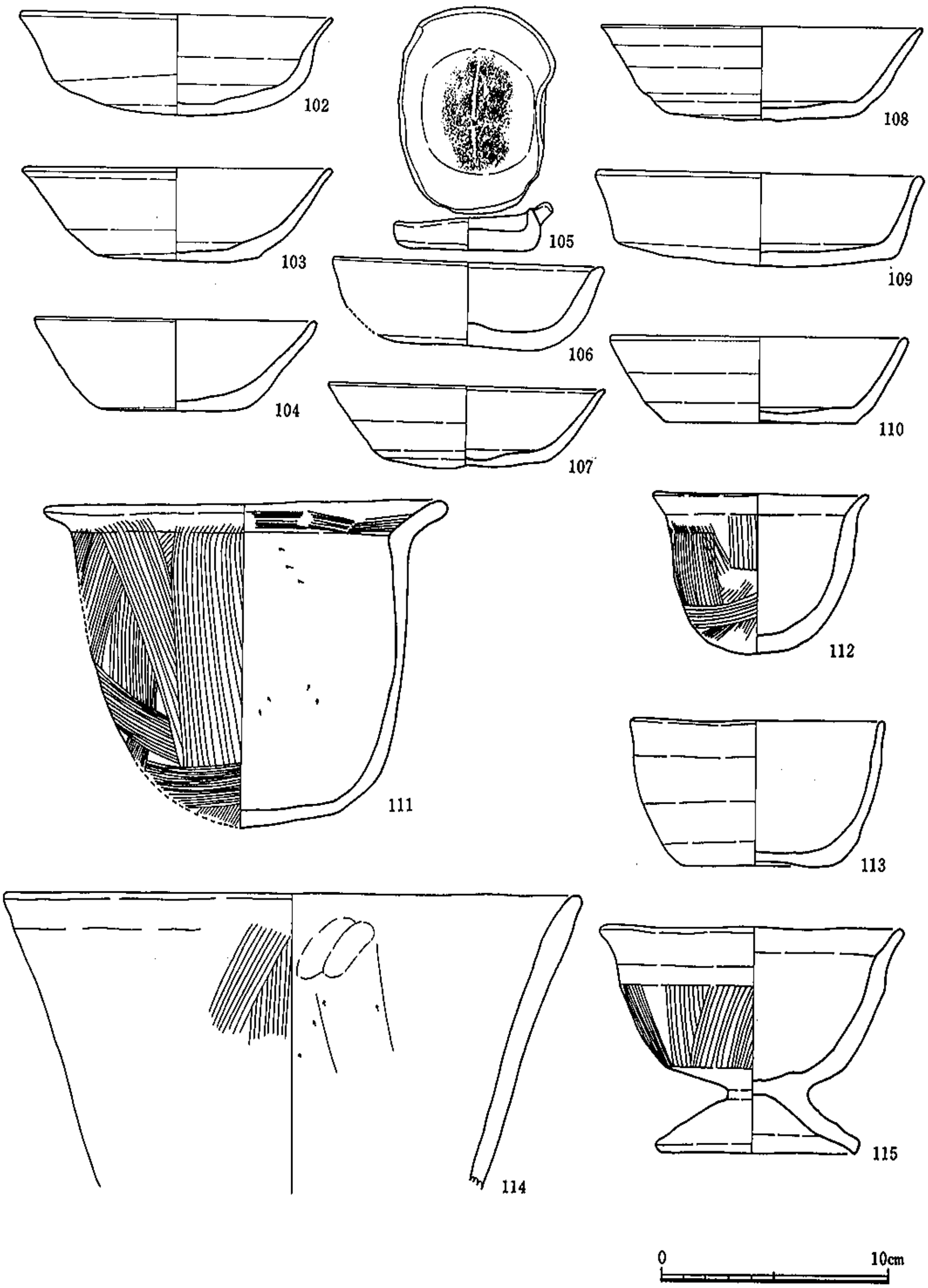


Fig. 152　包含層出土土器実測図IX

壺（Fig.151－96，97，101，Fig.153－120，Fig.155－128）

壺形土器には多くの種類があるが一括する。

96は広口の小型壺である。体部は扁平な球形をなし，頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての外面と内面は横ナデ調整である。底部から体部にかけてヘラ記号がある。口径7.8cm，器高8.0cm。97は直口の小型壺である。体部はやや扁平な球形をなし，頸部から直立するやや短かい口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。底部は丁寧なヘラ削り調整。肩部に二条の沈線を入れ，それより下位はカキ目調整を施す。肩部より上と体部・口縁部の内面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。底部にヘラ記号をもつ。全体に自然釉がかかる。口径7.9cm，器高8.5cm。101は坩である。土師器。底部にやや高く外に張る高台を貼り付ける。体部はわずかに外傾しながら直線的にたちあがり，肩部で大きく屈曲し内側にはいり，口縁部は短い直立するものがつく。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての外面は横方向のヘラ磨き。内面は横ナデ調整。内底部は多方向のナデ調整。口径8.3cm，器高7.8cm。120は長頸壺。体部は中位で屈曲し，上半部はやや丸味をもつ。屈曲部と肩部中位に断面方形の凸帯をめぐらす。体部内外面共に横ナデ調整である。128は胴部破片。体部中位で大きく屈曲する。屈曲部に扁平な把手がつけられる。内外面共横ナデ調整。把手はヘラ削りで成形されている。

耳皿（Fig.152－105）

土師器の耳皿である。底部はヘラ切り後，ヘラ削り調整。体部は大きく外に開き，両側をつまみ耳皿とする。内面に×印のヘラ記号をもつ。

坏（Fig.151－100，Fig.152－102～104，106～110）

100は坏というより椀形であるが一括する。底部丸底で体部は直にたちあがり深い。体部中位に凹線二条をめぐらす。底部はヘラ削り調整。体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。口径8.4cm。102～104，105～110は底部平底で体部は外傾しながらたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ削り調整で，体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整。内底部は多方向からのナデ調整である。102は口縁部が外反する。口径13.5cm，器高4.4cm。103は口径13.3cm，器高4.1cm。104は口径12.2cm，器高4.1cm。106は口径11.7cm，器高3.6cm。107は口径12.0cm，器高3.6cm。108は口径14.0cm。器高4.2cm。109は口径14.1cm，器高4.1cm。110は口径12.9cm，器高3.8cmである。

椀（Fig.152－112，113，115）

土師器で小型品である。112は底部は丸底で，体部はやや外傾しながらたちあがり口縁部は外反する。口縁部は丸くおさめる。外面は縦位～斜位の刷毛目調整。内面は横ナデ調整。口径9.4cm，器高7.1cm。113は底部は平底で体部は外傾しながらたちあがり口縁端部は丸くおさめる。やや粗雑なつくりである。口径11.0cm，器高6.4cm。115は脚付である。脚は大きく外方に開く。

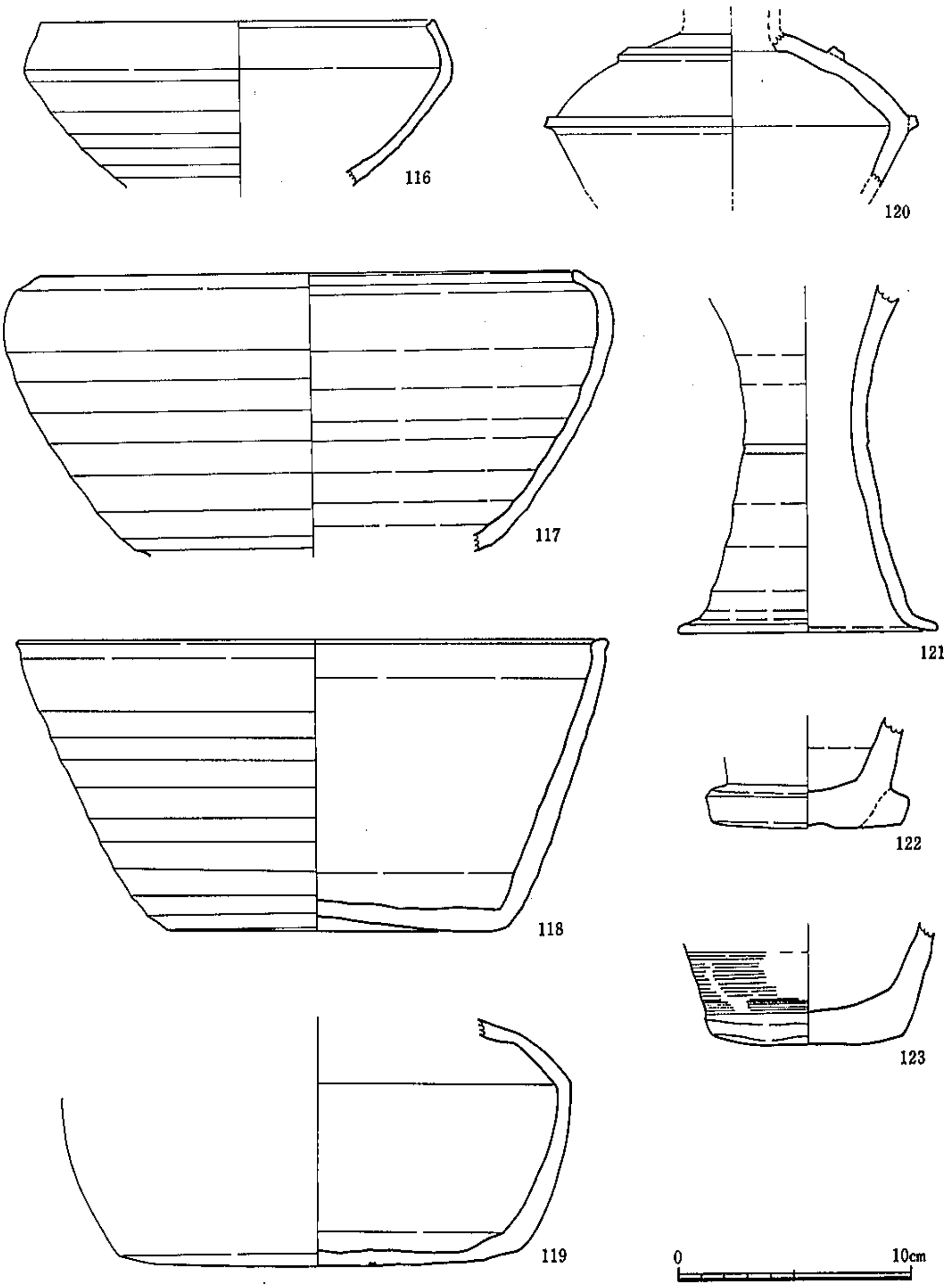


Fig. 153　包含層出土土器実測図 X

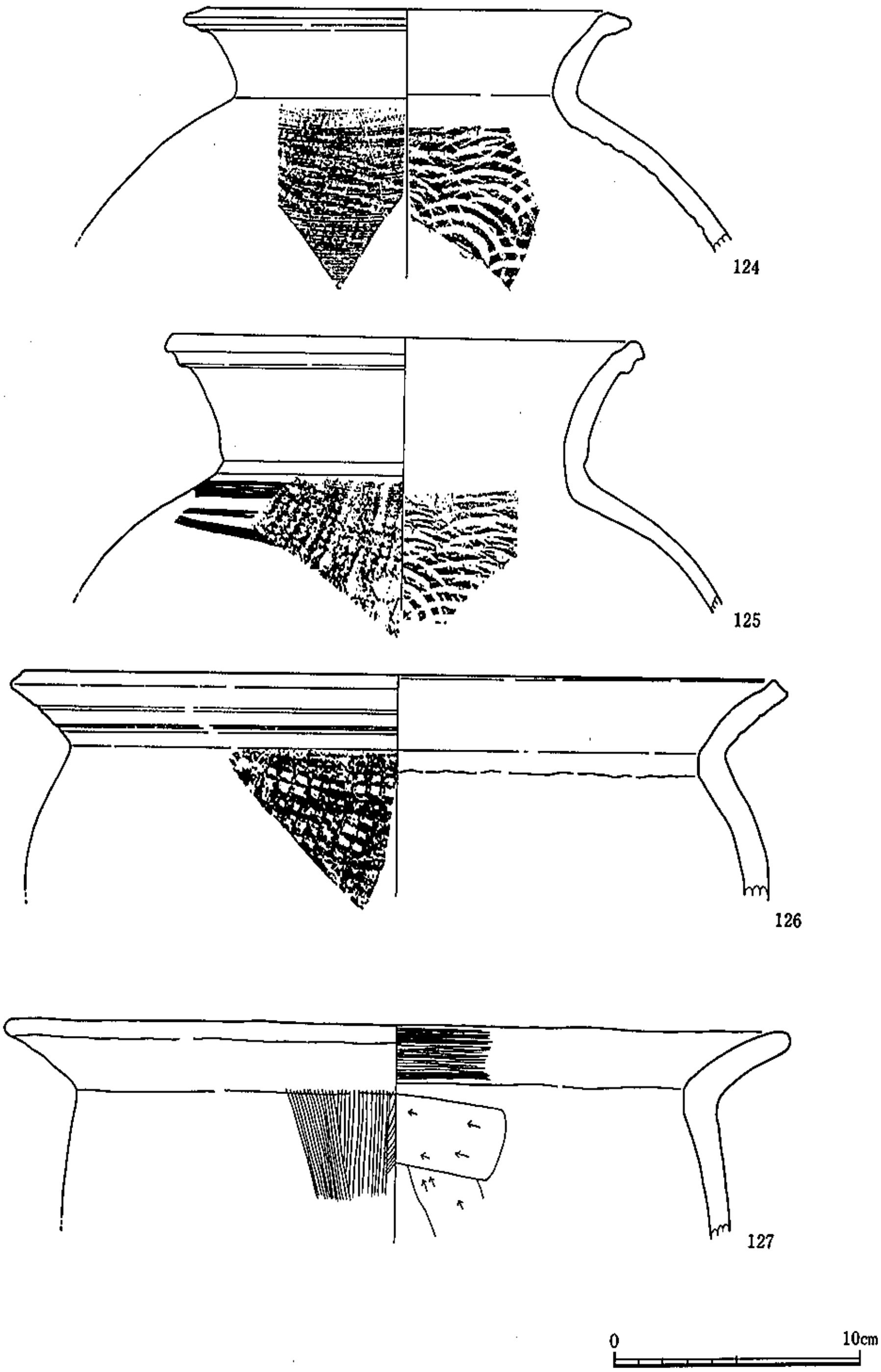


Fig. 154　包含層出土土器実測図XI

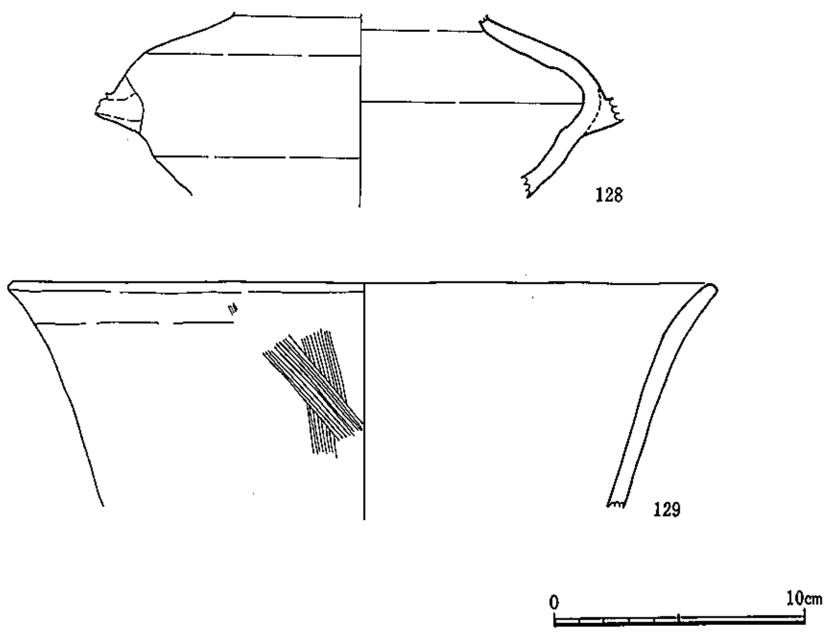


Fig. 155　包含層出土土器実測図XII

体部は外傾しながらたちあがり，肩部で傾きをかえ，口縁部は再び外反する。全体につくりは粗雑である。体部外面は縦方向の刷毛目調整。口縁部および内面はナデ調整である。口径13.0cm，器高10.0cm。

甕（Fig.152－11，114，Fig.154－124－127，Fig.155－129）

111，114，127，129が土師器で他は須恵器である。111は小型品である。底部は平底に近い丸底，体部は外傾しながらたちあがるが円筒形に近い。口縁部は大きく外反する。外面は刷毛目調整，口縁部はその上から横ナデ調整を加える。内面は体部がヘラ削り調整。口縁が横方向の刷毛目調整である。口径10.7cm，器高14.1cm。114，129は共に同じ器形をなす。口縁部はあまり外反せず，ほとんど直口に近い。体部は円筒状をなす。外面は縦方向の刷毛目調整。内面はヘラ削り調整後ヘラナデ調整を加えている。外面にススが付着する。器形等からみてコシキ等と考えられ。114は口径25.2cm，129は口径27.0cmである。124は胴が張り，口頸部は外傾しながらたちあがり，口縁部は外反する。口縁部は外側に肥厚し，端部は平坦である。体部外面は擬格子目のタタキ後，カキ目調整。内面は同心円のタタキである。口頸部内外面は横ナデ調整である。口径17.2cm。125は焼成不良で軟質である。胴部は張る。口頸部は外傾しながらたちあがり，口縁部外面は肥厚させ，凹線一条をめぐらす。体部外面は擬格子のタタキ，内面は同心円のタタキである。口頸部の内外面は横ナデ調整である。口径19.5cm。126は体部はあまり張らな

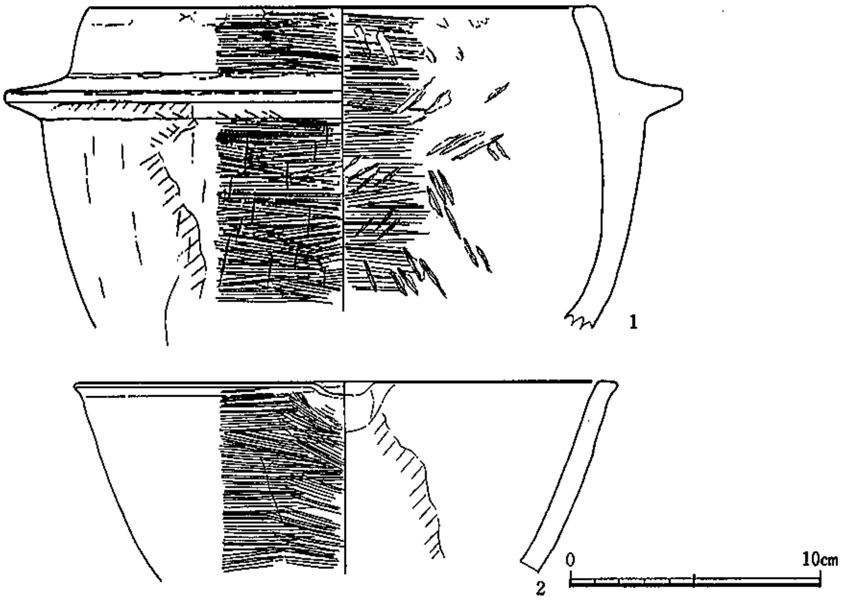


Fig. 156　包含層出土石製溶器実測図

い。口縁部は頸部から直線的に外反する。口縁端部は平坦である。体部外面は格子目のタタキ。内面は同心円のタタキ後ナデ消している。口頸部の内外面は横ナデ調整である。口径31.7cm。

127は胴部はあまり張らない。口縁部はくの字に外反し，端部は丸くおさめている。胴部外面は縦方向の刷毛目調整。口縁部は横ナデ調整。胴部内面はヘラ削りで，口縁部は横方向の刷毛目調整である。口径32.0cm。

その他（Fig.153－121～123）

121は大型の高坏脚部である。122は底部が外側に張り出す鉢の底部である。底部ヘラ削り調整。123は体部が円筒形をなす壷の底部。底部はカキ目調整である。

石製容器（Fig.156）

石鍋と鉢各1点がある。また，器形は不明であるが数点の滑石製容器片がある。

1は石鍋である。底部を欠いているため全体の器形は不明である。体部は丸味をもってたちあがり，口縁下に断面台形の幅広い鍔をめぐらす。口縁部は内湾気味にたちあがり，口縁端部は平坦に仕上げている。全体の器形からみるとかなりの長胴になるとみられる。口縁部と鍔以下の器壁の厚さに違いがあり，鍔以下が厚くなるのが特徴である。また全体的な器形は鍔付きの土鍋に類似していて，後述する鉢と共に土器を模倣した可能性もある。器面は第1次の製作痕を丁寧な横方向の磨きによって消している。外面の鍔以下にススが付着している。口径20.3cm。

2は鉢形をした石製容器である。底部を欠いているため全形を知ることはできないが，体部はやや丸味をもって外傾気味にたちあがり，口縁部は端部外側がわずかに張り出す。端部は平坦である。口縁に片口の注口がついているが欠失している。器壁は0.8cm前後の厚さで比較的薄い。器面は丁寧に横方向の磨きがかけられ，第1次加工の痕跡を完全に消している。内面にススが付着する。口径21.7cm。口縁部形態は明らかに土器の模倣であることをよく示している。
1，2共に良質の滑石を利用している。

(9) 塩壺（Fig.157）

塩壺は20数片出土している。内面に布痕のあるものとないものがある。器形のわかるもの3点がある。1は内面に布痕をもたないが，合せ部の痕跡が残っている。口縁部が内傾している。外面は指圧痕を消し平滑にしている。一部二次的加熱を受けている。口径11.1cm。2は最も残存状態が良い。内面には布痕が明瞭に残っている。口縁部はヘラで斜めに削りとられる。器形

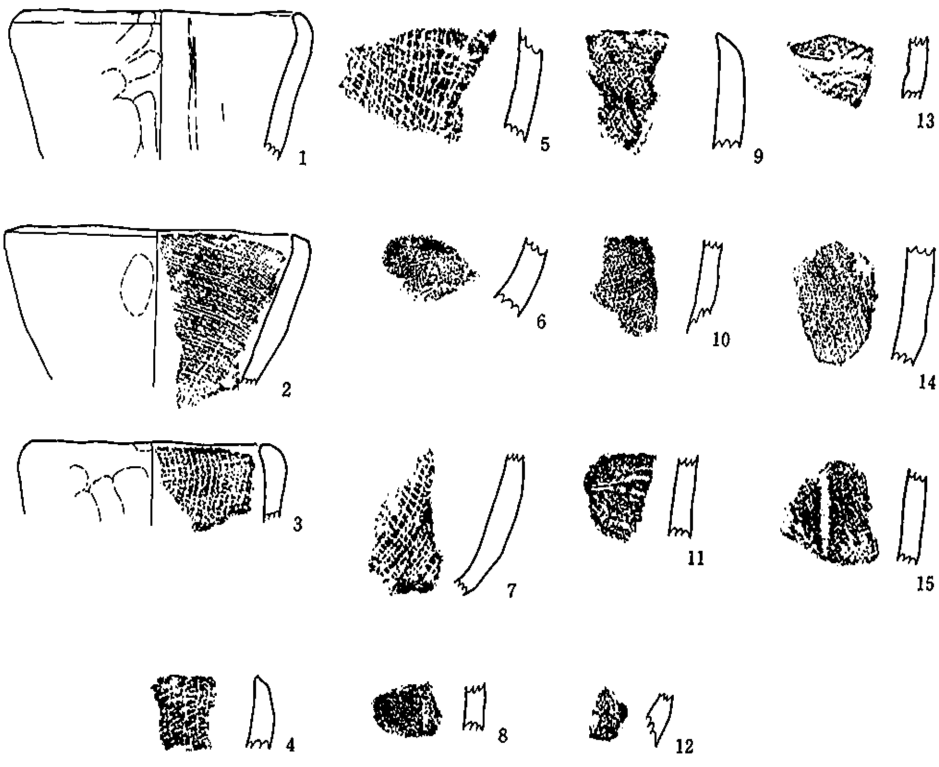


Fig. 157　包含層出土塩壺実測図(1/3)

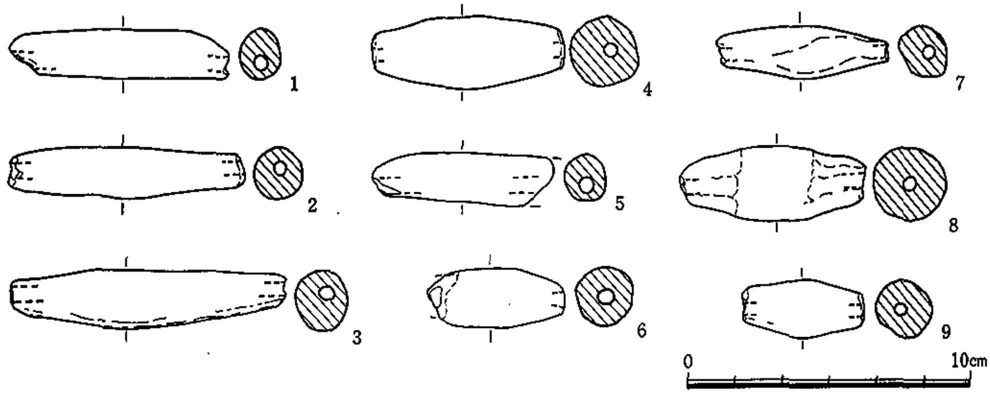


Fig. 158　土錘実測図

的には円筒状の長いものではなく，短かい円錐形をなすものと考えられる。外面は指圧痕で凹凸があるが平滑になるよう削られている。二次加熱に変質し，色調も赤灰色に変色している。口径12.1cm。3は口縁部破片。口縁部がわずかに内傾する。外面は指圧痕が著しい。二次的加熱によって変色する。内面に布痕がある。口径9.5cm。他は胴部破片である。特徴は同じである。内面の布痕はそれぞれ異なっている。生産遺跡である海の中道遺跡出土品と類似しており，胎土に金雲母を含んでいないことから考えれば，本遺跡には海の中道からもたらされた可能性もある。

(10)　土錘（Fig.158）

土錘は，9点出土している。すべて管状土錘であり形状は，紡錘形と細身の紡錘形に大別できる。器面はいずれも磨滅している。1は両端の一部を欠くがほぼ完形である。長さ5.9cm，直径1.3cm，孔径0.3cm，重さ8.1gをはかる。赤褐色を呈し，胎土に細かな砂粒をわずかに含む。右端の一部にススの付着が見られる。2は左端の一部を欠く。現存長さ6.2cm，直径1.4cm，孔径0.4cm，重さ10.5gをはかる。灰白色を呈し，胎土に石英粒を含む。5は約½を欠く。現存長4.8cm，直径1.3cm，孔径0.3cm，重さ7gをはかる。灰白色を呈し，胎土にわずかな砂粒を含む。6は左端の一部を欠く。現存長3.6cm，直径1.5cm，孔径0.4cm，重さ8.4g。灰白色を呈し，胎土は精製されている。7は左端の一部を欠くもののほぼ完形である。現存長4.6cm，直径1.4cm，孔径0.3cm，重さ6.1gをはかる。灰白色を呈し，胎土にはわずかに砂粒を含む。8は完形。長さ4.9cm，直径2cm，孔径0.3cm，重さ17.9g，灰黒色を呈し，胎土に細かな砂粒をわずかに含む。両端に指押えの痕がのこる。9は完形。長さ3.3cm，直径1.6cm，孔径0.3cm，重さ5.9g。灰

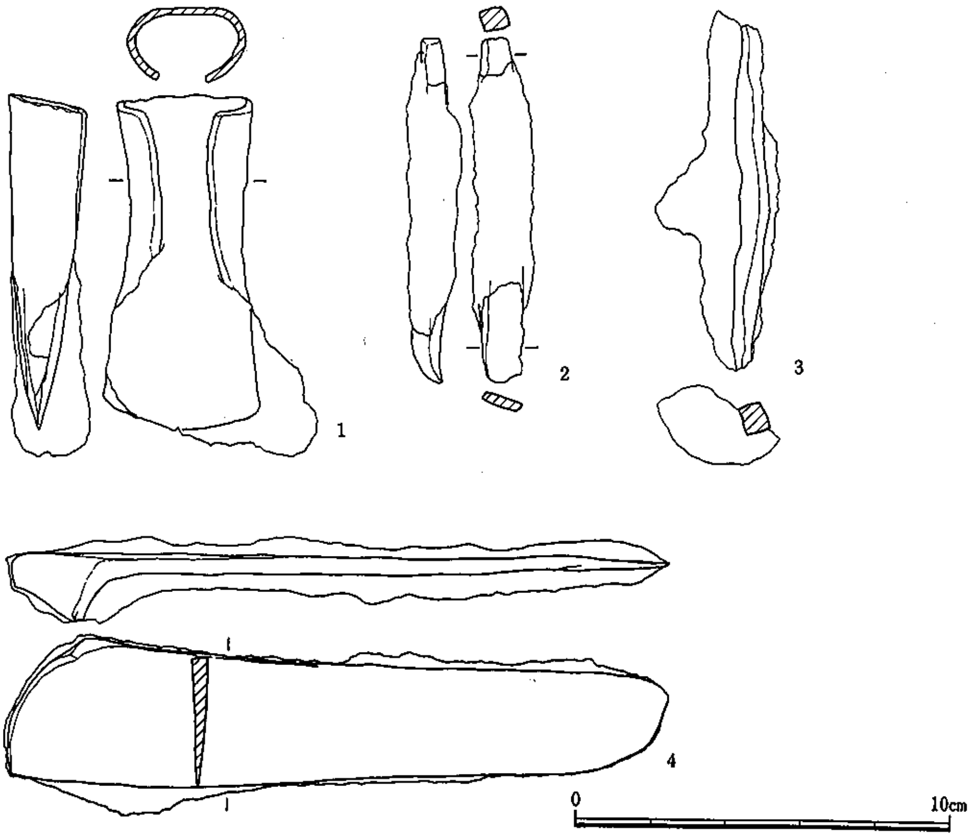


Fig. 159　鉄器実測図（1/2）

白色を呈し，胎土に細かな砂粒をわずかに含む。

形状により，1，2，3，5の一群と4，5の一群，6，9の一群，7の4群に分類できる。形状の差異は土錘で着装した網の種類に当然に帰結するものと考えられる。

⑾　鉄器（Fig.159）

本遺跡から鉄製品の出土はきわめて少なく，数点が出土しているのみである。形状の明確な4点を図示した。

1は鍛造の鉄斧である。袋部は両側から折りかえされている。袋部は長径3.2cm，短径2.0cmの楕円形をなしている。折りかえし部は密着せず，ひろくあいている。刃部はややひろくなり，刃部幅4.0cm，長さ9.0cmである。

2，3は角釘と見られるものである。2は断面が頭部は方形で下が扁平な長方形となる。長

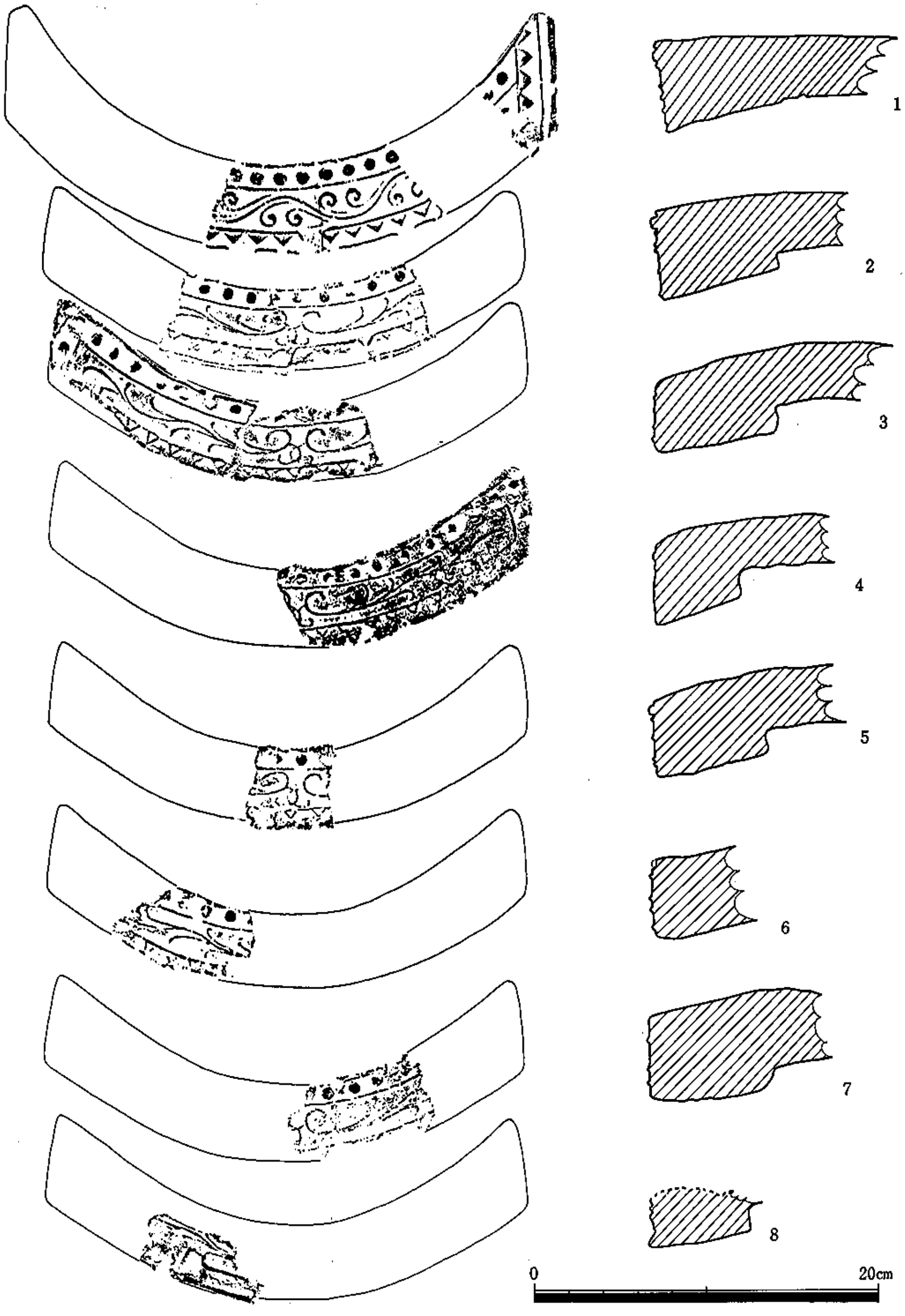


Fig. 160　瓦実測図 I

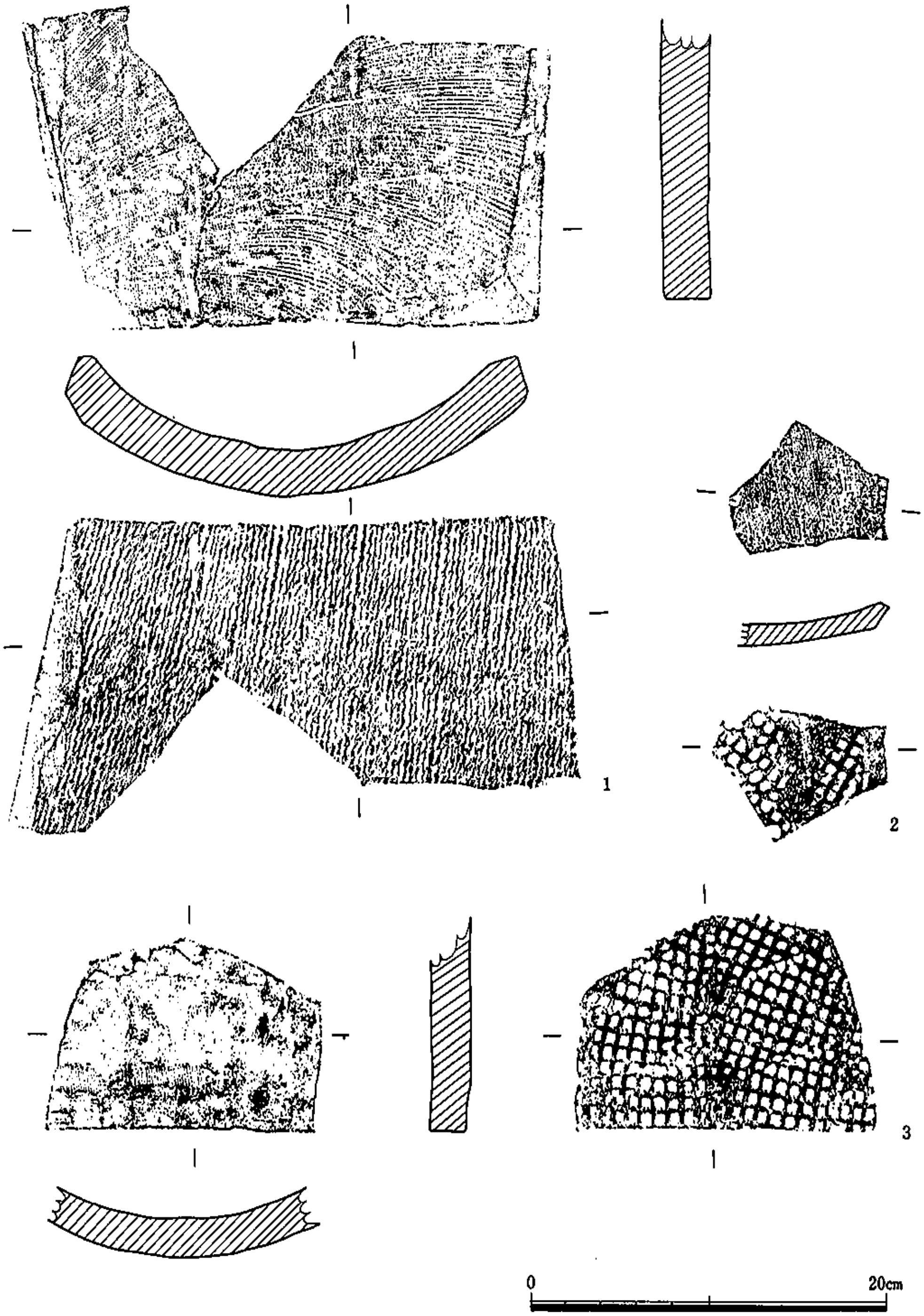


Fig. 161 瓦実測図 II

さ9.2cm。３は断面方形で長さ8.0cmである。

４は鉄製鎌である。基部に着装のための折りかえしがある。先端は尖らず丸味をもっている。基部と刃部の境は不明瞭である。棟は平坦で厚さ0.4cm。基部から切先にむかって薄くなる。長さ17cm，基部の幅3.8cm，先端部幅2.6cmである。

⑿　瓦類（Fig.160，161）

本遺跡からは多数の瓦類が出土している。多くは平瓦の破片である。瓦ぶきの建物が存在した可能性は薄く，また量的に瓦ぶき建物を考えるには無理がある。何のために瓦類が本遺跡に存在するのか，今後検討する必要があろう。同様な例として，多々良込田遺跡，海の中道遺跡などがある。

本遺跡から出土した瓦類は軒平瓦，丸瓦，平瓦である。

軒平瓦はFig.160に示した８点である。２型式に分類できる。１は扁行唐草軒平瓦で老司系，２～８は均正唐草文軒平瓦ですべて同一文様である。１は胎土が良好で焼成もよい。２～８は胎土は精良で，焼成は軟質である。

平瓦（Fig.161）　凸面に縦位の縄叩き目が残るものと，格子叩き目が残るものがある。格子叩き目は図示した２点で他は縄叩きである。２はきわめて薄い。いずれも胎土は精良である。

第6章　調査のまとめ

以上，本遺跡の遺構と遺物についての概略を説明してきたが，出土量が莫大なこと，整理期間が充分でなかったことなどから，充分に遺跡の内容を報告できなかったが，欠は今後補うこととし，ここで若干のまとめをして今後への指針としたい。

1　柏原M遺跡の検出遺構

M遺跡は調査前は丘陵から段々に降りてくる棚田状を形成していた。また，表面採集や観察においても遺物の存在はなく，遺跡として認知することは困難であった。しかし，試掘調査の結果，有望な古代遺跡を確認した。

この成果は遺跡の確認において今後一つの指針をあたえてくれる。本遺跡が発見できなかった理由は，遺跡がかつての斜面をカットして造成してつくられていることが大きな要因である。遺跡が廃棄された後，上方の丘陵部から著しい土砂の流入，堆積があり，年月を経た現在，旧状の斜面に復帰し，現在の我々からみて地形的に遺跡が存在しないような錯覚をおこさせている。このような遺跡は最近の大規模な造成に伴って広範囲に調査を実施している所から徐々に発見されている。福岡市域でみると，柏原D遺跡，生松台遺跡などがあり，丘陵斜面の中に深く遺跡が眠っている。遺跡と現地形の間に大きなへだたりがあることを改めて教えてくれるものである。

M遺跡は以上のことを踏まえ，造成が大規模であったことが注意されよう。東西80m～150m，南北約70mの台形状のカット部および，それに合せて引き込まれた小河川は，この造成が非常に綿密な計画のもとに実施されたことがわかる。後にのべるように遺跡の性格と大きくかかわって注目されるところである。

造成された内部には34棟の掘立柱建物，4本の柵列，23基の土壙，20条の溝，8基の土器埋納遺構，24基の製鉄関連炉址など多数の遺構を確認した。これらの遺構は一部古墳時代までさかのぼり，10世紀前後まで存続している。この間，土器型式からいえば空白に近い状態がみられるが，ほぼ連綿と継続しているとみることができる。

掘立柱建物は，東西棟と南北棟にわかれるが，いずれも統一的な方向をとっている。また配置にも規則性があり，建物も企画性をもって構築されていることがわかる。各建物は時期によって若干方向を異にしているが，同時併存と見られる建物は方向が一致している。重複関係等からみれば少なくとも四期に分離できそうであるが，このことについては今後さらに検討を加

えたいと思う。また，これら掘立柱建物が，大きく東西の二群に分かれ，建物規模や出土品に大きな差が存在することから，性格を異にしていたことが知られる。具体的な性格についても，今後の充分な検討が必要であろう。

なお，ここで注目しておきたいのはＳＢ－21である。この建物は，出土遺物からも，明らかに６世紀後半までさかのぼり，柱穴も他と異なり布掘りの柱穴をもつものである。規模的にも大きく他を寄せつけない。この建物のもつ意味はきわめて大きいものがあろう。調査確認した古墳時代遺構は唯一であるが，出土遺物には多量の古墳時代遺物が含まれている。古代における造成とも関連することであり今後検討を進め，この間の事情について考察したいと思う。

製鉄関連遺構も注目すべきである。時期を明確に限定できるものは少なかったが，検出状況等からは，古墳時代から古代まで継続していたと考えられるので，大規模に行われたものではない。しかし，集落関係の地域から検出した炉址としてはその数は多い。製鉄炉は製錬炉と鍛冶炉がある。製錬炉は大部分は破壊されたものであったが，前述したように廃棄された炉体には復原可能なものも含まれており今後に期待される。鍛冶炉については炉体以外に付属施設をもつものがあり，構造的に一歩進んだ考察が可能である。また，炉体を覆う建物も存在することを確認したのも大きな成果であった。遺物としてはルツボがあり，製鉄に関連した一連の作業を具体的に把握できそうである。再整理の上考察したいと思う。なお，古墳との関連も重要である。柏原古墳群中には鉄塊，鉄滓を供献したものがあり，集落内で検出した製鉄関連遺構と古墳の被葬者との関係がより具体的なものとなってきた。

2　出土遺物のまとめ

出土遺物は莫大な量にのぼり，整理が完全に終了するには，なお数年が必要である。多くは須恵器，土師器等である。ここでは注目すべき遺物について若干まとめておきたい。

出土遺物で注目されるのは晩唐三彩をはじめとする輸入陶磁器の多さである。晩唐三彩については類例が少なく，充分な検討を加えることができなかったが，陶磁研究上は大きな意味をもっている。越州窯青磁，白磁の量についても注目する必要がある。輸入陶磁器は当時としてはかなりの貴重品であったことはいうまでもないが，この入手方法や本遺跡における経済基盤を考える上ではきわめて示唆的である。器種も従来あまり知られていなかった托，香炉，双耳壷など注目するものが多い。この問題も大きな問題であり，後述する遺跡の性格を考えてもなお解けない部分は多い。

次に墨書土器について若干のまとめをしておきたい。墨書土器は約40点が出土して注目される墨書が多い。特に注目されるは「郷長」「左原補」「東ロロ麻」「辰長」「辰人」「浄人」「五月」「山守家」「寺」などである。いずれも職制，あるいは仕事を表したものである。本遺跡の性格

はもちろん，構成をも具体的に表わしていると考えられるが，今後の検討にゆだねたい。なお，墨書に関連する遺物として硯がある。円面硯３点　風字硯１点，転用硯４点がある。

他に石帯３点が出土している。遺跡の性格を知る上では示唆的である。

3　遺跡の性格

本遺跡は遺構，遺物共にすぐれたものがあり，その性格を把握することは有意義である。また，本遺跡は完全に全掘した点でも今後他遺跡の検討を進める上で参考となろう。

遺跡の存続年代は先にものべたように６世紀後半代から10世紀におよぶものであるが，遺跡のもっていた性格としては大きな変化はなかったと考えられる。古墳時代の大型建物は遺跡の開始期の形態を示唆し，終了段階も遺構からみれば大きな変化はない。

遺跡の性格を規定するものとして古墳および墨書土器をはじめとする優透な遺物の存在がある。

柏原古墳群の中のＡ群は一基は大型の円墳，他の一基は前方後円墳であり，少なくとも柏原古墳群の中では盟主的存在である。また樋井川流域全体についても，この時期の前方後円墳は柏原Ａ－２号墳のみであり，Ａ－２号墳の被葬者は樋井川流域を代表する豪族であったことがうかがえる。柏原古墳群の墓道の幹道は地形的にみてもＭ遺跡に直結していて，古墳群とＭ遺跡が無関係でないことを示している。このような状況からＭ遺跡の大型建物の存在を考えるとＡ群の被葬者と大型建物は無視できないものとなり，Ｍ遺跡がＡ群の被葬者の居住区であった可能性をより強く感じる。このことは，古代においてはより正確に把握できる。すなわち，墨書土器の「郷長」「左原補」はこの遺跡の性格を反映したものである。墨書土器が他より持ち込まれたものではなく，本来的にこの遺跡に所属するであろうことは，石帯をはじめとする諸遺物が有弁に語るところである。Ｍ遺跡は古墳時代にあっては地方豪族の居館として，古代にあたっては郷長の居館として存在したものであると見てまちがいなかろう。

(29) 同前一三八号永徳二年九月二十二日今川了俊書下。

(30) 同前二七九号三月三日今川了俊書状。また三三〇号三月三日斎藤明真書状も関係文書である。

(31) 同前三七四号九月二十一日斎藤明真書状。

(32) 同前二三二号応永十六年七月十七日祢寝清平譲状。

(33) 龍造寺家文書一七号正和二年二月九日鎮西御教書、同一八号正和二年十二月十八日藤原某施行状(『佐賀県史料集成』三巻所収)。

(34) 同前一九号建武三年七月十八日龍造寺修善着到状。

(35) 瀬野精一郎『鎮西御家人の研究』三三五頁、一九七五年。

(36) 龍造寺家文書観応二年十二月日龍造寺家政申状案。

(37) 入来院家文書二二八号蒙古合戦勲功賞配分状(『入来文書』)。

(38) 同前二二七号応長二年六月十七日武光法忍譲状。

(39) 同前二一七号元徳三年七月十三日武光日妙譲状。

(40) 同前二二二号応安元年十月二十五日武光心量譲状。

(41) 阿蘇文書写(大日本古文書『阿蘇文書』二巻四〇一頁)。

(42) 阿蘇家文書二三五号応永二十四年九月三十日渋川道鎮書下(同前一巻六二三頁)。

(43) 同前二六二号(同前七〇二頁)。

〈付記〉

本稿(一)(二)は、九州大学文学部の川添昭二教授が作成された『筑前国内元寇恩賞地関係史料』(仮題)をもとにして執筆した。また、一九八三年に九州大学国史研究室の中世史研究会でこの史料の輪読を行なった。本稿もその成果を基礎としている。川添昭二教授および当時の中世史研究会の参加者の方々に謝意を表したい。

(福岡大学人文学部)

朝後期から室町初期にかけて断絶していった。

最後に、この早良郡比伊郷がなぜ恩賞地に選ばれたかという問題が残っている。これについては管見の限り全く史料が存在しない。皇室領等の相博、鎌倉幕府領、得宗領、闕所地など、さまざまな可能性が想定されるが、その究明は今後の課題とせねばならない。

注

(1) 祢寝文書三三号正応元年十月三日蒙古合戦勲功賞配分状(『鹿児島県史料』旧記雑録拾遺家わけ一、以下、祢寝文書は全て本刊本からとった。なお、川添昭二編『祢寝文書』(一)~(三)〈九州史料叢書〉も参照した。)。
(2) 板楠和子氏の御教示による。
(3) 同前。
(4) 祢寝文書三五号正安三年二月二十一日建部清親譲状。
(5) 同前二八八号元亨三年十一月二十九日鎮西裁許状。
(6) 同前四三号嘉暦二年二月四日沙弥行智譲状。
(7) 同前四七号建武元年六月十六日雑訴決断所牒。
(8) 同前六一号。
(9) 同前六四号他。
(10) 鎌倉後期になると「在津」で「在博多津」を意味するようになる(例えば、新田神社文書元徳三年十月十七日紀俊正着到状、『大宰府・太宰府天満宮史料』十巻三三九頁)。
(11) 祢寝文書六二号暦応三年五月二十日少弐頼尚書下。
(12) 同前二九六号。ただし「守護代定尚」を「守護代宣尚」と改めた。
(13) 同前二九五号。
(14) 同前二九一号観応三年正月日僧興融申状案。
(15) この文書の宛所は「守護代」すなわち饗場宣尚であることもそれを裏付けている。
(16) 祢寝文書六五号。
(17) 注(14)文書。
(18) 祢寝文書八四号貞和六年二月九日祢寝清成譲状。
(19) 注(14)文書。
(20) 祢寝文書八五号観応三年正月二十三日足利直冬感状ほか。
(21) 同前一二一号文和二年八月一日祢寝清有譲状。
(22) 同前三〇〇号。
(23) 同前二九四号。
(24) この年貢米四石は、先にみた暦応三年の小山田直平の年貢請負高と同じである。
(25) 祢寝文書一九八号建徳二年八月十日祢寝久清譲状。
(26) 同前二〇一号応安四年八月十四日祢寝久清譲状。
(27) 同前二〇二号応安七年十一月三十日祢寝久清譲状。
(28) 同前一六五号七月二十日今川了俊書状。

元徳三年七月十三日、武光日妙（経兼）は、三郎重兼に対して「蒙古合戦勲功賞筑前国七隈郷田薗」を譲与した。[39] 応安元年十月二十五日に武光心量（重兼）は、小三郎兼氏に対して「筑前国三奈木庄・七隈郷田地三町・屋敷二ケ所・畠六段井上・長渕等弘安恩賞地頭職」を譲与している。[40] 比伊郷上乙王丸名の屋敷一所も惣領分に含まれていたことがわかる。これ以後の武光文書（入来院家文書）には、弘安恩賞地関係の文書は見えない。

(3) 肥後阿蘇氏への恩賞地

正平十七年十一月二十八日の「阿蘇山衆徒等料足日記写」[41]に、

「一、惣官御分
為筑前国比伊郷之御得分物大小釘之料足、
以同国下座郡之人夫、所有運上当山也、」と見える。この史料に見える所領は阿蘇社領あるいは阿蘇氏領と考えられるので、筑前国比伊郷内に阿蘇社（氏）領が存在したことがわかる。応永二十四年九月三十日、九州探題渋川道鎮（満頼）は、阿蘇大宮司惟郷に対して「筑前国早良郡比伊郷内勲功賞田地以下」を相伝の旨に任せて安堵した。[42] この「勲功之賞」とは弘安蒙古合戦勲功賞を意味すると考えられるので、筑前国早良郡比伊郷内田地以下は阿蘇氏に対する恩賞地と考えられる。

永享十二年四月十日の御教書請以下条々手日記[43]に、「同国（筑前）比伊郷」が見える。史料の性格が不明であるが、当時阿蘇氏が比伊郷と関わりを持っていたことを示している。あるいは不知行化していた同所についての訴訟関係文書かもしれない。

おわりに

以上、元寇恩賞地としての筑前国早良郡比伊郷について史料に即して検討した。恩賞地配分、相伝の状況がよく分かる渋谷氏、祢寝氏の場合を中心に考えると、おおむね次のように言えるだろう。正応元年十月三日に九州の御家人に配分された恩賞地の一つ早良郡比伊郷は、分割相続される場合（渋谷氏）と惣領に一括して相伝される場合（祢寝氏）があった。鎌倉期には一族内部の相論の対象となることが多かったが、南北朝期になると、遠隔地のため押領、預け置き等によって不知行化することが一般的であった。各御家人たちは、九州探題等へ訴訟をして知行の回復を図ったが、しだいに直務支配が困難となっていった。その対策としてとられたのが、代官請負と寺院への寄進である。祢寝氏の場合、代官請負と寄進とは得分が同じである点に特色があり、寄進行為も一面では年貢確保策であったことを意味している。こうした遠隔地所領の確保策にもかかわらず、恩賞地比伊郷の知行は、南北

所領と共に譲っている。[32] しかし、この当時はたして両所の知行が継続していたかどうか不明である。これ以降の祢寝文書に蒙古合戦恩賞地両所の所見はなく、少なくとも室町初期までには祢寝氏の知行は断絶したことがわかる。

祢寝氏の比伊郷の相伝と知行形態の変化をみると、渋谷氏のそれと共通する部分が多い。祢寝氏の場合、鎌倉期の相続↓南北朝期の退転↓所領回復の努力↓代官請負化↓寺院への寄進↓退転↓今川了俊を介した知行の回復（遵行）↓知行の断絶という経過をたどっている。鎌倉期の相続は分割相続ではなく、比伊郷五町は、祢寝院司職・大隅国小河院国領と共に代々嫡子へ相伝された点が、渋谷氏の場合と異なっている。このため、比伊郷五町も祢寝氏の「先祖重代相伝知行地」で「本領」であるという認識が祢寝氏内部に形成された。

南北朝期に遠隔地所領支配が動揺すると、訴訟、代官請負、所領寄進によって所領の維持回復を図るが、遠隔地所領を「遠国候之間、御打すて」るという状況が南北朝後期には一般化していた。おそらく今川了俊の上京後には、所領確保の後ろだてを失い、蒙古合戦恩賞地は実質的に退転していたと考えられる。

三　その他の御家人への恩賞地の検討

(1)　肥前龍造寺氏への恩賞地配分

正和二年、龍造寺八郎家実と同又六が相論した祖父持善（家益）遺領の中に、筑前国比伊郷田地・在家が含まれている。[33] また、この相論の一方の当事者龍造寺又六修善は、自らのことを「筑前国長渕庄一分地頭」と称している。[34] 瀬野精一郎氏も指摘されるように、[35] この両所は龍造寺氏に対する蒙古合戦恩賞地であったと考えられる。この比伊郷の所領は田地五町・畠地・屋敷であり、龍造寺氏の祖高木季家の代より伝領しているという。[36]

(2)　薩摩武光氏への恩賞地配分

正応元年十月三日、薩摩国御家人武光師兼は弘安四年蒙古合戦勲功賞の配分をうけた。[37] その配分地の中心は早良郡七隈郷地頭職で、田地三町他があったが、比伊郷上乙王丸名内の「一宇　蓮城坊」の屋敷をも含んでいた。応長二年六月十七日、武光法忍（師兼）は、弥三郎経兼に「勲功御領筑前国七隈郷惣領職」を、三郎次郎師藤に「勲功御領筑前国七隈郷内渕田壱町、同長渕畠地壱所」を、伴三兼治に「勲功御領筑前国七隈郷内袴田五段」を、又三郎兼正に「勲功御領筑前国橋爪四段大六十歩」をそれぞれ譲与した。[38] 比伊郷上乙王丸名の屋敷一所については記載がないが、惣領職が経兼に譲与されているので、経兼に譲られたものと考えられる。

庵造営、致寄進候上者、今又於于今為塔頭修造十ケ年之間、
所奉寄進也、仍之状如件、
　文和二年十月廿二日　　僧清有
進上　融維那禅師　(22)

B（端裏書）「比伊郷寄進状請取」
正洞庵御寄進候筑前国比伊郷内・同長渕庄内畠等事、年紀
以後者可返進候、次年貢米事、以毎年四石御代官方ニ可致
沙汰候、仍請取之状如件、
　正平八年十月廿二日　興融（花押）　(23)

文和二年十月二十二日、祢寝清有は弘安合戦恩賞地を崇福寺塔頭の修造のため、十年間寄進した(A)。観応三年の足利直冬への訴訟は成功したものと考えられる。Bの文書は、Aに対する崇福寺側の請取である。「年紀」(十ケ年)以後は返付するとのべているし、年貢米は「以毎年四石御代官方ニ可致沙汰候」とのべているので(B)、この寄進は、期間を限定した代官請負契約と実質的に同じであった。[24] また、Aが北朝年号を用いているのに対し、Bが南朝年号を用いている点は注目される。

　文和二年から約二十年を経た建徳二年八月十日、祢寝久清は嫡子鬼房丸(清平)に、筑前国早良郡比伊郷田地屋敷・同国長渕庄畠地地頭職等を譲った。[25] その四日後には、今度は北朝年号(応安四年)[26]で、また三年後の応安七年十一月三十日にも同様の譲与の確認をしている。[27] 某年、九州探題今川了俊は、本領安堵と所領給与をもって祢寝久清の合力を頼んだ。[28] ここで久清が、筑前国比伊郷内伍町分を、本貫地大隅国祢寝南俣内佐多村と共に「本領」と称している点に注目したい。久清は了俊の誘いに応じ、合力した結果、永徳二年九月二十二日、了俊から本知行分の安堵をうけた。[29] その中に「筑前国比伊郷内（水田五町 同屋敷二ケ所）」が入っている。長渕庄の畠地はすでに不知行となっていたらしい。

　このように譲状や安堵状にその名があっても、遠隔地所領である比伊郷五町の恩賞地は不知行化しつつあった。某年、今川了俊は祢寝氏に対して、「兼又比伊郷内五町分事、聊不可有子細候、関口差遣芸州候之間、此分申遣候、可遵行候、其間者可有御待候」とのべている。[30] 今川了俊の「遵行」がなければその知行も安定しなかったのである。この時期に恩賞地の知行が動揺していることは渋谷氏の場合と同様である。

　この了俊の遵行は実現した。その直後、了俊の被官斎藤明真は祢寝久清に、「比伊郷内五丁分事ハ、先立落居候之処、少事候上、遠国候之間、御打すて候事不可然候、是ハ殊ニ不可有相違候哉、重々此趣能々可申入候」とのべている。[31] 了俊の遵行によって比伊郷五町の知行は回復したが、祢寝氏による遠隔地所領支配が困難となっていたことを物語っている。

　応永十六年七月十七日、祢寝清平は嫡子元清に「筑前国早良郡比伊郷田地屋敷・同国長渕庄畠地地頭職」を他の所職・

する動向である。

小山田直平による祢寝氏領比伊郷と長渕庄の代官請負は、実際には順調にはいかなかったらしい。次の文書がそれを物語っている。

筑前国比伊郷内田地五町并長渕庄内畠地等事、
崇福寺前住済川和尚、御塔頭正洞院造営之間、可有御知行候、為令致公私之御祈禱、仍寄進之状如件、
　貞和元年九月三日　建部清成
進上　融維那禅師[16]

祢寝清成は、小山田直平と代官契約を結んで五年後には、蒙古合戦恩賞地両所を大宰府の禅宗寺院崇福寺の塔頭正洞院に寄進したのである。清成が崇福寺前住の済川和尚と「師檀契」を結んでいたためである。[17]この崇福寺塔頭への恩賞地寄進は、渋谷氏の太平寺への寄進と同様の性格を持つものであろう。祢寝氏の場合、渋谷氏の恩賞地寄進よりもより詳細に追うことができる。この寄進は得分権のみの寄進で、寄進地の進止権は、祢寝氏側が留保していたらしく、貞和六年二月九日には、祢寝清成が嫡子（養子）の清有に対して筑前国早良郡比伊郷田地屋敷・同国長渕庄畠地地頭職等を譲与している。[18]

観応三年正月になると、この寄進恩賞地をめぐって新たな展開をみせる。寄進をうけた崇福寺塔頭正洞庵の興融が訴訟を起こしたのである。[19]その申状によると、観応二年に、正洞庵に寄進された恩賞地の「一作毛」が「御内」の小熊六郎に給与されたので、観応二年分の正洞庵の得分が退転し、造営が終了しないというものであった。小熊は「一作毛」のみ「御恩」をうけたのであり、またこの寄進が「三宝寄進」であって、本主祢寝清成が軍忠をしたことは、「筑州」すなわち少弐頼尚も承知しているので、寄進状に任せて返付するように御教書を発給してほしいと興融は訴えた。この興融申状が「観応」年号を使用していること、「筑州奉書」（暦応三年五月二十日少弐頼尚書下）と「御教書」を区別し、後者の発給を申請していること、祢寝清成は当時足利直冬方として活動している[20]ことなどからして、この申状の宛先は足利直冬であったと考えられる。そうすると、「御内」とは直冬の被官を意味し、観応二年に小熊六郎に一作毛を預けたのも直冬ということになろう。祢寝氏による進止権を留保した形での崇福寺塔頭への寄進行為は、観応の擾乱による戦乱の激化と、足利直冬による御内人への兵粮料所の預け置きによって妨げられたのである。

この翌年の文和二年八月一日、祢寝清有は筑前国早良郡比伊郷田地・屋敷、同国長渕庄畠地地頭職等を嫡子の犬房丸に譲った。[21]この年の十月、同一日付で二通の文書が出されている。

A筑前国比伊郷田地五町・同国長渕庄畠地等事、
右、崇福寺前住済川和尚与舎兄清成、以師檀契約、為正洞

左衛門次郎殿奉請取候畢、彼地事預給候之上者、d不可違御
契約候、雖不甲斐〳〵候、御代官一人為在府被思食候て、e
御用事ハ不被御心置示給候者、可申沙汰仕候、向後者、自
是万事可奉憑候、此等子細、委左衛門次郎殿令申候了、恐
々謹言、
(暦応三年カ)
五月廿八日　　　大蔵直平（花押）(12)
(清成)
謹上　祢寝殿

まず、本文書のaの部分より、大蔵直平が四月二十五日に大宰府に赴いていることがわかる。同年四月六日付の直平書状(13)によると、直平は祢寝清成の仰せにより、清成に見参しており、「来八日必〳〵可出国仕候」と述べている。筑前から大隅に赴き、清成に対面した後、四月八日に大隅を出国し、筑前に帰国したものと考えられる。四月二十五日に大宰府に行き、少弐氏側の人物と交渉を持った(b)。その目的はcに書かれている。祢寝氏領の筑前国比伊郷内田地が「難儀御沙汰」に及んだため、直平が重々子細を申し披いたため、少弐氏より「安堵御奉書」が下されたのである。直平が大宰府の少弐氏のもとに赴いたのは、祢寝氏領比伊郷田地に関する訴訟のためであった。この訴訟は成功し、守護少弐頼尚の「安堵御奉書」＝「御奉書正文」と守護代饗場宣尚状＝「守護代打渡状」(14)の案文が下されたのである。この「安堵御奉書」が、先にのべた暦応三年五月二十日付の少弐頼尚書下であることは、前後関係からして確実であろう(15)。守護代饗場宣尚の遵行状案文は祢寝文書中に現存しない。以上のことから、この五月二十八日付大蔵直平書状は、祢寝清成の意向をうけた直平が、比伊郷田地等につき少弐氏に訴訟し、それが成功したことを清成に伝えた文書といえる。

それでは、この大蔵直平はいかなる人物であろうか。ここで引用文書中のdの部分に注目しよう。直平は「彼地」を預けられたので契約に違わないと言っている。「彼地」とは当然「筑前国比伊郷内田地等」をさすので、この地を契約した人物と言えば、この年の三月二十五日に祢寝清成が代官契約を結んだ小山田彦七以外には考えられない。「大蔵直平」と「小山田彦七」は、一見すると別人のようにも見えるが、「大蔵」姓の小山田彦七直平という人物を想定すれば無理はない。小山田直平は、単なる祢寝氏領の代官ではなく、雑掌的な役割も果たしていることになる。eの部分はそのことを如実に物語っている。

祢寝清成は、筑前国早良郡比伊郷の直務支配が困難となったため、暦応三年三月二十五日、小山田直平と代官請負契約をした。清成の指示によって、直平は大隅まで下向し、そこで筑前守護少弐氏への訴訟を依頼された。四月八日、直平は大隅を出国し、筑前に帰国し、四月二十五日に大宰府へ行き、少弐氏に訴訟をした。直平の画策によって、訴訟は成功し、五月二十日に少弐頼尚の安堵書下が出され、祢寝氏側の勝訴に終わった。以上が、暦応三年における祢寝氏領比伊郷に関

崎」は現在も残っている。(2)「山崎」は、渋谷有重跡に給与された柏原地区の西の桧原にある。「林崎」は、渋谷有重跡の恩賞地の一つ「横枕」に隣接しており、柏原地区にあたる。また、「コヤヲコヤヲキ」の「コヤヲキ」が「コヤシキ」の誤りとすると、「山崎」に隣接して「古屋敷」の地名がある。(3)したがって、祢寝清親の恩賞地は、柏原から桧原にかけて分布していたといえる。

この祢寝清親に与えられた恩賞地「筑前国比伊郷内勲功賞田畠」「筑後(前)国永渕庄内勲功賞」は、正安三年二月二十一日、清親より嫡子清治に譲られた。(4)元亨三年に清治の子清保と清任らが相論し、清保が勝訴したが、その裁許状の中にもこの両所が見えている。(5)両所の地頭職は、嘉暦二年二月四日に沙弥行智（清保）より嫡子清成に譲与された。(6)以上のように、祢寝氏に与えられた弘安合戦恩賞地は、清親―清治―清保―清成と、惣領に代々相伝されていった。その知行も順調であったと考えられる。

南北朝期に入ると、知行のあり方が大きく変化する。建武元年六月十六日、「筑前国早良郡比伊郷田屋敷・同国長渕庄畠地等」が、「大隅国祢寝院南俣地頭郡司両職」と共に、建武政権から祢寝清成に安堵された。(7)ところがその六年後には大きく状況が変化した。

弘安蒙古合戦勲功地筑前国比伊郷内田地五町、屋敷等、同国長渕庄内畠地、在家等事、
右田畠在家等所奉預小山田彦七殿也、仍自明年(暦応四)毎年々貢米四石可有其沙汰候、但云自身、云代官、在津之時者、直可致沙汰候、仍状如件、

暦応参年三月廿五日　建部清成 (8)

暦応四年以降、祢寝清成は小山田彦七に対して、年貢米四石で弘安合戦恩賞地の代官請負契約をしたのである。当時祢寝清成は一族を率いて南九州各地を転戦しており、(9)遠隔地所領の支配が困難となったため、こうした契約を結ぶに至ったと考えられる。ただし、清成本人か代官が「在津」すなわち博多に滞在中(10)は、直務支配を行うとしている。契約者の小山田彦七は比伊郷近辺の小領主と考えられる。

この年の五月二十日には、祢寝氏の恩賞地が元のごとく清成に返付された。(11)これは、先の代官請負契約を破棄したものではなく、祢寝氏領の恩賞地が押領されるか他人に給与されるかして不知行となったため、清成が筑前守護少弐頼尚にこれを訴え、返付命令が頼尚から出されたものであろう。この返付命令の直後に、次のような文書が出されている。

去月廿五日着府仕候、[a] 当時宰府・博多殊無子細候、京都も無為候之由、[b] 少弐殿(頼尚)御雑掌連々申下候之間、目出候、定御同心候歟、兼又筑前国比伊郷内田地等事、[c] 難儀御沙汰にて候つれとも、重々申披子細候、安堵御奉書申成候訖、自本不可有異儀之由、乍存内候、無為落居難申尽悦存候、定御悦喜候歟、察存候、仍御奉書正文并守護代(饗場)宣尚状案文等、

柿木一所　一段三丈　同人
帯田佃一所　一段四丈　同人

右、就孔子配分如此、有限仏神事本所年貢守先例不可有懈怠之状如件、

正応元年十月三日

沙弥（花押）（少弐経資）
沙弥（花押）（大友頼泰）

この配分状を表にしたのが、次表である。

この配分状に見える比伊郷内の地名のうち、「山崎」と「林

(1)　田地5町

a　上乙王丸名

山崎西	1段
山　崎	1段小
堤　堺	3段半
中タナ	3段半
中タナカ東	3段
東ソイ	2段60歩
下タナ	8段小
コヤヲコヤヲキ	3段
林　崎	9段
林崎東	4段
上ナンチャウ	1丁
下ナンチャウ	9段大内1段60歩

(2)　屋敷3箇所

a　東吉光名

1宇	刑部左衛門尉

b　長渕庄

1宇（モスコモリ）	安与名
1宇（与一）	六郎丸

(3)　畠地1町

a　下乙王丸名

チャウト町上	2段
ミヤウフサコノ浦	4丈

b　長渕庄

長田下作	1段1丈	袈裟丸
田島	2段2丈	同人
柿木	1段3丈	同人
帯田佃	1段4丈	同人

元寇恩賞地としての筑前国早良郡比伊郷(二)

佐伯弘次

二　祢寝氏への恩賞地の検討

正応元年十月三日、大隅国御家人祢寝清親は、渋谷氏と同様、弘安四年蒙古合戦勲功賞を与えられた。(1) まずその史料を掲げよう。

弘安四年蒙古合戦勲功賞筑前国早良郡比伊郷地頭職配分事、

一人大隅国祢寝弥次郎清親

田地五町

上乙王丸名内

一所 山崎西 一段

一所 山崎 一段小

一所 堤堺 三段半

一所 中タナ 三段半

一所 中タナカ東 三段

一所 東ソイ 二段六十歩

一所 下タナ 八段小

一所 コヤヲコヤヲキ 三段

一所 林崎 九段

一所 林崎東 四段

一所 上ナンチャウ 丁

一所 下ナンチャウ 九段大内一段六十歩 東依

屋敷三箇所

東吉光名内

一宇 刑部左衛門尉

(筑前国上座郡) 長淵庄内

一宇 モスコモリ 安与名

一宇 与一 六郎丸

畠地一町

下乙王丸名内

一所 チャウト町上 二段

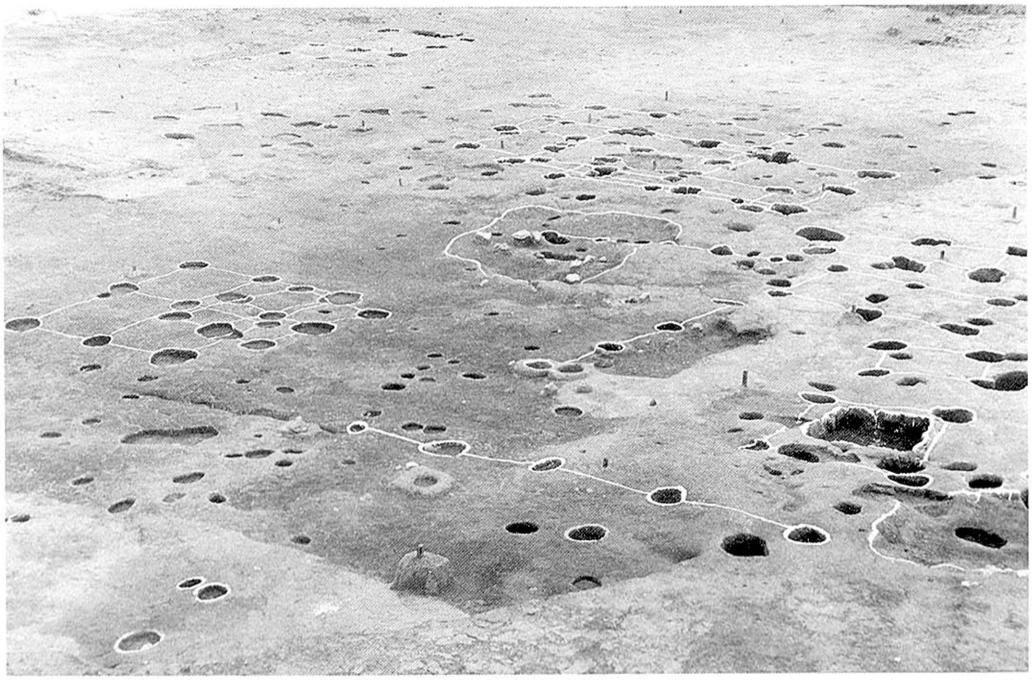
一所 シャウフサコノ浦 四丈

長渕庄内

一所 長田下作 一段一丈 元三段内 北依 袈裟丸

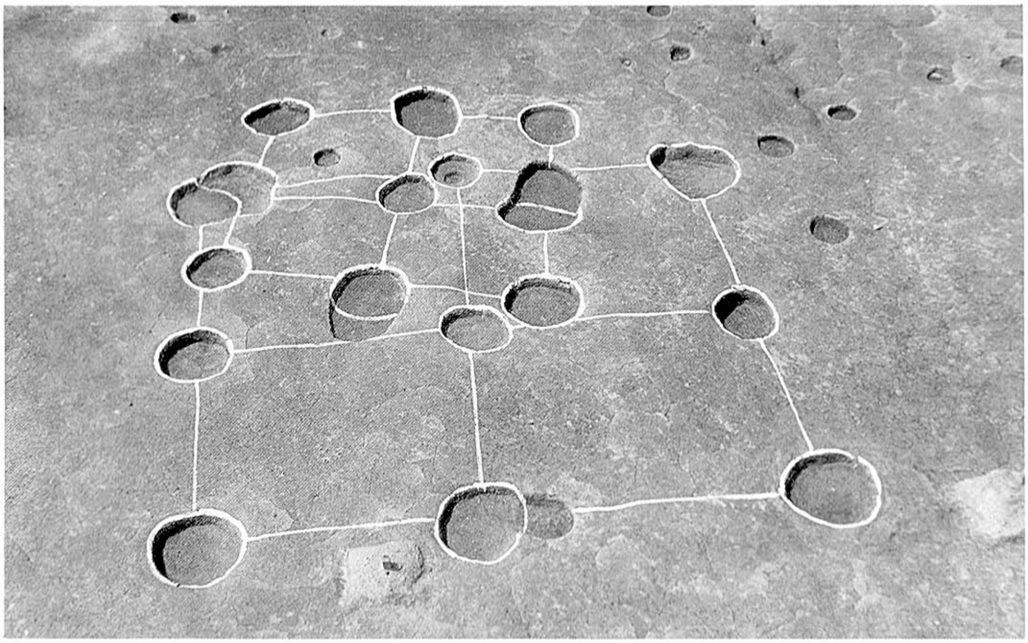
一所 田島 二段二丈 同人

図　　版
PLATE

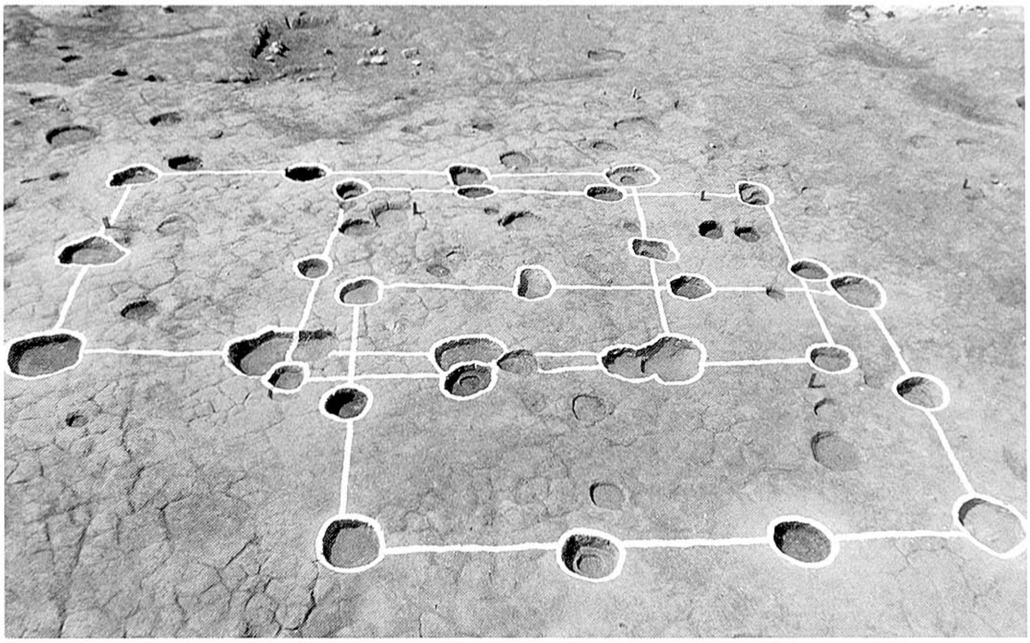


(1) 第3群掘立柱建物（北西から）

(2) 第3群掘立柱建物（北から）

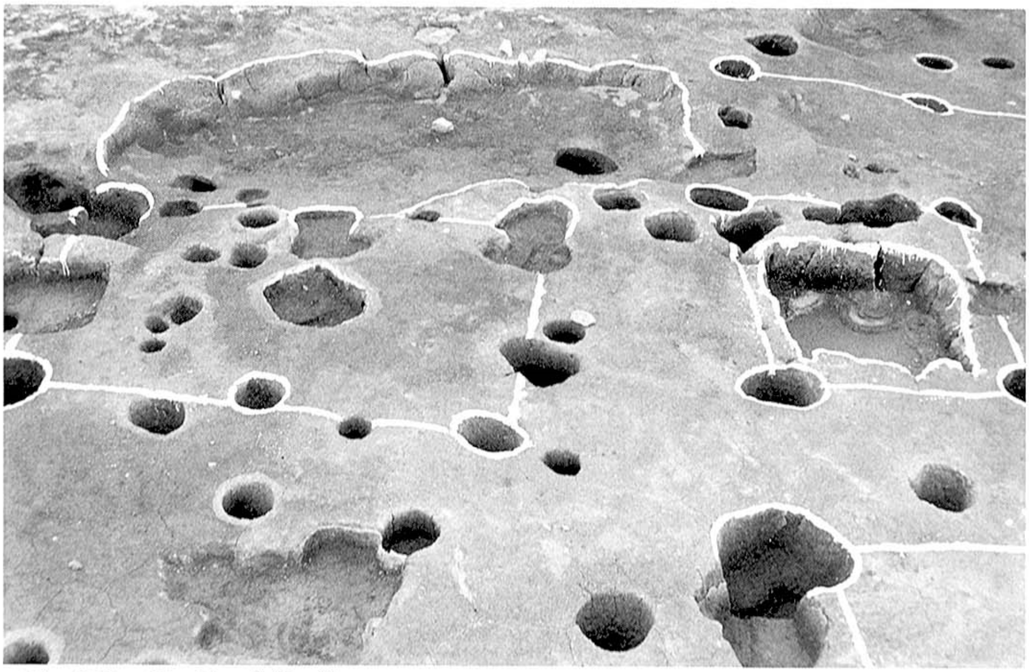


(1) ＳＢ－22・23重複関係

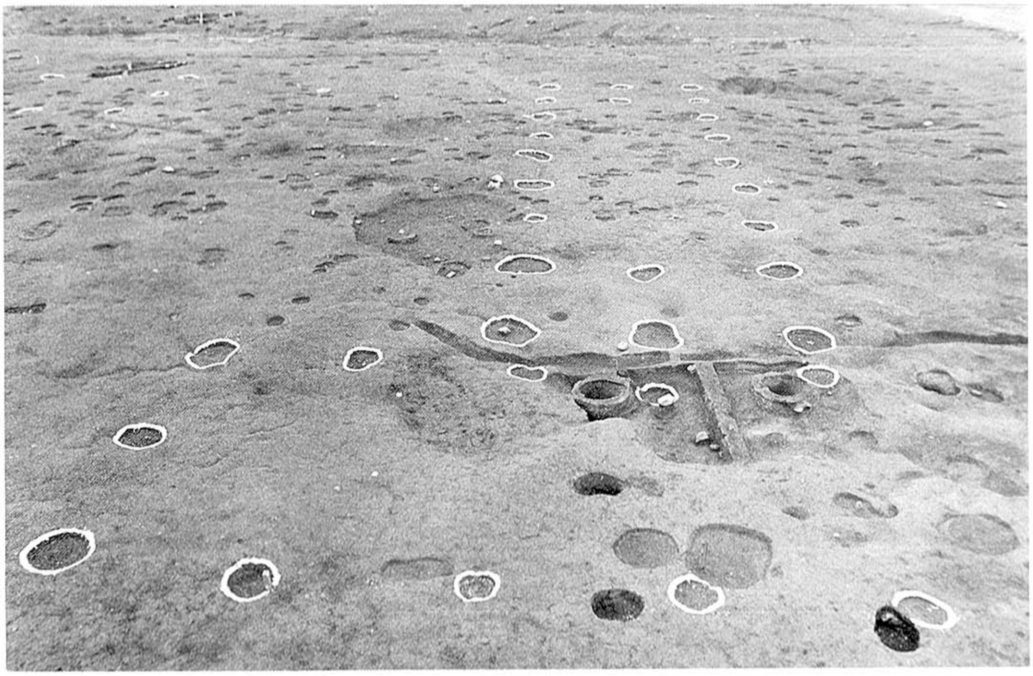


(2) ＳＢ－７・11・13重複関係

(1)　ＳＢ－27・28・第１・２号柵列

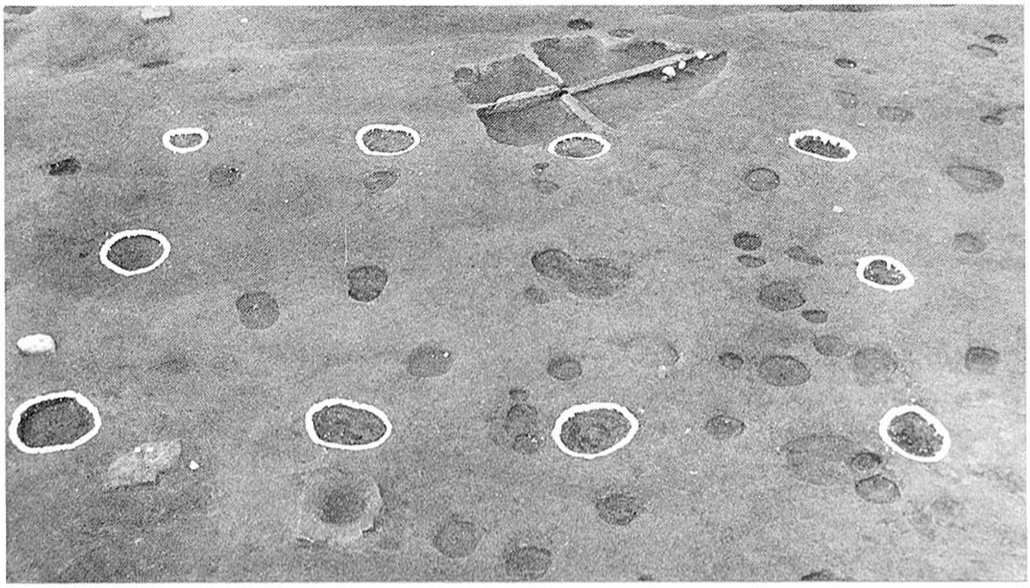


(2)　ＳＢ－25・24・ＳＫ－04

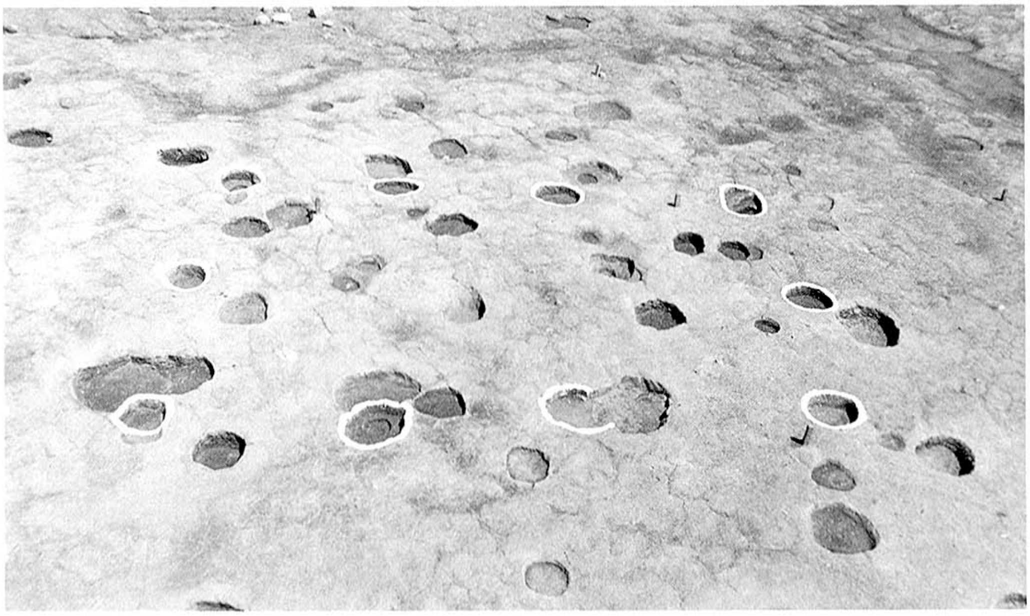


(1)　ＳＢ－10，01（西から）

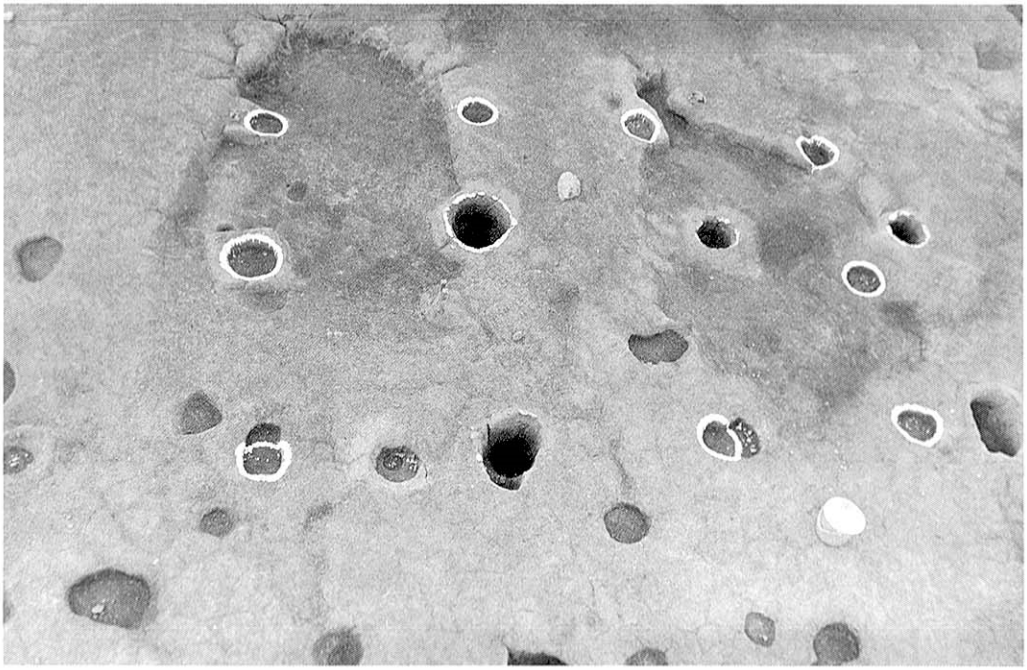
(2)　ＳＢ－01（南から）



(1)　ＳＢ－05

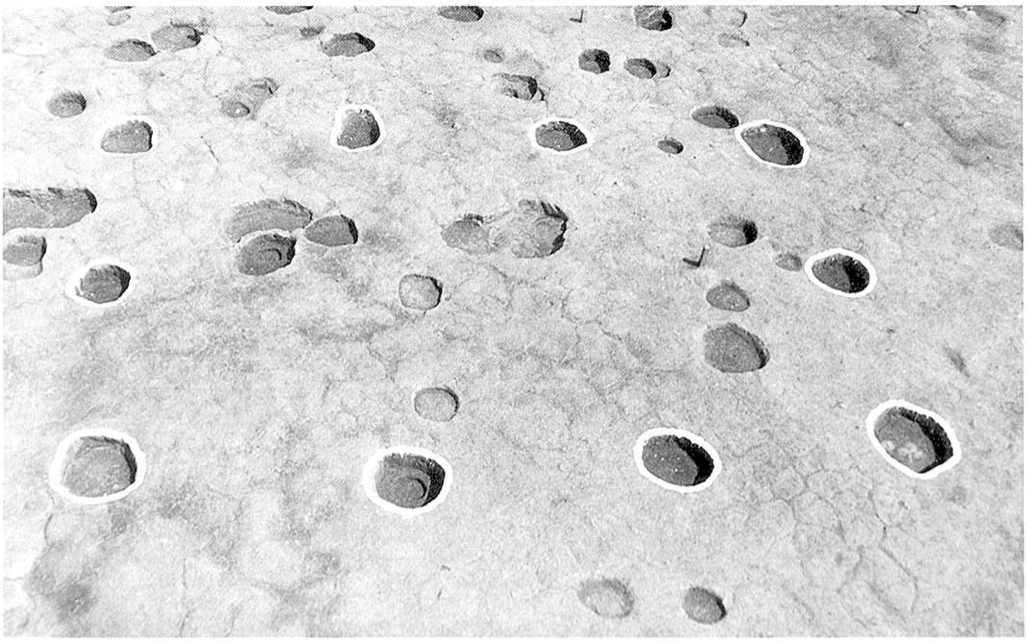


(2)　ＳＢ－11



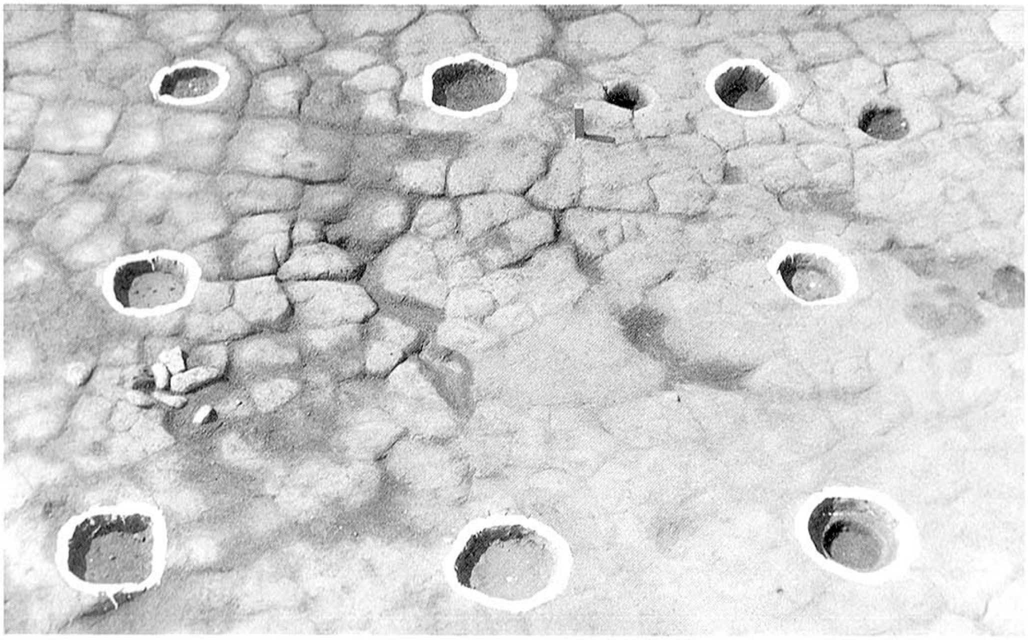
(1)　ＳＢ－06

(2)　ＳＢ－09

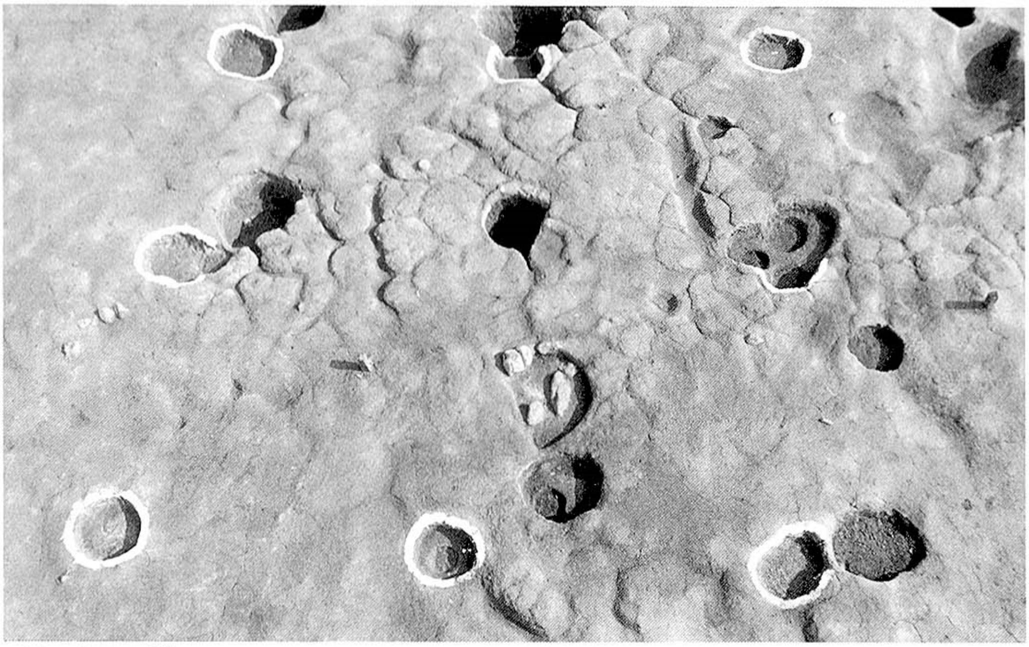


(1)　S B －07

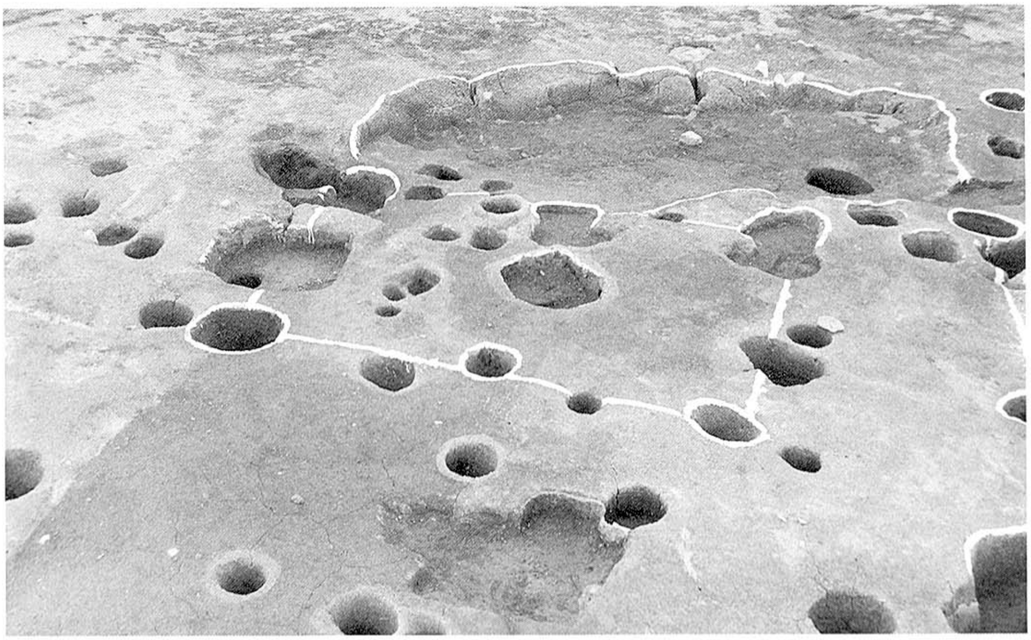
(2)　S B －13



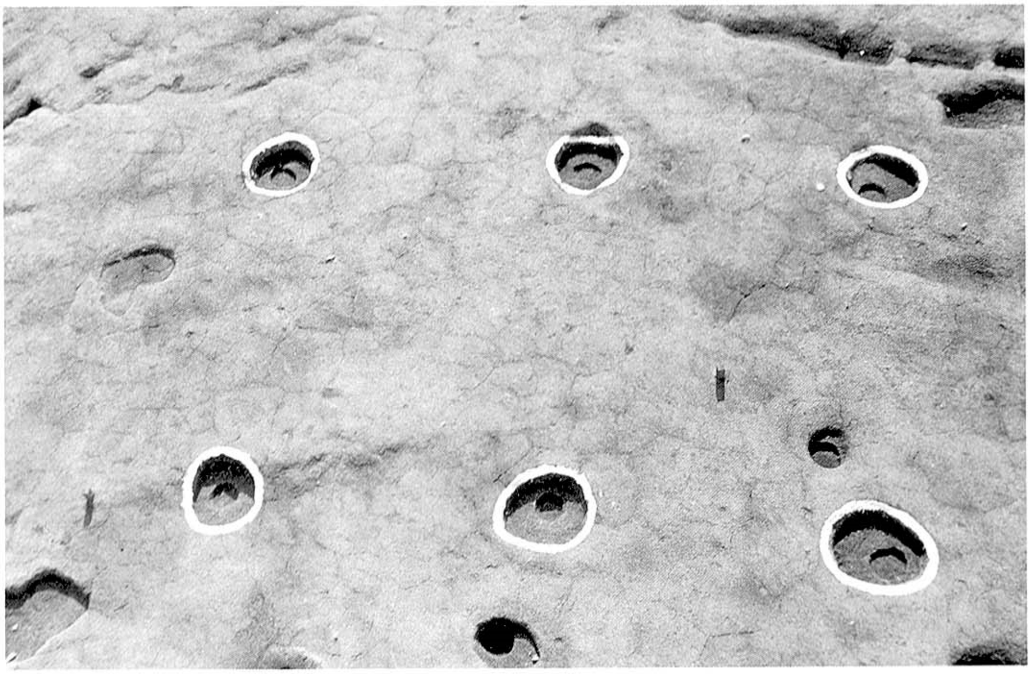
(1)　S B －08



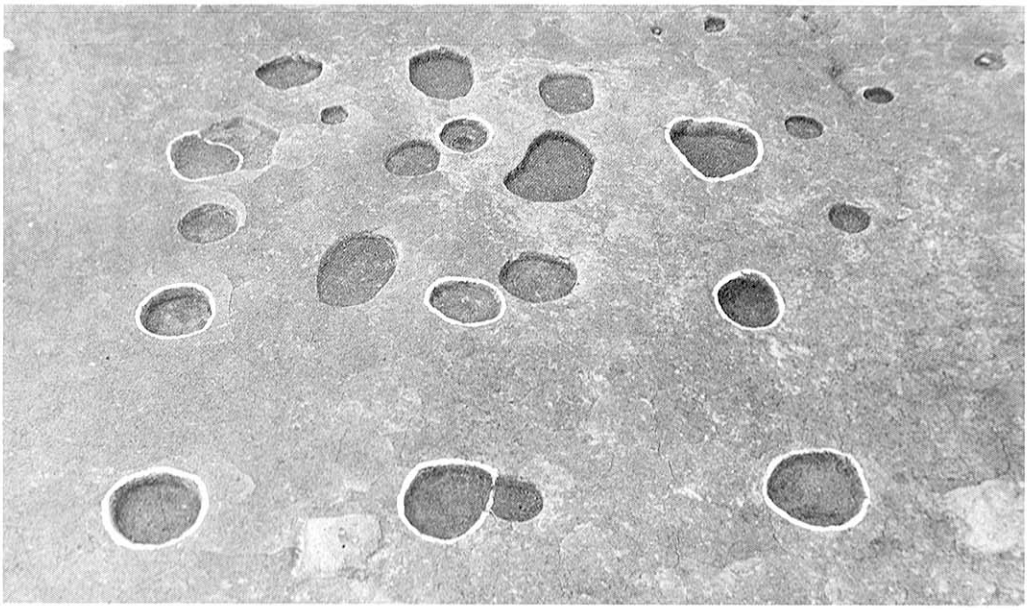
(2)　S B －16



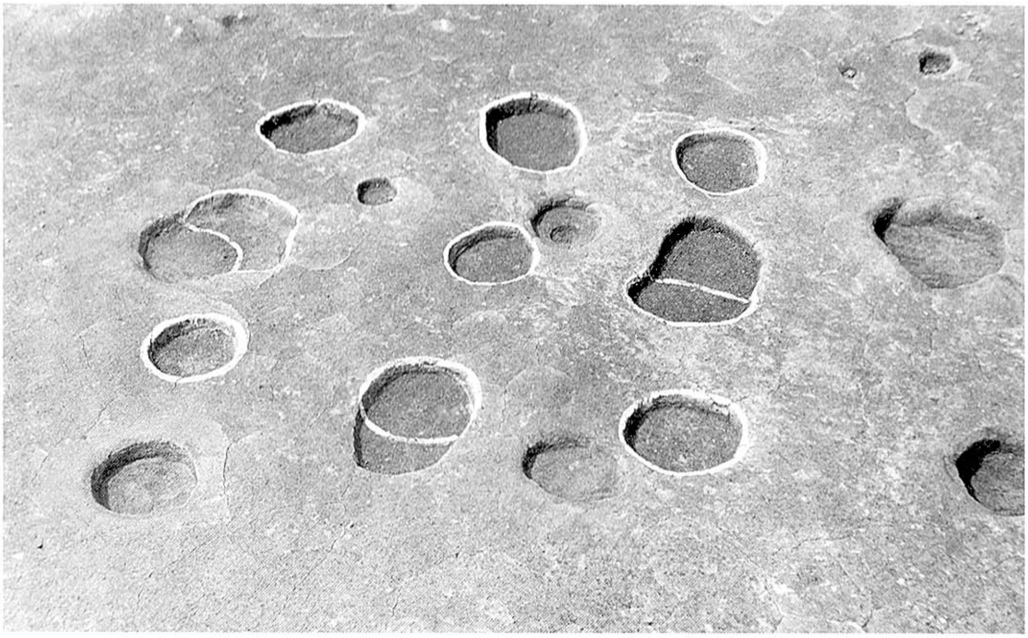
(1)　ＳＢ－25・ＳＫ－04（南から）



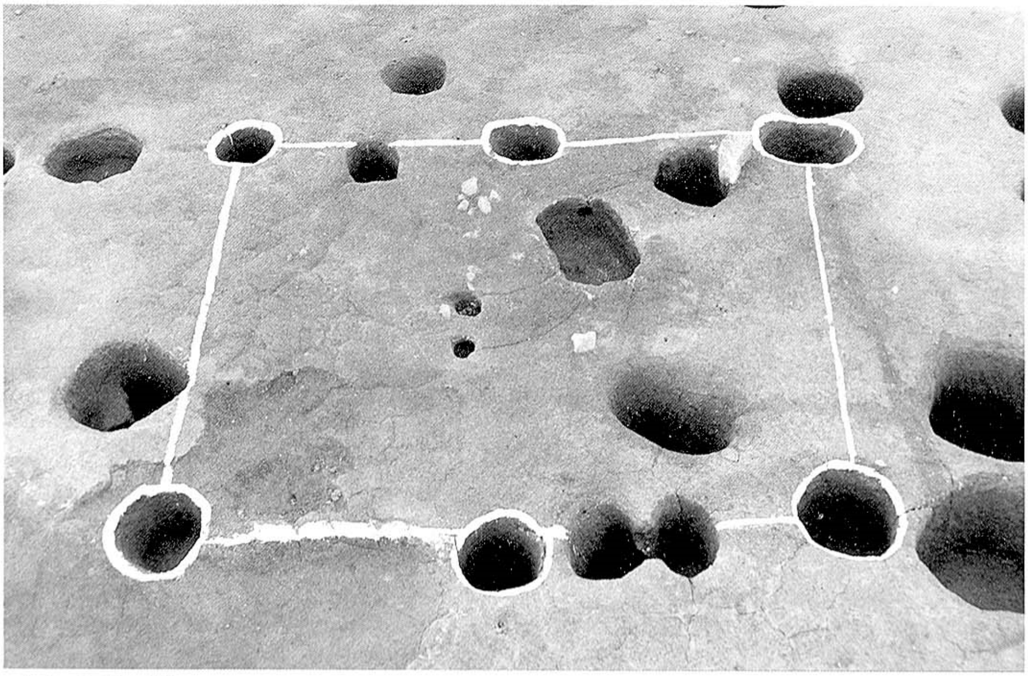
(2)　ＳＢ－12



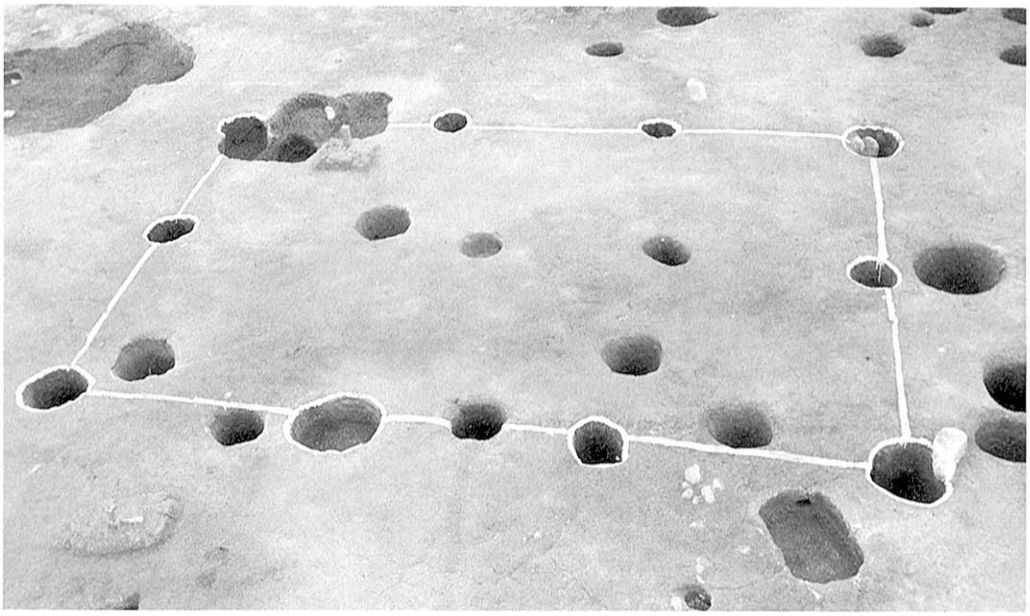
(1) ＳＢ－22



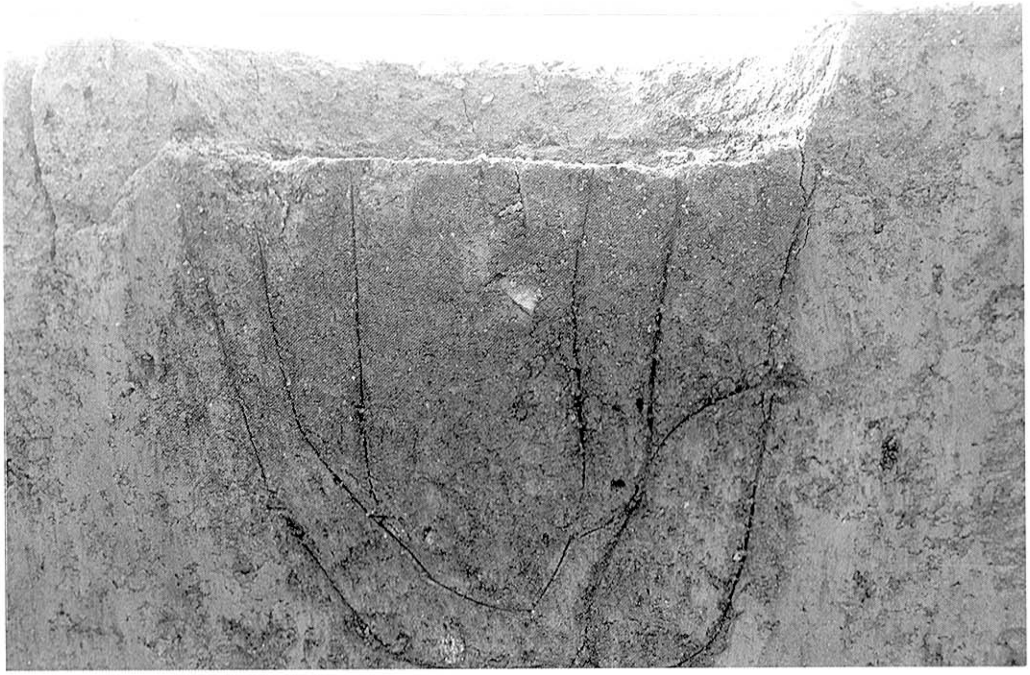
(2) ＳＢ－23



(1) S B －30



(2) S B －31



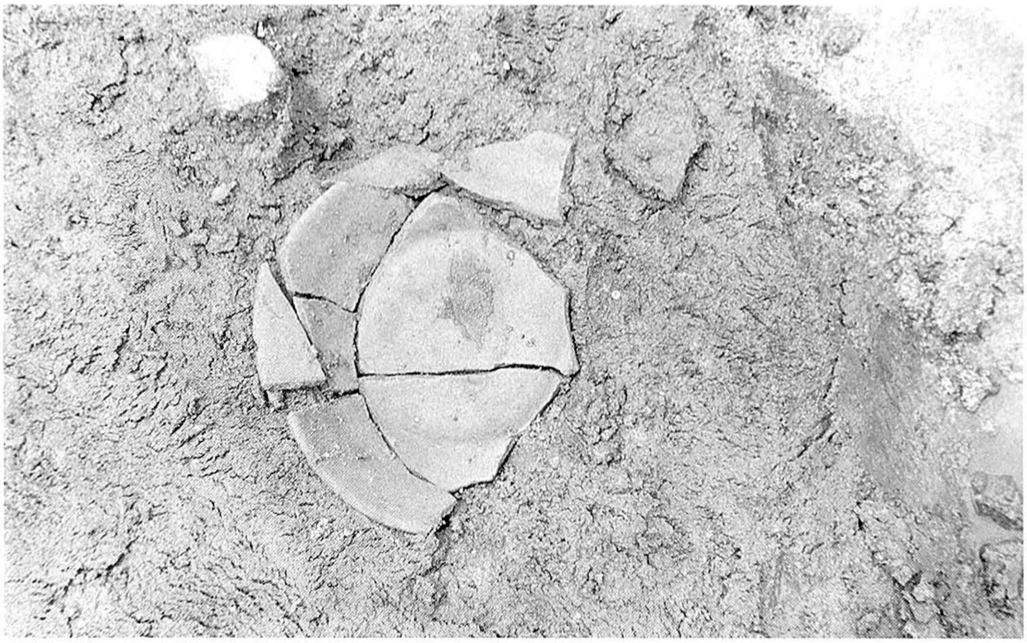
(1)　ＳＢ－22柱穴断面Ｉ

(2)　ＳＢ－22柱穴断面II

(1)　遺物出土状況

(2)　ＳＫ－04遺物出土状況

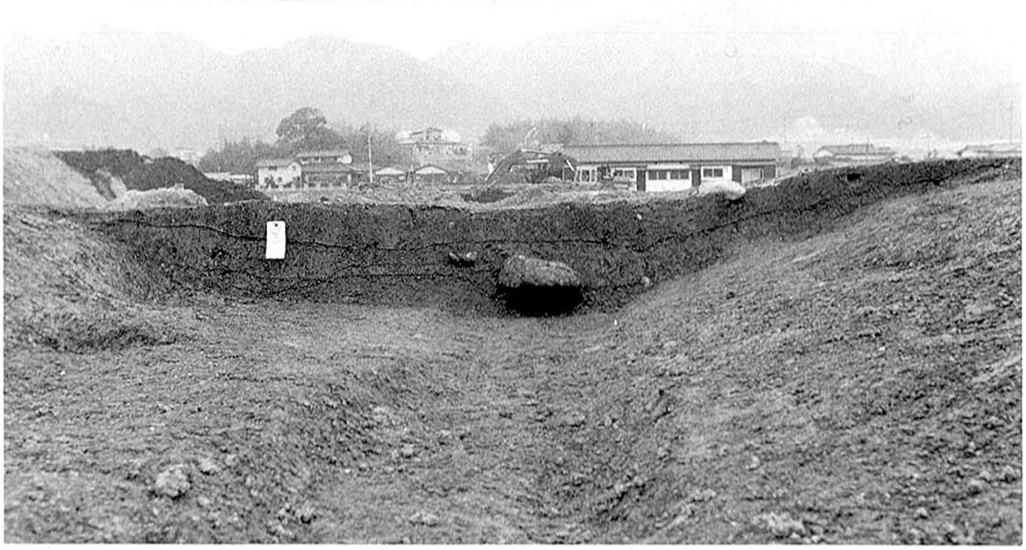
(1)　遺物出土状況



(2)　ＳＤ－10墨書土器（外底部に「寺」）出土状況

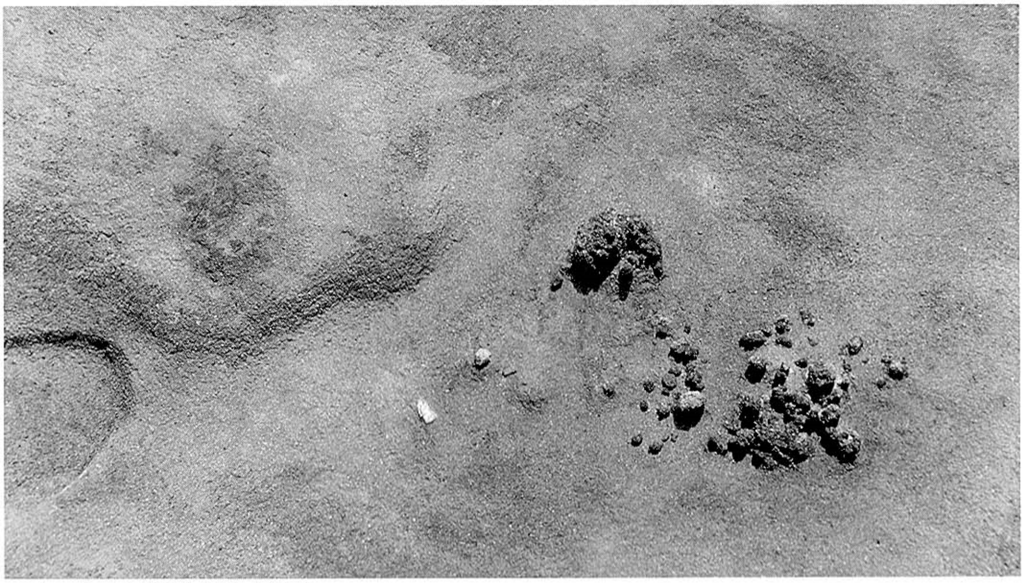
(1)　ＳＤ－10炉壁、鉄滓出土状況

(2)　ＳＤ－10井堰（北から）



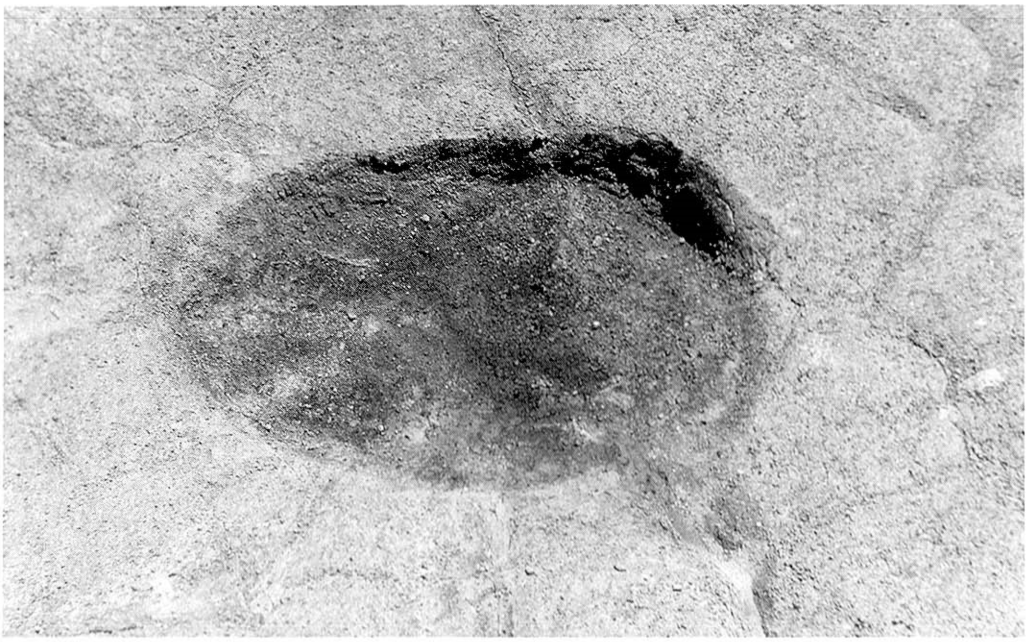
(1)　ＳＤ－02断面

(2)　第９号製鉄炉址



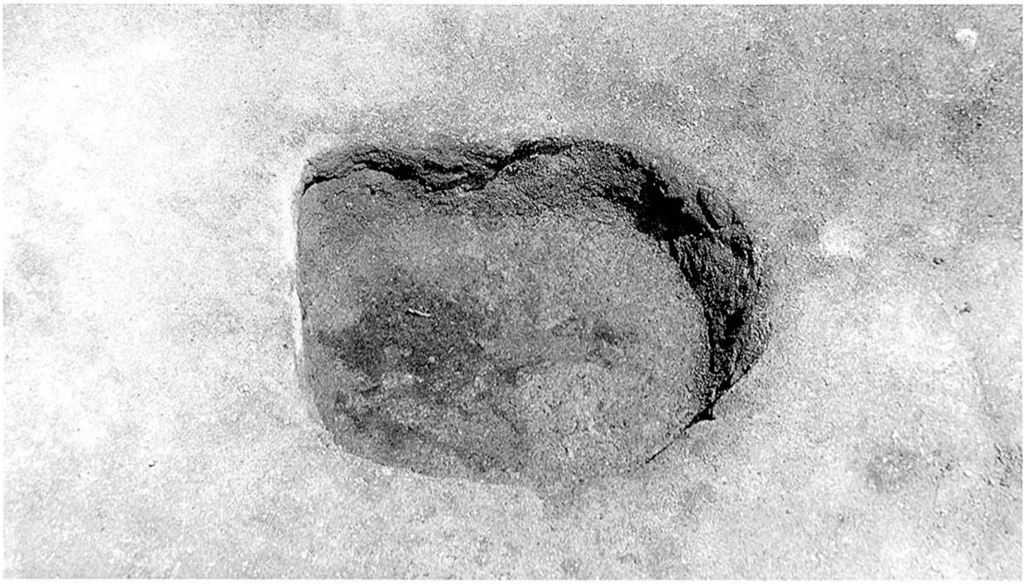
(1) 第 6 号製鉄炉址と鉄滓

(2) 第 4 号製鉄炉址



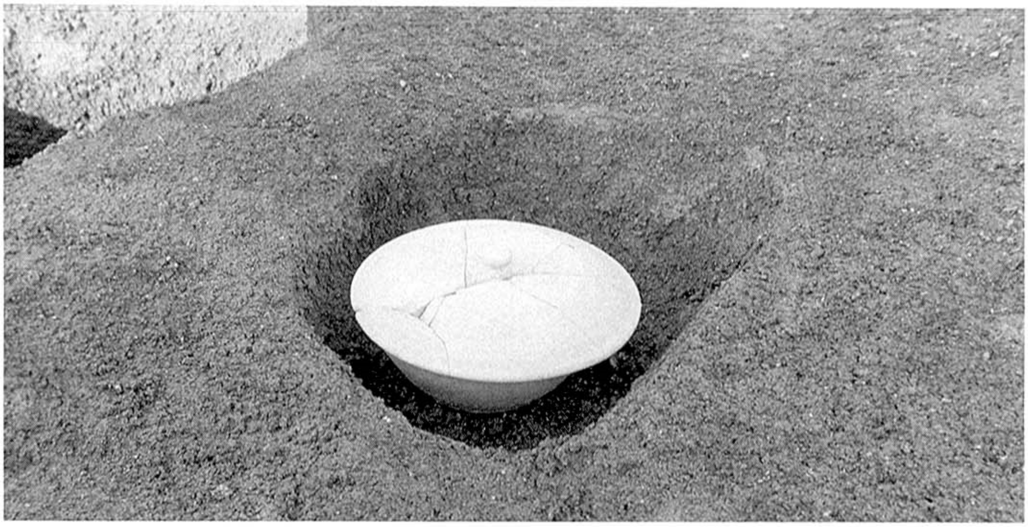
(1) 第12号製鉄炉址

(2) 第15号製鉄炉址

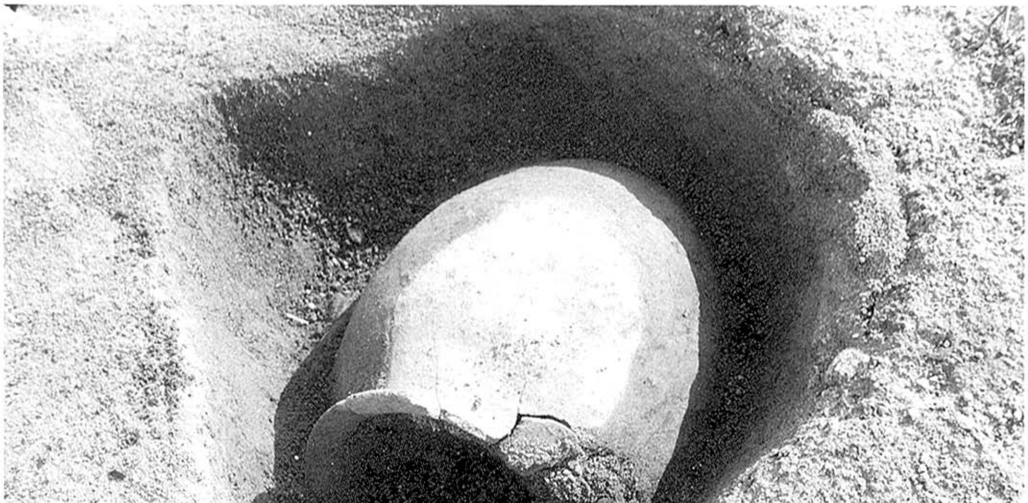


(1) 第10号製鉄炉址

(2) 第 7 号製鉄炉址



(1)　第２号土器埋納遺構

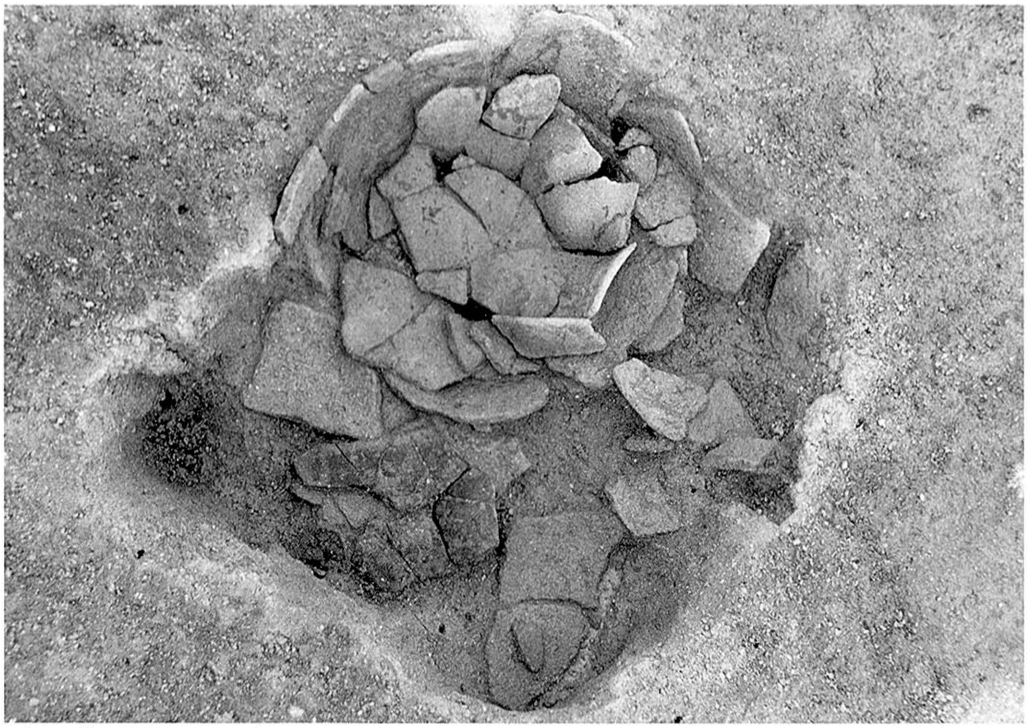


(2)　第６号土器埋納遺構

(1) 第 3 号土器埋納遺構

(2) 第 4 号土器埋納遺構

(1) 第4・5号土器埋納遺構



(2) 第5号土器埋納遺構

柏 原 遺 跡 群 Ⅵ

―古墳・古代遺跡M遺跡の調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第191集

1988年3月31日

発　行　　福岡市教育委員会
　　　　　福岡市中央区大名2丁目10番29号
印　刷　　株式会社　西日本新聞印刷
　　　　　福岡市中央区天神1丁目4番1号